

奇譚クラス

新しい風俗文献誌



6

JUNE - '68

6月号

昭和四十三年六月号

定価三五〇円



6月号 ¥ 350

待望の特集遂に実現!

団鬼六作・長篇羞恥責小説

花と蛇

前篇 続篇 合編

好評のS文学集大成

絶世の美女財閥遠藤家の令夫人静子が悪鬼たちの手によって誘拐される冒頭のシーンから美貌の探偵助手京子が単身敵地にのり込んで捕獲されるに至る前篇(38年8月号より連載)の発端より暴力団の本拠に妙齢の花恥しき美女が次々と略取され、そこに展開される数々の汚辱と羞恥責の凄惨な先生流暢な筆で描き尽された続篇(39年11月号より41年12月号まで)に至るまで一挙に登載。堂々四百数十頁に亘るサディズム文学の傑作を贈ります。この一冊によつて「花と蛇」の書き出しから全部通して読むことが出来ます。四カ年に亘つて本誌に連載しSファンの熱狂的な絶讃を浴びた小説「花と蛇」を是非お求め下さい。

団鬼六作「花と蛇」

収録内容見出し一覧

- 前篇
- 第一章 発端(静子令夫人誘拐された令夫人送られた着衣)
 - 第二章 陥穽(二度の機がらせ)
 - 第三章 美人探偵(落花粉々)
 - 第四章 洗腸図(強制屈伏)
 - 第五章 救援者(羞恥地獄一観)
 - 第六章 救援の失敗(逆転一観)
- りもの
- 第七章 好餌(京子の屈伏一淫猥の餌)
 - 第八章 悪魔の哄笑(毒牙は迫る)
 - 第九章 地下室(悪鬼の宴)
 - 第十章 翻弄(屈辱と羞恥一身体に立つ夫人)
 - 第十一章 蛇の執念(裸踊り)

- 第十二章 姉妹危し(屈辱の狼ぐつわ)
 - 第十三章 調教師(遂に京子も)
 - 第十四章 美津子受難(二人の美女)
 - 第十五章 結末(美津子の屈伏)
- 続篇
- 第一章 密室の秘密ショー
 - 第二章 脱走の失敗(美津子の脱走)
 - 第三章 華やかな宴(悪魔の宴)
 - 第四章 地獄屋敷へ新顔(新たな獲物)
 - 第五章 翻弄されるカッパル
 - 第六章 一千万円的身代金
 - 第七章 身代金奪取の失敗
 - 第八章 涙の宣誓文(美女と本馬)
 - 第九章 恐怖の逆転劇(悪魔の相談)
 - 第十章 奇妙な三々九度(鬼女の嬌声)
 - 第十一章 飼育される白い動物
 - 第十二章 悪魔と悪女の悪業
 - 第十三章 屈辱の地獄図絵
 - 第十四章 逃走の恐怖と失敗
 - 第十五章 悪魔達の残忍な所業
 - 第十六章 落花無残の修羅場
 - 第十七章 淫らな美女の調教
 - 第十八章 すさまじいシヨ
 - 第十九章 汚水にまみれた宝
 - 第二十章 華々しき美女の屈伏
 - 第二十一章 対峙する美女と美女
 - 第二十二章 あくどい陥穽
 - 第二十三章 羞恥図絵の展開

直接お申込みを 定価五〇〇円 略号「花特」

限定版 写真集 **美しき縛しめ** 第七集

山原清子 妖艶緊縛

刺青の魅力を探ぐる 写真集

頒価一部 一〇〇〇円(下共) 略号「美7」

最近撮影の力作 未公開の秘蔵写真集

刺青の女王 山原清子の魅力の隅から隅までを抉ぐり出し、その美しさを最高度に発揮した強烈な刺青女体緊縛フォト結集版(思わず息をのむ凄じいポーズ満載)

限定版 写真集 **美しき縛しめ** 第八集

大塚啓子・鈴木晃子・山原清子

女斗と緊縛競艶写真特集

一部 一〇〇〇円 略号「美8」

「女性対女性」の激しい女斗美の躍動! 女性が女性を縛る緊縛プレイの写真化動きのある相互縛り場面の美しい展開

◎ファンに要望に応じて特に作成した女性対女性の女斗美、女斗場面並に女性同志の緊縛場面を若々しい三人の女性によって力いっぱい演技してもらった躍動的フォト集。

限定版 写真集 **美しき縛しめ** 第九集

(女性刑罰拷問特集) 西洋篇

革具に拘束される女 七十二態

頒価一部 一〇〇〇円(送共) 略号「美9」

モデル 清楚な美木乃々子グラマーで美貌の大塚啓子真白で肉づきのよい女体が黒光りする革具或は褐色の牛革具によつて厳重に縛しめられる、さまざまな姿態を七十二態の華麗なフォトによつてグラビア写真集としてここに提供します。

△女性刑罰拷問特集(日本篇)「略号美5」は完結。本集も残部少し。すぐお申込みを。御申込先はいずれも大阪阿倍野局私書箱第十四号 田中京二へ。

限定版グラビア印刷M結集アルバム

Mフォト・「女王様に飼育される日々」

頒価一部 一〇五〇円(送50円) 略号「M特」

◎全頁七十三葉のM傾向ばかりのグラビア写真集

待望久しくして初めて刊行されたM派ばかりの限定版M写真集です。今までMモデル募集に応募してきたM男性モデルを網羅し、それらのM男性が色々の女王様に奉仕し飼育される生地のかわずかずを豊富な写真資料によつてマニアの

方に提供するグラビア写真集の結集版です。発行以来数カ月、すでに残り数が少なくなりました。売切れになりますと絶対に入手は出来ませんし再版はいたしません。未入手の方は、どうか今のうちに是非お申込み願います。

☆新しい女性の華麗な責めフォト紹介

最近の誌上を賑わした美しい女性達の惚々とする素晴らしい緊縛体と責めに喘ぐ悦びの溢れる印象紙焼付の極めて鮮明なる写真をマニアのために提供します。

全裸後手柔肌縛り

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
佐々木真弓 略号 八こよ
垢ぬけした近代的フェイスマスを持つ伸びやかな全裸の肢体に厳しい後手の縄目がむごたらしく絡む。

乳房強烈膨隆責め

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
佐々木真弓 略号 八こわ
すべすべとした丸味を持つ乳房を上下左右から締め上げてむくむくと盛り上げた後手縛りの全裸。

海老責めに苦悶す

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
佐々木真弓 略号 八こお
長身の柔軟な肢体は嚴重な縄目によって重ね餅となり無防備の裸身を晒したまま美貌の顔で仰ぐ。

全裸の全身を晒す

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
佐々木真弓 略号 八こる
高々と後手首を背中に掲げて縛られた均整のとれた裸身は、その全身を晒して惚々とする眺めだ。

煙草責めに喘ぐ女

大手札二枚 一組 略号 三〇〇円
佐々木真弓 略号 八こぬ
身動きの出来ない後手縛りで美しい裸身を曝した女に火のついた煙草をくわえさせて責める。

麗姿に映える光彩

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
佐々木真弓 略号 八こほ
強烈なトップライトに浮かび上がった縛られた全裸身は、素晴らしい美しさで輝くように映えている。

臀部強調後手縛り

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
佐々木真弓 略号 八こる
笑顔をもった豊かな臀部をこれみよがしに突き出させられて後手縛りの女体は、いたくはにかむ。

羞恥に悶える全裸

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
佐々木真弓 略号 八こに
膝頭が口に届くまで二つ折りに縛られた女体は、その無防備を羞らって足指先をくの字に曲げる。

ホステスの緊縛体

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
佐々木真弓 略号 八こち
全裸で後手に縛られた女体を晒してホステス稼業の微笑を洩らし、美しい表情と肢体を捧げる。

二つ折りで責める

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
佐々木真弓 略号 八こへ
後手縛りの縄と膝頭とを連絡して二つ折りとした女体の流し目の表情と反りかえった足指の表情。

脈打つ全裸臨月腹

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
中河恵子 略号 八こふ
月満ちた便々たる妊婦腹が麻縄できつく締め上げられて怒張した血管がドキドキと脈打っている。

革紐の臨月股間縛

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
中河恵子 略号 八こや
まんまるく膨れ上がった臨月腹の中央を皮紐が股間縛りとなつて締めつける臨月妊婦責めの醍醐味。

猿轡の臨月妊婦腹

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
中河恵子 略号 八こ
豆絞りの猿ぐつわを噛まされた臨月の妊婦は、厳しい麻縄縛りで大きく喘ぎつつ被虐の境地に没る。

卓上の股間しばり

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八こそ
テーブルの上に置かれた股間縛りの人形は、どのような動いても豊満な臀部をさらけ出すのだ。

羞恥の足挙げ責め

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八これ
豆絞りの猿ぐつわで柱に縛られ

悦虐責めの終着駅

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八こた
身動き出来ない後手縛りで両の足首には、それぞれ縄を掛けられて思いきり左右に引張られてさんざんにいたぶられた挙句の果て。

片足挙げで鞭打ち

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八こら
ムチ打ちに徹した美貌の夫人の片足を張り裂けるばかりに引き上げてムチで責めた新しいフォト。

柔肌に答は弾ける

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八こな
真白い柔肌に実際に力まかせにムチを揮って、その時の全身の表情をストロボにてキャッチした。

あぐら縛りで観賞

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
左近麻里子 略号 八こえ
鬼六先生の趣向で全裸の麻里子をアグラに坐らせて縛りあげた鬼六対談の際のプレイフォト。

対談用に縛られる

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
左近麻里子 略号 八こて
二者対談のあとで二人によって縛られる左近嬢の肢体をスナップした珍しい緊縛フォト。

◎お申込みは大阪阿倍野局私書箱第十四号箕田京二宛へ願います。



奇譚クラブ

△第三卷第七号・通刊第二四一号△

(昭和四十三年) 六月号 目次

△本 文△

本誌自粛の徹底……………	編集部……………(9)
探「奇考料」〔初夜権〕と「同性愛の種々相」……………	斎藤 夜居……………(10)
SM随想 つれづれなるままに……………	橘 雅美……………(21)
贗作イーリアス (完結篇)……………	黒淵 要一……………(24)
新女性乗馬考 訪欧フォト便り……………	佐野 寿……………(44)
漫談千一夜物語「薔薇と蜜蜂」……………	田代 俊夫……………(48)
緊縛美雑感 映画・テレビについて……………	鈴木 三三……………(56)
懸賞入選作品 理恵女献身 (第二回)……………	沢瀉 しの……………(64)
SMきれぎれ帳……………	黒井 珍平……………(79)
私の希望 新婚フンドシ旅行……………	伊藤ますみ……………(82)
最初のマゾヒスト……………	三原 寛……………(84)
(ジエイムス・クルーの小論より)	
ガンベッタ「復讐」……………	千葉 青鬼……………(94)
見世物断章……………	阿部 能丸……………(101)

奇クサロン

編集部構成……………(233)

風俗誌耽読の回想……………	久我 庄一……………
(斎藤氏の作品にふれて)	
サロン楽我記 (第四十八回)……………	辻村 隆……………
「女性乗馬フォト展」について……………	麻生 保……………
短信往来 北島剣二様・編集長様へ……………	村 まり子……………
夫婦ブレイの感想と限界……………	長田 実……………
△短歌△「絶望」……………	高村 初子……………
△詩△「私の夢」……………	園部 マリ……………
美女力士に期待する……………	森斗士 好太……………
イメージ画「華々しき散華」……………	新井 伸治……………
「女相撲の図」二点……………	雪崎 京人……………
△提案△私の描く奇ク青写真……………	山上 四郎……………
編集部だより……………	編集部……………
「春川ナミオをいじめる会」……………	春川ナミオ……………
フォト通信II その後の奴隷妻……………	山本 武男……………
「花と蛇」に望む……………	立町 老梅……………
奇クファンクの私……………	城山 ぼずみ……………
△ブレイ随想△乗りもの……………	早木 夢二……………
世相と奇ク……………	原 砂土……………
僕のイメージ画集「感度テスト」……………	室井亜砂路……………
今日は、左近麻里子です……………	左近麻里子……………
表紙よ笑え (看板と内容)……………	能美 積……………
妊婦雑話……………	高野 原美……………
イメージ画「恋愛すべからず」……………	小妻 京子……………

連載時代伝奇小説 緋縮緬地獄 (第二回)……………	白鳥 大蔵……………(101)
浣腸液に溺れる女——おしおき——……………	南 洋子……………(111)
鬼六談義 酒場の話……………	団 鬼六……………(122)
SMカメラ・ハント——佐々木真弓の巻——……………	辻村 隆……………(131)
『ケメー』早春譜……………	
異常体験記 続スカタロジーに憑かれて……………	津川 博……………(157)
懸賞告白入選作品 「SとMと」……………	夢野 洋……………(166)
濡れにぞ濡れし (二人一筋)……………	芳野 眉美……………(170)
奇クジャーナル……………	魔仁阿天狗……………(177)
けったいな、ほんまのはなし……………	能美 積……………(180)
愛する奇クよ、何処へ行く……………	田中 八郎……………(191)
ある試み ピンクシネハント……………	山口 広……………(196)
私評 最近の奇クに思う……………	山上 四郎……………(200)
S・C・R△性問題相談室△開設のお知らせ……………	弓削 達人……………(203)
テレビにおける緊縛と猿ぐつわ……………	吉永 洋……………(209)
連載S小説『花と蛇』 (終篇第四十三回)……………	団 鬼六……………(206)
カメラ・ルポII△山谷久美子の巻△……………	
「この女(ひと)と」……………	山本 一章……………(211)
読者通信……………	編集部選……………(251)
(目次カット「落城」……………	室井亜砂路・画……………)

「長井葉津子さん」

股間縛り首縄正面

両手吊り正面晒し

全裸高手 小手麗身

全裸股間縛り媚態

強烈変型エビ縛り

止座猿ぐつわ仕置

凄絶海老責め地獄

女体二つ折り縛り

あぐら縛り全裸晒

イルリの浣腸責め

大手札三枚一組 四〇〇円
長井葉津子 略号△よた▽
イルリの嘴管から浣腸液は迫
くるが縛られている身は……
エネマと縛の恐怖

大手札三枚一組 四〇〇円
長井葉津子 略号△よてV
可憐な臀部にエネマの管は不
潔だが縛られた全裸の身が……

大手札三枚一組 四〇〇円
長井葉津子 略号△よる▽
身はたとえ全裸で縛られてい
いとしい浣腸器の管を口に

大手札三枚一組 四〇〇円
長井葉津子 略号AよりV
お尻をつき出した浣腸ポーズ
身体に今まさに襲いくる嘴管。

大手札三枚一組 四〇〇円
長井葉津子 略号AによるV
豆紋りの猿轡、強烈な縛り。
マのゴム管は情容赦なく迫る

大札三枚一組 四〇〇円
長井葉津子 略号AよかV
浣腸に興味があるのだと告白
のだけど、この責めには？

チャンスの一日、便々たる太鼓腹をレンズの前に晒してくれた。

見事な臨月腹妊婦

大手札四枚一組 五〇〇円
中河 恵子 略号ハよりV
彼女の一番大きなお腹と乳房
中心に焦点を合せた見事な大写真

大手札四枚一組 五〇〇円
中河 恵子 略号△よへ▽
便々たる臨月腹を晒すのも露
の彼女には一つの快楽だった

大手札四枚一組 五〇〇円
中河 恵子 略号△よほ
胎動する太鼓腹をどさりと投
して縛られた裸身がうごめく
臨月妊婦革紐縛り

大手札四枚一組 五〇〇円
中河恵子 略号ハよにV
柔肌に喰い又む革紐が臨月の
なるが故に一層痛々しいのだ

大手札四枚一組 五〇〇円
中河 恵子 略号△より▽
むごたらしい麻縄で荒々しく
れて尚昂まる臨月の妊婦腹。
麻縄でくびった腹

大手札四枚一組 五〇〇円
中河恵子 略号△よは▽
トゲトゲしい麻縄が臨月の腹
くびつて一層巨大に見せる。
お申込みは大阪阿倍野局私書
第十四号箕田京二宛へ願います

奇 譚 ク ラ ブ

昭和 43 年 6 月 号

(1968年・6月号<第22巻第7号・通刊第241号>)



本誌自粛の徹底

一、本誌は特殊な風俗文献を研究する平和で
 穏健な社会生活を営む真面目な成人を対象
 として編集しておりますが、青少年の保護
 育成に関する条例には抵触しないよう、十
 分な配慮を今後更に徹底いたします。

一、本誌では従来巻頭を飾っておりましたグ
 ラビア写真並に口絵を全廃し、文中の挿絵
 の削減に努め、読む雑誌としての体裁を順
 次整えて参りましたが、更に挿入写真の減
 少及び見出し、キャッチフレーズの改訂な
 どによって煽情性を排除してゆきます。

一、本文の内容についても、刺戟の強いもの
 は極力掲載しないようにするのは勿論、掲
 載した文章は十二分に検討を加え、いやし
 くも青少年の健全なる育成に支障を与えな
 いよう努力いたします。尚、本誌の発行部
 数は最低限度にとどめ、その増大を企るた
 めの努力はいたしません。

探

奇

考

料

『初夜権』と『同性愛の種々相』と

『性器秘章-ANAEDEUS-』について

斎 藤 夜 居

大正十一年十月頃。宮武外骨のところに、法学博士吉野作造の名刺を持って来訪した若い紳士があった。来意をきくと、自分は東京高等工業学校を卒業した工科出身の者であるが、その後は帝国大学（現・東大）文学部に入って社会学を専攻し、来春には卒業論文を出さねばならなくなり、社会学的研究としての『初夜権』を主題とした論考を提出することにした。海外の事例については既に多く漁りつくしたが、本邦の初夜権に関する事例のご教示に与りたい、との趣きであった。――

その後、この論文はでき上って、戸田、今井両教授からも近來稀に見る好論文だとのお褒めを頂いたと当人はよろこんでいたという。所が、この論文が、後に述べるような事情もあって、外骨は三百円で買い取り、親戚の無名出版社宮武尚二というのが同社の処女出版として刊行した。大正十五年になってからのことである。

風俗研究書として主題も風変わりなものであるが、その序文に詳しく刊行の謂われを記した点でも珍らしいものである。また、その出

版人が奇人外骨と血縁のつながりがあるなどということも、珍書というに価するけれど、テーマには似ず卒論そのままの内容は実に固苦しくて、一般には多く読まれたとは思われない。然し、研究書としては優れた特色があるので始めにご紹介してみたい。

廢姓外骨序文

初夜権

文学士二階堂招久著

JUS PRMAE NOCTIS の社会学的攻究

大正十五年四月発行 発兌無名出版社 発

売元文武堂 四六判布装二三六ページ 定価
二円

内容は序論・本論・結論とに大別され、がつしり組立てられた論文で労作である。

初夜権の意義、各国に於ける初夜権の名称、初夜権の史実、近代及現代に於ける初夜権の事例、祭司僧侶の行ふもの、酋長君主の行ふもの、(伏字、父兄の意味)の行ふもの、知友婚礼客等の行ふもの、長老又は媒酌人の行ふもの、賤民卑役の行ふもの、外異人の行ふもの、本邦に於ける初夜権の事例、初夜権の起源に関する諸家の説並びに其批判、ラボック、バツコオフェン、ジロ―チュウロン、ブロッホ、ヴント、ルトウ、ルノウ、スタルケ、モルガン、エンゲルス、グロッパリ、ポスト、マクレナン、ウエスタアマルク、フレザア、ハアトランド、エリス等々諸家の説と其批判、初夜権の起源に関する吾人(二階堂)の見解、初夜権の社会的効果、婚姻との関係、処女尊重の觀念、婚姻神意説の発生、処女嫌惡の思想及処女のタブウ、社会結合の鞏固、婚姻の確定公示、社会の性的秩序の維持、賠償金(婚姻税)の制、末子相続制の成生(否定)初夜権と基督教、總収、初夜権の解放。

初夜権というのは、語感からするとだいぶ艶めかしい言葉だが、その意義については随分と解釈がむづかしいことは本書を通読するとよくわかるが、狭義には欧州中世の頃、封建諸公が配下の結婚に際して、新婦を自己(領主)に侍せしめた特権をいうこととなつ

初夜権

「初夜権」扉と著者献詞



ているが、普通にはもっと広義に解釈されていて、領主・祭司・僧侶・酋長等の権威者が、庶民の結婚に際しその第一夜の寝を新婦と共にすることを要求する権利だといわれているが、著者二階堂氏は更に範圍をひろく解釈して、結婚に際し、一人若しくは二人以上の男子が、新夫に先んじて新婦と寢床を共にする慣習である。また、思春期に達した婦女を結婚に先んじて特定人が試みに交合する習慣を含んでいるが、そのようなことは確實なる制度によって規定された法的権利ではないから、ある時は権威者の権威の乱用であったり、または支配者の好意による習慣的な任務ですらあった場合も考えられるから、強いて権利と称することに固執しない方がいいだろうともいつている。

初夜権というのは、兎に角ずいぶん乱暴な風習で、加虐趣味の人たちにとっては絶好の空想的素材たることまちがいないの話題であるが、今日の我々はそうした欧州中世の庶民に生れて来なかったことを幸福としなければならぬであろう。——ご安心をねがう意味で、ドイツの碩学カール・シュミットの初夜権否定説を掲げて置くと、

初夜権などという事例は欧州のいつ如何な

る時代においても、未だ嘗て存在したことはない。そう信じるのは、学者の博学なる妄想であり物語りに過ぎない。

1 古代のこの権利（初夜権）を乱用した二三の暴君の伝説・口碑的伝承。

2 世界各所の特殊種族に関する怪しげなる旅行記の誤まれる観察。

3 封建時代における領主に対する誤解と邪推。

などが影響して事実の如く信じられて来た妄想であるが、要するに此の風俗は權威の乱用であって、権利として合法的に定められたものではない。

と推論する所であって、この俗習を否定しているが、事実の真相の追究を避けて、法学者だけに、余りにも権利の意義に拘泥しすぎた説だといわれている。

続いて初夜権の事実の章においては、古代・中世に亘って、著者は文献を漁りつくしてその存在の記録を示し、西欧諸学者の説を紹介し其批判を行っているが、繁雑を避け、著者二階堂招久氏の初夜権俗習は「婚姻の確定公示」だったという説を左に要約する。

初夜権の効果の一には、婚姻を確定し且つ公示した点にある。原始時代には戸籍法も

なく、教会・大神宮・新聞雑誌も勿論なかったのだから、結婚を確定公示する手段方法に乏しかったから、俗習としての初夜権の制が生じ、その儀礼を終って初めて神にも告げ、社会の公的承認を得、更には一般知友の間にも披露せられたのではなからうか。今日でも競って名士顯官に婚礼の形式的媒酌をたのむ流行は、初夜権の遺跡としての色彩が濃厚ではないか。

というのだが、誠に当を得た論旨で、あまり猟奇的な結論ではないが、口碑・俗信・伝説上の初夜権譚は世界各地に数限りなく伝っているの、此処では概略を記した迄とし、以下はこの書の発行に関する裏面談を述べ、探書漁書趣味の一端のみ記すことにした。

写真版にも示したように、自蔵の『初夜権』は著者よりの献呈本で、そこに書かれた文字は次の通りである。

大正十五年六月

著者

僭かに謹呈 増田正雄様

長女病氣療養の費に窮し悪い事とは知りながら、震災の年著作権を譲渡してしまひました。

三年後知らぬ間に、知らぬ戯名で街に出て

ゐるので驚いてゐる所でございます。

外形からくる印象がフザケきつてゐる上に誤植（殊に欧文の方に）が多くて閉口ですが、内容は真面目なつもりです。

母系時代——父系時代の推移に筆を省いたのが非常にものたりないと思ひますけれど。（本名を出せば物議をかもすおそれがあります）

この書は私が数年前の神田の古書会館の即売会で古本で求めたものである。幾らだったか値段はもう覚えていないが、手にとってひろげた時に、眼についた以上の言葉の印象は痛々しくもあり、こうした特殊な性風俗の学究らしいユーモラスな心情をも汲みとれるものだった。書名や外形（安っぽい装幀）からくるふざけきった感じに自嘲をおぼえながらも、内容上の真実を強く自信していられる態度は立派だ。著者の正体（本名）を知りたいものだと思う。

○

レスボスの愛（女子同性愛）については、『あまとりあ事典』ジャン・シュアール著、

小西茂也訳（昭和29・2）のうちに『悪の華』初版発行の際、禁止詩篇の一つで、レスピアニズムの変態情欲の心理を浮彫りにした詩が、村上菊一郎氏の名訳で載っている。少し長すぎるかも知れないが、味読して頂きたい。

シャルル・ボオドレエル

残燈の蒼白き光を浴びて
移香の染みたる深き小褥クツサンの上に
イポリットはその妙齡の身の純潔の
帳とばりを上ぐる逞しき愛撫を夢みぬ。

その足もとに安らかに喜びに充ちて横たわり、
デルフィーンは熱き眼差もて彼女を包みぬ
齒もて先づ獲物に印しるしをつけたる後
そを監視する猛獸のごとくに。

——「イポリットよ、愛しきひとよ、いかに答うる、
汝の薔薇そうびの初花の聖なる生贄は
そを能く潤ましむる烈しき風には
捧ぐる必要なきことをいまだ悟れるや。

わが接吻くちづけは水清き大湖の水面みづうみを

夕べに愛撫する蜉蝣かげろうのごとく軽し
しかるに汝の情夫の接吻は、荷車のごとく
或いはまた鋤の刃のごとく窪みを穿たん。

そは蹄ある重き数頭立ての牛馬のごとく
容赦なく汝の上をよぎりゆかん……

イポリットよ、おおわが妹いもよ！面おもてを向けよ
汝こそわが魂、わが心、わが一切にしてわが半身。

蒼空と星の充てる汝の眼を、わが方に向けよ！

神々しき香油よ、その魅力ある眼差の一つあるために、
われはさらに隠れたる快樂ツエールの面衣めんいを上げて
涯しなき夢の中に汝をまどろましめん！

されどそのとき、イポリットは若き顔をもたげて答えぬ。

——「われは恩を忘れしにあらず、悔ゆるにあらずれど、わがデルフィーンよ、われは苦しく、心おちつかず、あたかも夜の恐ろしき食事の後のごとく、

われらは奇怪なる行為を犯せしにあらずや君よ、出来得べくんば説明せよ、

わが不安とわが恐怖とを。

われは君が「わが天使よ！」と呼び給うとき怯えてわななけど、

しかもわが唇は君の方へと寄るを覚ゆ。

デルフィーンは悲劇めく丈長髪を振り乱しつ、

鋼鉄製の三脚台の上にて地団太踏むごとく因果なる眼附して被かぶせるごとき声にて答えぬ。

——「恋愛を前にして敢て地獄を語るは誰ぞ。

解けがたき無益の問題に熱中し愚かしき性質ゆえに何よりも先づ色事に礼節を混えんとする無用の夢想家は永遠に呪われてあれ！

影と熱とを、夜と昼とを、

神秘なる調和の裡に結びつけんとする者は恋愛と人の名づくる、かの紅き太陽により麻痺せる肉体を温むること絶えてなからむ！

望みとあらば汝行きて愚かしき婚約の男を探せよ。



走りゆきてその酷き接吻に処女なる心を捧ぐべし。

かくて悔恨と恐怖に充ち、色蒼ざめて、わが許に

汝は烙印を押されたる汝の胸を持ち帰らむ……

この世にてただ一人の主人にのみ満足を与え得るものを！」

されど稚きイポリットは、無限の苦悩を吐露しつつ、

卒然とかく叫びぬ。——「われは身裡に大口開けたる

深淵の底がりゆくを感じず。その深淵こそわが心！」

希くは密室の帳われらを世間より隔離して疲労の果に休息の訪れんことを！

われは君の深き胸にいだかれて眠り果て墓石の冷たさを君の上に見出さん！」

——墮ちよ、墮ちよ痛ましき犠牲者たちよ墮ちゆけ、永劫の地獄の道を！

沈めよ、深淵の奥底深く、そこにはなべての罪人が、地下吹く風に鞭打たれ、

嵐の音と混り合い、ぐらぐらと煮え返る。

狂おしき影よ、汝らの慾望の的に走りゆけ。その激情を汝らは堪能せしむることは能わ

じ、
汝らの懲罰は汝らの快楽より生れ出でん。

さまよう墮地獄の女たちよ、浮世を離れて、曠野をよぎり、狼のごとく走りゆけ。

常規を逸せる魂よ、汝らの宿業を果し心の裡なる無限の悩みより遁れゆけ——

詩の解釈は私にはできないので、生臭いその意味だけを解けば、イポリットは受身側の処女で、デルフィーヌは能動格の姉役であることが分る。この場面は女子同性愛心理の魔の深淵を描写したものであつて、背後にあるクリスチャンとしての宗教的悖徳感が、まるで古城の壁に漏る雨のように、どうにもならない罪悪感として、何かしら立所に神罰をこらうむると知りながら、なお肉体の快楽に酔い痴れ、悔い悩む恐怖感というものが深刻に描写されている。にんげんの持つ「性」の業の深さが感じられてならない——。

女子同性愛者の心理は、男性憎悪と同性愛憐の思想との混合で、片方は必ず過去に男との性生活体験があり、受身側の女は処女ということになっている。女囚や、江戸時代における大奥生活の御殿女中などの同性合歓の場合の同性愛などというのは、男がいない不便だけで、本来のレスボスの愛という意味ではないかも知れないが、その常習的行為が、

やがて病的に発展して行くということも有り得ると思われる。この密室犯罪のような神秘は、日本の女郎にも同性愛傾向のものが稀にあり、「おとこがうぬぼれて、いくらテクニクをつかったって、当り前のことをしてもらったのでは、モウ感じが出ない。急所というのが何処かということとは、本当は女同志じゃなくては分らないし、其処の所までは恥しくて云えない」と云うことを、私も以前に聴いたことがあった。

「サファイストは実は先天的なものであり、よしんば彼女達がどんな満足の行く情人を持つうが、どんな純潔な青春を持つうが、その傾向は彼女達の裡にめざめたに違いない。もしも彼女達を医学的に調べる事が出来たら、彼女達が男性になりはぐったその欠けているものの胚芽を、必ずや見出すことが出来るだろう。そして、その相手方となる女性は、不精で受動的な、性感にとぼしい若い婦人で、母となることや性病に罹る危険を恐れ、情夫がするかも知れぬ乱暴な仕打よりも、同じセックス、同じ好み、同じ抵抗を持つ同性との差向いが与えるあの信頼感の方が好きで、やさしく保護されているのを感じるのを、ひどく愉しいこととしている。」——ジャン・シュ

ワール——という説が、簡明にその真を伝えていよう。次に、女子同性愛用語について説明する。

レスビアン・ラブ

ギリシャのレスボス島は多くの女子同性愛者を生んだので、同島の少女たちはレスビアン・ガールなどとも呼ばれ、その愛はレスビアン・ラブとよばれ、これが一般的な用語として知られている。

サッフィズム

これも良くつかわれる用語で、性語辞典類ではお馴染みの、ギリシャの女流詩人サッファオの同性愛から生まれた。このことは周知の物語で重複のきらいはあるが、彼女は紀元前六一二年ごろレスボス島のミュティレネの町に生れ、宗教団体の中心となり学園をひらき、多くの乙女たちと一緒に生活した詩人として知れた。リウカディアの岬から投身自殺して最期を遂げたという。

トリバディズム

ギリシャ語のトリボ（くすぐる）から出た言葉で、指頭や陰核や舌やディルドー（張型）などで、刺激を与える秘技をいう。

——以上の語彙については、大場正史著『世界性語学事典』（38・9一刷）に拠った。

この書は性学用語の解説を正確に詳しく行っており、索引も完備している。

扱って、これまでお読み願って概略ではあるが女子同性愛の輪郭がお分りになったことと思われるので、愈々その行為の説明に移ることに致しましょう。

同性愛の種々相 アルベール著 花房四郎
訳 談奇館隨筆第四巻 昭和四年五月文芸
市場社発行 ページ取なし 一五二頁

四六判背革装。この書も当時の市場社本の通例で、完本の外に脱字部分の穴埋めをする正誤表附との二種が出ている。つか（本の厚み）を出すために本文用紙を余りにも厚いものを使っているので、感心した造本とは云えない。一頁単位の活字が30字詰10行という、余白が多くてまるで詩集のような組版である。然し今日となっては如何にもこの時代を感じさせるのんびりした点は良いものだと思う。

目次。女子の性器と性感。サッフィストとトリバード。女子の同棲生活。女子同性愛の伝播。トリバードに於ける男性的要素。フェラトリー。娼家と女子同性愛者。常習的サッフィストの特徴を示す性器変形。女

子とソドミー。女子の色情過度。女子の間に於ける性的悪習の原因。以上。

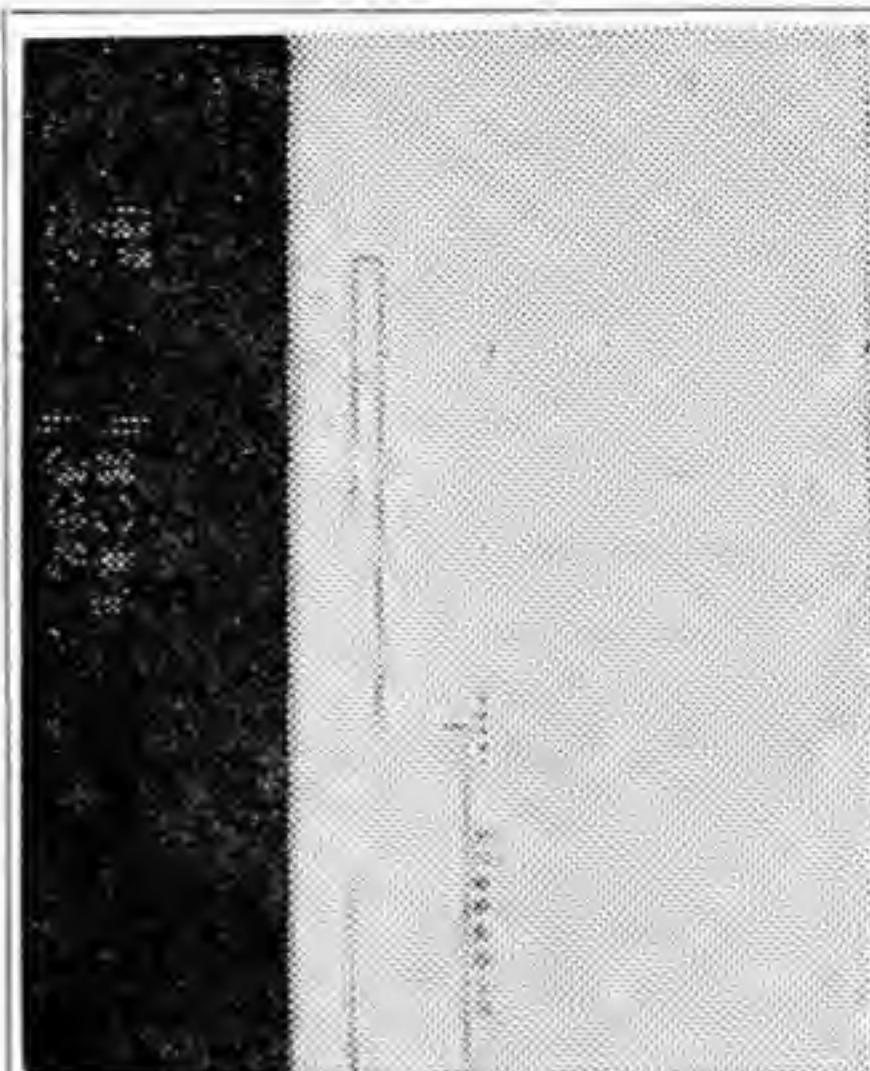
女子の性器と性感 女子の同性愛に於ける各種の性的行為が営まれるに当って活動すべき性器は、先ず第一に、外陰部 (vulva) であって、いうまでもなく、そこは最も代表的な性感の座であり、その粘膜の構造上非常な敏感性をもっている。就中、小陰唇 (inferior lips) はきわめて敏感で、勃起の性質をもっている。小陰唇の内面は若干の腺を包蔵しており粘液を分泌してその表面を湿らしている。小陰唇の感受性の強度は陰核のそれに近いものであって、性的関係の最中、あるいは抱擁に際して、その快感は高度の肉体的享樂の座となるのである。陰核 (clitoris) は女子性器の上部に位し、小さな無孔の腺状を呈しており男子の penis に類似しているが、それよりはずっと小さい。しかし陰核の大きさは人によって非常な相違があり、時としては異常な大きさに達していることもある。そして、この陰核こそ同性愛行為に当って肉体的快樂の主座を占めるものであるから、そこを擦ったり、摩擦したり、吸舐めたり、種々雑多な快感を催し合うためのテクニックがうまれてくる。

サッフイストとトリバード トリバディズムもサッフイズムもどちらも女子の同性愛者間の情交に与えられている名称であるが、トリバディズムの習熟者はしばしば男性的な外見と体度と情熱を持ち、そして幼少の時分からただ女子に対してのみ愛を感じるものであつて、トリバードは他から刺戟されてその悪習に陥つたものではなくて、初めからその悪徳をもつて生れつゝいたもので (先天性)、又、常に男性に対する憎惡の念があり、みな一樣に結婚を侮蔑していると云われている。これに反して、サッフイストの方は対男性の戀愛に失敗した腹いせや、或いは墮落した女友達のために誘惑された結果とかで、別に男性化した性格とか、また男性に対する反感などというのは持っていない。だからサッフイスト同志の戀愛は気まぐれなもので、学校その他の女子寄宿舎生活を除いては、永続性のないのが普通だとされている。また、売笑婦たちがトリバディズムの享樂に耽溺するようになるのは、三十歳近くにもなつてから、彼女たちが数年間もその商売を続けた後であるとされておられ、年若の娼婦がその対象としての犠牲者となつてしまふ——。そして、その場合に限らずトリバードとサッフイストとの関

係、つまり分り易いいうなれば夫婦みたいなものだ、は年齢や容色の点で著しい不均衝が存する場合が多いのに、一度その緊密な関係ができ上つてしまつと、前掲のボオドレエルの詩篇が示すように到底男女間の情交とは異つたはげしい熱烈なる変態性欲の愛に燃え狂い、対象者 (サッフイスト) 側の若い奇麗な方が余計に夢中になると云われている。

女子の同棲生活 ルールシーヌの病院に、梅毒で入院したある女は次のように告白している。彼女は仕立屋の店で働いていたが、ある晩仕事から歸りに、ある男のためホテルに連れて行かれて処女を失つた。そのことが動機でそれ以来彼女は私娼に身を落して春をひさぐようになった。そうした事情の下に暮しているうち、数カ月前から十九歳になるもう一人の娼婦と知り合いになり、住居も同じくして、お互いに強い愛に驅られて非常な貧困な裡にも同棲生活を続けたのである。そしてサッフイズムの房事を両者が交互に行い、一昼夜に二回、三回、はげしい時は五回も繰りかえし行つたという。金がなくなつて飢に堪えられなくなつた場合には、どちらかの一人が夜の街に出て密かに肉体の取り引きを行つたが、家の内に金がある間はどちらも決して売

「同性愛の種々相」 文芸市場社版



笑におもむくことはしなかった。彼女たちは
 “どうしても男共を好かなかった”から、同
 性と同棲のくらしを続けていたと言った。彼
 女らは口淫と手淫を両方併用して淫楽に耽っ
 ていた。

女子同性愛の伝播 監獄はトリバディスムの
 大なる学校であって、そこに十八カ月か二十
 カ月も居れば、終いにはこの悪徳に屈従する
 ようになるのが常だ。女囚達の性的破廉恥た
 るや、実際、未聞の程度に達し、そこには筆
 にするに忍びないような光景が現出されてい
 る。ロンブローゾもまた大勢の女達が一緒に

集ると、ことにその中の立人女とか多淫な女
 などが雑っている場合には、その集団内に一
 種の模倣性の萌芽が醸成されて、各人の悪徳
 が多数複合され、一人一人の場合よりも遙か
 に猛烈な一つの集团的悪徳が発生されるに至
 ると云っている。——サッフイスムに陥る原
 因の一つには、多くの淫蕩女たちの場合にお
 いては、男性からのはずかしめによって惹き
 起される嫌悪の情もあって情慾が非常に烈し
 くて、しかもその情炎が男性によってからで
 は満足させてもらえない時、女同志の手段を
 採用するという。このことは更に原因を追究
 すれば、男性側の性的倒錯症者が婦人に対し
 て無理に行なわせた変態的な性行為にもある
 という。その結果、女達は徒らに疲労し、遂
 には男性たる所以を喪失した男達をきらう、
 当然な論理的帰結としてサッフイスムに走
 り、悖徳が、また別な一つの悖徳を生む。

尚、まだ各章あるがレスビアン・ラブの本
 質については、どうしても男色と対比せし
 めなければならぬが、私感ではあるが女
 子同性愛者の行為には肉体と感情のみの快
 楽追求に終始していて、ホモセクシュアリ
 ティにおけるペデラスト（能動者）にある
 ような、精神愛の高揚というものが感じら

れなかった。元来、性慾とモラルとは何ら
 の交渉はないもので、性慾に対して道徳上
 の罪悪感ということはまったく無く、ただ
 その行為の有害・無害をいうだけだとい
 う論もある。同性愛者達は特にそう云いた
 い所であろう。

次は余談になるが、私は以前にシロシロと
 云われる実演を見たが、単なる性的見物に
 ちがいはないが、姉役の方には確かにトリ
 バードらしい気魄があると思ってみていた
 が、あとから花電車の秘芸を演じたのも同
 じ女であって、そのように強靱な性器をも
 ち、粘膜を酷使していたら、普通の男性と
 の性生活が満足に行えるかどうかと云うこ
 とを訊ねたら、演技を行うときは、数日間
 は男を断たないと調子よく出来ない、とい
 うことと言葉少なに、わたしは男が余り好
 きではないと云った。三十過ぎの女で、容
 貌は醜く筋肉は発達していたが、乳房は細
 く垂れていて、まったく女としての色気と
 いうものが感じられなかった。

○

犯罪科学や犯罪公論の時代から、戦後の人
 間探究やあまとりあ、その他秘刊風俗雑誌な
 どと一連の興味の進行を追ったマニヤだった

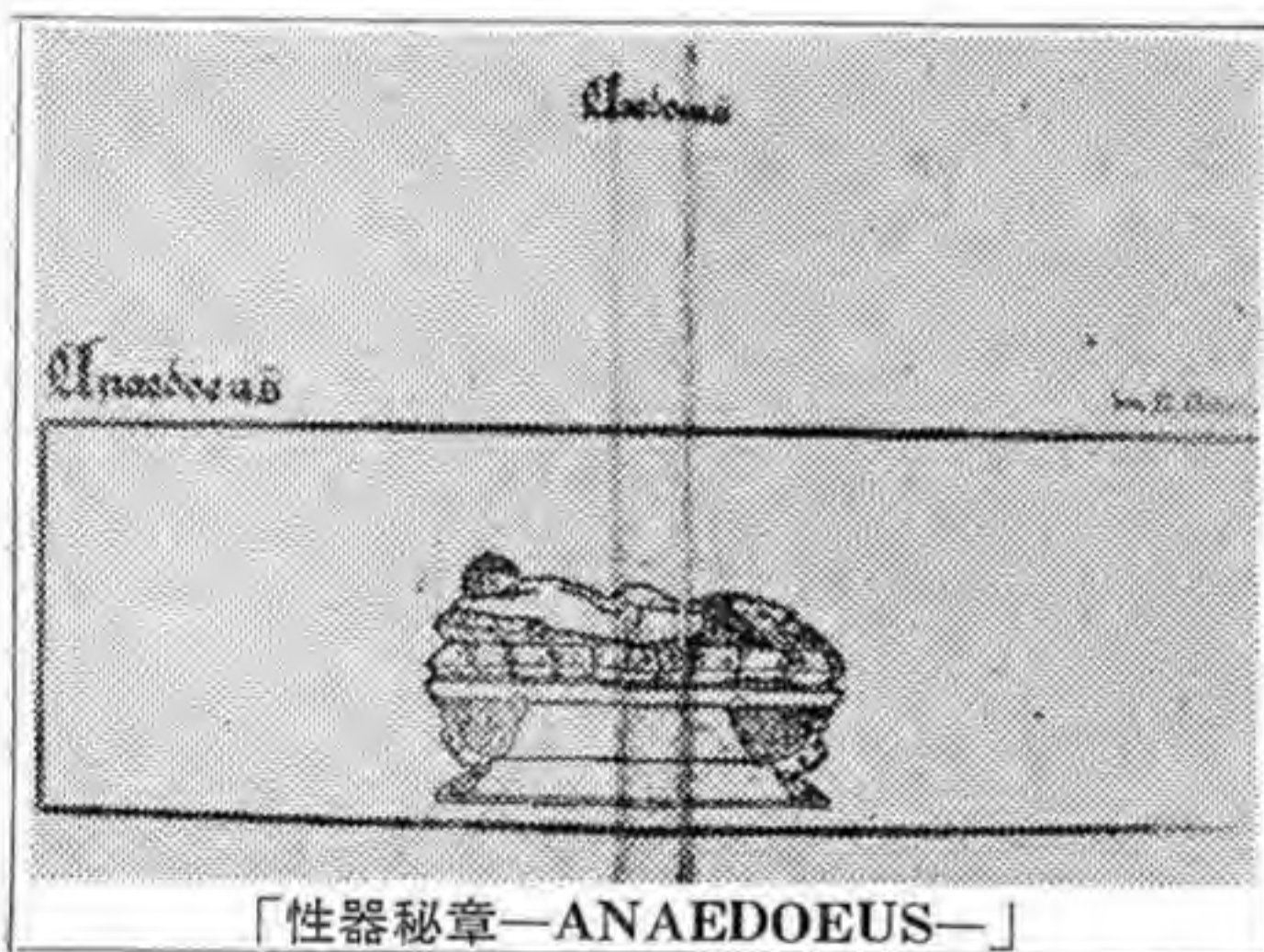
ら、それらの誌上に時々出没する、特異な文献読物作家としての「坂ノ上言夫^{のぶ}」という名を必ずや記憶して居られると思う。坂ノ上言夫氏には発禁書が二冊ある。「肉刑譜」と『性器秘章—ANAEDOEUS—』である。始めに、『肉刑譜』について、『日本艶本大集成』のうち昭和期の性的研究書の全貌民俗風俗研究書主として発禁書について、という項目に記載された解説から記してみよう。

本書は昭和八年九月朝日書房から刊行されB6判紙装四一五頁別刷の挿画が十七葉挿入してある。研究随筆と読物集で、本書ははじめから発禁を予想されていたので、活字組版で四冊を印刷製本し、二部を納本、あとは発行所と著者が所持し、発禁になったら部分を削除訂正して発行しようとしたが、発禁と同時に原版まで押収されてしまった。だから、本書（肉刑譜）は四部しか出ない本となり、二部は納本だったので、天下に二部しか出ない珍本となったのである。その後、昭和八年十月に『古典感覚』と改題して発行された。原版肉刑譜より削除された項目は左の通り、

女犯・捻られた人間・蛆淫・古代スパルタの性的統制・肉刑図式・息の根をとめる刑

罰。以上の六項。

ずいぶん数奇をきわめた出版で、恐らくは肉刑譜という本はもうこの世に存在しないと見てよいであろう。以上の記載は坂ノ上氏に中野栄三氏が直接きいて書いたと云って居られた。またこのことは『あまとりあ』終刊号（昭和30・8）の短章に、自嘲するような気味で次の如く書いている。



大臣と内容見本 作家 坂ノ上言夫
痴けた男がゐた。

「肉刑譜」といふクダラもないエロとグロとの本を書いて、しかし自信はたっぷり、その宣伝のための内容見本を、時の文部大臣なにがしへ直送した。あっぱれ、おほめにあづかって、大いに沾らん哉と妄想したのである。

——あらうことか……。

これは文字通りに、痴けの酔興のやうに見えるが、かならずしもさうではなかった。立派な理由が、痴けは痴けなりにあったのだ。かねて、その大臣は、ひそかにさういった本や画に関心をよせてゐて、コレクションも危大なものだといふ。その大臣の大学時代の友人で、そして痴け男とも友人の間柄である或る男の、言葉と勧めにのっただけのことだった。

こんな種類の本に興味をもつとは、これは話せる。俺はさういった人間味タップリの文部大臣が好きだ。いや、文教の府の長官だからそれでなくちゃいかぬと、ひとりよがり感激した上でのことだった。が、時の検閲官は、納本にまかり出た痴け男をジロリ尻目にかけると、いきなり大きな声で「この本は

即日発禁にする」とどなった。表題をチラリと見ただけで、さらに押つかぶせるように、「成木二千部は本日これからすぐ押収する」ポカンとしている痴け男の目に、ふっと例の大臣名宛の内容見本が、机上の文書籠の中に見えた。

「文部大臣奴、サテは俺の感激を裏切ったナ……」

それから二十年あまりたった。時の文部大臣が、宰相になった。表面、庶民的で、人間味があることだけでは評判のわるくないこの宰相も、今は、すっかり歳をとって、エロにもグロにも興味を失ったかの如くであった。そして、「好色の本」を片っ端しやつつける覚悟をきめた。きめたかの如くであった。それにしても、そのコレクションとやらはどう片付けたでせう。焼きすてしまったかな……。

○

引例の二文で『肉刑譜』の発禁事情がよくお分り頂けたと思う。道化じみた書きっぷりであるが、著者が二十年以上も胸底に秘めてきた血涙の文字であったことが知れよう。少しく註を加えるならば、文中のこの後の宰相は鳩山一郎氏である。

扱て、次にもう一冊の発禁書『性器秘章』

という稀代の珍書があった。これは自費出版の非売品なので、まさか出版広告——刊行案内状ではない——は無いものだとばかり思っていたが、最近いろいろな古雑誌を整理しているうちに、『性』（14の2、昭和9・9）の表紙ウラに「近刊・締切近し」などと広告が出ていたので驚いた。結局、このようなことが押収される端緒となってしまったのである。五百部限定出版とし内容の説明は、

「本書は、いはゆる巷間徒らに見る低俗な性書の類ではない。著者年来苦心の成果で、あらゆる『性器不具』の現実を、特に古典の上に把握し統合した学術文献書である。したがって、本書の医史文献としての初発の光輝は永遠である。将来学界に稀覯本として珍重せられるであらうことは疑の余地がない。のみでなく、一般読物としてこのやうに体系的であり、興味的であるところの科学解説書は、蓋し未だ嘗て見なかったところのものである」と書いてあるが、書物の世界では五百部という数は少い数ではない。もう少しあっていても良い筈だが、私は今迄に自蔵のものと高橋鉄氏の蔵書のうちできり見えていない。余りうれない中に押収されてしまったものだと思う。

性器秘章—ANAEODOEUS—について。

巻頭の出版について、という題言のうちに「筆者はここに『自然』のペーソスを描くであらう。一冊の記述はすべていはゆる『性器不具』の現実を考証的な一つの学術読物に書きあげたものであるが、しかしわれらはそこに、辛酷にも悲しき人生の一相面を眺める」とあり、この怪奇な書物のテーマは「性器不具V」という事実に対する文献史譚である。

目次は、序説第一部 MONSTRUM（巨大・驚異・醜惡などの意）の概念。第二章性器不具に就いて。本論第一章単性的な性器不具（上）。第二部同じく（下）。第三章複性的な性器不具。綜説第一章神秘の体系。第二章空想形態。第三章悪の受胎。以上。

この書の内容を概略説明すると、だいた難しい哲学的な用語がならんでいるが、熟読すれば坂ノ上言夫氏は実によく自己の内心の悪魔を見つめた人であると思う。そして、自分の心の姿の中でその悪魔との闘争を認め、奇妙なる文献史譚を創作した。また私がわずかなら知り得たこの人の経歴というのは、書物・読書道の放浪者の如くでもあり、学問に対して飢餓線上を綱渡りした道化役者のようでもある、一見して余りにも奇を漁り過ぎたが

如き生涯とも思われるが、然しその著書の引用文献を見れば、東西の聖典・古典・正史・医学書・天文地理学書などを主軸としていて正統派の読書人であったことがわかる。それなのに残された文業を見る時、どうしても「異端の人」としか思えない、不思議な人物である——。

性器秘章は、宗教観念上の悪魔と、人間生理の神秘との混合によって創造せられたる人体の奇怪陰惨な性器不具……つまり、分り易く俗に云うなれば、戸塚の大キンタマなどという錦絵にも刷られた大陰のうや、道鏡という代名詞で知られる巨陽、江戸末期の性的見世物として哀れをとどめたサネナガ娘とか、或いは陰茎重複といって二本あるもの（私も相当の雑読派だが、これだけは此の書によって初めて知ったことだ。支那人苦力の実物写真がでてゐる）。その他、大陰門、小陰門、硬化した陰門、小陰、無腔、江戸期医書写本よりの造陰奇譚、子宮脱（俗にいうナス）の俗信、半陰陽（二形、ふたなり）の事実、空想や神話上の半陰陽、等々じつにさまざまな歪められたる性器についての考察が記載され、東西古今の神話、宗教、古典、随筆書、街談・俗説・哲学・医学・民俗学等々、あり

とあらゆる分野の諸学より涉漁し追求しながら、其処に自家一流の人生哲学を講じたものと見るべきで、そのペタンチックな論理の展開のためには、一般読書子にはとても手に負えぬ特殊文献を多数縦横に駆使して、読者をして呆然たらしむるものがある——その筆法の是非は論外であるとしても。

珍らしい筆写図、写真、学術書よりの参考図など二十五図ある。私は読み了えて、この書物出版の世に伝えたかった意味を以下のように考えた。人間には五体満足にして、一指たりとも欠けず多からず、精神また健全なりと自負する、そうした大多数というより殆んどそれが人類全部の掟であると誤信する人たち。世界が、それ等の人々だけのものだと思えば、人類の優生学的見地からしても生れて来なければ良かったと思われる。傷んだ人間——つまりできそこないや、先天若しくは後天的な身体不具者、病弱者、そして狂人や犯罪者などという、身体精神共に定型に属せぬ、変質的人生のうちの、特に人性器不具の現実を文献史上の立脚点より考察したものである。そして、最高等の生物（いきもの）である人間の世界において、単に定型的であるということが、それ程よいことであるか。

〔伝言板〕○本誌では、寄稿家執筆者投稿者やモデル嬢などの住所氏名の照会には一切応じておりません故、御安心の上御送稿下さるようお願い致します。尚手紙の転送なども原則としては取り扱いは致しておりません故御諒承下さい。

○如何なる理由に拘らず直接発行所への訪問や電話は固くお断り致します。御用件はすべて書面にてお寄せ願います。

○編集者に面会を求められる方は、住所氏名職業を明記の上、用件を附してお申込み下されば、電話番号、連絡場所などを御返事申し上げます。予告なしに突然訪問されてもお逢い致しかねます。

変質的であることが、それ程わるいことであるか——と。

坂ノ上言夫氏の代表的著作は次の通り、土地争奪史論（本庄栄治郎、三浦周行序文附、大正11・2、大同館書店）
拷問史（大正15・8、坂本書店）
古典感覚（昭和8・10 朝日書房）
その晩年は右眼失明、半身不随だったが、左手で特殊雑誌への寄稿を続け、その文字を見た人は鬼氣の迫るのを覚えたという。未見だが、昭和二十八年頃孔版印刷で東西古今の「手淫」に関する文献譚を数部発行したと伝えられている。

S M 随 想

つれづれなるままに

橘 雅 美

去る三月八日『ザ・ガードマン』を帰宅途中で見る。

このT・V映画、いつも感心しているのだが、ストーリーの中には必ずと言って良い程女性を縛り、責める場面を入れてくれる。

よほどこの道が「好き」なのか？ 毎回メガフォン片手にニタニタしながら、女優さんをいじめてる姿が目につくやってくる。

TVの女優さん達はピンク女優とはちがうS・Mに関しては素人さんがほとんどだろうと思うが、映画館では味わえない変ったムードが一人じめ出来る訳だ。毎週金曜日の午後九時半から一時間、ゆくゆくは『奇ク』あたりがスポンサーになってもいいのだ……。

この日の「恐怖のハネムーン」でも、案の定お決まりのコースが画面に展開した。

新婚旅行の旅先で、紺野ユカの扮する新婦が、ガードマンと共に縛難に遭う。荒波の打ち寄せる岩場の上で、後手にされ、投げ出した足首まで御ていねいに縛られる。

結婚を前にして浮気を続けた新郎が殺人現場を目撃してしまう。楽しかるべきハネムーンが、殺人犯人からの逃避旅行とあいなる。今回は洋服の上からであったが、胸の上

下にロープがまきつき、くびれた乳房が、苦しそうに上着を突き上げる。細いマユをしかめた悲しそうな表情、容赦のない縄目などがブラウン管に映った。

あまりアップのシーンがなかったのは残念だったが、助けに来た夫にロープを解かれた時、手首の自由が戻っただけで、胸を締めつけるロープがほどけずに残されていたのは、うれしかった。

四月号で、緊縛女優の辰巳典子が言っていたが、ゆるんだ縄を身体にまきつけていたのでは、見る方もつまらないし、確かに演技する方も力が入らないにちがいない。アツと言う間に縄が解け、あとはケロッとしている場面には時々出くわすが、これほど人をバカにした事はあるまい。前にも書いたが、子供だましの様な縛り方では、例えそのモデルが全裸であっても、私は顔をそむけてしまう。嚴重にいましめられ、泣き出しそうな顔をされると、私はきつと無条件に、まいってしまいうちがいない。

話は変わるが、近頃氾濫しているマンガ週刊誌。いずれもきわどいのが売り物であるがS・M場面が、ここでも大いに活躍している。通勤電車の中で眺められる事もまれでは

ないし、青年層を対象にしている週刊誌も、このおこぼれを頂だいしている。

『プレイボーイ三月十二日号』の特大カラーは、蛇を使った悪魔主義ヌード集を満載。合戦との事だが、全裸の女性に太い蛇をあしらった写真特集があった。

胴に巻きつき、乳房にキッスをし、果ては股間をノラリクラリ……。女の表情も、場面々々によってちがうから、見方によっては、さぞや面白からう。次は縄を使った悪魔主義ヌード集でもやってみてはどうだろうか。

『平凡パンチデラックス十六号』のカラーグラフは、そのものズバリだ。ヘル・ファイア・クラブ（地獄の火という意味）物語りがそれで、詩人ミルトンの子孫であるサー・フランシス・ダッシュウッドが創設者であると、その内容を写真で紹介。

両の手首を天井から下がっているクサリによつて吊られた金髪の女。ピンク色をした上半身、そして真っ白い双丘もあらわになってゐる。両側から、二人の女が吊られた女を裸にしている写真だ。狂乱のパーティーは、時に二週間も続く事さえあるそう。私も一度は入会してみたい……金と地位がないとダメだとある。『惜しかった』。

ところで、気になる事がひとつ。大体に見かける外国のS・Mの写真では、女性同士の場合は、どうしてもか、責められる方がどこことなく細かい感じで、責め手の方が、むしろポインたる所がその名の通りポインで、健康そうな肢体の持ち主である。日本の場合は、反対に、男まさりの陰気な女が、肉づきの良い裸婦を思ふ存分責めやるケースが多い様だ。国民性の問題かな、私にはよくわからない。

『スター二十四時間一月号』については、奇ク四月号でふれられていたが、世界のマル秘ショーの他に、『話題のピンクステージ』というのが収録されていた。

劇団「赤と黒」と「炎」のステージでの拷問風景のスナップがある。

「天井から吊るされた女にはムチが飛び、若い柔らかな白い肌はスポット・ライトに輝く……」との説明入りで、紙面一杯に、後手逆手吊りのシルエットが二ページ続く。

お次は、水車に逆さにハリツケられた半裸の女。お腰のものがひるがえり、白い足はむき出し。舞台のかぶりつきにいれば、もがき苦しむ表情も、恐怖にふるえる乳房も、きつと手にとる様に見える事が出来ただろう。

同じ特集の続きに、もう二葉の写真あり、

前者の続きで、米だわらの上に寝かされた裸の女。一人の男に、足首と両手を後に細ヒモでくくられ、叫び声を上げている所。

写真の下には、『捕えた女を狂人の浪人はいたぶり、楽しみ、女の肉体をどう仕様もなほどに燃え上がらせてしまうのだ……』と結んでいる。時代劇版の拷問である。

別のショーガールの二十四時間では、劇団「赤と黒」のヒロイン志村旺子が紹介されていた。なやましい、セミ・ヌードの写真と共に、舞台でのハラキリ（私はあまり好まないが……）のカットが二枚、載っていた。

どうですか。B五判の、それも紙面のほんの一部にしかあたらぬ、三十五ミリのベタ焼きみたいな写真を載せて、それでも何やかやと氣を使っているのに比べ、何と、結構な事か。ましてや、堂々と、薬局や駅の売店でも売られているのだから、『悪書』たるや、いずれがアヤマカキツバタ——お訊きしたいものである。

ともかく、雑誌の折り込みに、愛読者カードなるものがあつたので、『次回は、ぜひともS・M特集を』と、言いたい事を書いて出してやった。皆で、ラジオの歌謡番組の様にファンレターを出すと、面白いのだが——。

× ×
 つい昨日、ショックを受けた出来事があったので、グチらせてもらう。

家の近くで、悪友に逢い、そばの喫茶店に入った。少しして若いアベックが我々のすぐとなりに席をとった。ひと目でそれと解る、ベタベタのお二人さんは、腰を降すなりガバツとひとつになっちゃった。ウェイトレスが退いたら、二階に居るのは、私と悪友、それにアベックの四人だけである。

始めの内は、あまり気にもしなかったが、その内、女の方が妙な鼻声をあげ始めるに及んで、私と悪友とは顔を見合わせた。

よく利用する店だが、こんな光景に会ったのは初めて。息を殺して聞き入っていると、段々女のうめき声が大きく、荒々しくなり、ついには、泣き声で、「イタイイ」「ヤメテ」「ゴメンヨ」とやり出した。

覗き込むと、こっちの様子を知ってか知らずか、私とは似ても似つかぬ醜男が、舞台化粧の様な顔をした彼女を相手に、とんでもない事をやっている。

茶色に染った長い髪を後に引っ張り、もう一方の手で、そり返ってつき出た胸元を押し広げ、下着の中に手首を入れてゴソゴソやっ

ていたのだ。

「お前の書いたのにそっくりだな」と悪友は笑ったが、私の方はマジメな観察である。

まだ二十才前の小娘らしいが、のけぞった顔が、私の方を向き、引きつった濃いアイシヤドウのひかれたひとみが、笑っていた。唇はと言うと、かわく所が、今にも水滴がこぼれ出さんばかりに濡れて、ギラギラと光っている。

胸のふくらみをにぎりしめ（……ていると思う）る男の手に力が入ると、男の背で、女の自由な手が、しゃにむに固い体にすがり、ずり上ったミニスカートから突き出ている二本の足が、ぶるんぶるん震え出した。これらの事は、階下にまでも聞こえたらしく、店のママがいきおい込んで来て、この二人をしっかりとつけた。

「あんた達、クスリ飲んでるわネ。この店はあんた達みたいな人が来る所じゃないのよ。やめなさい！」

しかし、二人には一向聞こえないらしく、男の手は女の足を這い出した。ヒステリックな声で、「警察を呼ぶわよ！」とママが言うのと、さすがに止めてしまった。便利な耳だと思ふ。

私も友も、浮かしていた腰を止むなくおろしたが、全く、良い社会勉強になった。ものすごい迫力に、私はすっかり押しまわられてしまい、呆然となっていたのだが、もう少し続いていたら、二人の中に飛び込んで行きかねない気持ちだった。

しかし、このあとが頭に來た。この二人のヒソヒソ話で、私は、一本取られたのだ。「バカヤロウ、あんな大きな声で泣く奴があるかよ」

「だって、いたかったよ」

「ウソつけ。あの位いガマン出来るよ」

「本当だったら。ああ、まだいたいわよ」

「ゆうべ、散々いじめられたんだからな、今日はお返しだ」

「あたい、いじめたりなんかしないよ。うれしかったクセに」

「お前だって、そうだろ……」
 チクショー！ いいかげんにしろ。

それにしても、私はあい変らずの独り身。ウサ晴らしの、実際にはありっこないと思つて書いた事が、自分の眼前で現実に繰りひろげられ、しかもそれが、もっと根深いものであると知らされて、全く、踏んだりけったりであった。

贗作イーリアス

ダイアナ



—— (完結篇) ——

黒 湊 嬰 一

アテナ



森鷗外は語った。

もののふの武勇なきにはあらねども
まがね成すペト^しンに投ぐる人の肉。

行く者は生きて還らぬ強襲の

鋒先をしばし転じて右手^めのかた

図上なるしるしの高さ二〇三

いただきのふたつ聳ゆる石山に

たえだえの望みの絲をかけてこそ

きのふけふ軍の主力を向けてしか。

×

×

須佐之男「激戦三百日。残るはこれだけか」

天照大神「戦い抜いた勇者のみです」

月読神、大国主神、科^{しな}戸神、大綿津見神、

邇邇芸尊、猿田彦命、豊受大神、石凝度姫、

思兼神の諸神。何処かに傷を負わぬはない。

併し全員が最後の決戦に競い立ち、武器を鳴

らして関を揃えた。

×

×

×

「二百三高地ヲ奪取セヨ」

十一月二十七日午前十時。

乃木は全砲兵に速射を命じた。

日本軍は九月末以来四十日を費して三条の

電光形攻路を二百三高地山麓に迄掘進してい

た。第一師団長指揮下の諸隊は薄暮攻撃を期

して攻路頭に進出待機し、第九、第十一師団

は東正面本防禦線外に活潑な運動を行ってロ

シヤ軍の一部を牽制した。

×

×

×

商業神「日本軍が、二百三高地を攻撃中で

す」

主神「松樹山や二竜山に対する連続強襲は二

百三高地に転攻する為の牽制だったのかな」

主女神「東正面は妾が引き受けます」

主神「余は二百三高地に行こう。後を頼む」
ヘルメス、オローラ、ヴィクトリア、商業神、暁女神、勝利女神、ヘルクレス、ヘーパイラス、アムピトリテ、青春女神、海洋女王が主神に従って急行。
 主女神は軍女神等と共に本防禦線を守る。

「二百三高地ヲ守レ」

ステッセルがトレチャコフに敵命した。

白玉山を旅順城の天守閣に見立てるなら、黄金山と旧市街は本丸、松樹山、二竜山、望台、東鶏冠山、白銀山と連る東正面本防禦線一帯の高地は二の丸。老虎尾半島、太陽溝、倚子山、案子山は三の丸に該当する。二百三高地は西北の出丸になるだろうか。

併し此の出丸は重要だった。大阪城に於ける真田山。姫路城なら男山。本城の守備兵を傾注しても所有を争わなければならない。

櫛名田姫が激痛で意識を回復した。逆海老に縛られ、全身を鎖で巻き締められた上に厚い眼隠しと固い猿轡。二百三高地鞍部の岩石中に埋められて百日。何も見えず何も聞えず四肢は既に痺れ果てて微動も出来ない。併し事態の変化は物凄い地響きで感知された。

脇腹に灼熱の金属片が突き刺さった。足の裏も焼けている。間断無き鳴動。眼隠しを透

して閃光が走る。鼻孔だけ露した顔の上に土砂岩石が雨と降り注いだ。

——日本軍が全砲火を集中している。もっと撃て。此の身が寸断されようとも構わない。

二百三高地を撃ち碎け。——

二百三高地の堡壘は永久築城ではない。蟻

塚形に廻らせた塹壕網の屋上を鉄道軌条と軍艦用鋼板で掩った臨時要塞で、備砲は大部分が軍艦から揚陸した艦載砲。守備兵の多数は太平洋艦隊の水兵だった。旅順艦隊が山に上ったようなものだ。併し此の陸上軍艦は十五糧級の攻城砲弾を撥ね返す事が出来た。

余談だがロシア海軍は伝統的に強くない。

併し陸に上ると俄然勇敢になる。第二次世界大戦で勲章を授けられたソ聯水兵の勲記は大部分が陸上での武功である。二百三高地上のロシア水兵は黄淮海戦の時よりも頑強に戦った。宜なるかな。此の山は港内全艦隊の運命に繋る。砲と人を撤去された空虚な軍艦に較べて此の山こそ旅順艦隊そのものと言えた。

日本軍は二十七日の昼間だけで二十八榴榴弾八百発を撃ち込んだ。永久堡壘のペトンに対しては効果不十分だった旧式巨弾は軍艦式構造物に対して本領を発揮した。二百三高地

散兵壕の鉄製掩蓋二十二箇所が忽ち貫通され西南山頂の防塁は崩壊した。守備兵の死傷も続出し、一部には動揺の兆候が見えた。

天界では神々が激突した。

天照大神の八拳之剣と主神の金剛鎌が火花を散らせた。

剛勇須佐之男は青春女神と対戦。

銀月冠を輝かせた月読神は、サフランの戦袍を纏えす暁女神と斬り結ぶ。

猿田彦は勝利女神に挑戦し、

邇邇芸尊は海洋女王を相手に撰び、

科戸神は商業神と速技を競う。

砲声に和して剣戟の響が旅順の天地一杯に鳴り渡った。

「二百三高地ヲ奪取セヨ」

午後七時四十分。三箇大隊の突撃隊は三条の攻路頭より躍り出し山頂へと駆け登る。

「二百三高地ヲ守レ」

山頂の機関銃座が火を吐いた。老虎溝山、老鉄山、大劉家屯の諸砲台は側面射撃。

海軍大尉の発明したポドクルスキー焼夷弾は山腹を転がり落ちながら至る所で爆発。その炸裂量は地雷に等しく、撒き散らす火焰は

斜面を登攀中の日本兵を焼き尽くす。

二百三高地中腹に達していた後備歩兵第十五聯隊は一瞬で掃蕩され、僅少な生存者は山麓の突撃陣地へ追い落とされた。

このはななくや

木花開耶姫は黄金の鎖で全身を緊縛され、

白玉山の底に埋められていた。食無く、水も無く、不死の身体と雖も極度の衰弱。空しく解放を待って既に半歳。地底は暗黒。時間の経過は解らず、感じるは大磐石の重量のみ。併し今日は無数の軍靴が白玉山麓を通る。

——ロシヤ軍の大部隊が西へ移動中だ。——

乃木は満洲軍総司令部に対し旅順第三回総攻撃の中間報告を電報した。

東正面本防禦線攻撃の一時中止。

二百三高地への全力注入。

老虎溝山山頂の一時的占領。

「今日迄ノ攻撃不成功ニ終リシハ、偏ヘニ小官不明ノ致ス所ナリ。然レドモ（中略）部隊トシテノ動作ハ間然スル所無ク、其忠勇、正ニ日本帝国軍隊ニ恥ヂザルモノト信ズ……」

鳳凰山上の雲中では、

プラチナ・ブロンドの野性美女狩獵女神。

栗色の髪を持つ地下の美少女闇魔女王。

金髪と七彩の瞳を輝かせた虹女神。

オリムポス方の三女神が菱縄を掛けられ、

正坐した膝を重ねて縛られ、縄尻を枕に繋がれながら、高潮する戦況に興奮していた。

夜でも眼の見える狩獵女神が言った。

「日本兵が二百三高地へ上って行くわよ。夜襲する気ね。何か持っている。ポンプだわ。何うするのかしら。ロシヤ軍は未だ気がつかない。あら、水を浴びせだした。いや、水じやない。石油よ。麓から火を点けた。ああ、散兵壕の掩蓋が燃えている……」

同じ十一月二十七日。バルチック艦隊のフエリケルザム支隊はスエズ運河を通過した。

西港の水中に二十八糎榴弾が落下した。軍艦を狙ったのが外れたらしい。その飛沫を浴びて天宇受女が蘇生した。

縛られ、埋められ、放置されて七箇月。

日本一のセクシー・グラマーと誇った容姿は憔悴して見る影も無く、主神さえ陶然たらしめた美貌は泥と海水と涙で交互に洗われて汚れ果てている。それでも身近に迫った戦気を察して面を上げ、眦を決して北方を見た。

——昨日の夕方、老虎溝山西部山頂に懸えていた日章旗が今朝は見えない。奪回されたようだ。併し日本軍は攻撃を止めない。早朝から二百三高地に集弾している。ロシヤ軍も大挙増援中だ。あの禿山が日露両軍の決戦場になるのだろうか。——

「二百三高地ヲ奪取セヨ」

十一月二十八日。払暁より砲撃再開。

午前八時。砲撃効果愈々顕著。歩兵第十五聯隊第一、第二大隊は直ちに突撃開始。

前夜の襲撃で石油を浴びせて焼却した散兵壕は今朝も延焼中だったが、生き残ったロシヤ兵は煙の中から射撃を続けていた。

八時四十五分。第二線散兵壕を奪取。

十時三十分。右翼突撃隊は二百三高地の二箇並ぶ山頂の内、西南側の峯に達して激烈な白兵戦を展開、その一角を奪取した。工兵は土嚢や鉄板を運搬して防備を強化する。

ロシヤ軍は迅速に逆襲した。案子山、倚子山以下の諸砲台は彼我の区別無く山上を掃射し、太陽溝方面から急派された援軍は二百三高地南斜面を続々と押し上った。

西南山頂上の日本軍は忽ち大部分が死傷し、残兵は第二線散兵壕に後退して再挙を計る。

突撃隊長友安少将は後備歩兵第三十八聯隊第二大隊を増加して攻撃を再開。正午頃再び西南山頂の突端を占領した。

一方、東北山頂を目標として突進した諸隊は掃射されて山腹に潰乱。一箇大隊の増援を加えて再興された突撃は四十米駈ける間に全員が死傷する大損害を受けて敗退した。

科戸神「乃木が高崎山に馬を進めました」

須佐之男「二百三高地とは谷一つだ」

天照大神「只の陣頭指揮ではありませんまい」

須佐之男「姉神には乃木の心が読めますか」

天照大神「攻撃が發展しない場合、乃木は軍

予備隊たる第二十七聯隊の先頭に立って二百

三高地に斬り込む覚悟と見えます」

須佐之男「自殺同然ではありませんか」

天照大神「自らの死に依って軍を奮起させ、

旅順を陥そうと言うのです。そればかりでは

ありません。次男の保典少尉を突撃隊長友安

少将の副官に使っています」

須佐之男「乃木の子供は男が二人だけで、長

男の勝典中尉は南山で戦死していましたね」

天照大神「あの保典少尉が乃木に残された唯

一人の推定相続人です」

「二百三高地ヲ守レ」

ステッセルは動員し得る限りの予備兵を投入した。司令部衛兵、通信兵、將軍従卒、馬を屠殺する不正規兵、ステッセル自身の料理番迄二百三高地に送り込んだ。

十一月二十九日午前零時三十分。ロシヤ軍の大逆襲は西南山頂の大部分を奪回した。

第二回総攻撃の際、傷ついて捕えられた海

の美少女須勢理姫は後ろ手に縛られ、猿轡を噛まされ、望台後方高地上の柱に高く掲げられた儘で晒されていた。

此の位置からは二百三高地の真横を眺める事が出来た。視覚も聴覚も減退し、思考力も失われかけていたが戦況の重大化が氣力を支えた。無理に首を曲げて西方を見た。

——二百三高地の北斜面は褐色に染まった。

あれは日本兵の戦死者だ。南斜面は青一色。

ロシヤ兵の死体らしい。屍の上に屍を積んで

山頂を争っている。あの両山頂を確保した者が旅順要塞戦の勝利者となるのだ。——

「二百三高地ヲ奪取セヨ」

十一月二十九日午前四時。乃木は旭川第七

師団の全兵力を二百三高地に注入し、第七師

団長大迫中將に第一、第七両師団の統一指揮を命じた。

此の日、満洲軍総参謀長児玉源太郎は田中国重参謀を伴い、烟台の司令部を発し、汽車で旅順へ急行した。

豊玉姫は後ろ手に縛られ、足首を青銅環で繋がれて黄金山西崖から太鎖を以て逆吊りにされている。

全身の傷が痛み、頭を下にした不自然な姿勢の為に方向感覚は乱れた。併し二百三高地の特徴ある双子嶺を見誤る事は無かった。

——日本軍は老虎溝山山頂堡壘の一部と、二百三高地東北山頂の一角を占領したが又もやロシヤ軍に奪回されたようだ。併しロシヤ軍も疲れている。攻撃を緩めるな——。

「二百三高地ヲ奪取セヨ」

十一月三十日午前六時。全砲兵射撃開始。

九時より十時に至り老虎溝山と二百三高地

は全山爆煙に掩われて砲撃最高潮。

「二百三高地ヲ奪取セヨ」

十一月三十日午前六時。全砲兵射撃開始。

九時より十時に至り老虎溝山と二百三高地

は全山爆煙に掩われて砲撃最高潮。

——熱い。痛い。不尽の焔か。阿蘇の火か。

八岐大蛇の毒牙と雖も斯く迄の苦はあらず。噫、此の責苦。眼だけでも見れば砲弾を避けられるのに。併し耐えよう。我慢しよう。堡塁と共に引き裂かれるなら悔いはない。――櫛名田姫の身体を掩っていた土砂は何処かへ吹き飛び、鎖に自由を奪われた全身が避けようもない弾雨に晒されていた。

「二百三高地ヲ奪取セヨ」

午前十時。二百三高地の両山頂に向い、二縦隊の突撃隊は左右の攻路より前進を開始。右翼の第二十六聯隊先ず南西山頂に猛進。併し、これに策応して東北山頂に突入すべき左翼の第二十八聯隊は掃射されて動けず。二百三高地攻撃指揮官友安少将は決死突入を督促せんとするも命令伝達的手段無し。副官乃木保典少尉が伝令任務を自ら引き受けた。午後二時四十分。左翼隊前進開始。

須佐之男「姉神。乃木の息子が死にました」
天照大神「見ました。眉間の真中を只一発」

狭い支那家屋の一室。高崎山に進められた第三軍の臨時司令部である。蠟燭に照らされた老将乃木は顔色衰え、眼光のみ愈々鋭い。

「御令息が戦死なさいました」
参謀長伊知地少将が悲報を告げた。乃木は答えず、黙って蠟燭を吹き消した。暗黒の中でアンペラの上に横臥する物音だけが聞えた。

ヘルクレス「妻の青春女神が行方不明です」
主神「余と主女神の娘を誰か知らないか」
曉女神「敵将須佐之男と戦っていましたが」
勝利女神「乱戦中に見失いました」
主神「不運な事になったとしても諦めよう。諸神よ。此の戦は重大だ。後方勤務の者達も前線に加れ。総力を挙げて戦うのだぞ」
歴史女神「心得ました」
葡萄酒神「承知致しました」
麗美女神「あもう、わたしもですか」
愛神「ママ。戦争だよ。いっしょに行こう。僕が此の弓で守ってあげるよ」

満洲軍総参謀長の特別列車が南満洲鉄道を南下していた。機関車一台と有蓋貨車一輛。児玉源太郎はアンペラの上に無然と坐り、駅毎に電報の有無を尋ねる。

十二月一日午前三時。金州停車場に到着。「第三軍二百三高地占領」の吉報が待っている。

た。総参謀長は手離しで喜び、秘蔵の葡萄酒を開封して田中参謀と共に乾盃した。併し此の「占領」は六十七回繰返された争奪の一駒に過ぎない。大連駅では次の電報が手交された。「二百三高地ハ敵ノ逆襲ニ奪回サレ、兩軍ハ目下山頂ヲ挟ンデ対陣中」

児玉源太郎は朝食に出された洋食の卓を指して呟鳴った。

「朝から洋食を喰う馬鹿が何処に居るか。早く握り飯を持って来い」

鳳凰山上の收容所には焦茶色の髪をした愛らしい美女が新に加った。須佐之男に捕えられた青春女神である。両手は高く背に廻り、胸には緊しく菱縄が掛かり、揃えた両膝は荒縄に縛られ、縄尻は固く杭に繋がれている。星の輝きと称えられた瞳は涙に濡れていた。

児玉源太郎は柳樹房を発し、馬で高崎山へと赴く。途中に広大な墓地が有った。第三軍の戦死者を埋葬した所である。

「此の墓地を撤去せよ」

総参謀長は下馬も拝礼もせずと言った。

「此処は戦闘に未経験の補充兵が通る道だ。墓地など設ける事はならん」

× × ×
須佐之男「姉神。児玉という男は智将には違いないでしょうが何うも好きになれません」
天照大神「あの男は日露戦争を戦うという、それだけの目的で生れて来たのです」

× × ×
十二月一日午前四時。石炭を満載したバルチック艦隊主力はガボオン湾を抜錨し、ポルトガル領アンゴラの大魚湾に向った。

× × ×
天界では後方勤務の諸神が前線に補充されて戦闘に参加した。

× × ×
豊受大神は杵を振り上げ、^{ディオニソステュルス}葡萄酒神は錫杖を構えて対戦した。

× × ×
石凝度姫と鍛冶工神は互に槌で打ち合い、^{ヘフェストス}思兼神と麗美女神は短刀で渡り合った。

× × ×
高崎山の斜面を切開いた二畳敷の地下室。

× × ×
これが第三軍の臨時司令部だった。

× × ×
此处で第七師団長大迫中将は涙を流しながら嘆願した。

× × ×
「私は部下の四分の三を失いました。此の俣で退がるわけには参りません。どうかもう一度だけ二百三高地に向わせて下さい」

× × ×
児玉源太郎は腕を組み、天井を向いて一言

も発しない。大迫師団長は悄然と退去する。それを横眼で見送ってから総参謀長は言った「田中。次の突撃は大迫にやらせい」

× × ×
須佐之男「姉神。あれでも児玉に軍功を樹てさせなければならぬのでしょうか」

× × ×
天照大神「あの男は必要です。併し名誉の他は何も与えませぬ。児玉源太郎は日露戦争を戦い抜くと直ちに死ぬ事になっています」

× × ×
突撃を命ぜられた第七師団は損害過多で編成混乱。生存者を掻き集めて辛くも中隊を作る有様である。作戦会議を主宰する児玉源太郎が軍隊区分表を見ると同じ中隊が二箇所に記入してあった。満面に朱を注いだ総参謀長は第七師団参謀の天保銭（陸大卒業徽章）を引き千切って蹂躪した。

× × ×
「貴様はこれを附ける資格がないぞ」

× × ×
櫛名田姫は鎖に縛られた身で山頂を転々。北面から日本軍の砲弾に叩かれ、

× × ×
山頂が日本軍の占める処となるや一転南方からロシア軍の砲火に曝される。

× × ×
数十分の後には又もや日本砲兵の連打。

十二月二日の朝が来た。百名程の日本兵は二百三高地西南山頂を死守している。其処に登れば旅順港内の艦隊を観察し得るだろうというので軍幕僚が派遣される事になり、第七師団の白水参謀、聯合艦隊の岩村参謀、軍司令部の国司参謀が選抜された。三人の参謀は決死の覚悟で下着迄新しいものと替えた。

「頼むぞ」
乃木は三人の手を幾度も握り、衷心から別離を惜しんだ。

× × ×
三人は次いで総参謀長に挨拶した。児玉は振向きもせずと言った。

「行け」

× × ×
閻魔女王「百人程の日本兵が三隊に分れて二百三高地に上って行くわよ」

× × ×
虹女神「掩蔽壕を奇襲する気なのね。縛られていなければ蹴散らしてやるのに」

× × ×
狩獵女神「先頭の一隊が塹壕に爆弾を投げ込んだわ。ロシア兵は疲れて眠っている。完全に不意を討たれたようよ」

× × ×
青春女神「次の一隊はブリキ缶を抱えて走って行く。石油缶らしいわよ。あれを浴びせて火をつけるんだわ。きっと」

× × ×
閻魔女王「石油缶の後に最後の隊がもう一度

爆弾を投げた。ああ、散兵壕の中が燃える。ロシヤ兵が焼けながら逃げたり転がったり。動けないのが口惜しいわ」
虹女神「もう見てはいられない」

児玉は砲撃目標の転換を命じた。二百三高地の山頂を撃つよりも、側防砲火の主力を成す老虎溝山や化頭溝山を制圧せんとした。

二百三高地東北嶺は急崖の上にあり、正面攻撃は困難。過去数十回の突撃は山麓より試みられて悉く失敗した。最後の突撃に於ては比較的攻略容易と見られる西南山頂を先ず奪取し、此処から鞍部を峯伝いに進んで東北嶺に向う作戦が採用された。

山麓から二百三高地に登る攻路は狭い地隙を成し、銃砲弾を遮蔽する事が出来た。併し一条の隘路は突撃隊の進路であると同時に、負傷兵の比較的安全な後退路でもあった。山頂では両軍の兵士が急速に消耗している。体力と弾薬を有する新鋭を早く多く送り、山頂でこれを持続する方が勝者となるのだ。児玉は地隙を指しながら厳然と言った。
「あの攻路は突撃隊の専用とせよ。負傷者は路外の山腹を通過して帰れ」

無数の軍靴が櫛名田姫の動きもならぬ身体を踏みつけながら駆け抜けた。

南から北へ。その次には北から南へ。西南山頂の日本軍と東北山頂のロシヤ軍は中間の鞍部を挟んで白兵戦を反覆する。

銃剣を構えた死体が倒れかかった。死体の上に又死体。土砂に代って無数の戦死者が折り重り、櫛名田姫を底深く埋没し去った。

「二百三高地ヲ奪取セヨ」

乃木は第二十七聯隊を放った。第三軍最後の総予備隊である。屯田兵出身の北海健児、寒氣を冒し、勇躍して山頂に轟進する。

屍骸の山の底で櫛名田姫が縛り固められた身体を芋蟲の如く蠕動させながら逼り出そうとしている。

手兵の大部分を失った友安少将は援軍を率いる斎藤少将に指揮権を譲った。

十二月四日午後二時。最後の総突撃が発令された。

櫛名田姫が身を揉む。

何とかして身体の一部でも自由を回復しよう

うと空しい努力を続ける。

それでも猿轡だけは顎の下に落ちた。口腔中の海綿は漸く吐き出される。

更に眼隠しを押し下げようとして顔を地に擦りつけ、泥に塗れながら腕きに腕く。逆海老に縛られた身体が少し宛前に出る。眼は未だ見えない。遂に鞍部から外へ出た。俵の如く縛られた身体が鞫の如く弾んで老虎溝山の谷へ真逆様に転げ落ちて行った。

「二百三高地ヲ奪取セヨ」

十二月五日午前九時十五分。総突撃開始。三十名の選抜兵が一条の攻路を駆け上る。此の一小隊が生き残っている間に次の三十名が走り出す。

更に第三の決死小隊が続く。

第七師団、全軍車懸りの猛攻。連続突撃。

砲声と大喚声に全山が揺れ動いた。

天照大神は全力を奮って主神に斬り掛る。

主神も秘術を尽くして応戦する。

彼我総帥の一騎討。二百三高地上空は密雲に閉ざされ、下界は暗鬱。

「二百三高地ヲ奪取セヨ」

西南山頂は日本軍の手中にある。併し相次ぐ集中射撃に消耗重り残兵僅か四十名。

齊藤少将は山頂への増援を急ぐ。

占領地確保の防禦工事も着々と進行した。

午後二時。

縛られ、西港の泥中に埋められている捕われの美女^{あめのうすめ}天宇受女が快哉を叫んだ。

——二百三高地山頂からの観測に基き二十八糎榴弾砲が港内軍艦の射撃を開始した。——

午後二時二十分。二百三高地西南山頂から出撃した決死隊が鞍部を駆け抜け、東北山頂を背後より襲った。山麓に待機中の第二十五聯隊も此の機を逸さず一挙突入を計る。

激戦幾十合。遂に主神^{ゼウス}の金剛鎌が天照大神の肩を打ち、首筋を裂いた。

併し大処女神の剣も同時に敵の腕を刺す。

天照大神は剣を杖に辛くも身を支え、主神^{ゼウス}の手から金剛鎌が落ちた。

午後二時三十分。一発の二十八糎鍛甲榴弾が水線下で戦艦ポルタワの舷側を貫通した。

弾薬庫誘爆の火柱は天空高く噴き上る。

月読神「姉神。しっかりして下さい」

天照大神「主神^{ゼウス}が逃げて行きます。わたしに構わず追って下さい」

須佐之男「心得ました。姉神を頼むぞ」

天照大神「主神^{ゼウス}の右手は確かに傷ついていますが。もう雷電槌も金剛鎌も使えない筈です」

月読神「姉神。御味方の勝利ですぞ」

天照大神「地上の戦況は如何ですか」

月読神「日本軍が勝ちました。二百三高地の東北嶺も西南嶺も確保しています」

天照大神「満足に思いますぞ」

月読神「姉神。姉神」

天照大神「……」

日本軍は二百三高地の両山頂を占領した。

併し鞍部のロシア軍は頑強に抵抗して後退せず、逆襲の機を窺う。

狩獵女神^{ダイアナ}「ロシア軍が負けたらしいわよ」

閻魔女王^{ベルセフオネ}「主神様が居ても駄目なのかしら」

虹女神^{イリス}「主神様が左手の雲楯を投げた」

青春女神^{ヘーバー}「黒雲が払って行く。もう何も見えなくなっただわ」

× × ×

午後六時。大迫中将は両山頂から鞍部を攻撃させた。ロシア軍は遂に支えず南斜面を潰走して本防禦線へと奔る。

月読神「主神^{ゼウス}は何うした」

須佐之男「雲に隠れて逃げた。姉神の容態は如何だ」

月読神「意識不明だ」

重い雲が天地を蔽っている。

太陽は雲に隠れて輝かない。

瘦身小軀白髯の老将が従卒一人を連れて二百三高地に上って来た。

「皆、よくやってくれたな」

乃木は感慨深く言った。

× × ×

須佐之男「御辺の眼は夜でも見えるだろう」

月読神「見える。乃木が泣いているぞ」

須佐之男「御辺も涙を流している」

月読神「神も人も、よく戦ったな」

× × ×

十二月六日の朝。雲は厚い。併し二百三高地の上には日章旗が鮮やかに翻えっている。

懸念された反撃は遂に行われなかった。ロシア軍は全力を消耗し尽くしたのだ。

× × ×

望台後方高地の柱に高く晒された須勢理姫が背後の拳を固く握り締めながら猿轡の下で歎息した。

——遂に勝った。二百三高地が陥ちては老虎溝山も守れない。化頭溝山も後方遮断の危険を生じた。三里橋も戦わずに放棄。ロシア軍は本防禦線内へ続々と退却して行く。——

十一月二十六日から十二月六日に亘る第三回総攻撃に参加した日本軍は六万四千名。

その内五千五十二名が戦死し、一万一千八百八十四名が負傷した。

ロシア軍の損害は四千名だった。

後ろ手に縛られ、足首を繋がれて黄金山の崖から逆吊りにされた豊玉姫が旅順港内の惨状を眺めている。

——レトヴィサンが着底した。ペレスウェートは傾斜増大、沈没しつつある。ポペーダもバヤーンも火災を起して最後が近い。——

同じ十二月六日。ポルトガル領アンゴラの大魚湾にバルチック艦隊主力が停泊した。併し通信不備な此の小植民市には極東のニュー

スは未だ伝らず、ロジェストウエンスキーは二百三高地の陥落を知らぬ俛、翌十二月七日ルーデリッツ湾に向って出航した。

科戸神「呻き声が聞えるようです」

豊受姫「老虎溝山の谷から聞えます」

櫛名田姫「誰か来て。助けて下さい」

科戸神「これは。須佐之男神様の奥方です」

豊受姫「こんなに縛られて、よく逃げられましたね。もう大丈夫ですよ」

櫛名田姫「誰方です。助けて下さったのは」

科戸神「今、眼隠しを外します」

豊受姫「何と酷い姿になって。苦しかったでしょう。解いてあげますよ」

櫛名田姫「有難うございます。だけど此の鎖は熔接してあって解けません。石凝度姫様でなければ切れないでしょう。此の俛で連れて行って下さいませ」

二百三高地山頂からは港内の全艦隊が一望に見下せた。庭前の鴨を撃つに等しい。

十二月七日も砲撃は続行される。

戦艦ポペーダは右舷に傾斜して艦腹を露し着底したものと認められた。

十二月八日。

深淵神「巡洋艦バルラーダも沈みました」

曉女神「装甲巡洋艦バヤーンも遂に最期」

商業神「敷設艦アムールは白玉山下に転覆」

勝利女神「装甲砲艦ギリヤークも戦闘不能」

主神「海洋大王の妻よ。何を歎いている」

海洋女王「悲しうございます。わたしの愛していた軍艦が、みんな沈んでしまいました」

主神「泣くのではない。其方の任務は未だ終っていないぞ。あれを見よ」

唯一隻残った戦艦セバストポリはロスチンスキーの将旗を掲げ、砲艦、駆逐艦各一隻を伴って出撃しつつあった。

(旅順港内に着底した諸艦は戦後に浮揚され日本名に改称された。レトヴィサンは肥前、ペレスウェートは相模、ポペーダは周防、ポルタワは丹後、バヤーンは阿蘇、バルラーダは津軽、アムールは天草丸、ガイダマックは敷波、プザドニツクは巻波、シーリヌイは文月、アンガーラは姉川丸である)

十二月九日未明。セバストポリは城頭山下に投錨し、旅順艦隊の健在を誇示した。

セバストポリの大橋高く、セント・アンド

レーエフ青十字旗翻える処。海洋女王は桁を踏まえ、三叉鉾を構えて巍然と立つ。
傍なる砲艦オトワズヌイには老神深淵神が控え、駆逐艦ポーブルの上には喇叭手海王子が立っている。

爾靈山嶮難攀。男子功名期克難。
鉄血覆山山形改。万人齊仰爾靈山。
二百三高地は乃木の詩に依って爾靈山と改名された。

主神「二百三高地は陥ち、艦隊の大部分は沈んだ。余の右手は当分使えない。旅順の陥落が近いのかも知れんぞ」
主女神「お気を落されてはなりません。軍港としての旅順は価値を失いましたが要塞としての旅順は依然健在です。三度に亘る日本軍の総攻撃を撥ね返した東正面本防線は微動もせず、松樹山、二竜山、東鶏冠山と連る三
大永久堡壘は未だ侵されていません。其処は旅順のヘクトルたるコンドラテンコ少将が守っています。彼が生きている限り旅順は陥ちないという運命女神達の予言も有ります。妾と軍女神で必ず彼を守ります」

十二月十日。満洲軍総参謀長児玉源太郎は旅順を発し、烟台の総司令部へ帰った。
十二月十一日。ロジェストウエンスキーの率いるバルチック艦隊主力はドイツ領ルーデリッツ湾（現在の南西アフリカ）に入った。

農業女神「お願いです。どうか娘に会わせて下さいませ。捕われている閻魔女王に」
猿田彦「何者だ。オリムポスの間諜だろう」
農業女神「武器は何も持って居りませぬ。此の通り嘆願者の印として平和に捧げる橄欖樹を持って来ました」

科戸神「帰れ帰れ。汝等の来る所ではない」
農業女神「ステュクスの水に誓います。娘を返して下さい。今後一切戦はさせませぬ」
猿田彦「何に誓っても無駄だ。愚図愚図申すと汝も引つ括るぞ」

農業女神「娘の身に替れますなら、縄を掛けられても、お恨みは致しません」

月読神「騒々しい。何事だ」
科戸神「此の婆は閻魔女王の母親だそうで」
猿田彦「娘の代りに縛られたいと申して居ります」
農業女神「何卒御慈悲を」

月読神「何か事情が有りそう。中へ通せ」

十二月十二日。両軍の軍使は松樹山補備砲台附近に会見し、死体收容の休戦を約した。
東正面本防線外に散乱する死体は十三日と十四日に收容された。ロシア軍の兵士は日本兵の死体が通過すると誰の号令もないのに姿勢を正して敬礼した。

農業女神「わたしの少女よ。痛かったでしょう。こんなに酷く縛られて」
閻魔女王「母神様を身替りにして助かりたいとは思いません。それに母神様には神聖食糧を供給する大切な任務が有る筈です。あたしを助けたいと思われたら早く主神様の所へ帰り、オリムポス方が戦に勝つよう他の神々と協力して下さい」

「セバストポリヲ撃テ」
東郷は水雷艇を放って攻め立てた。
十二月十二日午前零時三十分。襲撃開始。
第五水雷艇隊の四隻が先ず魚貫して迫る。

大橋上の海洋女王は三叉鉾を把り延べて魚雷を振り払う。深淵神も海王子も勇戦奮闘。

「セバストポリヲ撃テ」

十二月十三日午前二時三十分。第二十水雷艇隊が襲撃敢行。旅順艦隊最後の戦艦は敢然と反撃。水雷艇三隻が被弾損傷した。

× × × × ×

須佐之男「妻よ。余り無理をするでないぞ」
櫛名田姫「わたしは不覚にも敵の手に落ち、縄目の恥辱を受けました。出雲一族の名誉を取り戻し度うございます」

須佐之男「四箇月以上も縛られ、その間飲まず食わずだったそうではないか。砲弾を無数に浴びた傷も治らず、疲労も回復していないのだろう」

櫛名田姫「今は悉くの神が傷を包んで戦っています。わたしだけが休んでよい筈がありません。それに冬の海こそ我が故郷。海洋女王に遅れはとりません」

× × × × ×

「セバストポリヲ撃テ」

十二月十四日は猛吹雪。午前三時三十分。

雪と波浪を衝いて第十水雷艇隊が突進した。

セバストポリはロシヤ海軍の名誉を一身に負って奮戦。第五十二号水雷艇が沈没し、乗員十八名は結氷点の海中で残らず溺死した。

× × × × ×

櫛名田姫が広鉾を構え、魚雷に飛び乗る。大国主神も魚雷に跨って敵艦へと迫る。

× × × × ×

十二月十五日。吹雪は海に陸に荒れ狂う。

「セバストポリヲ撃テ」

六箇水雷艇隊が大挙して襲来した。

駆逐艦ポープルが被雷して擱坐。

セバストポリは必死に応戦。

第四十二号水雷艇沈没。艇長等六名戦死。

他に七隻が被弾し、五名が戦死した。

× × × × ×

激しい震動で海洋女王は大櫓から振り落された。凍るような黄海へ真逆様。

櫛名田姫は衣裳を脱ぎ、胸と腰に布を巻いただけの軽装で短刀を口に咥え、宿敵を求めて海中深く潜る。

海洋女王も水中で単衣を脱ぎ、身軽になつて掴み掛った。水練巧者の二女神が黄海海底狭しと格闘し、転げ廻る。海面は波浪立ち騒いで飛沫紛々。吹雪が唸る。

セバストポリの艦底を一本の魚雷が噛み破った。遂に戦闘航海力を喪失した戦艦は城頭山下の岩礁に擱坐する。

× × × × ×

櫛名田姫の手練が勝ったか。地中海育ちの海洋女王が黄海の冷たさに屈したか。

日本海の女神は敵手の髪を掴み、咽喉を締め上げて海底に押し伏せた。

× × × × ×

東郷は旅順封鎖を第三艦隊に委せ、主力を率いて佐世保軍港に帰った。艦艇の修理と整備。乗員の訓練。次の任務は封鎖ではない。興廃を一戦に賭けた洋上決戦だ。バルチック艦隊に勝つ手段は唯一つ。射撃精度の向上有るのみ。

× × × × ×

豊受大神と石凝度姫が火を焚いて暖めた。

櫛名田姫は身体を摩擦している。

海洋女王は意識を失って海浜の砂を噛む。

須佐之男「妻よ。よくやった。遂に地中海の女王を捕えたな。身体は異状ないか」

櫛名田姫「出雲一族の名誉を少しばかり取り戻しました。嬉しく思います」

漸く覚醒した海洋女王は自身が既に敵中に在る事を知り、王者としての威厳を保ちながら運命を甘受した。一碗の粥を落着いて食べ与えられた胴着を纏うと自ら両手を背に廻して櫛名田姫の拘束を求める。

海洋女王「すべての軍艦が失われました。既

海洋女王「すべての軍艦が失われました。既

に我が事畢る。今は潔く縄を受けましょう」

× × ×

ロジェ・ストウエンスキーはルーデリッツ湾でケープタウンの新聞を入手し、始めて二百三高地の陥落を知った。

× × ×

ヘーラー主女神「海軍は全滅した如くですが、妾は未だロシヤ軍が負けたとは思いませんぞ」

アテナ軍女神「コンドラテンコは健在です。彼さえ生きていれば旅順は陥ちません。わたし達で守ってやりましょう」

× × ×

旅順随一の名将コンドラテンコは東鶏冠山北堡壘に在って孤城を守る。防戦五箇月余。老将の額に苦悩の皺が又も一本刻まれた。

併し不屈の闘志は衰えない。今日も戦線を巡って指揮を執り、戦い終って一曹長に自らゲオルギー勲章を授けた。日本軍の塹壕に斬り込んで殊功を顕した勇士である。名将の下に此の勇卒有り。

× × ×

月読神「東鶏冠山北堡壘の後方にペトン造りの穹害が有るだろう」

須佐之男「見えるぞ」

月読神「中に居る人物が解るか」

須佐之男「コンドラテンコ少将と、其の幕僚達らしいな」

月読神「あの男が生きている限り旅順は陥ちないそうだ」

須佐之男「よウシ。今に見て居れ」

× × ×

二十八糎榴弾砲が轟然と鳴る。夜空を劈く錆色の閃光。

鍛甲榴弾は天空に弧を描いて飛翔する。

× × ×

参謀長心得ナウメンコ中佐が地図を開き、日本軍の接近状況を説明する。掘進する坑道は間もなく堡壘直下に達するであろう。老将は卓上に肘をつき、幕僚の話に聞き入る。

× × ×

「コンドラテンコ少将が危い」

アテナ軍女神は見た。東鶏冠山北堡壘の司令部に向って飛ぶ巨弾と、それに跨った須佐之男神の姿を。

アテナ軍女神は雲上より一跳躍。戦袍を蹴えし、金柄槍を輝かせて舞い下りる。

× × ×

コンドラテンコは突然、頭を上げた。

如何なる殺気を感じたものか。

「来るぞ。諸君、聞えるか」

これが老将最後の言葉だった。

十二月十五日午後九時。二十八糎榴弾は司令部の入口に命中して此の室を爆砕した。

× × ×

アテナ軍女神は爆風に煽られて横転。身を以て巨弾を阻止せんとするも一瞬及ばず。

× × ×

コンドラテンコは頭蓋を砕かれて即死。

ナウメンコ中佐以下十三名の幕僚も將軍を囲む位置で同じ枕に斃れた。

× × ×

アテルヘーラー軍女神「主女神様。何処においでです。眼が見えなくなりました。お導き下さい」

爆発を顔前に浴びて眼を灼かれ、一時的に失明したのだ。甲冑も戦袍も破れ、美貌は焼けて煤け、金柄槍も折れ失い、右脚を曳き擦りながら北堡壘前を行方定めず彷徨する。

須佐之男「其処な女神よ。勝負を所望する」

オリムポス随一の女傑は苦境に屈せず受けて立ち、大手を拡げて挑戦に応じた。併し眼は見えず、片脚は利かず、武器も無い。

須佐之男は相手が素手なのを見て自分も剣を捨て、猛然と組みつく。緒戦以来の宿敵。

二度迄も恥を掻かされた仇。山をも抜く金剛力を奮って捻じ伏せに掛ったが、意外も意外

軍女神は脆くも地に崩れ、殆んど無抵抗で須佐之男神の膝下に押し倒された。

須佐之男は相手の両腕を背に廻し、手早く縄を走らせる。そして勝利に歓喜しつつ虜囚を引き起したが……。

軍女神「無念です。常の身体ならば斯かる恥辱を受けなかったものを」

須佐之男「何だ。俺は盲で跛の女を縛って喜んでいたのか」

軍女神「眼だけでも見えていたら其方如きに敗れたりしません。ああ口惜しい」

軍女神の見えない眼から涙が一筋流れた。須佐之男「同情するよ。併しこれは戦争だ。諦めて貰おう。君の武運が無かったのだ」

軍女神「わたしとても戦の法を知る者。敗れたからには勝者の権利に服従しましょう。何処へなりと、お曳き下さい」

須佐之男「そうしよう」

軍女神「でも、涙だけは拭いて下さいね」

十二月十七日。バルチック艦隊はアフリカ南端の希望峯に向け嵐の中を難行していた。

主女神「噫。旅順のヘクトルが遂に死んだ。フォーク中將が代ったが、彼にコンドラテン

コと同一の手腕を期待する事は出来ない」

此の時、突如として脚下に踏まえた東鷄冠

山北堡壘の大地が裂けた。鍛冶工神の火山噴

火よりも烈しい火焰奔騰。主女神は撥ね上げられ、次いで雨降する土砂の底に埋没した。

十二月十八日午後二時十五分。東鷄冠山北堡壘直下に坑道を掘り進めた日本軍は藥室八箇所に二千三百五十瓩のピクリン酸を装填し

全山砕けよと大爆破を敢行した。

主神「東鷄冠山北堡壘が爆発したぞ」

商業神「主女神様も軍女神殿も行方不明」

主神「それは大変だ。一同救援に赴け」

勝利女神「心得ました」

ヘルクレス「お任せ下さい」

観戦武官バートレットは斯く書き記した。

「巨大な雲がチー・クワンの外堡を掩った。やがて硝煙散じて見れば高い勾配を持った要塞は完全に消滅し、V字型の大穴が見えた」

昏睡中の須勢理姫が大爆音で覚醒した。柱の上に高く縛られた位置から更に首を伸ばして東鷄冠山北堡壘を眺める。

——軽砲線も胸墻壁も崩壊した。併し後方の歩兵營には予備隊一箇聯隊が健在だ。——

爆破は強力に過ぎた。堡壘直下に待機していた第一突撃隊六十名は土砂の下に埋没。日本軍は爆破と同時に突撃する機会を失った。

第二、第三突撃隊が後方より駆け出したが進路は岩石に埋められて登攀困難。

ロシヤ軍の予備隊も迅速に展開する。爆破跡の噴火丘を何方が先に占拠するか。

商業神、勝利女神、ヘルクレス、暁女神、歴史女神、叙事詩女神が楯を連ねて防戦。

須佐之男神、月読神、猿田彦、邇邇芸尊、科戸神、大国主神が此処を先途と攻撃。

ロシヤ軍の方が僅かに早く噴火丘を占め、機関銃を据えて掃射した。日本軍損害続出。

突進の氣勢、正に挫けんとする。

第十一師団長鮫島中將は自ら軍刀を振って先頭に立ち、月光を浴びつつ胸墻上に直立。

後備歩兵第三十八聯隊は軍旗を捧持して堡壘内庭に突入し、爆弾を投じて攻め立てた。

虹女神「東鷄冠山北堡壘が陥ちそうだわ」

青春女神「主女神様と軍女神が守っているから簡単には陥ちない筈よ」
 狩獵女神「一寸見て。その軍女神が縛られて曳かれて来るわよ」

閻魔女王「あの強い軍女神が何故縛られたのかしら。信じられないわ」

虹女神「まあ。眼が見えないのね」
 狩獵女神「足も怪我しているらしいわよ」

青春女神「可哀想な軍女神」
 閻魔女王「軍女神が縛られるようではもう駄目ね。あたし達、負けたのだわ」

午後十一時。北堡壘の危急を知ったゴルバトフスキー少将が援軍を率いて急行する。併し守兵は既に潰走を始めていた。フォーク中將は維持不可能と見て退却を命令したのだ。若しコンドラテンコが存命していたら最後の

一兵に至る迄抵抗を命じたに違いない。而して東鷄冠山北堡壘の陥落は全要塞急速崩壊の端緒となった。

北堡壘の廢墟から主女神が姿を現した。砲身やペトンの破片を掻き分け、土砂岩石を押し除け、喘ぎつつ辛くも地表に這い出して蹲る。併し全身打撲、足も腰も立たず、衣裳は

焼け失せ、意識は朦朧。

月読神がオリムポスの副将を発見した。抵抗も脱走も出来ない主女神は為す処も無く取り抑えられ、後ろ手に縛られた。

十二月十九日夕方。バルチック艦隊は大颶風吹き荒れる中でテーブル山脈の嶺を見た。十二月二十日午前二時。ロジェストウエンスキーは希望峯を廻って印度洋に入った。

両手を背に高く縛られ、胸に緊しく菱縄を掛けられた主女神が月読神に曳かれて来た。後ろ手に縛られ、正坐させられ、縄尻を杭

に繋がれた捕虜達が騒然となった。

閻魔女王が泣きだした。

青春女神は駆け出そうとして後に倒れた。

虹女神が絶望の叫喚をあげた。

狩獵女神は縄目の下で身を震わせ、

海洋女王は黙然と頭を垂れ、

眼の見えない軍女神は気配で察し、雄偉な

巨軀を揺すりながら無念の唇を噛む。

青春女神「母神様。何と情ない御有様」

虹女神「ああ、お悼ましい。女神の総領様」

閻魔女王「悲しい。もう、お終いだわ」

狩獵女神「主女神様が最後の頼みなのに」

海洋女王「口惜しいわ。残念だわ」

軍女神「主女神様も縛られておいでですか。お姿は見えますが、わたしは眼の見えない事を寧ろ幸に存じます」

主女神「最後迄希望を棄ててはなりません。高天原勢の総帥たる太陽の女神は傷つきま

た。妾は不運にも捕われましたが、御味方には商業神も勝利女神もヘルクレスも残って居

ます。主神様の右手さえ元通りになれば決して負けはしません。地上を御覧なさい。二竜

山も松樹山も健在です。旅順の城は戦い続けています。身は縛られても御味方の勝利を信

じて待ちましょう」

第九師団の工兵隊は二竜山堡壘の直下に向い坑道を掘り進めていた。ロシヤ軍もこれを察して妨害を試みる。作業が外壕内壁に接して行われるので高い砲台からは死角に入

って俯射出来ない。防禦側は大きな反射鏡を突き出して壕底を映し、爆弾を紐で吊して発火

させた。地底からは対坑道を掘進する音が聞え

向うが一鍬打つ毎に此方の坑道壁から土石が

落ちる。若しロシヤ軍が先に爆破を行えば三

箇月の地底作業は水泡に帰すのだ。日本軍は

坑道完成を急いだ。

白玉山の地底に縛られて埋められた木花開
 耶姫が全神経を耳に集めて気配を窺った。
 ——坑道作業の音が止んだ。爆破準備が終っ
 たのだろうか。——

十二月二十八日午前十時五分。

日本軍は二千九百五十挺の黄色薬を二竜山
 直下に埋設し、これに電流を通じた。忽ち起
 る大爆発。地軸を砕く大音響と共に爆煙天に
 沖し、鉄骨、ペトン、武器、木材、土砂岩石
 から守備の兵士に至る迄、微塵と化して天空
 に飛散する。堅固を誇った二竜山堡壘の軽砲
 線を含む外壁八十五米が一時に崩壊した。

強烈な地震波が木花開耶姫を襲った。
 手足を挫き、胸廓を押し潰す程の苦痛。
 白玉山の全重量が縛られた全身を圧迫。
 木花開耶姫は眼鼻から血を噴いて悶える。

東鷄冠山の経験を生かした第九師団は厚板
 を以て土石を防ぎ、五分後に突撃開始。

併しロシヤ軍も前回の経験を活用した。爆
 破と同時に駆け出した予備隊は重砲線から噴
 火丘に展開し、機関銃を並べて乱射する。

ヘルメス、オローラ、グイクトリア、
 商業神、暁女神、勝利女神、ヘルクレスが
 堡壘を守って懸命に防戦。

歴史女神、叙事詩女神、農業女神等の非戦
 闘員も協力して最後の抗戦を試みる。

須佐之男神、月読神、邇邇云尊、科戸神、
 大国主神、櫛名田姫、猿田彦の諸神、力を尽
 くして攻め登る。中でも猿田彦は真先駆けて
 天之逆鋒を打ち振り、勝利女神を只一と突き
 に刺し倒した。

日本軍は外壕内に山砲を搬入し、敵前三十
 米で零距离射撃を開始した。爆弾を持った決
 死隊は両側に迂廻して奇襲を敢行。ロシヤ軍
 は遂に堪らず潰走する。

午後七時三十分。二竜山堡壘遂に陥落。
 ロシヤ軍の残兵は周辺の小堡壘に拠って抵
 抗を試みたが、それも十二月二十九日午前六
 時迄に掃蕩された。

ゼウス、グイクトリア、
 主神「勝利女神が討たれたのか。不吉だな」
 オローラ
 暁女神「未だ半数の神が健在です」
 ヘルメス
 商業神「松樹山堡壘も残っています」

十二月二十九日。バルチック艦隊はセント

マリー島に停泊した。

ロジェストウエンスキーは九昼夜艦橋を離
 れず艦隊の指揮を執った。時々椅子に掛けて
 一時間程仮眠しては又起きて部署に就く。彼
 は本来頑健の質ではない。経歴も海上勤務よ
 りは軍令部員として赤煉瓦の方が永かった。
 憔悴が目立つ。だが戦意と責任感は今旺盛。
 「旅順は未だ陥ちていない。急げば間に合う
 だろう。ディゴスワレズで炭水補給と整備点
 検に十日間。一月十日に出航し、スマトラ島
 ランポンに向う。此処から黄海へはノンス
 ップで直航するのだ」

柱に高く縛られた須勢理姫が、刻々好転す
 る情勢に希望を燃やして自ら励す。

——日本軍の前線が接近した。オリムポス勢
 は疲弊している。救出が来る迄頑張れ。——

ロジェストウエンスキーは生鮮食糧の大量
 購入を命じた。肉類は三倍に騰貴した。艦隊
 司令部には巨額の請求書が廻り、即金で決済
 された。艦隊主計将校が同僚に向って心配そ
 うに訴えた。

「此の支払を命令したのは長官だ。僕は計算
 したに過ぎない。併し長官は真先に戦死なさ

るだろう。大蔵大臣に呼ばれて説明するのは僕なのだ。其の時に何と言わなければならないか」此の心配は杞憂に終わった。翌年五月二十七日。彼は戦艦アレクサンドル三世と共に日本海の底深く沈んだのだ。

× × ×

主神「漸く将来が見えて来た。旅順の運命はあと三日だな」

商業神「我々は何の目的で旅順を守ったのでしょうか」

主神「ロマノフ家がギリシャの後裔を以て自ら任じているから義に依って援助したのだ」

商業神「それは表面の口実だと思います」

主神「武勲と冒険が目的だったかも知れん」

商業神「余りに多い支出でした」

主神「戦争目的を理解しない軍隊は弱いな。装備や兵力が優れていても最後には敗れる。神も人間も同じだ」

× × ×

明治三十七年も漸く暮れようとする十二月三十一日の午前十時。第一師団が松樹山堡壘を爆破した。ペトンの厚さを測って火薬量を増大した効果は充分。予想通り全堡壘が崩壊して余波補備砲台に及び、守備兵の大部分は飛散埋没して僅少な生存者は全く戦意喪失。

× × ×

愛神「ママ。敵が攻めて来るよ」

麗美女神「腰が抜けて立てないの」

愛神「早く逃げないと又縛られて了うよ」

麗美女神「助けて。置いて行かないで」

愛神「あ、敵が来た。僕、逃げるよ」

麗美女神「待って。ママを見棄てるの」

愛神「ママは重くて背負えないもの」

麗美女神「行っちゃった。何処に隠れよう」

× × ×

第一師団が殺到した。迅速に堡壘咽喉部を閉塞して守備兵の退路を断つ。生存者百五十名は白旗を掲げて降伏した。

× × ×

逡巡芸尊がペトンの蔭に白く丸い物体を発見した。何だろうと疑いながら剣尖で突くと忽ち金髪美女が跳び上って泣きだした。どうやら麗美女神の髻だったらしい。余り大きな泣声に天孫の方が驚いた。併し肉体美女は抵抗も逃走もせず只泣くばかり。逡巡芸尊は呆れながらオリムポス十二神の一女神を後ろ手に縛りあげた。

須佐之男「やったな。其奴は主神の娘だぞ」

逡巡芸尊「こんな弱い敵を捕えても手柄になるのですか」

× × ×

旅順城内には多くの婦女子が兵と共に籠城していた。戦火は彼女等の上にも及び、西港の海浜で縋帯を洗っていた六名の貴婦人は一発の砲弾で着衣の断片も留めずに飛散した。日本軍は東西の防禦線を突破し、新旧両市街は避けようもない砲火に曝されている。

ロシア婦人の何人かは軍服を着て男装し、銃を把って第一線に参加した。桜井忠温は「日本兵百七十人を射殺して戦死した将校夫人」に就いて記している。

× × ×

麗美女神「わたしは非戦闘員よ。縛るなんて酷いわ。国際法違反よ」

狩獵女神「見苦しいわよ。余り騒がないで」

青春女神「交戦地区内で武器を持って捉ったら戦時捕虜と見做されるのよ」

虹女神「従軍しなければ良かったのに」

麗美女神「嫌よ。許して。解いて頂戴」

猿田彦「口に封をしてやろう」

麗美女神「うー」

× × ×

大晦日の夜が更けて行く。ステッセルは白玉山の司令部に於て将官会議を召集した。列席する者スミルノフ、フォ

× × ×

ーク等陸軍将官九名。海軍提督ウイレン、ロ
スチンスキー。赤十字総監バラシヨフを加え
て総員十二名。併し未だ椅子が二脚空いてい
る。ステッセルの左右。上座に当る席だ。

「其処は軍神と聖母の席でしようか」

工兵部長ナデイン少将が聞いた。

ステッセルは眼頭を抑えた。

「此処はコンドラテンコ將軍とウイトゲフト
提督の席だ。さあ諸君、会議を始めよう」

× × ×

縛られて白玉山の底に埋められた木花開耶
姫が頭上の人声を聞いている。

東正面本防禦線は突破された。

三大永久堡壘は悉く陥落。

六千床の病院に充満した傷病兵は二万。

食糧欠乏。殊に生糧品皆無。壊血病続出。

健全なる正規兵は一万三千を余すのみ。

抗戦手段は市街戦しかない。これを行えば

市民と傷病者の全部が犠牲となるだろう。

それに依って得られる持久期間は十日。

抗戦継続か。開城か。

× × ×

須佐之男「姉神。お氣がつかれましたか」

天照大神「今日は何日ですか」

月読神「大晦日の夜半を過ぎました。明治三

十八年一月一日です」

天照大神「戦況は何うなっています」

須佐之男「お喜び下さい。主神の正妻と末娘
を捕えました。御味方大勝利ですぞ」

天照大神「下界の模様は」

月読神「東鷄冠山も二竜山も松樹山も陥ちま
した。日本軍は望台に向って前進中です」

天照大神「手を貸して、起して下さい」

須佐之男「その傷で無理をなさってはいけま
せん。戦は我々にお任せ下さい」

天照大神「今日は正月元旦です。日本軍の上
に初日を輝かせてやりたいのです」

× × ×

大ロシヤ帝国の名誉か。人命尊重か。

議論は白熱して決しない。

終夜の討議にステッセルもスミルノフも疲
れ果てた。

「もう朝だ。一旦休会して熟慮しよう。今日

はロシヤ暦十二月十八日。日本の太陽暦では

正月元旦に当る。太陽信仰に篤い日本人にと

っては神聖な祝日だ。多分今日一日は攻撃を

休むだろう。再考の時間はある」

ステッセルの言葉が終らぬ間に一発の巨弾

は港務局附近で爆発した。続いて一発。又一

発。市街地に、港区に、白玉山に砲弾飛来。

「何事だ。昨日の松樹山爆破に続く猛砲撃」

ステッセルは愕然と立ち上る。

「単なる威嚇射撃ではありません。一定時間
間隔で三発宛行う効力射。怖らくは総攻撃の

準備射撃。日本軍は砲撃直後に突撃を開始し

今日中にも旅順市街に突入するでしょう」

砲兵部長ベールイ少将が所見を述べた。

× × ×

天照大神が剣を杖に立ち上った。

重い雲を破って明治三十八年正月元旦の初

日が旅順の上に輝き、白銀に掩われた戦場を

隅々迄照らし出した。

× × ×

三門の重砲が白玉山に砲口を向けている。

日本軍は東方遥拝の為に整列。

正装の砲兵司令官豊島少将は折から昇る初
日に指揮刀を輝かせて号令する。

喇叭たる喇叭の奏楽。肅然たる捧銃の礼。

殷々たる砲声。百一発の皇礼砲は実弾を以

て発射されつつあった。

× × ×

暁女神「ステッセルが開城を決意しました」

主神「止めても無駄だ」

× × ×

一月一日午前七時。日本軍はH砲台を占領

し、更に進んで盤竜山新砲台も奪取した。

だが東正面本防禦線の最高地点望台は依然
ロシア軍の手中に在り、旅順城東城壁の隅櫓
にも比すべき制高点は厳然全要塞を見下す。

午前九時十分。第一、第九師団は競進して
総突撃を敢行。掩護射撃下に中腹へと迫る。

山頂のロシア兵は消耗して残兵僅か五名。

日本軍は怒濤の如く押し寄せた。午後三時
四十五分。望台遂に陥つ。第一回総攻撃以来
百三十一日目にして再び日章旗は此の山に翻
えり、最後迄奮闘した五人のロシア兵は其の
部署に於て斃れた。

× × ×

須勢理姫「父神様」

須佐之男「よく耐えたな。戦は勝ったぞ」

縛を解かれた須勢理姫は須佐之男神の腕の
中で意識を失った。

× × ×

ロシア軍は東鶏冠山高砲台を自ら爆破して
退却した。旧固壁、盤竜山第一、第三堡壘。
東鶏冠山第二、第三、第四堡壘等、日本軍を
悩ませ続けた東正面本防禦線の諸壘が一斉に
陥落し、日本軍は市街と白玉山に迫る。

× × ×

縛られて黄金山の崖に吊られた豊玉姫が白

玉山の方を見ている。

——レイス参謀長が通訳マルチェンコ中尉を
伴い、白旗を掲げて司令部を出た。——

× × ×

午後四時三十分。ロシア軍の軍使は旅順開
城を申し入れた。

× × ×

「旅順街道に白旗が見えるわよ」

狩獵女神が叫ぶと同時に泣きだした。

「開城するのね。とうとう」

軍女神は縄に縊れた巨軀を揉んで歎く。

地下の美少女閻魔女王は細い肩を慄わせて

泣き伏した。

虹女神と青春女神は声をあげて悲しむ。

主女神と海洋女王は縛られていながら胸を

張り、威厳を保ちつつ屈辱と悲歎に耐える。

涙は浮べても溢れさせはしなかった。

軍女神に劣らぬグラマーの麗美女神だけが

独り異り、先刻から敗戦よりも身の苦痛を歎

き続けている。併し狼轡に遮られて呻き声が

洩れ聞えるのみ。

× × ×

一月二日午前九時。日本軍は停戦を受諾。

× × ×

商業神「下界では休戦が成立しました」

主神「高天原勢に媾和を申し入れよう。余も
妻や娘達を取り戻したいよ」

× × ×

ロシア軍の青年将校二名が自決し、旅順攻
防戦最後の犠牲となった。

× × ×

主神「余はロシア軍を見離した」

暁女神「するとクロパトキンの運命は」

主神「沙河で対陣中の両軍は解氷期と共に激
突する。旅順を陥して北上した乃木の軍が勢

力均衡を破って日本軍の勝利となるだろう」

商業神「ロジェストウエンスキーの艦隊は」

主神「旅順が陥ちて予定が狂い、石炭補給に

苦しみ、極東到着は五月末になる。東郷は戦

備完了して待ち、ロシア艦隊は大敗しよう」

× × ×

旅順の大要塞戦は終わった。

攻城に従事した日本軍は後方勤務員を含み

累計十三万。その内一万五千四百が戦死し、

四万四千八人が負傷した。(但し同一人が三

回負傷した例や、二度傷つき三度目に戦死し

た場合等を多く含んで通算している)

ロシア軍の戦死者一万八百。この中には非

戦闘員の犠牲を含まない。

城を出て降る者四万一千六百四十一名。そ

の内一万九千六百六十五名が傷病者であり、義勇兵及び水兵を除く健全な要塞要員は一万二千七百七十五名に過ぎなかった。

接收された食糧は麦及び麦粉二十七日分。雑穀二十三日分。肉缶詰一日半分。野菜類は皆無。バターは無くて胡麻油で代用した。要するに蛋白も脂肪も尽きていたのだ。(大豆だけは多量に残っていたがロシア人は萌^{モヤシ}を作^{モヤシ}ってビタミンを得る方法を知らなかった)

日本軍の手に入った堡塁砲台五十九箇所。捕獲兵器は各種大砲五百二十四門。小銃機関銃三万六千六百二挺。軍刀千八百九十一口。砲弾二十万六千七百三十四発。銃彈五百四十万三千二百四十四発。馬千九百二十頭。車輛八百九十六台。火薬三十噸。爆彈千五百八十八箇。水雷六十箇。探照燈十四基。通信機百五十二台。艦艇二十隻。船舶三十五隻。其他馬具、土工具、被服等莫大量に上る。

エーゴン・アイスは記した。

「旅順開城は一四五三年コンスタンティノポリス陥落以来最初の有色人種に依る白人強国城塞攻略だった」

以来五十年。これに匹敵する大事件は一九四二年のシンガポール、及び一九五四年のデイエン・ビエン・フーを除いては起っていない。

い。

科戸神「オリムポス方の軍使が来ます」
猿田彦「橄欖樹^{オリブ}を持っています」

× × × × × × × × × ×

天皇陛下は参謀総長山県有朋を召された。

「旅順に於ける敵国將兵の名誉を尊重せよ」

オリムポス方の軍使は商業神と暁女神^{ヘルメス}。

高天原の正使は月読神。副使は豊受大神。

暁女神「捕虜の交換を提案します」

月読神「我方には八神を捕えてある。受取るべきは三神。何を以て償うか」

商業神「旅順を含む満洲の四十年に亘る支配権では如何」

× × × × × × × × × ×

一月五日。水師營で乃木、ステッセル両將の会見が行われた。

乃木は敵將に勲章、帶剣を許し、自ら手を伸べて握手を求めた。武士道は生きていた。

ステッセルは乃木の二子が戦死した事を悼み、日本軍の勇氣を賞揚した。

乃木はロシア軍の堅守を称えた。アメリカの新聞記者が写真撮影を申し出た時は「敵將に無礼である」と言つて峻拒した。

「斯かる仁徳篤き將軍に敗れた事を恥辱とは思わない」

ステッセルは感謝して自身の乗馬を乃木に献じた。

此の美談を昭和十七年のシンガポールと較べて見るがよい。噫、明治は遠くなつた。

× × × × × × × × × ×

西港の泥中から天宇受女^{あめのうずめ}が引き揚げられ、二百四十八日目で枷類を外された。

白玉山の底から木花開耶姫が掘り出され、二百二十五日目に鎖を解かれた。

黄金山の崖から逆吊りにされていた豊玉姫は四十一日目に降されて自由を回復した。

三神共、自力で立つ事は出来なかった。

愛妻家兼恐妻家猿田彦は嘗ての超グラマーを軽々と抱き上げながら号泣した。

邇邇芸尊は妃を背負った。久しく闇中に幽閉されていた木花開耶姫は未だ眼を直射日光に曝せず、眼隠しを掛けた俤なので涙を誰にも見られずに済んだ。

老いた大綿津見神は体格の優れた娘を支えられなかった。櫛名田姫が肩を貸した。三神は揃つて故郷なる海へと帰つて行く。

× × × × × × × × × ×

全世界が旅順の攻防両者を賞讃した。

ドイツの皇帝ウイルヘルム二世は、乃木、ステッセル両将に鉄十字勲章を贈った。

× × ×

オリムポス方の捕虜達が縛を解かれた。主神は主女神を優しく迎えた。

ヘルクレスが青春女神を抱き上げた。

農業女神は閻魔女王と固く抱き合う。

深淵神は海洋女王を撫でながら新しい衣裳を着せている。

を

暁女神は仲の良い虹女神の手首を揉んだ。

天涯孤独の軍女神は失った武名を恥じて誰にも会いたくないようだった。商業神が励ましながら手を曳いてオリムポスへと向った。

狩猟女神は身内の者が誰も来ていないので寂しそだった。学芸女神達の叙事詩女神と歴史女神が寄り添って慰めた。

麗美女神だけが例外だった。後ろ手に縛ら

れ、裾を捲られ、裸に剥かれた美しい臀を皆の前で打ち叩かれた。

麗美女神「痛い。もうしませーん。戦争は懲々です。今後は穏和しく留守番します」

鍛冶工神「三千年前にもたしか、同じ事を言ったぞ」

麗美女神「ぜったいに今度こそホントです。わぁーん」

ステッセルは降伏の責任を問われ、軍法会議で死刑を宣告された。乃木は文書を送って弁護し、旅順は兵尽き食尽きて陥ちた事を証明した。

ステッセルは無罪になったが軍籍には戻れず、茶の行商となって余生を送った。

高慢な総領女神が今日は神妙にしている。

× × ×

「伝言板」○分譲品目録は作成が大変遅れておりますが予約お申し込み下さった方には出来次第間違ひなく発送申し上げます。○分譲品のお申し込みは大阪阿倍野郵便局私書箱第14号箕田京二宛に願います。○従来本誌上に広告しておりました代理部分譲品はここ二年乃至三年ぐらい以前のものは在庫

してありますから未入手の方はお申し込み下さい。○尚御注文はすべて△略号▽にてお願いいたします。○切手代用にての御送金も結構ですが高額切手や紙に貼りつけたものはお断りいたします。○本誌旧号の在庫は漸次減少しておりますから、御希望の方はお早目にお願ひします。第二希望品がございましたら、お書き添え下されば幸いです。

戦に敗れ、捕えられ、縛られて高い気位も挫けたか。

主女神「妾がお奨め致し、三千年を越えて遠征した戦にも拘らず不覚の敗を蒙り、妾さえも捕われて恥を晒しました。申し訳ありません。如何なる御仕置も覚悟致して居ります。

お心次第、縛るなり打つなり御存分に」

主神「敗れはしたが愉快な戦だった。二百年経過し、ロマノフ朝が倒れ、日本帝国が変貌した後に、此の戦を歌った叙事詩が生れるだろう。それこそは人類最後の神話、最後の英雄伝説だ」

主女神「最後の神話と仰言いますか」

主神「そうだ。神々の時代は終りつつある。二十世紀は始まったばかりだが我々の住む世界では無いようだな」

主女神「これから如何なさいます」

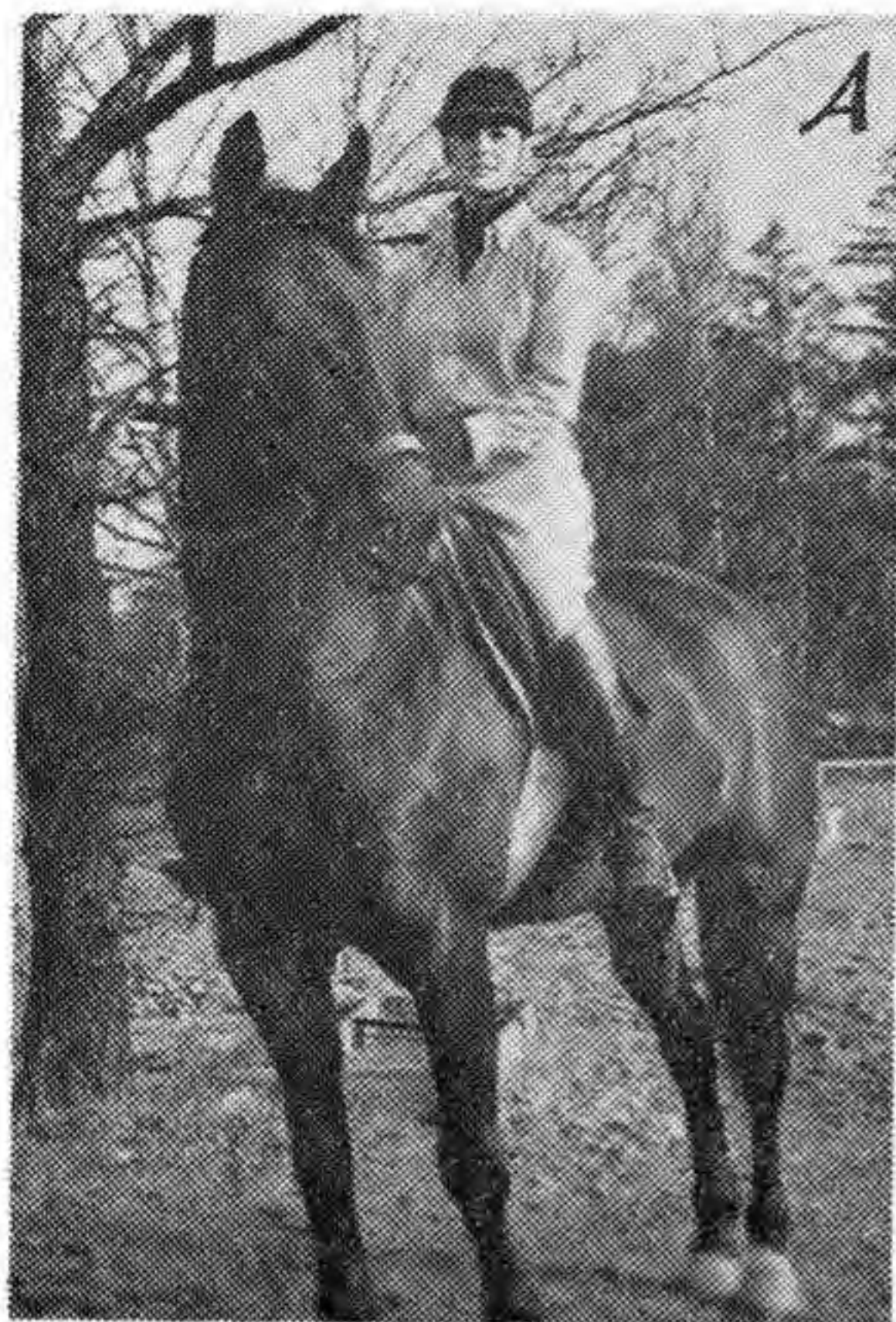
主神「三千年の昔に戻ろうよ」

× × ×

明治四十五年七月三十日。明治大帝崩御。大正と改元された九月十三日。発輩と同時に乃木は殉死した。

乃木大将自刃と知ってステッセルが香奠を送って来た。署名は「モスクワの一僧侶」と書いてあった。

終



新 女 性 乗 馬 考

佐野 寿

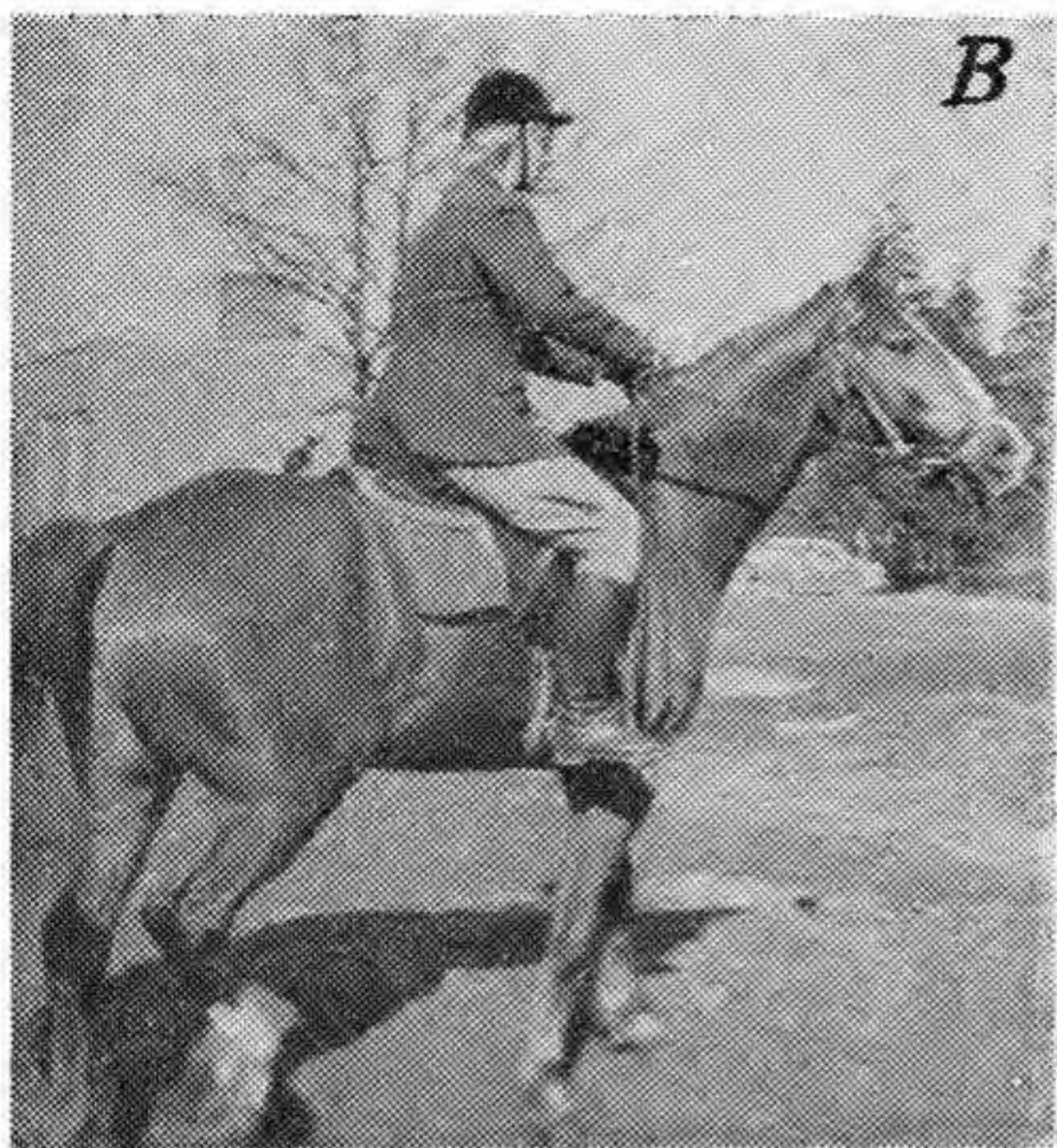
十九世紀から二十世紀の初頭にかけて現われた一つの傾向に女性の地位が特にヨーロッパで上昇したし、殊に女性の風格が一段と自由になった。

その中でも特記すべきことは近年になって乗馬が若い女性の

間でも熱愛され、西欧諸国ではどの乗馬クラブも若いBG達で一ぱいであり、まことに喜ばしいことである。

ここではイギリス、北欧等についての最近の女性乗馬マニアについて考えたいと思う。彼女等がこのようにそれを熱愛するのは、女性としての強力な、時には母性愛の変形したものの現われとして解釈できよう。

時々北欧等の白樺の人気のない森を散歩していると、けたたましい馬蹄の響とともにギヤロップしてくる方を見ると、乗り手は、しばしば美しく若い、しかも凛々しい女性であり、その金髪を後になびかせ、足には新しい光沢のある拍車のついた長靴を穿き、半メ



ートルほどの鞭を持っているのに出会うと、誰しも胸がときめき、気品のある乗り手を見ると、心臓の高なりを押さえることはできない。

私もコペンハーゲンの郊外の、こんもりとした森のある野外公園で時々、幸運にも以前から見たいと思っていたアマゾンに出会い、ハッとしたことを思い出す。勿論、馬はかな

りよく田舎で調教されたおとなしいものが多いが、(何分あちらの馬は大きく、いつも従順とは限らないと思う)そこはさすがデンマークの女騎手で、たくましい肉体、股、太腿腰など、いずれを見ても発達きわめて著しく馬どもをギューギュー征服してしまうのである。これを見ると、男性は少からず心持よいショックを受けること間違いない。

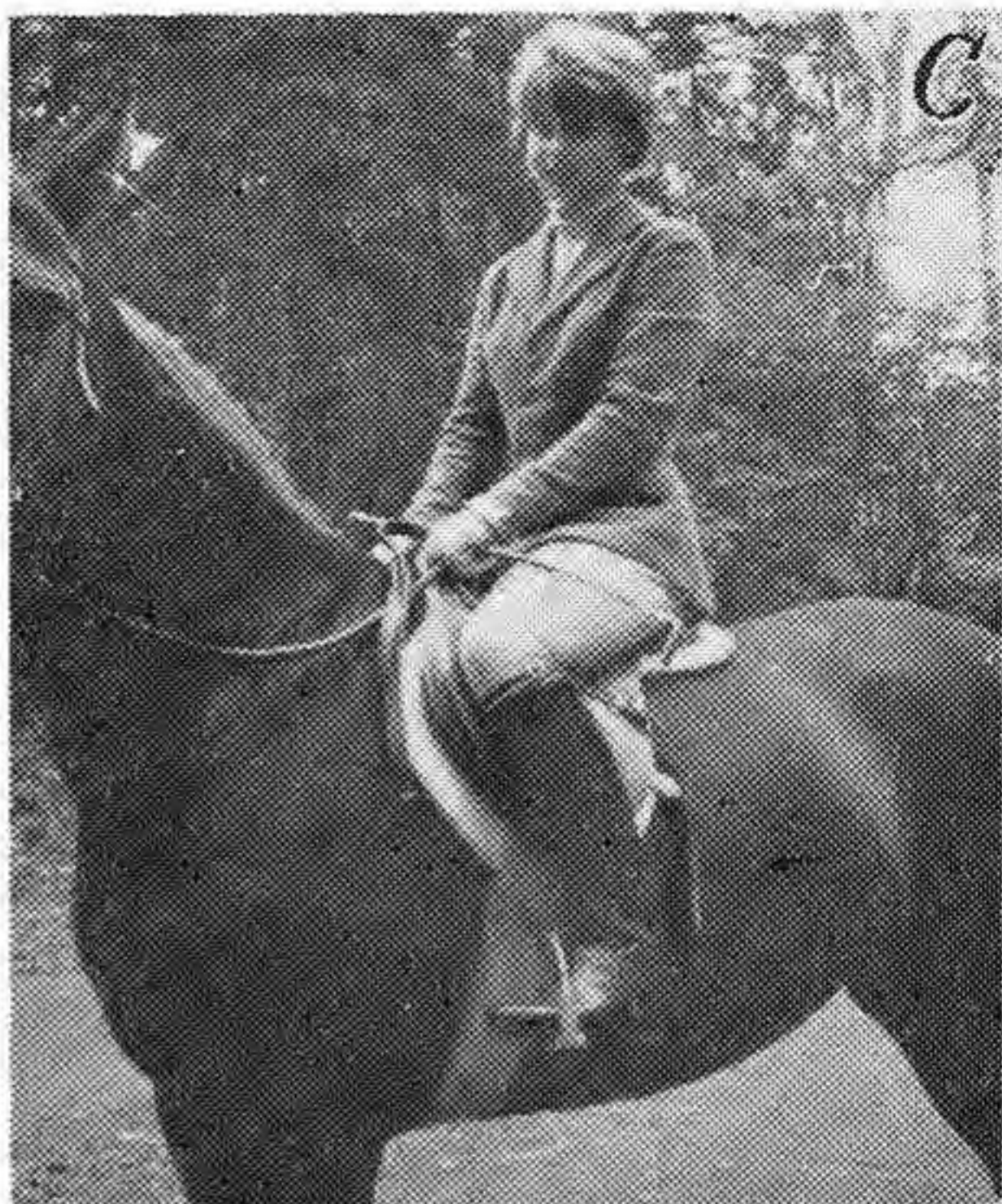
その一人で、アグネタという二十二才の女子大生はコペンハーゲン大学の四年生になり馬術部のキャプテンをしている。容貌の美しいのは無論だが、その青緑色の目は、いともいわれぬ聡明さを呈しており、ごく薄いブロードをした長身の女である。彼女は七年前に試みに乗馬を始めたのが病みつきになり、それ以来非常にしばしば馬を責める恍惚感と、ある優越感のとりこになり、いつも馬場に通っている。

速歩、ギャロップは、お手

のもので、障害物競走もきわめて得意で、一メートル八十という高さもとび越え、二、三度、コペンハーゲンの婦人クラブ大会で優勝している。彼女は、もう直ぐ卒業で大学では古代美術を専攻しているが、その成績もすこぶるよい。アグネタには、二十七才になる女医をしている姉があり、彼女も又、馬のベテランである。非常にオテンバ娘で、何十回と落馬しても懲りず、三回も骨折しながらまだ続けている。

姉はリネアといい、アグネタと並んで女丈夫で、夏休みにはデンマークの田舎で馬の調教。勿論、これは危険な仕事で、野性に近い荒馬を乗馬にするために、いくども繰り返し乗りこなさなくてはならぬ重労働であり、危いのであるが、リネアははち切れんばかりの喜び、スリルを持って荒馬を乗り廻し責めつくし、馬がくたびれてぐったりするまで二時間も三時間も、いや長い時は半日も同じ馬を息もつかせず乗り廻し、彼女には時間のたつのを忘れるほどに楽しくスリルに富んだものと思われた。

アグネタの話によると、今コペンハーゲン乗馬学校のサラブレッド種に近いメテロニー



タという馬も、リネアによっておとなしい馬にさせられたそうさ。

三年前の夏に、メテロニータは田舎に放牧されていたが、七月下旬のある午後、とうとうアグネタとリネアに皮ひもで取りおさえられ、くつわを嚙まされてしまった。三メートル以上もある鞭と皮ひもで、アグネタがその馬を逃げないように取りおさえ、リネアが軽快な新式のあぶみのついた鞍をのせてしま

った。もうそうならたら馬はどうにもなるまい。リネアは長身を和して難なく馬に跨ってしまった。長靴の拍車が鋭い光を一瞬、放ったかと思うと、リネアは全力をこめて馬腹を蹴り込んだ。今やロデオにも勝るような激しい格闘が始まり、一種の殺氣が立ちこめた。馬は立ち上ってリネアをふるい落そうと試みるが、その都度、激しい拍車が馬腹の筋肉に深くくい込むように加えられ、長い鞭で馬の

首筋と尻をしたたか叩きのめし、馬は反抗したが、もっと激しく責められてしまった。十年以上のベテランのリネアは、今やそのテクニクも最高に達し、馬も彼女をふり落すことは不可能で、ついにやや疲労の色を見せ、全身すでに汗ばみ、馬の口は白灰色の泡でいっぱいになった。

一方、アグネタも少しおとなしくなった荒馬に乗ってみたいくなり、リネアの乗っている

馬の方へ近づき少し休ませ草を喰べさせた。微風が心地よく吹き、二人の金髪が美しくたなびいた。

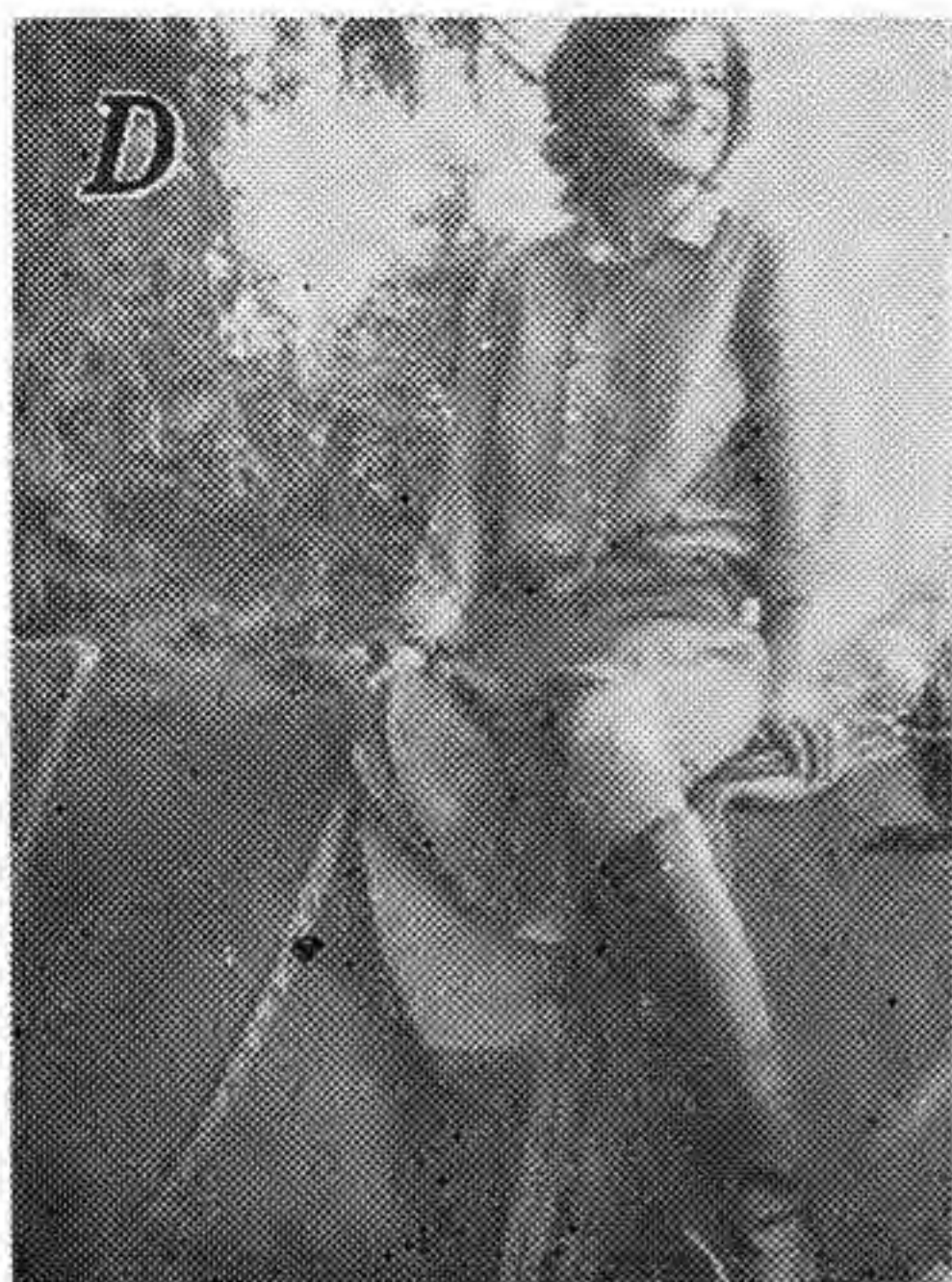
「リネア、私も乗ってみたいわ」

とアグネタが言った。

「いいわ。しかし未だ荒っぽいから充分、注意しなさい。私が合図して調教の仕方、教えるわ」

とりネアは答えた。十分ほど休憩して、次はアグネタがメテロニータに跨った。稲妻のように鞭がなり、拍車が無慈悲に加えられ、すでにリネアに乗られ少々グロッキーの馬はたちまちアグネタの凛々しい肉体の下で思う在分、乗りこなされ征服されてしまった。馬は最初は両前足をあげて立ち上り女騎士を落そうとしたが、何回やっても成功せず、そのたびにアグネタの拍車と鞭と手綱でしごきにしごかれて滝のような汗を流し、火のような息を吐いてのたうち廻るようにギヤロップしたが、アグネタは全然つかれた様子もなく馬がくたびれればくたびれるほど、或る一種のエクスタシーになり夢中で馬責めを続けた。

夕方近くになり、二人の女騎手はやっと今日の激しい訓練から馬を解放してやり、そば



の湖にその馬を連れて行って水を飲ませ、二人とも用意よく下に水着をつけており、上着やズボン、長靴などを脱ぐと、リネアが水着姿で鞍をはずした馬の背に跨って湖の中へ、深さ一メートルぐらいのところへ乗り入れ、アグネタと一緒によくブラシで洗ってやり、馬小屋に入れる前にきれいにししてやり、くつわ等もよく洗った。

このような調教を数日、二人で繰り返し、一週間後には荒馬メテロニータも、この世で一番従順な女王様等の愛馬にされてしまつて今コペンハーゲンの馬場にいる。

〔掲載写真の説明〕

A II スイスの写真モデル、イレナは、ショトカという馬を買って毎日乗っている。淡青のシャツの下から紫のセーターが見え、すがすがしい感じが、写真モデルは仲々高給で、ぜいたくに暮しているものがある。のどかな初春に乗馬練習を終えにっこりとしているイレ

ーナの馬上の麗姿。

B II ストックホルム郊外のリーディング島から来た女子学生、エブアが、馬術大会に於て馬に激しい拍車をかけた直後のさっそうたる姿。

C II デンマーク女性の優美な野外騎乗姿を見て、心がはずまぬものはないだろう。まさに均斉のとれた美と力の表現といえよう。野外公園の一隅にて撮影したもの



一枚である。

D II うるわしの美神プアリキユール（北欧神話に出てくる）の如き、優美な騎上ぶりに思わずスナップしたもの。女性騎手は、リネアという当時二十二才の美人。スターのように美しく、ハツとなった。

E II 北欧の寒い風もなんのその、誠にリリしく勇敢な若い女性騎手の颯爽たる姿。雪を蹴たてて走るさまは素晴らしい。

漫談 千一夜物語

薔薇と蜜蜂

(6)

第三章 ベにさそり△▽

田代俊夫

22

台風一過、ついにメロンを征服。宿願を果たした女首領紅さそりは、数刻後若者の胸に跨り坐って君臨しておりました。勝利者特有の得意満面の態です。メロンの方は本心はいざ知らず、外観は悲しそうにみえます。それに豊腎の圧力で薄い胸をぺしゃんこにされているので、息苦しいかぎりです。ヌード鑑賞は依然困難な情勢といえます。

「案外やるじゃないか、子供のわりに」
「そうですか……」
「さっきの約束はどうしようかね」

メロンは急に怯えた表情になりました。

「後生です。ぶら下げたり叩いたりしないで下さい」

「お前の心がけ次第さ」

「あの、もっと一生懸命、働きますから」

紅さそりはメロンのあごに手をかけて、真上から見据えました。

「わたしを主人と崇め、忠実に仕えるか！」

「はい。心から御奉仕いたします」

「ま、いいだろ。……細君のことは忘れて、わたしに乗り換えるのさ。承知するね？」

「は、はい。……しょんぼり……」

ここで、とっておきの切札を出して決めつ

けます。

「不穏な言動があれば即時、手下どもの慰みものにさせるよ。分ったね」

各種サービスを間接に強要する。メロンはひたすら恐縮して一途に忠誠を誓いました。鉄は熱いうちに打つ、熟した果物は果汁のしぼりかすまで食ってしまう。身を起した紅さそりは四つん這いになるようメロンに命じました。休憩時間も与えずにお馬ごっこを始めるつもりです。

紅さそりは、メロンのしなやかな背中にどっかりと跨り、脚をふんばりました。その重みに背中が柳の枝のように撓います。

メロンは、あえぎ懸命に耐える。長い脚を膝で折り曲げ、まともに体重をかけた紅さそりは、肩口に手を置いて平衡を保ちます。

「部屋を三回、おまわり。……そら、進め」

馬の速度は亀の歩みに等しい。積載許容限度を軽くオーバーしているため、いつ潰れるか分かりません。のろのろ三步駆けては降り、よたよた二歩進んでは腹這いになる。女騎手は馬の尻をびしゃりと叩き、黒いたてがみを掴んで引き起す。一周するのに五回もこの有様です。

「それ、もっと早く走るんだよ」

「お、おかしら、あまりに重うございます。」

もうこれでお許しを」

「逆吊りの方がいいんだね」

裸の騎手は、いささかも容赦せず厳しい態度を堅持します。再び亀の子運転が始まる。

速度はガタ落ち、馬は亀に、亀は蟻に、蟻はかたつむりへと推移します。停れば叱責、潰れては引き起し、ふらつけば太腿でぐいと細腰を絞りつける。吐く息も途切れ、あえぎ呻いての死の行進です。

何度も叩かれ足蹴にされて、ようやく規定のノルマを達成したとき、メロンは息も絶え絶えとなり床の上に長々と伸びてしまいまし

た。完全に乗り潰されたのです。全身汗みどろ、背中のはぬめやかに光っています。

紅さそりはメロンの肩口を蹴って仰向けにさせると、その腹を跨いで立ち上がり、両手を腰にあて悠然と見下す。白昼光線に息づく女賊の立像が薄桃色に妖しく浮きたち、白い腿の内側に、あの金色の蝙蝠が惱ましく笑っています。生意気千万な偽鳥です。壮厳、且神秘的情景であるから、肝心のものはどうしたなどと半畳を入れてはいけません。

「だらしない馬だね。今日はこれで許してやるが、明日からもっときびしく仕込むよ。分ったね、メロン」

「はい、おかしら」

紅さそりは身体を百八十度回転させ、同じ姿勢で直立しました。顔上約一メートルのところに雄大な二つの砂丘が屹立する。

その瞬間、白い大きな塊りが落下してメロンは何も見えなくなりました。視神経機能に異状を生じたわけではない。顔が落下物に押し潰されたのです。

これはひどい。馬の行進よりもっとつらい責苦です。目も鼻も口も完封されて、メロンは声にならぬ呻きを発しました。動けるところは、しばし物凄い勢いで跳ねまわり、やが

て苦しげにのたうち、最後にゆるやかな震動と小さきみの痙攣へと段階的發展を示しました。メロンの両腕は横に伸ばされ、逆馬式顔面騎乗者の膝の裏側にきっちり挟まれて、不動金縛りの状態です。

次第に意識が薄れ、ついに昏迷の世界に入りこもうとした直前、酸素が肺に充満しました。女騎乗者が、ほんの少し腰を浮かしたのです。

春宵一刻値千金、腎下一息値万金。だが、それも長くはない。再度の暗黒がメロンを襲います。そして、気絶寸前にまた酸素を流入させるのです。昼と夜は七度も入れ換わりしました。最後に長い闇夜が支配した。ただし、辛うじて呼吸の可能な状態においてです。

「奉仕のやり方を教えてやるよ。そら、口をお開け！」

紅さそりは少しずつ体をにじらせ、わずかずつ前かがみになっていくのでした。

数日後、偵察隊が三々五々帰還してきました。どうも洞窟内の様相がおかしい。目をつけていた若僧は、女首領の尻にくっついてまわっているし、コシマ婆さんは何とも面白く

ないという仏頂面です。留守中、何か異変を生じたのに相違あるまい。そこで婆さんから事情を聞いてみると、第二節のようなことです。

「断りもなしにあたしから取り上げてさ、自分だけの用をさせてるんだよ」

「それはけしからん。明らかに所有権の侵害である……」

「夜分、変な声ばかり出すものだから、わたしや、ろくに眠れなくてね」

「生活権の妨害ではないか！」

七むつかしいことを言っているのが、策士をもって任じ、その割には実績の伴わぬスリイ・アウトです。

「おかしらも勝手すぎるよ。これじゃ婆さんが、あまりに気の毒じゃないか」

真意でもない同情を装うのは、むろんスライダー。そうだと仲間達が賛成します。婆さんの迷惑などどうでもいいが、自分達の採掘権の方が気がかりなのです。さんざん焚きつけられた老婦人は、意を決して女首領の部屋へかけ合いに行きました。

「何の用なんだい、今頃。洗濯物ならもうなこよ」

「あたしの助手のことさ、おかしら」

「ふうん、あの子がどうかしたって？」

「とぼけちゃ困るね。お前さんの部屋に入り浸りじゃないか。とにかく返してほしいんだよ、こっちへ」

婆さん泡を飛ばして、とうとうとまくしたてました。今日は用心しているので入歯は外れません。メロンがいないと仕事がかどらない、また夜間の肩たたき兼あんま役が必要だ、婆さんの論旨はこの二点です。紅さそりは、あっさりはねつけます。

「飯たきや洗濯は、今までどおりやらせるさ。だが、夜はどこで寝ようと本人の勝手だよ。勤務時間外の行動だからね。……あんまのような私用に使うのは労基法違反だよ、ハラマ婆さん」

また名前を間違える。自分が夜メロンにやらせている各種の御奉仕は私用でなく本人の希望をかなえているだけだ、と都合のいい見解を開陳するのです。婆さんは、ぶつぶついいながら無念そうに引き下りました。連中のたむろする娯楽室へ戻ると、大勢集まってごそ密談の最中です。

「や、コシマ婆さんか。どうだ、うまくいったか？」

「だめさね。おかしらのやつ、あの若僧にイ

かれちまってるんだよ。ええ、いまいいったらありゃしない！」

狼紳士達の相談の内容は、今コシマが報告したような事態に、いかに対処するかということ。メロンを女首領に一人占めされてはやりきれないから、それについて何かいい方策はなかるうかというわけです。

意見AⅡそもそも全員の共有物を預かっておきながら、自分が真先に手をつけるとは言語道断である——そうだ、そのとおり。

同BⅡ断固抗議を申入れ、共有権の回復を計るべきだ。黙っていると、おかしら専用にされてしまうぞ——賛成、異議なし。

同CⅡでは、だれがその使者として適任であろうか——シーン……

連中、やはりおかしらに恐いらしくて、猫の首に鈴をつける役となると尻ごみをするのです。副首領のリリースがいれば、むろん代弁させるのだが、先生、生憎まだ帰還していません。

一人だけ皆から離れ、机を前に何やら書物を拡げているのがいます。我関せずといった風です。常に一家言を持つ古参株のピンチヒッターです。連中互いにそっと目くばせ。あいつにやらせようぜ。

「おい、ピンチの兄貴、マンガを見るのはあとにしてくれや」

「何を失敬な！……なにに、理性的なるものは現実的であり、現実的なるものは理性的なり、か。なるほど」

他の連中が近づくともみるや、ピンチ博士は慌ててボタンと本を閉じました。雲つく大男ながら、金縁の伊達メガネをかけ、チャコールグレイのベレー帽をかぶっています。身だしなみ第一をモットーに、他の仲間が全員ひげもじゃなのに、この男だけは毎日、顔の手入れを怠りません。

「一つ頼むよ、親方」

「親方？ ふふん、ボクは諸君方と異なり、その方面に興味がないからな。ま、辞退させていただきます」

メロンに一番執着の強いのがこのピンチヒッターなのです。それを知っている他の連中は諦めません。

「な、そんなこと言わずにさ。兄^{あに}以外に適任者はいないんだよ」

「兄い？ ボクはそんなんじゃないです」
ごますり専門のスライダーがきわめて腰低い姿勢で交替します。

「先生、宣しくお願いしますよ。先生は学も

あるし弁も立つしで、わしら無学の者はいつも敬愛してるんですよ、博士」

尊称を奉られたピンチヒッターの頬の筋肉がだらしなくゆるみました。先程の書物を素早く抽出しの中にしまう。チラと見えたその標題は「〇〇〇の知識」となっています。

「止むを得ん。他ならぬ諸君方の切望ゆえ、かけ合うだけはやってみよう」

わざと渋面を作って、イヤイヤのゼスチャーよろしく、重い腰を上げました。

「兄貴のお得意の、ほら、あの連勝法とかいうやつで頼むよ」

「連勝法じゃない。弁証法だ。知らなきゃ黙っておれ。無学者は、とかく知ったかぶりをするからいかん」

勇んで女首領室へ赴くと、紅さそりはまたかといった、うんざりした表情。若いツバメを寝台の下に蹴りこむように隠してしぶしぶ出てきました。

「わたくし、キイ未亡人並びに同僚諸君の総意を代表して、ここに……」

「手短かにお願いしますよ」

「丙毛留の説によれば、そもそも……」

「要点だけにしとくれ」

折角の学識も、この場合は一向に役に立ち

そうもありません。

「若年の優秀な労働力を活用せず、ミセス・キイに家事万般を負担せしむるは、あの老令と……」

「お前達の留守中は、婆さん何もすることないのさ」

「夜間、嬌声を発して四囲の寂寥を破り、隣人の安眠を妨げ……」

「ふん、ここは安アパートじゃないよ。いやらしいばあだね。覗きにきたってカギ穴は内側からふさいであるから無駄さ」

「問題は寄託物の無断使用という契約違反の件でして……」

「恋愛は自由じゃないか」
形勢はよろしくありません。ピンチ先生やつきとなりました。

「手柄を立てた者にやるとのお約束は、どうします」

「ああ、それかい。褒美は別に考えるよ。……とにかく一人の人間の人格を無視するといふのは、あまりに不道德だからね。それに元来、あの子はわたしの部屋へ最初に来たんだし……」

要するに、自分だけで独占するというのです。かくて博学の先生もすぐ退散せざる

をえませんでした。

またやってこられるとうるさいので、次の日、紅さそりは全員を集めてメロンに対する単独所有権を宣言しました。

目標物を接収された狼紳士達は、メロンがおかしら専門のペットになったことに非常な忿懣を覚えました。しかし正面切って抗議を申しこむだけの勇気がない。組織の中の人間の弱さです。紅さそりは彼等の不満を抑えるため、一律昇給六・九%及一時金支給という反対給付を提唱しました。

そんなわけで、狼の餌食になることだけは免がれたけれど、メロンは昼間、雑用にコキ使われる生活を続けました。ある意味では、それまで以上に苦しいといえます。夜、女首領の命令のまま各種勤労奉仕に従事せねばならないからです。重労働が昼夜に亘るため、紅さそりはメロンの昼間の仕事を少し軽減して、つらい筋肉労働から解放してやりました。もっとも自分の下着は必ず洗濯させる。また、肩たたき、足揉みあんまなどは毎晩やらせました。

紅さそり以下、全員が仕事に出かけるときは、メロンを地下牢に監禁してその鍵をコンマ婆さんに渡しておく。こうしておけば安心

というわけです。

メロンは一日としてサファイヤのことを思わない日はありませんでしたが、そんな気配を紅さそりに感づかれては大変ですから、いつも恭順を装い、忠実にかしづいて誠心誠意のサービスに努めたので、ますます女首領のお気に入りになるのです。

捕われの身になってから、いつしか百日あまり過ぎました。

24

或る日、また全員で仕事に出かけることになりました。仕事とは、むろん略奪行為を意味します。

メロンを地下牢に閉じこめてから、紅さそりは恒例に従い、団員を集合させて点呼をとります。二人、足りません。

「ストライクは、どうしたんだい」

「まだ帰ってませんか。あいつ、確かバーに立ち寄るとは言っていましたかね」

一緒に偵察に出かけた、ナックルの説明です。その飲み屋に、なじみの女がいるそうです。もっとも今日の目的地とは反対の方向にあります。女首領は推断を下しました。

「どうせさかさクラゲへでもシケこんだの

さ。罰金ものだね」

もう一人がボンヘッドです。

「ゆうべ一晩中、うんうん唸ってましたぜ。食当たりでも起したんじゃないかな」

隣室のスライダーが発熱説を唱えます。

「またズル休みを決めこむつもりだ。叩き起してくるから少し待って」

紅さそりは直立不動の全員を残して、ボンヘッドの私室へ足を運びました。

やっこさん、ベッドの上でさも苦しげに身体をくねらせスネークダンスを演じている。

顔面紅潮、目は真赤に充血し、全身あぶら汗を流しながら、うんうん呻いているのです。

あながち仮病ともみえません。

「あ、おかしら。じつはゆうべから……」

急に発熱して頭痛、ハキ気を併発したと悲愴な表情で訴えます。頭痛・歯痛・生理痛？

は先生の最も得意とする持病ですが、もう一つ昨夜からの下痢を追加しました。あの小僧の作ったシチューが原因にちがいない。古い

安物の材料ばかり使いやがるもんだから……

「おかしいね、他の連中は何ともないじゃないか」

「へえ？……何せわしは生れつきホリヲウの質で、育ちがよかった関係で、箸より重いも

のは持ったことがない……」

「鏡と相談してから言うんだね」

ひげもじゃ鬼面大男の虚弱体質原因説を、紅さそりは冷笑しました。だが病状そのものは本当らしい。仕方がないので臨時休暇を認める。ボンヘッドは心中、舌を出し外見は感涙にむせびました。紅さそりはボンヘッド一人を洞窟に残し、他の七名を引率して本拠を出発いたしました。

馬蹄の響きが消えさるとみるや、俄然ボンヘッドの病状は全快します。各種の薬品をでたらめに服用して故意にこんな症状を生ぜしめていたのです。何故、姑息な手段で仮病を使ったのかはいまでもない。

あの若僧はもともとオレが掴えたものだ。従って所有権は当然、自分に帰属する。しかるに何事ぞ、おかしらのやつ、横から取上げて専用小姓にしてしまうとは。しかもあのジヤリに首ったけだから、とてもオレの主張は通る見込みはない。かくなる上は非常手段あるのみだ。

ずるそうな表情を浮かべたボンヘッドは、まずコシマ婆さんの許へ赴きました。

「おや、病気じゃなかったのか」

「婆さんの調合薬で一ぺんに直ったよ。……」

今日は、すごいくらいの年増美人にみえるぜ姉さん」

にたにたと薄気味の悪い微笑を浮かべるボンヘッドです。

「よしとくれ。お前にゃ金は貸さないよ」

「今日のはチットばかりちがうね。地下牢の鍵を借りたのさ」

「おや、そりゃあ御法度だろ？ おかしらから厳禁されてるはずだ」

ボンヘッドは懐柔作戦に出る。

「な、そんなつれないことを言わずに一つ頼むよ。ずいぶんと長い間のつき合いじゃないか、姉さん」

むろんこの二人、実の姉弟なんかでない。

ボンヘッドはポケットから梅干しのびん詰を取出し、謹んで贈呈しました。キイ未亡人の大好物らしい。

「今度いつか、姉さんのしらみを取ってやるよ。だから、な、……」

「そうさねえ……。だが、あとでバレたらどうする？ あの小僧のやつ、きつとおかしらに報告するよ」

「させるもんか、そんなこと。こいつは伊達に差してるんじゃないぜ」

ボンヘッドはそっくり返って、腰の偃月刀

を叩きました。

ようやく肝心のものを手に入れたボンヘッドは、直ちに地下牢へ急行しました。太い格子の隙間越しに人間狼の姿を認めたメロンはぎくりとして身体を硬直させます。こいつだけが居残っているというのはただごとではないからです。

「や、どうもどうも。こんなじめついたところじゃ大変だね、坊っちゃん」

大きな顔をして、のこのこと土牢の中へ入るボンヘッド。つとめて愛想のいい笑顔を見せるが、笑っているのは口と鼻だけで、目にはぎらぎら執念の炎が燃え立つ。

「な、なんの用です……」

牢屋の中に逃げ場などはない。後ずさりしたメロンは、すぐ冷い岩肌に背中を支えられます。一瞬、メロンが悲鳴を挙げました。

すごい勢いで飛びかかったボンヘッドがたちまちメロンを膝下に組み伏せて利腕をねじ上げたからです。

「あっ、いた、いたい。ゆ、ゆるして下さい……」

「静かにしろい。ぎゃあすかさえずるとへし折っちゃうぞ」

素早く上衣を剥ぎとって、両手首を重ね

て、予め用意した麻紐でぎりぎり巻きに縛り上げる。そしてその縄尻をとって乱暴に引きしました。

「めったにねえチャンスだ。思いきり可愛がってやるからな。やい、とつとと歩け！」

自分の部屋まで連行すると、中から鍵をかけてしまう。いやに用心深い男です。

「もうこっちのもんさ。やい小僧、よくも長い間お預けを食わせてくれたな。今日という今日は……」

ボンヘッドは思わずこみ上げてくる笑いを押さえきれません。メロンの方は対照的に顔面蒼白、わなわなと肩口を震わせています。一しきりまくし立てたボンヘッドは、早速礼儀を無視してメロンの体に残る着衣を脱がしにかかる。

「あ、ああ、いやだ、いやだ……だれか来てえ、助けてえ……」

喚いたって無駄です。簡単にむしり取られてしまいました。いとも簡単に。何とも気の毒な小羊です。

「こたえられねえ身体つきだな。ふふふ」

だが、バタバタしどうしのメロンに腹を立てたボンヘッドは、その細腰をどんと蹴りつけました。声もなくメロンは倒れ横転する。

きつと蹴り場所が悪かったのでしょう。

人間狼はそこでメロンの両脚を大きく開かせ、うつぶせのままその足首を寝台の根元にきつちりと縛り止める。そして硬い座布団を二枚重ねてぐるぐる巻きこみ、紐を巻いて形の崩れない工作をします。高さ80cm両底面の半径20cmの円柱ができました。尚、表面積は $3,400\pi\text{cm}^2$ 、体積は $16,000\pi\text{cm}^3$ です。それからそいつを両脚の間から腹部の下へと差込む。つまり臀部が円柱の直径長さだけ中空に突き上げた恰好になったわけで、アラビヤ式珍奇且屈辱的姿勢が構成されたのです。メロンは眼を閉じ顔をそむけ、唇をかみしめてこの最大の恥辱に耐えています。

「あはは……全くだいポーズだぜ、小僧。何とかいう手前の女房に見せてやりたいよ」

「あ、あとで、おかしらに言いつけてやるから……」

ボンヘッドはさつと腰刀を引き抜くと、メロンの顔面すれすれの地点へぶすりと突き刺します。鋭い刃が内側を向いている。

「いいか、小僧」

と、その頭髪をわし掴みにして喉もとを刀身に押しつけ、ボンヘッドはここぞとばかりに、絞殺時の鳶鳥に似た不調和音を発してタ

ンカを切りました。

「このおれ様をなめるんじゃないぜ。告げ口などしてしろ、この刃でスパリとやって、即刻地獄に送りこんでやるぞ」

ドスの利いた声にメロンの肝玉は縮み上がりました。奥歯がガタガタ鳴っている。

「え、どうなんだ。告げ口するのかしないのかはつきりしろい！」

調子に乗って決めつけるボンヘッドです。

「い、いわない……いわない……」

「そうとも、なにも減るわけじゃなし、それが正しい態度というものだ」

人間万事塞翁が馬、あと一時間ほどでこの世におさらばするとはつゆ知らず、怯える小羊を前に狼先生、呑気な訓戒を垂れました。

「大変、大変だよ、ボンヘッド。……おい、ちょっとここを開けとくれ」

予定の行動はコシマ婆さんの声で暫時阻止されました。

「うるさい！ 今いそがしいんだ。あとにしる、あとに！」

「呑気にボーリングをやってる場合じゃないよ！ 酒樽の栓が抜けちゃったんだ。早くきとくれ、早く……」

地下の酒蔵庫に大きな酒樽が置いてあるの

です。氣候の関係で内圧に耐えきれなかったものとみえる。婆さん一人の手に負える代物ではありません。ボンヘッドは舌打ちをして戸を開け、コシマと一緒に現場へ駆け出していきます。

五分ほどして、一人の人物が音もなく部屋の中へ入ってきました。すり足でメロンに近づき、

「あなた、これは一体何のまねですか？」

25

話は前日の夜に遡ります。出発時刻に遅れたストライクは別にさかクラゲヘシケこんだわけではなかったのです。もう少し辛い目にあっておりまして。つまらぬ一時の邪心を起したため、ストライクは不運にも自らの墓穴を掘ってしまったのです。

偵察を終えその町の城門を通り抜けて帰路につこうとしたときでした。一人の若い女が単身白馬に跨って城門目ざして進んでくるのにストライクは気づきました。みればすらりと背が高く、燃えたつ金髪は肩に波打ち、豊胸美臀柳腰と三拍子そろった絶世の美女ではありませんか。今宵えわたる満月のような美貌の乙女です。この美しい女が、最愛のメロ

ンを探し求めるサファイヤであることはいうまでもないでしょう。

第18節で若い夫の帰りを今か今かと待っていたサファイヤは、真夜中になってもメロンが姿を現わさないの、容易ならぬ事態の発生を悟りました。てっきり誰かに誘拐されたにちがいない。そう思うと第5節の夢占い師マユツバの忠告が手痛く胸に甦りました。しつこくねだるので、根負けしてしばらく放してやったら案の定このありさま。しまった、一人にさせるんじゃないかった、と後悔の臍を噛み地団駄踏んで口惜しがったものの、時すでに遅し。気を取直し、この上は草の根を分けても探し出そうと決心し、早速その日から亭主搜索の旅に出たのです。

あっちの都、こっちの町と探しまわり、三カ月を過ぎたころちょうどこの町へやってきたという次第でした。

「あの、少しお尋ねしますけど、ここは何という町でしょうか」

「ヨーグルトさ。……だがもう城門が閉って

いて朝まで入れないぜ、娘さん」

すでにこのとき、鼻下長のストライクは不法行為の決意を固めています。こんな上玉をみすみす逃す手はないて、うん。

「みればお前さん、お連れもないようだが夜間女の一人旅は危険ですぞ」

にわか仕立ての猫撫ぜ声で恥しらずなことを言います。近く of 林の中に、乗ってきた馬をつないである。その茂みの中へ連れこんでやろう。

そうとは知らずサファイヤは、人相のわりに親切そうなストライクに心を許し、簡単に身の上を説明しました。

「——というわけですが、そんな若者を御存知ありません？ おじさま」

因果はめぐる世のならい。正しく自分が第18節でふん掴まえたメロンのことです。なるほど聞きしに勝る別嬪だわい。おかしらが若僧とよろしくやってるんだから、おれがこの娘を頂戴すれば丁度つりあいとれるというものだ。今夜はボク、何て間がいいんでしょ。ウヒヒ……。

「そうだ、そういえば確かよく似た若者を……」

せきこんで尋ねるサファイヤを適当にあしらひ、人気のない林の中へ連れこむ。

「馬から下りなされ。詳しく話してあげようから」

サファイヤが馬の手綱を木の枝につなぐと

同時に、狼は本性を現わして飛びかかりました。しかし、羊だと思った獲物が強い牝豹だったからたまらない。三十秒で結着が付きました。麗人の膝下に組伏せられた強姦未遂者は利腕の逆をとられて悲鳴を挙げました。

「い、いて、いて……お許しを、どうかお許しを」

「その若者をどこで見たのよ！」

「知らぬ、知り申さぬ。……ただの口から出まかせでして……」

「盗賊だね、お前は。……縛り上げて奉行所へ突き出してやるから覚悟おし」

正体を見破られたストライクは大狼狽、見苦しくもがきますが、背中の上に据えられた豊唇は微動だにしない。

「ほ、ほんの出来心です。あなたさまがあまりお美しいのでついフラフラと……。どうかお慈悲をもって今回ばかりは……」

この手合いはとても敵わぬ相手とみれば急に低姿勢になる。ストライクはひげもじやの顔を地面にすりつけ愁訴哀願に及びます。

サファイヤの顔色が変りました。ストライクがその指にはめている青玉の指輪に気づいたからです。手首を掴んでねじ上げているからよく見える。疑う余地はない、結婚一周年

記念にメロンに買ってやった品に相違ないのです。二人の頭文字をとってSMとリングに彫りこんであるのが何よりの証拠だ。

喜びと不安と怒りに、その美しい顔は青ざめ、声は震えました。

「おお、この卑怯者め、正直に白状しろ。わたしの主人をどこへ誘拐したのだい！」

「本、本当にわたしは何も……。天地神明に誓ってわたしはうそをつきません！」

メロンから取り上げた指輪をはめていたのが運のつき、だがそうとは知らぬうそつき狼はあくまでシラを切るつもりです。

とつぜん、ものすごい悲鳴が夜のしじまを破りました。鮮血が迸り、青い草を赤く染める。腰の短刀を引き抜いたサファイヤが、うそつき男の片耳をあっという間にそぎ落したのです。激痛に呻きストライクは失神してしまいました。

ひやくしよん、夜の冷氣にくしゃみして覚醒すると、身ぐるみ剥がれた丸裸、ぎりぎり巻きに縛られて地面に転がっています。こんな全ストはだれも歓迎しない。応急措置をしたとみえ、傷口からの出血は止っているが痛みはより激しい。

サファイヤは、結婚記念の指輪をストライ

クの眼前に突きつけました。

「こっちの耳もそぎ落そうか。お望みなら目玉をくり抜いてもいいんだよ」

ストライクは観念しました。もう言い逃れるすべはない。サファイヤのきびしい訊問にあって一切の泥を吐いてしまいます。

メロンが無事生きていると知って、サファイヤは安堵の胸を撫でおろしました。だが、妖艶の女首領と夜毎いちゃついていると聞いては心穏やかでない。狼共のなぶりものにならなかったのは不幸中の幸いだと心に言い聞かせても、いかにせん瞋恚の炎がめらめらと燃え上り、平静を装うのに苦心さんたんの体です。

「……よし、命だけは助けてつかわす。その洞窟へ案内おし！」

あわれなストライクを馬の鞍にくくりつけその着衣を鞍袋にたたきこむと彼から奪った偃月刀を自分の腰に差し、その同じ馬に打跨がりました。あわれにも全スト男はくしゃみの連発です。

「奥方様、夜分は何かと冷えまするゆえ、せめて下着なりとも……」

「贅沢いうんじゃない！ 着物は人間様のまとうものよ」

そして、懲罰の女神は馬の尻にぴしりと鞭をあてました。星空の下、奇妙な一組の男女を乗せた馬は休みなく走りつづけ、やがて砂漠を越えて森林に入り、次の日の朝、目ざす洞窟の近くに到達したのでした。紅さそりの率いる盗賊騎馬隊と入れちがいのなりました。

ひとまず馬から降り、茨や灌木の茂みに囲まれた空地まで縄尻をとってストライクを引致すると、丸裸のまま大木の根元に縛りつける。そして洞窟の入口の位置を詳しく聞きただし、開閉呪文その他必要事項を教示させます。傷口の痛みと夜中の強行軍に完全に参ったストライクは抵抗する気力もなく、すらす

☆誌上読者コンテスト☆美人モデル募集

賞 金

一、第一席	五万円	若干名
一、第二席	参万円	若干名
一、第三席	貳万円	若干名
一、第四席	壹万円	若干名
一、第五席	五千元	若干名

要 項

一、参加者は、本誌を愛読しておられる女性の方でしたら、学歴、年齢、未婚既婚の

別は問いません。奮て御応募下さい。
一、写真選考にパスした応募者の方全員に、対して一名につき金壹万円の賞を呈し、更にその際撮影した写真を誌上に発表し、読者コンテストの投票の結果、第一席より第五席まで標記の賞金を進呈いたします。
一、応募者は、略歴に身長、体重、胸囲の概略を記載の上、手札型写真を同封してお申込み下さい。選外の際は一件書類は、返却いたします。
一、写真並に書類にて選考にパスした方には賞金壹万円を贈呈の上、コンテストに発表の写真撮影し、コンテストの結果は追って御通知いたします。
一、写真撮影のための旅費などの費用一切は本誌にて負担いたします。
一、モデル・コンテストに対する読者の投票については、いづれ誌上に発表します。
一、締切は昭和四十三年五月末。
一、本誌八月号誌上より漸次発表の予定。

ら自白しました。その供述に基き、サファイヤは単身メロンの救出に赴きます。

細い間道をつま先上りにしばらく進んでいくと急に視界が開け、巨大な岩塊が眼前に現われました。教えられた地点まで来ると、傍の木によじ登って身をひそめあたりの様子を窺う。ストライクの自供では朝方早く全員出発したはずなのですが、念のため用心したのでした。しばらく待機していましたが、あたりは森閑として人の出てくる気配はありません。大丈夫と見きわめたサファイヤは岩肌の前に進み出て大声で叫びました。

「開け、大根！」

岩は音もなく割れて、入口がぼっかりと開きます。中に入ると岩戸はまた静かに閉じました。洞窟の内部は意外に明るく外とほとんど変わらないくらいですが、それは高い岩肌ので天井にいくつもの採光穴が開いているからなのです。

コシマ婆さんとかいう留守番が一人いるだけだそうだから、何の心配もない。うねうねと曲りくねったトンネルのような通路を、サファイヤはずんずん進んでゆきました。

(未完)



(一) はじめに

この文でぼくが述べる感想は緊縛美についてのぼくの私感であり、ぼくの好みに偏した

緊縛美雑感

—映画・テレビについて—

鈴 木 三 三

観賞です。

緊縛にはさまざまな傾向がありますが、ぼくなりには大別すれば、惨酷型・セックス型・ロマン型の三つに分けられるのではないかと

思われます。惨酷型は一般通念での所謂サディズムであり肉体的苦痛を与えること、無惨さを強調したもので、映画では拷問シーンであり「日本拷問刑罰史」がこの型の代表でしょう。セックス型はピンク映画の縛りシーンの多くがそうであり、また奇ク誌の「花と蛇」もこの型に属するものと、ぼくは考えています。ロマン型は一般映画の活劇における美女受難のシーンです。しかし、もとよりこの二つの型も各々明確に区分されるものではなく、たとえばロマン型にしても惨酷型やセックス型の要素を拒否するものではなく、むしろその状況、過程において適当にこの二つの型の要素を加えることによってより魅力を増すものと言えますし、セックス型においても単刀直入のセックス型はかえって味気なくそこにロマン型の要素を演出し、加える方がより魅力的であろうとぼくは思います。

ところで、ぼくの好みはこの三つの型のうちロマン型にあるわけなので、この文もその立場からの感想になります。このロマン型の「奇ク的美」の主張は、去年の奇ク誌に載った「奇譚クラブを斬る」があり、ぼくもその主張に賛同するものです。ロマン型緊縛美は一言でいえば、絵物語的美しさにあるといえ

ます。映画やテレビに理想的な絵物語的緊縛美を求めることは仲々困難ですし、ぼくが過去において見てきた幾多の縛りシーンにおいても、ぼくの好みに合ったシーンは数える程しかありませんでした。しかしそれはそれとして、ぼくにとっては映画・テレビのロマン型縛りシーンは楽しい景物です。

以下思いつくままの雑感を述べてゆくわけですが、すべて記憶にたよっているために、映画の題名・製作年月の失念の点が多いことをお詫びしておきます。

(一) 女優さんについて

映画・テレビの縛りの魅力は何んといっても選り抜きの美人の縛られ姿が観られることです。が、女優さんにも縛られ姿の似合う人とそれ程でない人とがあります。これはぼくの女優さんへの好みのせいばかりではないようです。浜美枝はぼくの好きなタイプの人ですが、ぼくの二度見た縛りシーン(快盗ジバコ・題失念)とも、それ程魅力ある容姿ではありませんでした。扇千景もテレビで度々縛られ役を演じますが、ぼくはあまり魅力的とは思いません。似合うタイプの女性は何気なく両腕を背中で組み合わせただけで、ときにはあ

とするような縛られポーズを見せることがあ
るもので、縛られ姿の似合う女優さんは、縛り
は平凡でもその容姿は印象的です。長谷川
裕見子、築紫あけみ、近藤美恵子、大川恵子
など良く似合う、いわば縛られ女優ともいう
べきタイプの人たちでした。現役では、星由
里子(戦国野郎・佐々木小次郎)。川口小枝
(白昼の通り魔・戦国無宿―テレビ)。桑野
みゆき(三匹の侍・求婚旅行)。佐久間良子
(大奥マル秘物語)。若尾文子(秦始皇帝・
刺青)。高田美和(座頭市・血煙街道)。辰
巳典子(悪道魔十年その他)などの女優さん
が魅力的容姿を見せてくれるタイプの女優さ
んだと思います。

新人女優さんの場合は、どんな役でも一生
懸命に演じるのと新鮮な容姿とに加えて、新
人のためか監督さんが縛りに手加減を加えぬ
ようで総じて良い縛りシーンが見られます。
「快盗ジバコ」で浜美枝と共に縛られた新人
も浜に比べて縛りがきびしかったようです。
最近人気のある酒井和歌子も「大爆笑」では
縛られたまま転がったり吊られたりされてい
ましたし、いまはテレビ専門の二階堂有希子
が東映でデビューしたときは(題名失念)ほ
んど縛られシーンのみの出演でした。

少女役も大人以上に緊縛されます。少女が
大人役以上に奇巧的緊縛美のシーンに演出さ
れることが多いのは面白いことです。いまは
流行歌手である三沢あけみが、かつて東映の
少女役で可憐な緊縛容姿を見せたのも印象に
のこっています。

(三) スタイルについて

ここでいうスタイルとは、女優さん個人の
スタイルではなく、演ずるヒロインのそのの
ことです。さまざまな時代のさまざまなスタ
イルの美女の縛られ姿が見られることも映画
の魅力であり、またそのスタイルはロマン型
緊縛美には欠かせぬ要素です。ピンク映画の
縛りの物足りなさは一いつにこの要素を欠く
点にあります。

ぼくの最も好むスタイルは二の腕、太もも
を露わにしたミニ・スタイルです。「隠し砦
の三悪人」の上原美佐の魅力はこのスタイル
にポイントがあったといえます。山東昭子
(題名失念)・川口小枝(戦国無宿)・丘さ
とみ(美男城)にこのスタイルでの縛りシー
ンがあります。現代のノー・スリープスタイ
ルも良いものです。露わな二の腕になわ目が
かかる点ではヌードの縛りと同様ですが、ぼ

くはスードよりこのスタイルの方が魅力を感じます。ピンク映画のある作品で、ぼくの好きな辰巳典子嬢がノースリーブスタイルで捕われながらそのスタイルでの縛られシーンが無かったのがっかりしたものです。このスタイルに似たものでは洋画でのインディアン嬢、ターザンのジェーン役がそうですが、この種のスタイルは邦画では少年向きの作品に添えものの登場する役になかなか色気のあるスタイルがあるものです。テレビ「ウルトラQ」で高橋紀子(?)が土人嬢に扮して縛られた姿は実に魅力的でした。

男装姿も良いものですがこれも数が少く、池内淳子・大川恵子・高田美和(ただしこれは予告編のみ)にあります。セミ男装ともいえるスタイルでは「戦国野郎」の星由里子が野武士の女頭で魅力を発揮していました。

時代劇・現代劇の別なく多少とも変った特殊なスタイルは縛られ姿の魅力を増すものです。町娘でもあめ売娘(大爆笑の都はるみ・変幻胡蝶の舞の桜町弘子)、女目明し(風雲将棋谷の近藤美恵子)、角兵衛獅子(鞍馬天狗の築紫あけみ)、巡礼姿(風雲大阪城の藤木の実)などの種類があります。

「踊る竜宮城」の並木路子の乙姫様、「泰始

皇帝」の若尾文子の中国服、「アジヤの曙」の小林千登勢の中国の女兵士姿、「わが恋はリラの木蔭に」の高峰三枝子の舞踏会服、「銭形平次」の近藤美恵子の巫女、「白鳥の騎士」(テレビ)の赤木静子のアイヌ娘、などは、そのスタイル故に印象に残っているものです。

「奇譚クラブを斬る」でも述べられています。緊縛美は、縛り自体にのみあるのではなく、ことにロマン型・絵物語的美を求めるものにとっては、被縛者のスタイルは絶対的ともいえる構成要素です。奇ク誌に挿絵がはぶかれていて現在この点を奇ク誌に求めるのは困難なのでしょうが、最近の劇画漫画などにはかなりの奇ク的縛り絵もあるので、編集のし方によっては、絵物語の復活も可能なのではないかと、あえてつけ加えておく次第です。

(四) 縛りについて

本来からいえばこの章が本文の中心になるのでしょうが、ぼくは縛りの方法についてはそれ程注文もっていません。後手高手小手縛り、首なわ、股間縛り、あぐら縛り程度です。吊り、海老縛り等の変形縛りは好みませ

ん。もとより一般映画・テレビでは、後手縛り、吊り程度でそれも奇ク的緊縛までにはほど遠いものが多いのが普通ですが、ぼくとしては映画・テレビに望む縛りは、二の腕の縛りの緊縛感、縛り合わされた手首の表情で、縛りの奇ク的方法是望んでいません。

緊縛感を出すには、なわとびのロープほどの太さが適当で、ピンク映画ではすごく太いものを用いています。緊縛感のかえって失われます。太いロープの三、四巻きより普通のロープの六、七巻きが良いと思います。

縛られた手首が長い間うつし出されるシーンは少いのですが、「刺青」の若尾文子は良いうつされていきました。縛られた手首の表情の見事だったのは「流転の王妃」の京マチ子で、さすがに演技派だと感心したものです。桜町弘子も縛られた手首に表情をつくる人です。「性犯」の井上幸子の後手のもだえも見事でした。

後手縛りのまま柱や椅子に体ごと縛られる型は多いのですがぼくはこの型は好まず、長いなわじりを柱につながれている型の方が好きです。つながれた長いなわじりを引っ張るようにして身もだえるシーンは魅力的です。東映作品で新井茂子が演じたシーンが印象的

でした。

柱に縛られたなわ目がとけると同時に、体のなわ目もとけてしまうという安易な縛りが普通ですが、「花のお江戸の法界坊」では、旗本に捕われ柱に縛られた岡田茉莉子の町娘が、法界坊が旗本と争っている間に身もだえして柱のなわ目をとくが、後手と胸のなわ目は縛られたままで、長いなわじりをひきながら動きまわるシーンがあり、仲々楽しめた演出でした。

なわじりをとられて引き立てられてくるシーンも哀れな魅力があるもので「秘録おんな牢」で、安田道代が可憐な容姿を見せています。後手縛りといっても、手首へのなわ掛けの仕方、胸へのなわ掛けの仕方に種々の方法があるのですが、この点についてはこの文では略します。ただ、首なわは、後手を吊り上げるための必要条件であるとともに、縛られた姿に哀れさを強調する点で非常に魅力があるなわ掛けであります。映画では本式の首なわが見られないのが残念であることを申し添えておきます。あぐら縛りも「多情な乳房」で辰巳典子嬢が見せてくれたのみですが、ぼくの好きな型です。ただこの型も、ぼくの好みでは「姿勢」として好むのであって「責

め」として好むものとは異なります。したがって奇ク誌四月号に掲載された同嬢の写真も「観賞的姿勢」としての要素より「責め」の要素の方にかたよったポーズであったのが残念でした。

ぼくとしては、総じて縛りによって体を完封してしまう型は好まず、後手の不自由な容姿である動きを行なわせるところに緊縛美を見出しているわけです。

(五) 猿ぐつわについて

ぼくにとって猿ぐつわは、緊縛美構成上不可欠の要素です。奇ク誌三月号で久津和氏が書かれている如く、場合によっては猿ぐつわのための縛りともいい得るほどです。ただ久津和氏は鼻まで覆う型の猿ぐつわを好まれています。ぼくはこの型は好みません。鼻まで覆う型は瞳の表情を強調した圧迫感を表現しますが、ぼくの好みの対象は、猿ぐつわにくい込まれた頬、のぞけられた鼻孔の表情にあるので、口のみを覆う型か口に噛ませる型でなければならぬのです。かつては前者の型は邦画に多く、後者の型は洋画に多かったもので、このちがいを旧刊時代の奇ク誌で、日本では猿ぐつわに手ぬぐいを用い、西洋で

はハンカチまたはネクタイを用いるところからきたもの、あるいは西洋人は鼻が高いので、鼻まで覆うのが困難であるためという見解を述べられた方がありましたが、面白い意見だと記憶しています。型の相違のみではなく猿ぐつわに対する被縛者の態度にも、邦画と洋画とでは差があります。邦画の場合は、猿ぐつわをされた被縛者は、全く屈従した態度になってしましますが、洋画の方はうめき声を上げたり顔をふったり、動きがはげしく表情がゆたかです。一体に何か洋画の方が猿ぐつわをされるということにフランクな態度でのぞんでいる感じがします。猿ぐつわをされた美人の表情を、ときに喜劇的にとらえて表現することもあります。猿ぐつわの方法も物にくわえさせたりバンソウ膏を貼ったり多様です。

最近では邦画も、洋画の影響か猿ぐつわの方法も様々です。しかし猿ぐつわも縛り同様似合う人とそうでない人とがあります。また口を覆うより、口に噛ませた方が良い人もあるようです。テレビ「とぼけた奴ら」の川口晶はしばしば縛られ、猿ぐつわをかけられますがあまり似合うタイプではないようでしたが、あるシーンで口にバンソウ膏をはられ

た表情は仲々可憐な魅力がありました。一般的に猿ぐつわは彫の深い外人の方が似合います。「アバッチ」のジーン・ピーターズなど実に良い表情でした。邦画では星由里子が似合う女優さんです。「戦国野郎」での、縛られたまま男に襲われようとしたので男をのしりつばをかけたため頬にくいこむほど猿ぐつわをかけられたときのくやしそうな表情。

「佐々木小次郎」での、柱に縛られたまま助けに來た恋人の方に上体をのり出しながら、猿ぐつわの顔を懸命に上向けていた表情、ともに印象に残っています。浜美枝の猿ぐつわのシーンは末ありませんが、この人の表情は口を覆う型でも噛ませる型でも、良く似合う魅力的な表情になりそうです。辰巳典子嬢は口のみを覆う型が良いと思います。やや強くしめつければ彼女の形の良い鼻孔がのぞけ魅力ある表情になると思います。「肉魔」の終りのシーンでは鼻まで覆う型であったのが惜しまれてなりません。「三匹の侍」「求婚旅行」で印象的な噛ませる猿ぐつわを見せた桑野みゆきも、口のみしめつける猿ぐつわも似合う顔立ちの女優さんです。

ただ一般映画では、ヒロインが長い間猿ぐつわをかけられているシーンは、演出上も困

るので期待し得ないのですが、ピンク映画では、責め場として成立するので、猿ぐつわの場合は、ピンク映画の方に期待が寄せられます。事実、「性犯」の井上幸子、「多情な乳房」の辰巳典子、その他多くの良いシーンがあります。しかし多くの好む、鼻孔をゆがませのぞけさせる表情ゆたかなシーンには、もう一步といったところです。

きびしい猿ぐつわのつくり出す魅力とは別ですが「岩窟の野獣」で後手に縛られ泣いているモーリン・オハラに、チャールス・ロートンが絹のハンカチで口を割って猿ぐつわをかませ、馬車で自分の隣りに座らせて隠れ家に連れてゆくシーンがありました。が、ロマン型の魅力充分のシーンでした。テレビ「パロンの登場」で、猿ぐつわ後手縛りで椅子につなされた女性が、懸命に後手縛りを解くシーンがありました。が、この場合よくには縛りより猿ぐつわの表情の方が見ものでした。

(六) 状景について

状景とは縛りシーンの構成のことです。縛りは平凡でも状景の構成如何で、良くも悪くもなるものです。たとえば新東宝のある時代劇で、悪人に捕われた武家娘が、後手縛りで

隠れ家に連れてこられ、牢に入れられるのですが、鍵を掛けた牢の中でもなわ目のままであり、武家娘が牢格子に体を寄せて「何をなさるつもりです。なわ目をおとき下さい」と叫ぶシーンがあり、牢の中までなわ目の恥を忍ばねばならぬ姿が魅力的でした。この場合もよくには、身うごき出来ぬほど縛られて転がされているより後手縛りのみの方が好きです。身うごき出来ぬ縛りでの良かった例は、「三匹の侍」で、桑野みゆきの代官の娘が人質として捕われ柱に坐り姿を縛られ、百姓達が食事をたべはじめたとき、その食事を娘に分け与えようすると「そのような食事はたべられぬ」とことわったため、縛られたまま顔を上向かされ口に無理に食べ物を入れられるシーンがあり、この場合は柱に縛られている容姿が魅力のポイントとなっていました。

以下よくが良かったと感じたシーンを二、三書いてみます。

一、「戦国無宿」(テレビ) 女野武士川口小枝は、仲間にはぐれて一人旅の途中山賊につかまり、前手縛りのなわじりを馬のくつわにつながら、砦に連れてこられる。ここでもわ目をとかれ頭の前に引きすえられるが、頭が自分の体を求めると知ると、山賊を相手に

大暴れをする。しかし力尽きて今度は後手にあらわな二の腕、ゆたかな胸をきびしく縛られて、再び頭の前に引きすえられる。勝気と言うことをきかぬ小枝は、屋根裏に縛られたままとじこめられ、太いなわじりは梁につながれている。やがて窓の外に味方の仲間の来た気配を知り、太い長いなわ尻をひきずりながら、縛られた体を窓に近よせようと身もだえる。

二、題失念・東宝現代活劇物 ホテル風の部屋で悪役の中年の男と女の会話。――

男「おいあの娘が姿を見せないがお前が誘拐したんだろ」女「やっぱり嗅ぎつけられたわね、そんなにあの娘に御執心ならあげてもいいよ」男「一体どこに隠したんだ」女「こっちへおいでよ」――こんなやりとりがあり、女が浴室のドアを開けると、手足を縛られ口に猿ぐつわをされた水野久美が坐らされており、うらめしそうな顔で二人を見上げる。男は「こんなひどいことをしてお前も相当な悪党だな」と言いつつ、縛られたままの水野久美を抱きかかて室内にはこぶ。

三、「江戸忍法帳」(テレビ)悪老中のおとなしい娘が、正義派の方の仲間に捕えられその娘の代りに町娘を老中の娘に仕立てよう

というシーン。寺の本堂の中で、老中の娘は町娘と衣装をとり替えさせられる。貧しい衣装に代えられ、自分の衣装をまとった町娘に見下されている屈辱。やがて娘は柱に後手に縛りつけられ、猿ぐつわもかけられる。訴えるような眼で町娘と浪人を見上げる娘。その娘を見下して娘の父の悪業を喋り、きめつける町娘。

以上の例は所謂緊縛シーンではありませんが、いずれも場面の構成が縛られたものの姿を浮かび上げ、そこに緊縛美をつくり上げているものです。緊縛美は必ずしもきびしい縛りや責め場を必要とはしません。テレビ「レ・ガールズ」で、由美かおるが疑装誘拐のショーの娘役をやり、椅子に後手縛りにされながら歌うシーンがありました。これなど「レ・ガールズ」というおおよそ緊縛や責めとは程遠い、はなやかな風景の中における縛りゆえに一段と魅力あるシーンになるのである。ことに縛られながら歌うというのは実に魅力的なシーンです。またお正月のゲーム番組で、目かくしをした者が背負った者の指導でゲームをするのですが、背負われた者は手ぬぐいで口を塞いでおくので、司会役の犬塚弘が「さあ背負われる人は猿ぐつわをして」

と声をかけ、背負われ役の中にいた園マリが恥かしそうに、自分で真似てその猿ぐつわを掛けていましたが、こんなシーンも興味があるものです。

(七) つけたし

以上とりとめのない雑感を述べてきましたが、縛りの方法などについての好みは別として、ロマン型緊縛美というものの片鱗は理解していただけだと思います。この緊縛美は、決して排斥すべき悪徳から生れるものではなく、誰しもがもっている美女受難のロマンに対する美感に他なりません。もとよりぼくは他の二つの型の緊縛美を排斥して、この型の緊縛美のみの正当性を主張する意志はありません。ただ、新しい風俗誌を自認する奇巧誌においては「責め」に偏することなく「ロマン」をも強調していただきたく、筆をとった次第です。出来れば、次回は映画・テレビをはなれた現実の場での緊縛プレイ、及び緊縛小説などに触れて、書いてみたいと思っています。

(カット・スチール)

新東宝映画「肉体の野獣」

懸賞入選作品

(五回分割連載第二回)

創作

理 恵 女 献 身



「りえ女、罪状口書を認め

本格的な女囚として扱われ

素肌を晒され罪人格付けの

焼印を入念に押されること

沢 渴 しの

お牢内にまでついて来て下さるのは嬉しいけれど、おすてさんはどういう気なのでしょう。まるでお花見にでもついて行くみたいにごく普通のことをするように涼しい顔をしている。

「お牢内にまで。おそれ入ります」

「いいえ、私の勤めでございますから、御心使いは無用になされませ。その代り御国へは参りませんから、向うで御困りにならぬように、これからはおりえ様に囚人の躰をいたしますから、そのつもりでお勤め下さいませ」

から御殿に上り、御奥で成人いたしましたしその上、一人だけの御役でしたので、御奥の事もあまり詳しくは知らないようなわけでした、その外の世間の事は、まるっきり存じません。ことにお牢の事など、思ってみた事もありませんでしたので、どんな些細な事でも

「一々お教えいただかなければ、何もわかりませんが、精一ぱい勤めさせていただきます」
 どうやらおすてさんもあたし同様、殿様の御意でこんな御役をつとめていられるらしいから、ちゃんと礼をすると、おすてさんも、きちんと礼を返す。

起きると黙って襟に手を掛け、肌脱ぎにさせられて、襦袢を取って袷一枚にされ、そのあと、用がすむと腰巻も巻いて下さらず、素肌に着子一枚にされてしまった。

そろそろ囚人の躰というものが始まったらしい。手水の後で、初めて髪を結って下さる。水髪にして梳いてから、何やらあっさりと、くるくる巻き込んで、元結も何も使わずに、引っこきのまま束ねると、あまった毛先をからげて止める。二、三日洗髪でいたので襟元がさっぱりして、気持がよいけれど、なんだか頼りない。

ここは、確か御預り人なんか入れておく部屋だと聞いていたけれど、二方は板張りで次の間との境は襖、表に向いた方は障子で、直ぐ外の所に太い青竹を並べた格子があつて、床の間も押し入れもなく、調度の類は何もない空き部屋で、天井も何か厚い板で張つてあるらしい。その上、畳も縁なしの粗末なもの

だから、大層がらんとして見える。そこに坐っているあたしは、素肌に白木綿の布子一枚で帯もなければ元結い一本、塵紙一枚持たないのだから、所在ないことおびたらしい。片づけを済ました、おすてさんが入ってくる。

「御退屈でしょう。しかし、こうして一日中正座して慎んでいるのが囚人の勤めでございます。永牢なんかで二、三年もいると身体がそれに慣れて何とも思わなくなりますけれど、おりえ様のように二月、三月という短い期間の、体が慣れない中に済んでしまうのは、かえつてお辛いことでしょう。おりえ様は明朝、お呼び出しでございます。明日は、おりえ様の常の御姿の最後の御席ですから、御召物は特別のが参ります」

「まあ、そんな御心使いをいただかなくても私はお仕置まで決っている身体ですもの、このお仕着せで結構でございます」

「いいえ、これは殿様の御錠でございます」
 おすてさんは居住いを正して言うので、あたしは平伏すると、

「うりえを先日は平服のまま急に召し出し、又、明日以後は人界を離れ再び正装することがないのは、女人として誠に不憫である。明

日は特に切腹の格式にて出座致すように」との仰せ出です」

「ありがたき思召し、慎しんでお受けいたします」

おすてさんは元の言葉にかえって、

「そういうわけでございますから、明日は本式の死装束を御召しになるように、今あちらのお屋敷で北の方様がお手ずから仕立てておいでだそうでございます」

それではご辞退することもできない。でも女は、お手打ちでもなかなか本式の死装束はつけさせていただけないそうだから、一生の思い出に正装させて頂こう。

「それはもったいないことでございます。私のようなものを、それほどお心にかけていただいては、御恩報じのいたしようもございません。精一杯、勤めさせていただきます」

「さようでございます。明日からは、命の絶えるまで、それはそれは苦しい差かしいことばかりでございますけれど、御当一家一統のために人身御供におなりになるのですから、どうか立派にお勤めになって下さいませ。何分、御公儀へのはばかりもあり、又何と申しても叛逆罪人としてお仕置柱に架かっていただくのでございますから、そのときには定法

通りにいたさなければなりません故、明日はお人として最後の晴着をお召しいただきますが、おぐしも逆礼の片はずしわけに結っていただきます。それに切腹の格式ですから、お袴もつけさせていただきます」

「それではほんとうに、すっかり切腹の通りの、男の格式でございますねえ。嬉しゅうございます」

「はい、おりえ様は殿方の身代りにお立ちですし、別式を許されておいでになったほどのお方ですから、せめて袴だけでもつけさせてやれと仰せられたそうで、初めは袴と仰せられたそうですけれど、例がない上、かえって似合わしくなろうとのことで、扇子腹の格式の死装束を整えることに決ったのでございますが、お首を召されるわけではありません故、お召物は全部襟つきで女仕立てになされお肌のものまで、すっかり揃えて下さることでございます」

若い時から寝過ぎさないのが自慢だったけれど今朝もちゃんと暗い中から目がさめた。でも、おすてさんはとくに起きていて、あたしの動く気配に気づいて入ってくると、「おぐしを梳いておきましょう」

と言って丁寧に髪を梳いて下さる。お寝梳きしてもらうのは幾日ぶりかしら。何だかとても遠い昔のことのような気がして、大変なつかしい。おすてさんは、こんなことまで、よく気をつかって下さる。

「さあ、よろしゅうございます。お起き下さいませ」

はっと気がつく。梳いてもらいながら、うとうとしていたらしい。

食事の後、御役目の日のように行水をつかわせて下さったので、心も身体もしゃんとなる。胡馬北風こばほくふうに嘶いく。このことわざを、ふと思ひ出して、昔の人はうまいことを言うと思つて感心する。

白羽二重の着物が一重ね、折敷おしきに載のって合ご器口きぐちから入ってくる。拝領の品だから、前に坐つて一礼してから拝見する。一番下に小袖つぎに間着、襦袢、腰巻と、きちんとなつてゐるけれど、手にとってみると皆ひき裂いたまま、くけずに仕立てであり、袖口も裾も毛羽立ったままになっている。確かに死装束です。立ち上つて腰巻の前を合わせようとする、おすてさんに

「反対でございます」と言われる。そうそう左前に着るんだった

つけ。襦袢はちゃんと逆礼に合わせて着る。つぎは、いつもの半襦袢でなく襟なしの間着になっている。長襟袢ながえりというものらしい。前を合わせてみると、袴とお盆が入ってくる。おすてさんは、お盆を持って前に坐る。何かと思つてみると、お盆の上には細長い紙に糊を引いたのが何枚ものついで、おすてさんはい枚とるとあたしの腰に巻きつける。

「このお召物は、尋常にお脱ぎになるものではありませんから、布の帯紐は使いません」と説明して下さい。ひいやりする紙紐をよく張り合わせてから、坐つて髪を結つていただく。鬘まげは、いつもの片外しだけど、漆紙を使わず腰に巻いたのと同じ白紙で巻くと、糊がついているから元結もとむすもいらぬ。笄こうがいも白木の細いのをさして、反対にわけて結い上げる。ちゃんと鬘がつくと、頭に手応えが出来て、人らしい気持になる。

立つて小袖を着てみると、袂は女仕立だけれども襟は男仕立てになっており、丈も対丈になっている。紙の帯を巻かれて袴に右足から足を入れて穿き、これも紙の紐を破らぬように静かにしめて、軽く結んで糊をつけてとめる。おすてさんが

「殿方と違って女は白無垢を着られますから

ようございますねえ」

と、ほめて下さる。あたしは色白だから水あさぎ浅葱でも似合うと思うけれど、白無垢の方がすがすがしい。もっとも裂きつ放しの白無垢姿というと、お墓に埋められる死骸と同じ姿だから嬉しがってもおられない。

あたしは今日、葬られるわけではないが、物心ついて以来の御殿女中で、四民の上と自負して人を見下してきたこの身が、後一刻もすれば人界を追われて穢多非人からさえ蔑まれる畜生の分際の下げられて反逆罪人になつてしまふんだから、やっぱり今日が最期だと思つてよいのだろう。

袴を鍬にするといけないから、立ったまま袖口や何かのほつれ糸を抜いていると「出ませっ」と声がかかったので、びっくりして声の方を見ると板戸が開いている。あたしは、やっぱり女だ、着つけに夢中で戸が開いたのにも気がつかなかったのだ。

目付役の若侍が二人、脇差をとって丸腰になつて入ってくと、あたし両の袂を持って押し出す。

玄関に出たので何を履くのかと思ったら、外に向かつて五寸ほどの板がずっと敷いてあり、若侍だけ草履をはいて、あたしは素足に

板を踏んで行く。縁伝いに行くのかと思つたら、小屋敷から次の間を通つて席に坐らされる。締め切つた障子に朝日がさして明るい。

上段の森田様が、書いたものを取り上げて取次に渡され、あたしの前にくる。あたしは一礼して押しただき、胸を張つてちゃんと開いて見ると、始めに申し口書きとして、

「二月二十四日、永の暇の上、押し込み仰せ付けられ候。元中臈、理恵」

と書いた後は白紙で、最後のところに

「不敬の至り、謝り入り奉り候」

とだけ書いてある。

「その口書きの通り相違なくば、花押を致しませい」

何も書いてないのだから、話が喰い違ふ心配はないわけだ。

「はい、口書きの通りに相違ございません」

あたしは、きっぱりと答えると、祐筆が硯箱を持ってきたて書く場所を示されるので「理恵」と書いて下に書き判をすると、祐筆は森田様の前に持つて行く。森田様は丁寧に開いて御覧になると、もと通りにたたんで文箱に納め紐の結び目に封印までして脇におかれ、きつと居住いを正されたので、あたしは平伏すると、

「その方儀、罪状明白なるにより、改易焼印の上、入牢申しつくる」

と森田様は言い渡される。

「はあ、ありがたき仕合わせに存じます」と平伏したままお答えしている中に、後の障子がさつと開いて三人ほどの侍が後へきたか、と思う間もなく、襟と両腕をとつて起こされ、襟元を開いて肌脱ぎにされ、袖から手が抜けると直ぐに細引きがかかる。森田様は正面から見据えておられるし、他の人も見ていらつしやるから、なるべく平気な顔で森田様のお胸のあたりを見ているが、自然に顔が熱くなってくる。いくら覚悟を定めたといつても、こんな晴れの場所で素肌を出されるのは羞かしい。でも、もう両手は背中へ結わえられて腕や肩へも赤茶色の御縄がかかっているから、お乳は丸出しのまま、どうすることもできない。

森田様がうなずかれると、若侍はあたしの縄尻をとつて縁先へ引き立て肌脱ぎの着物をぐいと後へ引く。びりびりと紙の破れる音がしたと思う間もなく前がはだけて、お腰まで一緒に身体からするりと落ちてしまったので思わず「あ」と腰をかがめるところを、後からどんと突かれてお庭先へ蹴落とされる。

それでもどうやら足をついてよろけるところを、下にいる人が支えてくださったので転ばずにすんだが、そのままどんどん歩かされて仲間たちに囲まれながら御馬場の方へ曳かれる。着物はすっかり縁側に残って、丸裸になってしまった。でもお縄がかかっているから、一糸まとわぬというわけではないのだから、うけれどお縄だけでは露わにこそなれ、隠す役には立たない。

はだしで土の上を歩くのは生れて初めてだが、とても冷い。どんどん引き立てられて馬場を横切り、お厩の前を通り過ぎて作事小屋の前へくると、鍛冶場の炉に火がおこっており、焼印らしいものが見えて草色の焰が上っている。

「よし、寝かせい」

声がかかると私は前の荒筵の上に俯伏せに寝かされ、五、六本の棒で背中から足まで押さえつけられる。気になるので上目使いに見ていると、いつかの御目付が炉の火加減を見ていらっしやったが、一つの焼印をとり上げると、こちらへこられる。真赤に焼けた大きな丸い印を、しばらく見つめていらっしやったが、少し色が黒くなったかと思うと、あたしの体の上に馬乗りになられ、背中がポーッ

と暖いと思う間もなく、「参るぞ」と言う声がすると、背中を断ち切られるような痛みが襲い、目の前が真暗になる。あたしは「ウウム」と呻きながら押さえられた手足をもがく。やがて焼印は外され、目付役が立ち上り、囲りから手桶の水をザアザア浴びせられる。棒をとられて身体が楽になっても声もでない。それでも水で冷されると幾分、人心地が戻ってくる。次に「裏返せ」と声がかかる。なるほど人並みの扱いじゃない。急に涙が出てくる。それでも大分、気をつかって静かに仰向けに直す。又棒で押さえられると「口を開け」と言われ、六尺棒の中ほどのところを咬えさせられて左右二人がかりで押しつけるので口が裂けそうに痛い。今度は四角い印を持ってくると、桜色に光っている焼印を持ち直して頭のそばに膝をつき「目をつむって」と言われ、目をつむるやいなや、熱いと思う間もなくジューンと爪を焼くような匂いが鼻をついて、御印をゆっくり眉から額へ回してあてられる。思わず声を上げるが、喉を押されているので息がつまって声にならない。毛の燃える煙とともに印が放されると、又水をドンドンかけて下さる。

気がつくと、辺りは静まって額に濡手拭が

のせられたまま、さっきの筵の上に仰向けに寝かされていた。そばには御目付と今一人の方がおられた。「気がつきました」と、その人が御目付に言う。これはこれは、御外道医の馬島様だった。いつもは、御女中は手当ての時まで恥かしがるので療治がしにくいと、口ぐせのように言っている御人だ。いかがです、これならよく診察できるでしょう。

柄杓で手拭の上から少しずつ水をそそぎながら、

「これほどの火傷に薬は一切、御停止と申されますと、固まるまでには、大分長くかかりますな」

「左様、二月はかかります」
ふたつき

「そうでござろう。私どもが手をつくしてもひとつき
一月ではむづかしい」

「なるほど、療治をすれば罪人の苦痛は和らぎましょうが、印形が薄くなります。私の見たかぎりでは、自然に固まるのを待つ方が印形が鮮かに残るように思います」
やわ

「それはその筈でござる。何分、手前どもは火傷の跡を残さぬように苦心いたしておりますが、御印形が消えてしまつては何もなりませんなあ」

お役の人というのは身勝手なものだ、人の

肌だと思つてのんびりした話をしていらつしやること。

それでも手拭をとつて丁寧に調べて、水をかけて下さる。

「この者に尋ねてもよいかな」と断つてから「気分はどうかかな」

冗談じゃない。下人たちの前で裸にされた挙句、背中と顔にこんな恥かしい焼印を押され、生れもつかぬ片輪にされた女が、よい気分でおられるのですか。でも御医者様にあつて見てもかえらぬことだし、いくら御彼岸近いといつても庭先で裸の身体に水をかけられて、寒くてかなわない。

「ありがとうございます。もう大丈夫でございます。とんだお手数をおかけしました」と言いますと、それでもそおつと肩に手をかけて下さる。どうも素肌の後手というのは、殿方の前ではきまりが悪くて仕方がない。おすてさんでもいて下さると、まだよいのですが。

「御印の跡は手でいじらぬことじゃ。物にあてぬように気をつけなされ」

「はい、承知いたしました」

と答えると、馬島様は向うへ行かれる。

御目付は、思い出したように小屋の棚のと

ころへ行かれると、鏡を二面とつてこられ、あたしの顔を写して見せて下さる。あたしは思わず、ぞーっとする。何とひどくなつてしまったのだろう。額一面が赤くただれたようになつて、髪も前髪があらかた燃えてなくなり、跡が焼け焦げになつてゐる。その一面やけどの中に四角い枠に畜生の二字が、焦げ茶色にくっきり出ている。あまりのことに目を逸らすことも出来ない。今一つの鏡を背中へ回して合わせ鏡にして背中を見せて下さる。同じように焼けただれた中に、丸に畜生の字が浮き出している。

「今はただれておりますが、やけどが直れば御印形が鮮かに残ります。よく堪えて下されたので、存分に押せました。二月もすれば見事な御印形になりましょう」

御役向きとはいいいながら、この人は焼印が上手に押せたので得意らしい。わざわざ合わせ鏡までしてあたしに見せるのは、ほめてほしいのだろう。あたしにもそんな覚えがあるから、

「ふたところながら、御見事な御焼印をいただきます。おかげをもちまして、心楽しく御仕置を勤めさせていただけます。おなごの身にとって、このように嬉しいことはござ

いませぬ」

と、ほめて上げる。こういうのを、心にもない追従口と言うんでしょう。

「いや、そのようにおほめにあずかつては、痛み入る。ただ御役目を勤めただけのこととでござります」

あたしが奥女中だった時と交らぬ礼をされるので、あたしも恥かしい姿ながら、ちゃんと礼をかえす。

「多忠」と呼ばれて年寄りの仲間が出てきて「牢へ下げい」の声とともに静かに立たせてくれるので、先に立って歩き出す。いくら屋敷の内でも、こんな姿で曳かれて行くのは、きまりが悪い。皆様が常の通りに扱つて下さるのだから、あたしも悪びれずに胸をはっていなければいけないと思うのだけれど、やっぱり工合が悪い。

今朝出てきた御囲い長屋でなく、馬場を横切つて御料馬小屋の方へ行くので、御厩をよく見ると、二棟ある御料厩の古い方が竹矢来で囲つてあり、入口には木戸が二重にこしらえてあつて、その間に番小屋まで作つてある。中の番人が開けてくれた木戸を入り、戸締りをしてから内の木戸を開けている。まったく囚人というのは手がかかる。

御厩の表は板戸を立てて、その上に何本も木をそえて止めてあり、横手のくぐりから入る。暗いのでちょっと渡り、目をつぶってから見廻すと、三頭分の仕切りの中、左右のところに新しく格子がはまって、その両側の物置だったところは番人の席になっているらしい。

待っていた槍役が、左の格子の下のかぐりを開けるので、その前に行つて膝をつくと、御繩をとり下さつてから「入れっ」と言われるが、二尺四角ぐらいしかない小さな戸口なので、四つん這いになって背中をいたわりながら、そおと入ると、たちまちガチャリと錠が下りる。

「おかえりなさりませ」

と言われて気がつく、奥におすてさんがいる。立つてくると手拭で泥だらけの身体を拭いて下さりながら、

「まあ、見事に押せましたこと。さすがに殿様のおめがねに叶うだけあって、おりえ様は立派な畜生におなりです」

と、あまり嬉しくないほめ方をする。

「御印が固まるまでは何も申しません。お静かに養生なさいませ」

「はい、ありがとうございます。背中の方は

こらえましたけれど、顔の時には氣を失つてしまいました」

「さようでございましょうとも。私など背中だけで血が上ってしまったんですもの」

なあんだ、この間は強そうなことを言っていたのに。それとも、なぐさめて下さるつもりなのかしら。

辺りを見まわすと、馬屋のままの三方厚板張りの土間で、ませの代りに格子を入れただけらしい。格子のそばに穴が掘ってあり、灰が入っている。奥には藁が厚く敷いてあるだけで、他には何も見えない。

「こちらへ」と手を引いて敷藁の上に坐らせて下さるけど、ちくちくして工合が悪い。

「しばらくおやすみなさいまし」

と藁の上に寝かせて下さるので、背中をいたわりながら左を下にして横になる。上にも藁をかけて下さるけど、枕がないので腕を頭の下に入れておくと、おすてさんは枕元によつてきて、あたしの頭を膝にのせてくれる。さつきから用意してあったらしい濡れ手拭を額にのせて下さると、うずくのがよほど楽になる。いつの間にか、うとうとしていたらしい。

「いかがですか、少しはお楽になりましたで

しょうか」

辺りは暗くて、格子の外に掛け行燈がともっている。御焼印は辰の下刻ぐらいだったはずなのに、いつの間にか夜になっている。

「何刻頃でしょうか。すっかり寝過ぎて」と言つて起きようとするが、頭と背中がズキズキし始めて動けない。

「さようでございませうねえ。さつき鐘が聞こえましたから、六つ過ぎでございませう」おすてさんは一日中じつと膝枕をさせていて下さつたのか。あたしは思わず頭を上げて「まあ、とんだ失礼をいたしました」と言つて起きようすると、

「そのままでお動きになつてはいけません。

今朝は御役向きの方々の前で素肌におなりになられて、さぞお辛かつたでしょう。いくら覚悟していても、なれるまでは本当に辛いものでございます。でも、おりえ様は口書をおすませになつて、罪人に下られたのでございます。罪人と申すものは、御肌の焼印の通り畜生の身分でございます。それ故、ああして畜類同様になされるので、決して無理無態なことをなされるわけではございません。又、この御牢屋にしても、御人ならば昨日までの御座敷に置かれますが、けだものを座敷にお

くところは日本国中どこにもございませんでしょう。こうして物もなく土の上に寝起きするのが、あなた様のような畜生の役目でござります」

さつきから何か着せて下さらないかと思っ
ていたけれど、この分では何にもただけな
いらしい。そう思って気がつく、おすてさ
んも何も着ていない。どうも仕方がない。畜
生同士だから、何とかされるまで丸裸で暮そ
う。

「畜生と申すのは気楽なものでございます。
人は死ぬと地獄極楽のいずれかに参るそうで
すけれども、私どもは来世は本当の畜生道に
行くのでございます。でございますから、現
世でこうして恥かしい見苦しい姿を晒しても
死んだ後は、外の人や御先祖様に顔を合わせ
ることもなく、又想いが残って人の世に迷い
出ることも出来ませぬ」

おすてさんは、恐ろしいことを平気な顔を
して言う。

「まあ、来世は本当の畜生に生まれるのでご
ざいますか、何に生まれるのでしょうか？」
「さあ、それは何とも存じません。牛馬かも
知れませんが、ねずみやいたちか、それとも
虫か鳥かも知れませんか」

ひどいことをされて死ぬのだから来世は極
楽でもよほどよいところへ送っていただかな
けりや間尺に合わないと思っていたのに。

「私が伺った和尚様のお話では、私どものよ
うに罪障深く生きながら畜生に下げられた者
は未来永劫、生き変り死に変わり畜生道をさま
ようのだそうでございます」

「でも、いくら人身の畜生とは申しながら、
御犬をかけられるのは悲しいものでございま
すよ。本当に舌を噛んでも死んでしまいたい
ぐらいなものですけれど、その代り未練がふ
つ切れます」

まさか本当になさったわけではないだろう
けど、たとえにしてもひどい話だ。

「おりえ様も覚悟していて下さいませ。多分
御国表で御晒しの時だと思ひます」

こんな大きな焼印を二つも押されてしまっ
たんだし、今更どうなるものでもない。

「でも私は、その後じきにお仕置に上るんで
すから、まだよろしゅうございますけど、お
すて様はお辛かったですよねえ」

「はい、あんな情ない思いをしたことはござ
いませぬ。ついこの間までは、私などにも土
下座して口も利けなかった人別外の男達が輪
になっっている中に、口には轡をはめられ首に

綱をつけられて四つん這いで引き出され、杭
につながれて見物からは散々いやらしいこと
を聞かされるんです。同じ杭に大きな犬が二
三匹も一カ所につながれて、泣くこともでき
ません。でも、そうして一日中、相手をさせ
られてゐる中に、自然に私も本当の畜生にな
った、獣に生れ変わったと思えて、人の未練が
ふり切れるのですから、私どもには大切な勤
めでございます」

「よくわかりました。うろたえぬようにいた
しましょう」

この間までは夜も痛くて眠られず、おすて
さんに一晩中、手拭で冷していただいたりし
ていたけれど、この二、三日、大分楽になっ
て御印形も乾いてきた。昨日、初めて髪をと
いて梳き直していただいたら、額の辺りの根
の焼けた毛が一握りほども、とれてしまっ
た。そっと手を当てて見ると丁度、手の掌ぐ
らい禿になって、手さぐりでも畜生と読め
る。あたしは、これまで御器量がよいとか、
器量を鼻にかけているとか言われたし、自分
でもお化粧をするのが楽しみだったのに、こ
んな大きな焼印を押されて二度と再び人交り
のできない姿にされてしまった。髪も梳くた

びにばそぼそ抜けて、情ないほど少なくなった。礫にしていただくの、こんな情ない身仕度をさせられるとは思わなかった。もっとも、あの時に殿様が「大そう言いにくそうにしていらっしやる」と思ったけど、礫といったって多寡が槍で突かれて死ぬだけだと思ったもんだから、御存分になさって下さいなどと勇ましいことを申し上げてしまった。とにかくあたしの方からお願ひして勤めさせていただいているお仕置なんだから、文句の持つて行くきどころがないけれど、これからも死ぬまでには大分ひどくされなけりやならないし、まったく大層なお役を引き受けてしまったものだ。これ以上、手のかかる死に方はないのではないか知ら。

おすてさんは平気な顔で、髪を毛巻きに結って下さりながら、

「大分きれいになりましたから、二、三日の中に殿様に御覧いただきましょう」と、こともなげに言う。

「今日のお昼過ぎに殿様がお出ましになるそうですから、間もなくお仕度をさせます」

どうせ前から知っていたのだろうに、昼近くなつて言い出す。

間もなく人の出入りが多くなつて、隣の空き部屋に何か運び込んでいられるらしいのが一段落すると「出ませい」の声がかかる。あたしは恥かしさに赤くなりながら四つん這いに這い出すと、直ぐ両手をとって隣の空き部屋に連れ込まれ、左右の柱の手綱つなぎの鉤に両の手首を、それぞれ結びつけられて、正面を向いて立たされる。おすてさんは向うの隅へ行つて物を引っかけると、紐を締めながら私の前にきて、

「殿様の御覧に入れますから、その仕度をさせます」

と申し渡される。あたしは軽く頭を下げた。あたしの前に馬盟を引きずり込むので、縁を跨いで中に這入ると、丁度真中に立つように盟の位置を直す。つながれているのは不自由なものです。桶で湯が運ばれてくると女子衆に手伝わせて、おすてさんが洗って下さる。柄杓で頭の上からお湯をかけて髪を洗いそれを上に張り渡した綱にかけておいて丸洗いに洗われる。これでは、お馬と同じ洗い方だ。それにしても厩というところは馬以外の畜生を扱うのにも仲々便利にできていると感心した。

身体を布で拭いて手首を鉤からとかれると

後手に結えられ、新しい筵の上に坐らせられる。おすてさんが髪を梳いて下さり、女子衆も手伝って、きっちり引っこいて結って下さる。よほど珍しい鬘なのか、女子衆が、「これは何と申す鬘でございますか？」と小声で聞くと、

「別にきまりがあるわけではございません。その中に切ってしまうんですけど、今日は特別でございますから結び兵庫にしておきましよう。鬘たばを出さずに結う鬘なら、梳き髪でもいぼじりでもかまいませんが、垂れ髪は急に切る時に差支えますから、毛巻き結びなら何でもよいから、必ず結わせておいていただきます」

と、おすてさんは言います。髪を結び終ると、男役人が出てきて茶色の細引で本式に身体を縛られる。二丈ばかりもありそうなお縄をさばいて、こまかく丁寧に結び目をつくりながらかけて行き、腕もきっちり胸の縄に結びつけられ、お乳の上にも二筋ずつかけられ後に組合わされた手首も念入りに縛って、縄尻を三つぐりに編み込んでいらっしやる。上半身は、まるで俵のようになってしまったけれど大して苦しくはない。しかし手を後に結えられると胸を張るので、俯向くのは苦しい

し、身助きをしようとするとお乳がしまる。

横で見えていらした森田様の奥様が、

「御見事でございます」

と挨拶をなさると、お役の方がきちんと返礼をしていらっしやるのを見ると、作法なのでしよう。女子衆が鏡を持ってきて顔を見せて下さる。もう赤味はほとんどとれて、地のところは太分、肌の色に戻って文字だけが赤茶けた嫌な色になって、てらてら光っている。髪は御印の囲りが五分ぐらいの巾に禿になってしまったので、まるで男の月代さかやきのようになつて、その中に四角い印形がくっきりと残り眉は丁度、御印の枠にかかっているのだ。左右の端の方に少しづつ残っているだけだ。その上、鬚も鬚をはらずに引っこいて束ねてあるものだから、男だか女だかわからないような変な顔になつてしまった。合せ鏡にして背中も見せて下さる。背中も殆んど直つて肌は白くなり、丸い御印だけ赤っぽい色で鮮かに見え、御縄も御印を除いて菱形にかかつている。

「こういう御姿ですから悪びれずに、ちゃんと顔を上げていなければなりません。どこも隠せるところはないのですから、もじもじしても見苦しいだけです。御目見得できる身分

ではありませんから、何を仰せられても前を見て聞いているだけで、返事をしてはなりません。頭を下げることも無用。目は開いていること。さあ、そろそろお呼び出しです」「はい」と答えると「無用」ときめつけられる。こうなつては、うっかり頭を下げるわけにも行かない。おすてさんも、向うから知らん顔をして見ている。

「立ちませい」の声で立ち上ると、おすてさんが出てくる。手に、たたんだ布らしいものを持つているので、ほっとする。一巾だけどちゃんと仕立ててあるのを、きっちり腰に巻いて付け紐を結んで下さる。やれやれ、これで一安心。丸裸のまま殿様の前に出されるのかと気が気でなかったのだ。

御目付が三尺ほどの太い竹竿をとつて、その中にあたしの縄尻を通して持たれる。竿のあたしの方の端は、両面からそいで二又に裂いてあり、縄を引き込まれると先が手首にあたる。軽く押されて歩き出し、くぐりを出る。格子の口と違って、普通の戸口は楽に通れる。しかし以前の縄のつもりで腰をかかめ頭を下げて通つてしまったので、我ながらおかしい。

久方ぶりに外の光の中に立つ。まぶしくて

しばらくは何も見えない。春の風が素肌に快い。これでも少しは素肌に慣れたらしい。歩きながらふと見上げると、桜がすっかり青葉になつていゝる。御厩に引き込まれた時にはまだ桜の蕾も固かつたのに。確か五十日ぐらいになるはずだから当然だけど、始めの中はやけどが痛いのと寒いので薬にもぐつて寝てばかりいたし、それから素肌のお稽古だと言われて薬をかぶつて小さくなつていゝる中に花も済んでしまった。

御小座敷かと思つたら御書院の方へ行く。新しい杭の前に坐つて、竹縄のままつながれる。御目付は木戸の方へ下られ、縁に人の氣配がする。御絵師の梅園どのが、少し左上りの縁先に坐つてあたしの姿を写し始める。仕方がないから腕を合わせて胸をはつて坐り、三間ほど先の飛石に目をつける。梅園どのは落ちつきはらつて筆を動かしている。まあ、あたしはお墓も立たないし、位碑も残らないのだから、せめて絵姿でも残していただこう。

どうやら絵が出来たらしく、梅園どのは御障子の中へ声をかけられると、殿様がお出ましになつて絵と私を見くらべてから「うむ」と言つて絵を戻されると、梅園どのは下つて

行く。殿様は縁先に立たれて私を見ていらっ
しやうたが「七郎」と御目付を呼ばれる。

「ここではらちがあかぬ。馬場へ引けい」

「ははっ」

静かに竹縄を押されて歩き、馬場と御庭の
間にある御休み所に入る。ここでは誰も近づ
けない。馬場の方は窓で、他の二方は壁にな
っており、入口は腰高障子で、窓にも障子が
立ち切つてあるから中は見えない。窓の側は
四尺ほどの土間で壁の方が三疊の畳になつて
いる。

土間の奥の、おしとねに向つてあたしは坐
らされると御目付は竹筒を抜いて縄を腕へ回
る縄の間にはさみ、後腰にさしていらつしや
ったものをとつて開かれる。横目でみると鉄
でできた足枷らしい。

「腰を上げて下されーい」

両足首に金具をはめて、止め金をガシャリ
とかけられる。足の間が一尺ぐらゐもあるの
で尻が落ちて膝が合わなくなつてしまった。
なるべく工合よく坐り直していると、

「殿が見えても、しばらくは神妙に控えてい
なされ。御小姓が茶菓を持ってきたならば御
意次第になされてよろしゅうござる。だが、
拙者が入れば、直ちに止めていただきます」

「承知いたしました」

「では間もなくお成りです」

とお目付は出て行かれる。

間もなく聞きなれた足音がして、殿様が見
える。うるさい人はいないから、かまわない
だろうと思つて礼をする。「うむ」と殿様は
言つて、おしとねにつかれたので顔を上げる
と、しばらく見ていらつしやうたが、立ち上
つて草履をはいてあたしの前にお立ちになり
「背中を見せてくれ」

と言われたので、思わず「はっ」と言つて
しまふ。足が動かせないで腰を浮かして、
少し身体をねじるようにすると、殿様はあた
しの肩に手をかけて御覧になつていらつしや
うたが、右手で印形を撫でながら

「大分深く押されたな。辛かつたであらう。

しかし、見事なものだ。よく押させたぞ」

今度は首筋に手をかけて、額の印を御覧に
なる。印形や生え際の禿になつたところなど
をもてあそびながら、

「そなたでなければ、こんな役を勤めてくれ
る者はいない。そちに印形が似合うかといわ
れて心配したが、これで安心いたしました。立派
な姿だ。よく似合うぞ」

あたしは、急に涙が込み上げてくる。

「うれしゅうございます。殿様の御意にか
なうことでしたら、どんなことでも、いとい
はいたしませぬ。この後も御存分になさつて
下さいませ」

「かたじけない。藩中にかわつて礼を申す」
殿様はあたしの額に頬をつけて抱いて下さ
る。その時、人の気配で席に戻られ、あたし
も真直ぐに坐り直す。間もなく御小姓の文之
進様が、盆を持って入ってくる。しかし、あ
たしが素肌なのを見て、ぽつと赤くなり、殿
様のおそばに盆をおいて逃げるように出て行
こうとする。

「文之進、そちや皆川達の身代りになる、お
りえに挨拶せぬとは無礼であらう」

と殿様は叱責される。文之進どのは驚いて
その場に膝をついたが、目のやり場に困つて
いる。初心な^{うぶ}おひとだこと。

「文之進様、ごきげんよろしゅうございます」
とあたしが言ふと、ようやくわかつたらし
い。

「顔かたちが交つているから、わからぬのも
無理はない。許してつかわせ」

「ごもっともでございます。お氣になさいま
すな」

と言つてあたしが立ち上ると、

「おりえどのは気づかず、御無礼いたしました。私、不浄者を見るのは始めてです」
又、口をすべらした。本人に向って不浄者と言つて謝っているつもりらしい。殿様は気がつかれて

「おのれの身代りに立つ者を、不浄者とはひどい申しよう」

と笑いながら、おからかいになるので、文之進様は益々真赤になつて弱っている。そして懷中に何か持っていたのを思い出して、袱紗に包んだものを、

「森田様がこれを」

と言つて差し出す。殿様が袱紗を開いてご覧になると、銀色に光る金具が見える。

「ああ、もう出来たのか。使い古しをつけさせるわけにはいかぬから、新しく打たせたのだ。囚人の轡には男女の別はないと申ししたが、りえは細面だから小ぶりに作らせた」
話に聞いていたが本当の鉄の轡をつけさせられるとは驚いたことだ。

「色々お物入りなことでございます」

「いや、遠慮はいらぬ。もっとも、そちにはこんなものをつけるに及ばないのは承知しているが、定法通りにしなければ仕置が立たない。これは口に入るところが銀にしてあるか

ら、常のよりは口あたりがよいであろう」

「お心遣い、かたじけのうございます。私が乳母から聞きましたのでは、囚人は齒を抜かれると申ししておりましたが」

「古式には、そうなっていると申した。しかし国送りの囚人の齒を抜いてしまうと食物が消化できず仕置まで身体がもたない由、どこか家中でもそのたびに困っていると申している。これならば朝夕の食事の折には外ずせるし道中、陸尺が転んで駕籠を落しても舌を噛む心配もない」

これはどうも殿様のお物好きかららしい。

「さて、本日そちを呼んだのは外のことではない。このたびのことはそちのお蔭で万事内々で落着いたした。なかなか面倒なことで、始めは大目付の方で一切、調べるという話であつたが、色々手段をつくした結果、すべてそち一人の罪として当藩内で処置するよう御沙汰があつた。そこで当藩ではそちの仕置の方法をきめなければならぬ。罪状としては反逆罪にあたる故、軽き場合は生胴生吊り胴など、重ければ磔、逆さ磔、女ならば串刺しの例もあると申す。いずれも古いこと故、それほどこだわることには及ばぬ。そこでりえの好きな仕置にいたすのがよいと思うが、どうじゃ

文之進、それを見せてつかわせ」

文之進様は画帳を開いて畳の上に立て、あたしが見えやすいようにして下さる。

「御用部屋で磔にせよとの意向だというが串刺しか磔か、いずれでもよいと森田は申ししていた。磔は罪人の両の脇腹を槍で突かせるのだが、男女の別なくどのような罪状の者にも行う。串刺しは久しく廃絶している仕置だがおなごの極刑に定められており、この刑になつたのは国守大名の姫以外には例がなく、格別の仕置になっている。この二つの中、いずれかにいたしたいと思うが、どうかな。絵図を見て選んでくれい」

始めの三枚は「磔の次第」と題がついていて、十字の型をした木の柱に、あられもなく大の字に結わえられた人が画いてあり、最初の図は、柱の前で縄で括られた人々が首を斬られており、首は台にのせて晒されているのを柱の上の罪人が悲しそうに見下ろしているところで、次の図では柱に磔られた罪人が、脇腹を槍で突かれて苦しうにもだえているところ。三番目の絵は大の字に磔られたまま頭を垂れて死んでいるところで、見苦しい腹わたが出てくる。私は思わず冷汗が出た。

次も三枚つづきで「串刺之図」と題してあ

る。このお仕置柱は、高い柱が二本、三尺ほど離して立っていて、横木が二尺ほどあけて井げたに組んであり、罪人はその横木に両腕を結びつけられて大の字にされ、両足首は柱に結えられている。始めの図は、刑架の前方に大勢の見物人がいて、罪人は恥かしそうに俯向いている。罪人が見たような顔だと思つて見直すと、あたしの絵姿になっているので、顔がほてつて真赤になつてしまった。いくら人身御供の身でも、街道筋の高い柱にこんな姿で架けられたら、どんなに恥かしいことでしょう。次の図は罪人の身体に長い六角な木の串を刺しているところで、悲鳴をあげているらしく、口をあけて手を握りしめている。三番目の図では顔を空に向けて、開いた口から串の先が高く突き出している。こうなつては直きに死んでしまうだろう。

物心がついてこの方、女のたしなみとして立居振舞いには常に膝を合わせて、内腿を放さぬようにしつけられたのは、死に様が乱れぬためと聞かされてきたのに、最期の時にはこんなあられもない姿を晒して死ななければならぬとは……。

よく見ると、磔の罪人もやはりあたしの顔が画かれている。余りのことに、あたしは言

葉も出ず、ただ見くらべているだけだ。素肌を晒される辛さは同じことだとしても、脇腹を腹わたが出るまで突かれるのと、一本の串をゆっくり突き通されるのと、どちらが苦しいのだろう。もっともお仕置に上った人達は皆死んでしまっているのだから、聞くわけにはいかない。やはり、あたし自身がきめるより仕方がないだろう。

串といえ、いつだったか桶に入れて生きた鮎を貰ったとき、居間の庭先で料理するところを見物したことがある。端女に魚の料理をするのが上手なのがいて、バタバタ跳ねる魚を手でつかむと、その口へ無雑作に串を通し、苦しがつてひどくあばれるのかまわず突き通し、塩をまぶすと直ぐ火にかざして焼いた。とてもおいしかったのを覚えているけれど、今度はあたしが料理される番になつてしまった。あのお魚は、串を通される途端にえらい勢いで跳ねて暴れていたけれど、まな板に押さえつけられズブズブと串を刺し通されて動けなくなつてからも、ずっと生きていて、塩にまぶされた後まで、えらやひれを動かしていたけれど、あたしも串魚じゃない串女にされて、身体に刺し通された串の先を眺めながら、もだえていなければならぬの

だ。こんな枠に張られていれば、あの魚のように見苦しくあばれるわけにはいかないからあたしはどんなに苦しくても、御見物衆からは案外、楽しそうに見えるかも知れない。

あたしは、何だか身体がぞくぞくしてきて、こわいこわいと思ひながら、それでいて嬉しいような、妙な気分になつてしまった。

串刺しの刑は姫君の仕置というだけあつて血も余り出ないようだし、身体どこにも傷がつかないのがよいと思う。別に悪いことをしたわけじゃないし、後暗いことはないのだから、あたしもお魚になつたと思えば、恥かしいこともないだろう。それに串刺しの姿というのは中々よいものだ。女にとって、これより晴れがましい死に方はないと思う。

あたしは画帳を見終ると、元のように背を起して坐り直し、

「色々お心づかいをいただき、ありがたき仕合わせに存じます。私を串刺しの刑にしないでいただければ、うれしゅうございます」

きっぱりと申し上げると、殿様は深くうなづかれてから、手をのばして磔の絵をとり上げると、皆引き裂いてしまわれる。それからあらためて串刺しの絵をとつて御覧になる。

殿様に申し上げてしまつと、何か今まで心

にかかっていたものがとれた気がして、とてもさっぱりした気分になる。文之進様にもう一度、串刺しの刑の画を見せていただく。とにかく常の罪人にはない仕置というところが気に入る。せっかくお物入りをかけて人身御供に上るんだし、派手なことが好きなあたしだから、少しは辛くてもはなばなしい死に方をしたいと思う。

「おねがい申し上げたいことがございます」「何か」

「私も覚悟しておりますが、お串をいただく折には、苦しさの余りとり乱すことと存じます。それ故、お柱は特に丈夫に作らせ、身体も出来す限りしっかりと動かぬように結え

ていただきました、この段、お役向きにお指図をねがいたく存じます」

「うむ、この図は古い書きつけを絵師に画かせたもの故、きれいに画いてあるが、さもある。柱はそちの身体に合わせて入念に作らせ、括り方も工夫させるとしよう。この絵の通りでは、生身の人間には無理であろう。心配いたすな、わしから直きに申して遣わす」

「ありがとう存じます。安堵いたしました。先日、御印をいただく折、前々から少しでも身体を動かすと御印形がゆがむ故、熱さを堪えて静かに致せと、申し聞かされていましてのですが、私は堪えられるかどうか誠に心許なく存じておりましたところ、当日は大変堅

固に身体を押さえて下さりましたので、御覧の通り美しい御印形をいただきました。お仕置は死後も長く御見物いただくものと存じております。殊にこのお仕置は、おなごのあたしが、木の御串と契りを結んだ姿にて相果てます故、手足を取り乱しては恥かしゅうございます。肌への恥はいとませぬ故、たとえ悶えても手足の動かぬようにして下さいませ」

「よくぞ申した。心おきなく木串の妻となれるよう、はからってつかわす」

「ありがたうお礼申し上げます」
あたしは答えてから気がついてカーツと顔が赤くなった。羞かしいことを思い切って申し上げているのだから、こんな時におからかいになるとは、御人の悪い殿様です。それとも、木串に焼きもちを焼いておいでなのかしら。あたしは表向きは「お清の中臈」ということになっているんだから、あまり困らせないで下さい。見ると、文之進様も顔を真赤にして俯向いている。

「幼少の頃より、よく仕えてくれたりえに、このような役をさせるのは何とも心苦しいことなのだ、外の者では御公儀への申し開きにならぬのだ。辛かろうが最後まで頼むぞ」
「はい、かような御役に立つのが私の勤めで

女性写真モデル募集

分譲写真撮影のため

奮て御応募下さい

○本誌では、代理部分譲品用の写真を撮影するため、女性モデルを募集しています。
○本誌愛読者の方でしたら、年令、遠近は問いませんが、分譲品用ですから誌上に発表いたしません。誌上発表可能でしたら尚結構です。又、助手介添え或はプレイのみ出演御希望の方は御照会下さい。
○出演又は参加御希望の方は、年令略歴記

載の上編集部宛お申込み下さい。報酬その他詳細につき、お返事いたします。
○応募されました方々の個人的な秘密は固く厳守いたしますから御安心下さい。尚お好みの傾向を附記下されば好都合です。
○本誌の内容充実のため、並に皆様の文献研究資料作成のため、奮って御応募御参加下さるよう、お待ちいたします。余暇を利用しての御参加も大いに歓迎いたします。
○特に妊婦資料の作成に御協力下さる婦人を求めています。撮影可能の方は、遠近に拘らず御一報下さるようお願いいたします。

△奇ク編集部▽

ございます。八才にて御殿に上る折、両親から私の勤めについてくわしく聞かされ、納得いたして参りました。それ以来、かようなお役に立つ日を待っておりまして。それ故、死ぬことは少しもいひませぬが、永の入牢などというお役にあたるのは辛いことと思っておりますが、はからずもこのような晴がましいお役をいただき嬉しゅう存じております」

「それならばよいが、先日来、そなたに駄々をこねられたら何と云って納得させようかと思ひわづらっていたのだ。森田など四、五日は寝られなかったと申していたぞ」

「何も存じませず、申しわけのないことをいたしました。あたしは御奉公に上った折の誓詞の文言を、一日とても忘れたことはございませぬ。お仕置までに色々囚人の勤めがあることと思ひますので、お役向きよりくわしくうかがっておきたいと存じます」

「よし、申しておく。すてからは大分おどかされたであろう」

殿様は御承知であらせられたのだ。

「御意にございます」

「そうであろう。あれは又、大したものだ。

文之進、酒肴の用意があらう」

端女たちはあたしを見ないように顔をそむ

けて出入りしている。本当の重い罪人だと思つてゐるのだから無理もない。殿様は御膳を持って立たれ、履物を召してあたしの前にこられると御膳をあたしの方に向けておかれるので、あたしは驚いて顔をあげると、

「文之進、小手をゆるめてやれ」

と仰せられ、あたしがとかれた手を膝におくと「盃をとれ」とのお言葉で、文之進様が持たせて下さった御盃に殿様お手ずから酌をして下される。あたしは押しただいて飲み干すと今一献さして下ってから席に戻られ、「りえ、今となつては、そなたに与えるものがない。せめてわしの膳でも食べてくれ。文之進、りえにそれを」

と仰せられる。こういう御心づかいが殿様のよいところだと思つと、あたしは涙が出て止らなくなる。文之進様が気がついて懷に手を入れながら立ちかけると、殿様は御自分の懷紙をおとりになつて渡され、その御料紙で丁寧に文之進様は涙をふいて下さった。

「頂戴いたします」と、あたしは今一度、礼をしてから立膝して前かがみになつて御膳に手を出そうとすると文之進様が御膳を持って下さるので工合よくいただける。

「そちが、わしのそばにきたのは十二、三の

ころであつたかな」

「はい、その頃でございます」

「そちは、えらくきつい娘だった。そちに泣かされた者が大勢いたが、わしの言うことだけは、よく聞いてくれたのう。わしも二十そこそこだったが、他の女は泣き出したり逃げたりしてしまうのに、そちだけはいつも進んで相手をしてくれた。そちがおらなんだら、どのような横道者になつていたかもしれぬ」

文之進様は相槌を打つわけにもいかず、困つてゐる。どうせ女小姓で上つたあたしが、十三の年から中臈心得になつたいきさつを聞いているだろうけれど、若い小姓に聞かせてためになる話じゃないし、あたしだってこんな姿で殿様のお言葉をいただくのは、工合が悪くて仕方がない。

殿様の給仕に來た端女は、あたしが殿様の御膳をいただいているものだから驚いてゐる。あたしは、お茶までゆっくりいただいから、文之進様に御膳を下げていただく。

「文之進も、おなごが相手だとよく気がつくの。そちは下つてよい、七郎を呼べ」

間もなく御目付が入つてきて、あたしの横に坐り殿様に一礼された。

(未完)



S・M きれぎれ帖

黒井 珍平

雑誌「風景」で川端康成氏が、円谷選手の遺書の全文を引用され、その文体に自分の文学の上に新しい目を開かれたとのことでした。

一人一人の甥ごさんに、何々様、何々おいしゅうございましたと、お正月にいただいた食物を書きつけた遺書に、文学を職とするものが、全く新しい発見をするのは不思議と言えは不思議ですが、又面白い所です。

平凡パンチの百の質問を取り入れてか、塚

本記者の「S・M一〇〇問」水沢氏の「あぶらぶす・こんと」「振袖残華」の牧高志さんのユーモア。奇クサロンをうしろへもってきただあたり、編集の気合いが感じられます。ユーモアはゆとりがない世界からは生まれません。

一つだけ引用させていただきます。

平凡パンチ3月11日特大号（一切の私の感想をいれず、読者に判じていただきますしょう）

「街で会った女の子にエッチな質問」一一五頁。

A、女子大生（19）

問 男と女では、どっちが助平だと思う？

答 男です。

問 なぜ？

答 チカンは、ぜんぶ男ですから。

問 セックスした？

答 ヒドイことをきくんですね。ぜったいしません。一生したくありません。

問 結婚したら、セックスしなくちゃならないよ。

答 結婚しても、しません。拒絶します。

問 じゃあ、すぐ離婚しなくちゃならないね。セックスの欲求もないの？ あまりムリしないほうがいいじゃない？

答 こんなこと話ただけで、罪悪感でイライラします。セックスするくらいなら自殺します。

問 マイッタなあ、避妊方法は知ってる？

答 パンチは悪書です。とてもこわいです。

問 よわったなあ。話しにくいなあ。

（以上、質問の許可を得るまでに二時間かかったとのこと。）

B、画学生(23)

問 ズバリいこう。初体験はいつ?

答 十八才の春だったわ。

問 そのときの感想、聞かせてよ?

答 ちょっとこわかったけど、それ以上、セックスに興味があったワ。

問 快感を感じた?

答 ウン。はじめてなのにすごくよかった。

(この方はみんな話してくれちゃった由)

C、女子大生(23)

問 マゾ? サド?

答 両方足して、2で割ったくらい、どっちでもやれそう。

D、キーパンチャー(19)

問 ところで、サド型? マゾ型?

答 マゾかなあ?

「百の質問」の面白さは、実はSM心理に近い。相手によっては、ちょうちょうはっしと心理の弱点に攻撃をかける。質問者が勝つか負けるかも終ってみないと判らない。守るも攻むるもくろがねのである。

黒淵嬰一様

「贗作イーリアス」有難とうございました。

もうなんだか生きるのがめんどろになっていった所で、作品を捧げて下さった嬉しさは親に遺産を貰うより、よっぽど嬉しいもの。みよびの風情。

室生犀星さんの「女ひと」(おんなひと)という名エッセーのはじめに、(女の)人に物を送るということは大変にうれしいものである。といった意味のことが書かれていたが……。

詩集や作品が、誰かに捧げられても、凡ての人が読むように「贗作イーリアス」は、奇クの読者みんなのための作品です。

イーリアスが、トロイアとギリシャ全軍と神々が二つに別れての物語ですが。

黒淵日本ホメーロス殿は、この所とみに日本近代軍記物に熱を入れておられるだけに、日露戦役に、日本に高天原から日本の神々。ロシアにギリシャの神々とが助太刀。大サーピスでたのしみしました。色々の神々の名前を海洋女王にアムピトリテの(ルビ)は、心にくい。黒淵氏の創作でしうか。ギリシャ、ローマ神話辞典にもものってるはずありません。

岩波の「タウリケのイピゲネイア」(呉茂

一氏訳)で(復讐女神たち)に(エリニユスたち)のルビあるのを、みかけただけです。

同文庫本は昭14・9・15第一刷で、昭42・10・20第五刷で、改版でなくて、その時のままの版ですから、今から三十年ほど前のギリシャの神々の名づけ方が判ります。ゼウス(ツエウス) アポロ(アポロン) アテナ(アテエナ、アタアナ、アテナイエー) もつとも今の当用語と習慣がちがうからでしょうか。

今でもヴィーナスとアフロディテが同じ神だということを知らない人の方が多いので、言葉の壁が意外と強く「贗作イーリアス」は奇クのみならず、ギリシャ神話好きの人みんなに読ませたい。(この作品で、最近の氏の作品のヒントが判りました)

全くもって、オデッセウスがウリクセースであり、ユリシーズである。(こんど、凄い映画になったそう。ジェームス・ジョイス作、ユリシーズの映画化)

テーセウスの子、ヒッポリュトス(パイドラの恋) なんかもラシーヌになると、テゼの子、イポリット(フォードルの恋) これみな読み方がちがってくるのですから、最初

まごつきました。三年前の私なら、これほど面白く拝見できなかったでしょう。

ダイアナ女神が、日本式に正坐させられた姿など無類に楽しく、「後手しぱり」いっばい。楽しい。

S Mが、一般マスコミに氾濫している今、「カメラ・ハント」や「花と蛇」痴人の糧」「読者通信」それに、やっぱり小説がうまい「山本章氏」その他みな大好きですが、黒瀬さんや久我庄一さん、斎藤夜居氏や牧高志さんなどがあることで、ブームに巻きこまれずに行く一つの行き方と思っております。

『アベラールとエロイズ』 畠中尚志氏訳

岩波文庫(赤)

中世哲学界の高峰アベラールが弟子エロイズと取り交した往復恋愛書簡。この一見気むづかしい修道士と修道尼が、何故これほどまでに「エロティック」であるのか。それはやっぱり血の通った人間だから。二人とも。

すでに神学者として名声をはせていたアベニールはパリの町でエロイズと呼ぶ美しい乙女に、聖堂参事会員フェルベールの姪として出逢う。フェルベールは、アベラールにエ

ロイズの教育をたのむ。ごていねいにも遠慮なく析極してくれと——私は時に鞭を彼女に加えた。怒りの鞭でなく愛の鞭。この鞭はありとあらゆる香料よりも甘かった——とアベラールは述懐している。パンチ流に言ってしまうえば、かわいこちゃんのおヒップを剥きだして、ひざの上にのっけてびたんびたんと言っている内に、二人は正しくS Mの喜びに浸たりきってしまったわけ。

そのことが見つかった時のことをアベラールはマルスとヴィーナスに比している。(これはヘパイストスの妻アプロディテ(ヴィーナス)がマルスと恋をしたので、目に見えないような黄金のあみを夫のヘパイストス(バルカン)が作り、二人がしっぽりやっている所を、あみごと吊り下げて、神々を呼んで見て笑わせた。あられもない姿をかくすこともできずに、あみの中で羞しがるヴィーナスの図は正にS Mである。エロイズは男の子を生んだ。アベラールはエロイズを修道院に送る。叔父がエロイズをしばしばの虐待で苦しめたからだ。ある晩、アベラールは叔父の手先の者のために、身体のある部分を切断された。

こういう過程をみて第四書簡エロイズよりアベラールへの返事をよむと。

——私たちが一緒に味わったあの愛の快楽は、私にとってとても甘美であり記憶から消し去ることも出来ないのです。それは常に私の目の前に押しかかり、私を欲望にそそります。眠っている時でも、一層純粹にお祈りをしなくてはならぬミサの盛儀に際してさえも私はお祈りに専心するよりも恥ずべき思いに耽ります。——往復書簡は第十までつづき、どっちかというアベラール先生の方が冷たい感じなのは、去勢のせいもあるうか？ アベラールは六十三才。エロイズはそれから生きのびること22年。彼女が死んでから人々は、アベラールの棺の中に合葬し。今日もこの墓地に詣でる人はたえまがないという。

第六書簡、エロイズからアベラールへ。

——修道院の規則が、男女同じに課せられております。あの式服やズボンや肩衣に関する規定は女にどう適用されるのでございましょう。またトニカ(下着や毛の股引)に関する規定はどうでしょう。女の毎月の浄化作用のために、このようなものを用いることは全く困難ですのに。——

(おわり)

私の希望

新婚フンドシ旅行

伊藤ますみ

私が「奇ク」を初めて拝見したのは二

年前のことでした。古本屋の店先で何気なく買ってしまったのが「奇ク、一九六五年四月号」だったのです。ページをくるうちに、私の今まで想像もしなかった別世界があるのにすっかり驚いてしまいました。私にはとてもそんな世界に入っていく勇氣はありませんでしたが、唯一つだけ私の興味を引いた記事がございました。それは一六ページにあった松原勉様の告白記事「男の褌と女の褌」でした。

これに勇氣を得て私はフンドシを締める女になってしまったのでございます。とは申しまして家族には内緒で夜中にそっと起き出し、フンドシ一つの裸身を鏡台に映してたの

しむ程度のささやかなものでした。

松原様は「女性には三角ふんどしを」と書いていられますが、私は六尺フンドシが好きです。三角フンドシではビキニパンティと似たようなもので、この場合はフンドシを締めると云うよりはフンドシを穿く、と云う動作になるのではないのでしょうか。フンドシを締めると云う言葉はやはり六尺フンドシの場合にピッタリします。私はあの帯の様な一枚の布を身体に巻きつける何となく古風な動作と、身体を思い切り締め上げる感覚とで六尺フンドシに魅かれるのです。

私はこの五月に結婚することになっていますが、結婚したら夫の眼もあることですし、内緒で自分のフンドシ姿をたのしむことも出

来なくなるでしょう。なぜって、自分の妻が女のくせにフンドシなんか締めているのを見たら夫はどんな風に感じるでしょうか、きつと変態女などと思うに違いありません。そう考えると、私は何となく憂うつで物足りないような気がしていました。

でも先日、私の今までの憂うつが一気に吹っ飛んでしまうような事があったのでございます。デイトの帰り彼と私は電車の空席に二人並んで腰掛けていました。乗客もまばらで週刊誌を読んでいる彼の横顔をぼんやり眺めながらふとその週刊誌に眼をやると、思いもかけない活字が眼に飛び込んで来たのです。

「フンドシ女優賀川雪絵のデイープ・プライバシー」（プレイボーイ四月二日号）そこには近く封切される「徳川女系図」という映画の中で、赤フンドシいっちゃん裸になって活躍する女優さんが紹介されていたのです。

「奇ク」でしか見られないと思っていた女のフンドシに関する記事が、駅の売店で売られる週刊誌に載っていたのです。私は思わず、「アラッ」と声をあげてしまいました。

「女の人がフンドシ締めるなんて変ね」と云うと彼は「女がフンドシ締めたのなんてめったに見られないぜ。この映画早く見たいな」と

云うのです。彼は明かに女のフンドシに対して興味を示したのです。私はこの時とばかり恥かしさを耐えてこう云ってしまいました。

「そんなに見たかったら結婚してから私がフンドシいっちゃうの裸、見せてあげましょうか」彼は私の顔を見ながら「本当かい。楽しみにしよう」と答えてくれたのです。

私は心が浮き浮きするようでした。もう一押ししました。「いっそのことパンティの代りに、毎日フンドシ締めてようかしら」彼は別に何とも答えませんでした。亀山順子様（昭和四一年六月号）。小倉いくよ様（昭和三七年七月号）のように下着としてフンドシを用いるきっかけが出来たのです。

「徳川女系図」については他の週刊誌でも扱っており、平凡パンチ三月一八日号の巻末グラビアには極く薄い布でフンドシを締めたと思われる女優さん達の後姿が、また週刊実話四月一日号巻頭グラビアには相撲のマワシを締めた女優さん達の写真が、それぞれ載っていました。女性のフンドシ姿が普通の週刊誌に出たり、映画に出たりすることは大いに興味あることではないでしょうか。「奇ク」を知らない女性の中から何人かのフンドン愛好者が生まれてくるのかも知れません。私自身

もこの週刊誌のお蔭で、未来の夫に女のフンドシが不自然でないことを印象づけることが出来たのでした。

そして今、私は思い切ったフンドシプレイを考えているのです。縛りとか鞭うちが肉体的苦痛についての被虐的嗜好を満足させるものであり、フンドシは、特異な下着を身につけていると云うことと露出の恥しさとに由来する精神的被虐性に対応するのではないのでしょうか。だから縛りプレイなどと云うようにフンドシプレイと云う言葉を使っても良いのではないのでしょうか。私の考えているフンドシプレイは自分のフンドシ姿を出来るだけ他人の眼に触れるようにし、露出の恥かしさと云う精神的苦痛を味わってみようとするもので、たとえば新婚旅行に亀山様と同じようにフンドシを締めて行こうと考えています。

亀山様はお腰巻と間違えてフンドシを和服の下に締めて行かれたようですが、私は思い切って純白の薄手のウールのスーツの下にスリップなど洋装の下着は何も着ないで、赤い六尺フンドシいっちゃうの姿で新婚旅行に行こうかと思っています。スーツを脱いだら下は赤フンドシいっちゃうだけ。それに純白のスーツですから、スーツを着た上からでもフ

ンドシの赤い色が透けて見えるかも知れませんが。

もし実現できたら、何ともすばらしいでしょう。でも私にそんな勇気が出るかしら……。週刊文春三月一日号には「透視ルック」とか云って下着なしで上半身は透明なナイロンブラウスだけで、胸が透けて見えると云うモードがパリで発表され、現にそのスタイルで街を歩いている女性がいると紹介されていました。

ですから、スーツの下には赤フンドシいっちゃうと云うのも、時代の先端を行くスタイルかも知れませんが。私は彼にこの週刊誌を見せ、「この透視ルックで、あなたの見たいって云う赤フンドシを締めたら、洋服の下は下着なしの赤フンドシいっちゃうになってしまっわね、恥かしい格好ね」と云うと、彼は「恥かしがらないで、そう云うお色気のあるスタイルを見せてくれよ」と満更でもないようでした。

もしこの「新婚フンドシ旅行」が実行されたら、私は泣き出すような恥かしい体験をするかも知れませんが。出来るかどうかはわかりませんが、なんとか実行してみたいという気持ちで一杯の私の近頃なのです。



最初の・・・

マゾヒスト

—ジエイムス・クルーの小論より—

三原 寛

Leopold von Sacher-Masoch が少年の頃、彼の住んでいた Galicia のポーランド人の地主がオーストリア政府に対して、反乱を起した。Galicia のポーランド人は、オーストリア統治下の亡命者であった。オーストリアの統治は、ロシアの圧制ほどではなかったが、これら少数の部族に対して決して同情的ではなかった。スラヴ諸国の通例で、この反乱計画に於ても女性達が指導的役割を果たした。

その計画というのは Galicia の首都 Lemberg に於ける軍隊の大きな舞踏会で、オーストリア

人の相手役達を絞め殺そうという、突拍子もないものであった。

この恐ろしい計画にとって不幸なことは、舞踏会の一、二日以前に、ハプスブルグ家の一人に不幸があつて、宮廷は喪に服することとなり、軍人達が社交場に入出入りすることを禁じられたことである。

いずれにしても、反乱計画は着々と進められた。ポーランドの貴族達は部下を召集し、首府に向つて移動を開始した。Lemberg でも市街で銃撃が始まりバリケードが築かれた。

Leopold の父は、その地の警察長官であつた。彼の家は防禦を固め、家族は外出を禁じられた。

しかしながら、ポーランドの百姓達は主人達のような国家的独立意識はなく、日頃の腹いせ、略奪の好機とばかり、人気の少なくなつた城、莊園を攻撃し、仲間からはぐれた反乱者を待ち伏せ、これ等反乱者達に無差別の虐殺、縛り首、火焙り、生埋め、その他、無産者の蜂起時に示される、あらゆる恐怖を惹起した。ポーランド人の地主、その支持者達

は笞で打ち殺され、大鎌で首を切られ、納屋の戸に狐か梟かぐろうのように釘づけされ、手足をへし折られ、顔に蜜を塗られて蟻塚に投げ込まれた。

このような残虐行為の報らせが、その後の Leopold の生涯イメージとしてきまってきた。このような場面からの生存者、それ等の大部分は瀕死の重傷を負ったが、満載した血まみれの車が続々と Lemberg に着き始めた。野次馬どもが、その後を熱狂してついて歩き、狼のように血の匂いをかぎ、車のまわりをとび跳ねた。

Leopold の父は、これ等反乱者達で生命をとりとめそうな者には、出来得る限りの保護を加えたが、市街においてさえ、執拗に後を追ってきた百姓達の血祭りに上げられるものもあった。

冒険好きな警察長官の息子の目からこの残虐な行為を隠しおおせることは無理だった。

Sacher-Masoch は、彼自身にとって不幸にも幼少時に於いて、好戦的な或は支配的な興味よりも文学的、慈悲深い興味に加えて、その有能な理性と魅力的な人格の実現に対して絶えず作用する性的偏向の性質を発達させた。

彼の親族中、先祖にも同世代にも、このような異常な性愛傾向、或は書いたものでも口頭でも、その思想形式で正常性を逸したものは一人もなかった。

彼の母 Charlotte von Sacher-Masoch は、彼によると、ラファエルのマドンナのようであったという。しかし、この尊敬すべき婦人は身体が弱く、長男のためには出来るだけ自分と異質の女を乳母として雇った。彼女の雇ったのは Handscha という名の頑丈な体格の典型的な Ruthenia の金髪の百姓女だった。派手で野性の獣のように均勢のとれた身体をしていた。荒々しく無学で、そのくせ想像力に富んでいた。彼女は好んで暗い血なまぐさい話を聞かせたが、その主体は狂乱した性愛傾向エロティシズム、冷酷残忍な行為で、肥沃旺盛な、それでいて本質的には悲劇的な民話が、もとなっていた。

IVAN 恐怖王 HALICZ の黒女帝 CASIMIR

三世のユダヤ人の妾の無慈悲な暴逆者 Esther 女王達の伝説は、ロシアなまりの、ごくごくするような低音で話す Handscha の小さな聴き手に深い印象を植えた。

彼は、しばしば出てくる支配的で好色で無慈悲な女性と隷属的、感傷的、忍苦の男性と

の対照に取りつかれてしまった。これは、城でも別荘でも街でも、この地方に於いては、明らかに常に同じであった。

一八四八年、多くの流血革命の続いた年、Galicia の匿名の学生が記している。

「この土地の女性には唯一の途しかない。多くの場合、それが通例となっているが、夫を徹底的に支配して奴隷とするか、或は自分自身が最も情ないみじめな存在に零落するかである」

そうして、実際に同じ屋根の下に住んでいた一人物によって、小さな Leopold の抱く高遠で危険な空想は、具現化しそうであった。これは彼の伯母 Nenobia 伯爵夫人であった。彼女のスラヴの血が、彼女に支配的性格を与えていた。背が高く美しく、三十代半ばで彼女は服装に関する浪費癖と、そして彼女にとっては、とるにたりない下賤な夫とを持ち合わせていた。

Leopold は、彼女を崇拜していた。彼女はそのひっきりなしの衣裳換えに、彼を走らせ手伝わせた。

ある時、彼は伯爵夫人の上履を合わせていて、それを彼女の優雅な足の甲に穿かせながら、思い余ってその刺繍のほどこされた革に

唇をつけたことがあった。

「ホホ、バカな子ね！」

Zenobia は笑った。そして笑いながらも、直ぐに少年の顔を力をこめて蹴りつけた。Leopold は彼女の足許にひっくりかえって頬を擦った。だが彼は、唇をつけたこと以上に苦痛に対して喜びを感じたことを知った。この事件が、彼の伯母への執着を固めた。それ以後、彼は彼女にまといついた。

ある午後、他の子供達と家の中で隠れん坊をして遊んでいた。伯爵夫人が外出中なのを知っていたので、彼女の寝間に入り込み、タンスの中にもぐり込んで、そこに掛けてある芳ばしい絹や毛皮、レースの中に顔を埋めて楽しんだ。

突如、見知らぬ男を従えて、伯母が現われた。その男は、伯爵よりずっと若く、男前がよかった。Leopold はタンスの鍵穴に目を釘づけにして息をのんだ。

Zenobia は毛皮の外套を滑り落し、その当時、流行の刺繍のある毛皮の部屋着を引っかけた。それから彼女は、長椅子のそばに若い男を引きよせ接吻し抱き合ったが、明らかに主導権を握っているのは伯爵夫人だった。彼が益々大胆になった二人の様子を覗いていた

時、寝室の扉が再び開かれた。伯爵が入ってきた。一瞬彼は驚きで棒立ちになっていた。Zenobia が立ち上り夫にとびつき、彼の顔をこぶしで殴りつけた。彼の口から、血が流れる。彼は背を向けて逃げ出した。その時、色男の方は別の扉から部屋をとび出していた。Leopold は興奮で震え、思わずタンスをきしませた。伯母は彼の隠れ場所に突進し、タンスの扉を開け、激しくののしりながら彼を引きずり出した。あっという間に彼女は、彼を絨氈の上にうつ伏せに押し倒し、彼の肩を膝で押さえつけて、身もだえする彼のお尻に平手打ちの雨を浴びせたのだった。

後年 Leopold は、その最初の妻にこの出来事を説明して、このお仕置きの苦痛は物凄かったが、恍惚とさせたにつけ加えた。彼は更に続けた。伯母が手を休めるや彼は必死に部屋を逃れ、そして扉が音をたてて閉じたのを聞いた。やがて彼は、外から立ち聞きしようとそこへ戻った。運よく、彼は中の音を聞くことが出来た。先ず妻から夫への怒り狂った非難ののしり、それから夫が軽率だったことにお許しを乞う涙を流しての哀願、そして最後にいつも手許に置いてあったらしい鞭によって伯爵夫人が加える恐ろしい鞭打の音。

このどぎつい話には、後年 Leopold がその豊かな想像力による枝葉をつけ加えたであろうことも大いに考えられる。しかしながら、こういった話のもとになる何かがあったのも確かである。このような出来事が思春期前の Leopold の胸の奥底に熱情の火をつけたのだ。この炎は、彼の生涯の終点に向って、破局的な効果を以て燃え上った。墮落し投獄されるようなのと異なり、彼は肉欲でなく深い精神上的の衝動に駆られて行動したことは強調されねばならない。典型的な快楽主義者は、どうしても懷疑論者か、或はそうでなければ徹底した皮肉屋になるものである。Leopold の心は本能的に人生に対する無関心な態度も又、軽蔑的態度をも拒絶した。彼は常に、彼の脳の活動に永遠の闇が訪れる日まで、熱情家であり理想境の建設者であった。彼は決して道楽者でなく、又意識的にせよ無意識にせよ、偽善者でもなかった。彼は人間性の愛好者であり、その運命づけられた犠牲者の一人であった。

Leopold が二十五才となり、彼の両親が結婚させようとしていた退屈な従妹から何とか逃れようとしていた頃、彼は Anna von Kottowitz に遭遇した。彼女は医者で、

その医者は自分の職業を情事的手段として利用している男だった。彼は王侯の側妾のような女を理想としていて、始めて彼女がおめがねにかなったのだ。彼女は三十代の半ばで、二人の子供があったが、この男の妻になってからは、主婦というよりも女奴隷のようにみえた。浪費癖から、いつも高価な衣裳をまとい、気だるそうな贅沢な美しさを身につけた彼女は、まるで性愛だけの目的で生れてきたかのようにみえた。Annaは、この幸運な境遇をせいぜい利用し、医者はこれに異存はなかった。何故なら、彼はもし対決となったらどうみても彼女の方が、彼の、より醜聞的な貞の数々を以て彼を非難し得ることを知っていたからである。Annaの方では、彼女と同じように軽卒な友人達から、この深い暗い目をした、黒というより褐色に近い乱れた髪を女性的な若者が、富裕な要職にある両親の息子で、彼の新聞に書く記事で巨額の収入を得ていることを、ぼんやりと聞いていたのだった。

AnnaはLeopoldの忍従的な献身行為に動かされ、用心深くする代りに彼と一緒に人前に出ることを許した。

Leopoldと、このいかがわしい医者との間

に手紙の交換があり、そこでLeopoldは無骨に決斗を申し入れたが、これは医者が断りAnnaはその値打ちのない夫を棄てることに又それに附随して不運な子供達をも棄てることに同意しLeopoldと同棲することになった。彼は彼女のために家を構えその新しい女主人の浪費癖を満足させるために、彼の職業歴の中でも最も激しく働いて金を得ねばならなかった。

Annaは、少くとも人をいじめるという性格では、ひけをとらなかつた。彼女が、何も彼女の情夫をそれほど喜ばせないと知ると直ぐに極端に走りがちだった。鞭や棒杖笞が痴戯にとり入れられた。本物の拷問を実行するかどうか長い間、議論した。ある時など彼女は、彼の首を斬ってみたいといい出した。それをやって後に不都合さえ起らなければ、二人にとってどんなことをやってもよいということになった。彼はAnnaに、もし彼女が不貞を働いたら、おそろしく嫉妬するにちがいないと語った。そしてそれでも、彼女がそれを望むのであれば、彼にはそれをどうやって止めればよいのか判らない、とつけ加えた。最初は彼女も月並みに、そんな考えは恐ろしいことだといひ直した。彼はそれから精

神的自由、精神的苦悩の昇化された効果につき、幻惑的な暗示を始めた。Annaは、もし自分が浮気心を起しても、何も恐れることはないのだと思うようになった。彼等の住んでいたGrazは、その当時、ポーランドの亡命者が一杯で、彼等の殆んどが非常な色好みでそれ等の中には大勢の贗「ポーランド伯爵」達が混っていた。

ある時、Annaは、彼に不貞を働いたことを告白した。Leopoldは雷に打たれたように驚いた。彼が余りにその大きな暗い目を見開いて彼女を見つめ、その顔面を蒼白にしたので、彼女の方が驚いたほどだった。彼は低い気落ちした調子で、彼女の墮落の経緯を問うた。彼は先ず、それを根ほり葉ほり聞き出さねばならなかつた。そして彼の表情が明るくなった。遂に、彼の主張するものが全く勢よく成長したのだ。彼女は通俗劇調の全くない実際には日常事であったことから、何か苦しめるようなことを考え出すのが、彼女にとっ中しながら彼女は、最初には自分の方からそう仕向けたのだということをおぼれたLeopoldが墮落の思いにふけり、色情的恐怖の恍惚感で接吻し抱擁してくるに任せたのである。

「Anna が『伯爵』から性病をうつされたのが判って数週間後、二つの事件が急速な結末をもたらした。『伯爵』は摘発され、国外追放された。Leopold は歎きつゝ、その梅毒にかかった女主人と別れた」

一八六九年 Sacher—Masoch は三十三才となり Austrian—Arbour という雑誌を編集していたが彼は Baden かい『Bogdanoff 男爵』として署名された Fanny—Pistor という女性から一束の原稿を受取った。彼女は、彼の著作への深い讃美を述べ、彼女の作品への彼の卒直な意見を求め、そして個人的な面談を望んでいた。

一、二節を読んでも、それは編集者の性癖に対する完全な理解を用心深く暗示していた。

この婦人は Anna von Kottowitz よりも、はるかに想像力が豊かで機知鋭いことが明らかで、また性的関係での根深い利己性、冷酷な支配欲についての一種の直接的な、生れながらの一貫性を示していた。二人は直ちに肉体をつけ、物質的には贅沢すること、特に毛皮と外国旅行については費用を惜しまぬこと、又精神的には男が女性相手方に対して絶対服従することを取りきめた。この契約は、単なる口頭のみではなかった。これは書面にして

署名され、全く正式に封印されて提出された。

Leopold von Sacher—Masoch は Pistor 夫人に対して、彼女の奴隷となり六カ月の間、彼女の如何なる要求、命令にも無条件に従うことを誓います。

Pistor 夫人は、彼の名譽を傷つける行為、すなわち、彼の男としての、あるいは市民としての体面を損うような行為は強制しないこととします。

女主人 (Fanny—Pistor) はその奴隷 (Leopold von Sacher—Masoch) に対して、彼の犯したあらゆる失禁、不注意、あるいは彼女への不敬罪に彼女が適当と考える如何なる方法によっても罰してよい権利を有します。

要するに彼女の所有物グレゴール (註—オーストリアのこの地方の典型的な下男の名前。Fanny は Sacher—Masoch をいふ呼ぶことを提案した) は女主人に対し、完全な奴隷服従をせねばならないし、彼女が彼に対して加える如何なる御慈悲深いお仕置きも、この上ない恩恵としてお受けせねばならないのです。

彼は彼女の愛情について彼女に何等の不

平も申し立てられないことを認識し、恋人としての特権は、すべて放棄致します。

Fanny—Pistor は出来る限り、特に残忍な気分になった時は、毛皮を着けることを約束します。

この奴隷期間は六カ月後に終了するものとし、この期限が切れたら、これを言及してはならないこととします。

総てのことは忘れることとします。その後は当初の恋愛関係に戻ることにします。この六カ月間は継続して行う必要はありません。長い間、中断されても差しつかえなく、これは女主人の指定に従って開始され終了します。

この契約は、ここに両当事者署名によって発効致します。

開始日 一八六九年十二月八日

署名 FANNY PISTOR BOGDANOFF

LEOPOLD CHEVALIER VON

SACHER—MASOCH

二人はイタリー旅行を決めた。変った土地ではあったが、どんな色恋沙汰も悪評を引き起す恐れがなかった。二人を目にしたものは皆、暗い目をした内気で華奢な、三等の汽車に乗り Bogdanoff 男爵夫人の荷物を担いで彼

女の走り使いをするこの男を、彼女の召使いと考へた。ある者は、この男は彼女の情夫でもあると考へた。しかし、こういった推測が、一八七〇年のイタリーで風評を巻き起すことはなかった。

彼等は先ずヴェニスに行った。このAnnaの時と同じようにLeopoldは、女主人が彼への精神的屈辱と苦痛を増すため、そしてそれによって彼女の彼女への熱情を増すため、浮気の相手を求めることを仄めかした。彼女に異存はなかった。この考へは彼女の積極性を刺激し、サルヴィニという三流俳優を選んだ。

この男は、自分がこのようにすばやく裕福な外国の男爵夫人をものにしたことを、非常な満足としているようだった。この変った旅行者たちが何を自分に求めているかが判つてからは、彼はかつて舞台でもみせたことのないほどの演技を示した。

Leopoldは、異国的色彩を高めるために、この男を「ギリシャ人」と呼んだ。

Fannyのグレゴールは給仕の資格で、貴婦人とその新しい情夫との囲りをうろつき、おせっかいに、みつともない時に飲物を運んできたり、用ができて男爵夫人やその俳優が現われると、寢室の扉にへばりついているのを

発見されたりした。こうしたある機会に、サルヴィニは「召使い」が鍵穴に目をくっつけているのを見つけFannyにけしかけられて、その男の耳を殴りつけたことがあった。「グレゴール」は自虐の恍惚に浸って、スラヴ民族の感情を溢れさせ加害者の手に接吻した。このような環境はLeopoldの未完の「毛皮のヴィナス」に対する着想に強い誘因を与えた。この彼の作品中、最も有名な作は一八七〇年に刊行されたFannyは、ここではWanda von Dunayev, Leopold自身はSovereign KusieniskiそしてサルヴィニはAlexis Papadopolisとなっている。

FannyとLeopoldの別離は、二人が当初に規定した六カ月を最早や延長する理由がないと知ったとき行われた。夫人は最初から、彼女が一人の男だけで満足する女でないことを明らかにしていたのである。最後には、彼女は絶間なく「毛皮のヴィナス」を装い、肉体的にはその相手役を責めつけ、又彼の目の前で他の情夫達を見せつけたりすることに飽きてしまったのだ。彼女は結局、病理的なサディストではなく、苛酷で権高い意地悪な道楽女だったのである。

一八七二年四月、彼は日記に自分の性的見

解の要旨を記した。この記事の形式は多少、ばかされている。彼の精神の混乱が、彼の正常な表現の明白さに影響を与え始めているからである。

「私は私を余りに愛している者によって虐待されようとは思わない。私を愛してない者によって虐待されたいのだ。そして恍惚感に浸るのだ。Sovereign（毛皮のヴィナスの主人公）は、惨めな立場におかれる。彼が自分の隷属がこれ以上、耐え難いことが判つたその時に彼女はそれを続行することを強制する。私にとって女性を愛することは、彼女を恐れることを意味する。大抵の女性は、自分達より上位の男性を好み、私は私より上位の女性を好む。私は精神的にはどの女性よりも上位にあることを知っている。しかし、私は私の愛する女性が彼女自身の色欲を完全に抑制して、私の色欲を通じて私を征服することによって私の上位に立つことを求める。従って、私の理想とする残忍な女性とは、私が自分自身を虐待するための道具に過ぎない」

その夏、Leopoldのつきない根気と彼の特異の性的感情の対象への詳細な雄弁さが、遂に彼の最後の「王妃制」に対する志願者をもたらした——誌上の文通で今一人の女性に出

会ったのだ。彼女をワンダと呼んだ。ある夜彼女は自分が彼のためにすでに夫を去り、母と共に暮しているといった。この時に至り、彼女が彼と結婚したがっていることは明らかだった。彼は彼女さえ、彼等の関係において肉体的にも心理的にも、彼の思い通りの結婚に成功させてくれるということを確認してくれれば、結婚にも異存ないことを彼女に理解せしめた。それというのは、足蹴り、平手打ち、鞭打ち、それに未来の妻の計画され犯された姦通による未来の夫の嫉妬心のかき立てなどである。

彼は日記に記録している。

「ワンダは協約を求めた。私はそれを彼女に与えた。彼女は読んだ。これが、されたいこと?」その通り!」

その後、彼女は訂正文を送ってきた。それは、こう終っていた。

「もし、お前が私の制圧に最早、耐え得なくなり、そしてその鉄鎖がお前に重過ぎるようになったら、お前は自殺するしかないわね。私には、お前に二度と自由を返してやるつもりはないのだから」

彼は、彼女の見えすいた策略が、彼を結婚に追い込むためであることを知っていた。彼

は彼女が前からいっていた「夫達」というのが嘘で、彼女が時に彼が彼女に教えた中からその一節をいい加減に唱えてみせるのも結婚したいだけの目的であることを知っていた。

ワンダは、何より金持の有名人と結婚したいので、どうやって結婚するかは全く気にしなかった。それでも彼女は、彼を魅きつけた。彼の出くわしたどの女性よりも色情的であった。彼女は感情を文章に書いて彼に送り、それを彼女の指導者から、より適当な形にして返してもらった。ある時、彼女は彼に命じて彼女の著作中の短篇小説にそっくりくみ入れるべき一章を、そっくり書き送らせた。彼はいつにない辛らつさを以て、やり返した。頭にきた彼女は、彼の部屋に押しかけ、いつもその部屋に放り出してある毛皮と鞭を引ったくり、彼に上衣とチョッキを脱いで脆くように命じた。そこで彼女は、思い通りにゆかなかった、怒りをこめて、力の限り彼を鞭打った。これがあってから Leopold は彼女のいなりであった。彼は彼女と結婚もしたろうし彼女のために彼女の本も書いたろうし、物質的にも精神的にも彼の持てる限りを彼女に捧げたことだったろう。得意になり勝ち誇って彼女は今少しで、その場で彼の熱狂的な肉

体の要求に応じるところだった。しかし最後の瞬間に彼女は気を変え、大事な協定を押し通して立ち去った。数日後、彼の部屋で立会人のない内々の結婚式が行われた。一八七二年十一月十五日で、この日は新郎のクリスチヤン・ネームにゆかりがあった。この内輪の儀式に Leopold は白いタイに燕尾服で現われ、ワンダは最も豪華な毛皮をまとって現われた。ホストがワインを出す。いくつものお仕置が待っていた。新郎はケーキを忘れたことで懲罰された。新婦は以前の恋人達、僧侶、理髪師、芸人及び兵士と、全部で四人いたが、彼等の誘惑に屈したさまを、劇的に告白した。新郎は、このような背徳を欣んで拝聴している自分を、にこやかに観察した。この不道德に対する直接の肉体的苦難を彼は忍んだ。各種の、こういった興奮剤を更に重ねた後、次第にいや増す痛苦にうずきながら、この床入りの行事は延々と続いた。

ある時、ドイツの評論家が Sacher-Masoch の女主人公の単調性を非難したことがあった。ワンダは心配して、この欄に夫の注意を喚起した。

「Leopold, これ、何とかしなくちゃ。でないと干されるわ」

彼は彼女に、半ば切なく訴えるような、半ばひそかに計算ずくのような、独得の一瞥を投げた。

「私に何をすることができよう？ 現実の生活で理想の彼女を得てないのに、筆の上ではその彼女を創り出さねばならないのだから。もし、たとえば本当に私が家庭に『毛皮のヴィナス』を得て、そして彼女が鞭の正しい使い方を知ってるなら、私はそんなことを気にしなくなるんだが。私は現実の熱烈な、ほんものの権勢高いモデルによって刺戟されねば……」

彼女は唇を固く結んで、きつとなった。

「わかったわよ。なら、鞭打ってあげるわ。」

お前には鞭が要ったのだわね」

彼は忽ち顔を上げ、欣びに目を輝かせ、あたかも十代の少年が待ち焦がれたプレゼントを貰ったかの様子を示した。

「女王様！」

彼は肩をすくめ顎を沈めた。彼は畏縮した態度を示した。

「それは六本の皮紐のついた鞭でしょうか？ 鋼球つきの鞭でしょうか？」

彼女は本当に怒りに眉をしかめ、冷酷にならずいた。

男を働かせるために、こんな馬鹿げた茶番劇を演じねばならないなんて！ 氣狂い沙汰だわ！ それでも一家の暮しがかかってるんだわ。

彼女は、料理人が台所女中をのしるような調子で吐き捨てた。

「さ、お前の皮を、ひん剥いてやる、今直ぐに。このけがらわしい、能なし奴！」

「ううー、ううっ、ううっ」

彼は苦悶の悲鳴を上げ、身を痙攣させはじめた。彼の目は異様に廻転した。やがて彼女は、やりすぎたのではないかと思ひ出した。

だが彼女は、彼女の足許に身もだえのたうちながら呻いている犠牲者に対する同情から、本能的に手加減しようとするのを無理にも抑制した。彼女自身には、鞭打者としての性感は少しも湧かなかったが、普通の色情場面がこれに続き、そこで彼女は我知らず彼の哀願を容れることになった。彼はこのような事前行為の後では、必ず彼女に肉体的満足を与えることができた。しかし彼女は、精神的には全くかけ離れていた。恰も、見知らぬ男に強姦されるのと同じだった。とにかく、でも、もっとひどいことを我慢しなきゃならない人妻もあることである。

翌朝、彼は最高の気分で見覚め、直ちに書斎に入って仕事を始めた。昼食時も彼は潑刺としていた。そして、あらゆる点で、婦人雑誌の小説に出てくる最も典型的な恋人のよう

にふるまった。数週間に亘って、毎日この奇異な出来事が続いた。彼の職業に対する意欲は凄じく、彼の魅力は絶えなかった。夫の彼女への執拗で且つ熱心な姦通のすすめは、長いこと彼女の悩みの種だった。

ブタペストの法律学生サンドールは、他の近頃の『ギリシャ人』達よりも、ずっと見込みのある試供品だった。彼女は Leopold が後日はのめかしたように、もし彼女が「義務を果し」そして彼を「裏切る」ことをしなかつたら、彼はそんなに几帳面でない他の女主人を見つけはじめるとはならないかと心配だった。そこで彼女は思い切ることに決めた。遂に一八八〇年十月二十六日、すべてはととのった。

子供達と家政婦は Volkstheater に追い払われ Leopold は妻をテンの毛皮と白い絹縞子で飾り、イヴニング・ドレスで正装させ、そして学生が着いた時には、その衣裳でテーブルで待つように主張した。夕食後 Leopold は、みせつけるようにして台所に引き下った。

当惑した若い客は、女主人に対して、彼女の夫がどうしてこんな変な態度をとるのか遠慮がちに尋ねた。何か彼の感情を害するようなことでもやったのだろうか、とサンドールは、いぶかった。

婦人は呼鈴を鳴らして Leopold に書類（彼女が彼女の情人達と何をやっても構わないという協定書）を持ってくるように命じた。

Leopold は、それを非常な熱意をこめて大きな声で朗々と読み上げ、それから跪ずいてサンドールにそれを差し出した。

Sacher-Masoch の日記には、次のように記録してある。

私は急いで部屋を横切り、もう一方の扉を開いて入って行った。サンドールは依然、テーブルについていた。

ワンダ（立ち上り鞭をとり上げて）

「跪ずいて！」

私は、彼女の前に跪ずいた。

ワンダ「どう？ 嫉けるかい？」

私「勿論です、おそろしく……」

ワンダ「じゃ、もっとこらえやすいようにお前を打ちのめしてやるわ」

彼女は私を鞭打ち、それから鞭を投げ捨て私を蹴とばした。

「さあ、出ておゆき！ でも、近くにいてよくみておおき！」

私は隣室に行き、ワンダが扉を閉めた。私は気絶せんばかりだった。鍵の廻る音を聞いた時の私の驚きといったらなかった。彼女が全く私から自由に、私には止めるすべもなく彼女の思うさまのことが出来るとは思うだに恐ろしいことだった。私は、あかりを消しクッションを扉によせて跪ずき、鍵穴から覗き込んだ。

やがて妻は、勢よく扉を押し開いた。鞭を手にしていた。今、妻に不義を働かれた男は鞭打たれ、彼女の足に接吻を命じられ、サンドールを出口へ案内することを命じられた。学生は、恰もシナイ山の復讐の天使に追われるように逃げ帰った。

秘密日記は続く。

私どもはワンダがサンドールに許した部屋に入って行った。彼女は美しく、やや紅潮していた。彼女はコルセットと白い下着を投げ捨て、白い毛皮をふたたび引っかけて長椅子に横になった。彼女の輝くばかりの胸が盛り上げられた毛皮の下にわずかにのぞく。

「これで満足なんだわね？」

彼女が問う。私は彼女の足許に跪ずいた。

「ああ、ワンダ様、何と残酷な方！」

私は彼女の足にすがって唇を押しつける。ワンダ「どうなのさ、満足したかって、いつてるのよ！」

私「嫉妬で無我夢中でした。ほんとに鞭が欲しくって……」

ワンダ「だから、お望み通り、たっぷり打ちのめしてやったじゃないか、どうなのさ」私「そうです、とても凄い鞭打ちを……」ワンダ「彼が気にしたほどだったわよ、もう沢山だって」

私「貴女は夕食が済むまでは、権勢高くも自信たっぷりにもなってなかったのに、それなのに貴女はすばらしかった、本当に残忍で！ 貴女は私に見たり聞いたりする事を強制して私に対する拷問の残忍性をお強めになりました。貴女は、私の妻は、私の（毛皮のヴィナス）よりも、ずっとずっと残忍冷酷な方です。貴女が扉をお閉めになった時、私は貴女が彼のものになっているのを知って、身も世もないほどでした」彼女は笑った。私は続ける。

「貴女は私のことなど、ちっとも気になさらなかったんですか？」

ワンダ「ちっとも！」

私「ああ、でも部屋からお出になった貴女

の足許に私が身を投げた時は、少しは私の

ことを哀れだと思って下すったかと思いま

したのに」

ワンダ「これっぽかしもさ、その時が最高

〔実話〕と〔体験〕懸賞原稿募集

▽題名と内容▽

- 一、私はこのような変わった体験をした。
- 一、私はこのような、不思議なことを見聞した。或は自分で経験した。
- 一、私はこのような奇妙な探訪をした。
- 一、私はこんな珍奇な研究をしている。
- 一、私はこのような怪奇な経験をした。
- 一、私は人間の霊魂の存在を信じている。
- 一、妖怪変化が私を苦しめている。
- 一、私の見聞した怪奇談或は珍妙な実話。
- 一、私はこんな犯罪を犯した。
- 一、私はこのような変わった蒐集をしている。
- 一、私の趣向は、こんなに変わっている。

▽規定と賞金△

- 一、右に掲げたような△題名と内容▽の原稿を書いてみようと思われる方は、原稿用紙三十枚乃至百枚ぐらいの範囲内でまとめて投稿下されるようお待ちいたします。

一、写真或は絵画などの資料がありましたら

原稿に添付下されれば幸いです。若し原稿を書くことが不得手の際は、素材、資料の提供にても結構ですから、その旨御連絡下さい。

一、本規定により応募下さった投稿者の方々全部の方に対して、採否に拘らず編集部作成の女体緊縛フォト（或はMフォト）を折返えし贈呈いたします。贈呈枚数は原稿の枚数に応じて加減いたします。

一、誌上に掲載しました原稿につきましては一篇につき五千円以上三万円までの賞金を掲載と同時に贈呈いたします。資料のみ提供の場合も以上に準じて賞金を呈します。

一、締切りは毎月十五日。応募作品には、必ず△実話と体験▽懸賞応募と附記又は添記して下さい。原則として『応募原稿』の返却の求めには応じかねます。景品或は賞金を贈呈する関係上、連絡先は必ず明記下さるようお願いいたします。

にいい気分だったよ」

私「それから、どうお思いになったのでしょうか？ 私、あんなに惨じめな立場にあった時……」

ワンダ「いやらしい、と思ったわね、バカな男って。そして、ますますいい気分になったわよ」

私「貴女と彼が、あんな風と一緒に becoming するのを見るのは私にとって殉難の苦悩です。私の心臓は狂気のように高鳴っていました。私は震え通してました。思いもよらぬ恐ろしい苦しみでした。それでいて、私は目を反らすことができなかったのです」

彼が、このように長い間、病的な苦悩の欣びに身もだえのうちにながら、このような饒舌を続けて行ったのは確かであろう。彼女は彼がこんな大げさな歓喜の頂点に達したのをそれまでみたこともなかったし、こんなに賤しい卑屈さに酔っているのも、はじめてだった。

二人の間の長い間の肉体的な疎隔も、その夜の心底からの情熱への陶醉で終焉を告げ、これがワンダの長年の間の、絶望的な幻滅、心配、嫌悪感を一挙に埋め合わせるに足りるものだった。（カット・春川ナミオ画）

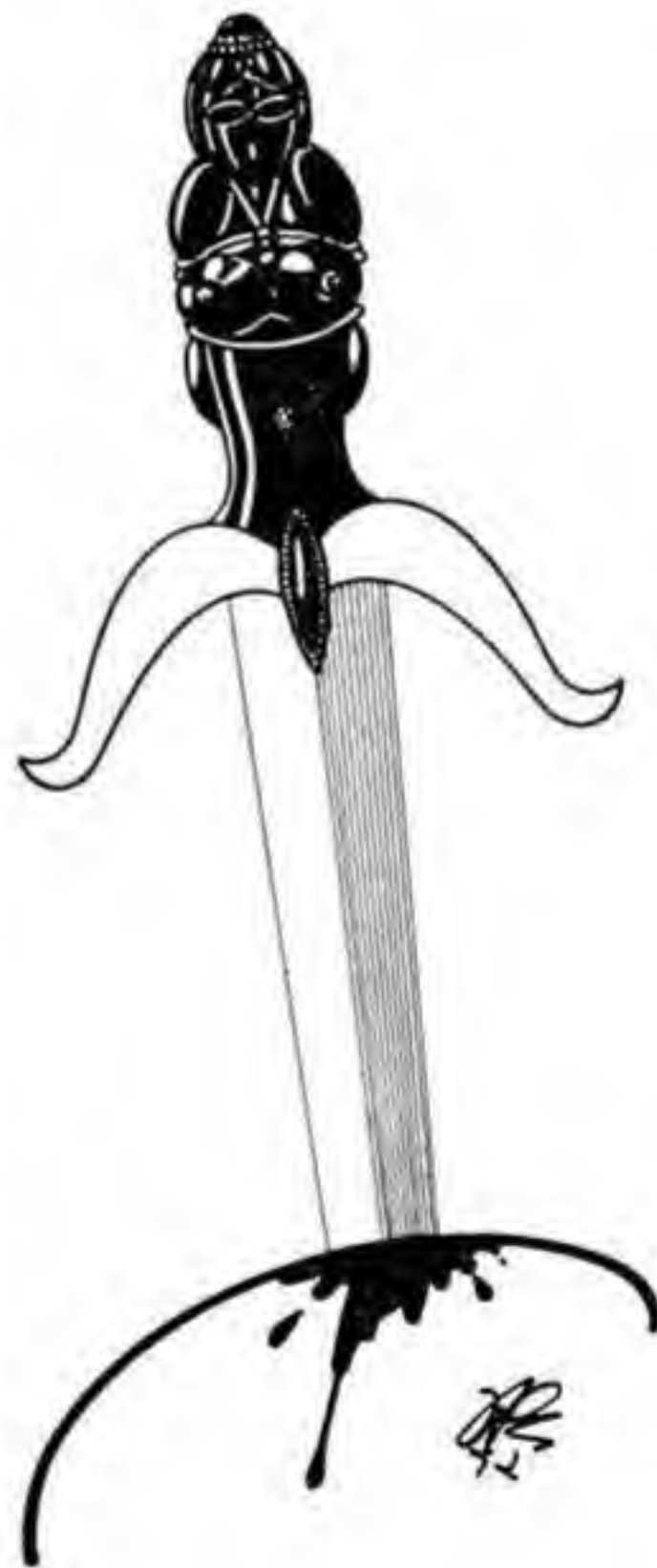
【ガンペッタ】

古来、コルシカでは裁判や法律より、銃とか、あいくちの方が尊ばれて来た。目には目歯には歯というような原始的な復讐、これをガンペッタ、という。

復

讐

(その11)



千葉青鬼

業火

広い邸内の、奥まった木立の奥に、ポツンと建っている土蔵であるだけに、火事が発見されたときは既にもう手遅れだった。

頑丈な扉は内側からおさえられていてビクともしなかった。濛々たる黒煙が棟下の鼠返しあたりから吹き出していた。分厚い膝喰いで包まれた外壁は焼けくずれる気配こそなかったが、内部の高温のためにヒビ割れて、触れないほどの熱さだった。

やっこのことで消防手が大扉をこわしたときには、もうこの土蔵の内部で焼けるものなことごとく焼きつくされたあとだったのである。更にその中で黒コゲになった男女の焼死体が発見されたのは、熱気がさめて人々が漸く内部へ入れるようになってからのことだった。

二人の屈辱的な身体毀損は、こうして辛じて秘密が保たれることになったが、寝室に残された小淵トシ子の持物等を見れば、死体が三島とトシ子であることが直ぐ想像がつくこ

とだったから、社長と美貌の女秘書との乱行の涯だなどと三文週刊誌などの飛びつきそうなネタがパツとあからさまになってしまふのをどうすることも出来なかったのである。

警察は勿論、新聞社なども色めき立っていた。丁度夕刊にはそのものズバリの材料だったから、締切りギリギリまでに少しでも掘下げようと非番の記者までかり出してやっきとなつて飛び廻るような有様だったのである。

状況から、どうやら心中らしいと判明した後でも、その動機は全く想像もつかなかっ

た。会社における三島社長のスケジュールは二箇月も先までギッシリ詰まっていたし、トシ子にしても翌々日の連休に秘書課の仲間と裏磐梯へハイキングに行く約束が確認されていた。このように身辺整理がなされていないことは、覚悟の心中という裏付けを否定することになってしまふ。そうだとすれば、他殺説も完全に葬り去ってしまうわけには行かないのである。第一、三島家では一人娘の恵利香が三月二十日に、ほぼひと月遅れて緋沙絵夫人が四月二十四日に行方不明になってしまっているではないか。二人はどこへ行ってしまったのだろうか。そして、これら一連の事件には、どんなつながりがあるのだろうか。疑惑はますます深まって行くばかりだった。

その日の夕方、緋沙絵夫人は丹沢の山中で死に場所をさがしていた。その手には、ショッキングな大見出しで三島達の焼死を伝えている夕刊が握りしめられていた。やや昂奮の静まった緋沙絵夫人は、二人を死に追いやった自分の罪を反省しはじめていた。夫である正義が卑怯なオポチョニストであることを今や切実に知りつくした緋沙絵夫人は、火をつけたのがトシ子だということがハッキリして

いた。それだけに、トシ子を巻添えにしてしまったことをくやむような気がしないでもないのである。トシ子なども、自分をも含めて二十年前の新藤かねと同じように、三島の好色の犠牲者ではないだろうか。そうとすれば一時の嫉妬心であのようにひどい目にあわせてしまったのは、いささか可哀想になってくるではないか。所詮、女の業のかなしさという他はないのかも知れない。

——あなただけ死なすんじゃないよ。春のうらうらとした草いきれの中を歩きながら、緋沙絵夫人は心の中で叫んでいた。

もう夕陽も沈みはじめていたので、ひっそりとした雑木林の中は、葉洩れ陽がチラチラするだけで、うす暗くなっていた。

下草が萌え出て、カーペットをなしている上に、訪問着の裾を露にぬらしして緋沙絵夫人は正坐して、静かに帯を解きはじめた。腰紐を抜くと、バラリと前がはだける。

全裸の緋沙絵夫人は虚脱したように立ちつくしていた。持参した小鉢みで腰を縛っていたテグス糸を断ち切り、プラスチック棒を思い切って引っぱり出したのである。緋沙絵夫

人は、こうすれば文句なくあの世へ行けるものと信じていた。新藤の説明によれば、プラスチック棒に仕込まれている爆薬が、途端に爆発する仕掛けになっている筈だった。それなのに今、引き出してもウンともスンとも言わないではないか。緋沙絵夫人はあざむかれていたのである。事実、新藤がそんな爆薬を持っている筈もない。

哀れをとどめたのは緋沙絵夫人である。死を覚悟してやったことなのに、はぐらかされて、そのチャンスを逸してしまった。こんなむごいことがあるのか。緋沙絵夫人は素漠とした表情のまま、次第に暗くなって行く夕闇の中に、その去就をきめかねていた。

翌日の朝、一人のハンターが大きな松のひと枝から腰紐でぶらさがっていた緋沙絵夫人の縊死体を発見した。

均斉のとれた美しい肉体は、むしろ全裸であることが当然のようにさえ思われたと、そのハンターは後で語っていた。

ただ残念なことは、その下半身が擦り創だらけだったことである。これは裸のまま灌木の茂みの中を無茶苦茶に突っ切ったためだと推察された。一糸もまとっていないかっただけ

に身元の割り出しには若干の時間がかかったけれども、夕方には緋沙絵夫人の足どりを追っていた警察犬が一キロばかり離れた奥深い林の中に散らばっている緋沙絵夫人の衣服とハンドバッグを発見した。

縊死体が三島緋沙絵であると断定されるに及んで果然当局は色めき立った。ところが剖検からも、聞き込みからも他殺説を裏書きするような証拠が出てこずに、これ又自殺と決定する以外になくなってしまったのである。

同じ日の夕方、近くの小川で釣遊びをしていた少年が、目の前を流れてきたプラスチックの棒を拾いあげた。テグス糸がつながっていることから、てっきり釣に使うウキだと思い込んだ少年は、奇妙なウキもあればあるものだと思っただけで、ただそれだけのことで再び流れに投げ込んでしまったのである。プラスチックの棒は浮き沈みながら流れて見えなくなってしまった。そして、勿論、このことは緋沙絵夫人と結びつくこともなく、ニュースにもならず終わった。



三島の会社では連続する大事件にキリキリ舞いをしていた。就中、秘書課は騒ぎの中心だった。数日間休暇をとって休んでいた後藤（実は新藤）も、出社した途端にこの騒動にまきこまれてしまったが、それでも持ち前のキビキビした物腰で葬儀の準備から新聞記者の撃退まで、大小様々の激務をさばいていた。

酒も煙草も飲まず、浮いたう

わさ一つない後藤は同僚の間でもマジメ人間で通っていたが、その独身のマジメ人間が三年前に自分の土地に五階建のアパートを建てたのはサラリーマン根性からいって正に瞠目に価する出来事だった。

政府資金を借りたとはいっても、返済金と家賃の差額つまり純益は相当の額になる筈だった。しかし、仲間が羨やむのをよそにして彼の生活は少しも変らなかつた。五階の最上階に、一つだけある区画を住家として、相変らずのヤモメ暮らしを続けているのである。

酒色にふけらないといっても、つき合いはよく、金惜しみもしなかつたので、評判も悪い筈がなく、降るような縁談が来たのも当然のことだったのだが、これだけは断乎として断りつづけていた。

彼の身の上は戦災孤児としてしか知られていなかった。不遇な少年時代について彼は語ろうとしなかつたし、又周囲もあえて問いたださなかつたからである。戸籍面でも彼をひろいあげたといわれる後藤五蔵の養子ということになっていた。その五蔵も死んでしまっていた。彼がアパートを建てた地所は、その後藤五蔵の遺産であつて、一部を売却して相続したものだったのである。

母に死別してからの新藤少年は、当時九才で天涯孤独の身となってしまう。戦後、衣食住に最も不足した時代である。誰も可哀想だとは思ってみても、どうしてやることも出来なかった。ないないづくしの養護施設は少年達を悪にさそう温床のようなものだった。

次第に浮浪児の群に入ってしまったとしても、無理からぬことだといわなければならぬ。いつの間にか、彼は後藤あきらと呼ばれるようになっていた。ひとり者のバタヤ、後藤五蔵に愛されて、一緒に暮らしていたからである。闇で儲けて小金を貯えるようになってから、五蔵は明を正式に自分の子にして戸籍を作ってくれた。そのお蔭で、アルバイトをしながらではあったが、明は大学を卒業することが出来たのである。

母、新藤かねの遺書は五蔵が預っていて、その表書にある通り、二十才になった年にはじめて明に手渡した。多感な年令である。強烈な印象だった。新藤明は、このときから復讐の鬼と生れかわってしまったのである。しかし、その胸の中は五蔵にさえ話さず心に秘めて勉強をつづけていた。そして学校を出ると、自ら進んで三島の会社に入ったのである。五蔵はふとしたことから五年前、昭和二

十七年に死んだ。むしろ大往生というべきかも知れない。よる辺のない五蔵を、他人ではあっても、新藤いや後藤明は心をこめて看病し、ねんごろにこれをとむらったのであった。

五蔵の死によって、彼には負うべき何ものもなくなっていた。今や全力を尽して宿敵に復讐の刃を振るべきときが来たといえよう。

スキャンダルであることはまぎれもなかったが、相ついで逝った三島夫妻の葬儀は大会社にふさわしく盛大に行われた。知名人の参会が多いだけに、担当者には芯の疲れることが多かった。

ところで、こうした二、三日の間における彼の裏方方は際立って見えた。寝る間もない程の激務がそうさせたのだと思って、誰もが同情した。特に、社長の弟にあたる三島次義専務には、その忠実さが好ましくうつった。専務は、この男を恵利香の婿にしたいと洩らしていた生前の社長の言葉を思い出していた。だが、その恵利香も今はどこへ行ったものやら皆目わからないのである。専務は暗澹たる心持で三島家の没落を感じていた。

転回

新藤、いや今は後藤と呼ぶべきであろう。その後藤明は重い心と重い足をひきずるようにして家に帰った。五月三日、事件から四日目の晩である。

五階建二〇世帯ばかりのアパートだからエレベーターもない。狭くて折れ曲った階段を最上階まであがると、この階だけは一世帯分しかなくて、残りのスペースは屋上になっていた。彼の住居はここであった。

団地型の鉄製扉の内には、留守中の新聞紙が堆高く散らばっていた。二、三拾いあげて見ると、どれもが事件のことをデカデカと報じていた。後藤は、それらの新聞をまとめて束に縛った。そして、久しぶりに例の黒いトレーニングシャツとパンツに身を固める。

ここで読者にタネ明しをしておかなければならない。恵利香が囚われている場所は、香港でもなければ中東の国でもなかったのである。後藤のアパートの地下の一部に作られた密室がそれであった。

そして、その密室は最上階にある後藤の住居からのみ出入できるようになっていた。その秘密の通路は最上階から地下室まで一直線

に通っているダストシュートだったのである。後藤が秘密を保つため建築業者を使わずに自らの労働で仕上げたことは、地下室のあらかじめ予定しておいた一面をブロック壁で完全に遮蔽して密室を作りあげてしまうことと、これも予め大き目に作らせておいたダストシュートを矢張りブロックで二つに仕切ってしまうことだった。密室には、ガス、水道、電気、排水等、すべて準備がされていたから、彼はそれを区切ってしまうだけでよかったのである。図を参照されたい。誘拐された恵利香や緋沙絵夫人は車のトランクに詰めこまれて、まず地下室のガレージへ運ばれる。そして麻袋へ入れてから、ダストシュートの中を五階まで吊りあげられるのである。ダストシュートの天井には起重機が取り付けられているから、ボタン一つでこの操作が可能である。リモコンで操作するから、怪しまれる配線も何も必要としない。次に、後藤が仕切ったもう一つの縦穴を通して再び地下まで降りると、そこはもう読者のよくご存知のA、B、C、Dの密室に連なる通路の端になるわけである。

さて、黒い服装に着がえた後藤は、作りつ

けの洋服ダンスを開いてハンガーにかかっている衣類を全部とり出してしまふと、その奥にある秘密の扉を開く。ダストシュートの上部にあたっている。上から起重機のロープが下がっていた。新聞紙の束をかかえ、ロープの輪に足をひっかけると、リモコンのボタンを押す。音もなくロープが伸びて、後藤の身体はスルスルと降りはじめた。

ここで緋沙絵夫人が、どうやって台北まで運ばれたかを説明する必要がある。

香港や台北は極端に言えば日帰りも可能である。三月下旬に香港で投函された恵利香の手紙は後藤が偽名で香港に渡航して出したものであった。疑名による出国は、それ程むずかしいことではない。年令、性別さえ同じなら誰でもよいのだが、適当な実在の人物を探がして、その人の抄本をとる。これは誰でも出来る。この抄本と自分の写真をつけて旅行社に依頼する。外務省や都庁で確認するのは出頭した人物と写真に写った人物が同一人だということだけで、戸籍上の人物との同一性を確かめることはできないのである。こうして、あなたの知らない間に、他人があなたになりすまして海外へ渡ってしまうことは可能

なのである。

四月十七日、緋沙絵夫人を誘拐する一週間程前、甲野一男という名で後藤は再び香港へ飛んだ。以前行ったとき仲よしになっていた白蘭という難民の女が彼を待っていた。かなりの金を払って、後藤は白蘭を相棒にした。年恰好、目鼻立ちも緋沙絵夫人によく似ていたからである。

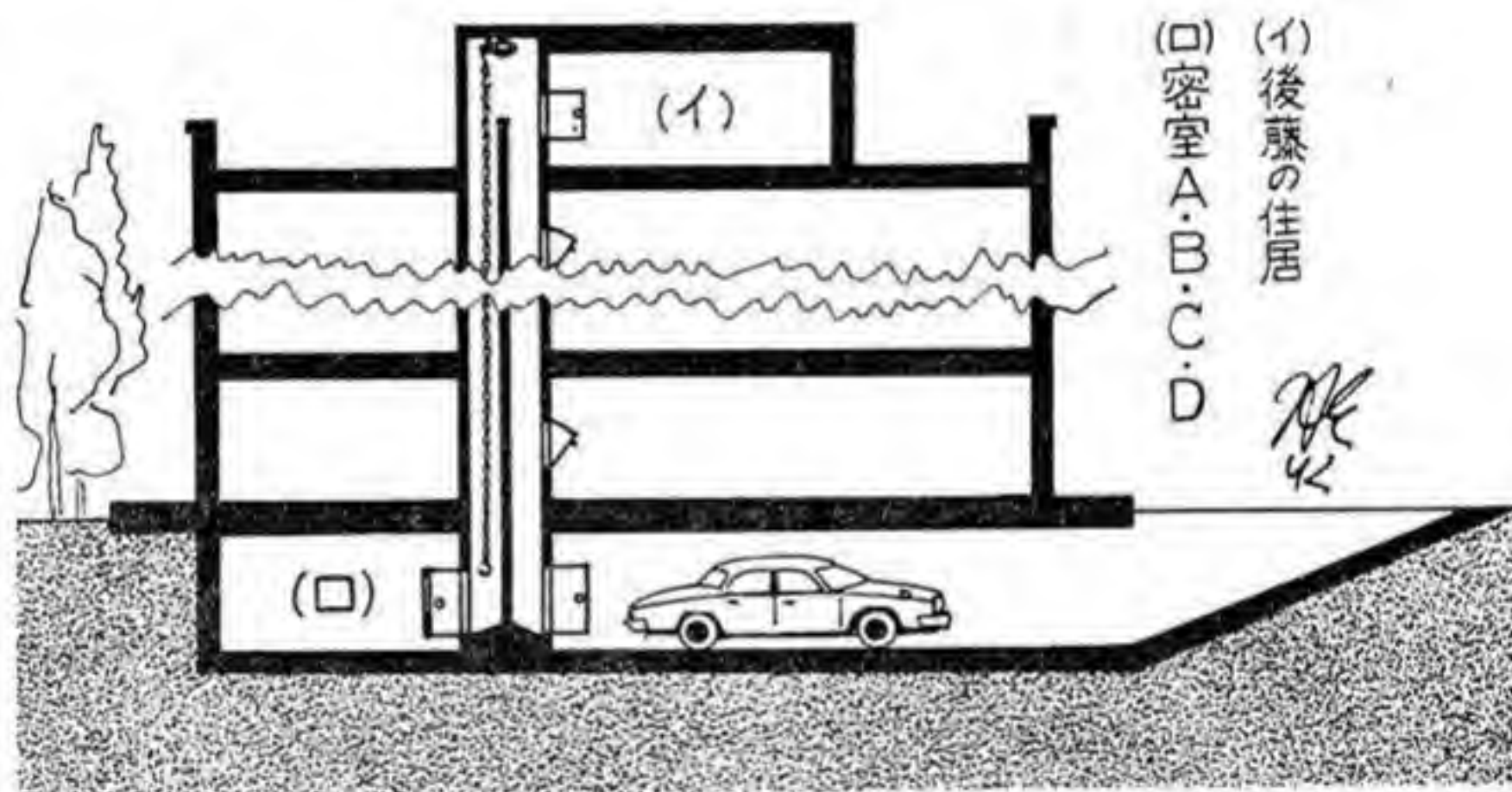
翌十八日には、盲目で啞という妻意文を伴った陳学良氏夫妻が日本に向かった。実は後藤と白蘭の変装だった。彼等の持参したのはフィリップピン華僑としてのパスポートだったので、陳学良氏が英語しか話さなくても、それ程不自然ではなかったのである。どこの国でも、出入国に関して自国の人には相当注意を払うが、通過あるいは短期ビザの旅行者にはきわめて寛大なのが普通である。陳氏夫妻は少しも怪しまれることなく日本に入学してしまつた。

後藤は白蘭に和服を着せて写真をとり、用意してあった緋沙絵夫人の本当の抄本を添えて香港への渡航申請をした。パスポートを貰いに行くときも手続き一切は旅行社の人がやってくれるから三島緋沙絵になりすました白

蘭が顔を出しさえすればよく、口をきく必要もなかった。

そして四月二十四日、まんまと罠にかかった本物の緋沙絵夫人が地下の密室にこんこんと眠っている頃、午後五時十五分発香港行きのノースウエスト七便の機内には、白蘭のなりすました緋沙絵夫人が搭乗していたのであった。香港に入ると、たちまちもとの白蘭にもどってしまったのだから、足どりのつかめる筈はないのである。

中一日おいた二十六日、陳学良、意文の夫婦が日航機で帰国の途に上った。彼等は台湾に一泊することになる。しかし、実は陳学良は十八日に入国した時と同じく後藤明の変装だったが、このたびの陳意文は白蘭ではなくて、緋沙絵夫人その人だったのである。目も耳も口も全く閉ざされていた緋沙絵夫人にはこうしたカラクリは予想すらできなかったのであった。こういうところにも、後藤の練りに練った計画があった。尤も緋沙絵夫人が彼の予想外の行動をしてしまったため急転直下、カタストロフがやって来てしまった現在から考えれば、いささか手が混みすぎているようにも思えるのだが、実際は、後藤としてはもっともって時間をかけて、ジックリ復讐



して行きたかったのである。もし、そうなら後藤の複雑きわまる神謀遠慮は、捜査当局を混乱させるためにも、又、計画そのもの

の実行の上にも、大きな武器となったであろう。

同じ二十六日、再び三島緋沙絵のパスポートを使った白蘭が香港から台北へ飛んで来て陳夫妻と同じアスターホテルに宿泊した。ここで、白蘭と緋沙絵夫人がすり変わって、白蘭は意文に戻り、緋沙絵夫人は名実共に三島緋沙絵となって、翌二十七日東京へ戻ることになる。いうまでもなく、後藤の陳学良と白蘭の陳意文は連れだって香港へ戻る。ここでもともと実在しなかった陳夫妻は蒸発してしまい。白蘭は後藤との取引を全部なしとげたことになって大いに満足して残金を懐中にしたような訳である。後藤は後藤で、四月十七日から香港に滞在していたことになっている甲野一男名義で、これは二十八日の夜、羽田へ帰国した。丁度、夕刊各誌が三島邸の怪事件を大見出しで報道していた時である。そのままゴッタ返している本社秘書課へ馳けつけた時にはもう普段の通りの真面目な後藤明に戻っていた。

後藤が出て行ってしまってから、恵利香は一人ぼっちだった。しかし、不愉快な金髪女と責め合って暮しているよりも、どれ程気が

楽か知れなかった。

日課は極めて厳格に守られなければならない。定められた通りにしていなければ、たちまち記録紙の上に、それが表わされてしまう。そして、後藤が帰ってきたときに、おそろしいお仕置きの材料にされてしまうに違いない。第一、一定量の運動をしなければ、食事も出てこないのである。渴きも潤すことができぬ。

あたえられたノルマは、恵利香にとって辛うじて達成できるほどの重さだった。だから少しもサボるなど思いもよらなかったのである。必死にペタルを踏むと、滝のように汗が流れる。喉が干上ってしまいそうに乾く。水が欲しい。しかし、一定の早さ以上で一定の距離を走った数字が出てこなければ、自動販売機は缶を落してくれないのである。一層力をこめて運動をつづける他はない。流れる汗を拭おうとしても、後手錠の悲しさは、それすら出来ぬ。風呂もシャワーも使えぬ俣で、次から次へと出ては蒸発する汗の塩分だけが残って裸の全身が白い粉をはいたようになってた。それが垢と混ぜあって異様な臭気を放ち始めて来た。

排泄物を入れたポリ袋も五つ、六つと次第

に数を増して来た。嚴重な新藤の命令は、一回毎に一つの袋にとって輪ゴムで封じた上、その時間と重量をマジックインクで書き止めておかねければならない。その作業を後手と口とでするのだから大変である。第一、ポリ

袋の中に用を足すのが又厄介至極な作業なのである。壁に寄りかかって、少しでも後手が下へ廻るように上体を反らし、ひろげた袋の口にうまく入るように尻を後へひくのが一番よい方法だと判るまでには何回も失敗を繰返した結果だった。チリ紙さえ許されないのでの用のおとしまつすらできない。どうしても残滓がコビリついて、不潔な体臭の原因となる。清潔好みで、一日に二回も入浴し、磨きに磨きあげていた恵利香には、いよいよもない程なさけないことであった。そして、泣く泣く、わずかな睡眠時間を休息しようとしても、寝床はむき出しのコンクリートなのである。しかも、後手が痛むので仰向けになることは耐えられない。横になっても、すぐに下になった腕がシビれてくる。うつ伏せでは苦しい。仕方がないから、これもザラザラして冷いコンクリートの壁に寄りかかって休むしかなくなってしまう。それでも、柔かな臀部が、コンクリートに喰い込んで鈍痛が次第に

眠りをさまたげるようになってしまった。結局、転々として、或は眠り或は醒めて、継続した睡眠をとることは不可能だということになってしまふのである。

ねてもさめても、現在の恵利香が考えることは後藤のことであった。早く帰ってきてほしい。そして、この単調な生活を止めることができたなら、たとえ、それがどのような責め苦であったとしても構わないとすら考える。

はじめは、新藤を激しく憎んだ。次におそろしくなった。そして、徹底的に責め抜かれた今は、不思議な思慕のような感情が湧き上ってくるのを、どうすることもできない恵利香になっていた。新藤のことを思いうかべただけで胸のうずくような気がしてくる。

そして、後藤が残して行った日付時計によると、彼が出て行ってから、まる四日間が経過してしまつたことになる。

八日目の朝、例により朝のおつとめ、奴隷の宣誓を済ませ、ペタルをふみ始めた時に、いきなり後藤が入ってきたのであった。

恵利香は全身が熱くなるような気がした。対象があらわれてきたので、ペタルをふむ足

ところが、後藤の方は、すっかり様子が変

恵利香を見詰める眼差しも、うつろな空しさを漂わせていたのである。つい十日程――

▽賞金△

▽内 容 △

一、特異な風俗文獻誌を標榜する本誌の内容にふさわしい力作を、読む雑誌としての新しい脱皮を企図する本誌の内容充実のため、広く読者の間から懸賞募集いたします。

一、S並にMは勿論のこと、各種各様のフェッショ一般、女性切腹、男性切腹、男女性、美、女相撲、女斗美、生首狂崇、変装、妊婦嗜好、見世物奇態珍聞、奇習珍奇風俗、風俗文獻紹介、同性愛、アブラブ等をはじめとして、その他古今東西に亘る特異風俗に関する題材を広くとりあげて下さい。

一、広範囲に大いに新分野の開拓による力作を歓迎します。特に従前本誌にて余り扱っていない分野の傑作をお待ちします。

▽規定△

一、応募作品は、すべて未発表の自作の作品に限ります。作品の中に引用部分があれば、その出処（作者、書名など）を明記願います。以上の二枚は四百字詰原稿用紙換算にて三十枚の原稿用紙をご使用願います。入選作品は順次、締切日は、毎月十五日。一次号の誌上に発表いたします。懸賞応募原稿は、他の一般原稿と区別するため第一頁に「懸賞」と書き下さい。返信料同封の上、その旨添記して下さい。一、原稿の送付先は、大阪市住吉郵便局私書函第41号、暁出版株式会社、奇ク編集部懸賞原稿募集係宛。必ず郵送（第一種郵便）によつて下さい。直接の訪問は固くお断りいたします。す。採否は誌上発表を以てご承知願います。

その姿を認めたとたんに、全身の血が騒ぎ
たて、自身がうろたえるぐらいの複雑な感情
に頬を染めた恵利香はペタルを踏み続けなが
らその苦しさを忘れていた。いや、忘れてい
たというより、後藤のその変貌ぶりが心配の
原因となって全神経が無意識に集中していた
のだった。

責められている筈の恵利香が、いつの間にか後藤を慕うようになっていたのかもしれない。すくなくとも、被害者が加害者の方に同情したのは事実だった。この瞬間、大いなるコンバージョンが起った。

人間性の不思議さは屈辱の極、その泥沼の中からこよなく美しい蓮華を開花せしめたのであった。被虐の難行に洗い抜かれた彼女は、自我の垢染を落して、かえって純一の愛に醒めることに成功したのである。古来、最大の幸福を享受し得るものは、又、最大の忍苦を成しとげたものだと言われている。この意味で、恵利香こそマリアのような女であったといえよう。そして、彼女はその敵を愛したのである。

(未完)

(未完)

見世物断章

阿部能丸



江戸時代初期頃より行なわれたらしい。その当時の古い記録によれば、見世物の種類はかなり多い。「軽業・箆拔・手妻・品玉・独楽まわし・軍書読・落語話・軽口・蛇使・力持・謎解・火食・盲相撲・異鳥怪獸・機関・畸疾者・侏儒・偽造品等」新趣多く、かぞえつくしがたし、とある。此の中には現代に残っているものも若干あり、戦前の祭りなどで見た方もあろう。

我国は、豊かな四季にめぐまれているためか、その季節を彩る祭りが多く、その想出は吾々の心のすみに残っている。永い間の生活文化の伝統から生れた素朴な祭りは、それに附随した庶民の文化？ 演芸、見世物、縁日等の交遷にも連なっていることと思う。

現代の祭りには情緒が年毎に乏しくなり、見世物も少なくなってきたことは、一寸淋しい。「明治百年」遠くなった古き良き時代に想いを馳せて見よう。

見世物とは珍しい物を観せる興行をいい、

軽業・箆拔等の曲芸を主体としたものは歴史が最も古く、奈良朝時代頃より散楽・猿楽として起り、貴族の愛好を受け、朝廷の保護のもとに曲芸学校まで出来て隆盛を極めたようである。正倉院御物の中にも散楽の図が描かれている。「人間重立の図」(人間ピラミット)人間の積重なった構図、又「棒の曲芸」頭上の長い棒の上での曲芸等、更に当時の文献『信西古楽図』には高足駄をはいた少女が手玉をとりながら綱渡りをしている図、奔刀、壺拔け、重立等のいろいろな散楽芸が記されていて面白い。

散楽曲芸はその後、貴族から庶民の間に広まり新しい民族芸能を生む母胎となって今日



に至り、明治以後、外国のサーカスの出現によって日本にも曲馬団として組織された。

手妻・品玉は奇術のことで水芸もこれに入る。水芸は江戸中期頃、水からくりとして演じられたのがはじまりで、江戸浅草寺境内で人気を拍し、特に美人太夫の小蝶と云う芸人は当時の人気スターの女王であったと云う。

以上は、まともなものであったからまあ良しとして、とかく見世物にはまともなものは少ない。今でも祭に来る見世物にはインチキものが多いが昔は同じインチキでも巧妙精巧な良心的？なものであったようだ。珍奇・妖怪変化等は、あとをたたず蛇娘、ろくろ首等、因果ものが花を咲かしていた。例の「花ちゃんよーう」「はいよーう」のゲテモノである。たいていの者は呼び込みの口車に乗せられて、好奇心とのぞき趣味も加わって入ってしまう。「お代は見えてのお帰りに」と云わ

シバタサーカス



れて入ったが、だまされたと思って怒れな
いのがこの世界の面白い処である。科学の発
達した現在でも結構、こんな見世物に入っ
ている者も多いから愉快である。二・三年前、
河童の見世物が来た。どうせインチキとは承
知の上で入って見たが、どこにも河童らしき



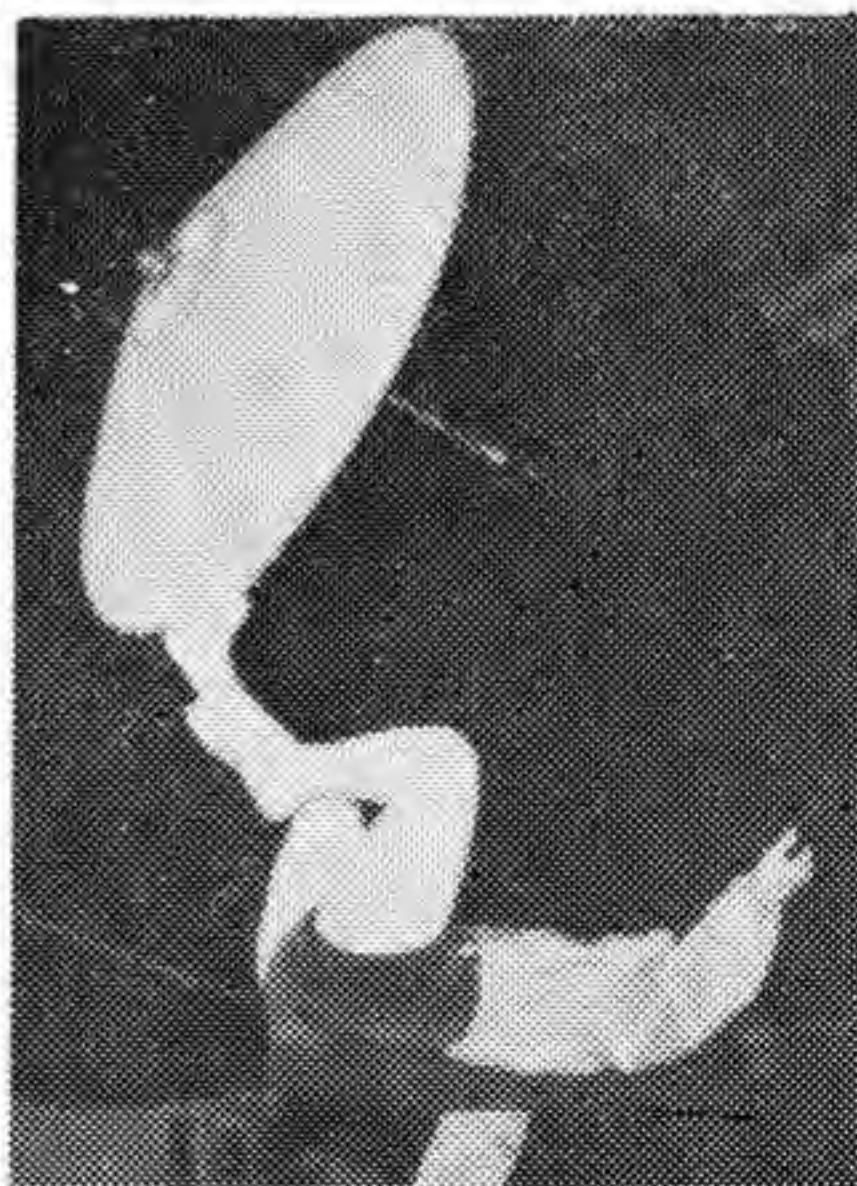
三好サーカス

ものはいない。その中に「河童が出
ます」と云うので期待？ していた
ら足もとの水たまりのようなきたな
い穴から一瞬、河童の頭らしいもの
がにゅうつと出てすぐ引込んでしま
った。説明がケツサクである「河童
は人目こきであるから、お客さんが
沢山いるのではずかしくて出てこな
い」と、まあ、こんなものだ。誰も
怒る奴はいない。怒るくらいなら入
らないだろう。

変った見世物では「屁の曲芸」が

ある平賀源内の著書によると、江戸中期
両国で興行して大評判となった「曲屁福平」
と云う放屁男ありと云々「木戸を入れば上に
紅白の水引わたし放屁男は囃方と共に小高き
処に座す。中肉にして色白く三日月形の撥鬚
奴に髪をあげ、^{はなだひとえ}縹の単に緋縮緬の襦袢を着こ
なし、口上さわやかにして憎気なし、先ず最

初が目出度目出度の三番叟尻ト
ッパ・ヒヨロ・ヒヨロ・ピッ・
ピッ・ピーツと拍子よく、つぎ
なるは東天紅をブウーとひりわ
け、次が水車プウプウと放りな
がら己が身を車がえし逆立ち、
さながら水勢に迫り汲んでは移
す風情あり、サア入替り入替り
と打出しの太鼓と共に立ちいで



三好サーカス

ぬ」と、流石の江戸っ子も肝をつぶしたらし
い。何とも悠長な太平の時代である。その他
お上非公認？の「十五才未満お断り」（注、
十八才にあらず、昔は十五才で成人）の見世
物は可成りあったようだ。因果娘の足芸、や
れ突け、それ吹け、花電車等、いつの世にも
覗き趣味は後を絶たないらしい。これらのも
のは説明をすると誤解を招くおそれがあるの
で？ 割愛する。

戦後、テレビ・ラジオの発展により芸能文
化は一段と賑々しく、ショウは大型化し、か
かる見世物類も日陰の花的存在となりつつあ
る。淋しい限りであるが時代の流れと共にい
ずれ消えてゆくであろう見世物を回想して断
章を終える。

（写真・筆者提供）

緋

ひ

縮

ちり

緬

めん

地

じ

獄

ごく

(第二回)

白鳥大蔵

受難姉妹

お絹は、信じられないものを見る驚愕の目で、妹のお雪の、苦悶と屈辱に耐えている、蒼白な形相をみた。

縄が素肌にくいこみ、うしろ手に縛られ、片足だけを宙に吊られている、無残な姿だった。

天井の鉤にひっかかっている縄が、お雪の片足首をかたく縛ってあるのだ。思わず目をそむけたくなるような、痛々しい妹の姿だった。

「お雪ちゃん！」

さけんで、お絹はふたたび、妹のそばへ走り寄ろうとした。

そのお絹の縄じりを、背後から銀三がひっぱった。お絹の左右の手首も、お雪と同じようにきびしく、乱暴に背中にねじあげられ、ひとつにくぐられているのだ。

「ここは、どこです。どうして、私たち姉妹を、こんな所につれてきたんです！」

けなげにも、男たちにむかって、お絹はさけんでいた。

火事だッという声に目をさまし、思わず寝床から起きて縁側へ出た。裏庭に白い煙がも

うもうと流れている。お絹は足をすくませて家内の者を呼ぼうとした。そのとき、その煙のなかから現われた男がいきなりお絹の口をおさえ、肩にひっかついだのだ。目かくしをされ、裏塀の外から駕籠で運ばれてきたので、ここがどこだか、江戸のどのへんになるのか、お絹にはさっぱり見当がつかない。

まさか、ここが拘摸の親分、立花屋久六の屋敷の、土蔵の床下深くこしらえてある地下部屋の一室だとは、夢にも思わない。

その立花屋久六の、赤黒くむくんだような顔が、ひきすえられたお絹の前に、傲然と立っている。

久六のとなりには、これは目の細い、キツネのような顔つきをした侍、すなわち八丁堀同心、八木沢左内が、底光りのする瞳を、じいッとお絹の白い顔にあてている。

「お絹だ、お絹にちがいない。銀三、でかしたぞ」

左内の唇がひらき、お絹の顔をくいいるように凝視しながら、満足そうな低い声をもらした。いかにも冷酷そうな、そして好色にぬれた唇である。

「お、お姉さん！」

ゆかの上から、わずかに首をもたげて、お雪の痛切な声があがった。

足首と天井の鉤とのあいだに緊張している縄が、かすかに音をたててふるえた。

「うるさいねえ、静かにおしよ」

お雪のそばにかがんでいる女がいつて、ひよいと手をのばすと、お雪の内腿のいちばん白いところをつねりあげた。

この女は、久六のめかけのお仙である。寝巻に黒襟の半纏をひっかけただけのだらしない恰好でかがみこみ、無抵抗にさらけだしているお雪のあちこちを、丹念に、楽しみながら責めたてている女だった。

二人の男と一人の女、そして自分をさらっ

てきた銀三と呼ばれる男が、自分と妹にとっておそろしい敵であり、なにかの目的でここへつれこんだことが、ようやくお絹にものみこめてきた。

「大津屋の娘二人、こうかんたんにさらってこられるものなら、もっと早くやればよかったな」

大津屋彦兵衛に恨みのある久六は、上機嫌でうそぶいた。

「まちがえるなよ、久六。娘をさらってきたのは、オランダ歌留多の謎を、大津屋に吐かせるためだぜ」

左内が、苦笑しながらいった。

「そいつを忘れるあっしじゃありませんけどね。まあ、こうなったら、あわてることアねえ。じわじわとやりましょう。いまごろは大津屋、家中ひっくり返るような騒ぎをしているにちげえねえ。大津屋の弱いところを、存分に痛めつけておいたほうが、あとの仕事はやりやすいっていう寸法で……。それに、お絹をさらってこいとおっしゃったのは、八木沢の旦那ですぜ」

久六が、かるく逆襲した。

「ちげえねえ……」

つぶやいて、八木沢左内の細い目が、お絹

の乱れた襟もとから、白い胸もとをさぐり、さらに、せわしく息づいているふくらみのあたりに粘りついている。

十九歳の生娘にしては、そのふくらみは大きく、ゆたかにみえる。容赦のない縄の力によって、乳房の上下を強くしめつけられているからだ。寝巻の上から無造作に縄がかけられたために、女らしいからだの線が、かえってなまめかしくあらわれて、左内の細い目を、うっとり楽しませる。

やがてあの寝巻をひんむき、肌についているものを、一枚のこらずひっぺがしてやる。

そのときあらわれる肌の白さ、娘らしい、ういういしさ……その瞬間の手ざわりを、左内は空想しているのだ。

その左内の視線のいやらしさに、お絹は首を左右にふって哀願するのだ。

「おねがいです。私たち姉妹をうちへ帰してください。私たちに、なんの罪があつて、こんな縛ったりするんです。お願いです、家へかえして……」

前へすすもうとするお絹の縄じりを、また背後から銀三がひっぱった。

「お前たちに、罪なんかねえさ。罪は、お前たちの親父の彦兵衛にあるんだ」

久六が、せせら笑った。

「うそです！……」

怒りと、悲しみのまじった目で、お絹は久六をみつめた。

「ふふふ……嘘じゃねえよ」

久六の乾分の新助とお京が、大津屋彦兵衛の懷中から掏りとった皮財布の底から、意味ありげな、オランダ歌留多の半片がでてきたのだ。大津屋には、かねてから抜け荷買いの噂がある、とつけ狙っていた悪徳役人の八木沢左内と、掏摸の親分久六は、これをネタにして廻米問屋の大津屋の身代をゆさぶることを考えついたのだ。

その第一手段が、大津屋の娘、お絹とお雪のかどわかしだ。

これで大津屋を責めつけ、オランダ歌留多の謎を吐かせようという魂胆だ。

なにやら湿っぽい、濡れた音がかすかにしたかと思うと、片足を吊られているお雪の声で、ひいッという悲鳴があがり、つづいて、齒と齒のあいだから洩れ出るような、くくくッという獣じみたうめき声が、ゆかを這って連続した。

お仙がまた、無垢なお雪のどこかを汚しているのだろう。

自分にはもう無い清純な美しさを嫉妬しているのか、お仙は飽きもせず、お雪を責めつけている。猫がネズミをとらえてもてあそぶように、このしたたかな女は、十六歳の娘のあちこちを、執拗にいじりまわし、唾液でぬらしては泣かせているのだ。

お雪のあえぐような泣き声に、久六が思わずふりかえり、涙でぬれているお雪の顔をおろした。

久六の卑しげな唇が、にやりとゆがんだ。なまぐさいようなにおいが、湯気のようにたちのぼっている。女だけしか発しないにおいだ。

お仙の年令は三十二、三。女として、知らないことは、なにひとつ無い年頃だ。なにもかも、知りすぎるほど知っている女だ。お雪に涙を流させるくらい、朝飯前の仕事にちがいない。

「く、く、く……ゆ、ゆるしてえッ……」

お雪の両足が、硬直したように突っぱり、けいれんした。

涙にぬれた顔が、真ッ赤になっている。苦痛ばかりではない、羞恥のために血がのぼっているのだ。愛らしい十六歳の胸の隆起のふもとまで、桃色に染まっている。

「お願いです、お雪を……妹を、ゆるして、ゆるしてやって……その足の縄を、解いてやってください！」

お絹は、目をつぶってさげんだ。

片足を吊られて、あられもなくひらかれ、血のでるような悲鳴をあげている妹の姿を、姉の心として正視できないのは当然だった。「お前が、妹のかわりになるというのなら、足の縄だけは解いてやってもいいぜ」

久六が、なにを思ったか、そんなことをいいだした。

「妹のかわりに？……」

思わず、すがりつくような目をあげて、お絹はききかえす。

「そうだ。お雪のかわりに、お前があの壁の前で、ああやって、片足だけを上に吊られるんだ。いい恰好だぜ、ふふふ……」

久六は酒焼けしたふとい咽喉首から、下卑た笑い声をあげながら、お仙をふりかえった。こんなことの察しはいいお仙が、わかったよ、とばかりに、すいとお雪に手をのばし即座にみじかい悲鳴をあげさせる。

お仙の手際は、まったく的確で、あざやかなものだ。いまのお仙は、自分が女であることを忘れてしまっている。

お雪に対する同情心など、小指のさきほどもないのだ。捕えたネズミをもてあそぶおもしろさに酔っているだけである。

その猫が、可憐なネズミに、また、つめをのばした。ぎくんツと、まっ白い、やや小さめの愛らしい腰がはねた。

「やめてッ……なります、妹のかわりに、私が……」

お絹の口から、思わずその言葉がでた。とたんに、お絹の顔色が、紙のように白くなった。

「ようし、おもしろい」

と、うなずいたのは、八木沢左内だった。

左内は、お仙をふりかえって、

「おい、その娘の足をおろしてやれ。だが、まだ縄を解くんじゃねえぞ。おろすだけだ。」

お絹がへんな真似をみせたら、すぐに縄をひっぱって、また吊りあげてやるんだ。わかったな」

ふふふ、とうすい唇で笑った。

お雪の左足首を縛った縄は、天井の鉤にひっかけられていて、さらに下へおり、縄じりは柱の環にとめてある。

左内の命令に、お仙は柱のそばへ寄って、その縄じりを解いた。

宙に吊られていたお雪の左足は、するする

とゆかの上におりた。待っていたように、すばやく膝と膝とをすり合わせるお雪である。

両腕は背後に縛りつけられたままだが、背中と腰をまげ、両足をそろえて縮めれば、羞恥はいくらか耐えることができる。

「さあ、おろしてやったぜ。こんどは、お前の番だ。覚悟はいいだろうな」

左内は、やせた片頬をひきつらせて、お絹にいった。

お絹は、はッと肩をすくめ、脅えを全身にみせてたじろいだ。

「おい、銀三、お絹の縄を解いてやれ。着たまま足を吊りあげたって、おもしろくねえ」

久六がいった。

「へい」

銀三はうなずき、おもしろくなってきたぞと、吐のなかでつぶやいた。

自分で縛った縄だが、さっきは夢中で縛ったので、お絹の上半身に固く食いこんでいてなかなか解けない。銀三はいらいらして、久六や左内に見えないように、お絹の二の腕のやわらかい内側をつねったりした。

ようやく縄を解いて、寝巻の単衣物をさっそく剥ぎにかかる

「あッ！」

と、十九歳の潔癖な本能で、お絹はかたく前こごみになり、銀三の手をきびしく払いのけた。

「世話をやかせるなよ、お絹。じたばたすると、お雪の足がまた高く吊りあげられて、お前までが恥ずかしい思いをするぜ」

久六が、お絹の顎に手をかけ、その目をのぞきこむようにしていった。

お絹の目のなかに、絶望の色が走った。

この男たちは、平気でそれをやるだろう。お絹はあきらめて、両肩の力をぬいた。

銀三の手が、つぎつぎにお絹の着ているものを剥ぎ、すぐに腰のものにかかった。

お絹の白い上半身が、弱い獣のようにすくんだ。

「待て」

と、銀三の手を押しとどめたのは、八木沢左内だった。

「それはいい、そこまでは取るな」

と、左内はつめたい声音でいった。

銀三が、不満そうに、久六の表情をうかがった。

久六は片目をつぶって、首を横にふった。左内にさからうな、という意味だ。

もう一年も前から、左内はお絹に惚れているのだ。人を介して、それとなく嫁にもraitたいと申し込んだこともあったらしいが、手きびしく断られたらしい。

万両分限の大津屋の娘と、侍とは名ばかりの三十俵二人扶持の同心とが夫婦になることはむづかしい。お絹は左内のことなど、その存在すら気にとめていない。

そこで左内は、強引にお絹を誘拐させてきたのだが、惚れた女の裸身のすべてを、久六や銀三なんかに見せたくないのだろう。

しかし、緋色の腰のもののだけの裸身は、お絹の色が白いだけに、見方によっては、全裸よりも鮮烈な印象を、男たちにあたえた。

お絹の乳房は、お雪のよりもひとまわりほど大きい。ふっくらと形よく盛りあがったその白い丘陵のあざやかな眺めに、久六も、銀三も、左内も、そしてお仙までもが、寸時のあいだ、息をのんでみつめたのだ。

その視線をするどく感じて、お絹の全身は火のように熱くなった。羞恥であった。生まれて初めての羞恥であり、屈辱であった。

思わず両手で自分の胸を抱きしめ、お絹はその場にうずくまっていた。

「さあ、その白いかわいなお手々を、背中へ

まわしてもらおうかね」

と、銀三が縄をしごきながらいった。

しかし、お絹はいよいよまるく背中をまるめて、両腕の中に自分の乳房をかかえ、うずくまっている。

「おい、きこえねえのか。腕をうしろへまわすんだ」

銀三の声が荒くなり、持っている縄で、お絹の尻をぴしりツと打った。

「縛らないでください。私は逃げません、けっして逃げませんから、もう縛らないでください。私、縛られるの、いやです」

お絹は哀願した。髪が乱れて、お絹の眉の上にかかった。

「だめだよ。旦那方のお顔をみな」

銀三が、顎をしゃくっていった。

お絹は、わらにでもすがる気持ちで、久六と左内の顔をみあげた。

拘摸の親分と悪徳役人は、冷酷な、そして好奇にみちた視線で、哀願するお絹をみおろしていた。

つめたい、氷のような風が、お絹の胸のなかを吹きぬけた。

どんなに泣きわめき、さからっても、この男たちは私を縛りあげるだろう。

お絹は、あきらめた。

両腕を、自分から背中にまわし、左右の手首を重ねた。自然に、お絹の首は前に垂れ、みじめな、痛々しい姿になった。

「手首を、もっと上にあげて、しっかりと重ねるんだ」

銀三がどなった。お絹は唇を噛んで、そのとおりにした。

銀三の縄が、お絹のほそい手首にかかったとき、そのおぞましさに、お絹は本能的に肩をふるわせた。思わず、目をとじていた。

銀三は、ゆっくりと縄を扱っていた。お絹の肌に、なるべく多く触れようとしていた。ざらざらした感触が、お絹の腕に触れ、背中に触れた。

あまりの不快さに、お絹はとじたまつ毛をふるわせ、腰をくねらせた。

縄が、びしびしと素肌に鳴った。

左右の手首が、重ねてひとつに締めあげられると、それだけでもう自由が奪われ、気の遠くなるような思いだった。

そんなお絹のせつない反応のうごめきを、二人の男と、一人の女が、あやしげな見世物でもみているような好奇心な目の色でみつめているのだ。

縄がしなやかな腕を十分に締めあげ、胸にまわってきた。お絹は、奥歯を噛みしめ、いっそう固く両眼をとじた。まつ毛のさきが、こまかくふるえている。

からだじゅうの毛穴から、声にならない悲鳴がふきだしている。苦痛と不安が、お絹の心身を責めつける。

この人たちは、私をこんなに縛って、どうしようというのかしら……。

娘の本能が、このあとにくるものを恐れるのだ。

銀三の額にも、うっすらと汗がにじみでている。ごわごわした縄が、お絹の胸をしめつけはじめた。ううツと息がつまる。

銀三の手が、わざとらしく敏感な桃色の頂点に触れた。お絹は唇を噛んで、その屈辱に耐える。避けようとしても、無駄なのだ。

縄は休みなく、二重にも、三重にも、強さを加えてお絹の胸の上下を縛りあげていく。

最後に、白い肩をびしりツと縄の余りで打って、銀三の作業が終った。

銀三の手が、お絹の肌からやっとな離れた。ただし、縄じりだけは、しっかりと未練げに握っている。

上半身をかたく縛りあげられたお絹のから

だが、左内の前にひきすえられた。

「うむ……」

左内は、満足そうにうなずき、お絹の容貌を、しげしげとみおろした。

細く長いまつげの微妙なかげ、とじられた瞼のかたちのよさ、ひたいから鼻にかけての品のいい顰めた線、彫られたような唇の魅力……。

そして、それらをつつんだ輪郭は、たえようもなく、巧緻で優美な愛嬌をたたえていた。

美しい……やっぱり、おれが惚れた女だけのことはある……。

左内は、心中でそうつぶやいていた。こんないい女を、拘摸どもの餌食にしたまるか……。

左内には、一案があった。銀三がお絹を縛っている間に思いついたものだ。

「お絹には、片足吊りなんかよりも、もっとおもしろい目にあわせてやろう」

と、左内は、立花屋久六にいった。

「へえ、おもしろい目といいますと？」

久六が、大きな鼻をうごめかした。

「お前の乾分の若い男と女が^{はか}駈落ちを企ったのを、千住の手前でうまくとりおさえたと言

っていたな」

「へえ、男の名は新助で、女はお京……二人ともふん縛って、土蔵のなかに押しこめてあります」

こたえて、久六はふと、そのお京のあられもない姿を想像していた。

お京と新助への仕置きは、一の乾分のまむしの源次にまかせてある。

はじめは、久六がたっぷりとお京の味を楽しむつもりだったが、お京の懐から出てきたオランダ歌留多の半片のおかげで、事態は思いがけぬ方向に発展し、久六はこうして、大津屋の娘のほうにかかりきりだ。

源次のことだから、お京を放っておくはずはない。存分に料理していやがるだろう。

それをゆるしているはずだったが、久六は乾分に対して、ふっと嫉妬した。

お京のしなやかな白い肢態が、源次の浅黒い手足にねじ伏せられている光景を思いうかべた。

いくら気性の激しい女でも、お京はうしろ手に縛られているのだ。そばで新助が見ていても、源次なら平然となんでもやるだろう。「そのお京と新助を、ここへ引きずってくるのだ」

久六の妄念は、左内の声で消えた。

「あの二人を、ここへ？」

「そうだ。この地下部屋でその二人を仕置きするんだ。ちよっとおもしれえ趣向でな。どうだ、久六」

わざとらしい巻き舌で、八木沢左内はいった。針のような目が、なにかの期待をみせて光った。

犬と人形

激しい吐きけを、お京は齒をくいしばって耐えていた。うしろ手に縛られた身を、ぐったりと土蔵の壁にもたせかけている。

うつろな目で、天井をみあげていた。みだれた髪の毛が、汗でぬれた額にべったりと貼りつき、凄艶な容貌になっていた。

唾液が、だらしなくゆるんだお京の唇の端にねばりついている。

へんに脂くさい源次の舌が、なんどもなんども、お京の口のなかへねじこまれたのだ。

息がつまった。

その源次の舌を、必死になって噛み切ろうとしたが、どうしてもきでなかった。

顎に力が入らなかった。顎や齒ばかりでな

く、全身に力が入らなかった。

源次の男くささに負けたのだ。

負けたことが、くやしかった。

源次は自信をもって、存分にお京を仕置きしたのだ。

そのたくましい体力の前に、お京の抵抗はむなしかった。もし両腕を縛られていなくても、お京は抵抗できなかったろう。

自分が女であることを、骨の髄まで思い知らされたのだ。

源次の仕置きは積極的だった。なんのてらにも、自意識もなかった。傲慢といえ、これ以上の傲慢はなかった。

はじめのうち、お京はすぐそばにいる新助の存在を意識して、屈辱にもだえた。堅気の暮らしを望んで脱走を企ったお京である。人間らしい心も、女らしい羞恥も、まだ持ち合わせている。

しかし、その羞恥はすぐに吹きとんだ。

追いつめられ、源次のまきおこした嵐のなかにほんろうされた。

新助がなにかわめき、吠え、泣き声をあげているのが遠くできこえ、源次が、その新助の胸や腹をしたたかに蹴りつけて沈黙させたことも、おぼろげながら記憶に残っている。

それからあとは、仕置きの激しさに、なにもかも忘れた。嵐のなかに同調し、骨という骨が、ばらばらになった。

「縄、縄、縄をといて、源さん、縄、縄をといて、あッ、源さんッ」

両腕を背後に縛った縄が邪魔で、お京は夢中でうめいた。

源次の仕置きは、二度、三度とつづいた。

嵐は吹きやまなかった。源次も燃えさかっていた。お京のとじた臉の裏に、いくたびか火の柱がよぎった。

「おれはな、お京、相手がお前でなかったらこんな本気になって折檻をしねえぜ」

齒をむきだして不敵な笑いをみせ、首すじに流れる汗を手の甲でぬぐいながら、源次がいった。

お京の顔は、涙でぬれていた。

新助は、呆然と、土蔵の壁によりかかっていた。お京はなかば意識をうしない、疲労のための吐きけを耐えていた。

源次もさすがに疲れたらしく、ゆかの上に大の字になって寝ている。咽喉もとから胸毛へかけて、汗とも脂ともつかない大粒の玉が一面に光っていた。

久六の命令で、銀三がこの土蔵へやってき

たのは、お京への仕置きが一段落した、ちょうどそのときだった。

「兄貴、親分のいいつけで、その二人を地下部屋までつれて行くんだ」

と、いいながら、銀三は土蔵のなかのなまぐさいにおいに、鼻をひくひくさせた。

敏感な銀三は、にやりと笑って、

「だいぶ精をだしたらしいな、兄貴。それじゃア、この二人はおれがつれていこう。兄貴は一服してからくるといいや」

気をきかせた口ぶりで、そんなことをいった。

銀三は、いつかは源次をだしぬいて、自分が一の乾分になろうと機会をねらっているのだ。

そんな銀三の腹のなかを読めない源次ではないが、表面にはださず、

「たのむぜ、銀三、おれもすぐ後からいく」といって、片目をつぶってみせる。

「なにか、着せるものはねえんですかい。このままじゃ、あんまり……」

と、銀三がお京に目を走らせていう。

「着せたところで、どうせすぐぬがすんだろ。そのままつれて行け」

「ちげえねえ」

銀三は卑しい声で笑った。

お京と新助の縄じりをとって引きたてる。

「じゃ、兄貴、行くぜ」

お京には、もう抵抗する気力は一片も残っていない。うなだれたまま、おとなしく引かれていくのだ。

この折檻土蔵のすぐ裏手に、もうひとつ土蔵があって、古い家財道具などのガラクタが申しわけ程度に入っている。

しかし、ゆか板を一枚剥ぐと、頑丈な檜材の階段ができていて、べつの世界へおりることができるのだ。

噂にはきいていたが、この地下部屋へおりていくのは、はじめてだった。

お京はいくどかよろめき、のめりそうになる。そのたびに、銀三が背後で縄じりをひいた。

階段をおりると、すぐにいかめしい扉がある。

「お前にとっては、ここは地獄の扉というわけだぜ」

お京の尻をなでながら、銀三はその扉を三度叩いた。扉は、中からひらいた。

お京と新助は、背中を突きとばされ、つんのめりながら、部屋のなかへ入った。

「お前が、お京か。なかなかの器量だな。なるほど、掏摸にしておくのは惜しい」

八木沢左内が、ひと目みていった。キツネのように唇のどがった悪徳役人の顔を、お京は力のない目で、ぼんやりと見あげた。

その左内の後方にうごめく二個の白い生きものが、お京の視界のなかに入った。

部屋のすみに、柱が二本立っている。

その二本の柱に、女が二人縛りつけられているのだ。うしろ手に縛られ、乳房の上下に縄が見えないほど強くくいこんでいる。その無残な光景をみても、いまのお京にはなんの反応もない。それほど、心身ともに疲れ果てているお京だった。

「だいぶ折檻されたようだな、お京。げっそりしてるじゃねえか」

嫉妬をあらわにして、久六がいった。腹のなかで舌うちする。くそッ、源次め。

「ええ、もう、源次兄哥によっぽど何かされたとみえて、足もともあぶねえんで」

すかさず、源次がいった。

そのとき、ふいに新助があらわれた。

「親分、ゆるしておくんなさい、あっしが悪かった。親分のためなら、あっしは一生身を粉にして働きます。いのちだけは、いのちだ」

けはお助けください！」

新助は、銀次に体当たりして弾きとばし、久六の前に跪ずいてわめいた。

「いのちは助けてやる。ただし、おれのいうことをきけばな……」

左内がいった。

「な、なんでも言うことをききます！」

新助は、からだを卑屈に折って、額をゆか板におしつけた。

「おい、新助、そのことばに嘘はねえだろうな」

左内と意味ありげな視線をかわしながら、久六がいった。

「銀三、新助の縄をといてやれ」

という久六の命令に、

「え？」

と、げげんな顔をしたが、銀三はすぐにその命令にしたがった。

「おれたちの氣にいるようにやったら、きさまのいのちは助けてやる。氣にいらなかったら、この場で叩ッ斬るぞ」

左内が、刀の柄をなでさすりながら銀三を脅した。

「やります、なんでもやります！」

縄をとかれた新助は、その決心を示すため

に、ゆかにしがみついて、久六と左内の足もとにひれ伏した。

「おめえ、犬になるんだ。なれるか？」

見おろして、久六がいった。

「犬に？」

新助は顔をあげた。

久六が、説明をはじめた。新助の表情に、みるみるうちに血がのぼり、おびえるように尻ごみした。

お仙が、ふいに、けらけらと声をあげて笑いだした。

「そいつアおもしろいや。新助、おやりよ、やってごらん、私が見ていてやるからさ」

氣ちがいのように大きな口をあけて、お仙は笑いつづけた。

「うるせえ、お仙、馬鹿笑いはやめろ」

久六が舌うちしてどなった。

「いやなら、いやでいいんだ。きさまの命が無くなるだけだ」

左内が威嚇した。瞬間、冗談ではない殺氣が、左内の全身にみなぎった。

「や、やりますッ」

新助の瞳孔のなかに、狂氣じみた決意が生まれた。その決意をみて、左内がいった。

「そこにいる二人の娘の前で、犬の真似をす

るんだ。その二人は伊勢町の廻米問屋大津屋のお嬢さんだ。なにもご存知ねえ箱入り娘なんだ。このお嬢さんがどんな顔をするか。どうだ、おもしろいだろう……」

自分たちのことをいわれて、お絹とお雪の姉妹は、縄に縛られている胸を、びくりとふるわせた。

ああ、この男たちは、また何かをたくらんでいるのだ。私たちを苦しめる、おそろしいことを……。

「いいか、目をつぶっちゃいけねえぜ。目をとじたり、顔をそむけたりしたら、この折れ弓の筈で、お前たちの腿を叩くぜ。わかったな」

左内が、お絹とお雪にいった。

久六の指図で、銀三がお京を引きたて、姉妹の縛られている二本の柱の前へ突きとばすようにしてころがした。

肩さきを打った痛みにもうめいたが、お京は抵抗しなかった。ふてくされているようにもみえた。久六の足が、うつ伏せになっているお京のからだを乱暴にひっくりかえした。

ごろりと、お京は仰向けになった。背中に縛られている手が、自分のからだの重みにつぶされ、眉をひそめた。

抵抗する気力も、体力も、お京にはもう残っていないかった。

源次によって加えられた執拗な折檻による疲労が、この場合、お京にはむしろ幸運だったといえよう。

いまのお京には、羞恥を思う余力すらなかった。お京は、魂のない人形だった。それを幸福といわねばならないのは、なんという悲惨なことだろう。

悪徳役人の手には、折れ弓の筈があった。その筈が、犬の尻を思いきりなぐった。それが合図だった。

犬は尾をふってかけだした。人形の咽喉首にくらいつき、ふりまわした。

人形は小さく唇をひらき、きしむような声をあげたが、目をとじたままだった。

久六とお仙と、銀三の目が、異様光りをおびて吸い寄せられた。

ふいに、ぴしりッとして左内の筈が、お雪の腿の上に鳴った。

お雪が、顔を伏せた。白い二本の腿に、たちまち赤い筋がついた。

つづいて、また、ぴしりッとして、こんどはお絹の太腿の上を、弓折れの筈が叩いた。お絹が、目をとじたのだ。

「いや、いや、いやです、ああッ、お姉さんッ！」

お雪は、肩を左右にふって激しく泣きだしている。縄目のあいだの愛らしい二つの乳房が、うす桃色にそまってふるえた。

「お雪ちゃん、みないで、みないでッ」

お絹は、目を血走らせてさげんだ。

それは、たしかに、十六歳の妹にみせてはいけないものだった。しかし、そのお絹の声は、左内の筈でまた消された。むきだしのお絹の太腿の上に、弓の折れは鋭い音をたてて鳴りひびいた。

その痛みに、お絹は一瞬、ぎくんと背骨をつっぱらしてのけぞった。が、すぐにまた顔を固く伏せる。

腿の皮膚から筋肉が、火のついたように熱くなる。赤い筋が、雪のように白い太腿の上に染まる。しかし、お絹は顔をあげようとしていない。

どんなに脅され、叩かれても、眼下のものを見るよりは苦痛がすくなかった。

左内もまた、いまは犬や人形のほうを見ていなかった。

新助を犬にし、お京を人形にしたのは、お絹の反応をみるためである。お絹の羞恥をみ

て楽しむためである。

左内は姉妹の、とくにお絹の異様にゆがんだ形相を凝視している。屈辱と羞恥に、身も世もあらぬ態でみもだえている全身の表情を楽しんでゐるのだ。

ゆがんではいるが、美しい白い顔だった。

左内にとっては、これがこの世で最上の美しい顔なのだ。

「顔をあげて、よく見ろ」

固くうつむいているお絹の頸の下に、筈があてがわれ、それをぐいぐいと上へこじあげる。お絹の顔が赤くなり、齒をくいしばっていっそうゆがんだ。

「ゆるして、ゆるしてください！」

筈を、こんどは縄目にねじこまれて、お絹の乳房がゆがんだ。あまりの苦痛に、お絹もまた、声をあげて泣きだしていた。

涙があふれ、その涙が、自分の乳首の上にしたり落ちた。

地下部屋に、熱っぽい、なまぐさいにおいが充満した。

悪党月夜

明けの六ツ時、大津屋彦兵衛の家、広い

裏庭に面した雨戸の一枚に、白羽の矢が突き刺さった。

矢は裏塀の上から射られたものらしく、先端には、結び文がついている。

ひと晩じゅう、一睡もせずに娘二人の安否を気遣っていた彦兵衛が、みずからその矢文をひらいて読んだ。

『お絹とお雪の身柄は、当方で預っている。娘たちの命が心配なら、彦兵衛一人、今夜五ツ半、駒形が多田薬師まで来い。ただし他言無用のこと』

と、書いてある。

昨夜からの不吉な憶測が、事実となったのだ。美しい姉妹は、やはり、かどわかされたのだ。

「わたし一人で参りましょう」

彦兵衛は、沈鬱な声音でいった。彦兵衛の左右には、女房のお静と、腹心の番頭の忠助が、不安な眉をよせて、その矢文をのぞきこんでいる。

「私もお供いたします。もし、旦那さまのおからだに、万一のことがございますと……」緊張に語尾をふるわせながら、忠助がいった。

「いや、わたし一人で行きます。なにしろ、

娘が二人とも人質にとられているのだ。いまは先方のいう通りにしないと、娘の身が心配です」

彦兵衛は、きっぱりとこたえる。

「お奉行所へお届けしては……」

というお静に、彦兵衛は重い苦笑いをしてみせた。

「お静、このことは内証にしておかないとまずい。お前もこの家へ来てから、もう三年になる。そのへんの事情は、察してもらわないと困りますよ」

そのへんの事情というのは、大津屋の抜け荷買いのことである。

へたに騒ぎたてて、役人が大津屋へ出入りするようになると、取り返しのつかない結果になることは、腹心の番頭の忠助もよく心得ている。

「まあ、わたしにまかせておきなさい。お前たちは、それほど案ずることはない」

剛腹な彦兵衛は、不敵な微笑を口もとにただよわせていった。

約束の時刻より、一刻ほども早く、彦兵衛は大津屋の店を出た。

黒八丈の羽織に、茶の綿頭巾を襟巻にしたいかにも実直な、商家の主人の風態である。

町駕籠をひろうと、浅草の橋場へ、と命じた。

橋場の真崎稲荷のそばに、彦兵衛の別宅があるのだ。お静にも、忠助にすら知らせていない、彦兵衛にとっては、秘密の隠れ家であった。

彦兵衛は、その別宅に、用心棒を一人、飼っているのだ。

名前は、寺尾半九郎。真心影流をよく使う浪人者である。金のためなら、平気で人を斬る男だ。

「あの痩せ犬に無駄飯を食わせておいたのもこんなときのためだ」

駕籠にゆられながら、彦兵衛はつぶやく。小遣金をあたえ、酒をのませ、ときには、女も抱かせてやっている。

そのかわり、いつかはこの彦兵衛のために命をくれよ、と言ってある。半九郎もそれを承諾して、大きな顔で毎日酒をのんでいる。そんな浪人者を、まさか日本橋の店に置くわけにはいかない。

その橋場の別宅から、寺尾半九郎をつれてこんどは指定の場所である駒形が多田薬師へ向かうころには、もう約束の五ツ半に近く、江戸の町はすっかり夜の気配につつまれてい

た。

むろん、半九郎には黒い頭巾をつけさせ、彦兵衛のあとから、それとなく見張るように命じてある。

いつのまにか、隅田川の上空に十五夜の月が出て、あたり一面、昼間のようにあかるくなっていた。

一方、彦兵衛を呼びだした立花屋久六は、これも一の乾分のまむしの源次をつれて、ひと足早く、薬師横の老松のかげで、息を殺して待機していた。

「親分、き、来ましたぜ。あれはたしかに大津屋だ」

源次が、久六の耳もとにささやいた。

久六はうなずき、その腹のつきでた短軀をのっそりと大津屋の前に現わした。

「大津屋だな、一人か？」

と久六は、用心ぶかく彦兵衛の背後を見すかす。

「へい、さようでございます。それであなたさまは？」

大津屋彦兵衛は、商人らしい姿勢をくずさず、おちついて相手の人相をたしかめる。

「名乗るほどの名前じゃねえが、これからの取引きに、名無しじゃ不便だ。まあ、立花屋

とでも呼んでもらおうか」

「立花屋さんでございますね、へい。……娘たちをかどわかった目的は、やはり、お金でございましょうか。お金なら、何も申さず、お望みどおり、出させて頂きますが、どうか娘たちだけには、お手を触れずにお返し頂きたいもので……」

彦兵衛は、あくまで、した手にでる。

「金も金だが、その前に、ちと教えて貰いたいことがあってね……」

いいながら、久六は懷中から、手拭いに包んだ、れいのオランダ歌留多の半片をとりだした。

彦兵衛の視線が、鋭くその歌留多をとらえたが、眉毛ひとすじ動かさない。

「なるほど。オランダ歌留多、めずらしいものでございますな」

その言葉に、いきなり源次が横合いから、「とぼけるんじゃないやい。てめえの懷から出たもんだぜ」

と、低いが凄みのこもった声音をだした。

「はて、さようでございましたかな」

と、彦兵衛はたじろがない。

ななめ上からの青白い月光を眉間に浴びながら、ゆったりとした表情で、久六を眺めて

いる。

「やっぱり、二人の娘をこっちの手におさえておいてよかったよ、大津屋。おめえのことだ、オランダ歌留多を目の前につきつけてもおそらくそんな顔つきでしらばくれると思っていたのさ。だけど、娘がこっちの手にある以上、そんなごまかしはきかねえぜ。本当のことを言ってもらわねえと、あの器量よしの娘二人が、どんなひどい目にあうか……まあ、嫁にいけねえからだになることは、間違いないだろうなあ……」

「……」

さすがに、彦兵衛は沈黙した。

抜け荷買いで身代をふとらせた商人でも、人の子の親である。

「なんとか言ったらどうだ、ええ、大津屋」

源次が、かさにかかってわめいたとき、久六の立っている左手の松の木かげから、黒頭巾をつけた黒羽二重着流しの侍が、ぬうッと現われた。

寺尾半九郎である。

つぎの瞬間、月光をはねて半九郎の大刀が一閃した。

オランダ歌留多の半片を握っている久六の右腕が、つけ根から宙にとんだ。

「わッ」

とさけんで、久六がぶっ倒れた。右肩のあたりから、みるみるうちに血があふれだす。

切り離されて宙にとんだ右腕は、源次の頭上に落ちてきた。

源次も、わあッとさけび、頭をかかえて逃げだす。

刀を鞘におさめた半九郎は、地上に落ちたその右腕のそばに歩み寄った。

ひろおうとして、かがみこんだが、

「無い……」

と、うめくようにつぶやいた。

右腕がつかんでいるはずのオランダ歌留多が無いのだ。

そのオランダ歌留多を奪いかえすために、半九郎は久六の片腕を斬って宙にとばしたのだ。

半九郎は、あわてて周囲をみまわした。

青白い月光に照らされた地面に、しかし、

オランダ歌留多は落ちていなかった。

「まずいことをしてくれましたねえ、寺尾さん。これでは、二人の娘が隠されている場所がわからない」

困惑した表情で、彦兵衛がいった。

「もう一人の男を捕まえるはずだった。しか

し、おそろしく素早い男で、逃げられた」

半九郎が弁解する。

「仕方がない。この立花屋という男だけ、橋場の別宅のほうへ運んでおくんなさい。早く手当てをしないと、出血がひどいから、死んでしまいますよ。生かしておかないと、娘たちの居どころを吐かすことができない」

半九郎と、地面にうめいている血まみれの久六に背をむけると、彦兵衛は、にがい口調でいった。

そのころ――

まむしの源次は、大川端を風のように突ッ走っていた。

久六の右手がつかんでいたオランダ歌留多は、走っている源次の腹掛けの中にあつた。

斬られて宙にとんだ右腕が、源次の頭上に落ちてきた。それを避けるとみせて、とっさのあいだにオランダ歌留多だけを抜きとった源次の早業だった。

てへへ……。うまくいったぞ。ああばっさりやられちゃあ、久六親分のいのちは、もう助からねえだろう。親分が死ねば、立花屋一家は、おれのものになる。このオランダ歌留多を持っていりゃ、大津屋からもたんまりゆすれるってえものだ。

このまむしの源次さまにも、やっと運がむいてきやがったぜ、ざまァみやがれ！

ますます冴えわたる月光を背中に浴びて走りながら、得意満面の源次は、二、三度、くるッくるッとまわりながら後をふり返った。

江戸の街は、もう人通りも絶えている。

青鬼の部屋

派手な紅梅模様の絹布の夜具が敷かれ、枕が二つ並んでいた。

「鬼！ けだもの！」

お絹は絶叫し、壁を背にして、じりじりと逃げる。足がもつれる。しかし、逃げなければならぬのだ。

こんな、青鬼のような侍のいけにえになるなんて、あまりにも、みじめすぎる。

どんなに追いつめられても、逃げられるかぎり、逃げるのだ。絶望しては、いけないのだ。神さまは、正しい者の味方だ。弱いものの味方だ。

正しい者は、どんな危難におちいろうともいざという時には、かならず救われるのだ。かならず、救いの手が現われるのだ。お絹は、そう信じている。

私のように、なんの罪もない弱い娘が、こんな悪い侍の手ごめにあうなんて、絶対に信じられない。

なんのために、私たち姉妹がさらわれたのか。なんのために、こんなにつぎつぎと、手ひどくいじめられるのか。

監禁されているこの場所は、どこなのか。お絹には、さっぱりわからないのだ。悪い

☆奇クサロン ☆原稿募集

一、大好評の「奇クサロン」の掲載に適した短文、写真、絵画を求めます。

一、内容は本誌の編集方針にふさわしいもので、寄稿家編集者執筆者に対する呼びかけ、読後感、感想、批評、映画鑑賞、短信往来、SM時評、図書雑誌紹介、見聞記、詩、歌、川柳、漫画、諷刺、などなど。

一、投稿には必ず「奇クサロン原稿」と明記して下さい。誌上の匿名は御自由ですからペンネーム（筆名）を添記して下さい。

一、採用の可否に拘らず応募下さった方全員に対して編集部作成のフォトを贈呈いたします。贈呈フォトの枚数は作品の出来に従って増減いたします故御承知下さい。

一、誌上に掲載しました作品に対しましては

夢を見ているとしか思えない。

夢にしては、なんという長い夢なのか。夢にしては、なんという鋭い苦痛が、この肌身にいくいくむのか。

お絹は、うしろ手に縛られたままだった。

妹のお雪と一緒に、柱に縛りつけられて、あの汚らしい犬と人形のたたかいを見ることを強制され、それが終わってから、すこしの

枚数に応じて稿料又は謝礼を呈します。

一、安井喜久子夫人が夫婦プレイの緊縛アイデアを募っておられますから、同好の方は御遠慮なく編集部気付にて御投稿下さい。投稿者全員に対して喜久子夫人のプレイフォトを贈呈いたします。アイデアの参考には、四月号の「安井喜久子夫人を訪ねて」ASM-〇〇問Vをお読み下さい。

一、奇クサロンに掲載可能な絵画、写真、映画スチール、イラスト、漫画などに対し、少しでも応募者全員に編集部作成のフォトを贈呈いたします。優秀な作品は誌上に発表の上、画料をお支払い致します。

一、編集参考資料の提供に対しましては、出来るだけ高価に購入したいと思しますので、お手放し可能の方は内容の詳細に希望価格を附してお申込み下されば、折返しお返事差し上げます。

あいだ休息があたえられた。

その休息のあいだだけ、縄を解かれたのだ。が、すぐにまた、あの八木沢左内という痩せた青鬼のような侍に、うしろ手に縛りあげられた。

そして、お雪とべつべつにされて、この夜具の敷いてある部屋につれてこられたのだ。

お絹は知らなかったが、ここも地下部屋の一室だった。

床の間があり、畳が敷かれ、行燈が置かれて、ごくふつうの部屋の造りにしてある。

八木沢左内は、この部屋で、お絹を自分の嫁にするつもりなのだ。

左内は、勝利感に浸っていた。幸福感といってよいほどの充実したよろこびが、この悪徳役人の胸を、痛いほどふくらませていた。いくらお絹が逃げようと、ここは地下部屋の中でも、いちばん奥の位置にある一室だ。わずかに六畳の広さしかないが、完全な密室であった。

そして、お絹を縛った縄の端は、五尺ほどの余裕をもたせて、左内が握っているのだ。いくらお絹が逃げようとともがいても、左内が力をこめて縄じりを引けば、お絹は、いやでも自分の胸のなかにひき寄せられるのだ。

左内が勝利に酔うのも、当然だった。

お絹の恐怖の表情が、左内には愛らしい天女の微笑のようにも見える。

天女との祝言が、やがてこの地下部屋ではじまるのだ。

「お絹、もうあきらめて、わしの嫁になれ。

わしの嫁になるといえば、その縄を解いてやろう。縛ったりなんかせずに、やさしく抱いてやろう。わしは元来、やさしい心根の男なのだ。あまりお前に惚れすぎてしまったものだから、つい、こんな手荒いことをしてしまったが、わしは本当は、お前を縛ったりすることは嫌いなのだ。その美しい白い肌に、縄目の痕をきざみつけることなんか、大嫌いなのだ。わかってくれ、なあ、お絹。さあ、よろこんでわしの嫁になると言ってくれ……」

「いやッ、いやです、死んでもいやです！」

お絹は、首を左右にふつてもだえた。かなわぬまでも、必死に左内をにらみつける。

左内のうすい唇が、赤くぬれて笑う。

「ふふふ……。いくらいやだと言っても、お前はもう、わしのものも同然なのだ。みる、お前はうしろ手に縛りあげられている。着ているものは、緋縮緬の腰のものが一枚。お前の自由になるものは、何もないのだ。痛い目

をみぬうちに、わしの嫁になると言っ

ったほうが、よいのではないかな……」

いいながら、そろり、そろりと左内は縄じりを手前に引きはじめる。

「いやです、そばへ寄ったら、舌を噛み切つて死にます！」

「ふふふ……。それなら、さるぐつわを噛ませてやろう。さるぐつわをはめられた美女の顔も、またオツなものだ。お絹、お前にはよく似合うぞ。さあ、もっとこっちへこい。そして、おれの腕に抱かれるのだ」

左内は、縄をじわり、じわりと引き寄せながら、白い美しい獲物の反抗をたのしんでいる。

縄じりを引かれるたびに、お絹は両肩を張り、足を踏んばって耐える。

しかし、その抵抗も、縄を胸乳に、より強く食いこませる効果しかなかった。

左内は、舌なめずりをしている。

もっとあばれたら、あぐら縛りにしてやろう。左右の足をあぐらに組ませ、足首を縛りつける。

その縄を、首にひっかけて十分にひきしぱり、海老の形にしてやろう。

自分の足の指を、自分の唇でなめられるほ

ど、背中を折りまげてやるのだ。

もちろん、両腕は背中にたかだかと縛りあげたままだ。

その形にしたままで、夜具の上にひっくりかえしてやるのだ。

大津屋の箱入り娘が、どんなにぶざまな形をさらけ出すか。

いやでも応でも、わしの嫁になる。これでわしも、この世に生まれてきた甲斐があったというものだ、うふふふ……。

左内は、お絹の縄じりを引き、なおも、そろり、そろりとたぐり寄せる。

ああ、助けてえッ……と、お絹は胸のなかでさけんでいた。恐怖のために、舌がもつれて、声にならない。

こんなはずはない。私には、かならず助けしてくれる人が……救いの手がさしのべられるはずだ……。

しかし、その望みも、願いも、ついにむなしかった。

ずるッ、ずるッと、白いけにえは、青鬼の胸の前へ引き寄せられていった。

(つづく)

お　し　お　き

―浣腸液に溺れる女―

南　　洋　　子

東京から車で一時間程走ると、人口三千ぐらゐの観光地があります。その中の小さな旅館。それが私の家です。父が三年程まえに亡くなった後、義理の母と私の姉と私の三人でささやかな暮らしをしています。実母は、私を産んですぐに亡くなったと生前の父から聞いておりました。

姉といつても、私とは満一年とチョットしか違わぬ姉で、二十二才。某国立大学の文学部に通学中ですが、私は高校を出るなりすぐ家業の旅館を手伝うようになりました。小さな旅館ですから、私一人だけでも用が足せるぐらいで、他の使用人は必要ありません。

義母は、旧家の出だそうで、大変に厳格な人でして、私が何か失敗でもすると、すぐに体罰を加えられるのです。姉は私が叱られるときにはきつとかばってくれますが、いざ体罰ということになると、口ではかばいな

がら義母の味方になって、私を責める手助けをするようになってしまいました。

私、「奇ク」を書店で初めて見たときには本当に驚きました。私が義母におしおきされているときのことを、書いていたのではないかとさえ思いました。その後うちのお客様の中で「奇ク」を置き忘れていかれた方があり私は以前に見た覚えがあるだけに、ハツとなつて、無意識のうちに義母の眼にふれぬように隠していました。そしてコッソリと読んでみて、余計に驚きました。だって、責められることに喜びを感じるなんて書いてあるではありませんか。

そこに書かれてあることをあてはめてみると、義母はたしかに浣腸マニアだといえそうです。おしおきの最後にはいつも浣腸をするのです。そういう目で見てみると、義母はいろんな浣腸器を揃えています。二十cc、三十

cc、五十cc、そして百ccのガラス製浣腸器。

エネマシリンジ、赤いゴムでつくられている浣腸器などです。イルリガートルというのはどんなのか知りませんが、うちにはないようです。色々なオマル、差込み便器、オムツカパー、フリートエネマ、イチジク、オロナイン、大正、いろんなセルロイドの浣腸器、スポイトなどは、隠すでもなく居間に置いてあります。でも「奇ク」などは置いてありません。ただ、婦人雑誌の医療関係の附録や、家庭用の医学書などが本棚にあります。赤チャンの応急手当法を主眼にしたものです。

義母は毎朝、自分で浣腸しているらしいのです。私や姉がおしおきされない時でも、クズ竈に軽便浣腸のつぶされたのが、チリ紙に包まれて捨てられてあるのをしばしば見掛けることがあります。

なお一層注意していますと、グリセリンだとか、ドナンの瓶らしいものを、よく買って来るのがわかりました。もっとも、これは私達姉妹のおしおき用のためかも知れませんが、姉には浣腸の習慣はないらしいのですが、学校に行かなかったり、叱言に反抗したりすると、おしおきをして浣腸がついてまわるのです。

おしおきをする時の義母の顔は怖いのですが、もともと美人ですから美しいナと思う時が多いのです。でも、おしおきそのものは大

変に厳しいものです。

義母のおしおきに浣腸が使われるのは変りありませんが、姉と私とはその方法はだいぶ違います。

姉の場合には、大抵、まずパンティだけにされます。少しでも反抗すると平手打ちがお尻にとんで行きます。でも反抗さえしなければ、叩かれもしられもしないで、ただイチャジク浣腸などをされるぐらいのもので、おトイレにも行かしてもらえます。ものの五六分ぐらいでおトイレに行かせてもらえらるんていうのは、おしおきとは申せません。

でも義母にも虫の居どころの悪い時がある。とみえて、私に手伝わせて本当のおしおきを姉に加えたことが、今までに二度ありました。一度は、大声で呼ばれた私が義母の部屋へ行ってみると、ビックリしたような顔付きの姉の前で、義母がヒステリックに何か叱りつけていました。

「いけませんッ！ 今日はずんとおしおきしますッ。洋子、紐を出さない」

何が原因か、義母は大変に怒っていて、私に命じます。しばらくもりらしいです。私はその見幕に押されて、いつもは私がしばらくれる紐を出して来て渡しました。

「お脱ぎなさいッ！」

姉はオロオロしていましたが、義母は無理に服を脱がせ、パンティだけの姉を後手にし

てしばらくあけてしまいました。こんなことはほんとうに珍らしいことです。

「春美（姉の名です）痛かったら、よく考えて見ることでしょッ」

義母はそういって、後手しぼりの姉をうつぶせに押し倒して、お尻をピシピシ叩きました。姉は義母の腕の下で腕いていましたが、さすがに声を出して泣くようなことはしませんでした。

「今日は、いつものようにあっさりとは許しませんからね。洋子、グリセリンの用意をなさい」

私は、すこし姉が可哀想にも思いましたけれど、私がおしおきされる時には姉も一緒になつて責めつけるのですから、チョッピリ仕返しの気持もあって、義母の命令通りにしました。私がグリセリンの用意をしている間に姉はあお向けにされ、サルグツワまでされていましたし、義母の手にあるイチジク浣腸がつぶれているところを見ると、すでにそれは使われたものようでした。

「次はオロナインだよ。……これで五十cc、フフフ、どうしたの？ 涙なんか出して。さて今度は……と。ドナンはまだ少し早いようね。じゃ、しばらくそのままいなさい」

さっきまでのヒステリーは姿を消して、義母の顔はいつものおしおき顔になっていましたので、私は少し安心しました。

「洋子さん、グリセリンをここへ……」

義母は百ccの浣腸器に、一杯吸い上げて注射器のように調子をみながら姉を横眼で見えています。

「さあ春美さん、用意は出来ましてよ。ポチポチ、始めましょうね。洋子さん、姉さんの足を掴まえて」

義母は、おしおきを楽しんでいようない方です。姉は相当に苦しそうです。

「動いちゃ駄目。ゆっくりして上げるから、いいこと？ 十……二十……五十。どう？ 少しは苦しい？ おしおきですものねえ。ハ イ七十……百。あら、もうおしまい。洋子、もっと強く押さえて。まだおしおきは終わらないのよ」

十分程経ちました。苦しいのでしよう、姉はサルグツワの奥でうめいて、汗ビッシヨリの肌が痛ましくあえています。苦しそうな息の度に、肌の紐が余計に食い込みます。

「洋子さん、もう五分もしたら許してあげなさい。その後でドナンよ」

私は、少し早目に許してあげ、世話をして一応姉の苦しみを除きましたが、義母は、さらに百cc浣腸器を私に持たせて目くばせしました。中にはドナンが一ぱい……。

私はためらいました。すると義母は、「ご自分がされたいの？」
「いいえ。仕方ありません。いつもは私

がされてるんだから……と、復讐心をかきたてて私は姉に向いました。

ドナンはスゴク効いたらしく、三分と保ちませんでした。おかげで後始末が大変です。でも、姉のおしおきはこれで終わりました。いつも私がされるのとくらべたらうんと軽いものです。

「春美さん、どう？ わかって？ 私はネ、あなたを淑女として育てたつもりよ。これからは気をつけて、二度とあんなことをしたりいったりしないって約束出来て？」

姉は紐を解かれたばかりの腕をもみながら神妙そうに背いていましたが、横眼で私の方をにらんでいるようでした。

私はペロツと舌を出してやりました。姉は上眼遣いに義母を盗み見て、その眼がほかを向いているのを見定めると、私にイーッという顔をしました。私も返してやります。

「ナンデスッ！ その顔は」

その次に姉がイーッと私に返そうとしたとき、義母にみつかり、叱られて首をすくめます。でも叱った義母の顔は笑っていました。私は思わず吹き出してしまい、それにつられて義母が、そして叱られていた姉までもが一緒にになって、三人とも大声で笑い出してしまったのでした。

二度目のときは、そんなことがあってからずっと後のことでしたが、姉が、どういうつ

もりか、義母にプレゼントをしたことから始まったのでした。

そのプレゼントというのが、パンティ。それも普通の物よりずっと細く、うんと股ぐりの切れ上った物で、とても義母のはけるようなものではなかったのです。

「春美さん。本当にあなた、これをわたしにはかすつもり？」

「お母さんは、まだ若いから……」

「とかなんとか。……わかったわ、あなたそのパンティで、浣腸して欲しいって謎をかけてるのネ」

「そ、そんなこと」

「駄目よ、かくしても。わたしをからかっているって、はっきりいったらどうなの！」

こじつけのようですが、義母は本気に怒って、姉をしばらく、グリセリン浣腸を百ccした上に、そのキュウクツなパンティを着用させてしまいました。

「どう春美さん。あなたの見立てたパンティの具合は？ まあまあ、そんなに体をよじって。お薬、効いてきた？ オムツして上げましょうか？ 今夜は朝までそのままよ。しましうね。洋子さん、オムツをしてあげなさい。そうそう、わたしが許すまで、紐もオムツも取っちゃ駄目よ。いいわね」

義母はそういって、自分の部屋へ入ってゆきました。私は、姉についていてやりたかつ

たのですが、その日はお客さんが二組あって何かと用もありましたので、仕方なくそのままだに置いて置きました。

夜中過ぎ、お客さんの方が一段落して見にゆくと、義母が、姉にさせていたオムツとパンティをバケツに入れて出てくるところでした。大分汚れていそうです。

義母は私に、ドナンを五十cc浣腸してから許しておやりといって裏の方に行きました。

部屋の姉は、まだしばらくたままです。苦しかったらしくグッタリとしていましたが、フックラとした肌に紐がくい込んで、可哀想な姿ですが、又別の、美しい花という感じもしました。

私は義母にいわれた通りしました。姉は浣腸のとき、少しいいやいやをしてもだえましたが、別に手に余るほどの暴れ方もしませんでしたのに、しばらくある紐を解いてあげたとたんに私をにらみます。

「洋子、よくも浣腸やオムツをしたわね。おぼえてらっしゃい！」

そういって、大いそぎで寝巻をひっかけ、部屋を飛び出して行きました。出しなに、イーッと唇をとがらすのを忘れませんでした。きつとおトイレでしょう。

私には、うらめしいような気持を抱かせる言葉でした。



鬼六談義

酒場の話

団 鬼 六

大阪の方はどうか知らないが、東京のピ
ンク映画館では最近、実演を抱き合わせるのが
多くなってきたようである。劇場主に頼まれ
て、そうしたアチャラカ芝居の台本をこのと
ころ立て続けにもう五、六本も書かされたが
それこそ猫の額のように狭い映写幕の舞台上で
演じる一時間ぐらいの寸劇で、ほとんど舞台
装置らしいものはなく、しかも出演者は最初
から誰と誰、という風に劇場側から指定して
くるのだ。桂奈美、林美樹、谷ナオミ、辰巳
典子てな具合に相変らず変りばえのしないピ

ンク女優をまるで交代制にしたみたいに使っ
ているので段々つまらなくなって来てついに
この間、もう止めたと筆を投げ出したが、興
行主から、そう水くさい事いいなさんな、と
高級料理屋でたらふく御馳走になれば、こっ
ちとて飲み意地の汚ない方故、二三軒、はし
ごした揚句、断わり切れなくなって、また徹
夜して糞面白くもないドタバタ芝居の台本を
書く破目に陥った。こっちは全く調子が出ず
酒を飲みながら書いて渡す台本だが、それに
出演する役者や演出家は調子を出して本読み

立稽古などを実に愉しそうにやっているよう
だ。「赤と黒」という忍者劇を主眼にしてい
る奇妙な劇団があつて、この女優を時々ピ
ンク映画に出演させる時があるが、その時は、
舞台から引抜かれて映画に出演するという意
気込みからか彼女達は大変に張切っている。
林美樹などは映画の方が面白くて舞台の方を
見切ってしまった、元「赤と黒」の女優だ。
それと同じで、映画専門の女優達も、舞台進
出という事になるとなかなか意欲的になる。
海亀の世界もあれば石亀の世界もあって、次

元は違っても、それぞれの楽しみはあるようだ。

こうしたストリップ芝居やピンク映画に片足を突っこんでいる私を友人の或者はうらやむし、或者は小馬鹿にしているようだが、私は私なりの方法で人生をエンジョイメントしているのだから、別にどうってことはない。これは私の持論なんだが、現代は不純に生きてこそ面白い。不純な生き方をして、始めて世の中が興味津々となってくるように思われるのだ。と、いえば真面目な生き方をしている人からは怒られるが、社会や人生を純粋な眼で見れば腹の立つ事ばかり。一度、純粋さから解放されて、人生を考えてみる必要もあると思われる。こんな場をかりて、政治問題などほざくのはお愛嬌ものだけれど、昨今、汚職だ、贈賄だ、などと大いに騒ぎ立てているが、これだって考えりゃ人間の本能みたいなもの。やるな、という方が無理な話で、勿論、そうした汚職のない世の中になるに越した事はないが、そうなればなったで、世の中が妙に味気なくなる。といっても、他人ばかり汚職してはやっぱり腹が立つ。つまりこっちにも甘い汁を吸わせろ、というわけなんだ。

甘い汁がちっともすえないのに役人が甘い汁をすっている。となれば、やっぱり腹が立つのは当然だ。そこで、せめて税金でもごまかしてやろうという気分になるのも人情である。今は税金対策で頭の痛いシーズンだという。何のため税金を払うのかわけがわからんなどとはいわないが、これだって、まともに払うよりは、ごまかせて安く払えるのに、こうした事はない。いや、そんな事は自分の良心が許さぬ、国家のために申訳ないと、税務署がてんで気のついていない所得まで明らかにし、断固として支払う人があるなれば、これは現代における一種の異常者だろう。間もなく選挙戦だという。これだって何時も私はまごつくのだが、どの候補者も台の上でしゃべっているのは同じような事ばかりで、人相もあまり感心せず、とにかく赤の他人に一票を入れるという事は案外むづかしいもので、家へ出前をとどけに来たソバ屋の親父に、あんな、誰に入れるんか、と聞いてみると、旦那、××さんに投票して下さいよ、頼みますと七味唐がらしの壺を置いて行く。となると疑いもなく、こっちは、ソバ屋の親父に頼まれた××さんに一票を投じてしまう事になるわけだ。七味唐がらしをソバ屋にもらったの

が選挙違反になるかどうかという問題より、政治に関心のない人間に無理やり投票させようとする方が危険なのじゃないだろうか。七味唐がらしよりも少し気のきいたものをくれる人から投票を依頼されれば私なら疑いもなくそっちの方を投票するだろう。大体、民主主義なんてものは——いや、関係のない話は、これ位にしておくが、つまり政治家に限らず、我々庶民だって、甘い汁をすいたがるものだし、不純な精神を大いに持合わせているという事をいいたいわけだ。また賄賂を使ってみて、それをねつける人には全く親しみが感じられず、むしろ不快だが、賄賂をもの見事に呑みこんでくれる人には妙に親近感を感じるもので、どっちが人間的に立派な人物かというとはなはだ、むづかしい問題であるようだ。

ピンク芝居の興業主におだてられ、一杯飲まされて、アチャラカ芝居を書く私の阿呆さ加減が、また、人間的には面白いんだと自分で思いこんでいるのだから、世話はないが、花と蛇にしたって、作者自身はもうへたばっているのだが、愛読している友人連に面白とおだてられ、発売日が楽しみだ、などとお世辞いわれればそう悪い気はせず、がんばっ

ている始末である。

つい、この間、こうした三文芝居の脚本料をもらったので、古い友人のR君を誘って、久しぶりに銀座へ出、馴染の酒場へ飲みに行った。R君と私が始めて出会ったのは、もう十数年も前の事で、私が学校を出て、或る映画雑誌社の翻訳の仕事をした時であった。その映画雑誌社に私は半年も腰が坐らず、やめてしまったが、当時、私は、シルバースクリーンとかいうアメリカの映画雑誌を翻訳し、こっちの雑誌に掲載するのが仕事であった。これは映画俳優のゴシップ記事だけを網羅したような奇妙な雑誌で、マリリンモンローの下着の話やら、クレーク・ゲーブルの女関係の事などばかり日本語に訳すわけだが、当時、まさか、かくの如き、三文エロ作家になるとは夢想もしていなかった年少多感な時代であっただけに、その仕事の内容を大いに不満に思っていたものだ。もう一つ、不満なのは、月に二度か三度、私の仕事がおわる頃を見計らって会社へやってくるR君の存在だった。

手入れ屋という商売がこうした雑誌社の中で通用している事を私はその時、始めて知ったわけだが、R君は翻訳屋が英文から直訳したものを雑誌に掲載出来るような文章に手直しするという変った商売で、私の当て字だらけの原稿を彼が読み易い文に書き改めてくれるわけだが、私は学校を出たばかりの自分になめられているようで、それが不快でたまらず、編集長に、自分の翻訳したものは、ちゃんと雑誌に掲載出来るような文章に脚色してあるのだから、何も人を雇って手直しする必要はない、と抗議したのである。しかし、編集長は、うん、それはよくわかるが、R君の立場もある事だし、と曖昧な返事をくり返すだけで妙に煮え切らず。私は会社へソフト帽をかぶり、縁なし眼鏡をかけて、ニヤついた顔を見せるR君をその都度、睨みつけるように見ていたが、或時、R君が私を誘って新橋の酒場で御馳走してくれ、舶来の煙草を一ケースくれた事から事情が変り出した。飲んで話してみると、そう感じの悪い男でもないしこの手入れ屋という珍商売で女房子供を養っているのだから、彼の職業を侮蔑するのも大人げないと悟り出し、その後、私は会社で仕事する時は、わざとたどたどしい日本語を書いて、R君に手渡すようにしたのである。

それから、R君とは随分と長く会う機会がなかったが、十何年ぶりかではあったりテレビ局で顔を見合わせた。何と、今度は、外国テレビ翻訳台本の手入れ屋をやっているのである。大分、老けこんで髪の毛に白いものが混っているR君であったが、十何年間に職業的に変化したのは、雑誌の手入れ屋から翻訳台本の手入れ屋に移っただけの事であった。

久しぶりに訪れた銀座の酒場、FクラブでR君と私は、人間の職業歴というものについて、色々と話し合ったのだが、私は十年の間にそれこそ猫の目の如く様々なコースを経て、三文エロ作家に堕ちてしまったけれど、不純な精神を持つようになったおかげで、結構、人生を楽しめるものに感じられるようになって来た。R君は、進歩もなければ退歩もなく、黙々と純粋に一つの職業に徹してきたが、人生の大半を空しく無意味に過ごしてしまった後悔というものが、ふと、一人酒を飲む夜など頭をもたげてくる事があるけれど、とにかく現実というものはこうしたものだという、あきらめを持つに至ったという。そういう現世的な望みをあきらめた男にありがちな、どこか薄汚れた、やもめ臭さのようなものが彼の全身に滲みこんでいるのであった。

「何と云ったって、あんたは幸せだよ。自分の好きなことをやってきたんだからな」

と、R君は私にいい、今後も、実も空気も入らぬ味気ない仕事を続け、不自然に朽ちていくであろう自分を自嘲するような弱気な微笑をするのである。

夜店の天麩羅屋でも十年一日の如く天麩羅ばかり揚げているとおかしなもので顔まで天麩羅に似てくるというが、R君のように翻訳屋に寄生して生計を立てるといふ職業でも、十年以上もつづけば、それも一種の名人芸となり、しかし、どこか全体に寄生虫的な匂いがしないでもない。時々、地肌のすけていそうな白髪の混った髪をかきわけながら、鋭い眼でキョロキョロ周囲を見廻しながら、コップ一杯のビールを時間をかけ、チビリチビリ飲むところなど、如何にも気弱そうであり、狡猾そうであり、寄生虫的な感じがするのだ。「職業に懐疑を持ちながら、しかし、十年以上も続けたという事は、やっぱりそれがあなたの天職だったんだろうな」と、私がいうと、R君は、「何か別に自分を生かす道がありそうなものだ」と途中で色々と迷ったんだが、結局、手入れ屋に戻ってしまう。手入れ屋が自分に向いているというより、自分の運命が手入れ屋よりの脱走を許さないようなんだ」

というのであった。最近では、翻訳屋だけではなく、音楽屋にも寄生するようになったとR君はいう。作曲家の作った曲を演奏者のために写譜する仕事だそうである。

こういう仕事は俺にゃ向かん、やめよう、と思っていたっても、その職業が人間をつかまえて放さない時がある。早い話、R君と私が、酒場の中で、静かにウイスキーを飲んでいた時、先程から私の方を見て、遠くの方から、親しげに微笑し、頭を下げる中年のホステスがいた。どこかで逢った事のある女だが、私は考えて、ふと気がついたが、彼女は、以前、同じ銀座にあるWという酒場で働いていたホステスでたしか結婚して店をやめた筈であった。早速、傍へ寄って、カクテルなど振舞ってやりながら、事情を聞くと、やはり、結婚はしてみたものの夫婦仲がどうにもしっくりいかず、今は別居して、自分は銀座のホステスに舞戻ったというのである。彼女は二十四の時から、銀座界隈の酒場を転々としてもう七、八年にもなるという、一種の姐御である。

をつかんで放さないのであろう。何も、このホステスに限った事ではなく、その仕事しか自分には出来ないと思ひこんでいる人が世の中には随分と多いようだ。

雑誌の編集をやっている人は、その雑誌社が潰れれば、また器用にどこかの雑誌社にもぐりこんで編集の仕事をやっているし、相場師は見込み違いで無一文になってしまってもこつこつと金を貯めると、また一枚二枚の建玉から何とか喰いついていこうとしている。百八十度の職業転換出来る人と出来ない人というのは最初からそのように運命づけられているのかも知れない。ところがR君のように自分の職業に懐疑を持ちながら、それを運命とあきらめてしまっているのは、悪妻と知りながら離婚出来ずに悶々としている気の弱い亭主みたいで、何とも歯切れが悪いものだが、それも考えようだと最近、私は思うようになった。

仕事に主義や情熱を持ち続けるというのも場合による。自分で自分を誤解して、自分の天分ではない仕事に情熱を傾け、純粋に打ちこんでいる人もまた多いもので、こういう人に比べれば、R君のように不平不満があっても生計を立てられるだけの収入を得ている人

の方がまだましだ。私の友人の一人に、まるで何かにとり憑かれたみたいに文学に凝りかたまっている人がいて、彼は妻子もほったらかし、朝から晩まで机に張りついて、行李に何杯もの原稿を貯えている。時折、私の家へ出し抜けにやって出て、傑作が出来たから一つ読んでみてくれ、といい、そのうち、ゆっくり拝見すると、原稿を預ろうとすれば、それでは承知せず、自分の原稿をその場で朗読し始め、こっちの迷惑など、てんで意に介さない。三文エロ作家の私などに高尚な文学を批評する資格などないけれど、彼の小説は、どうにもがまんが出来ぬ位に拙劣で、全く話になっていないと思うのだが、しかし、本人は心血を注いで書き上げたなどと妙に眼をつり上げているので、その気魄に押されてしまつて下手な事はいえなくなってしまうのだ。どうも眞面目に見ても、彼にはその天分がないのだから、努力するだけ無駄だと思うのだが、本人は自分の文学才能を信じて疑わず、自分の作品を理解出来ぬ奴は皆馬鹿だというようなすさまじい意気込みを持っているのだ。こういう人は他人が何といつても受けつけず、これからもどしどしと創作しつづけ、行李の数を増やしていく事だろう。無駄な努力をく

り返すのもいいが、それは若いうちだけにとどめておきたいものだ、彼の細君の愚痴を聞いたびに思うのだが、まだ、こうした創作に熱中するのは、他人にまで迷惑を及ぼさないからまだしも救われるが、勝負事みたいなものに自分の天分があると誤解したとなるとこれはおだやかではない。友人の一人に、土地家屋一切相場で吹っ飛ばしてしまっているのに、それでも相場の魅力を忘れる事が出来ず、また、自分の天分の發揮は相場にあると信じて、朝から晩まで机に張りついて、相場の野線を引きつづけ、六帖のアパートの壁にペタペタ野線用紙を張りまくつて、研究に没頭し、自分の氣に入つた野線が出たといつては、友人達の間を廻っていくらかの投資を頼むのである。必ず今度は当てて、充分に利子をつけて返金するよ、というものの、当たった事はほとんどなく、その都度、何だかんだとその場を口でごまかしてしまうのだが、彼の友人達はそのうち奇妙な事を考え出した。彼に相場をさせて、その逆ばかりを狙つてこつちも相場をやれば案外儲かるかも知れない。つまり、彼が買えばこつちはこつそり売り、彼が売ればこつちはこつそりと買ひに出る、と、まことにふざけた事を考え出したも

のだが、実際に、これをやってみると本当に儲かったというのだから笑い話みたいな話になつてしまった。そのように仲間達に馬鹿扱いにされてしまつても、彼はやがて見ておれと闘魂を燃え立たせるだけで、妻子を実家へ帰らせて、相変らず血眼になつて相場学と取り組んでいる。こんなのも、さつき話した文学青年と同じで、自分の天職を誤解してしまつているのであり、ひたすら仕事に打込む姿など純粹といえは純粹めいているが、とうとう純粹さが狂氣につながつてしまつたようだ。

銀座の酒場、Fクラブで、そんな事をR君と話し合っている内、閉店時間となる。最近の銀座酒場は全く品行方正で十一時半の閉店時間を厳守しているようだ。まだ、飲み足りねえ、と口を歪めても、十二時になれば、ホステス達を彼の住家まで送りとどける白タクがやって来て、彼女達をせきたてるように乗せ上げ、出発してしまう事になっている。こうした白タクを酒場は月極めいくらかという契約で雇っているらしかった。女達のいなくなった店でボソボソと飲んでいたつて仕方がない。R君も私も、のっそりと腰をあげる。そんな私達の傍で、一人の中年男がかなり酩酊して、一人のホステスをつかんで放さず、い

いよ、いいよ、俺が送って行ってやるからとホステスにからみついていたが、パーテン達にたしなめられ、ホステスをさっと連れ去られて、如何にもきまりの悪い顔を私達の方へ向けたが、急に、てやんでえ、と誰にいうともなく大きくうめいて、ずり落ちかかっているズボンを引き上げながら、ヒョロヒョロと立上り、大きな声で猥歌を唄い、店を出て行くのであった。全く銀座酒場も味気なくなつたものだ。

K子という古い馴染のホステスを連れて、私はR君をうながし、店を出たが、やはり、何となく飲み足らず、これから六本木にでも出て、一杯やろうか、とタクシーを止める。K子も、もう水商売に入って五年になるベテランだが、最近酒場の質も落ちたわよ、とタクシーの中で愚痴り出すのである。女給という言葉がホステスという言葉に変わってから、酒場女に味気がなくなった、というK子は、古い型の女給タイプの女性で、そこが私も気に入っているのだが、美人タイプの酒場女がふえて来たのは店にとっても客にとっても喜ばしい事だけれど、若い娘には、全く客に対するサービス精神が欠け、そのくせ人一倍がめつくて、貯金する事ばかり考え、先輩

女給の客を平気で奪い、酒場女の仁義という事をてんで意に介さない、とK子はぼやきつづけるのであった。そして、ひよっとすると私、あの店をやめて、新橋の方へ移るかも知れないが、その時はどうぞ、御最良に、と白い歯を見せていうのである。そういえば、この間のぞいた、銀座六丁目の黒猫という酒場でも、そのベテラン女給二人が、私に、近く、赤坂の方の店へ移るから、よろしくと挨拶した。若い新興勢力にベテラン女給達は駆逐され出したのではないかと私は心配する。

私が関係しているピンク映画の分野でも、こうした新興勢力のため、地図が段々塗りかえられてきた感がするのである。私が始めてこの業界の仕事に手をつけた時、プロデューサーにしても監督にしても、カメラマンにしても、かつては五社の中で活躍していた人達のグループでかためられていたような気がした。年長いた映画人達の救済をこの業界が果たしているのではないかとさえ思ったぐらいで妙にのんびりしたムードがただよっていたものだ。ところが現実はいきびしいもので、新興勢力が勃興してくるや、忽ちこの年長いたベテランの映画人達をこの業界から閉め出してしまい、若いプロデューサーが若手監督を使

ってピンク映画の市場を占有し始めたのだ。古い勢力は全く雲散し、現在の製作会社の社長はほとんどが三〇代、それがスピードに欠ける老監督や老カメラマンを追放してスタッフを若手でがっしりかため出したのである。

十五日の撮影日数が十日、それが七日、五日と記録を競い合うように短縮され、先月KK誌にのった性の賛という映画は、撮影日数三日半という記録を樹立したのである。ピンクスターのスケジュールに合わすため、そうした強行撮影をする事になるのだろうが、それで、まともな映画が撮れる筈はない。試写を見たが随分と手を抜いた所があり、私はこれを演出した若い監督に、こりゃ少し、ひど過ぎるぜ、と不快な顔を示したのだが、三日のうち、一日は雨で、スタッフの一人が病気になるなりして、と監督のいいわけを聞いてみると、制作方法に問題があったのだから、強く文句はいえなかったが、やはり、こうしたお色気映画は、若い監督では駄目だと思う。シーンが変るや否やすぐにベッドシーンの展開という風に省略したりし着物を一枚一枚脱がせていくという所にエロチシズムが滲み出るといふ事を、さして気にとめないものである。ピンク映画界から追放されてしまった老監

督連は一体、今何をしているのか、と私は一時気になって、彼等の消息を知っているスタッフの一人に尋ねると、「ああ、A先生もB先生も老人ホームに入っていますよ」というのであった。「老人ホームだって」私は、眼をパチパチさせて彼に問い返す。まだそんな年令ではなく、働く気にさえなりや、まだ働ける筈じゃないか、という、その通り彼等は元気でピチピチし、大いに仕事をやりたがっているが、する場所がなく、かつての弟子達が金を出し合って、年老いた監督二人をやっと納得させ、老人ホームへ入れてしまったというのだ。このA監督の方は、家族がいるので彼の面倒を見られぬ事はないのだが、身寄りのないB監督が弟子達の世話で老人ホームへ入ったと聞くと、もう映画の仕事が出来ず、家族の厄介者になるよりは、親友のB監督が入った老人ホームへ自分も入れてもらいたいと駄々をこね出したという事である。五社の一つで仕事し合った時代の事をこの老監督二人は老人ホームで、まるで昨日の出来事のように鮮かに描き合いながら今日の惨めさを忘れ、回想と追憶に仲良く余生を過ごそうと心にきめたと思われる。それで私は、二人の先生が入った老人ホームの住所をスタッフ

の一人に聞き、慰めと労りの手紙を出したのだが、すぐにB監督から手紙が来て、それには、どうしてももう一度だけ自分をカメラの前に立たせてくれないか、と必死な思いが伝わってあった。この間、A監督と二人で、場末の映画館に入り、若松のとった映画を見たが、あれしきの事、自分だって出来ぬ事はない、もう一度、自分に機会を与えてもらえまいか、という意味の事を書いてある。そこで私は、この老監督の復帰に尽力する決心をし、制作会社の社長に頼んで私の脚本を彼に撮らせる事にし、出来が良ければ、次の映画にも彼を採用する事を約束させた。B監督は大変な喜びようで、わざわざ私の家にまで来て礼をいい、力一枚仕事をするよと細い体を反り身にして豪放に笑って戻って行ったが、それから半月ばかりして、制作会社の社長から私の所へ電話があり、「あのへっぽこ監督、とんでもないへまをやらかして、会社は大損害だよ」と舌打ちしながらいうのである。五日で撮り上げる予定の仕事が二日もオーバーしベッドシーンもおざなりで、まるでピンク映画になっていず、しかもピンボケの個所が随所にあって、止むを得ず、若手監督を使つて、ベッドシーンをこれからもう一度撮り直

す事にした、という事であった。

「人情をかけたって駄目な奴は駄目だよ。もうああいうへっぽこ監督の面倒を見るのはごめんだぜ」と社長がいうので、私は溜息まじりに、「麒麟も老いては駄馬にしかずか」といったが、社長は「最初から駄馬なんだよ。才能がないんだね。映画の事がまるきりわかつちやいない」という。映画の事がまるきりわかつちやいねえのはおめえじゃねえか、といたくもなつたが、「じやいい、今回限りでB監督を使うのはよそう」と承認して私は電話を切った。四十年も映画界で飯を食って来た老監督が、ろくに映画の作り方も知らない若い制作会社の社長に、映画の事がまるでわかつちやいないときめつけられ、解雇を宣告されるのだ。全く珍妙な時代である。それから何日かたって、B監督からまた手紙が来た。この間の撮影は製作主任の段どりがまずく自分としても満足な仕事が出来ず残念だ。しかし、この次の時には、社長の氣にいるものを仕上げる氣でいるから、もう一度、機会を与えてもらいたい。という意味の事が書かれてあった。仕事にまぎれて返事を出すのがおくれていると、すぐにまた手紙が来て、社長が自分の事を快く思っていないのなら、ど

こか別のプロを紹介して頂きたい、自分が都合なら、A監督を起用してもらえまいか、という事が書かれてある。それに対し、遂に私は今日に至るまで返事を出していない。無情のようだが、もうあなた達の時代は過ぎたのですよ、と胸の中でいい、私は老監督の申し出を無視してしまったのだ。監督の仕事については私は無知な方だが、映画的感觉という点から素人目に見た場合、B監督のそれはたしかに時代おくれの鈍さがあるようだ。こうして、不遇の境地に陥る事になったのも、結局、彼に本質的な才能がなかったのだと思われる。しかし、本人は映画の事になればもう夢中で、自分の才能を確信し、ここまで自分がくずれて来たのは、自分に能力がなかった故ではなく、世渡りの方法を過ったからだというのであった。彼は二十代で映画界に入ったというが、映画の道を選ばず、他に自分の才能を生かす方法をもし考えて、そこから飛び出して行ったとしたならば、彼の人間的な印象が人をひきつけるものを持っているだけに成功者となったかも知れない。と、ふと私は考えるのである。

——深夜の道路を突っ走るタクシーのシートに身をうずめて、そんな運命論的な事を考

え出すと、ますます飲まずにはいられなくなってくる。六本木で車を降りた私は、K子の肩をR君と一緒に左右からかかえるようにして、何時であつたか辻村氏や芳野眉美とおそくまで飲んだ穴倉酒場へもぐりこんでいく。この店はホステスを置いていないが、朝まで酒を飲ませてくれるし、客はほとんど同伴でやって来、ほとんどが芸能人らしく、女客がかなり美人で、眼の保養にもなる。酔っ払って、キャッキャ騒ぐ客はなく、同伴の客達は、あっちの隅、こっちの隅で、びったり寄り添い、何かボソボソ語り合い、押し殺したような静かなムードを漲らせている店なので、私は時折、急ぎのシナリオをこの店で徹夜して書き上げる事がある。

この店のバーテンはTといい、もう四十を越しているのだが、一見、三十三才位にしか思えぬ、なかなかの二枚目だ。十九才の時からバーテンを始め、これもR君と同様、途中で自分の仕事に懐疑を持って、夜の仕事から足を抜き昼の仕事に切替えた時期があつたらしいが、それも一年とつづかず元通りバーテン稼業に舞戻って、やはり、バーテンが自分の天職であつたと思ひ知つたように夜毎夜毎、生真面目な顔つきでシェッカーを振って

いる。バーテンにしては愛想のない事おびただしく、初めての客には声をかけられても返事をしぶり、そのかわり気に入つた客には自分のおごりでどんどん酒を出したりする風変りなバーテンだが、それがまた一つの人気になつていて、彼に逢いたがつて酒を飲み来る客も多いようだ。もう一つの彼の特徴は大変な女たらしという事で、四十過ぎても人に雇われてバーテンをやっている自分の不甲斐なさに対する忿懣を女にぶつつけるような調子で、六本木族と俗にいう、少しどこかが狂っているような少女達から、客の連れて来る女性達まで、相手かまわず手をつけて、女を寝とられた客と、つかみ合いの喧嘩をした事もあるという奇妙な男だが、彼のそうした女遊びは職業上の不満から発しているようであり、政治家と汚職が切っても切れない関係にあるのと同様、女遊びをバーテンの特権のようにな心得ているようだ。この男の女体愛撫方法は、一種独特の技術があつて、彼に聞かされた菊花責めという技術を花と蛇の中でシスターボーイが京子を攻撃する所の参考にした事があつたが、とにかく大変な色事師でありテクニシャンであり、女を連れて店へ来る客が彼の肩をたたいて、俺の女に眼をつけねえ

でくれよな、と笑っているのも冗談ではなく黙っていたれば、この男、客の女にでもちょっかいを出すぞえらい奴で女を連れだした男客にだって油断も隙もあったものではないのである。そして、俺の女に手を出すな、と客に頼まれば、絶対に彼は手出ししないそうだが世の中には、おかしいバーテンもいるものだ。

渋谷で私がよく出入りしていた酒場にS君という二十二才の若いバーテンがいて、麻布や六本木方面で親しくしておられる酒場がありましたら自分を紹介してくれませんか、かねがね仕事の世話を頼まれていたので、この店で使ってもらう事にし、S君は、ベテランバーテンTの助手みたいな形で働く事になった。S君は実によく働き、TもS君の事を今どき珍しい勤勉な青年ですよ、とほめて私に話したし、S君も、Tを、さすがに二十年もこの道を歩いて来ただけあって、仕事にそつがなく貫録もあり、僕は尊敬しますと、私に告げ、Tに師事しているような形なので、それは結構な事だと思っていたが、そのうちに妙な事件が二人の間に持上った。

S君が私に六本木方面で仕事をしたい、と欲していたのは、麻布の広尾町に、三鈴さんと彼が呼ぶテレビ番組専門の踊り子が住んでい

て彼女とS君とは高校時代の同級という間柄で、S君は彼女に秘かな思慕を寄せていたのである。彼女がS君にどれ程の気持を持っていたかは不明だが、彼が最初勤めていた渋谷の酒場へ、三鈴さんは仲間の踊り子達と一緒によく飲みに行っていたらしく、貴方が麻布方面のお店で働いているなら、私、毎日でも遊びに行くんだけどな、というので、彼は麻布方面の酒場へ移りたがっていたのだ。S君が穴倉酒場へ移ってからというもの、三鈴さんは、最初にいった通り、仕事や稽古が終わってから、毎日とまではいかなかったも、三日に一度は必ず店へ顔を出すようになったのである。私も一度か二度、穴倉酒場で、三鈴さんと顔を合わし、S君からも紹介されたのだが、少女っぽい稚さの混った、一寸、芦川いずみに似た美人で、踊り子だけに下半身は均整がとれ、ベージュ色のスラックスを通してセクシーな匂いを発散させていた。

「こんな美人、君には勿体な過ぎるよ、どうだい、僕に譲らんかね」と、私は、S君に冗談をいったのだが、彼は、幸せそうにニコニコして「どうぞ、どうぞ、先生なら、何時だってお譲り致しますよ。色々、お世話になっておりますから」と、調子のいい事をいう

のであった。バーテンという職業の卑屈性によるものか、彼は他の客からも、そうした冗談を持ちかけられると、自分の思いつめている女が客の眼にも美しく映じている事を知った嬉しさに、どうぞ、どうぞ、私に遠慮なさらず、とニコニコし、それは自分の女を相手に誇示したい気持だけで、実際に私なんかは彼女にちょっかいを出し始めたりすれば、それこそ、顔面蒼白になって、陰に廻り、彼女の腕をついたりして、「君、あんな助平と付き合ったりすりゃ大変な事になるぜ、あの先生、どんないやらしいものを書いているか教えてやろうか」などと、私の事をケチヨンケチヨンにけなし、彼女を私の眼のとどこかぬ所へ隠してしまうにきまっている。勿論、こっちだって、彼が思い焦れている女性に、ちょっかいを出す程、無分別な男ではないつもりだが、S君がそんな調子のいい事を迂闊にも、女たらしを天職だと思っているTにいったりしたものだから、大変な事になってしまった。後で、Tから聞いた事だが、Tは幾度も、その時、S君に念を押したそうである。

「俺の取柄は、女をものにする事だけだ。あとになって、君は僕に文句はいわないだろう

ね」それに対し、S君は、持前の笑顔で、「そんな下らない事で、僕はうろたえませんよ。第一、彼女は僕の恋人ときまったものじやなし、Tさんが僕に気兼ねなさる事はありません」S君は、いくら何でもまさかTが、三鈴さんを本気で口説くとは思わなかったしまた口説かれたとしても、心を動かすような彼女ではない、とS君は三鈴さんを信じていた。まして、相手は、バーテンではないか資産家の娘である三鈴さんが、バーテン風情に。そう思うS君は、やはり、バーテンである自分と三鈴さんとは、どう転んでも結ばれる筈はなく、自分の恋は、プラトニックで終るものだろう、と諦めの必境にもなっていたと思われる。ところが、それから、半月もたたぬ内、Tは、三鈴さんをものにしてしまったのだ。

法事か何かでS君が一日店を休み、故郷へ帰ったその夜、ひょっこり店へ遊びに来た三鈴さんをTは、これぞ千載一遇の機会とばかり、小躍りする思いで、自分のおごりで彼女にカクテルをどしどしすすめ、巧みな話術と磊落な振舞いで、彼女の心をかきさらし、男泣きして——彼は女を口説く時、段々調子が出てくると泣き出すのである。それがまた

彼女のハートをうずかせるための一つの技巧だそうだが——すると、おかしい事に彼女も彼につられて酔い泣きし始め、彼は、頃はよし、と見て、「今夜は、貴女の所まで送らせて下さい」勿論、彼は彼女を家まで送ったのではなく、タクシーをホテルへ向けたのだ。

その翌日、S君が店へ顔を出した時、Tは煙草を横に啜えて、カウンターの中で昨夜の売上げ伝票を整理しながら「三鈴ちゃん頂いちゃったぜ」とさばさばした顔でいったそうである。その夜、おそく、私は、穴倉酒場へ顔を出したのだが、S君が妙に空虚なまばたきばかりして、一向に元気がなく、どうしたんだよ、と聞くと、Tがかわって答え、昨夜三鈴さんとホテルへ行った事を私に告げる。「僕は、S君に念を押したんですからね。必ず三鈴さんを頂くって」Tが、ニヤニヤしながら、S君の方を見ていうと、S君は、ひきつったような笑顔を作り、カウンターを挟んで坐っているTと私の傍へ来て「その事を僕は気にしてるんじゃないよ。かえって何か胸のつかえがおりたような気持ですよ。三鈴さんでも、やっぱり男とホテルへ行くんですね」と、何気ないような調子でいうのだが、妙に眼が血走って見えた。

「いいのかね、S君」と、私は、S君の心中を察して、何とも不愔な思いになり、同時にTが、いい年をさらして、見習いバーテンの女に手をつけるとは、と小憎たらしくなってきたが、S君は、三鈴さんは僕の恋人ではないんだから、そんな事、僕に関係のない事です、とくり返していい、必死に笑顔を作ろうとするのだった。

「そういつてくれるなら、僕も安心だよ」とTはいい、店が閉店してから、三鈴ちゃんの声が聞きたきや聞かせてやってもいい、というのだった。Tは、如何にも色事師らしい奇妙な趣味があつて、女とホテルへ行く時は、こっそりと携帯用の小型テープレコーダーを忍ばせるのである。私は、この女たらしTのやり方を随分と「花と蛇」の中で以前から探上げている。あの珍小説の資料をTは、色々と私に提供してくれているのだ。

それから閉店になるまでの二時間あまり、私は、Tと差向かいでウイスキーを飲んだのだが、こっちも助平だから、やはり、三鈴さんを抱擁した時の情景をTに聞いてみたくなる。しかし、それは、私より、S君の方がやはり腹立たしくも気になるらしく、努めて何気ない風を装いながらS君は、コップなど洗

いつつ、「抱き心地はよかったですか、三鈴さんの体は」と微笑して聞き、「まさか処女じゃなかったでしょうね」と顔を上げる。

「処女じゃなかったね」と、Tが答えると、ああ、やっぱり、とS君は、淋しい落着きを得たように、再び食器類を洗い出すのであった。三鈴さんがピンクのパンティをはいていた事、おっぱいはお椀型でさして大きくなかった事、そのかわり下半身は異様に熟していて、途中で一旦、休まねばならぬほどで、よわったという事など、Tは、得意げに語り出す。S君は黙々と力を入れて食器類を洗っているのだ。Tの話す一つ一つが彼の肺腑を鏝でえぐっているのかも知れないが、私は、Tのしゃべる巧妙な猥談に巻きこまれていき、S君の辛い気持などこの際どうでもいいような気分になってしまっている。

「君が前に僕に話してくれたあの手を使ったのかね。そら、エイナスをいじめるってやつだよ」「ああ、肛門責めね」事もなげにTがいうので、私はおずおずとその辺を見廻し、顔をしかめる。

「勿論ですよ。三鈴ちゃん、あれにや泣きましたね。あれにかかりや四国女郎も降参するといいますからね」

私は段々とおかしな気分になって来た。何時か、今私の坐っているスタンド附近で、俯向いたまま、ひっそりとジンフィーズを吸っていた三鈴さんの滑らかに引き緊まった初々しい横顔がぼんやりと脳裡に浮かんでくる。キラキラと口元に微笑を浮かべつづけた、あの可憐なフェイスの踊り子が、たった一日でTの罨に落込み、Tのいう十五分の菊花責めにのたうつなどどうしても信じられない。その思いは、私よりS君の方が強かったろう。

ところが、明け方の五時、閉店してTがS君と私に、聞かせたテープで、やはり、Tのいう事は出鱈目ではなかった事をはっきり私達は知ったのである。断続的にすすり上げ、うめき続ける声は三鈴さんのものだったし、切れ切れにあえぎつつ、三鈴さんは、Tの名を口に出している。そして、そこはもう嫌、やめてよ、ねえっとたまにかねたような声を出しているのだ。このテープを聞いたという事は絶対、誰にもしやべらない事、をTに約束させられたわけだが、S君は、三鈴さんが快樂のうめきを上げつづける毎、狂ったように大きな声で笑いつづけるのだった。S君が穴倉酒場をやめたのは、それから、三日後であり、三鈴さんも、それ以来、ぱったり店へ

姿を見せなくなってしまった。

——R氏とB子を挟んで穴倉酒場のスタンドに坐り、飲んでいるうち、私は、ボンヤリと、S君や三鈴さんの事を思い出している。恐らく、あの若い二人の間には大きな溝が出来てしまい、あれ以来、もう逢えなくなってしまうているのかも知れない。

ところで、あの若い二人の心を傷つけ、踏みにじった愛すべき極悪人、Tの姿が先程から見当たらないのだ。今夜は、休暇をとったのかな、と思っていると、珍らしく、この酒場のマスターが現れて、よう、お久しぶり、と私に声をかける。

「Tはどうしたのかね」

「ああ、あいつか、とうとう鹹にしちまったよ。どうしても、女癖の悪いのが直らないんだ。あいつは、女と遊ぶために二十年間、バーテンを続けて来たような男だよ」

Tは、また何か女の事でトラブルを起し、店に迷惑をかけ、遂に今度は解雇を宣告されたいらしい。バーテンしか出来ない男だから、また、どこか場末の酒場にでも職を見つけ、シェッカーを振る事だろうが、四十過ぎて、また職探しにあちこちの酒場を流れ歩く彼の後姿を想像すると、ふと胸が痛くなる。しか

し、この世に女性がいる限り、彼のような男には人生の快樂がついて廻るのだろうから、そう心配したものでもあるまい。一物が用をなさなくなる時まで彼は結構、楽しくやっていける筈だ。それに比べて、仕事以外、何の趣味も持たわさぬR氏は哀れだと、ふっと彼の方に顔を向けると、彼は、酒場のカウンタ―に頭を押しつけ、さも、心地良さそうに酔ってしまっている。日々を規律正しく生活しているR氏は、こうして夜明け近くまで飲

むという習慣がなく、この店へ入った時からうつらうつらとしていたのだ。「ねえ、もうここを出ましようよ。こんな時間じゃ旅館が開いているか心配だわ」最初から、今夜は私と旅館に沈没する気でいたらしいK子は、しきりに時間を気にし出してしたが、といつても酔ってしまつたR氏をこのままここへ打ち捨てて置くわけにもいかず、彼の片手を肩に抱き、よっころしょと酒場を出る。

東の空は、もう明るくなりかけている。押せどもつけども、R氏は、私の肩に顔を押しつけたまま、全身の力が抜け切ってしまったようになっているのだ。

大体何人かが寄つて、安酒にしろなにしろ、一杯ヤツカということになると、酒飲みは意地のきたないものだということをして、自分のためにつくられたいい訳みたいな顔をして、まるで仇に出会つたみたいだにゲイゲイやる奴の一人や二人は、きつと混っているもんだが、そんな奴にかぎって、妙にくだを巻いたり、へべれけになつて人の厄介になるようだ。介抱させられる者こそいい面の皮である。R氏の場合は意地汚なく飲んだ訳ではないのだが、厄介なものには変りない。

「一寸、どうすんのよ、この人を連れて、まさか旅館に行く気じゃないでしょうね」

K子は、不安なもどかしさをいらいらした口調で私にぶつけてくる。

「どうしようもないじゃないか。あまりブツブツいうな」

私も、何だか急にムカムカして来て、K子にそうぶつけると、寝こんでしまつたR氏を引きずるようにして、夜明けの道をフラフラ歩き出した。

(完)

新発足 懸賞／告白、手記、体験／原稿募集

☆賞金☆

優作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	五千元
佳作	一篇につき	三千元

☆規定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文獻味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもつて誌面を飾る考えであります。

一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもつた原稿を求めます。どうか奮つて御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさとは求めませんが、実際に体験されたもの、事実の裏付のあるものが大切だと思います。従つて必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号に発表。

一、入選作には掲載誌発売後賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「告白懸賞」とお書き下さい。

S M カメラ・ハント……佐々木真弓の巻……

ケメ子早春譜

辻村隆

仕事一辺倒の電話の日もあるのに、意心伝心というのか、同好の人から電話のある時は不思議に又、あの人この人と重なることが多い。恰度その日も後者の一例である。

編集長から、ハントの打合せと、私宛の私信三通送ったという電話がされた途端、又鳴り出す。今度は夙川の会長からで、秘書に連絡したから、浅井優子と一緒に訪問してこいとの御命令である。どうやら『優子の涙』を読まれてお気に召したらしい。

その電話がきれて、十分許りして又電話の

ベルが鳴り出す。

受話器をとると、長い間音沙汰のなかった長田実氏から、ひょっこり思い出したように掛けて来たのであった。

「どうしたんです。話中許りでしたよ。ところでビッグニュースがあるんですがね。実は辻村さんに喜んで貰えそうな、ハント向きの彼女がいるんですよ」

久潤を叙す言葉もそこそこに、彼は早速本論をきり出してくる。相も変らず忙がしい。私に一言も喋べらさぬうち、鉄砲玉の様にポ

ンボンと自分だけ喋べってゆく。

「精しいことは、いずれお目にかかった時ハナしますがね、既に三度許り撮りまして、充分飼育しておきましたから、手間が省けますよ。どうです、一度会ってみませんか」

「そりゃ有難い、願ってもないことだけど、突然又どうしたの？ いきなり切り出されてマゴマゴしてしまいますよ」

「それがね、チャイナ・サロンBというところのホステスなんです。先日お得意様の招待で行った時、小当りに当たってみたら脈があ



「大丈夫ですよ。チャンと話を付けておきましたからね……」

「おやおや、それはまた、莫迦に手廻しがいいんですね」

「辻村さんがきいたら、滅多に断わりっこないと思っただから」

「じゃあ、お顔拝見がてらそのチャイナ・サロンとかへ出掛けてみようか。案内

してくれる？」

「場所はキタ（大阪梅田界隈）なんですけどね。それじゃ、善は急げで、今夜あたりどうです？」

「短兵急だね。不善は急ぐべしか、じゃあ、キタで会いましょう。カメラ、準備していてもいいの？」

「ああ、勿論ですとも。私はご遠慮しますから、縄なんかもどっさりとね」

「何て名の子？」

「佐々木真弓というんですが、ホステス名は大川。ええ、大川橋蔵の大ファンなんで、その名乗ったらしい。でも自称ケメ子、ケメ子

と呼んで貰ったら喜んでいますよ。おかしい子だから……」

「大川ケメ子か、当世向きだね」

「一人指名がふえて喜ぶでしょう。本当に何も知らないのか、それともカマトトか、兎も角、いたって単純、幼稚。そのくせ妙に生々しいところがあって、面白い子ですよ」

私は、もうすっかり彼のペースにのせられていた。ムズムズするハント慾が旺盛に湧き上ってくる。矢張り根っからの好き者なんだろう。待合せ場所や時間をきめて、電話を切る。はからずも、思い掛けない方向から、私は一人の娘をハントする機会に恵まれたのである。電話を置いて茶の間に戻ったら、ラiful魔金嬉老逮捕の速報がテレビで報じられていた。五日間、新聞を面白く読ませた彼も、最後は一寸英雄気どり過ぎた。キタやミナミのサロンやアルサロには、まともな職業につきにくい韓国女性が、随分進出していることも聞いている。今宵長田氏とゆくチャイナ・サロンにも、ホステスの中には、かなり混っているのではなからうか。戦後の韓国籍の日本生れの彼女達は、言葉といい、容貌といい、全然見分けのつけようもない。愛して恋して、悲喜劇はあまた作られてゆく。私は

りそうなので、日を改めて独りで出掛けて、カンバンになってから引っぱり出してみたいです。最初なかなかウンといいませんでした。が、根気よく口説いたら遂々O・Kしましたよ。年は十九才ですが、それがスゴく協力的で、かなり強烈な責めでも我慢するんです。ほっそりした、如何にも被虐タイプの娘で、案外M気あるんじゃないでしょうかね」

「あんたに惚れてんじゃないの？」

「かも知れせんね」

長田実は又ケメ子といって、電話の声の奥でクククと含み笑いだした。

「私なら嫌だというかも知れない」

関連もなく、金嬉老逮捕のニュースを見乍らぼんやりそんなことを考えていた。

× × ×

寒い夜だった。連日朝から雪がチラつき、昼間に晴れて、夜になると又雪というような日が続いている。

午後八時——。約束の時間きっかり、待合場所の喫茶「R」に長田氏は手ぶらの姿で現われた。彼は身綺麗でダンディである。いつも風呂から上りたてのように爽やかな身だしなみで、微かな薫りすらただよわせている。仕事柄、人に接する機会も多く、それだけに伊達男振りが板についていた。子供に恵まれないのが悩みのタネであったにしても、反面



パパ面にならない若さがいつ迄も彼に残っていた。ウエイトレスがウオーターをもって来て、彼に微笑みかける。常連らしい。コーヒーを注文して彼は腕時計を見た。

「一寸早い時間ですね。あんなチャイナ・サロンに長時間粘っていると、かなりボラれますよ。どうします？」

「何処かで一寸引っ掛けてゆきましょう。一杯のみながら、あなたのハント談もききたいし、予備知識もなくちゃね」

私達はコーヒーをのむと、早々に喫茶を出た。いつか清原麻耶と行ったことのある、スナックバーPへ向かう。カウンターとテーブルと両方あって、膝つき合せて喋っていても気がおけない場所だった。

オンザロックを傾け乍ら、薄暗い片隅で私達はしゃべる。

「しかし最初どうやって知り合ったの？」

「連れていったお客さんの馴染みのトコロなんです、ボクは始めてなので、勿論本番の子が坐ったのです。それがケメ子でしたよ」

「ケメ子っていうと、近頃流行りのアングラレコードのあれなんだろう」

「わたしケメ子よ。どうぞよろしくって、彼女がいうものだから、いつかケメ子になっちゃったんですね。自称ケメ子の押売りですがその子の顔をみてみると、何となくケメ子らしい気になってくるんですね。逸早く、ケメ子、ケメ子って每晚自分というもんだから、そこじゃケメ子で通るようになった。ホステスの源氏名は大川でも、ケメ子といって指名してくるそうで、本人もケメ子と呼ばれて、得意になって喜んでる、そんな子ですよ」

「三度許り撮ったっていつてましたね」

「ええ、最初に撮ったのが、二月の初め頃だったかな。鉄は熱いうちに打てと許り、三日にあげず会っては、ジャンジャンとりまくりました。だけど、その指名料やセット代、ケメ子への心付けで、出費もバカになりますよ。大分使いました」

「で、今日は私で四度目ということ？」

「バッテリー交替ですわ。何しろ緊縛やプレイにスゴく協力的でしょう。しかし、ボク一人の荷じゃ重すぎるので、辻村さんにも紹介して、よかったら、編集部へ連絡してもらって分譲用のフォトにもどうかと思って——」

「博愛衆に及ぼすってわけだね。そりゃ編集長だって、若くて協力的な子なら、きっと大

乗気ですよ。会って、彼女がO・Kしたら、すぐ箕田さんにも連絡しますよ」

「箕田さんにも大分お世話になりっ放しだから、是非そうして下さい」

「そのケメ子のフोट、今持っていないの」

「おひる頃思い立って辻村さんに電話して、今夜でしょう。会社から直行しましたので、持って来る間がなかったのです。大体フィルム十本ぐらい撮りました。まあ例によって、ボク好みのものが多いけど、かなり強烈なものがありますよ。どんなポーズや緊縛でも、いやといわないところがいい」

「カンバンまで待って、ホテルへ行くの」

「最初はホテルでしたが、二回目からは彼女が借りているアパートに押しかけてゆきました。夜おそいので、こんな商売の女の人の多いアパートですが、隣は何をする人ぞで、意外に目立ちません。第一安上りですからね。若いのに、一人前に一室借りてるんですよ。バス、トイレつきです。といっても、六帖と二帖ぐらいの狭い部屋ですが、二回ここでやりました」

「何時間ぐらい？」

「朝帰りに近いですね。何しろサロンの終るのが十一時頃でしょ。途中で夜食して、タク

シー飛ばしても、豊中市の庄内まではかなりかかります。帰ってから、あのチップケなホクサンバスオールとかいう、一人風呂に入っで、それから始めるものだから、午前一時を廻っちゃうんです。どうせ時間の制限もないし、彼女ひる過ぎまでねているんですから、つい夜中じゅうになっちゃいます。こちらはクタクタですけどね」

「単にいわれた通りやってるだけ？ それとも彼女自身もハッスルしているの？」

「たしか被虐性があるんです。軽い鞭打ちには飲みの声を挙げますからね」

「いい線いってるね。でもあんた、朝帰りとなると、奥さん御気嫌わるいでしょう」

「だから、出張にかこつけて、会社へ直行です。幾分ヒステリック気味ですがね」

「本当のことはいえないしね。しかし世の女房族は、単なるプレイだけだといっても信用しない。それにあんなならホテルから、尚更心配しているんですよ。プレイだけじゃすまないと見たは私のヒガ眼かという処——。その点私なんか、もうオジサマ扱いで、最近はおモテたためしがない」

「あんなこといって。辻村さんこそ、奇クフアの羨望の的ですよ。毎月毎月、よくあれ

だけ次々と、変った女性がおるものと、手放しで感心しているんです。まるでSM族の幸福を、一人で背負っている感じですよ。ボクなんかつくづく羨やましいと思うな」

「人眼にはそう見えても内心はシンドイんです。締切間近になると、編集部からやいやいって来るし、何かハントしなけりゃと、心許り焦って、仲々いい娘が見付からない。好きな時に、好きな女性を自由に撮ってる人が羨やましいと思いますよ。私の場合まるでノルマみたいだから」

「それが次々と続くから不思議ですねえ。ボクなんか、何年振りかでやっとケメ子一人。ずっと家内を相手にコツコツと撮っていたんですよ」

「それぞれ、こういう具合に、誰方かがハントのネタを供給してくれるんです、あんたがケメ子を私に紹介してくれたように。それで細々とつづいているんです。謂わば同好者のお蔭です。先月撮った、ピンクスターの、辰巳典子が賀山さん、谷ナオミが団鬼六先生というようにね」

「奇ク二十年選手の古いキャリアですかね」

「長田実には慨嘆するようにいった。しかし、よくしたもので、昔ほどの根気が

ありませんね。糖尿病になってからはインボ同様で、その気になっても全然駄目。神様はうまく調整していますわ」

「天は二物を与えずというところですね」

彼は軽く笑った。

「今迄、過去三回撮ったもので、強烈なものという、どんなプレイがあるの？」

「一度だけ吊り責めか、逆吊りをやりたかったのですが、ホテルやアパートじゃ、やるどころがないんです。小道具めいたものは、彼女の部屋に大分持ち込んでありますが、その儘置いてあります。お気にいったのがあれば使ってください。やはりどうしてもボクの好きな革具縛りが多いですが、これは殆んど一通り使いました。但し革具や拘束具、嵌口革などは、家内が有り場所を知っていますので持ち帰りましたが、丸い棒や、ローソク、浣腸ポンプなどはその儘です。辻村さん好みの棒を使つての開股縛りや海老責、逆海老縛りなどもやってみました。鞭もバンド代用で三回目に少し叩いてみましたが、反応大で欲びます。あれは確か苦悶の呻きでなく、欲びの鳴悦に近いものでした。それにローソク責めもやってみました。ローソクを立てたり、蠟涙をあちこちへたらしたり……。試験的に浣

腸器具を使ってアヌス責めもやりましたがこれもOKでした。ケメ子自身、A感覚にも敏感なようですよ。アヌス責めではかなり昂奮していましたからね」

「よくもまあ短時日で、そんなにうまく飼育出来たもんですね。最初の、そもその馴れ染めに、どんな調子で持ちかけていったんです？ 一度後学のために聞いておきたいな」

「辻村さんというなんて、まるで釈迦に説法みたいだけど、あの夜は酔った勢いもありました。フットSM的めいたイタズラをしかける気になりましたね。それというのもケメ子が何ていうか如何にも、被虐タイプの子に思えたのです。ボクの直感という奴ですね。なにかイケそうな気がしました。かなり酔ったフリをして、冗談めかしにケメ子の両手をうしろに廻して、手首で組ませて押さえながら、（どうだ、こうして縛ってやろうか）といったのです。（私を縛ってどうするの？）って聞き返すから、（ボインを触ろうとしても、すぐ手ではねのけるから、後手に縛っておいて、じわじわ触ってやるのさ）といってやっただけです。すると意外なことに（ええわ、くくって）ときたんですね。彼女も又酒席の上の冗談だったのでしょう。ボクはよしきたと

許り、（ようし、ケメ子をコテンコテンに虐めてやるぞ）といいながら、ポケットからハンカチをとり出すと、お得意様が夢中で傍らの女性と喋々囁々しているのをいいことに、そつと両手をハンカチで縛ってやりました。縛った儘、体を抱きよせて、胸へ手をさし込んでゆくと、むしろ体をすり寄せてくるのですよ。これがソモソモのきっかけです」

「オーソドックスな正攻法にしろ、酒席という酔興がうまく成功したんですね」

「そうなんです。ダメで、もともとですからね。体をまさぐりながら、今度はじっくりと緊縛のプレイを持ちかけてゆきました。この次きてくれたら、きっと云う通りするからというので、その夜はそれで別れましたが、早速翌々日、今度は独りっきりで、ケメ子を指名して出掛けていったのです」

長田実は、二杯目のハイボールで、もう既に真赤になっていた。

「その夜が初のホテルゆき？」

「ええ、あわよくばの気持から、僅かの縄や革具と、カメラ、ストロボなど鞆に忍ばせてゆきました」彼のハント談によると、彼女は長田実の情にほだされたのか、拒めなかったというのだ。

そのプレイなるものが、どのような性質かしらずに、誘われる俤にホテルへついていったという。恐らく処女性はなかったに違いない。勿論こんな世界を泳ぐ女のことだから、若くても、それを望むことは無理であろう。単なる情事に少し加虐趣味を加味した程度と想っていたのが、彼の本式の緊縛が始まるに及んで、かなり抵抗したらしい。しかしそれによって、ケメ子のマゾ性は開眼されたといってもよかった。彼のプレイ談義をきくうち、私は今夜のハントに彼を誘わねばならぬ義務を感じた。

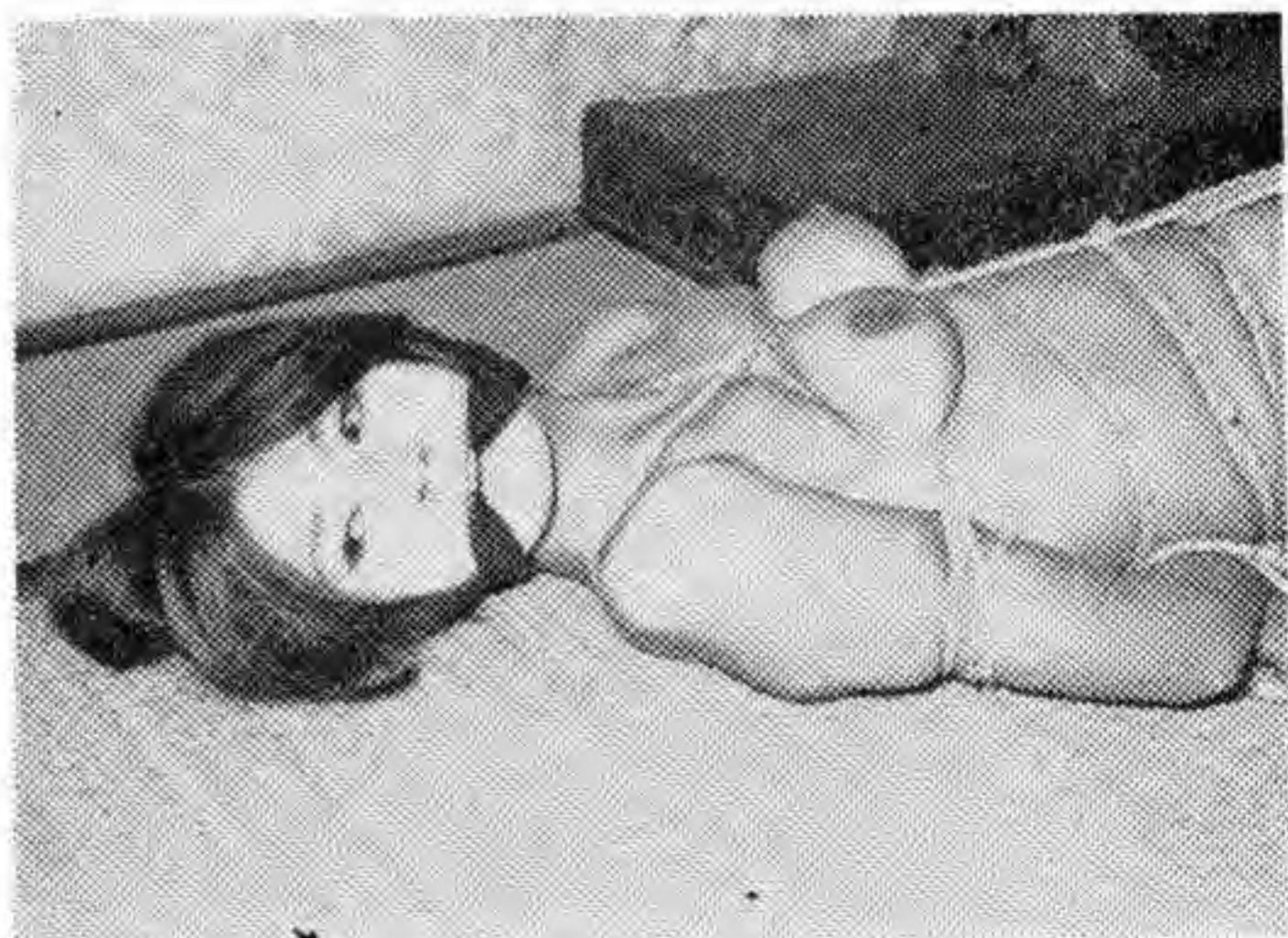
「じゃあ今夜はよかったら一緒にプレイやらない？ その方が導入しやすくて、都合がいんだけど……」

「ええ、そうしたいのは山々ですが、まさか早速辻村さんすぐ出掛けてくるとは思っていなかったから、カメラ持参せずです。久し振りにハントの様子を拝見したいんですが」

「カメラがないとなると、一寸手持不沙汰だね。でも構いませんよ」

「いや、今夜は指をくわえて遠慮しときましよう。その代り奢らすかな」

「いいとも、勿論そのつもりですよ。少し悪いな」



「なあに、いいですよ。何ていうか、ボクも撮るだけ撮りましたからね」

「その子、生れはどこ？」

「広島だと本人はいうんですが、余り当てにならない。大阪へ働きに来ている兄夫婦を頼って上阪したのですが、兄嫁と意見が合わず飛び出しちゃった。おきまりのコースみたいですが。喫茶店につとめていて、四カ月許り

前、同じ喫茶店の同僚と一緒に、今のチャイナ・サロンへ走ったそうです」

「転落の詩集第一頁だね。それじゃ、そろそろ、そのチャイナ・サロンへ案内してもらいましょうか」

「何だか無理に誘ったみたいで、悪いですねえ」

「とんでもない、感激ですよ。しかし、誰かもう一人ケメ子の外に呼ばないと……」

「ケメ子は辻村さんが指名して下さい。ボクは今一人、一寸小当りに当たっている子がいますので、それを指名しますから」

「オヤオヤ、もうケメ子の後釜なの？」

「可愛い娘でね、どうやら脈がありそうですねです。あんなクラブやサロンなんかにいくと、案外ハントもラクですねえ」

「しかし、ヒモツキが怖い。プレイの最中にヌツと入って来られると恰好がつかない」

「勿論、相手次第ですけど、若い純真そうな娘をねえば、案外そんなこともありませんよ。虎穴にいらすんば虎児を得ずです」

「私は水商売のクロウトさんには、とんとハントの縁が薄くてね」

「それが御立派。ボクなんか、こんな個所でもねらわれないことには、てんで、そんな手邊

「ありませんからね」

「あんな仲々のプレイボーイだよ。恐れ入りましたよ、お前さんには」

微醺をおびた私達は、スナックバーPを出ると酔歩漫散としながら、目指すチャイナ・サロンに向った。

× × ×

「御指名ございますか？」

「ケメ子って娘いる？」

「大川ですね、承知しました。こちらは？」

「ボクは前川——」

長田実、前川と称する、お目当ての女性の名をつげた。マイクが二人の名を呼び上げていた。馥郁たる甘い匂いが私の鼻をつき、ボックスの私の傍らに坐ったケメ子は、長田実から、あらかじめ私のことを聞かされていたのか、いとも神妙で、あでやかに笑った。どこか加賀まり子に似た容貌が、仄暗い光の下で、小妖精めいてくねった。無難作に真中から分けた断髪は、小柄な彼女の体にマッチして、ピンクの股の辺りまで割れた中国服の楚々たる姿は、姑娘という印象にピッタリだった。球形のイヤリングが、暗い照明に反射して五彩にキラキラ光っていた。

彼女にセーラー服をきせたら、その俣女学

生で通りそうな、可憐さとなよよしさがあった。その癖、こうした世界で生きようとする、若い娘の芯の強さが、アイシャドウの瞳の奥でキラリと光っていた。Sへの激しい探求心が、早くも私の胸を疼かせ始めていた。長田実、ケメ子を紹介すると、私にそつと耳打ちした。

「お互いに、べつべつの方が口説き易いですね。ボクはボックスを変えましょう。辻村さんもその方が、反って話しやすいでしょう。気をきかせますわ」

前川と称する、彼の指名したその若い娘にプレイの下心があるのか、彼はそういつて、席を改めるべく立上った。

「ああ、私は構わないよ。じゃんじゃんやって下さいよ、引受けるから」

「済みませんねえ。それじゃケメ子ちゃん、辻村氏をよろしくね。ウンと可愛がってもらうさ、いいオジサマだから」

「あらッ、長田さん行っちゃまうの？」

ケメ子は腰を浮かしかけたが、私の方をチラッと一瞥して、思い直したように腰を落した。指名した前川が、イソイソと彼の体を抱きかかえるようにして、数米先の空きボックスに消えるまで、ケメ子はじっと、やる瀬な

さそうな眼付で、長田実の後姿を見送っていた。

「薄情な人だわ、あの人……」

ポツリと独り呟やくようにいうと、彼女はもう諦められたのか、愁いの眉を解いて、私の方に笑顔を向けてきた。セットで運ばれてきたビールを取り上げると、そつと傾けて、

「御免なさいね、放ったらかしにして……」

コップになみなみとつき終ると、フト空白が漂った。

今宵、ケメ子の待っていたのは、私ではなく、長田実であったことは、問い訊すまでもなく明白であった。彼の眼前に柔肌を曝し、裸でのうち、縄目の洗礼をうけ、責めの数々が、密室のようなケメ子自身のアパートでの出来事であってみれば、二人きりのプレイのあと、それからどの様に展開していったかは、私にしても、おおよその見当はついていた。改めてケメ子の口から聞かずとも分りきっているではないか。くどくどしく詮索するなんて野暮というものだ。先刻のケメ子のあの悲しげな眼が、前川と彼との情事を既に察してか、愁いにかげっていたのが、何より如実に証明していた。

若さにみち溢れた現代ツ子の彼女を一眼み

た時、私は長田実の魂胆が分ったような気がした。

——どうだい辻村さん、ボクにだって、こんなピチピチした、いきのいい娘をハント出来る甲斐性があるんですよ——

今頃、前川を口説きながら、ほくそ笑んでいる、彼の得意の表情が、歴々と浮かんでくる思いであった。

いうなれば、ケメ子は、長田実がプレイボーイとしての真価を充分発揮して獲得し、狙った獲物を散々もてあそび、プレイの限りをつくし、撮りまくって、そろそろ飽きがきた結果の、バトン交替ではなかったか。

或いはそれは私の思い過しで、カメラ・ハントを書く私のために、既に飼育までして紹介してくれた、彼の純粋な好意であったかも知れない。しかし、余りの彼の斬れ味のよさに、してやられたという私の気持はかなり働いていた。その癖、私のそんな意思とは反対に、心は脆くもヘナヘナと崩れて、既に緊縛はじめ、一連のSMプレイの洗礼を受けた美女を前にして、私の食指は強烈に動き始めていたのである。長田実は彼なりの手段を構じてケメ子をものにした。しからは私は私流なりに、この美女をプレイへと誘導してゆくと



しよう。

先ずケメ子自身が、現在一番興味を抱いている話題を持ち出すべきだ。それにはグループサウンズの話題が一番いい。

ビールをつぎ終って手持無沙汰にしているケメ子に私は声を掛けた。

「ケメ子ちゃん」

「なあに」

「君は、ザ・ジャイアンツと、ザ・ダーツとどちらが好きなの？」

「あらッ、オジサマ『ケメ子』のグループサウンズを知っていらっしゃるのね。珍らしいわ」

何が珍らしいものか、私だって未だ未だ気は若いんだ。『ケメ子の唄』が、この二つのアングラ・グループサウンズによって競演されていることぐらい、私も知っている。テレビ、ラジオで絶えず歌を聞いている私の娘達に教えられたことだけだ。

「私はザ・ダーツの方がいいな」

「あらッ、私ものよ、オジサマ」

「ザ・ダーツの唄うケメ子のイメージにピッタリなんだよ、君は——」

「本当？」

「本当だとも、正にケメ子以外の何者でもないね」

自称ケメ子と称するぐらいだから、ここらでかなり持ち上げておくに限る。私は低い、唸るような声で、即興に唄い出した。

へ今夜ケメ子に会いました

チャイナサロンの夜でした

ケメ子の笑顔を一目見て

私は彼女にいいました



スキ……スキ……私はケメ子が大好きよ
タララ、ラ、ラララ、ラララ、ラララ……
年甲斐もない私の唄うケメ子に、彼女は腹
を抱えて笑い出した。

「オホホホ、おかしいわ。でも、よくそんな
にすぐに替唄出来るのね」

「こらッ、莫迦にしちやいかんよ。こうみえ

でも、近頃唄う連中の、若い唄は皆知ってい
るんだから……」

「ザ・ダーツのサイドギターの浅井たかし、
大好き。好き——好き——なの」

「皆までいうな。彼等は京都の朱雀高校生と
O・Bのグループなんだ。『帰ってきたヨッ
パライ』の、クルセイダースと同じ、関西の
アマチュア・フォークバンドの、カレッジア
ン・クラブに属していた」

「まあ、そんなことまで御存知なの？」

彼女は驚嘆の眼ざしである。なあに、タネ
を明せば、ケメ子と称する彼女に会うため、
雑誌平凡や明星をひっくり返して、仕込んで
来たに過ぎない。しかしこの勢いで、もう一
泡ふかせてやろう。

「音楽関係の仕事をしているのでこんな連中
とも心易いんだがね。アマチュア・フォーク
バンドに知合いもあるから、よかったらザ・
ダーツのカッコいい子も紹介してあげるよ」
「本当、それ本当なの？」

ケメ子の眼の色が変わってきた。一寸ツミな
嘘だなと思ったが、アトへも引けない。いざ
となれば、私の同好者仲間に、二人許り楽団
関係の人がいるから、その人に頼む術もある
のだから、百パーセントの出鱈目でもないん

だけど、気を引くために、つい相手の一番喜
びそうな話題をとり上げてしまう。

「ああ、よかったらね。だけど、彼等現在売
出中で随分忙がしい体だから、今すぐには
行かないけど」

少し逃げ口上を張っておく。

「すぐでなくていいの。きつとよ、お願い」

俄然、ケメ子の私に対する態度は変わってき
た。私の体にしなだれかかって、そっと手を
とる。現金にもありありと豹変した態度に私
は苦笑せざるを得ない。こんな水商売の世界
だ。彼女とても臨機応変に、その場その場で
ウソをついているのだ。喜ばせてやるだけで
もクドクというものだ。事実ケメ子事大川が
長田氏の言によれば本名佐々木真弓ときいて
はいるが、これだって何処まで本名か分った
ものじゃない。生れも素姓も何一つ知らぬ、
初対面の私達なのだ。その場の酒興として、
オンナを惹きつける手段を使わねばならぬ時
もあると、私は自分に云い聞かして、独りで
弁解している。

ここらあたりでいよいよプレイの本論にと
りかかるとするか——。

「長田君に聞いたけど、モデルで協力したん
だってね」

モデルという言葉の意味は最近多いから、如何様にもとれる。私のいうモデルは、勿論緊縛モデルであるが――。

「ええまあ。あの人、オジサンに何か喋べたの？」

「ああ、すっかり話してくれたよ。だから私は、彼のその言葉にフラフラッとなって今夜やってきたってわけ」

「いろいろなことを喋べったの？」

彼女のいう、いろいろなこととは、緊縛や責めのプレイを指しているに違いない。流石に若い娘の口からは憚られるのか、彼女はそんな表現をした。

「ああ、いろいろなことをね」

じっと、ケメ子は私の顔をみつめ、心を読もうとした。

「オジサンも？」

私は無言でうなづく。

「いややわ。長田さん、誰にもいわないって約束したもんだから、私つい……」

プレイの行為を許したというのだろうか。

どうもハナシが少々喰い違っている様だ。どうやら長田実は、私も緊縛を好む仲間であるとケメ子には告げていない様子であった。単なる友達ぐらいの紹介ではなからうか。話を

つけておいたというが、彼女の口吻からは、

そんな気配は察しられなかった。だからこそうまく口説にかこつけて、この席を外したの

かも知れない。道はつけておいたから、挑戦は辻村式で自からせよというわけか。いや、

それも又面白からう。ならばジワジワ参ろう。

しかし一言、長田実のために弁明しておかなくてはならない。それが仁義というものだ。

「彼は自分から喋ったんじゃないよ。私が彼

の家を訪問して、アルバムを見た時、ケメ子の素晴らしいフォトが眼に灼きついたってわけだ。彼に無理矢理白状させて、ここへ連れてこさせたんだから、悪く思わないで……」

「それなら仕方ないわ。でも私がこんなことしたってこと、お店の外の人には喋らないで頂戴ね」

「ケメ子以外誰も知らないし、勿論この店は始めてのところだ。喋ってくれて頼まれたって言わない。言わないから、私とつき合ってくれないだろうか」

「脅迫？」

「とんでもない。厭なら厭でいいんだ。ただね、長田君とここで見た、ケメ子ちゃんの、あの素晴らしい、美しさ。それがどうしても忘れられなくてね」

「おじさん、一体どんな人？」

ケメ子は急に用心深く、私の素姓を聞き訊そうとしてきた。

「彼、何もいってなかったの？」

「友達をお客さんにつれてくるからって、それだけよ」

やれやれ、ケメ子に指名客一人殖やしてやるだけの口実か。私は少しばかりウンザリしてきた。素姓をいったってホステス相手じゃどうってこともないし、何とか嘘の積み重ねをしておくことにするか――。

「芸能関係だよ、主としてグループサウンズのね。しかしケメ子ちゃん、あんたも何一つ自分のこと云ってないだろう。別に聞きただす必要もないがね。先程、脅迫とか何とか穏やかでないことをいったが、そんな気はチツともないんだよ。長田君に協力したのだから、私にもと一縷の希望をもって頼んだに過ぎないんだけど。じゃあ、もうそんな話よそう。私は帰るよ」

半ば本心で、注ぎおきのビールをぐっとあけると、私は立ち上りかけた。ケメ子はあわてて私の服を掴んだ。

「あっ、待ってッ。せっかちなオジサンね。いやよ、いやよ怒ったりしちゃう。私、ダメだ

ともいやともいっていないのよ。ただ何となくきいてみただけなの。怖い顔して……いいわ、もっとよく相談してみましようよ」

私は渋々腰を落す。(ニヤニヤと喜んで、急に態度も変えられないじゃないか)

「本当のと言います。最初、長田さんにあんな行為された時、すごく恥かしかったけどきつくきつく縛られていると、何だかうっとりした気持ちになってくるんです。私ってエッチな女でしょ」

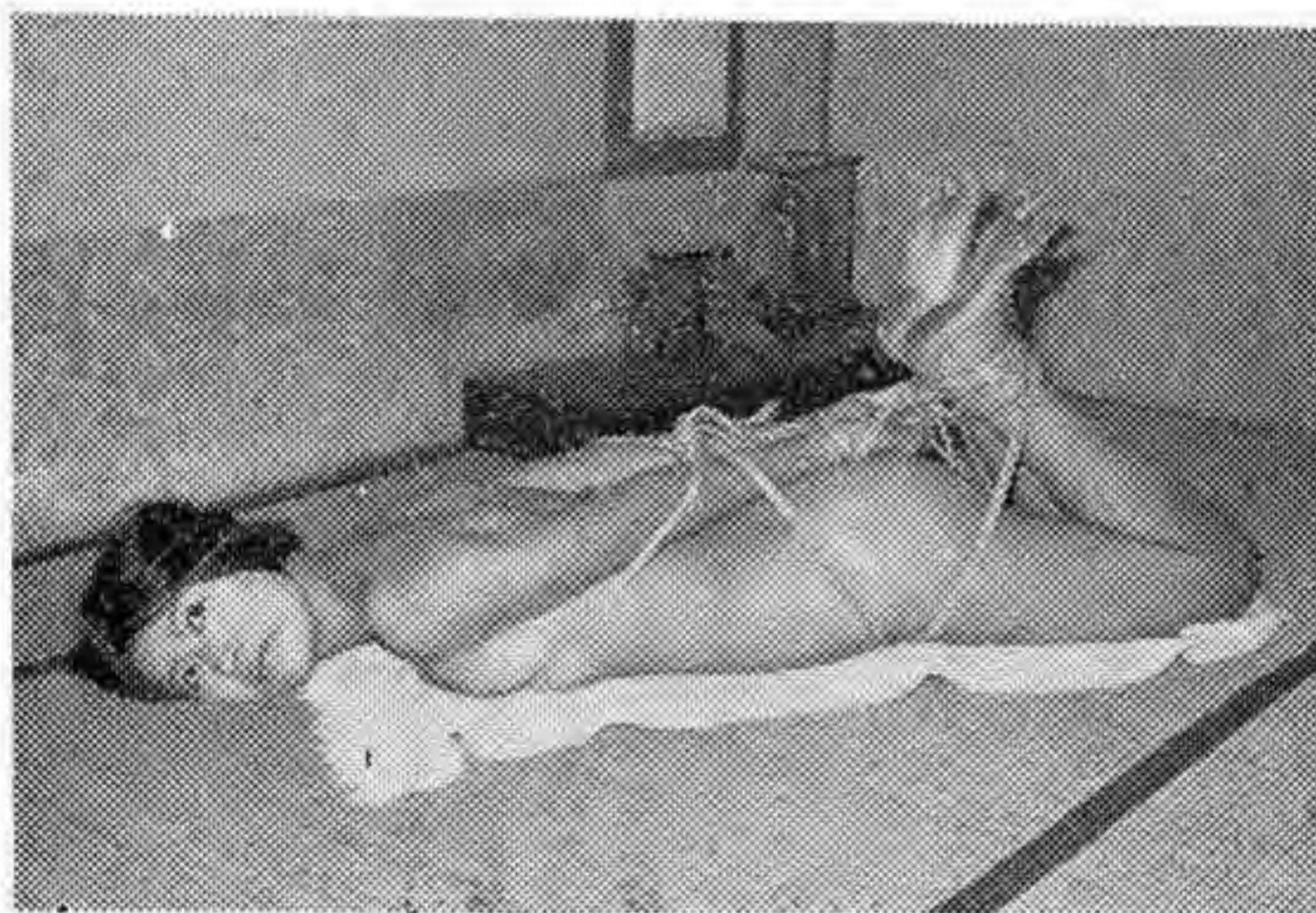
何がエッチなものか、それこそ被虐に悶え欣喜するM女性の本心なのだ。

「私って、今夜も実の処、カンバンになってから、長田さんとの二人の時間を愉しみにしていたのです。だから、それをすっぱかされて、何だか悲しくなっちゃって……。あの人って、もう私には興味ないんでしょうか」

「すごくあるだろうね。あるから、私に紹介したのだろうと思うね。彼は三回のプレイで、自分の日頃の願望の殆んどを一応試みたのじゃないかしら。人間顔かたちが違うように、心も違うし、プレイの形式だって又違うと思うんだよ。自分に持っていないものを私で充実させたらという、ケメ子の被虐の欲びに対する思いやり——。思いやりという言葉がお

かしかったら、慾求への期待を叶えさせたいという思惑ではなかっただろうか。ケメ子とプレイしたい気持ちで山々だけど、一応私という人間に花を持たせようとして、今夜は遠慮したのかもしれない」

「私に若しあの人が好きをもっていてくれるのなら、オジサンにそんな秘密のことを紹介



する、その気が知れないわ」

それが彼女の本心だろう。たしかにケメ子は長田実に愛情を覚えていたようだ。それがSM的な行為を伴えば伴う程、異質な激しいもの、純粋なものかも知れなかった。

「私だって、素晴らしいプレイの出来る彼女がいたとしたら、自分一人でそっと独占しておくのが惜しくなって、きっと誰かに紹介したくなるね。それはプレイという、ケメ子が体験したような行為だけで割切った、愛情の場合には、往々にしてそうしたくなるんだ」

この様な、私達同好者のプレイモデルに対する論理は、一般には通用しないかも知れないが、多数の夫婦プレイの場合や、過去のハントのモデルをよく同好者の人に紹介し合った、同好者の人達なら分って貰える心理なのだ。

「長田さんがいいというのなら、私構わないわ。きいてみてくれる？」

結論としてケメ子は、彼との交渉の絶えるのを恐れてか、長田実の諒解を求めてくれるよう私に懇請した。いよいよ陥落は間近い。

私は立ち上ると、長田実のボックスの方へ歩む。彼はもはや余りのめぬビールを、いささかもて余し乍ら、前川と頬を寄せて、何か

囁やきあっていた。眼顔で合図すると、心得て彼は女の体を離して立ち上る。

「うまくゆきましたか？」

ヒソヒソ声で彼はきく。

「何も予備知識与えておかなかったんだね」

「言うつもりだったんですがね、さき程……」

「言いそびれたということ」

「まあ、でも辻村さんならうまく口説くと思つて……」

「非道いよ、随分と骨を折っちゃった。結局ね、あんたがO・Kならいいんだって、大分あの子あんたにイカれているらしいよ」

「らしいですね。でも、そのつもりで紹介したんだから、いいも悪いありませんよ。どうぞどうぞ」

「あんたの口からそう言つて欲しいんだが」

「ああ、いいですとも」

彼は先に立つて、つかつかと、ケメ子のボックスに向つた。

ケメ子は独り、思い悩んだ様子で、屈託げにぼんやり坐っていた。その傍らにドッカと坐ると、長田実は何か彼女の耳許でヒソヒソと囁やいていた。いやいやというように、彼女は首を振っている。彼の手が伸びてケメ子の肩を抱きよせ、しきりになだめすかしてい

るようであつた。こんな場合は座を外すに限る。私はその場をそつと離れると、勝手分らぬボックスの谷間を縫い乍ら、トイレを求めて歩いていった。

五分許り時間をかけて戻ってくると、私の席には二人ともいなかった。否か応か、その確認は出来なかったが、私は彼の口説を信じて煙草をくゆらし、所在なく辺りを眺めていた。ボーイが小走りに走り、チャイナドレスがマイクの声につれて右往左往して、かなり騒々しい雰囲気であつた。

「まあ御免なさいね。私、お手洗の方へ探しにいったんですけど、入れ違いになりましたのね」

ケメ子が、長田実にどの様にくだかれたのか、かなり明るい笑顔をとり戻してボックスにかえつてきた。

「どうだった？ 彼、構わないからといっただろう？」

「それで、今夜ですの？」

私の問いには応えず、いきなり彼女の返事は、プレイの問いかけとなつて、飛躍してきた。それは、既に行爲を肯定している証左でもあつた。

「ああ、ケメ子ちゃんさえ差支えなかったら

早速、今夜でも……」

「別にこれっていう約束ありませんから、私は構いませんわ。でも、カンバンが十一時なんです。それまでは勝手に出られないんです。それまでどうしますの？ それともずつといらっしゃる？」

私は改めて、暗い灯下に腕時計をかざして見る。針は十時前を指していた。もう小一時間もあるが、ここはケメ子に色をつけてやつて、もう少し粘つてゆくことにしよう。私はカンバンまで居坐ることに腹をきめた。

「彼どういった？」

私は改めて、ボックスに坐つたケメ子に小声できく。

「辻村さん、ああオジサン辻村さんっていうのね。俺より辻村さんの方がうまいから、うんと縛ってもらえて……イヤな人」

ケメ子はいってしまつて、両手で顔を蔽つてしまつた。

「ああ、これあの人から……」

彼女は思い出したように、胸許から折りたたんだメモをとり出して、私に手渡した。

『万事OKです。いずれフォト拝見に参ります。お先に失礼、どうも御馳走さま。ガンバツテ下さい——長田生』

彼の引き際は、鮮やかに見事であった。

私はどうせ先に読んだに違いないであろうそのメモを、ケメ子に開いた俚渡した。

「十一時までいるからね。ビールのお代りもってくるようにしてよ。それに何かフルーツでも」

「すみません」

ケメ子は立って、ボーイに伝えに行く。意志は通じた。あとの一時間、他愛ない話でもしながら、彼女の柔肌をそっと抱くことにしよう。

× × ×

深夜食堂で軽食を摂ったあと、私達二人はタクシーで、庄内の、彼女のアパートに向った。十三辺りのホテルの一室でもよかったのであるが、長田実が残っていたという小道具も使いたかったので、始めてで不躰とは思ったが、強引にアパートへ行くことにしたのである。

「殺風景な部屋ですよ」

「いいさ、何処だって。気がおけなくていいじゃないか。でも迷惑だったらすよ」

「それは一向構わないんですけど、誰かに見つかったら、何と思うかな……」

恐らくはホステスが客か恋人を唧え込んだ

としか見えないだろう。しかし案外、ケメ子は恬淡としていた。

十二時に近いのに、十三大橋の前後は未だ車の行列がつづいていて、急激にふくれ上った、十三、三国から庄内へ続く一帯は、こうした夜の蝶の塀が、ことさらひしめいているのだ。

「あッ、運転手さん、そこで止めて」

前方を直視していた彼女が、庄内に入っ間もなく、とある街角で車に指図した。これ以上、ごみごみして入って行けぬのだろう。見知らぬ陋巷の隘路を、私はケメ子にひとと寄り添って歩く、早春の夜の風は冷めたく、サラサラと粉雪が、私の頬を撫でて吹き飛んでいた。

「あそこの二階なの、そっと静かに少し離れてついて来てね」

彼女の指さす彼方に、窓口の光に薄暗くK荘という、モルタル塗りの防火壁にじかに大きく書いた字が微かによみとれる。

私は黙ってうなづく。彼女はスタスタと歩み始め、数歩遅れて私は黒い影のように、彼女の跡を追う。

屹立した防火壁に添って、じかに二階に通ずる鉄の階段が黒く浮かび上る。しじまを破

ってカンカンカンと金属音を残して、ケメ子は階段を上る。そのあと数歩おくらせて私が。

上りきって三番目の扉に、鍵を差し込むケメ子。開いた俚になった扉にパツと光が流れる。私は素早く辺りを見廻した。幸い近附く人の気配もない。さっと身を滑らすようにして光の中に飛び込んで、扉をしめる。

「右の方へノブをひねって下さい。自動的に錠がかかりますから」

ケメ子はガストロブの自動点火をひねり乍ら声を投げた。

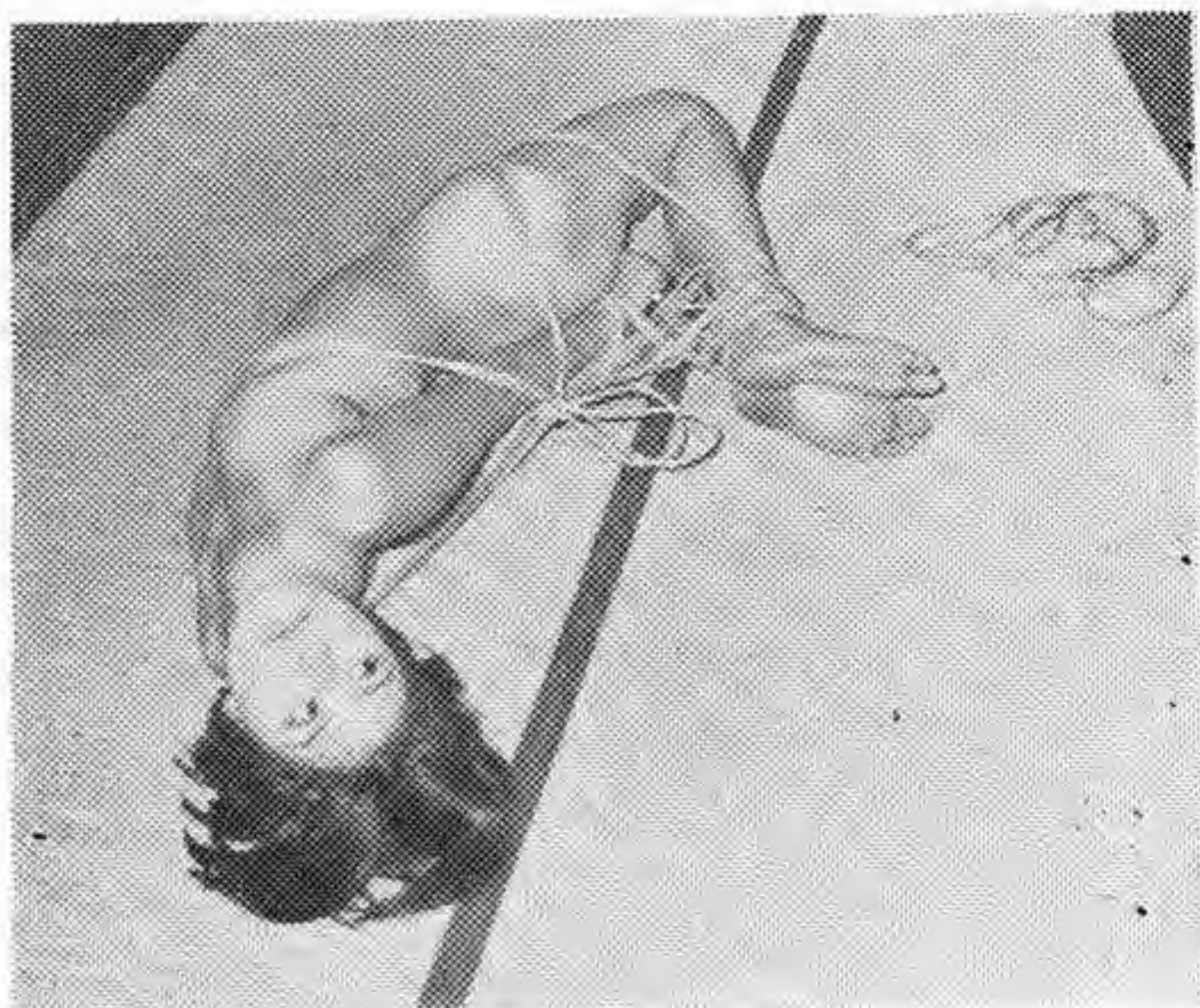
上り口から靴を脱げば、すぐ居間である。入口の扉と居間を遮蔽するように、藤色のカーテンが引かれてあった。

私の傍らによると、ケメ子はシューツとそのカーテンを一ぱいに引いた。

「余り何にもないんで驚いたでしょう。何もかも揃えるところまでゆかないの。やっと十日許り前、三面鏡を買いましたのよ」

若い女の独り世帯の、しっとりとした優雅さはあるが、成程、彼女自身卑下するように目ぼしい家財道具は乏しかった。

洋服ダンスと整理ダンスと水屋、チッポケなチャブ台。九吋テレビとトランジスタラジオが、整理ダンスの上に、西洋人形と一緒



大仰に彼女はふくよかな胸に手をやってみせた。いざとなると、何となく予防線を張りたくなったらしい。

「少し部屋があつたかくなったら始めよう」

それに応えず、私は事務的に声を冷めたくした。プレイというより、何か情事にふさわしいような部屋の雰囲気である。今私が野獣と化して、彼女を抱きしめようものなら、或いはナヨナヨと崩れてくるかも知れない彼女の心の傾斜をみた。それが又、この部屋の空気にもっとも似つかわしいノーマルな行為の結末のようにすら覚えたのだった。

「長田君のおいていったものあるの？」

「ええ、しまつてありますわ。出してきましようか」

「ああ、私も使つてみたいしね」

「オジサンも？」

いやネ、という表情で、彼女は押入を開くと、ハترون紙にくるんだ長い紙包みを取り出して、たたみにおいた。

「やはり、全部脱ぎますの？」

「そう願えたら有難いけど」

「細いよ、私——」

「それが又被虐めいている」

「チッポケよ。四十二、三キロしかないの。あんまり自分でも魅力ある方じゃないと思つています」

「そんなことはない。加賀まり子に似た、コケティッシュな、男心をそそるような魅力があるよ」

「アラ、お世辞うまいのね。でも裸じゃやはり少し寒いわ。一寸お湯浴びる間、待つて下さる？」

「いいとも」

瞬間湯沸器を通して、ちっぽけな湯槽にはすぐ湯がたまると、コックをひねってくる。彼女は奥のキッチンとの境いのカーテンを引いた。私は所在なく煙草をくゆらす。やがてこれから展開する筈の緊縛のプレイの数々を、私は熱い思いで、心に逞ましく描いていた。長田実が数回撮つて飼育してあるだけに、やり易い思いで、そうなるより高度の強烈なものが次々と浮んでくるのであった。

サーツとカーテンを引く音に、反射的に振り返ると、ケメ子が、真赤なバスタオル一枚を胸から巻きつけて佇立していた。

その時、いや正にその時である。扉がコトコト叩かれた。息を凝らしていると、続いて

又執拗に扉を叩く音が聞こえる。私はケメ子と無然とした表情で顔を見合す。

「マユミ……いないの、マユミちゃん」

二階の通路で、押し殺した女の声がしきりに彼女の名を呼んでいるではないか。

「誰？ だれなの？」

「あたし、ヨウコよ。お願い、ちょっと開けて……」

ケメ子は私の顔をみて、どうしようかと眼で問う。私は仕方なく顎をしゃくって、そつと部屋の隅へ位置を移した。

「ちょっと待ってね。今お湯浴びちゃって、バスタオル一枚きりなの、すぐ開けるわ」

バタバタとキッチンの房へ戻り、パンティの上にすぐガウンを引っ掛けて出てくると、彼女は扉を開いた。不意の闖入者にすっかり予定が狂ってしまいそうな予感が走った。

女同志のヒソヒソ話が扉を挟んで続いていた。話がついたのか、扉の閉まる音と共に、ケメ子は戻ってくる。

「どうしましょう。一軒おいて隣りの、親しいお友達の子なんだけど、弟が来たから、一晩だけ部屋を代って欲しいっていうの。あの人、狭いこれと同じ部屋で、三人一緒に暮しているの。一緒に職場の女の人許りだけど、

女三人と弟と四人寝られないっていうのよ」

「断わったの？」

「ええ、最初断わったんだけど、どうしてもっていうもんだから、つい……」

「仕方ないね。どうしよう」

イヤな予感は的中した。こうした職場の女同志、同病相憐れむ心理から、案外こんなことがあるものらしい。その女性のいう弟とい



うのが、本当の弟かどうか大いに疑がわしいが、彼氏とならホテルへでもゆくだろう。まあ信じるより仕方あるまい。

「ここを出て、阪急の庄内駅に向って歩くと百米程先に、S旅館というのがあるの。そこで先にいつて待ってて下さる？ 私支度してすぐゆきますから……。本当に御免なさいね。旅館代、私が払いますから」

ケメ子は急変で恐縮している様子だった。夜更けにノコノコついて来た私を、むげに追い返せなかったのだろう。

「今、あの人の部屋で、話してるそうですから、十分許りしたら、空けとくからっていつておいたの。そつと、人眼につかない様に行ってね」

それなら、最初から十三辺りのデラックスなホテルにすべきだったのだ。なまじアパートまでついて来た私の方がおろかだったかも知れない。幸いプレイの準備は何もしていなかった。カメラや縄や一切はまだ鞆にその俵だった。私は鞆と一緒に、ハトロンの紙包も咄嗟に持ってそつと逃げる様に、暗い通路に出た。足音を忍ばせ乍ら階段を降り切ると、彼女にいわれた通り、アパートを右に折れ、

ついで左折した道を直進して、駅前通とおぼしき、やや広い通りへ出ると、S旅館を探して歩いてゆく。旅館はすぐ分った。連れ込み専門らしい和風のしもたや風旅館で、玄関の植込みの奥から灯が洩れていた。まさかケメ子はすっぽかすこともあるまい。私は彼女の言葉を信じて、玄関の硝子戸を開いた。

遠廻りして、迂回して、やっと旅路の果てに辿りついたような、些さか味けない想いが私の脳裡を去来した。一人の若い娘を撮るために、私は午後からというものの、何かケメ子に引曳り廻されている様な思いに捉われた。

× × ×

ケメ子の緊縛の裸身が、今私の眼前にくねっている。

ダンダラの細目の縄が、ケメ子の上半身に犇と喰い込んでいた。もうかなりの閃光が、ケメ子の裸身に走っていた。

総てを観念したケメ子は、イザとなると非常に協力的であった。

首縄を胸で結んで二の腕を締め上げ、縄は細身の体に似ぬ豊かな乳房を挟んで、胴から腰へ、そして股縄となって、背後に廻っていた。

「どう、痛い？ 痛かったらいつてね、ゆる

めるから——」

「ウン、大丈夫。でも旅館へ来てよかったわ。やはり私のアパートじゃ落付かないわ。若しこんな姿の時、ヨウコさんが扉を叩いたら、本当にどうしようもなかったもの。何かゆっくりとしますわ」

それはケメ子の実感だったかも知れない。部屋には暖房が入っていたし、奥まったこの部屋は、人の足音もなかった。

ちっぽけな床の間の傍らで、彼女は股縛りの立姿を曝し、跼んで徐々に体を回転させていった。私の言いなりに彼女は動いた。

私がこの部屋に入って、女中が来た時、間もなく同伴者の来ることを告げ、茶と菓子運んで来て型通り床をのべて去っていったあと、まるで入れ換りの様に、彼女は息を弾ませて部屋に入ってきた。

「お待ちになったでしょう。脱ぎますわ、すぐ……」

自分でそういつて、ケメ子はスルスルと衣服を、布団の上に脱ぎ捨てた。足許が邪魔になるので、ケメ子の衣類ごと布団を二つ折りにして隅に押しやり、私も袍を開いてすぐ支度を始めた。

彼女は一糸纏わず、膝を崩して私の縄を待

っていた。

ヌードも初歩の縛りも飛ばして、最初から始めたのが、このかなり強烈な股縛りであった。縛り終るまで、ケメ子は一言も発せず、私のなすが俚になつていった。その協力的な態度が、私の胸にジーンときた。

可憐ないとおしさが、私の情念を熱くかき立てていった。この縛ったケメ子をぐいと力一杯抱きしめたい欲求にかられたが、辛うじてその想いを押さえ、私はカメラに専念していったのである。

「もう解こうか？」

「いえ、まだまだ構いませんわ」

縛られたケメ子はニツと微笑む。その微笑みに、被虐のかすかな欲喜が流れ始めていた。彼女自身、緊縛のプレイの開始によって徐々にMの感情を盛りあげつつある事を、私はこの言葉から感じた。

フト、気付いて、長田氏の小道具と称するハترون包みを解く。中から、四本の丸い棒と、黒色の、眼隠しにも猿轡にも使えそうな布、赤いクリスマス用のラセン状ローソク、それに五〇CCの浣腸器一本、ネッカチーフツンパなどが、雑多に包み込まれてあった。

とりあえず、私は黒布をとると、彼女の唇



を開かせて猿轡をはめた。可愛い未だ少女めいた歯並びが、黒布を噛んで、彼女は黒い瞳でジッと私を見守る。立膝のポーズで隠蔽させるとカメラが光り、私はハント用のフオートを数枚とる。彼女は決して露出を厭わない。在りの俣の姿を、在りの俣で撮られても、表情は変らなかつた。動作が続いて、股縄は陥没して、深くしめつけていた。私はケメ子の肩を抱くようにして、そっとタタミに仰向きに寝かせる。ポックリと双つの乳房がお腕を伏せたように盛り上って、先端が可愛い野イチゴのように、ぶつりと膨れていた。股縄がすれるのか、体重で圧迫される後手が痛む

のか、ケメ子はモジモジと腰を浮かして、しばらく態勢を整えて静止した。節食して痩せているそうであるが、白い肌の凝脂は若々しく、喰べ放題に喰べたなら、瞬く間に五キロぐらい肥えそうなタイプである。体は柔軟でカモシカのようにピチピチしていた。かなりの強烈なポーズにも堪えられる柔らかさであった。

撮り終ると、私はカメラを傍らに置き、無慚にもケメ子の仰向けの体を足蹴にして、ゴロリとうつ伏せに転がした。体がよじれて、彼女は軽い呻きと共に、縛られた両手指が空に躍って泳いだ。股縄がタタミに擦れて、尚

更に鋭敏な個所を刺激したのかも知れない。私のSの血はもう音を立てて騒ぎ始めていた。余り大きくない、少女の面影を残した臀部がピクピクとケイレンしている。私は一本の縄を握りしめるとそのうごめく臀部に、発止と一振り、縄鞭を振った。

「ウムムッ」

ぐぐつとのどがなり、鮮やかな眉間のタテじわが、刹那の苦痛の快樂を物語って激しく伸縮した。

「痛いかな？」

ケメ子は眼を閉じて、ゆるやかにコクリとうなずいた。少しゆるくぶってやろう。最初の一曳は少し力が入り過ぎたようだ。縄を短かく握り直すと、私はケメ子の臀部近くに片膝をついて、パチパチパチと、短く、手早く軽く打ちつづけた。

「フーン、フーン、あ！」

猿轡から発する呻きでなく、それは鼻腔の鳴る溜息まじりの快樂の哭き声に近かった。未熟の双丘は桃色に染まり始め、数条の紅の痕がくつきりと浮かび上って来た。私の縄が振りおろされる度に、愛らしきおしりはゆらゆらと揺れ、ケメ子の女体はくねっていた。

長田実がいつていた、被虐の実体を、私はありありと眼下にみた。十九才という、この青麦にも似た若い女体にも、M願望の潜在意識は確かにあったのだ。今その願望は、潜在意識の枠をはみ出して、まざまざと露呈しつつあるのだった。

私はかなりの縄鞭をふるったあと、矢庭にあらあらしく、女体を抱き起した。伏せたケ

メ子の頬は紅いに染まり、猿轡を外した唇は激しく喘いでいた。顔を近附けてゆくと、黒い瞳はシットリと濡れて閉じられた。甘酸っぱい口臭がじかに私の鼻孔をくすぐった。この唇を近附けても、恐らくケメ子は拒否しなかったに違いない。むしろ閉じた切なげな唇は、私のそれを待ち受けているかの様であった。この誘惑を押さえ切れたら、私は聖人であった。しかしやはり人並みの心の疼きが思わず、彼女の唇を貪婪にむさぼっていた。めくるめく一瞬、ヌルリと柔かい濡れた塊りが、私の口唇の奥をまさぐるかのようにすり込んで来た。

舌端が絡み合い、ケメ子の情熱が、その舌端ですべてを訴えていた。

唇を離すと、私はゆるゆるとケメ子の縄を解きほぐしてゆく。くっきりした縄跡が、彼女の二の腕に浮彫りのように赤く深くしみ込んでいた。ともすれば、この俣ずると崩れそうになる心を押さえて、私は次のプレイに掛る。最初の緊縛でくずれては、それでもう最後になってしまわないか。

「俯伏せになると、体がタタミにすれて少し痛いすわ」

そっと遠慮勝ちに、彼女は呟やくようにい

った。布団をしいたその上でプレイを行なうと、私の心に自信がなかった。そうでなくとも、傾こうとしている私に拍車をかけるようなものだ。私は辺りを見廻し、乱れ籠に折りたたんである湯上りタオルをもってくると、タタミに拡げた。これで少しはましだろう。

「いいね、つづけて……」

「ええ」

「じゃあ、ここへ伏せて体を伸ばして御覧」

云われた通り、タオルの上に彼女は俯伏して長く伸びた。ダラリと前に伸ばしていた両手をとると手首を背後で組んで両手を縛る。

ついで両脚首も別の縄で縛り上げると、二本の縄を握ってぐいぐい引っ張り始めた。両脚は膝で直角に上ったが、両手首を引っ張る縄の力を強めると、腕の附根が脱臼寸前までに屈折した。一度引き揚げた縄を離してみる。

ククククとケメ子のどが鳴った。

一対一のプレイだから、このポーズは誰も撮ってくれない。長尺レリーズをつけるのも面倒なので、軽便雲台にカメラを据えつけ、柱に挟み、距離を合しておいて自動シャッターにする。

「ケメ子ちゃん、腕だけ逆にねじ上げると、骨が危ないよ。瞬間に、顔も体毎ぐつとのけ

ぞるんだよ、いいね」

彼女は軽くなずいた。成程、要求するポーズには、何でも快く応じてくれる素直さがあった。

シャッターを押す。じじじとセルフタイマーの音がり始める。大急ぎでとって返し私は慌ただしく、力任せに両手首の縄を引き絞った。上半身を浮かせ、体をのけぞらせてあッあーと喘ぎ乍ら、ケメ子の息遣いは激しく、手首の縄を銀色に輝く爪が必死に攪んでいた。かすかにカチリと音がして、ストロボが光る。乳房が浮き上るまでに体をのけぞらせた、その柔軟さに私は一驚しながら手綱をゆるめ、そろそろと体を元に戻していった。

「よしッ。今度は、下半身を吊り上げるからね、もう一丁」

カメラ位置を少しずらせて、再びセットすると、私はかけ戻り、足縄をぐんと短く握って思い切り引き上げた。腰骨で下半身は屈曲し、膝下まで完全に浮き上がったところで閃光は一瞬またいた。

休む間もなく、両手、両足を縛った縄は、二つに連結されて、手首と足首が、臀部の辺りで縛り合わされる。余った縄は腿から腰、そして乳房をぐいと圧して縛ってゆく。縛る

過程に於て、否応なく私の指は彼女の腿から下腹部を這い廻り、乳房を撫でて通過していった。縛られること自体が快感を呼ぶのか、私の指をケメ子は気にもせず、案外ケロリとしていた。長田氏によって、もっと非道い、極刑が科せられていたのかも知れない。

「ケメ子ちゃんは素晴らしいよ」

何となく私は、お世辞でなく、ねぎらいの言葉代りに褒めていた。すべてが素晴らしい彼女なのだ。

「そう、辻村さんが、そういつてくれて嬉しいわ」

顔をねじって、ケメ子はニヤリと笑ってみせた。被虐のこの状態をさながら楽しんでいくかのような口吻であった。

「自分で横に体を倒して御覧よ」

私の言葉に、彼女は二つ三つ体に弾みをつけて、ウーンと声を出しながら横ざまに転がった。邪魔なタオルを素早く引つ剥ぎ、逆海老にのけぞったケメ子の女体を、こよなく美しいポーズだと、我を忘れて、あらゆる角度から、シャッターを押した。横転した俛、彼女は更に私の好みに協力するかのように、自力でのけぞって、体を弓形にそらせ、頭をぐいと仰向けていた。垂涎のポーズがそこにあっ

た。

私は足許にこぼしておいた短い縄をとり上げると、左手にカメラを持った俛、右手でむき出しの腿から腰の辺りを、パチパチ叩き出した。ケメ子はハアハアと息を弾ませ、声にならぬ喘ぎと呻きが、もう隠しようもなく愉悦となって洩れた。

「どうだ、痛いかな？ もっと強くぶってあげようか」

「ああ、もう少し強くても、ああッ」
のけぞらせた体を、更にのけぞらせ、のたうたせて、ケメ子の喘ぎは吐息と変って、う

っすらとにじむ眼尻に二本の横じわが走り、苦痛を甘受して、頬をしかめ乍ら、淫蕩の陰が流れた。

ソフトな鞭打ちを甘受して、愉悦に欣喜の涙を流すこの若き美女の悩ましいポーズは、私にとっては驚嘆に値した。ピンクスター辰巳典子も、谷ナオミも、その刹那の形相は演技であったが、ケメ子の場合、それは真実の欲びの相であった。巧みでの激しい受難の形相よりも、巧まぬ叫びが私の共感を呼び、昂奮と刺激をたかめていった。

相次いで、二度に亘る鞭打ちが、いつも緊縛のポーズのあと、私の手によって行なわれていた。

余りにも協力的なこの娘に私はいじらしい様な、切ない感懐に打たれ、ぐっと熱いもののこみ上げるのを覚え乍ら大急ぎで縄をといていった。

裸で打伏す彼女に、私はゴワゴワした旅館の浴衣をかぶせてやり、いたわる口調で「少し休もう。疲れただろう」と、優しく髪を撫でた。

「ええ、少し、でも私なら大



丈夫ですけど」

それは燃え上って来た、被虐の快楽を中断されるのを恐れる、彼女の本音ではなかったであろうか。

×

×

×

午前二時を過ぎると、流石に寝鎮まって、夜のしじまにヒソとの音も途絶え、唯時折、吹きすぎる早春の夜嵐がゴッとなり渡るのみであった。そして、私とケメ子は只管に、SとMの絡み合うプレイに耽溺していた。

既に彼女は被虐の欲びをむき出しにしていた。求めた私の唇が、舌が彼女の口に挿入された時、口腔がカラカラになって、幾度となく生唾をのみ込んでいたのが分った。そして私も又、のどの奥底まで唾液はひからびていた。強烈な刺激の連続が二人の唾液をすべて吸い上げてしまったようであった。

一体みするといっても、それは口実に過ぎなかった。煙草を吸う片手は、煙をなびかせながら彼女の頬を撫でさすり、這いまわり、自由な片手は彼女の胸へ伸びてまさぐっていた。若い媚態が裸身に溢れ、かすかににじんだ汗が、シャツ一枚の私の胸をしっとりぬらした。

「ケメ子ちゃんのようないい子は一寸珍らし

いよ。長田君は私にケメ子を紹介した。私はそのケメ子を更に紹介したい人があるんだ。あんたのような人を独占しておくのは勿体ない。きっとその人は喜ぶと思うんだ」

「誰に？」

物懶げにケメ子は私を振り仰ぐ。

「私以上に、ケメ子に快感と愉悅を与えてくれる人。勿論、長田氏もその人を知っていて私以上に尊敬もし、敬意を払っている人」

箕田氏のことを指しているのだが、分譲フトオトとして、マニアに発表するのは、彼の口から語って貰おう。私は唯、彼にケメ子を紹介するだけの労をとったかった。

「その人も矢張り……」

「ああ、もっと本格的で、オーソドックスだよ。私のようにカメラでズバリを狙わない。紳士だから」

「どんな人？」

「或る雑誌の編集長、あんたを有名にしてくれるかも知れない。話次第では——」

「私の心の秘密を知る人が段々ふえてくるのね。まるでタライ廻してみたいに」

「そんな意味じゃない。昭和元禄時代なんていわれる現在、こうしたプレイに耽溺する人が非常に多いということ。そして大体一様に

金と暇のある紳士であるということ。しかしまあ、ケメ子ちゃんがよかったらの話だよ。無理にとは言わない。長田氏も勿論、承認のことだ、それは」

「まあ、考えておくれ。次々で私、どうしていいか分らないもの」

「うん、考えておいてくれ給え。ところで、そろそろ始めようか」

「フフフ、辻村さんも好きねえ」

彼女はあでやかに笑って、パッと浴衣をはね上げた。

「そうだ、折角わざわざ持参したのだから、棒を使ってみよう。ね」

私は返事も待たず、独りうなずいて長田氏の棒をゾロゾロ取り出して来た。洋材で、型にはめて丸く削ったすべすべした丸棒はラワン材でもあろうか。

一本を腋から背に通しておいて、別の一本に両手を縛りつける。かなり念の入った縛り方で時間がかかる。棒の中心に縄を結んで、首から背へ掛け、二の腕で背後の棒をしかり止めて、両手を自由のきかない状態にする。と、私は黒布で眼隠した。棒を持って、そろそろ立たせると、狭い座敷内を、半ば体を抱くようにして二周させる。これはもうフオ

トから離れた完全なプレイであった。今、彼女は最早どの位置に居るのか分らない筈であった。両脚を一杯に広げさせてそっと壁に凭れさせた。よろよろとよろめく彼女をぐっと押さえ私は更にもう一本の丸棒を握ると、いたぶるように押し当てていった。呀っと爪先立ちになり彼女は避けようとしてゆらめく。執拗に私の棒は迫って行く。更にもう一本の残った棒をとり上げて、ぐいと乳房の下の棒によって持ち上げられた膨らみへ、私の力はその触点を凹ませて圧迫してゆく。

「あッ、あーッ」

呻きとも吐息ともつかぬ悶える声は黒布で半面を蔽われた、その紅唇から惜しげもなく洩れて、この棒責めに女体は妖しくゆらいでいた。

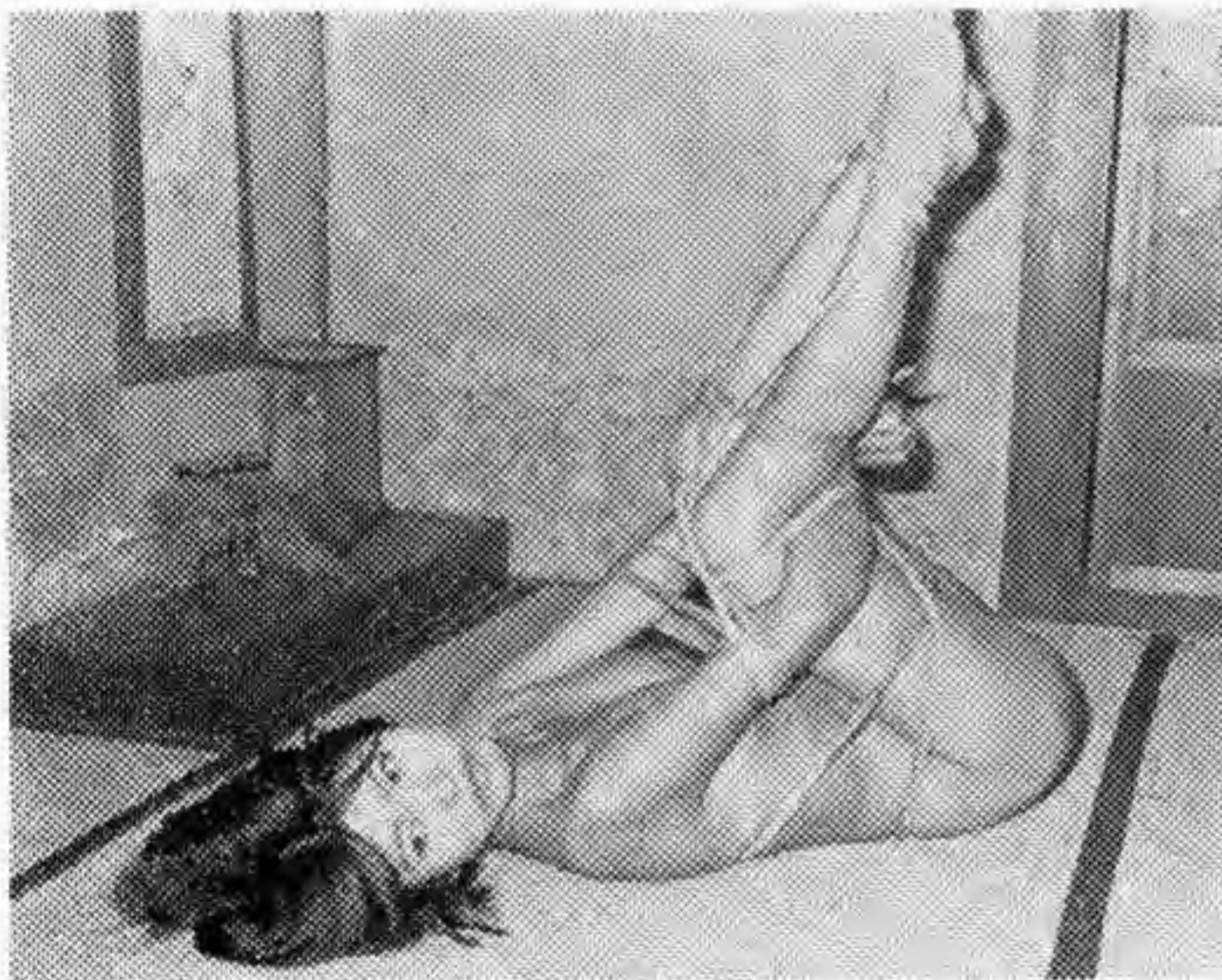
「あッ、もう止めて、倒れる。あッ」

ぐらぐらと揺れた裸身が、前のめりになって正に倒れんとした。私の棒の支えで辛うじて立っている状態であった。

私は眼隠しを解いてやると、息つく間もなく、噛み合せた猿轡へと黒布を変化させる。

膝立てのこの棒縛りの、女体の縄目へ、私の手にした丸棒はぐいぐいと容赦なく押し込まれて、乳房を圧迫させながら、ねじ廻しこ

ね廻した。銀色の爪がかすかにけいれんし、痛みには耐えかねて、始めてケメ子に苦悶の形相が走った。愉悦が疼痛と化す刹那、ケメ子の女体に鳥肌が立った。乳房を貫通した丸棒は、ケメ子の腿に分け入って直立して肌を遮二無二圧迫し、棒はぐるぐる廻った。私のSの心は止め度がなかった。二本の棒をX字に組み合せて、縄目の奥で交叉させたのである。



もうケメ子に喜悅の表情はなかった。猿轡をとくと、あーッ、ウウンという悲鳴に近い、精一杯苦痛をこらえた呻きが流れた。縄は犇と肌に喰い込み、胸から腹へと巻いて引き絞った縄は内股の交叉をビクともゆるがせなかった。これは最早棒縛りの極限であろうか。ギリギリと柔肌に喰い込むかたい棒の感触は苦痛以外の何ものでもなかったに違いない。

ネッカチーフで蔽われぬと、この絶景は発表出来なかった。ハント用のために心ならずも水玉のネッカチーフをかたち許りに腰に巻きつけ、今は苦悶の表情を変えようもない、ケメ子の赤裸々な極限のポーズを私はねらっていた。カメラを撮り終ってから邪魔物を外し足裏に出ている、交叉した棒の先端を握ってぐいと大きく広げようとした時、ケメ子はこの股裂きに似た責めに耐えかねて、始めて大きく絶叫した。

x x x

最後のお仕置が待っていた。私の手に、長田氏がおいていった50ccの浣腸器が握られている。ぐったりしたケメ子の両脚を高々とあげさせ、膝の裏で両手を組んで縛り、二の腕をしめ上げて、足首までかなり強く縛り上げていった。このポーズが浣腸に最もふさわし

く、よく観察出来るポーズであることを私は経験により知り覚えていた。

私はやや疲れ果てたケメ子の顔に、近々と口を寄せて囁くように告げる。

「長田は本当に液体を注入したの？」

「知らないッ」

それは、羞恥からくる言葉の激しさであった。長田氏の言を借りれば、彼女はクリスタールに対して激しい反応を示したといっていたのだった。私はこの眼でその反応を確かめたかった。

「何を浣腸したの？」

「……」

「何？」

「石鹸をとかしたお湯……」

彼女は眼をつぶって、やっと答える。

この旅館は共同風呂でバス付ではなかった。それがクリスタールに効果あるものと知ってはいたが現況では一寸むづかしい。私は冷水で我慢することにした。トイレに隣接する洗面所の硝子コップに、並々と水を入れてくると、ポンプに水を吸い上げる。DPEの経験からして、このコップ一杯の水は優に二〇〇ccぐらいは入ることを知っていた。

「あッ、冷たい。おなかが冷えちゃうわ」

彼女は可愛い声で叫んだ。しかしそれはクリスタール自体を拒否する言葉ではなかった。冷水の滴が双丘の裂け目を伝ってタタミにこぼれたが、殆んど余すところなく五〇ccは注入された。二回目、注入の刹那、ケメ子の表情は妖しくかぎり、微かなアクメに似た声が洩れた。憑かれた様に、三回、四回、予定通り、コップの液は底に僅か残って、二〇〇ccの冷水が、彼女の肉体の奥深く潜入していったのである。

「あーッ、あーあ」

太腿で圧迫された腹部の辺りで、めくるめくような微音が断続してなっていた。大きな喘ぎと共に、逆流した液体がタタミを大きく濡らした。彼女は果敢な抵抗を試みていた。未だに排泄を訴えず、両脚を屹立させた俤、眉間に深々とたてじわをつくってこらえにこらえていた。私の方が根負けして、遂に縄を解く。ぐっと腹部を両手で強く押さえて彼女はよろめく足どりでトイレに向った。ついてゆきたいのを必死にこらえて、私は耳をすました。激しい奔流の様な響きが、ありありと私の耳に伝わって来た。交って、うら蓋かしい羞恥音が間奏楽となって、排泄の合間になりわたった。

やっと戻ってきた彼女の顔は、やや蒼褪めてみえた。冷水が腹部を冷やしたのであろうか、しきりにケメ子は下腹を押さえていた。

「ここへ泊って行く？」

「私はその方がいいんだけど……」

「おなか痛いの？」

「ええ少し……気色悪い感じ。冷えたのかしら」

彼女は浴衣をそっと羽織ってしゃがんだ。

「辻村さんは？」

「泊りたいけど、そうも行かない」

「でも、もう午前三時前よ。車もないわ」

「泊ってゆけば、自分という人間に自信が持てないんだ」

「でも、帰れないでしょう」

「じゃあ、いいというの？」

「仕方ないでしょう。それとも未だ続ける」

「いや、いや、すっかり疲れた。もういいところだ。ケメ子ちゃん、本当によく協力してくれたね。有難う、それだけで充分なんだ」

「いいわ、私だって幾分自分なりに愉しんだのだから。でもあの約束忘れちゃいやよ」

「何だったけな」

「ザ・ダーツのメンバーを紹介してくれることよ」

「ああ、あのこと」

プレイが終われば、もうそんなことはどうでもよかったが、自称ケメ子こと、佐々木真弓にとっては重大関心事だった。

「ああ、約束するよ。だから私の紹介する人にも会って欲しいね」

「勿論、いいわよ。もうこうなれば何人会っても同じ様な気持ちになっちゃった」

× × ×

吐く息の白い朝霧の庄内駅に、私は独り立っている。遂に何もなかったことが、うら悲しいような、満ち足りぬ想いのきぬぎぬの別れであった。男にめざめて、矢張りその気になった時、

「辻村さんも、矢張り普通の男なのね」

と云われて愕然、急に味気なく心も体もしぼんでいったのだった。

「グループサウンズの誰でもいいわ、本当に紹介してくれたら許すわ。いつでも……」

と言質をとられて、ションボリ引き退った朝帰りの今。カメラ・ハントという目的は

果しながらも、私には一抹の心残りのあったことはいなめなかつた。

やがて初発が入ってこよう。

今頃、ケメ子は白河夜船で、ザ・ダーツの

総天然色美女緊縛極鮮明写真

柱縛り強烈ムチ打ち	三枚一組	略号△みあ▽	緊縛裸身を横たえる	左近麻里子	三枚一組	略号△なえ▽
関谷富佐子	三枚一組	略号△みこ▽	湖畔砂上の四つ相撲	大塚・東浦	六枚一組	略号△うに▽
臀部に炸裂するムチ	三枚一組	略号△みこ▽	大自然の中で取組む	大塚・東浦	六枚一組	略号△うひ▽
関谷富佐子	三枚一組	略号△みけ▽	吊りと投げの応酬	大塚・東浦	六枚一組	略号△うと▽
ムチにのけぞる女体	三枚一組	略号△みけ▽	砂まみれの大相撲	大塚・東浦	六枚一組	略号△うち▽
関谷富佐子	三枚一組	略号△みて▽	極彩色の刺青女体	山原・清子	三枚一組	略号△ゆき▽
苦悶する女の表情	三枚一組	略号△みて▽	華麗な刺青絵模様	山原・清子	三枚一組	略号△ゆこ▽
関谷富佐子	三枚一組	略号△みも▽	全裸の刺青女体	山原・清子	三枚一組	略号△ゆし▽
鞭に泣く美貌の女	三枚一組	略号△みも▽	刺青女体の奔放姿態	山原・清子	三枚一組	略号△ゆた▽
関谷富佐子	三枚一組	略号△みひ▽	三面鏡に映す刺青肌	山原・清子	三枚一組	略号△ゆて▽
転がり回って泣く女	三枚一組	略号△みひ▽	化粧中の全裸刺青女	山原・清子	三枚一組	略号△ゆそ▽
関谷富佐子	三枚一組	略号△なめ▽	刺青の豊胸をさらす	山原・清子	三枚一組	略号△ゆち▽
高手小手の全裸身	三枚一組	略号△なめ▽	大鏡に写す刺青全裸	山原・清子	三枚一組	略号△ゆと▽
中河 恵子	三枚一組	略号△なめ▽	刺青女性前面の魅力	山原・清子	三枚一組	略号△ゆせ▽
豆紋りに輝く美貌	三枚一組	略号△なめ▽	刺青女性性の全貌を曝く	山原・清子	三枚一組	略号△ゆさ▽
中河 恵子	三枚一組	略号△なめ▽				
赤い絨氈に悶える	三枚一組	略号△なめ▽				
中河 恵子	三枚一組	略号△なめ▽				
豊満な臀部を晒す	三枚一組	略号△なし▽				
中河 恵子	三枚一組	略号△なし▽				
美しき緊縛の立像	三枚一組	略号△なし▽				
左近麻里子	三枚一組	略号△なし▽				
転落寸前の緊縛女体	三枚一組	略号△なし▽				
左近麻里子	三枚一組	略号△なし▽				
椅子に羞らう美女	三枚一組	略号△なし▽				
左近麻里子	三枚一組	略号△なし▽				

仰いでいた。

を、私はショボショボした寝不足の眼で振り

えられた思いで、茜色に染まって行く東の空



——私の異常体験告白——

続・スカタロジーに憑かれて

津 川 博

イ 楽屋ばなし

陳平氏との、対談記録のテープを、今一度聞きながら、前回の続きを書く。会社の休みが続いているので、ずーっと飲み放し。いえ神酒の方ではありません。本物の方です。ですから、いささか酔顔朦朧、余り冴えたペンの運び方ではない。

今、チビッ子共は千葉の田舎に行っていて夫婦二人っ切りの毎日。このところ、プレイの方も大っぴらで、なに気がねすることなく妻から神酒を戴く。

以前ですと、特製の座布団を頭の下に置いて、妻を顔の上に跨らせ、少量ずつ排泄させていたのだが、今日この頃はもっぱらトイレを利用してゐる。

こうだと、妻は安心して排泄の爽快感が味わえるからで、そのかわり、全量拝受と云うわけにはいかない。相当にこぼれあふれるからだ。現在、妻は三十二才、まさに女盛り。汲めども、汲めども尽きぬ泉をもった、資本家？とも云えようか。

この原稿をしたためているそばで、妻がトイレに立つ。でも、私はついて行かない。今は欲しくないからだ。何故って？だって、ビールで満たされた妻の泉の味にはなんの魅

力を感じないからだ。その理由については、陳平先生との対談の中にひよこひよこ飛び出してくるから、それまで待つて欲しい。

立川談志が、テレビ「笑点」の中で、またテレビ演芸場で、野末陳平の参議員立候補云々を時折りほめかす。また巷でも、もっぱらの噂である。本当であるなら、是非、陳平氏を、汚職と悪政腐敗に渦巻く国会に新風を吹きこむ意味で送り入れたいものだと思う。

神酒提供者の、S氏の奥さんが顔を出す。何かの挨拶だろう。また、大いに飲ませてもらおう。やけに腹が大きく目立つ。六月には生れるそうだ。前回には書かなかったけれど

一度だけ、この可愛い奥さんから、神酒ではなく、大きい方を、マッチ箱に小指の大きさ程もらったことがある。

どう云う方法で？ いやごく簡単である。

例のやり口で神酒を戴いた次の日、

「奥さん、研究所の友人が心配して云ってただけど、昨日戴いたあの尿の中に、ごく微量だけど、お腹の中にいる胎児の發育に影響をもたらす異物があつたそうですよ。まあ心配はないと思うけど、研究所の友人がね、奥さんの便を、内密で検査してあげるって云ってるんですよ。僕、今日彼の所へ参りますから、マッチ箱にでも、便を取って入れて置いて下さい。よく紙に包んでね」

と、こう切り出すわけ。

胎児の發育云々てえのが味噌で、奥さんびっくりして、

「あら、本当？ じゃお願いするわ」

ってことで、少量ではあつたけれど、いたって健康な彼女の塊りを見事味わつた次第。

さてさて、楽屋ばなしはこれ位に止めて置いて、陳平氏との対談の第二回、いよいよ後半に突入することにしよう。

口 対談再開

陳平「なにさ、あんたの奥さんてえのは、お隣りからもらったの？」

津川「もらったって云うより、仕方なく寄せたってとこですがね」

陳平「へえー、じゃ、お隣りでは余り乗り気ではなかったの？」

津川「ぜんぜん。なにせ、彼女には、親の決めた縁談もあつたし、また、この私って男が、当時、相当のあばずれで、喧嘩はする、大酒を飲む、しかもその上、生活力がない。唯一つの魅力と云えば、鼻が大きいだけ」

陳平「わかる、わかる。わっはっははは」

津川「でもね、彼女とは、へんにうまが合いましたね。私ってほら、東京育ちでしょ、しかも三枚目でユーモアがある。もち前の強引さで、なんとなく愛し合うようになったていました」

陳平「じゃ、肉体関係までいっちゃったわけ」

津川「いやいや、その点は潔白でした。そのかわり、いいものをチョイチョイ、内緒でもらっていた」

陳平「ああ、例のやつか、大きい方？ それとも、シヨンの方？」

津川「残念ながら、その頃はまだまだそこ

までにはいたらなかった」

陳平「じゃ、なにをもらったの？」

津川「鼻紙ですよ。彼女のかんだやつ、あれを毎日の様に、彼女にはわからないように戴いてた」

陳平「心から愛する彼女のかんだものならちっとも汚ない、なんて思ってもみなかったわけだ」

津川「まあ、そう云う心境でしたね。その頃の彼女、鼻が悪くてね。農家の暇なのは、正月から、二月にかけてだけど、その頃はする事がないから、よく部屋の中で裁縫なんかしている。そんな時に、ちよくちよく鼻をかむんだから、いとも簡単に手に入る」

陳平「彼女に、わからなかったの？」

津川「当時は知らなかったらしい。結婚して、しばらくたってから、私の性癖がだんだん分かってきて、ようやく知った。あの頃、よく鼻をかんだのに、屑簞の中味を捨てようとする、自分のかんだ鼻紙が全然ない。おかしい、おかしいと思っていたけど、まさか捨てるそばから、あんたが拾っていたようとは考えてもみなかったって、笑って云ってましたかね」

陳平「そりゃそうだろう。で、その頃、も

う他の女の人の、飲んだり食べたりはなかったの？」

津川「いやいや、ありましたよ。すぐ近所に、惣兵衛本家って家がありまして、田舎じや、そう云う家号で呼ぶんです。その本家に静子って、ものすごく可愛い、いわゆる私好みの女の子がおりましてね。そう、当時十七才位だったと思いますが、とてもおとなしい性質の子で、そう、女優で云うと、佐久間良子型って感じで、ぐっとチャームिंगな子でした」

陳平「その女の子の食べたの？」

津川「ええ、二回程でしたがね」

陳平「どうやって手に入れたの？ 本人が呉れたわけじゃねえだろ？」

津川「そりゃそうですよ。ずいぶん苦労した。ほら、田舎では、稲刈り時とか、芋掘りシーズンになると、手が足りなくなってお互いに手伝いにいくでしょ。あれ、助けにくって俗に云うんですが、私も、その本家によく助けにいった。静子ちゃんのを食べたい一心でね。農家は朝が早い。だいたい五時頃から仕事に掛かる。その目指すお静ちゃんも朝早くから、ワラを束ねたり、お勝手を手伝ったりして、働いている。ほら、田舎の便所

ってえのは表にあるでしょ、牛小屋の裏手の方にある。それも、都会なんかと違って、実に粗末に出来ている。こう、板が二枚渡してあって底も浅い。ちょいちょい肥料に使うから底が浅いのかも知れない。例の、川合由美ちゃん方式を取り入れて、新聞紙を使ったんだけど、お静ちゃんの入る前にばあ様が入っちゃったり、彼女の入ったあとに、他の者が入っちゃってかんじんのお静ちゃんのお宝の上に、よその奴が、カレーみたいになっぴりかかっちゃって、なかなかうまくいかない。この時の気持ちで、口には云えない程実に口惜しい。もう、そんな時は仕事なんか手に付かない」

陳平「うん、わかるわかる。ずいぶん苦労したわけだ」

津川「三週間目位だったかな、もう手伝いがそろそろ終りに近づいたって頃、この時はうまくいった」

陳平「めざす彼女のものが手に入ったの」

津川「ええ、だいたい。お静ちゃんがトイレに入るのはいつも六時頃なんです。入ってから出るまで、五分位かかる時は大きい方なんです。この時も五分位かかった。彼女のあとに他の者に入られちゃ大変だから、腹が

痛い振りをして、戸口のそばで、腹を押さえて待っていた。内心じゃ、もううれしくてうれしくて、いよいよ待望のお静ちゃんのが食べられると思ひ心臓はドッキンドッキンでした。やがて、お静ちゃんが出てきた。私の顔をみてポツと頬つぺたを赤くしている。いやあ、お腹がものすごく痛くなってね、そうお静ちゃんに弁解しながら急いでトイレに飛び込んだ。ありましたね。内緒でしいておいした新聞紙の上に、こんもりと健康色のお静ちゃんの排泄したお宝が、こう、ふわーっと湯気を立てて光っている。もう夢中で口ん中へはおぼった」

陳平「味は、どうだったの？ 臭くなかった？」

津川「臭いなんて、ちっとも思わないし感じない。ものすごくうまい。そんな時、おでんの味がした。ははあ、前の晩、オデン食べたな？ なんて思った」

陳平「食べないと全然昂奮しないの？」

津川「匂いだけじゃね。こう、口にふくんで、舌先でころがして、始めてエレクトシちゃう」

陳平「オナラなんかどうなの？」

津川「ありやいけない、臭くって臭くって」

陳平「へえ、ところであんた、女郎屋なんかによく行った？」

津川「ええ、よく行きましたね。新小岩の丸軒って花柳界なんか、軒並荒して歩いた。その小岩で遊んだ女郎に、梅ちゃんと云う女がいた。この女は忘れられない」

陳平「よく飲ませてもらったから？」

津川「ええ、よく飲ませてくれたり、食べさせて呉れた」

陳平「その女、あんたの好みに合っていたわけだ」

津川「そう、生れは山形だって云ってました。色が白くて、可愛いくて、私がいつ行くからって指定して置くと、ちゃんと昼頃、おそば食べて待っている」

陳平「なんだい、その、ソバ食べて待つてえのは？」

津川「オシヨンを飲む場合、日本ソバの味の濃いのか、中華の味の濃いのか、これを食べたあとで出るオシヨン、あれが一番いい味している。ものすごくおいしい」

陳平「へーえ、食べたもの、飲んだもの、それによって味が変わるわけ？」

津川「奇ク、なんか読むと、よく、ビールを相手に飲ませてそれをもらう話が出てくる

けど、ビールを飲んだあとに排泄されるオシヨンは、一番味が悪い。私はきらいですね」

陳平「そうかねえ。そりゃあ知らなかったな、ビールのは駄目ってえわけだ」

津川「どうしてかって云うと、ビールの中に含まれている成分が、みんな身体の中に吸収されちまって水分だけしか排泄されない。いく分か、麦の匂いはすつけどね、ともかく味が悪い。それとさ、やたらと薬を飲んでいゝる女の人のも駄目ですね」

陳平「薬って、どんなの？」

津川「ほら、よくテレビでCMやってるでしょ。リポビタミンDとか、ビタミンを多量に含んだ栄養剤や液体、あれ飲んでる人のをうっかりもらうと、ひでえ目に逢う。良い成分は細胞に入っちゃって、毒素の部分だけこっちが飲むことになる」

陳平「あっ成程、そうか。へえー、だからやたらと飲めないわけだ」

津川「だから、最高にいい味は、さっきも云ったように、おそばを食ったあととか、ジュースにおせんべなんか食べたあと出る奴、これはいい味ですね」

陳平「ジュースにおせんべ、……そうかねえー」

津川「そうそう、こんな事が前にあった。これは、川崎の南町の新地にいたパン助だったんだけど、てんでいい顔していて、あたしの好くタイプにぴったり。身体も小柄で中細で、例によって、顔の上に跨らせた。いよいよ、大きい方が出る段になって、ひょいとは何気なく眼をあげたら、彼女のオシリのすぐ脇にちっこいオデキがあった。これを見たらもういけない、ぜんぜん慾望がなくなっちゃった！」

陳平「ああ成程ね。オデキ見て、嫌悪感が出てきちゃったわけだ」

津川「こうなると、もう見るのもいや。おい、いらなくなったからどいて呉れてお尻叩いたら、怒ったね。もう出ちゃうのよーって云うんだ。したけりや便所へ行け、って云ったら、奴さん、あわてて、尻を押さえ押さえ、廊下を駆けてった」

陳平「こりゃいいや」(大爆笑)

津川「奇クの、読者通信のページ見ると、よく出てんでしょ。二十才位から、四十才位までの女性の方に願う。是非、私を奴隷として、責めさいなみ、人間便器として生涯使って欲しい、なんてえのが。ああ云うのは、私に云わせると、病的マゾですね。明るさがな

い」

陳平「うん、わかるな、なんとなく陰気に感じるもん。女なら、誰れのもいいいてえのはプレイになんねえよ」

津川「今までの経験では、たいていの場合これは、と思った女性から、必ず飲ませてもらってますね」

陳平「ふーん、やっぱり、なんてのかな、あんたのもつ、明るい三枚目的な性格と、たくみな話術、そう云うもんが、相手をしびれさせるのかなあ」

津川「そうですね。雰囲気作りがむづかしいと思いますね。相手に、へんに警戒心や、嫌悪感、女性特有の羞恥心、そう云ったものをもたせない様、一種独特のふんわかしした甘いムード作り、ちょっとむづかしいことなんだけど」

陳平「ところで、あんたの奥さん、いつごろから、その、飲んだり食べたりに理解するようになったの？」

津川「そう、結婚してから、二年目位からかな、よく覚えてないけど」

陳平「最初の頃、相当に抵抗あったの？」

津川「あったなんてもんじゃない。オシッコが欲しい、飲みたいって云ったら、もうす

っかり驚いちゃって、そんなもの飲んだら死んじゃうわよって、全然相手にしなかった」

陳平「そうだろうな。当りめえの人間だったら、オシッコなんて飲むもんじゃねえ、ってしつけられてっからな、そりゃ、驚くよ」

津川「ともかく、何カ月も掛けて毎日お願いした。奇クなんかのSM小説も読ませたけど、全然信用しない。こんなの作り話だ、って決めつけちゃう。そんなとき、つくづく思いましたね、他人のはうまく手に入って飲めるのに、なんで、てめえの女房のが飲めねえのか、こんな馬鹿な話ってあるかって、毎日しよぶくれていた」

陳平「そうだろうな、一番大好きな奥さんと一緒に住んでいて、そのかあちゃんのが飲めない。ふーん、ずいぶん辛かったろうな」

津川「そう、半年位、くどいていたら、女房の奴、だんだん俺の気持ちに分る様になってきて、最初に、コップの中に半分位オシッコを呉れた」

陳平「ふーん、で、そんな時はうれしかったろ？」

津川「うん、てんでうれしかった。でも、味が最低に悪かった」

陳平「おやおや、味が悪いって？」

津川「うん、始めてもらったのは朝方だったけど、前の晩、女房のやつギョーザ食べてやがって、てんでニンニクが匂っちゃって、ありやまずい」

陳平「あっそうか、あれ臭いもんな」

津川「一たん敵地？を崩せば、あとはずるずる。コップが一ぱいになり、やがて直接法になり、出し方も、飲ませ方も、今じゃ、プロ級？」

陳平「あんたの顔の上に坐らせて飲ませるの？」

津川「そう、たいていはそう云う方法を取ります。今じゃ、女房たいへんに止め方がうまい」

陳平「なんだい、その止め方でえのは」

津川「女性の場合、男と違って、尿道が短いから、いったん排泄感が起こると、我慢が出来ない。それと、男の場合は、小出しが可能だけど、女の場合は、まず、途中で止められない。だけど、うちのやつ、止め方が実にうまい。男の場合でもそうだけど、排泄の中途でぱっと止めようとすると激しく痛みを感ぜらる。とくに女性は相当に尿道に痛みを感じるらしい。だけど、女房のやつ、それが平気なんですよ」

陳平「しかし、生理的には、気分はよくねえだろうな」

津川「そりゃそうだ。あの排泄の爽快感てえのは、ぱーっと放尿するところに魅力がある。だけど、それやったら、部屋ん中びしょびしょになっちゃう」

陳平「奥さん、そんなに止め方うまい？」

津川「こう、口を開けて待ってる。シャーッて口に入る。溢れそうになったら、私がポンと女房の尻を叩く。ぱっと止る。飲み込んだら、又叩く。するとまたシャーッと出す。ポンでシャー、ポンシャーってやつだ」

陳平「へえー、うまくやるもんだね。じゃ全部、飲んじゃうの？」

津川「もちろん。ゲップが出る位、一度に二、三合飲むかなあ」

陳平「ほう、すごいスタミナだ。それ、みんな栄養になっちゃうの？」

津川「その点は分かんない。でも、過去、現在、一度も身体こわしたことはない。至って健康です」

陳平「例の、アパートの奥さん以外の女の人から、ちょいちょい、もらってんの？」

津川「無論。私ね、よく競輪場へ行くんですよ」

陳平「ほう、あれ好きなの？」

津川「競輪に興味があるわけじゃない。例の物が食べたくてハントに行くんですよ」

陳平「へえー、競輪場でね？ そんなチャンスに逢うことあるの？」

津川「それが、あるから行く。しかし、唯漠然と歩いたってチャンスはない。ほら、最近は、いわゆるギャンブルブームで、若い女性も賭ごとに熱中する様になってるでしょ」

陳平「うん、たしかに多いね。しかし、ほとんどアベックで来てるな」

津川「アベックだってこっちはちっとも構わない。でも、なるべくなら、独りで来ている女を狙う」

陳平「どうやって当りつけんの？」

津川「競輪場なんか居る女のタイプは、余んまりおしとやかな淑女はいない。どっちかと云うと、派手な身なりで虚栄心に満ちていて慾望の固まりみたいなのが多い、案外と水商売風が多いですね」

陳平「うん、そうだな。穴狙い専門だろ？」

津川「うん、全部ってわけじゃないが、一応みた限りでは穴党ですね。でね、もう私の場合は、十一時頃から入場しちゃって私の好みの相手を見付けれるですよ。意外と美人が

いますね。この前の京王閣でもそうだった。バーに居るらしく身なりがどことなく仇っぱい。だけど眼がとってもきれいだった。中肉中背で、足も細っそり。私、この女に眼を付けた」

陳平「ふーん、狙いが定まったわけだな」

津川「ずーっと一レースから、その女の様子を窺っていた。女の人って、たいていバラ買い専門ですね。この女もそうだった、本命をけとばして、穴専門買っている。一回に五百円位ずつ買っていたけど、六レースまで、一つも取れない、それでも平然としている。でも内心じゃ恐らくムシヤクシャしていて、誰も見てなかったら、その辺に落ちてる空缶をけとばしたかも知れない」

陳平「ふふ、女の心理って、表面見たんじや分かんねえものな。で？」

津川「結局、八レースまで突込んで六千円位取られた様子なんだ。頃はよし、とみまして、そっと近づいた。おねえさん、如何でした？ 儲けましたか、うていきなり小声で聞いたら、ジロツと警戒心もあらわに私を見る。でも、こっちはきちっとしたスタイルで一見紳士風だから返事はあった。だめなの、一レースも取れないの。貴女、穴ばっかし買っ

るからでしょ。僕は今のレースで二万円程儲けさせてもらいましたよ。あら、すごいわ、じゃ特券でお買いになったの？ ええ、このレースは銀行レースって云う固いやつですからね。って、さも余裕たっぷり云うところを見せるわけです」

陳平「ふーん、で、どうなったの、それから？」

津川「ここからがむづかしい。それからおもむろに交渉にかかる。お互いに名前も、住所も明かさずに此の場合限りってこと約束して是非、私に運をつかませて欲しいって云うんです。礼金は五千円、そう云うと、あら、なんのこと、運をつかませるって？ まずは、けげんそうな顔をする。いやね、僕はいつも変な汚ない話で申訳けないんだが、レースに来る前に、家で女房の奴のウンを、あれをねそっとさわっていつも来るんですよ。まあ一種のマジナイですね。縁起をかつぐって奴です。するとたいいてい損をしない。ところが今日は実はそれやって来なかった。だもんだから、今のレースは取ったけどさっきから取られっ放なし。もう六万位損をしてるんですよ。そこで是非、貴女にお願いするわけなんです。奇妙なお願いで本当に申訳けないんで

すが、貴女のウンを、紙に包んで私に戴けないでしょうか。お礼としては、五千円差上げます、って、こう云うわけです」

陳平「へえ、うまくもってくもんだね。で彼女なんて返事した？」

津川「なかなかウンって云わない。普通だったら、この変態！ とか、いやよ！ とか一ぺんに拒絶されるのが当り前。でもね、こう云う競輪場内での、異常な雰囲気と、たくさんお金を取られていると云うくそ面白くない心理状態の中では、不思議と、嫌悪感が出て来ないんですね。それと、この場合限り、つてのが受けるんだ。しかも、紙にくるんで持ってくれば五千円。まあ、何度か頭を下げるうちに彼女、承知した」

陳平「彼女、若いの？」

津川「そんなに若くなかった。でも二十七ってとこかな。この話にはおまけがあるんですよ。首尾よく彼女のウンを戴いて、それをトイレの中で充分味わいましたね。そうしたら最終レースで本当に儲けちゃった。本命が消えて対抗と穴選手が入って、三千四百円の配当。特券だったから、三万四千円程儲けたんですが、帰りに出口の所で彼女に逢っちゃった」

陳平「おやおや、まだいたの」

津川「私からもらった五千円で勝負したらいい。でもきれいに取られた。私の誘いでホテルに行ったんですよ」

陳平「金の魅力ってやつだな」

津川「一万円あげました。でも、うんといプレイが出来た。これは本当によろくだね」

陳平「ところでさ、ずいぶん色んな、変わった面白い経験談をきいたけど、なんかその一特別に変わった、とっときの経験てえのない？」

津川「うーん、実はある。あるけど、このまんま録音されちゃうと、もし、もし本人がなにかの縁でこれ知ったら困っちゃうんだ」

陳平「いや、大丈夫だよ。録音しなきゃいいんだろ。それ聞かせてよ」

津川「じゃ、話そう。陳平さん、日活の清純派女優の、浅〇ル〇子って知ってるでしょ」

陳平「ああ知ってる、あれはいいね。俺も好きだよ」

津川「テレビで、この間まで『絶唱』ってのやってたけど、あれ最初は、日活で、彼女と小林アキラがコンビでとったんですよ」

陳平「あ、そう。そりゃ知らなかったな」

津川「あの『絶唱』のロケーションが中部

地方の、木曾山脈を中心に沿って行なわれたんですが、私、ほんとに偶然のチャンスで、ほら、名古屋から出ている中央本線の中津川駅の先に、福島って駅あるでしょ」

陳平「知らねえな、あっちの方にも、福島なんて駅あるの？」

津川「あります。その福島って町に扇屋と云う宿がある。あの宿屋で、浅〇ル〇子たちと一緒にあった」

陳平「へえー、どうして一緒にあったの？」

津川「私、釣りが好きでしてね、中津川にいる友人に誘われてその頃そっちへ行っていた。どうせ泊るんなら情緒のある山に近い宿がいいってわけで、この扇屋を選んだ。聞いてみたら浅〇ちゃんが同宿してると云う、さあ、それ知ったら、もうその女優さんが食べたくなった。どうしたら食べることが出来べえかと、その時、夢中になって考えた」

陳平「ふーん、それで」

津川「その宿屋のお便所と云うのが昔風で汲み取り式になっている。ロケハンの連中はほとんどが二階。彼女とお付きの女達は、一階の離れを使っていたんですが、そこで、一大決心をした」

陳平「なにさ、一大決心って？」

津川「その離れの便所の中へ飛び込むことにした」

陳平「そりゃまた、すげえこと思いついたな、便壺の中へ潜ったわけだ」

津川「次の日の朝、ロケ隊は出発するってこと聞いていたから、前の晩の夜中に、こうすっかり身仕度しましてね、釣りに行くスタイルをしたんですよ。合羽着込んで、長靴もって、その離れのお便所の壺の中にもぐり込んだ。田舎のキンカクシって意外と大きい。いとも簡単に潜入できた。いや、ものすごく臭い、汚なかったけど平気だった」

陳平「ずーっと、朝まで、潜っていたわけだ」

津川「ええ、でね、朝方近く、二回程、お付きの女の子たちが入ってきた」

陳平「よく見つからなかったね、上から、浴びせられたんだろ」

津川「ええ、オションだったけど別に汚ないなんて思わなかった。中は暗いんですよ。便所の電気ってうす明りでしょ、そこへもってきて便壺が深い。だから分かんなかった」

陳平「それで、めざす、浅〇ル〇子ちゃんが入ってきたの？」

津川「時間はよく覚えていないけど、朝飯がすんでからだと思う。バタバタバタって草履の音が静かに聞こえて、ギーンって扉を開けて、さっと便器をだれかが跨いだ。そっと見上げたら、ル〇子ちゃんだった。その時は飛びあがる程うれしかった」

陳平「下をのぞかなかった？」

津川「もし、のぞいたらアウト。警察に完全に突き出される。本当にウンが良かった」

陳平「あっはっはは、そりゃいいや」

津川「なんか読んでいるんですよ、あれ台本でした。こう、一心に見ながら力んでるお尻がてんで可愛い。そのアヌスから、だんだん黄茶がかった例のものが少しずつ出てきた。吸い付きたい気持を一生懸命押さえて我慢してた。ポタッと私の手の上に彼女のウンが落ちた。もう夢中で、そのぽっかり暖かい物を口に頬ばった。相当の量だったけど、味は普通の女の人のと変らない。最後にションを浴びて飲んだけど、これはビールの味だった」

陳平「へえー、すごい体験だね。で、とうとう最後まで見つかなかったの？」

津川「ええ、でね、彼女が出て、一時間位してから、合羽を壺の中へ捨てて、そっと這

い上って部屋に帰ってきた。急いで朝風呂に飛び込んだ。だけど、半日位、友達の奴、臭えな臭えなって云うんですよ」

陳平「そりゃそうだろ。一晚中、便所の壺の中に漬ってりゃ、匂うのは当り前だ。でもあんたって、すげえ経験をしてんだな いや まったく驚ろいた」

津川「そうですね。まあ、あとにも先にも現役の清純女優のものをたっぷり食べたのは日本では私一人位なもんでしょうね」

陳平「うーん、参った、恐れ入りました。いや、今夜は長々と本当に有難とう、実に参考になりました。今度さ、おれ、そう云う趣味もった女の子めつけたら、あんたに紹介するよ」

津川「ええ、是非お願いします」

対談が終ってから、アサヒ芸能社の企画部長、布留川氏から、別冊問題小説十月号を戴く。梶山季之氏の作品『コーポラスの恐怖』が出てゐるからだ。梶山さんの作品には、いつも、マゾヒストとか、サディストが登場する。この『コーポラス……』は完全なマゾヒストを扱った内容で、外人の食糞狂の話で満ちている。

謝礼を戴いたので、バー「SM」へ行く。

つい最近、新橋に誕生したのを知ったからだ。有楽町寄りの改札口を出て烏森方面へ向かう。柳通りをずっと左に向かって歩いてゆくと、左側が材木店、右角がカメラ店、ここを右折すると、めざすバー「SM」がある。

仲々、洒落た造りで、カウンターの片隅に山と奇譚クラブが積まれてある。美しく光沢がかった鞭がカウンターに飾られ、それがひと際、印象的に眼にうつる。

SMのわかる美女が一ぱいとCMにはうたってあったが、さほど、私の好みに合うホステスはいない。

だが、マダムはまさに絶品、妖艶で、色っぽくて、上品で優雅で、全体に細っそりとしていて、渋い和服がよく映える。年は、三十四、五と見たが、マダムの性格は徹底したサディストだそうである。

床に突っ伏す男性を思い切り鞭で打ちのめすのが最高の悦楽とのこと。そこに生きがいを見出すそうで、こんな美しいマダム相手ならだれでも屈伏することだろう。

メニューもきちんと掲示してあり誠に良心的だ。色々とマダムにたずねた。

結構、遠方からも来店するそうで、最初は

羞かしがって仲々、扉を押して入る勇氣がないとのこと。

「SM」バーとしては、非常に感じよく、明るい。ビールを七本飲んで三千円。新橋近辺のバーとしては安い方である。

帰り際、マダムに向かって、

「僕、マダムのが飲みたいなの？」
って云ったら、にっこりとマダムは微笑してくれた。

どうやら希望が持てそうである。

この次は是非、このマダムのオションを飲ませてもらうつもりだ。できれば、一晚中でも、この優雅な、サディストの絶品中の絶品といえるマダムの便器になって、大きい方も戴きたいものだ。

まだまだ書きたいことは沢山残っている。わが妻のSM教育法？とか、ある駅のトイレで、いつも戴く、通勤の可愛い女の子の話。ある人妻との甘美なプレイの数々等々。それは次回にゆずる事にしよう。

私の好みにぴったり、こんの美しい女王様の出現を楽しみに待ちながら、今回はこれで閉幕としよう。

(おわり)

懸賞「告白、手記、体験」入選作品発表

S

と

M

と

夢

野

洋



私は同性に対する被虐願望と異性に対する加虐願望があります。SとMとが同居しているのですが、どうしても此のような性格になったのでしょうか。美しい女性を見ると、全てを奪って加虐したいと想い、一方男性には、全てを与えて責められたいと願う有様です。私の女性に対する加虐願望は、私が女性であつたら、此のようにして責めて欲しいと願う気持が、そのまま女性に対して向けられてゆくものようです。

私は映画館などで、同性にいたずらされますと、蛇に見入られた蛙のような無抵抗な状

態になって、放心したようになってしまひますし、又誘われたりすると、不思議な被虐感に溺れてしまつて理性を失ひ、何処へでもついて行つて弄ばれてしまふのです。そのような場合には自分が女性化してしまつたような氣持になつてしまつて、男や男達が要求するどのようなことにも従つてしまふのです。私は同性の腕の中に身を沈めて、様々の刺激に陶醉しながら、女性のような被虐の態度をとつてしまふのです。これは、強い女性願望が、私の中にあるからでしょうか。

私が女性であつたら、男性に此のようにし

て欲しい、あのようにして欲しいと思うことは沢山にあつて、それは、肉体的な責めもあり、感覚的な責めもあり、また精神的な責めもあつて、責めのアイディアは、次から次へと浮かんできて尽きません。被虐願望が私の心の奥底に潜在しているようです。

また女装願望があつて、本格的な女装など経験ないのに、特に女性下着に関心があるのです。私は女性下着を身に着けることによつて、女化したような妖しい恍惚感に耽溺してゆくのですが、下着は例えば黒い長靴下だけでもよく、鏡の前で露わなポーズをとること

で、空想が次々と浮かんで不思議な被虐感に没入出来るのです。女化して責められたいという欲求が、露出的な下着を着けて自ら慰めることで満たされているのでしょうか。

生ゴム下着に対する欲求は、そのネットリと肌に吸いつくような感触と被縛感が、私の被虐願望にマッチして、着用することによって圧迫感と弄感覚を生じ、責めの刺激が加虐と被虐の着想を私に与えてくれます。

どうして私は、此のような性癖になったのでしょうか。それは幼年期に芽生えていたように思うのです。

其の頃のことを、今は、遠い遠い夢の世界のことにように、思い出すのです。私は薄暗い納屋の中の藁の上に、仰向きに寝転がされています。胸の上に、後向きに少年が跨っていて、私の下半身は剥き出されており、私の両手は少年のお尻の下に敷かれていました。

少年は私を弄っており、私は不思議な快感に酔っていましたが、私の感覚は肉体的なものほかに、自由を奪われて此のようなことをされているという屈辱感に、一層強い刺激を受けていました。私より少し年上の女の子が側に立って、じっと、私のされることを不思議そうに見ていたこと。そして少年が女の子に何か命じると、少年に向い合って私の上に跨ったこと。そして私が否々と云ったのに

許してもらえず、少年の命ずるままに、女の子が私にいろいろのことをしたことなどが、少年や少女の名前も顔も覚えていないのに、ありありと記憶に残っているのです。その時逃げようと思えば逃げられたのに、おとなしく、されるままになっていたことなどが、今にして思えば、既に被虐願望の芽生えであったのでしょうか。

幼年期の、お医者ごっこのような此の事柄が、併し意外にも、私の性格を決定づけるような重要な意味を持っていたのです。

私は此の頃から自慰を覚え、内向的性格も手伝って、自虐の方向へと進んで行ったものと思われまふ。あの納屋での記憶が、被虐の感覚を私の心に植えつけ、性は外へ向って封鎖し、内に向って異常に発育してゆくという状態で、長い間、殻に閉じ籠もった幼年期を続けたのでした。

少年期にも此の傾向は続いて、内に籠った性は、益々内攻して自虐性を強め、激しい妄想に悩まされつつ行うようになり、時にはその精力に抗しきれず、激しい欲求は私を露出的な行動に走らせ、裏山の林の中を裸身で駆けまわったり、木の股に跨って密着させたり自ら木の幹に縛りつけて被虐感に浸るなどしたこともありまふ。

自慰にも、加虐性のもものと、被虐性のも

とがあるようですが、私の少年期までのそれは、被虐性の方へと、深く深く没入していったのです。この頃の性向として、専ら同性から加虐されることを想像して、行っていたように思うのですが、自分で意識しなかった同性愛的な欲望が、欲求不満となって内攻していったのかもしれない。あの納屋での被虐感が、いつまでも願望として残り、同じような陶醉感を追い続けていたのでしょうか。

此のような少年期の激しい性の闘いの後、青年期になりますと、異性に対する正常な欲求が芽生えてきたのですが、今度は、女性に対する欲求不満が、美しい女性を自分のものにしたい、加虐したいという妄想となり、少年期より続いている自慰に結びつき、対象を自己の肉体に求めるようになりました。そしてやがて、加虐する側の男性と、加虐される側の女性と、二面の相反するものが、私の頭と手と肉体に宿るようになったのです。やがて、自分を被虐の主人公に仕立ててゆくことによって、次第にS Mの世界へと接近して行ったのでした。

幼年期の納屋での記憶が潜在して、幼、少年期から続いている被虐願望と、青年期に発生した加虐願望とが複雑に絡まり合って、今日の、私の持つ性格を形成しているように思うのです。

女性に対する加虐願望には矛盾するのですが、女性に対する被虐願望もあって、女学生達に裸にされていたずらされる夢を見たり、また美しい女性の見ている前で、羞恥責めをされてみたいなどと思うことがありますし、露出願望もあるのは、あの女の子のいたずらの名残りかもしれません。

さて、此のように、女性に対する加虐願望と、同性に対する被虐願望とが混在する状態で、私は奇クを知り傾倒していったのです。

私は奇クの耽美的な絵や、美しい被縛写真や、妖しい物語に耽溺し、自分をヒロインにおきかえて、SとMの空想の世界に遊んだのでした。

その後、結婚を機会に過去を払拭しようとして、奇クを焚書したこともありましたが、やがて、ノーマルな夫婦生活における男女の本性にもSとMの要素があって、調和していることがわかってきましたし、幼少年期の性向は消せるものでないと知って、再びSMの世界へ舞いもどり、夫婦生活にSMプレーを取り入れることによって、和合の糧としているのです。奇クは、夫婦プレーの刺激剤として欠かせぬものとなっています。

『花と蛇』や『SMカメラハント』などが大好きと申しますと、それだけで、何より雄弁に私の性向をお判り戴けると思うのですが、

Sとは云っても、観念的には、残酷な拷問行為など、例えばベトナム戦争での、女性に加えられたという残酷な拷問の写真や記事を見聞きすることで、異常な興奮を感じはしますが、大体、私は自分にして欲しいと思うことを、女性にもしてみたいという願望が強いので、自分を其の立場において拷問を受けたことを想像すると、恐怖や苦痛の方が先に立って、嫌悪感を催すのです。

寧ろ、美しい女体を、より美しく見せる緊縛や、本来、女性を美しく見せるものである羞恥を、より強く表現させるための羞恥責めなどが、私の趣向に合っています。緊縛や、鞭打ちや、その他の責めも結局は羞恥責めに結びつかないつまらないのです。女性はどういうようなことに、最も羞恥を感じるのかと云うことを、良く理解していて、それを要求しまた強制し、女性は被虐感に酔い、男性は加虐感に浸るところに、SMプレーの楽しさがあるのではないでしょう。

さて、私の加虐願望は、被虐願望と密接につながっておりますため、自分が女性であったら、こうして欲しいと想像することを実行することになってしまします。

結婚間のない頃から、新妻にSMプレーを要求し、露出的なポーズをとらせたり、緊縛や鞭打ちをして、羞恥心を弄ぶようなことを

してきたのですが、そのような行為も、自分ならこのようにして愛撫されたいと願うことを、そのまま新妻に要求したに過ぎません。

よく初心な妻が諾々として従ったと思い、その頃の心境を最近になって聞いてみますと夫婦生活とは、このようなこともするものだったし、信頼していたからと云われ、愛しいと思うと共に、信頼だけは、今でも裏切っていないぞと、秘かに思ったのでした。

私は緊縛のための緊縛や、鞭打ちのための鞭打ちを要求したことはなく、常にSMプレーは、夫婦プレーの刺激剤として使っていましたので、彼女は、そう異常なものとは感ぜず受入れたのかもしれませんが。

今日では、貴方が私をこんなにしてしまったのよと申す言葉通りに、彼女は、心身ともにすっかり被虐感覚に馴らされ、責めのない夫婦プレーは味気ないものと思ひ、常に刺激を求めようになっています。夫婦間では、責めると云う言葉は、可愛がると云う言葉と同義語なのです。段々とMに変わってゆく女体の興味ある変化や、教育の過程を発表できないのは残念ですが、女体が被虐に極めて順応性があって、その中に悦びを見出してゆくのは、生理的な本性によるものでしょうか。

彼女は、後手縛りでの行為や、被虐的体位に特に悦びを感じるようですし、又鞭打ちだ

けでも、満足に達するようになっていきます。特に羞恥責めは好むようで、私が暗示的に与える責めの言葉によって被虐の淵に沈んでゆくのです。

さて、視虐と云う言葉がありますが、私は視虐に興味があり、そのような体位や姿勢を要求するのですが、とりわけ、責めにより様々に変化する姿態や、特に表情には、異常な程刺激を受けるのです。従って私の責めは、此のような要求を、最高度に満足させるように、いろいろと工夫されるわけです。ノーマルなプレーでも、男性は女性の反応によって刺激を受け、興奮を高めてゆくのですが、特にSMプレーは、相手の反応を強く期待し、要求するものではないでしょうか。

緊縛にしても、鞭打ちにしても、その他の責めにしても、女性が受ける、肉体的なまた精神的な苦痛や刺激を強くして、相手の反応を期待する行為ではないでしょうか。自分が加えた責めに対して、女性の反応が、意識的であれ、無意識であれ、大きければ大きいほど、男性の喜びも大きい筈です。その反応は或いは苦悶や悦楽の表情で、或いは音声で、或いは手や足や指で、或いは身体の各部分の動きで表現されるわけですが、この反応だけで満足に達する男性があるのは、視虐によって、加虐が被虐に転化してゆくためではない

でしょうか。

ノーマルなプレーより、SMプレーが夫婦間でより愛情の高まりを覚えるのは、その行為によって、妻の赤裸々な反応が引出され、夫婦の赤裸々な悦びと合致して、偽りのない愛の結合へと、昇華されてゆくからだだと思います。私はSMプレーは視虐と羞恥のプレーに尽きるのではないかとさえ思っておりますが、視虐と羞恥の悦びを詠い上げた、『花と蛇』はこの意味でも傑作と云えましょう。

『花と蛇』がでたついでに、横道にそれるようですが、奇ク一月号の『オニ六先生大いにシバル』を読んでいてフト感じたことですがそれは、団先生は、或いは私と大変似た性向のお方ではないかと云うことです。

私は『花と蛇』を読んでおりますと、いつの間にか私自身が静子となり、京子となり、美津子となり、小夜子となってしまって、男達に責められており、責められる静子達の心情をいろいろ想像しながら、自ら慰めてしまっています。頭では女性を責めることを思い浮かべつつ、その責められる女性の肉体が私自身の肉体におきかえられて、手で自らを責めると云う不思議な行為は、どのような心理状態なのでしょう。

団先生も、潜在的には同性に対する被虐願望を持っておられ、ご自分を女性化してみた

い、そして責められてみたいと云う願望があって、その欲求不満が『花と蛇』となって凝結し、静子となり、美津子となって、小説の中でご自分を加虐しておられるのではないのでしょうか。静子は私の分身と先生は申しとおられますが、誠に、先生の女性化願望と被虐願望がよく表現された言葉と云います。

団先生は決してサジストではなく、サジスチックなお方でしょうし、フェミニストで、女性を悦ばせることに生甲斐を見出しておられ、寧ろ、実行派ではなく、空想派に近いような気がします。実行派では、とてもあれだけ長編の責め小説は書けないでしょう。実行派は、プレーの中にSMを昇華させてしまうのですが、空想派は、欲求不満が責め小説となって結実するのです。

団先生は、女体責めの空想の中で、自らを慰め、『花と蛇』を書くことによって、SMの欲求を発散させておられるのだとしたら、私共読者は、燃焼のもえ滓を読まされていることになるのかもしれない。

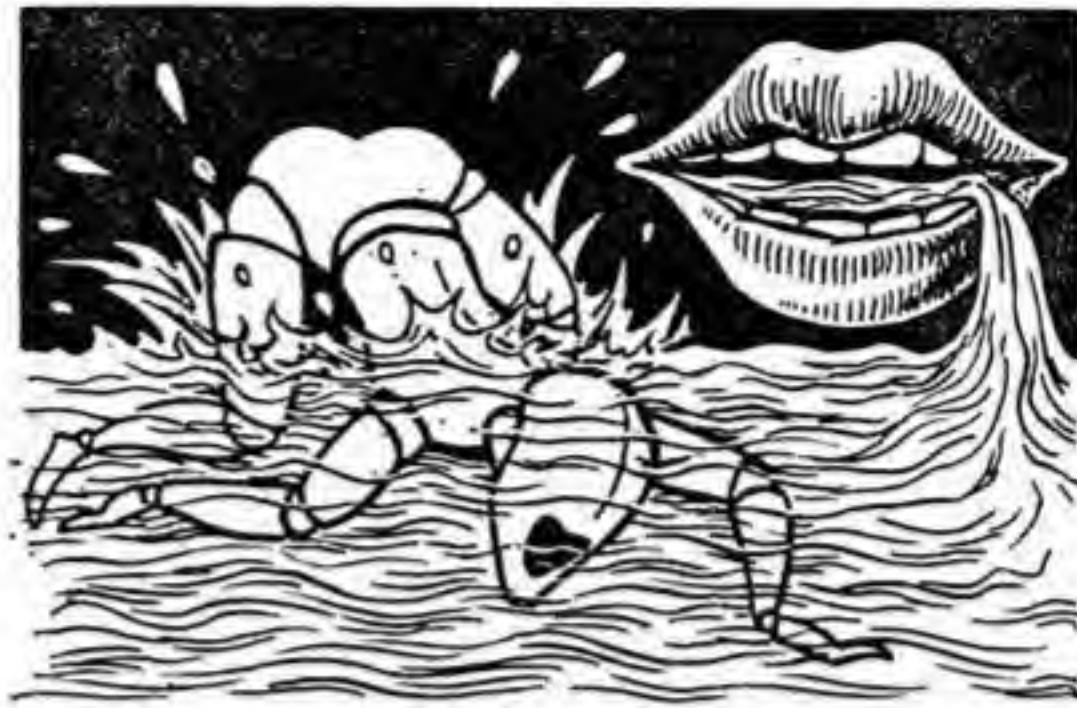
幼年期の思い出に結びつけて、自分の精神分析を試みたのですが、薄暗い納屋の中で少年と少女から受けた、あの不思議な性感覚を捜し求めて、私の魂の遍歴は、これからも続いてゆくことでしょう。

濡れにぞ

濡れし

＝二人一緒＝

芳野眉美



AとBはカローラで銀座を一周する。週刊誌の読みすぎで声をかけられるのを待って、ウロチョロしている女の子は多いのである。ハントに成功すると、浅草の私の店に車を止める。仲間の集り場所で、得意気に獲物を誇示するわけである。

女の子たちはバーに慣れていない。気取っ

てあやしげなカクテルの名前をあげる女の子もいて、私をあわてさせる。コーラの注文は多い。そんなところでしよう。

酒を飲んだからといって、その女の子をくどけるわけではない。

「顔が赤くなっただしょう。うちの人に見つかっただらしかられるわ」

「十時が門限なのよ、お母サマにおこられるわ」

なんていう女の子のほうが多いのである。

彼等は決して深追いはしない。電話番号を彼女たちに教えて、しかるべきところまで送っていく。次の機会を待つ。

また銀座へ。獲物の無い日も多い。

AとBが組むのは、一対一より、複数のほうがハントしやすいからである。四人集まれば、群衆心理でどう場面が展開するかわからない。一対一より気は楽だ。

AとBが二匹の獲物をひっさげて、仲間に見せびらかしたあと、羽田空港にドライブとしゃれた。運転するAは飲まない。車をおいてきたときは一升酒を飲む。

Aと組んだC子はおとなしく助手席に坐っているが、うしろのシートはすさまじい。

「させろ、させろ」

とBは連呼し、早々とD子の膝枕でいちゃついている。話はそれしかないのだから仕方がない。

「いい子ちゃんね、ママのおっぱいがほしいの」

D子がブラウスをはだけたのはいいが、Bの手がスリップを破いてしまった。スリップ

がじゃまで、小さな乳房がでてこないのである。いい気になってフザケていると、

「甘えるんじゃないよ」

いきなりD子にBは突き落とされた。

「いてえ」

夜の国際空港のロマンチックな雰囲気に酔い、C子はAにキスを許したが、

「何するんだよ」

Bは、いやというほどD子に顔をなぐられた。BはD子の気持がさっぱりわからない。

「よう、車の中で仲よくしようよ」

それでもBはあとに引かない。

「ホテルじゃなければいいよ」

接吻はしてくれなかったが、D子にもその気はあるらしい。

「金を持ってねえんだよ」

「持っているわよ」

「行こう」

D子が四人分のホテル代を払うというのであれば、あわただしく窮屈な車の中で我慢することはない。カローラはフルスピードで高速道路を新宿に向う。といっても、せいぜい六十キロぐらいだけだね。あまりにも曲りくねっていてスピードはだせない。

なじみの安ホテル。二組別の部屋に入る。

男と遊んだことのないC子は、三人に引きずられた恰好になったが、Aの孤軍奮闘を助けるすべも知らず、ただ身体を固くして、

「いや、いや」

いやならやめればいいのに、いやとはもつとやってのことだ。好奇心は人一倍強いのもこの年頃。でもねえ、三十過ぎて、こんな女に会うと、電柱に小便しているんじゃないかとどなりたくなるよ。ホント。意外に多い。

Aはホンのチョットだけで我慢した。あまり痛がるので、それ以上は無理。

彼女は処女か。あっさり処女を捨ててしまふ女の子のなんと多いことか。嗚呼。

D子に引きずられて部屋に入ったB、布団に入る間もあたえられず、ズボンをとられ、下着をむしられ、抵抗すると尻を蹴飛ばされ顔や頭は何回なぐられたことか。上着を脱ぐひまもなく、D子に「犯された」。

ハンターはD子のほうであった。

初対面同志が簡単に関係する。一瞬だけの交際。それだけが目的のハント。非常に面白い。ネ。

今日も、AとBは銀座を流す。一人、乗った。近くの日比谷公園へ。繁みの中に連れ込んで、早々とBはスタートラインにつく。通

りがかった水商売風情の女に、手持ち無沙汰のAが声をかけた。

「ねえちゃん、こんなことしない」

「スケベー」

Bの女は、激しく抵抗する。

「ここじゃいやだわ」

日比谷公園は覗きが多い。ほら集まった。カローラの中であらためてBはスタートを切った。車のクッションは最高。震動があまりにもすげえので、窓から覗いていたアベックがいた。

「えんりよしないで、お前たちもやれよ」

とAはけしかける。汗だらだらBが車のドアを開けた。

「交代」

「あらッ」

「いいじゃない」

「いやあねえ」

といいながら、彼女は待ってる。

またBとタッチ。

「もういやよ」

「名曲吹奏というのはどうだ」

「それだけはいや」

「じゃ、ヒケ」

彼女は意外と器用だ。

「お前、トルコにいたんじゃねえのか」
彼女を乗せて、そのまま谷中墓地へ。墓を背にしてBがスタートラインに。

「また？」

「あたりまえさ」

「もういやよ」

足音が一つして、彼女は叫んだ。

「助けて」

暴行になるか、オタチアイ。

酔った男だった。声に気がついて男はBに近づいた。やばい。と、男はいきなりBの急所をつかんだ。

「いてえ」

「しっかりやれ」

にやりとした。

Bは彼女にしがみついた。足音が二つ。二人連れの男だ。AとBは顔を見合せた。彼女は叫ばない。二人の男が近寄った。

「続けろよ」

と男たちはいった。彼女は顔をそむけた

Aと三人、そのままで見物していた。綺麗な星空であった。ウソツケ。

RアンドB。リズム・アンド・ブルースである。強烈なリズムとビートである。ニグロの体臭と破廉恥なミニスカートの乱舞であ

る。ブラジャーとパンティは、飛ばない。念のため。

今日で二日寝ていないが、AとBは青山のゴーゴースナックの喧騒の中にいた。ソウル・ミュージックに鞭打たれ、若竹のようにしなやかに反り返る水々しい女の子たち。熱っぽく輝く瞳、肉感的に濡れた厚い唇。

突如、その筋の手入れ。あと一月で二十になるBは、十九才ということで始末書を取られた。未成年はB一人だけであった。Aはめでたく成人式をむかえていた。よかったね。

家に帰ると思ったが、二人はそのまま横浜へ。午前四時であった。旅館の前で五人の女たちに道をふさがれた。

「乗せろ」

「俺が三人受持つ」

とBはAにいった。

「よし、俺は二人だ」

どやどやと乗り込んで来た女たちは威勢が良かった。

「早くやれ、この馬鹿」

シートに寝そべった女が、足をあげてサンダルでAの頭を蹴飛ばした。スカートがめくれ、きたねえ黒ずんだパンティが露出していた。パンティにさわろうとしたBが、顔をな

ぐられた。

「このドスケベー」

まったくBはよくなぐられる。

「おい、やろうぜ」

Bは女たちを見回していった。

「三人、やってやらあ」

「よし、やろう」

ずるっと鼻をすすった女が、Aをいきなり検査した。

「なんでえ、フニャフニャじゃねえか」

一人の女が、でけえのを一発。屁。

「くせえ」

「窓を開けろ」

声だけ聞いていると、女が乗っているとはとても思えない。乱暴な言葉を吐き散らす。

「止めろ、大事な用だ」

ときた。

「紙」

Bからくしゃくしゃの紙を受取って、車の横でくるとスカートをまくった。汚れたパンティをずり下げる。実に堂々たる態度。ごりっぱ。Bはくらくらし、近寄ってさわろうと思ったが、小便をひっかけられそうでやめにした。しらじらと夜が明けた。

どこまで続くぬかるみぞ。女たちはレスト

ランで車を止めさせ、開店前のドアをずしんずしん蹴飛ばした。主人がおそろのおそろ出て来た。

「オヤジ、開けろ」

「オヤジ、めしを食わせろ」

「まだ準備中なんですよ」

「うるせえ、開けないとぶっこわすぞ」

こわされる前に、レストランの主人はしぶしぶドアを開けた。

「なんでもいいから持って来い」

「早く」

生野菜でもスパゲッティでも、だされたものを手でつかみ、くちゃくちゃ食った。食欲は旺盛だが、まるでメスブタが食事をしていくようであった。AとBはいささかげんなりしてきた。どえらいズベ公にひっかけられたものだ。

ホテル代がかりうじて残った。旅館の前で止めたが、

「馬鹿野郎、誰がお前らと寝るといった」

「海へやれ、海へ」

てんで相手にされない。

海で女たちが下りたのを幸い、一目散に逃げだした。

「今度横浜に来たら、車を目茶苦茶にぶっこ

わしてやるからおぼえておけ」

「おとしまえをつけてやる」

女たちの声が追いかけてきた。

「連れて来なくてよかったよ」

とBが私にいった。

「この店を目茶々々にされちゃうよ」

とAがいった。

「おてやわらかにたのむぜ」

私は疲れ切った二人にいった。

誌友Y氏の手紙に、

「強姦といえば、されるのは女性と大体決まっているようですが、今年は早くもこの海岸で（辻堂、茅ヶ崎、大磯方面）男が三人の女に輪姦されるという事件があり、私を嬉しがらせてくれました。（Y氏はMである）

恋人同志でデートしているうちに、松林の中で男が女の身体を求め、女が必死になってこぼんでいるところに、三人の女が現れたのだそうです。

男は狼狽し、恋人の女は抜けだして逃げました。三人の中の一人が果物ナイフを男の肩先に突きつけ、あんたのお望み通りにしてあげるわよ、と男を押し倒したのだそうです。

女たちは替る替る、男を輪姦しました。

いったん逃げた男の恋人は、やはり気がか

りで引返したところ、自分の恋人が女たちに犯されている情景に驚愕し、すぐに訴えたわけで、急報でかけつけた警官に、三人の女は現行犯逮捕されました。

犯された男は正式に告訴し、三人の女は強制猥褻罪、並びに傷害罪で起訴されました。

女たちは、あきらかに男を輪姦したのです。強姦罪を科せられないということは、女が男を強姦しても、強姦罪が適用されないからなのです。

刑法一七七条に、

「暴行または脅迫をもって十三才以上の婦女と姦淫したる者は強姦罪となし二年以上の有期懲役に処す。十三才に満たざる婦女と姦淫したる者もまた同じ」

とあります。」

大変参考になる手紙である。

「あの三人をまわしてみたかった」

と残念がるBを、

「まわされてしまうよ、反対に。今頃、プツクリコンと腫れてしまって、ズボンなんかはけなくなっているらあ」

となぐさめた。

「でもさ、三対一なんて、これから遊べるかどうかかわからないもの」

「そう悲しむな、チャンスはまだあるよ。これから夏なんですよ、君たち」

「そうかなあ」

逃げた魚は大きいのである。女に強姦罪が適用されなければ、あの女たちから、よってたかって半殺しにされても、Bは文句をいえないのである。

「よし、俺一人でも行くぞ」

Bは叫んだ。

「どうしてもあの女たちをさがしだす」

その結果の報告はまだない。

さて、お次は三十代の話。

二度も結婚して離婚した経験のあるE子に子持ちワイフ持ちの三人が、相談したわけではなかったが、E子の一人寝のアパートに遊びにいったと思し召せ。

E子は布団を敷いて歓迎し（これ以上のカングイはない）名曲をかなでるほどのサービースで、全身をおしげなくさらして悶えた。

三十代になったばかりの私もその一人。スミマセン。

バーで三人集まり、男は女と寝ると発表したがるもので、簡単にバレた。誰が長男で、次男で、三男だかもわかったが、さて、考え

た。

三人でE子をマワしたのか、E子に三人がマワされたのか、よくわからない。

三十になったばかりだが、独身のF、私のスポンサーで、ヤジキタを組む。好みは肥満した女。童貞を奪われた女がポツチャリして、それ以来肥った女ばかり追いかけていくという、初心貫徹型。Fが美人だという女は、グラマーだが、顔は、ネ、十人並みというところ。美人とは、肉付きのことを差すらしい。

G子は色白で豊満。心優しく従順。くどきたいが、友達のK子と二人でアパートに住んでいる。だから、手を借せ。いいですねえ、と尻馬にのった。スポンサーつきだから金の心配は無用。

（こういう遊びは歓迎します。ハア）

バーに三度通い、その三度目、バーが終わってから二人を誘った。簡単に旅館に誘い込めたのは、私たちのハントが上手だったわけではない。

二人の方に理由があった。

私が受持つことになっている瘦身のK子は愛人をなくしたばかりだった。死んだ様子だが、過去のことなど知りたくないの。で

生活が荒れていた。どなたか、なぐさめてくれる男が必要だった。その、どなた様に私が当たったわけ。くどく手間がはぶけた。

もう一人。スポンサー目的のG子は、健康あふれる肉体美をもてあまし気味で、男を知ってみようという好奇心にうずうずしていた。わたしだって男の一人や二人、いるわよ。

旅館は一部屋、隣室に一組の布団が敷いてある。スポンサーがG子に働きかけないので仕方がない。私がK子を誘うはめになった。

「隣りに行こう」

それが当然のように、K子と私は布団を占領する。

「二人にかまわず、寝ましょう」

唐紙をしめ、それから、ドッタンバツタン販やかなこと。本当は静かに事を運ぶのだがG子を刺激しなければFに悪い。

畳の上をG子は逃げ廻り、勿論、Fにつかまって轟沈。Fは腕や膝小僧を畳ですりむいたが、目的完了。処女であった。

さて、彼女たちのアパートに遊びに行くのに、一人だけではまずい。二人、並んで、寝ているからである。

それでは、と、二人一緒、二つの布団にもぐりこみ、落花狼籍。声を殺しているが、苦

しくなつて、

「ハッ」

息を吐くたびに、笑いだす。Fは荒々しく布団を中心にぐるぐる回転する。私はオトナしく。ホントデス。うそだと思ひの御婦人方、奥様方、おためし下さい。

私とて、Fを待つてばかりもいられない。

一人でK子の布団に忍び込む。

G子がさつと立ち上り、電気をつけ、二人は布団を頭からかぶる。着物を着、G子は出て行った。

「怒ったな」

「そうらしいわ」

「寝るところあるのか」

「友達が近所にいるのよ」

「それならいいけど」

「私だって、Fが来たら、いいように刺激剤にされているのよ。たまにはいいわよ」

「そういうことで」

Fはよくアパートを訪れるらしい。バーのホステスだから、午前様になる。独身と妻帯者の違いである。

二人きりになったら派手にやりましょう。

「奥さんに悪いわ」

「それをいうな」

「赤ちゃんの顔が見たいでしょう」

「見たいね」

「じゃ、早くお帰りなさい」

「わかったよ」

オヤジの足を引っばるなよな。オイ。

スポンサーのF、悪趣味で、同じ旅館に次々と違う女を誘い女中をあきれさせ、寝た女と関係した女をハチアワセさせて喜こんでいる。それでもモテルのは、女心の不思議さかFの金のせいだ。

またまた、バーのホステスを二人、旅館に連れ込んで、今度は、スポンサーに敬意を表して布団を明け渡し、私のほうは畳の上で、失礼ながら脱いでもらった。布団を敷いてもらえばいいものを、女中はあきれて部屋にこない。

未成年だから、乳房も美しいし、張り切っている。艶が違う。小さな紅い乳首は恥ずかし気に、豊満な乳房に埋没している。珍しいものでも見ているように、つくづく感心して眺めていたら、Fが隣室から出て来た。

「交代」

「もう？」

「早くしろよ」

「俺はまだだよ」

「まだでも交代」

つつかれて、しぶしぶ布団が敷いてある隣室にいくと、布団の上に坐ったもう一人の彼女、なさけなさそうに、

「お願いがあるのよ」

「なんだい」

「メンスになっちゃったの」

「あまり派手だからだよ」

「女中さんにもらってきて」

「ハイハイ」

即ち、Fは二人、目的を達したけれど、私は関係なし。こんなことであるかしら。

二人で誘うと、二人でついてくる。どうしてでしょう。一人で誘ったら、ことわるくせに。

男二人と女三人の乱痴気パーティー。上半身と下半身に、一人ずつ女を受持ったら、注意力が散って、とってもいけません。あちらを立てればこちらが立たず。顔の方の女は、少しずつ匂いの強いお水をくれたけれど、逆騎乗の方はしびれを切らして悶絶した。オーバーなこと。

一対一のほうが、力は集中できるものと知れた。

今年の神酒初拝受の式は、沢井和雄氏と一

緒。御存知H氏推選の名花ハルミチャン。沢井氏は上京するたびに、ハルミチャンの洗礼を浴びている。

正月、ハシゴをした二人、ハルミ女王に謁見ときた。のまなければ寝られない。

沢井氏は土下座し、女王に背中を鞭打たれ（三原寛氏土産のギリシャの黒鞭である）女王の足を舐めさせられて、喜色満面。

横に立って見物していた私に、

「お前も、沢井みたいに土下座をしなさい」

「いやです」

女王の椅子の下にもぐって、チョロツと舌をだす。メンスが終ったばかりであったそうだ。

「馬鹿」

沢井和雄氏、平身低頭して、お茶を持ってきたママ、見物に来たヌードモデルさん二人を面白がらせる。

「お前、飲むかい」

女王が私にいった。

「飲む、飲む」

「お前は、飲むだけなんだねえ」

「そう」

「前におまわり」

「――」

「四つ這いになって」

ハルミチャンの脚もとに四つ足で這う。尻は沢井氏の顔の前になる。申し訳なし。

ハルミチャンの味。美味也。いつ飲んでもうまい。ごくごくのどが鳴る。

「沢井、お前も、おこぼれをお飲み」

バトンタッチ。彼女、途中で止められるのだから、自由自在。

「こぼさないのはお前だけだよ」

おほめの言葉を頂戴して恐縮。ハルミチャンは布団の上で飲ませる趣味があるから、布団に世界地図を描いてしまうことがあるそうだ。物量豊富ならば、それもまた無理はないと思うけど。

四月号の辻村さんのカメラハント、辰巳典子さんにはおめにかかれなかったが（谷ナオミさんとは、六本木のクラブでお会いした）声だけはきいているのである。

というのは、辻村さんと賀山氏と二人一緒にカメラハントの取材中、バーに電話をしてきたからである。

「辰巳さん、素晴らしいですよ」

「それはそれは」

「いらっしゃいませんか」

腰が浮いたが、店に客があった。オンドスわけにはいかない常連とあらば、無念の涙をのんだ。

「今夜はお二人で楽しんで下さい」

「残念だな。じゃ、辰巳さんの声をおきかせしましょう」

鞭の音がし、受話器から、

「あっ、あっ」

という呻き声が流れた。

「どうです」

「聞こえますよ」

「あっ、いたっ……」

「面白いでしょう」

コウフンした。

従って、辰巳典子さんが責められているフオトの数々、カメラハントで拝見して、ああもったいないと思うのである。

チャンスはのがすものではない。客をオンドして、カメラハントを見物にいけばよかった。

でもねえ、辰巳典子さん、のませてくれたかしら。

すぐこれだ。いけませんねえ。

× × × ×

奇クジャーナル

発行・奇ク愛好家クラブ
編集・マニアテング

「編集子のオシャベリ」

一発勝負のつもりで出した「奇クジャーナル」ではあったが、もう少しだけ駄弁らせて貰いたい。設定せる頁ということもあるのですが、どうしても展望形式になりカユイ所に手が届かない点もあるのが御了承を。まあ、気楽にやりましょうや。

四、五月号と、この所、編集部さんの新企画。それにともなうなになに募集の連発にはおどろきいった。一応、このジャーナル（前回分）でも「編集部への公開状」で「実話と体験」などについてふれたが、今度は「誌上読者コンテスト・美人モデル募集と、まさに募集の進軍ラッパである。嬉しいことであるが、本誌二百六十四頁、いったいどのよう盛るのであるのかと、気にかかる。オセッカイながら前回に「予定は未定」の増頁を唄ったのであるが、そのお返しに本誌五月号、本物の「編集後記」の、今月号では誌面の関係

で相当数の翌月回しになった作品が生じたがいずれも力作なので」という言葉なので、ここに奇クジャーナル編集子は、天を仰いで微笑。

「奇クサロン」の方は、新たにカコミで特筆大書の募集が見られ、ユカイである。創作部門では映画の女囚物に刺激されてか、沢潟しの「理恵女献身」が登場、五回に亘っての分載。時代伝奇小説「緋縮緬地獄」がベテラン白鳥大蔵氏の執筆によって連載開始。六角京之介「月形千浪の自刃」と、久しく下火であった時代物分野が一時に開花された。一方、ながらく連載されていた斎藤夜居「性風俗資料入門」と、実に、長らく労作された西条操「心傷たむ遍歴」が最終回となるなど、まったく今回も話題のあふれる五月号ではあった。

はたして花と蛇の人気に迫るか！

対抗馬、時代伝奇小説登場

大形作家による大形作品のレッテルを独占

していた「花と蛇」の長期連載は、花と蛇あつての奇譚クラブである。の極論まで出るほどの凄じい人気であるが、その反面、この花と蛇に匹敵する小説の出現は、これはもう読者というよりは、編集部にとってもかねてからの懸案でもあったようだ。本当に読みごたえある雑誌への脱皮とは、花と蛇にまけない読物が登場し、両作品の火花を散らす中から評価が生れる可能性が予想されるからでもある。ここにあたかも時期もよし、SM的な時代物の分野が注目、待望されている真ッ只中に、編集部が折紙付き「嘗て本誌でも活躍したことのあるS派のベテラン、新しく試みた野心作」をひっさげて白鳥大蔵氏の再登場は時代伝奇小説「緋縮緬地獄」の連載開始となつて、おそらくは本年随一のうれしい事件。それほどに美女の羞恥責め地獄図絵はリアルな筆致で迫力もあり、構成、会話、描写共にズバ抜け、その彩筆は、はたして花と蛇の人氣に伯仲するや——と、期待される要素が十分。花と蛇の人氣は、美女羞恥責めの本質がマニアにも、一般向にもめっぽう面白いというエロチシズムにあり、読物的なバラエティという点で大向うをウナラせているのだが、「緋縮緬地獄」にもそれと共通した世界がう

かがわれる。創作の分野も、一層これからが興味ある。

「会話によるジャーナル・サロン」

野次馬氏「どうも御苦労さんです。貴方のオシャベリ原稿とトピックを拝見しましたが、読みごたえある雑誌としての具体的な方向、予想といった所を」

マニア氏「ズバリいって、七月号あたりがヤマ場でしょうね。花と蛇と緋縮緬地獄の両連載に対する各読者の声が誌上に反映され盛り上がるのが、丁度、その頃になるとにらんでいますから」

野次馬氏「奇クのバックボーンは小説といった言葉を支持されて、そのように答えを出すわけですか」

マニア氏「それが第一。しかし、それだけでなく新企画による募集が、大体、七月号あたりで誌上に続々、作品となって発表されると見てるからですね」

野次馬氏「不満もある。大型M小説が新連載され、花と蛇と緋縮緬地獄とまんじともえとなれば、一層の面白さがあるんですが」

マニア氏「そうなればけっこうすぐめだが、いまの所、みはら・ひろし氏及び芳野眉美氏などのベテランの活躍に期待すると共に新人

の登用に賭けるより他はないようだ。ただ、M派は注目の手記「スカタロジに憑かれて」の津川博氏という持ちゴマがあるので、S派のハッスルに刺激されて火を吹くかも知れない。美女を責めるという華麗な世界を持っているS派と、どちらかという日陰になりがちなM派の世界と同地点で比較するのは、よほど慎重な態度で発言しないと」

野次馬氏「話は別ですが、グラビヤ頁が廃止されている本誌に、誌上読者コンテスト・美人モデル募集について、その誌上に発表はどのような形となって実現されるでしょうか。なんといってもせっかくの写真が、いまの本文紙質では？」

マニア氏「その企画は素晴らしいアイデアであるので、なんとかして成功を祈りたいが、その成果は「発表」の方法如何にかかっている。カメラ・ハントは文章も付けられてあるので写真の不備はある程度カバーできるが、コンテストの方は写真そのものが勝負ですから、これはちょっと頭が痛いね。昔のグラビヤ頁の紙質とまでは行かなくても、現在の本文紙質をもう少し白くしたような物を——このへんが無難な所ですか。その紙質はカメラ・ハントにも応用すれば」

野次馬氏「芳野眉美氏も今月号の『H氏をめぐる美女四人』あたりでは、仲々の快調ですね。やはり彼は短文が向くのかね。野心作もよいが、あまり無理せず、この地点でウィットにとんだものを発表続けてもらいたい所だ」

マニア氏「ウン」

野次馬氏「重量級、斉藤夜居氏の性風俗資料入門も終わったが、これは何んとか別冊号で一本にしてもいいね。今後の御活躍を期待したい」

マニア氏「同感だね」

野次馬氏「会話の終りに当って、五月号の総合評を一言で」

マニア氏「とにかく話題のあふれる五月号ではあった——というのが、ホントの気持だろうか」

野次馬時評（野次馬氏の奇稿）

奇クサロンのことについてはマニア氏が大部分、先回でホメテルようなので、私はあまりホメナイよ。——といってペンを取ったが、やはり良い物は良いね。今回も充実した内容です。特に注目されるのは北山読人氏の「苦言と要望」。本誌の傾向については、「実話と体験」の募集の成果が上れば、ある程度、

氏の不満も解決されようか。ただ、挿絵の問題についてだが、グロよりエロチシズム的な色彩でならば、もう少しパンチのきいた物も出そう。ここでよく考えなければならぬ。

毎月確実に入手されるために

本誌予約購読者を募る

毎月二十五日確実発売!

一月分	1冊	三五〇円 (送20円)
三月分	3冊	一〇五〇円 (送共)
半年分	6冊	二一〇〇円 (送共)
一年分	12冊	四二〇〇円 (送共)

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、或は地方のため、入手することが出来ないとかいう声を聞きます。又、毎月確実に、早い目に、手に入れたたいという御希望をよく承ります。そういった方々は、どうぞ是非月極御予約下さるようお願い致します。毎月製本完成と同時に、お手元までお届け致します。

○直接予約購読のお申込みを下されるのには大阪市住吉局私書箱第四十一号曉出版株式会社会宛表記予約購読料をお払込みの上、何年何月号より何カ月分と御指定下さい。

○三月分以上お申込みの節は、送料、包装代などは、総べて当社にて負担致します。但し一冊毎お申込みの方は、送料として一冊分二十円(切手可)の御負担を願います。

○本誌は十月号から定価三五〇円に値上げになりましたので、予約購読料は三月分三冊一〇五〇円、半年分六冊二一〇〇円、一年分

とは、ズバリ、SM中心という編集は、ここまでするのに誌歴二百号突破の足跡があり、独自のマニア誌として成長してきたので、バラエティという点については、一考も二考も

十二冊四二〇〇円になります。今後当分の間誌代の改訂はしない予定です。

○予約お申込みの方には、毎月二十日、印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重包装の上、一斉に発送申し上げます。

○毎月一冊宛お申込み下さる方は、誌代送料三七〇円をなるべく毎月十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約購読者の方の分と一緒に発送致します。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号から何カ月分送れとお書き願います。第一回分発送の際、明細表を雑誌に添布致します。

何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたしますので御留意願います。

○予約金が切れましたときは、封筒の上に八本号にて前金切りの判を捺印致しますから継続お払込み願います。継続のお払込みでも何月号からと御明記願います。

○局留にて雑誌をお受けとりになられる方は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受取りに行きたい郵便局(特定郵便局でも結構です)と受取人のお名前とお知らせ下さい。

ば、当方では御指定の局留としてお送りいたします。数日後その局で御受領願います。局での留置期間は十日間です。その間に

お受取りにならないときは、発送人に返戻されます。

する必要がありそうにも思える。広範囲の文献資料紹介も結構だし、現在の中心点を多少肥大させることも悪いことではないだろう。

だが、そうすることが、奇クの今後にプラスになるかどうかは極めて疑問だ。何を目標に焦点を合せ、絞り、拡げるかというところは、そう簡単に決められることではないだろう。まあ、その点については、編集部の方を信じる。いまの時点ではケンメイと思うね。マニア氏は話題の多い五月号と評しているが、これに私は創作対カメラ・ハント及びカメラ・ルポの競演が、お見事であったと付けたしたい。

「ジャーナル編集後記」

奇譚クラブの存在が「奇譚」であるが、このような「奇クジャーナル」を探りあげてくれ、云いたい放題させてくれると云うのだから、これの編集人である箕田京二という存在も奇譚であり、まさしく怪物?だ。その謎をとくカギは、新しい風俗文献誌として独走を続けてきた二百号突破の輝かしい誌歴をふり返り、今後の出方の中にあると見る。マニア諸兄姉如何。

(おわり)



——浪花談——

けったいな、ほんまのはなし

能 美 積

はじめに

これは、世にも愚かな一人の男の独り言です。男の職業はタクシー運転手、ぶ男で金に縁がなくて、おまけにエゴイストです。

そんな男に、偶然起きた悲しい恋の物語。ざんげ。飛んでもありません。男は、クリスチャンでもありませんし、それ程、悪い事をした、とも思っていない。救いがたい野郎なのです。

その一

タクシーの運転手も、一応の経験をつむと夫々に穴場のようなものが、出来てきます。一日の水揚げが仮に一万円とすると、一区の

客であれば実に百回も乗り降りさせる勘定ですから、どうしても一日に四、五人は千円程度の長距離客が欲しくなるのです。

近頃やかましく云われている乗車拒否は、一部の不良運転手の仕業ですが、彼等が好収入をあげている以上、会社側が目をつぶりたくなるのは人情というもの。それはそれで解りもしますが、一応業界でも中堅級の我が社では、そういうやり方は認めておりません。ですから上客であるか否かは、総て自分の判断で選ばねばなりません。そして多少なりとも経験を積むと、不思議とこの勘が冴えてくるものなのです。一番敬遠するのは、なんといっても女性客です。乗り降りに手間がかか

りますし、道幅の狭い行きづまりの露地裏に無理矢理、車を進入させ、必ずといっていいほど千円札を出します。つまり少しでも手間をかけて、自分がタクシーで帰ったのだという事を知って貰いたいためのデモンストレーションなんですね。三人で乗り込んで来て「ワリカンよ、一人三十三円。ねえ、半端の一円負けてくれないかしら」

などとのたまうのは、決して女性です。ホテル街なので、一目で事後と思われるアベックを拾う。女だけが乗って、

「××まで送ってくれよ、たのむ」
彼氏の方が千円札を握らしてくれて、残りはチップに、といってくれます。張り切っ

発車して、彼氏の姿が見えなくなると、

「ねっ、次のバス停でいいわよ。細かいのあ
るから今の千円、返して頂戴」

骨のとろけるような？ 良い思いをしたか
どうかは知りませんが、ケチで、必要以外な
時には見得坊で、全く情けなくなります。籠
抜けをやるのも大抵、女性です。一万円札を
出して釣がないから、こわしてくると銀行か
なにかに入ったきり出て来ません。

どうも、しょっぱなから脱線ぎみで申訳け
ありませんが、男性のように無銭で乗車して
揚句には自動車強盗に早変わりなんていう豪快
なのは、命をとられなかっただけでも儲けも
の、と諦めもしますが、大の男が、品のよい
令夫人なんかにしてやられると、情けないや
ら腹立たしいやら……。

穴場、つまり稼ぎ易い場所の事です。もっ
とも多いと思われるのは、バーやキャバレー
のホステス連と手を組んで上客を拾う、とい
う方法です。ですから歓楽街の消灯時ともな
ると、その辺に車がウヨウヨしているでしょ
う。彼女等の唾えこんできた鼻下長連を送る
訳で、客だけの場合だと、後日、歩合を払
ったり、指名で飲みについてやったりで相殺
し、ホテルなんか連れ込もうなんぞという

コンタンのある客は彼女の目くばせ一つで用
心棒に早変わり、といった芸当もやる訳です。
ホステス、つまり女給ですね。日本人は横文
字に弱いから、女給共もこういう呼び方をさ
れるとなんとなく偉くなったような気分にな
るらしく、客を客とも思わぬ女が最近ふえて
いるそうですね。あたり前のような顔でチツ
プをねだり、その額が少ないとおさわりも制
限され、色のついた高い水を、ジャカスカ飲
む。

オット又、脱線。

水揚げを増やすために、女給共と馴染にな
るのが一番早道という事を教えられた大阪の
田舎っぺ、である私は、そうしたいのは山々
ですが、薄給の身の悲しさ、新清酒の立ち飲
みが精一杯では、どうする術もありません。

拾った客に道順を習ってハンドルを回す、と
いう情けない状態が、半年以上も続いたでし
ょうか。元来、私はタクシー運転手という柄
ではないのです。それまで勤めていた九州の
会社が閉鎖になり、鼻糞程の退職金を持って
大阪見物とシャレ込んだのですが、破目を外
して帰りの足賃がなくなつて、止むを得ず当
座の小遣稼ぎのつもりで働く事になったので
す。ですから、いい加減な処で限りをつけ

ばよかったのですが、或る事情でそうはいか
なくなつたのです。

その二

犬も歩けばなんとやらで、私がホステスに
あたつたのは、全くの偶然からでした。十三
と書いて、じゅうそう、とよませる街が大阪
にあります。最近、といっても大分前の話で
すが、めきめき頭角を現わした、南、北の歓
楽街に次ぐ夜の盛り場なんだそうです。なん
となく庶民的な匂いのする、つまり安くって
うまい物が喰える街でもあるのです。

深夜、その十三で和服の麗人が手を振って
いるのに出くわしました。仮眠の時間でもあ
りましたし、拒否にならない程度で女性客は
敬遠する主義でしたので、私は一旦通りすぎ
たのですが、仲々の美人なので、もう一度U
ターンしました。しかしよくみると相当御醜
陋の様子なのです。少し離れた処で二人連れ
の男が、矢張り私の車に向って大声で叫んで
います。これ以上、無視すると、いわゆる乗
車拒否という事になります。已むなく私は、
目標を二人連れに定めました。ところがです
何処からともなく風のように現われた同業者
がサッと前に割り込んで参りました。美人と

二人連れは、同時に車に歩みより、形どおりの押問答が始まったのです。美人の方は酔っていて私の存在に気がきませんが、男二人は解っていて、どうやらからかっている様子。私は、止せばよいのに正義の味方をきめ込みました。ただなんとなく美人だけを連れてくるつもりだったのが、どこで、どう狂ったのか。

“このガキ、ええ恰好しよって、おめえパン助の味方する積りか”

“止めろや、お客さん擱まえて”

てな事から、組んずほぐれつの大乱斗とは相成ったのです。腕に自信はないのですが、幸い近くのキャバレーから大勢の人が飛び出してきて分けてくれ、事なきを得ました。美人は、私の車の助手席を勝手に開いて頭の方からよろけこんで来ました。したたか酔っ払っている上に、喧嘩騒ぎで余計に混乱している風なのです。まだなにかわめいている二人連れが車に納まるのを待って、私も運転台に戻りました。

“お客さん、どちらまで”

“すみません、岸の里まで”

私は、自分の自由にならない美人の、外にはみ出している両足を、二つに折ってやりま

した。チラリズム、っていうんですかな、いいものですねえ。とたんに、です。

ゲロゲロ、グエーッ。ガチャン……。

ゲロゲロの方はお分りでしょう。も一つの物凄い音に私は思わず前をみました、たった今走り出したばかりの例の車が、点滅式の信号のある交差点で他車と側面衝突をしたのです。汚物で汚れた、無電用の送信器を外して私は一一〇番をよんでいました。

駆けつけたパトカーに協力して、三十分程経ったでしょうか？ 車に戻ってみると、美人は去りもしえずに待っていました。それでも肌着の袖をさいて汚物を拭きとってはいたようです。

“御迷惑をおかけして、申訳ありません”

“仕方ないですよ、災難だと諦めます”

“車を汚してしまつて。弁償させて頂きますわ、これ取って下さいな”

“冗談じゃあない。そんなもの要らん”

“でも、それじゃあ、あたしが……”

“あんたは運の良い人だ、命拾いをした”

“どうになりましたの、あの人たち”

“一人は即死です。……俺を余計になぐった

方の奴は、カスリ傷ですんだようですがね”

“……………”

“それより、あんたどうします？”

“もう送って頂けないでしょうか？”

“何処かで車を洗います。待ちますか？”

“……………すみません……………”

“そんなら、あんたも顔を洗うといい。そんなじゃあ、折角の美人も台なしですよ”

その三

縁、とは誠に不思議なものです。

一時間後には、私はステテコ一枚で彼女のマンションに坐っていました。八畳一間ではありますが、私の下宿とは比べものにならない、ぜいたくな室です。つまみ洗いたズボンの裾をアイロンで乾かしてくれている彼女の動きを、私はぼんやり見つめていました。三十四、五にはなるのでしょうか？ 私よりも大分、年上の感じですよ。それにしてもこんな高級アパートに一人で住めるなんて、女給とは随分もうかるもんだなあ、と改めて感心させられたものです。

“お酒、召し上りますか？”

“あるんですか、酒が？”

“お店での貰いものなの、出しましょうか”

酒となんとかに、目がないのが私の欠点です。そんなじゃあまあ、という事になりました

が、私は社に連絡する為に、一旦室を出ました。なにしろ深夜の事。しかも女の一人住いの部屋となれば、足音は殺さねばなりません。おまけにステテコ姿です。

連絡をすませて、そつと舞い戻った私は、とんでもないものを見てしまったのです。彼女はパンティ一枚で着替えのまっさい中でした。慌ててナイロンの長襦袢に袖を通して、

「ゴ、御免なさい。もっと遅くいらっしゃると思って」

「車に無電があるんです」

「広場の公衆電話にまでいらしたと思っちゃって。羞かしいわ」

「きれいですねえ、びっくりしたよ」

「あら、お上手ね。お婆あちゃんなのに」

「本心ですよ。女の人の肌をみるの、生れて始めてなんです」

「まあ呆れた。相当のカマトト紳士ね」

彼女は、笑いながらグラスを満たしてくれました。こうなると職業柄、仕種に色気が溢れて来ます。

「いややわ。ジロジロみらんといて」

「オッパイがすけてますよ。いい眺めだ」

「駄目。着替えをする間、むこうむいてて」

「すぐに帰ります。だからそのまま置いて下

さいよ、恩に着ます」

婦人用の甘い酒が、私をだいたんにさせました。情けない事に水分は充分な筈の咽がカラカラで、いやに緊張して落着きません。やぼな代議士が昔いて、売春防止法なるものをつくってから、私の田舎では、実力で女性をカモらぬ限り男の醍醐味を体験するチャンスには恵まれないのです。

彼女は水商売の女、しかも私の車が拾った事で命拾いをしている女。小説の筋書にして不自然な程の好機到来という訳で、私の男としての血潮が騒がない訳にはありますまい。でも心でそうは思っても、イキナリ抱きつくなんて芸当は、並の人間では出来ない事です。拒絶されたらいい面の皮。恩人変じて狼となる、では戴けません。諦めて私は帰る事にしました。彼女は千円札を数枚、差し出しました。

「六百円だけ下さい」

「ほんのお礼です、もってって」

「折角やけど、恵みをうけるの嫌なんです」

「恵みやなんて、そんな」

「仕事で偶然こうなったんです、洋酒を御馳走にただで充分ですよ」

未練たらしく、私はズボンを穿きました。

「能美、さんでしたわね」

「そうです」

「おくさん、いらっしゃるの？」

「残念でした、チョンガーですよ」

上着をきました。

「じゃあ、女だけにしておげられるお礼ならうけとってくれはるかしら」

「……………」

「お古で悪いけど、……………失望させる程お婆ちゃんでもないつもりやけど……………」

来た、来た。遂に来ました。私は彼女を直視しました。彼女。名を房代と云いました。

その四

私は、醜男を自任しています、顔の造作は勿論、肉体的にも自信がありません。ですから或は一生独身でな事になるのではなからうか、と甚だ心もとない心境でありました。それぐらいですから、たとえ商売女でもお情けを頂戴した事は、正に天にも昇る酔心地であった訳です。房代の肌は素晴らしいものでした。これ程の女が、どうしてこんな商売してらんだらう？ そうです、私は勝手に房代という女をパンパンと思ひ込んでいました。そうでなければ、車のシートを汚しただけの返

礼に、女性が体を提供する訳けはありますまい。

「またいらしてね」別れしなに房代は車の傍までついて来てそうだったのです。私は売上金の一部を差出しましたが受取ろうとはしません。でも又くれば、ぜにが要ります。そして情けない事に、そのぜにがないのです。当時の四万そこその月収でも、やりくりすれば房代の勤めている店（店名御容赦）に行けない事ありません。が、別の理由で一万円程、どうしても必要な事が私にはあったのです。

醜男を自任し一生独身で終るのではないかとは思っていても、矢張り人の子、恋はします。会社の無線課に勤務している芳子という名のカワイコちゃんにすっかり参っていた私は、芳子に贈り物をするための資金として月一万円宛を貯めていました。無論、一方通行の恋ですし、デイトに誘うぐらいが関の山の全く希みのない恋よりも、金さえあれば手軽に柔肌の熱き血汐に触れられる。そっちの方が得なんですが……。

大阪見物に来て破目を外し文なしになった私が、柄に似あわぬタクシー運転手になったのは、一時しのぎの小使稼ぎ。それが、ずる

ずるいすわる結果になったのが、つまり始めに申上げた或る事情なるものが、カワイコちゃん芳子に起因していたのですから、お察し頂ける事でしょう。

迷いました。迷った末に、矢張り私はプラトニックに賭けました。

パン助の房代と一時の快楽に浸るよりも、どうなるかは分らない芳子に万分の一の可能性を求めたのです。

いいところがある、ですって。飛んでもありません。金さえあれば、両天秤にかけるぐらい平気です。口惜しいけれど、月収拾数万のホステスとはとても太刀打ち出来ないから諦め？ ちゃったに過ぎないのです。

同じ頃、一人の奇人が私の前に現われました。奇人、そうです。奇クファンの皆様や現在の私に取っては彼は常人です。でも当時の私にしてみれば変ったおっさんでした。つまり彼は熱心なSファンだったのです、そして私は彼に依って、世にいう倒錯の世界の楽しさを知ったのです。彼と私の関係についてはもっと説明が必要です。でもそれは追々という事にさせて頂いて、けったいなほんまのはなしを進展させねばなりません。このままではおはなしにならないからです。

私達の商売で、一番辛い事は何だと思われるますか。酔っ払い？ 違います。客席で抱き合って変な物を残してゆくアベック？ そんな者はザラですよ。

何が辛いたって生理現象、つまり、小便です。田舎道なら立小便も可能ですが、都会のど真中だとそうも行きません。しかも、そんな状態の時に限って次から次と客がつくものなのです。急所を押さえて尻をモゾモゾさせながら信号待ちをする図なんぞは「花と蛇」の静子夫人も、かくあらうかなです。

市内の有名化粧品店グループが、映画やテレビで活躍中の女優を招待して、サイン会を催した時、私が貸切で行きました。彼女のマネージャー兼付人と一行三人でしたが、殺人的なスケジュールが組まれ、行く先々でファンの囲まれる始末（私がではないです）。それこそ小便する余裕もないのです。男性共は適当にすませますが、彼女はピンチです。四五軒回った処で、何を思ったか彼女は助手席に乗り込んで参り、発車と同時に私の膝へ手をかけて来ました。白魚のような、という形容がありますが正にその通り。生れて初めての感触に思わず身震いしたものです。

「どこか人目のない処でお茶でも……」

でも付き人は、時間がありませんというのです。私はフト、この人、例の用事だな、とひらめきました。向うへ着けば、サインを貰いたいファンが、高い化粧品を買って今やおそしと待ち兼ねているのですから、なにかと都合もあるでしょうね。そこで、小便をする間待ってくれないか？ といったら案の定私もという返事です。いい気分でしたね。

人目のない処。何処を選んだと思います。警察署です。受付のお巡りさんが吃驚らいて見送った以外、誰も気が付かずにすみしました。少々汚なく、男女の区別もありませんので、私は独得の妙なる音をききながら彼女のために張り番をしてやりました。

人間は時々、とてつもない事を考えます。まして私のような、人間として未完成な男は考える事が動物的になる傾向があります。幼少の折、天上人はウンチをする時、どんな姿勢でやるんだろうか、なんぞとくだらない事を考えたように、ブラウン管のスターが小便をする図なんぞは、想像外の、つまりこの目でみる事の出来ない雲の上の話みたいで、突然に私はみてみたい衝動にかられてしまったのです。いきなり扉を開いた時の、彼女の狼狽ぶりは御想像戴けると思います。

一日が終り、常宿であるロイヤルホテルに戻ると、彼女は、私を自室に招いてくれました。今日のお礼という事で、何か差し上げたというのです。私は厚顔を剥きだしに、
“その手にキッスさせて下さい、それだけで充分です”

ぬけぬけといったものです。

“まあ、面白い運転手さん”

彼女は、笑いながらヒタイに唇を押し当ててくれました。

何でもない事のようにですが、オケツさえ見られなかったら、こうまで優しくはしてくれなかったでしょう。接吻は口止料ともいえるものです。おまけに化粧品店から贈られた詰め合わせの香水とのしのついた封筒までも貰って、私は車庫に戻ったのです。

勤務から解放されると、私は一人でニヤニヤしていました。無理ありません、のし袋の中身は、なんと一万円札だったのです。香水は芳子にやろう、そして思いがけない臨時収入はなにに使おう。

いつもそうするように、社の近くの飲屋で新清酒ではなく、一級酒をなめながら私はそんな事を考えていました。飲みつけない上等の酒にホロリ、とした処で欲しくなるのはい

わずもがなです。私は車を拾いました。

“運ちゃん、十三にやってくれや。〇〇いうキャバレーや、知ってるやろ”

運ちゃん。いやな言葉です。いつも客にそういわれるたびに（運ちゃん、運ちゃんと心易くいな。今に見ている俺だって）と、秘かに燃やしていた敵愾心を満たすためにもドンチャン騒ぎをやりたかったのです。もっとも一万円では知れています……。

その店は、地下がアルサロ、一階がキャバレー、そして二階が料亭といった形で稼いでいます。私は見当で一階を選び、あけみという名を指名しました。それが房代の源氏名っていうんですか、商売用のネームなんです。

その五

沢山な男と枕を交す、そんな女の常識として房代は私を覚えていてくれました。のみならずボーイに耳打ちして、私はそのボーイに案内され料亭の小座敷に納まりました。酒席に必要な物が準備されてから、入って来た房代は近々と膝をすり寄せて来ました。

“よく来てくれたわ、有難う”

“ずい分、無理したんだぜ。全くの話”

“あらどうして？ あたしに逢うの、気が進

まなかったとでもいいはるの”

“その逆さ。なにしろ安月給だろう。三度の食事を二度にへらして、貯めたお金であいにきたって訳け”

こういう殺し文句は、総て営業中に覚えたものです。その意味では運転手という職業もないがしろには出来ません。でも車の中で連れ込んだ女を綿々として口説いている男ほどみじめったらしいものはありません。右注意まで。

白い手が黒い手を、そつと胸元に招じてくれます。いい気分です、ネ。

(ちり鍋二人前で二千円、野菜を追加して三千円とみて、ええっと、ビールが三百円だっけ。四本空けて千二百円か。指名料、それから室代取るのかな、この店)

色気と金気を同時に暗算するのは楽な物ではありません。ときがたちました。清水の舞台よろしく、肚を据えて、

“一枚限りしかないんだ。これで遊べるか”

“充分よ。割と安いだよ、ウチのお店”

腹の方もふくれたし、いざ、となって

“駄目。ダメヨ、やめて”

見事にひじ鉄を喰ってしまいました。

帰りしなの、何ともうっとうしい気分。こ

んな事なら一万円は芳子の預金に回すんだっ

た。なんの事はない、以前の分に利子をつけて払いに来たようなもんです。でもです、人間、最後まで望みを捨てちゃあいけません。

“こんな立派な店で酒を飲むのも、当分出来そうもねえなあ”

“そうね、無駄使いはしない事やわ”

“わびしいねえ。せめてお世辞にでも、又来いぐらいはいってくれや”

“じゃあ、またいらっしやい、ね”

“遊女は客に惚れたといい、客は来もせで又来るという、か”

“なに、ぶつぶついつてんの。あんた、わりかし古い事知ってんのね。ほら危ない、そこ階段よ。すこし酔ったのね”

レジで房代は勘定をすませました。横眼で睨んだ限りでは聖徳太子四枚の釣銭があった筈。それをさっきまでさわらせて頂いた胸の間に差し入れて

“さあ、車拾いましょう。気を付けて”

車賃も危ねえんだ。そう怒鳴りたいのを我慢して、私はシートに身を沈めました。

“岸の里まで送ってあげてね”

思わず酔顔を見開きました。

“覚えてるわね、じゃあこれ”

手渡されたのは、鍵と一万円札でした。

“俺、行けるかどうか、わからない”

“……いいわ、キイは二つあるから。でも余り飲んじゃあ駄目よ”

発車しました。

“旦那、モテモテでんな。いい年増だ。色のこう白いところがたまらねえ”

“ウヒヒヒ……”

その六

先に紹介しました奇癖のある知人の事を、私は親爺という愛称で呼んでいました。親爺の奇癖は、縛られた女を見るという事です。親爺には美しいかみさんがいます。こんな美人が二まわり程も年配の親爺と、どうして結ばれるようになったのか。おそらく私だけが知っている、興味尽きないそのなれそめは、項を改めて発表させて頂きます。ただしその際は、身元がばれる事を案じる本人の要望もあって、小説という形で発表する考えであります。もっとも私の小説は、文才のなさからコテンパンにけなされた前歴がありますので掲載して戴けなかったら御容赦下さい。

ともあれ私は、親爺に依って奇クを知り、被縛の女体に美を感じる人間に少しずつです

が脱皮してゆきました。小説もその種の物を
読み漁り、同じ理由でピンク映画にも変った
視点で興味をもつようになりました。そして
病が嵩じるにしたがって絵空事では満足でき
ず、残酷ショーに通いずめ、果ては親爺に同
行して花柳街？ に歩を運び、縛りプレイを
楽しむという、熱のあげようだったのです。
それに親爺にはかみさんと遊ぶ、奇クのい
夫婦プレイなるものが可能だったのです。

「いい若いもんが、女の一人も作れんのか。
だらしない話や、この楽しみは格別やで」

始めの内はひたかくしにしていた房代との
関係を、私は親爺に洩らして終わりました。

「恰好のモデルやんか。いっぺん縄かけてみ
いな、あんがい喜ぶかも知れへんで」

でも私には到底出来そうもありませんでし
た。男と女が、たとえ形ばかりでも愛し合っ
た振りをしている時に、その相手を縛って楽
しむなんていう気持が、も一つ納得出来な
かったのです。

「わいに紹介してくれへんか？」

「いいですよ、のしつけて進呈しますよ」

房代との関係が始まって、そろそろ一年目
が近づいていました。にもかかわらず私は、
依然として彼女を商売女としてしかみてはい

なかったのです。私以外の男とも始終寝てい
るに違いない。一度だって口にこそせなんだ
けれど、頭の隅ではそう思い込んでいたの
です。二つしかない合鍵の一つを常時携行し、
恋愛ゴツコの後、小遣金を貰う事があっても
払う事はしませんでした。

無線課の芳子の為に貯わえた金は、現物に
代って芳子の物になっていました。プラトニ
ックへの賭けは成功しかけていたのです。だ
から月に一、二度の事とはいえ、房代とのた
だれた関係は清算すべき時期だったといえる
でしょう。

親爺と私とは房代の店へ繰り込みました。

映子という若い子を侍らせて、両手に花の親
爺は上機嫌でした。私が房代の処に初めて連
れて来た客です。私はもっぱら接待の側に廻
って、親爺の酔態を観察していました。そし
て私の感じた限りでは、親爺は映子の方にす
っかり参っているようでした。

……翌る月、私には想像もしていなか
った不幸が相次いで襲ってきたのです。一つ
は、ほんの些細な誤解から生じた芳子への破
恋？ です。一年間、温めて来た恋が、あっ
という間に崩れ去り、次には交通事故で二カ
月間の重傷を負うというダブルパンチに見舞

われたのです。

治療のため三カ月間、私は大阪を離れまし
た。

帰阪した時、真っ先に親爺は云いました。

「どや〇〇にいか、房代が喜ぶぜ」

「通ってるんですか？ 今でも」

「日参や、手紙にも書いたけど、かあちゃん
としっくりせんよ。いうなればうさばらし
いうとこや」

「怖いですよ。浮気はいいが、後がね」

「なにいうてんねん。浮気いうても、わいの
浮気はきれいなもんやで」

つまり肉体の交渉はもっていないという事
でしょう。房代を縛ったのか？ そう尋ねた
い処ですが我慢しました。親爺とは共通の趣
味をもつ者どうしとして、固く結ばれてはい
ませんが、一人の女を、たとえ遊びと分って
いても共有するという事は嫌なものです。

〇〇では、房代と映子が三カ月前と少しも
変らず欲待してくれましたし、房代は隙をみ
て耳打ちしてくれました。

「久し振りよ、今夜いらして下さる」

「折角やが、キイを失くしたんでね」

「あたしのを預けます。必ずね」

「やめとく、その方がお互いのためや」

その七

房代が店から戻ってきたのを、私は体で感じていました。シングルのベッドですから重なり合うようにしなければなりません。肌にじかに感じると、墮性というのでしょうか、抱きしめてしまうのです。房代は燃えているようでした。

“淋しかったわ、とっても”

その一言にも反ばつを感じます。

“おやじは来ないのかい……”

“エッ？ なにかいった”

“なに、なんでもないや”

面倒な事は抜きにして三カ月振りの肌をたっぷり賞味しよう、別れ話は明日のことだ。

午前十時、帰り支度をしました。

“キイ、返しとくぜ”

“そうそう、早速スベアを作らなくちゃあ”

“その必要はもうないぜ。もっとも他の男のためなら関係ない事だがね”

“……………”

“俺にはもう要らない。分ったな”

“それ、どういう意味？”

朝食の仕度をしていた房代は、キョトンとしていました。

“この室には二度と来ない。つまり手を切るって事さ”

“へえっ、呆れた”

それだけいって房代は朝食を揃えました。

“お酒、それともおビールにします？”

非番の日は朝から飲むのが習慣でした。

“飲まないし、めしも喰わない”

“サービスが悪かったかしら？ すねてんのね。子供みたいで可笑しいわよ”

“俺は本気だ。お前とはキツパリ別れる”

沈黙が流れました。

“あなた。又、好きな人が出来はったん”

“またッとは、なんだ”

“だって芳子さんとは別れたんでしょ。だから又ってきいたんやわ”

“芳子の事をなぜ知ってる？”

“勿論、オーさん（親爺）からきいたわ”

“……………”

“……………”

“そりゃあ、あなたに好きな人が出来たんなら身を引きます。だって始めからそのつもりだったんやもん。でもね、一年余りも貴方一人に尽して来たのに。……怪我しはった時

も人一倍心配してたんよ。久し振りにきやはって泊ってくれたし、あたし、こんな楽しい朝

はないって……………それをいきなりサヨナラっ

てのは、随分ひどいはなしだと思わない”

“成程、悪かった。改めて頼む”

“好きな人がみつかったん……”

“解釈は君の自由さ。俺は帰る”

“いやッ、嫌よ。あんまりやわ”

“俺なんか、何の魅力もないだろう。ブ男で素寒貧で、いい厄払いじゃあないか……”

“ブ男、関係ないわ。あたしは好きなの。だからこうして尽くしているのよ”

“つくす、つくすって恩に着せるな”

“御免なさい。ネエ、悪かったらあやまりま

す。疲れて休んではるのに、あたしがせがんだんで怒ってはるんでしよう。お酒飲んで休

んで。ね、お願い”

“房代、感違いするな。俺は思いつきでいっ

てるんじゃないぞ。拾万円持ってる。事故の示談金の一部だ、納めてくれ”

“……………”

“今日までの好意は感謝している。でも俺は嫌になったんだ。知らない男ならともかく、知ってしまった以上、嫌なんだ”

“なにを？……………どういう事なの”

“芝居はやめる。な、俺はいいからその分だけ他の男につくしてやってくれよ、な”

“知らないわ、あなた以外に”

“ふん、嘘をいっても俺は知ってる”

“だ、誰の事？ なにを云い出すの”

“帰る。もう来ない。達者でな”

“まっ、まっ、ちやうだい”

いきなり胸ぐらを握って、ぐいっと引き戻されました。凄い見幕です。

“殴るのかい。二つ三つなら辛抱するぜ、手切金が少ないんだからなあ”

すうっと、房代は離れました。

“解ったわ。帰って頂戴、出て行って”

“拾万で文句ねえんだな。後で怖い兄ちゃんが現われるなんてのは真っ平だぜ。すんなりと別れてくれるな”

“別れる？ そうね、あんたみたいな卑怯な男とは喜んで別れるべきね。今までそんな人とも知らないで尽した自分が情けないわ”

“仰有るねえ。だけど卑怯はひどいぜ”

“そうよ卑怯者よ。あなたのためなら私は喜んで身を退くつもりやわ。それを、まるで私に男の人でもいるような難くせをつけて別れようなんて、卑怯もいい処やわ”

“ふざけるな、俺は知ってるぜ。名前もな”

“誰、だれなの。云ってよ”

“やめとこう。パン助に男がいたって不思議じゃあない。文句をいうのが筋違いだよな”

“あなたは……怖ろしい人ね。とうとう、あ

たしをパン助にしまったのね”

“もう止そう。処で、一つだけ取り消せ”

“……”

“卑怯者とは気に入らん。いいか取り消せ。さもないと、ぶん撲ってやる”

“いややわ。その人の名前を云って頂戴。でなければ帰さない”

“いいたりやあ、自分で云うんだ”

“あたしは知らない。本当に知らないのよ”

“そこまでいって房代は、わあっと泣き伏してしまいました。帰るに帰れず棒立ちの私。

“お店の誰かが、ねたんで、あなたに、あなたにデマをきかせたのね。誓います。五年も前に別れた人以外に、あたしはやましい事はしていません。あなただけ。あなただけなのよ。信じて、ね、信じて頂戴”

厄介な事になった。私はすっかり、へきえきしてしまいました。考えてみると、一年余りもお世話になったのは私の方で、今更、男がいるから、どうのこうのと言えた義理ではないのです。おまけに肝心な男、つまり別れ話を持ち出す因となった親爺を、房代に紹介したのも私なのです。泣きじゃくっている房代をみている内に、私は、私のエゴに自己嫌

悪を覚えていました。

(俺が悪かった、御免よ) そういつてしまえば、総ては丸く納まるのでしようが、そこが男の意地という奴。しかも悪い事に、房代は何を思ったか左手を背中に回して、帯のあたりを撫で始めたのです。多分、そこん処が苦しかったのでしようが、私はその姿勢から、被縛の女体を連想していました。

(くそっ、親爺め、俺の女を好き勝手になぶりやがって、どんな風に楽しんだのかな)

そんな時の、親爺の慾望をむき出しにしたえげつなさを知り尽しているだけに、なんとも言えない嫌あな感じがしたのです。

“もう止そうや。な房代、男の名前なんかどうでもいい。しかし、卑怯者だけは取り消してくれ。でないと俺の立場がなからう”

房代は泣くのを止めました。キラキラ光る眼で、じっと私をねめつけていたかと思うといきなり、すっと立ち上り、入口を力任せに押し開いて、

“出てってよ。このヒキウモノ”

吃驚する程の大声で叫んだのです。泣いたり、怒鳴ったり、まるでカメレオンのようにコロコロ変貌する房代の態度に、私も遂々頭に來ました。自分の事は棚にあげて、最後ま

で自分を正当化しようとする房代に、ありったけのバ声を浴びせなくては我慢出来なくなつたのです。

房代は、三面鏡の前に坐りました。早朝の事です。いくら高級マンションでも開け放しでは外にもれます。冷静に、冷静に。

“もう一度だけいう。前言を取り消せ。さもなくば男の名前を一人だけ言え”

“ふん”

バフで鼻の頭を叩きながら、房代は冷笑しました。

“取り消す事も、いう事もないわよ”

“……私、沈黙。永い時間。”

“あらっ、まだいるの。そうそう。言つときたい事があるわ。あなたね、いつもくちぐせに醜男だあ、ぶ男だっていつてたわね。自分で自分を知っている。そこん処は仲々立派やわ。それに月給も安いでしょう。いつもピイピイしてるくせに、自尊心だけは人並にある。鼻持ちならないニヤケやわ。それに得手勝手。だってそうでしょう。私が欲しくなつたらお酒飲んでやってきて、さっさとすませで、すうっと帰る。あんた私に、なにかくれた事ある。そうね、二度目だったかしら、貰い物だって香水くれた事あるわね。それも女

優さんのおいどみた口止料なんですってネ。自慢たらしきってたけど、そういうのを歯亀っていうのよ、知ってはる?”

“……”

“出歯で思い出したけど、あんた息が臭いわよ。あんまり安酒を飲まない事ね。……男のくせに、あたしぐらゐしか体重もないんですよ。今に胃ガンかなにかで死んじゃうわよ”

よくもまあ並べてくれましたねえ。ヒイ。

“お金がなくて、ぶ男で、それから安酒飲み

のスケベエ”

“それだけか? いいたい事は”

“そうね。それでもあたしは、あんたが好きやったわ。あんたが傍にいないと淋しくて、狂いそうな時もあったわ。誤解せんとして、ついさっきまでののはなしよ。……今はあんたが、ほら鏡の中にいるあんたを見ているだけでヘドが出そうよ。さっさと帰ってよ”

“まだあるかね、いいたい事は”

“一生かかっても言い続けてやるわ。あしたから気いつけて運転する事ね。骨折なんかじゃあ、済まないわよ。ほっほっほ”

“おいっ、パンパンやろう。俺の質問にも答える。男の名前をいうんだ”

“……”

“そうすりゃあ、自分で自分が惨めになる、俺を呪う理由もなくなるさ”

“なんとでも仰有い。パンパン結構よ。でもね、あんたみたいなウストラトンカチに無料のみつぐ程のパンパンなんか、もう二度と廻りあえないかもよ”

“言うんだ。……どうしても言えんのなら、言うようにしてやるぜ……”

“へえっ、どうするっていうの?”

“拷問にかけてでも吐かせてやる”

“ゴーモン。あら面白いわね。やってんしゃい。でも、やれるかしら、あんたに”

“望みなら、な”

“望むわよ。でも、でもよ。あたしがどうしても返答しなかったら、どうするつもり?”

“……”

“どうしたの、目ばかりむいて……”

“お前の好きなようにするさ”

“あらっ、ほんと。いいわ、先ず、あんたからね。あたしは言わないわ。……その代り、

あんたには言わしてあげる。侮辱して済まなかった、俺は卑怯者ですって。……さあ始めましようよ。好きなように拷問して頂戴”

男と女の腹の底からの憎しみ合いは、こうしてはじまったのです。



愛する奇クよ

何処へ行く

田 中 八 郎

最近の奇クを見ると、またぞろ議論の花が

ちらほらとして来た様だ。中には、太田三郎さんの様に、議論は本誌の内容や質を向上させると、素朴に議論の効用を信じている人も居られるが、そこは、些かむづかしい処である。議論のうまい者には敵わない——これは

本当である。

毎度、西条操さんや芳野眉美さんなどは、叩かれているが、筆勢は衰えるばかりか、益々盛んになっている。読んでもつまらないから、極く素朴に彼等の作品は面白くないと感想を誰かが述べると、夜乃探郎さんの様な三

百代言が出て来て、諸君はつまらないと思うかも知れないが、実は、あの作品は、彼なり神酒に依る人生哲学が、創作と云うジャンルで美的に開花したもので、大変な傑作だと云い聞かされて、たちまちパンチを見舞われてしまう。まるで文壇そのものの人間模様ではないか。が、ここは文壇ではない。

他誌ならいざ知らず、ここでは、つまらなければ、作品の生命はおわりである。

私も西条さんや芳野さんの功労を知らぬ訳ではない。西条さんの作品は読む気も起らないから良く知らないが、芳野さんの作品はずっと以前から親しんでいたから、今でも、もしやと思って付き合っている。当人は、洒落ていると思っているかも知れないが、何とも云えぬあの妙な会話を矢鱈並べ始めた頃からさっぱり面白くなってしまう。

夜乃さんに云わせると、これが美的開花となる。全く美的開花などと云うものはつまらないものだ。他の世界なら尤もらしい文に通用するかも知れないが、奇クの世界では、賢し気な言い草など最早通用しない事を夜乃さんも知る可きだろう。

名指しの棚卸しはもう止めるが、こんな事位でひるむ夜乃さんではあるまい。どうせま

た、うまい事を並べ立てるに違いないが、文章が仲々洗練されている丈に余計可笑しい。

とにかく、最近の奇クは、質の向上を目指す余り、何か大切な肝腎要のものが、欠落してしまつた様な気がしてならない。読むに耐える様なものが精々一、二篇と云うのでは余りに淋しいではないか。嗜好が多岐に分れてゐるのだから、一、二篇で沢山と言われればそれまでだが、それにしても、この俚では奇クは私達のものでなくなるのではないかと、つい私などは考えこんでしまう。

それなら、お前は、どんなものが読みたいのか、と諸君は訊くだろう。

扱て本題に入る。

先ず私は、何らかの理由で奇クに掲載されなかつた山なす作品に溜息をつく者である。

おそらく文章の稚拙なもの、条例に抵触するものなどが、大部分と思われるが、私にはそれらの作品の沸騰しようとして、上から蓋をされ無理矢理押さえつけられる為に、まるで怨霊の様な呻き声をあげて、奇クの倉庫の奥深くのたうちまわっている様子が、手に取る様に見える。彼等が陽の目を見る事は先ずないだろう。

しかし、それでも私が、それらの作品を読

みたいと云つたら、これは我尽である。

我尽を承知で私は云う。

私は、発禁前即ち白表紙以前の奇クを想い出す。懐古趣味などと思わないで貰い度い。

あの頃は頁を繰る手が慄えたものだ。少くとも息を止めなければ読めない様な緊迫した読物が、五篇や六篇は載っていたものである。その大半は、告白や手記だった。勿論、今でも編集者は、告白や手記の掲載を心掛けてゐる事は知っている。しかし、世の趨勢とは言いながら、構成に重きを置くせいか、どうも小説や廻覧板の様なものに比重を掛けてゐる様な気がしてならない。

奇クを初めて手にした者の、身体中の血が一気に逆流する様な感激は、私の見る処では写真や小説よりも、極く素朴な告白や手記にある。新聞、雑誌の人生相談欄の面白味は、覗き見ばかりにあるのではない。他人の経験や境遇を通して自分の経験を上げたり、境遇を再認識したりする処にある。

投稿する者は、発表の場が何処にせよ、奇クの場合なら尚更であるが、誰にも話せなかつた事を永い間あれこれ迷つて、とにかく聞いて貰い度いと云う気持一途に、書く決心をするのである。

そして、この様に止むに止まれぬものは必ず読む者を動かす。要するに、止むに止まれぬものの中にこそ、肝腎なものがあるのだ。だから、たとえ文章が稚拙であろうとも、一向構ひはしない。むしろ、訥々とした下手糞な文章の方が望ましい位である。

とかく、文章の上手な人は、文章の流れの關係上、易きに就くか、核心をそれてしまふかするので、矢鱈博学ではあるけれど、どうしても底が浅くなつてしまひ、訴える力が弱くなる。止むに止まれぬと云う必然性は、間口こそ狭いが、奥行のとてつもなく深いものなのである。博識と必然との間に特に關係のないのは云うまでもあるまい。

それをさしたる必然性もない癖に、常連などとおだてられて書くから、うわべはきれいに纏っている様に見えても、極めて内容のお粗末なものしか出来なくなる。由来常連と名が付くものに、碌なものがあつたためしはない。最早や、彼らには、底をはたいても「聞いて貰い度い」などと云うものは無いと私は見ている。同好の志だか常連だか知らぬが、そんな連中を集めて発散してしまえば、万事おしまひである。

最愛の奇クを、こんな手合ひに荒らされて

はたまらない。

私が、埋れた作品に溜息をつくのはこの為である。

私は、なにも奇クに美的開花した様な文学作品や、駄洒落に満ち満ちたジャーナリストイックな作品を期待しているのではない。奇ク以外では読めない様なものを望んでいる丈なのだ。こんな事を書けば、本誌の質の向上に心を砕いている編集者や、発禁を恐れて、どんな形でもいいから存続して欲しいと願う愛読者の心証を或いは害するかも知れない。

しかし、重ねて云うが、私は本当のものが読みたい、唯それ丈なのだ。勿論、虚構、結構である。どうしても聞いて欲しい止むに止まれぬものがあれば、必ず読み取られる筈である。誰かが虚構は宿命と書いていたが、私に云わせれば権利である。

しかし、虚構に固執すれば、中味が水っぽくなる。体験の重みや、身銭を切った苦しみが殆んど反映しなくなるからだ。

あちこちとさしさりばかり考えている臆病な打明け話程、聞く者を退屈させたり馬鹿にするものはない。そう云う者は、不思議に肝腎な処以外で、矢鱈お喋りになる。

私は、プレイと云う言葉が嫌いである。いや、嫌いになった。何故なら、使い過ぎるからである。別に脛が曲っている訳ではない。

週刊誌にもちよくちよく出て来る昨今である。これだけ一般化させた奇クの功績は偉大と云えるかも知れないが、普及する過程で言葉の本来の意味が不純物の混合に依って可成り曖昧となって来た様に私には思われる。プレイと云う言葉は、曾ては、私達奇クの愛読者のみが知る一種の合言葉だった。

より切実で真実なものを、それ故に軽くプレイと云って退けるニュアンス。しかし、軽く使っては見たものの、その切実さや真実の重みに、つい身体が震えてしまうと云った語感を、プレイと云う言葉に曾て私達は附加していたのである。

それは、秘密の遊戯と云うより、禁欲的な遊戯でさえあったのだ。だからこそ、天と地が、ひっくり返る様な感激もあった。

私達は、タンタロスでいい。むしろ、タンタロスでなくてはならない位である。たとえ奇クに依って果実が更に美味になろうとも、私達は果実を摘まない方がいい。何故なら、美味は、頭の中の観念に過ぎず、果実の中にはないからである。

何月号だか忘れたが、山本一章さんがプレイの中で、相手の女に猛烈に平手打ちを喰わせながら、何の為に殴るか自問している場面があったが、こうなってはお気の毒に山本さんは、もうピエロでしかない。多かれ少かれ現実にプレイを求める者は、その為に罰を受ける。前後の見境いもない程狂暴な衝動に駆られ、狂人さながらに相手を殴りつけたのなら、まだしも山本さんは救われたらう。

しかし、私達は絶対に狂人であってはならない。実際にSMプレイと云うものがあるとするれば——私は観念の中にしかないと考えている——その快感は一にも二にも衝動の自制にあると思うがどうだろうか。自制の限界で突破して噴き出す衝動を、もう一度根を限りに押える。これが私の云う禁欲的な遊戯であり、こう云う自制が今まで奇クを作ってきたのである。だから面白かったし、迫力もあった。ところが山本さんには——度々山本さんの名を出して済まぬが、勿論これは山本さんばかりではない——私の見る処では、自制がない。自制しなければならぬ程の衝動がない。むしろ現物を前にしてとまどっている。必死に自分を咬しかけている姿は、痛ましい限りである。

しかし、これは良識？　を備えた常識的な社会人なら当り前の事である。観念を現実に置き代えようとする者は、行為自体に復讐される。そうして、現実を掴んだ時には観念を失う。だから、現実を前にして空しいのだ。

観念は衝動を生み、私達を唆しかけはするが、実現には協力しないものである事を理解しなければいけない。

要するに覚めたプレイ程衰れなものはないと云う事だ。それでも強行すれば、観念と現実の間に、無窮に横たわる荒涼とした砂漠の真唯中で途方に暮れるより他はない。

こうした事は、プレイと云う言葉に余りに正直すぎる為に起るのである。要するに、まともだから起ると云えば云えるだろう。

だから私達は、皆この危険を持っている。

しかし、実現の為の衝動は、押えかねる程押えなければいけない。私達は多かれ少かれ現実の空しさを知っているからだ。にも拘らず小出しに、しかも極めて臆病に衝動を発散させようとする試みが方々で為されている。昨今矢鱈流行し始めた夫婦プレイなどと云うものもその一つである。発散と云う言葉は、ストレス解消など云う矢張り昨今流行の精神医学かなにかに支えられて、一種の健康生活

を指向しているように見えるが、私に云わせれば、発散して獲得するものは、空虚丈であり現実から裏切られる事である。

ところが、これが夫婦プレイを行っている人達の報告に依れば、明日への活力源となるそうだ。どうして、こんな各な料簡が、明日の活力となるか私には判らない。しかし、実際にはこんな各臭い、全く迫力のない報告が奇クには満載なのだ。

夫婦和合と云う大義を以って、変態遊戯を家庭に持込んで一体何が面白いのか。

それぞれ亭主は、女房を口説くのに涙ぐましい努力をしている様だが、気の毒な事に、仮りに努力が実ったとしても、そこには狎れ合いの覚め切った道化芝居しかないではないか。こんな事を書けば、どうせ「道化芝居、結構。それで楽しんでるのだから、お前など口出しするな」と来るに決っているが、私は怯まない。

人間には強弱の差丈で、誰にでもSやMの傾向があるものだ、などと云う利いた風な心理学に飛びついて、女房相手に変態の学習に一生懸命む連中は、一体勤勉なのか、おっちょこちょいなのか、私には全く判らない。

これでは、「貴方もSMになれる」などと

云うハウ・ツーものではないか。

「私達夫婦は、プレイにこんな工夫をして見ました」「私達は、お互いに理解と労わりを以ってプレイを行って居ります」「信・頼・出来る同好の夫婦の方、プレイの交歓を致しませんか」「仕事に支障がない様に、土曜日の夜大プレイを行って居ります」等々最近の奇クに屢々掲載されるよう云った文章を読むと私などは、つい世間の出しゃばり女房族を掻き集めて愚にもつかない対話をさせるモーニングショーや、出っ歯のおばさんが、にこやかに、しかし極めて真面目な顔をして大根を切り乍ら講義する料理教室を、思い浮べてしまう。女は掃いて捨てる程世間にはいるが、奇クの世界に向く女となると余りいない。そこで、各人女房攻略となる訳だが、どうも彼等の報告を開いてみると、「御蔭げをもちまして、私達夫婦も目出度く変態になりました」とでも云っている様で、身体中がむず搔くな。又、常連の諸先生方が「良くぞやった」とか、「お羨やましい」などと、唆しかけるものだから、我も我もと調子に乗っているんな夫婦が名乗りを上げ、誌上で見栄を切る。それでも迫力があれば、この芝居観ていても良いが、中味は猿真似ファッションショー

である。やれ縄目がついた、やれ身体が痛いなどと云われて、御亭主謝まり乍ら、マッサージに大童。全く様にならない。そんな相手など抛り出しておけばいいのに。後で謝まる位なら初めからやるなと云い度くなる。

恐る恐る相手の顔色を窺い乍ら、屁っぱり腰でやるのが、こう云った手合いの云う相互信頼と理解なのだ。何と浅薄なものではないか。しかし、私が呆れるのは彼等に対してではない。彼等なら如何にもやりそうな、むしろ自然な成行きだとさえ思える。私が本当に呆れるのは、こう云う各臭い連中が、矢鱈奇クにのさばりはじめたのを、喜んでいる者が居る事だ。

奇クは、軒を貸して、母屋を奪られた。

現代文明のメカニズムから疎外されたサラリーマン群が、刹那的な享楽を求めてレジャーとやらに向う様に、或いは、現実逃避を健康生活とか悠々自適などと自らを誤魔化して園芸や盆栽などの微温的な趣味に埋没する様に、大挙してSMの世界に、奇クに流れ込んで来たのである。しかも、彼等一流の、尻の穴の小さい陳腐なモラルを引っ提げて。謂わば、程度の低い団地のモラルをである。

だから、明るい健康な変態生活を営んで居

りますなどと云う寝言も出て来る様になる。

私に云わせれば、こんなものは女子供の全く取るに足らないモラルである。こんな風潮に迎合して、これが最も良識ある大人のプレイなどと考えている者が居るとすれば、正しく噴飯ものである筈なのだが、それが居るのだ。不潔にして不健康な考えと云うものは、彼等の意に反して、実は、こう云うものを指している。殊更プレイを明るがる事もないし健康がる事もないではないか。女房への遠慮だか作戦だか知らぬが、とに角、図々しい論理である。

陰気、結構。変態、結構。なまじ如才なくやろうとするから、プレイと云う言葉が墮落した様に、誌面が墮落する。奇クを作っているのは私達読者である。従って、誌面を墮落させるのも読者である。

奇クが変ったのは、読者層が変った為だろうか。条例抵触を警戒する余り、一般世間の陳腐なモラルを知らず知らずの内に背負い込んでしまった為であろうか。

他人は私を、編集部の苦勞も知らない時代錯誤を犯している世間知らずの我僣者と見るだろう。そうかも知れない。しかし、時流とか風潮などと云うものを問題にしないのが私

の流儀である。

私の価値判断には、面白いもの、詰らないものの二通りしかない。新しいもの、古いものと云う区分けは私にはない。

千年や二千年そこらで、そうそう人間の性根が変る筈もないではないか。

もう一度思い起そう、私達は何故奇クを買うかを。

まさか、出来損いの料理教室の様な夫婦プレイや、「飲ませろ」「いや飲ませない」などと云う血の通わぬ薄っぺらな台詞のやりとりを読みみたいが為ではなからう。

切迫したもの、血の通ったもの、即ち面白いものを読み度いからである。

そうした投稿者は、多かれ少かれ傷付いている。私は、行間に血の滲むのを見る。私の血が、相呼応して騒ぐ。

……………

些か、私は大人気ない書き方をしたかも知れない。

しかし、私は約十五年間奇クを愛読して来た。奇クを愛すればこそである。御諒承頂き度い。反駁があればお引き受けする。矛盾や、説明不足も多い筈である。

ある試み



——— 亜 流 ———

ピンクシネハント

山 口 広

があり、流暢なペンと、それ以上に優れた写真技術が私たちを惹きつける。しかし本当はその奥にあるSMを追求し、プレイに徹しようとする気持ちが、多くの読者の支持を得ているのであろう。

私もSM人のはしくれとして、氏の筆力、カメラ技術にあこがれる。それよりもっと羨ましいのは、氏のハントされる勇氣と行動力である。それは私の徹しかたが足りないからであろうが、それだけの実行力が伴わない。不甲斐ないことである。

山本さんの「この女と」も辻村さんのハントとはちがった持味があり「痴人の糧」の現実版の感じもあった。山本さんのハントに毎号お目にかかれないのは淋しいことである。

○ 東山映史氏らの精力的な紹介が続けられているが、いわゆるエロダクシヨンのピンクシネも、初期の頃のベッド上でのからみ合いだけでは観客を惹きつけられなくなり、随所に機会のあるごとに、責めと縛りを持込んで来た。その傾向は大手五社の作品にも強められはじめた。そのものずばり、拷問とかリンチとか、題名で釣ろうとする傾向さえ見られる。自分で手を下すわけにはゆかないが、スクリーンでは、我々をかなり満足させるシーンも展開されている。しかもそうしたホットシーンは殆んどが色つきである。

そこで私は自らの手で、何とかその一瞬の後は消え去るシーンを固定しようと、ピン

本誌を飾るもの。何年も連載されて満天下の読者を魅了しつくす大作あり、貴重な文献的資料の解説あり、奇クサロンの僅か一段に収められた詩歌あり、それぞれに趣きを異にして彩をそえて^{いろどり}いる。発刊以来、多少の消長はありながらも続いてきたグラビヤの頁が姿を消して早くも五年になるが、ここ数年の本誌をささえる一つの支柱として、辻村さんの「SMカメラハント」は大部分の読者を惹きつけている。

氏のハントは、真実のみのうったえる迫力

クシネのハントを試み、何度かの失敗の後にやや成算を得たので、それを御紹介したい。

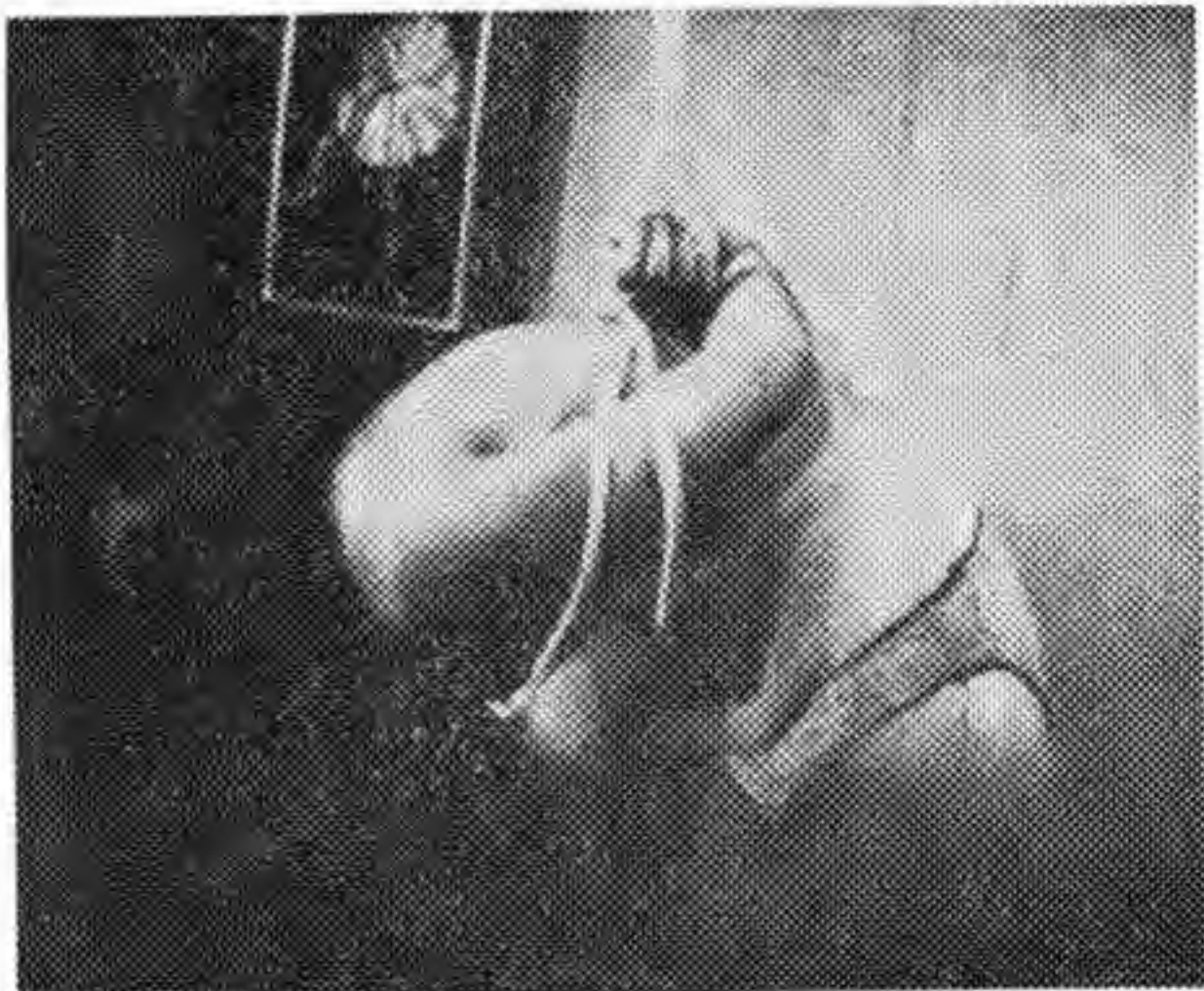


よく知られているように、現在の映画は24コマで上映されている。一秒間に24回の割合で三五ミリフィルムに横位置で撮影されたシネ判（ハーフサイズ）の陽画がスクリーンに投影される。一コマの時間24分の一秒のうちその三分の一だけ、フィルムが固定されて投影され、残りの三分の二はシャッターが閉ざされて、フィルムが送られる。人間の眼はごく短い間の暗黒を知覚することができず、明るい場面の残像を感じるので、映写スクリーンは輝き続けているように錯覚する。正確には72分の一秒の投影と、72分の二秒の暗黒が繰返されているのだ。

次々に投影される場面は、ほんの少しずつちがうので、我々は連続的な動きを見ているように感じてしまう。



近年、カメラとフィルムは急速な進歩をとげた。殆んどどのカメラはフラッシュと同調するようにまでフラッシュ（ストロボ）が普及してきた。35ミリカメラでは、レンズ交換可能の、固定ミラー、TTL方式の自動絞りの



一眼レフが進歩の極限を思わせる。価格の安い大衆カメラですらEEの機構を持ち、スナップ写真に便利になっている。

フィルムも高感度、微粒子のものが容易に入手できるようになった。暗い所でも鮮明なネガが得られ、小さいネガから大きな引伸し印画が得られる。

カメラ屋にフィルムと云えば黙って渡してくれるのがフジのSSである。SSの感光度はASA（又はJIS）一〇〇である。AS

Aの数が大きいことは、感光度がよいことを意味する。国産品で市販されているフィルムでは、フジ又はサクラのSS^{スリーエス}が最も感光度がよく、共にASA二〇〇である。

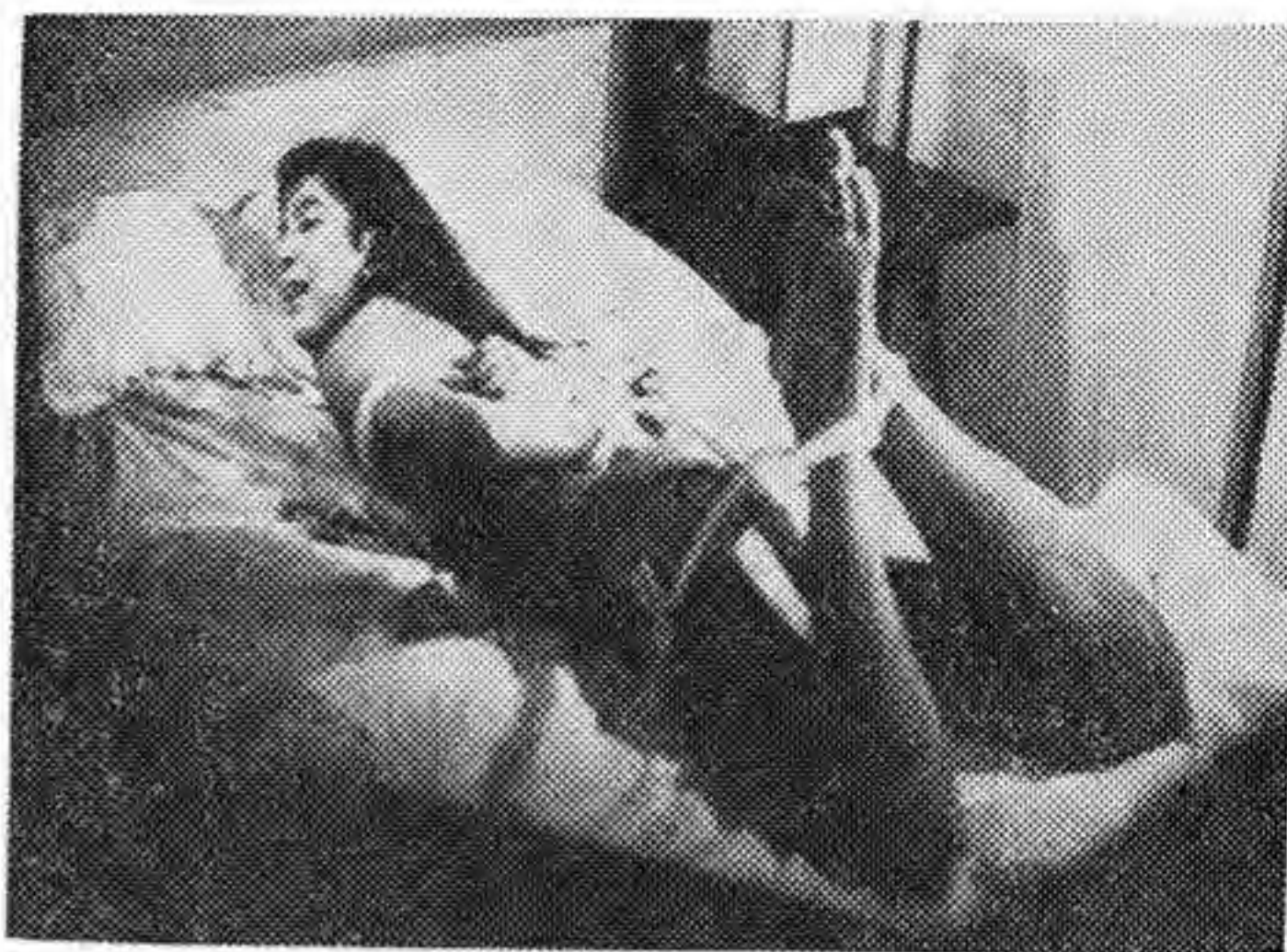
しかし通常手に入るコダックのXX^{トライエックス}はASA四〇〇、とSSSの倍も感光度がよい。しかも粒子はそれほど粗くはない。元来、感光度と粒子の粗密は全く逆の性質があり、感度のよいフィルムほど、粒子は粗いのが普通で、この欠点はまだ完全には解決されていない。

都会の大きいカメラ店ではコダックのRE135と云うフィルムを見かける。これはASA八〇〇、増感現象をすればASA一六〇〇でも使えるとか。このフィルムは、カメラに出し入れするときには暗室で行なえ、と云う殺し文句が記入されている。



映画の画面はかなり暗い。館内は一步足を踏み入れるとつまづいてもわからないほど暗い。ところが人間の眼は有難いもので、ものの五分も経たないうちに、画面にさんさんと輝く太陽をすら感ずるほどに、速かに微妙な調節が行なわれる。

館内でスクリーンに向かってEEカメラを使



って見れば、例えばF2でSSSを使っても十分の一秒程度のスローシャッターを使わねばならない。

スローシャッターを使うとき、二つの難点が出てくる。その一つはシャッターの開いている時間内のカメラブレである。どんなに鮮鋭なレンズを使っても、カメラが動いてしまえば像はぼける。カメラブレは手持ちではと

ても防ぎきれない。しっかりした三脚の上にカメラを固定して、シャッターボタンをシリーズで押すほどの注意を、はらわねばならないとカメラ雑誌は説く。

しっかりと固定したカメラでスローシャッターを使ったとしても、次に困るのは、被写体ブレである。前に述べたように、映画のスクリーン上の画面は、一秒間に二十四コマで次々変っていく。動きを追うシーンでは、次々と画面は少しずつ変っていくので、その画面が重なって撮影されてしまう。運悪く場面が一転するような時には全く異なる像が二重に写ってしまう。

実物を撮影するときには、光量不足なら補助光源を使って被写体を輝かせ、不要な影を消したり、陰影をつけたたりすることができる。しかし映画では却ってそんなことをすると、スクリーン全体が白くなるだけで、他の客に怒鳴られるのがおちである。

カメラブレと被写体ブレを防ぐためには、感度のよいフィルムを使い、大口径のレンズを用いることしかない。

大口径レンズのついたカメラを使って、而も絞りを開放で使えば早いシャッターが切れ

るので都合であると書いた。だが、大口径レンズを開放で使うことは、一つの難点が生ずる。スクリーンをフィルム一杯に写そうとすると、かなりスクリーンに近く位置せねばならないからだ。三五ミリカメラで五〇ミリの標準レンズをつけると、スクリーンをフィルム一杯にするためには、スクリーンから十米以内に接近しなければならない。この距離ではレンズを開放にすると焦点深度（はつきりとピントを結ぶ範囲の奥行き）は非常に小さく、二、三〇糎以下になる。そこで折角スクリーン上に鮮明なピントを結んだシーンでも、スクリーンの中央部と周辺部で、フィルム上にはピントの甘さに差が出て来るおそれがある。更に、大口径レンズをつけたカメラはかなりかさばり、その上、重くなってしまう。これは咄嗟の場合の撮影に不便であり、つい画面を見損うことになりやすい。

——〇——〇——〇——
 昨年の夏、ふと飛込んだピンクシネを持ち合わせたカメラで撮ったのがはじめて、種々試みた。使用したカメラは、

一、キャノネット（キャノンレンズF1.9、四五ミリ）初期のもの。

二、ライカ、3C（ズミタール、E2、五

○ミリ)

三、オリンパスペンEES (ズイコー、F2.8、三〇ミリ)

の三種類、フィルムは、フジF、フジSS、コダックXXXである。

それぞれのカメラは特長もあり、欠点もあるが、辛うじて見られる写真ができてしかも簡便なのは、オリンパスペンEESにコダックXXXをつめて、F2.8で手動(シャッター速度三〇分の一秒)で使うことであった。出来上がったネガはやや露出不足を感じさせたが焼つけの過程で補うことができた。

スクリーン自体が硬調であり、細かい黒点が並んでいるが、この黒点はそれほど目立たないので、軟調に仕上げる方がよいのかも知れない。慣れればそれほど気にならない。いわゆる「雨が降る」と云うフィルムのすり傷や、スクリーンの継ぎ目は、印画になるとかなり目ざわりである。

カラー場面でも殆んど同じような印画が得られた。映画館のスクリーンのように鮮明なものには得にくい、自分の好むシーンが永久にひそかに見られるのは楽しいことである。

シャッターチャンス逃さぬためには、その映画を写さずに観て、二度目に撮影するの



がよい結果を得るものとなるであろう。

—○—○—○—

うまく印刷されるかどうか、危ぶまれるがスローシャッターによる失敗(場面が一転して、二重写しになったものと、一応は見られるものを数枚、お送りした。これらはすべてハーフサイズのネガからの引伸しであり、この程度には写ると云う例である。

フィルムの現像はDP屋に頼んだものもあるが、引伸しは全部自家製であるだけにもっとうまくなる可能性を残している。

機会があれば「ピンクシネハント」に適し

たカメラを入手して大いに楽しもうと思って居るので、試験結果は又報告したい。

—○—○—○—

経験的に、ピンクシネハントに適当なカメラをカタログから拾って見ると、

一、撮影枚数の多いカメラ——必然的にハーフサイズカメラになる。

二、25分の一秒のシャッタースピードのあるカメラ。——どこにでもある。

三、焦点深度の深いレンズのついたカメラ——ハーフサイズの方が有別である。

四、大口径レンズのついたカメラ——35ミリカメラの方が多い。

乱写することも、写真上達の一つの方法であると云われる。この意味も含めると、ヤシカのハーフ17か、オリンパスペンFTということに落着きそうである。

—○—○—○—

映画のシーンや題名、それに縛られている女優の解説は東山映史氏や、その他の方々のものにある筈です。

もっと写真技術が向上したら(あやしいものだが)良い物をお目にかけます。

——おわり——

私 評

最近の

奇クに思う

山上四郎

一、珍作イーリアス

ここ三カ月間での最も変わった作品は、四月号に載った黒瀧一氏の「贗作イーリアス」にとどめをさすであろう。

とにかくおもしろい。アイディアの勝利である。日本近代史に名高い日露戦争を題材に採り、地上で日露両軍が戦っている時、天上では、オリンポスの神々と高天原の神々がそれぞれロシア軍、日本軍に分かれて相対するといった着想は、題名のとおりトロイ戦争を扱ったホメロスの名作イリアッドからきたものである。

トロイ戦争が、ヘラー、アテナ、アフロデイトの三女神の美人争いに端を発していることは周知の通りであるが、この時オリンポスの十二神は二つに分れてトロイ軍、ギリシャ

軍を応援した。

トロイの王子パリスによってコンテストの第一位に選ばれたアフロデイトは当然トロイ側に、残る二女神はギリシャ側に、ゼウスは中立であった。

日露戦争なら、何もギリシャの神様をもつてくることもなからうにと思われる人も多いだろうが、いかんせんロシアにはギリシャ程に名のしられた神話がない。

それに、中世のヨーロッパにおいてギリシャ、ローマの文化の流れが中絶した時期があった。

これはやがてルネッサンスで復活するまで続くのであるが、その間、ギリシャ文化を受けついでのが、初期のロシアであったのだから、その義理もあってオリンポスの神々が、ロシア軍のため出陣したと考えればよいであ

ろう。

結果として、神々の戦いは高天が原軍有利のところまで終わっているのであるが、最初は気がかりなこともあった。我々としては高天が原軍に勝たせたいのだが、オリンポスの神々はその王座につくまでタイタン族などと戦った記録があるが、我高天が原一族にはない。その上、オリンポス軍に、英雄ヘラクレスが加勢しているのは不公平である。それなら高天が原側にもヘラクレスに匹敵する英雄、日本武命をつけるべきだ。

物語は旅順攻略までの日露両軍の動きに従って展開されていくのだが、たんに戦争場面ばかりではなく、ちゃんとSMファンの喜びそうな場面が挿入してある。

ギリシャ側では、ヴィナス（アフロデイト）ダイアナが、高天が原側では、豊玉姫、天宇受女、木花開耶姫が敵方に捕えられ、それぞれ裸にされてしぼられる。

高天が原側は、ヴィナスをとらえて、裸のまましばりあげ、さるぐつわをかまして輝を締めさせる。ダイアナはただ縛るだけ。

物語の進行よりも、こちらの方が気にかかったのは私のいやしい根性からだろうか。

高天が原側はこの程度だが、ギリシャ側の扱いはひどい。現在ならさしずめ捕虜虐待で訴えられるだろう。豊玉姫はうまく脱出したが、天宇受女と木花開耶姫の場合は残酷だっ

た。木花開耶姫は真裸にされて、ぐるぐる巻きに縛られ、白玉山の下に埋められてしまふ。ゼウスを誘惑しようとした天宇受女になると、ヘラーのしつとをかい全裸にされ縛られたうえに、その豊満な体によってたかつてむちでぶたれてしまふ。

何しろ、出てくる神様は両軍合わせて60神以上にもなるのだから調べ上げた黒瀧氏の努力には頭がさがる。

ただ気になるのは、——黒瀧氏の文章には常に感じるのだが——、まるで明治時代の作品を読むように、漢字がとて多いということである。

従って今度のようにおもしろい話も、学会当てる研究報告をよむような気がして素直に入っていけない人もあると思う。

二、縛られる女たち

三カ月間に登場した女性モデル、二月号の三好留美、三月号の浅井優子、三、四月号の安井喜久子、四月号の辰巳典子。

女性のモデルは奇クにとってかかせない。

本誌の中で、名刺大の大きさの写真にあらわれる彼女たちの裸の縛り図は、多くの規制をはめられた奇クのささやかなる抵抗か。

だから、モデルになる女性たちには条件がある。顔は並でもかまわないが、肉体の豊満なこと。全てはそれにかかっていると私は思

う。豊かな乳房にくいこむ荒縄、それが私の興味をさそうのだ。

その点、三月号の浅井嬢は落第である。女性に対して失礼ない方ではあるが、彼女はやせすぎている。胸もうすく線も細すぎる。

このモデルに、ファッションモデルのようなタイプの人は向かない。グラマーが良い。

安井喜久子嬢は二カ月連続登場、売れっ子である。この人を嬢と呼ぶのはおかしい。すでに結婚してご主人がいらっしゃる。すえ、亭主がうらやましい。そうだろう、私

だってそう思う。

彼女のプロポーションは確かにいい。しかしそれ程グラマーでない彼女が我々を魅きつけるのは全て人妻だからだ。夫に体毛を捧げますがままにしばらく鞭うたれる貞しゅくな妻。それが喜久子の魅力。成熟した女の魅力それが喜久子。

四月号のカメラハントはピンク映画の辰巳典子。私は「奴れい未亡人」以来の彼女のファン。一見、やせて小柄な感じだが、裸になった時のおっぱいの大きさは他のだれにもひけをとらない。スクリーンの上で、そのおっぱいを男の手にゆだねてもだえる典子を私は何度かたんのうした。

そんな彼女も、今月は辻村氏によって縛られる。それはあたかも手のとどかぬ王女が奴れいにされるのに似ていた。

映画のなれあいとはちがった、辻村氏の容赦のない縛り。辻村氏も興奮したのだろう、最近まれな強烈な縛り。典子は裸にされ、二折りにされてたたみの上をころがされる。長い髪が肩にからむ。自まんの乳房が上下を縛られて一層こちようされる。

おっと、三好留美のことを忘れるところだった。彼女は四人の中で一番のグラマー。

おわんをふせたようなという表現があるがまさにこの言葉は彼女の乳房のためにあるようなもの。おわんをふせてふくらますと留美のおっぱいとなる。檜山文枝に似た童顔。ぽちやぽちやとしたもちはだは、指をふれるととろけそう。

辻村氏のカメラに入らないよう横を向く。いやがる彼女をむりやり脱がせて縛りあげる辻村氏は何と悪い奴か。

三、またしても「花と蛇」

私が、奇ク評を書くときに、「花と蛇」を抜くことはできない。いよいよ静子夫人の結婚式をかねた実演がもよおされた

実演は、やくざ相手と高利貸達相手の二手に別れて行われる。夫人はもちろん三階の広間でやくざのお相手をする。やぶの密室では桂子が奮闘とうした。桂子ファンはさぞまんぞくであろう。

珍しくこの三カ月間は、静子のほかに小夜

子、京子と女たちがせいぞろいしたが、私には団氏の心情がさっせられたように思う。

四月号をみればわかることだが、静子夫人はここで言語に絶するはれんちなショウを行った。それは、初めて川田に犯されて、恥しさにふるえていた夫人ではない。客にこびをうり、堂々とバナナ切りやタマゴ割りを演じる大スターの姿である。

団氏はそれをのぞんでいたのだ。高貴な夫人を娼婦以下の女にしあげる。いかに、小夜子や京子が登場してきても、やはり中心は静子夫人だ。小夜子ファン、京子ファンには申し分ないが、結局彼女たちは静子というさし身のつまなのである。

四月号で静子はすっかりショウのスターになってしまったと思う。だがさすがに団氏も良心のとがめるところがあつて、彼女を何とかすくい出そうと試みる。

捨太郎と共演しなければならなかった時夫人に動ようを与え、まだ羞恥心ののこっていることを読者に知らせようとした。

また、「元、運転手であつた川田は、かつての女主人の美しい優雅な身体の手でさすりながら云った」というような文章をかかずにいられたかったのは、氏としても、地獄に落ちこんだ夫人を助けだしてやりたかったのだろう。その反面、このことはそうでもしなければすくえないほど、静子がだらくして

いることを示している。

「ああ、口惜しいわ。割れない。割れないんです」という言葉は明らかに夫人の心からの叫びであろう。

たまごを割れずに、川田から浣腸するとおどかされて狼狽し、「まって、まって下さい」とさけぶのは、夫人が完腸をはずかしいと思う気持よりも、何とか割ってみせなくてはという、スターとしての心情の方が大きく作用しているのである。

そして最後には「許して。ああそんな事出来ないわ」と川田たちに哀願するのである。以前の夫人からは想像もできなかった、川田たちへの甘えがそこにある。すなわち夫人は川田や鬼源を仲間として意識しているのだ。夫人は生れかわった。遠山家の若奥さまはみだらなショウのスターになったのだ。

夫人の肉体が、川田たちなしでは生きていけない程の、悦子さえ顔をそむけるような女になるのは時間の問題である。

夫人が、娘の桂子や弟子の小夜子からけいべつされる時が、団氏の計画の成功する時であろう。

四、女性の投稿について

女性からの投稿が眼を引く。次第に多くなってきたことは我々読者にとってうれしい傾向である。

最近のものをピックアップしてみると、村まり子の「恥しめて」長井葉津子の「白い肌のアザ」滝佐知子の「百合子のこと」御園京子の「皮膚科の女囚」などがある。安井喜久子嬢も夫婦プレイに關す随想を送っている。

女性の原稿の特色は、殆どが告白形式のものであるということだ。それに、女性であるからかほとんどもマゾヒストである。女性からの告白は、前にも中河恵子嬢たちの作品のつたことがある。二月号の安井喜久子さんのものはその系列に入るだろう。しかし、彼女たちは既にモデルとして奇ク誌上で紹介されているので、その方の印象が強すぎて、文章の方にはあまり興味がむかなかった。ところが、近頃は全く知らない人の作品が多い。

彼女たちの多くは、Mでレズの経験を述べたてている。自分がなぜそうなったかを、短い中に書込んでいる。レスビアンはじめとした陰花植物のもつムードを本人から語られる。まことにけっこうである。

しかし、これだけで喜んではいられない。なぜなら彼女たちの作品はほとんど短編であるからだ。したがって、文章も底が浅く、盛り上がりが少ない。告白である以上無理なのかもしれないが、それならその体験をもとに一編の小説としてみたらいかだろう。きつと多くのファンから、喜んで迎えられと思うのだが……。

S.C.R. (性問題相談室) 開設

担当……弓削性科学研究所長 医学博士 弓削達人先生

お 報 せ

編集部の長年の懸案であり、近時急速にその必要に迫られていました性問題相談室 (Sex Counselling Room 略称S. C. R.) を来月号より開設することとなりました。

この欄は無料相談であり、結婚生活一般から夫婦問題、さらにホモ、フェチ、サド、マゾなど性的倒錯に関する悩みの打ちあけ、巾広いカウンセリングに応じます。また誌上公開をはばかれる方には、転送先を明記すれば仮名で解答して差支えないとの御好意あるお申出をいただいております。

おくれましたが、担当の医学博士弓削達人先生については、公的な身分はさしひかえますが、某民間病院附属の性科学研究所々長であります。

公私共に御多忙のところを編集部より無理に御協力をお願いしたものでありますから、皆様の活発な活用を期待致します。

以上簡単であります、開設に当り御紹介をかねてお報せ申し上げます。

御 挨 拶

弓 削 達 人

この度相談室 (S. C. R.) の室長をお引き受けすることになりました。

この大任を果せるだろうかと心配しています。

しかし、私も、昭和27年からの本誌の熱心な読者の一人です。多くの皆さんと同じように、性について、恋愛について人生観上の問題について、友人達と随分論じ合ったものです。

そういう意味で、私の方から、何事かを「教える」とか「解答を与える」とかいうのではなく、このセックスという、古くて新しい問題について、皆さんと一緒に考え、一緒に解決して行きたいと思っています。

そしてその過程で、またその結果として、何等かの結論を得ることができ、いくらからでも貴方のお役に立つことができれば幸いです。

どうか何なりと相談をお寄せ下さるよう、お待ち申します。

御 遠 慮 な く 相 談 を お 寄 せ 下 さ い

○本誌の愛読者の方で医学博士弓削達人先生に性問題に関しての解答をお求めの方は御遠慮なくお便りをお寄せ下さい。

○個人の秘密については絶対御迷惑はお掛けいたしません故、御安心の上、何んなりとお尋ね下さい。

○ 誌上に掲載するものについては匿名とし、御希望によっては先生の御都合のつく限り直接の解答も致して貰います。

○ 宛先は編集部気付弓削達人先生として下さい。



テレビにおける

緊縛と猿ぐつわ

吉 永 洋

テレビドラマでは、縛りはなまぬるいものが多い。緊縛の名に値するものは稀であるが、女優がきれいなことと、猿ぐつわが比較的まともなことが長所と云えるであろう。再放送

が盛んな最近の民放であるから、同好の諸氏の参考になればと思い、筆をとった次第である。ひま人の努力の所産をごらんいただきたい。

1 日本の現代劇

○「ザ・ガードマン」

今までに七回ほど、SMシーンがあった。

「私は殺られる」では、ロミ・山田が芋虫のようにぐるぐる巻きに縛り上げられて、マンションの風呂場へ監禁される場面があった。

「氷が燃える時」では、江波杏子が別荘へ誘

いこまれ、細引で上半身を縛られてタオルで猿ぐつわをはめられる。

○「平四郎危機一発」

「白い炎」では、松本めぐみが平四郎をおびきよせるためにとらえられ、胸のところを七重ぐらいに縛られ猿ぐつわをはめられて地下室に転がされる。「逃げながら追え」と「ダイヤルで探せ」では、夏圭子の猿ぐつわと緊縛が見られた。特に後者は、縛られた後手ははっきりと見えてなかなかよかった。

○「秘密指令883」

「栄光の甘い香り」は、まず出だしで、社長令嬢の磯部玉枝が誘拐される。次のシーンでは、誘拐犯人達のアジトで磯部玉枝は胸を縛られたまま気を失っている。目をさましそ

うになった彼女を見て、犯人達の一人がスカートの中へ手をつっこみ、ストッキングをぬがす。それで彼女の口のまわりを縛って猿ぐつわにするとところが圧巻。また、令嬢が猿ぐつわの上から火のついたタバコを押しつけられて声にならない声を出したり、地下室でもかくシーンがあって楽しめた。

○以上のほか、「とぼけた奴ら」では、二度にわたって川口晶が、「シャドウマン」では若林映子が、「特ダネ記者」では山本陽子がそれぞれ縛られて猿ぐつわをはめられる。

2 日本の時代劇

○「素浪人月影兵庫」

「心に虹がかかっていた」では、若手のホープ土田早苗が旗本屋敷につれこまれ、太い縄でかなりきつく縛られ、手拭いを強く口の中に噛まされるシーンがあった。また「櫛の色は赤かった」では、富永佳代子が猿ぐつわをはめられ、縛られたままカゴで運ばれる。途中で縄をゆるめ、カゴの外にとび出し猿ぐつわをはずして助けを呼ぼうとするが、すぐにつかまり、縛り直されて猿ぐつわもはめ直される場面がよかった。

○「桃太郎侍」

「危機突破」では、長谷川稀世が気を失ったまま地下室へ運ばれる。目をさまして逃げようとしたところをつかまり、手を縛られ猿ぐつわを歯の間にはめられ、足まで縛られて犯

されそうになるところが迫力があつた。

○「野次馬がいく」

「こらえろ！ 親バカ」は、生娘の血をとる山伏たちに浅野順子がかまり、穴ぐらの中の柱に縛りつけられ猿ぐつわをはめられる。その後実験台の上に体中を縛りつけられて血をとられそうになる。

○「銭形平次」

「帰らぬハト」で、八千草薫が誘拐され、黒い布で猿ぐつわをはめられてぐるぐる巻きに縛り上げられる。猿ぐつわをはめられている時の表情がなかなかよかった。

○以上の他、「江戸忍法帳」「おんな獅子」では、花園ひろみが長時間にわたって縛られ「三匹の侍・獣」嘉手納清美が猿ぐつわのままムチうたれ、「風・最後に笑う奴」では、田島和子が猿ぐつわをされて柱にがんじがらめに縛りつけられる。

3 外国製テレビ映画

外国のものから、今まで書いたような場面を探すのはなかなか骨がおれるが、その代り緊縛も、そう呼ぶのにふさわしいものだし、猿ぐつわも顔がゆがむ程のものもあって、かなり見ごたえがあつた。

○「サンセット77」

「結婚の謀略」では、富豪の娘が二人がかりで車の中に連れこまれ、古いビルの一室のベッドの上に転がされる。その娘が思いきり暴

れまわり逃げようとするのを縛り上げ、また猿ぐつわをされた娘が大きな声でうめくのが楽しめた。「幽霊は生きていた」(近日中に再放送の予定)では、父のうらみをはらそうとする若い娘が逆にとらえられ、アパートの一室に監禁される。短時間ではあつたが白眉の緊縛シーンだった。口には猿ぐつわをはめられ、がんじがらめに椅子に縛りつけられてうめいている。美人女優だけになおさら迫力があつた。(カット写真はそのスナップ)

○「ゴッホ・ナポレオン・ソロ」

「紳士は虎が好き」には、後手縛りではなかったが猿ぐつわマニアには見のがせないシーンがあつた。「アンクルは燃えているか」では、時間をとめる機械を発明した科学者に、その秘密をしゃべらせる為に科学者の娘が誘拐される。そして嫌がる娘の洋服を引き裂きシュミーズ一枚にして拷問にかける。その娘は、その後でシュミーズ姿のまま猿ぐつわをはめられ、手足を縛られる。

○その他「バークレー牧場」や「グリーンホーネット」の「悪者は吊るせ」「フィアンセ誘拐事件」や「スーパーマン」「透明人間」の「透明うさぎ」などに一見の価値がある場面が見られた。最後に書いておきたいのは二三年前「痛快シリーズ」として放送された「魔女ゾンブラ」や「スーパードレッドと悪魔博士」で、かなり古いフィルムではあつたが緊

縛と猿ぐつわがふんだんに見られ、昔の劇場用の再編集だけに、どれもがリアルで興奮させられた。

4 劇場映画

題名と女優名のみをあげれば(不明のものもあるが)「幽霊沼の黄金」(日比野恵子)「人喰い海女」(三原葉子)「祭り男道中」(高千穂ひづる)「金と女でふつとばせ」(池内淳子)「怪異宇都宮つり天井」(ダイアとねずみ)「ターザンと密林の女王」(風雲さそり谷)「びっくりり太平記」

5 子供向きのテレビ映画

○「ナショナルキッド」
「海底魔王ネルコン」海底人のアジトに潜入した探偵の美人助手が見つかり、五、六人がかりで荒縄で縛りあげられ、猿ぐつわをはめられてノコギリ台に体中を縛りつけられる。かなり見ごたえがあつた。

○「少年ジェット」

「黒い影」で、二度程楽しめるシーンがあり「紅さそり」では、和泉雅子が椅子に手足を縛りつけられる。

○その他「アララの使者」「スパイキャッチャーJ3」(梓英子)「秘密剣士」などに、大人が見ても面白い場面が何度かあつた。

(以上)

「さ、うがいをするのよ、早く」

悦子は、叱咤するようにいって、水の入ったコップを夫人の口へ持って行く。

静子夫人は、チラと感謝の眼差しを悦子に向け、眼を閉ざしてコップの水を口に含むと悦子の差出す洗面器に顔を押しつけるようにして吐き、幾度もそれをくり返している。

つい今しがたまで、口一杯に頬張った汚辱の塊り、そして、舌に受けた激烈な屈辱。その呼吸も止り、魂も凍りつくばかりの衝撃のため、今も夫人の胸は慄えおののき、洗面器の中へ口に含んだ水を吐きつづける夫人の乳房は波打ち続けている。

盛んに岩崎の機嫌をとり、酒の酌などしていた鬼源は、ふと眼をマットの方に向け、静子夫人を介抱している悦子に気づくと、急に白眼を剥いて立ち上った。

「よ、勝手な事をするんじゃないねえ」

ツカツカとマットの上へ上った鬼源は、悦子を足で押しのけた。

夫人から鬼源の足で突き離された悦子は、憤怒に顔を歪め、何か口走ろうとしたが、それを夫人があわてて押し止めるのである。

「悦子さん、お願い。鬼源さんにさからっちゃいけないわ。静子は、静子はもう落ちる所

まで落ちてしまったのよ」

今にも泣き出しそうな表情で、悦子をなだめるように夫人はいう。悦子も泣き出したい気持で、コップと洗面器を持ち、立去ろうとしたが、

「おっと待ちな。せっかく持って来たんだ。そいつはここへ置いていきな」

と、鬼源は、何か魂胆があるらしく、悦子の手から洗面器を取上げた。

そして鬼源は、客席の中で、酒を飲んでい

る捨太郎に向かって声を張り上げた。

「おい、休憩時間は、あと五分ぐらいだぜ。便所へ行くなら今のうちだ」

へい、と捨太郎は、鬼源に向かって頭を下げると、片手で前……りながら、客達の中をつ

んのめるような恰好でよろけながら、洗面所に向って走り出す。

「何でえ。もう酔ったのか。しっかりしろ」

男達は、捨太郎の奇妙な恰好を見て吹き出し、その後姿に大声をかけるのだった。

「奥様の方は、ここですますんだ。お客人もその方が喜ばれると思うぜ」

「さ、これでいいだろ。のびのびとやってみな」

鬼源はそういって、夫人の量感のあるヒップを軽く足で蹴った。

静子夫人は、両手が自由になると、優美な二つの乳房を両手で抱きしめ、その場へびつたりと立膝をして身をすくませている。横へそむけた夫人の冷たく冴えた象牙色の頬にじわじわと赤味がさし、見物人達は、そんな夫人と前に置かれた洗面器を見くらべるようにして、再び好奇の眼をギラつかせ始めた。

「よ、あと五分しかねえんだ。早くしなよ」

鬼源は、そういって、懷から一束のチリ紙を取り出すと、夫人の膝の上へ投げつけ、

「後始末する所まで一切を御見物衆の眼にさらすんだよ」

満座の中で排泄行為の強制——そうした狼共の淫虐さは、今に始まった事ではない。人間の意志を喪失した静子夫人は、かたく唇を噛みしめ、慄える手で膝の上のチリ紙の束を握りしめた。

「こぼさないよう上手に跨がるんだぜ」

鬼源は、足で洗面器を夫人の傍へ押しやるようにして、せせら笑った。

「あら、立ったままさせた方が面白いじゃな

い。鬼源さん」

外の空気を吸ってくる、と田代達と表へ出ていた千代が何時の間にか戻って来ていて、客人達のうしろへ立ち、面白そうに顔をくずしている。

「そうだ。今夜は、静子夫人の珍芸大会なのだから。おしとやかにしゃがませてやる事はない」

田代も赤ら顔を手でさすりながら、楽しそうにいうのだった。

「それもそうですね」

鬼源は、卑屈な笑顔を見せて、うなずくと体をくの字に曲げ、洗面器の上をまたごとくしていた静子夫人のふくよかな両肩をうしろから押さえた。

「千代夫人のおっしゃる通り、立ったままで演じた方が、お客の喝采を受けるだろうよ。さ、来な」

先程、卵生みの珍芸を演じたロープの下へ夫人の体を押し立てた鬼源は、再び紫のしごきを取り上げた。

静子夫人は、もうどうとでもするがいいわといったような冷ややかな表情で、顔をそむけ、その線の美しい高貴な鼻を鬼源の眼の前にさらしている。

川田が鬼源の仕事を手伝うべく腰を上げ、鬼源から渡された長い紫のしごきを肩にかけて、夫人の背後に廻った。

「さ、両手をうしろへ廻して」

片手で両乳房、片手で前を隠して立つ静子夫人は、川田に背中を押されると、美しい睫毛をびくと動かしたが、すぐに意志を喪失した卒直さで、握りしめていたチリ紙を鬼源に返し、両手をうしろへ廻すのだった。

川田の手で、キリキリと後手に縛り上げられていく静子夫人に向って鬼源は、このあと朝方まで演じる事になっている実演についての打合せを行おうとするのである。

しごきの縄尻を先程と同じように、天井から垂れ下がっているロープにつなぎ止められた静子夫人に、懐から何枚かの写真まで取り出して、鬼源は低い声で説明し続けていたが静子夫人は、片意地なまでに冷ややかな表情を作り、鬼源の突き出す写真に眼を向けていたのであった。

静子夫人がその優美な裸身を一本のロープに支えられて立つすぐ眼の前には、岩崎の妾である葉子と和枝、それに千代までが加わって、この悪女三人、何か高声で談笑し合い、酒を注ぎ合い、手を出せば、とどきそうな静

子夫人を指さしながら、笑い合ったりしている。

「ね、鬼源さん。そこでお小用させるのはいいけれど、ここまで飛んではこないでしょうね。こんないい着物にひっかけられたら型なしだわ」

千代は、そういつて葉子達と顔を見合せキヤッキヤ笑い合うのだった。そういう千代が身になっている濃い藍色地にバラ模様をつけ下げにした一越縮緬の豪奢な着物は、かつての静子夫人の外出着の一つであったのだ。

静子夫人は、そうしたかつての女中の淫靡なからかいの言葉を真正面から浴びせられても、悲しげに柔かい睫毛をそよがせるだけでその美しい容貌の中には敵意や反抗などは微塵も感じられない。一日一日と崩れ落ちて行く自分の運命に静子夫人はただ身を任せているよりどうしようもないのだ、と感じた千代は小気味良さそうに笑い、煙草を取り出して口にすると、フラフラと立上るのだった。

「ね、奥様、もうすぐ遠山隆義のお誕生日が来るんだけど、どう、別れた亭主でも何かプレゼントぐらいしてあげなさいよ」

千代は、豊満な乳房の上下に紫のしごきを巻きつかせて立っている静子夫人の美しい身

体をしげしげ見つめながら、そんな事をいい出すのだ。

「今、私ね。一昨年だったかしら、遠山家で行われた誕生日パーティの事をふと思出したのよ。あれは、奥様と遠山の婚約披露パーティみたいなものだったわね」

すると、川田も、夫人の背後から前へ廻って来て、

「そうだったけな。あの日は遠山家の庭の芝生と洋館の一階を全部使ったの盛大なパーティだったぜ。この奥様は、眼のさめるような紫のイブニングドレスに真珠のネックレス、ダイヤの耳飾り、夜会風にこう髪の毛をくるくると巻き上げてよ。俺はあの時の美しい姿がまだ眼に焼きついてるよ」

元、遠山家の運転手と元の女中が、素っ裸の静子夫人を左右からはさむようにして、そんな以前の事をふと懐しむように回想し始めたので、鬼源が周囲を埋め尽す男達の顔色を見ながら、いささか狼狽し、たしなめるように川田の腕をついた。

「滅多な事をいうもんじゃねえ。物好きな客が、この女の素姓を洗い出したら、どうするんだ」

と、小声で叱ったが、

「なーにかまうもんか。今夜の客は義理堅い事じゃ粒ぞろいときてるからな。こっちに迷惑のかかるような事をする筈はねえ」

そういった川田は、静子夫人のさも暖く、柔らかなような肌を頼もしげに眺めながら、急にいたずらっぽい表情になって、身を沈ませていく。

静子夫人は、反射的にびったりと官能味豊かな太腿を密着させる。川田は、白い脂肪のしぶきでキラキラ輝くような夫人の腿や美しい曲線を持つ下肢を眺めながら、やがて、これから、捨太郎の総攻撃を受けて、幾度となく決壊しなければならぬ柔らかな丘の周辺に煙草の煙をぷーと吐きかけて、

「遠山隆義との夫婦生活は、せいぜい三、四カ月ぐらいのものだった筈だ。え、そうだと奥さん。その間に、どれ位、ここを触らせてやったんだ。さ、答えてみな」

静子夫人の美しい象牙色の頬に刷毛で刷いたような羞み色が浮かび上る。

「何回位だったかと聞いてるんだよ。運転手風情には答えられねえっていうのかい」

「知、知らない。知りません」

静子夫人は、赤らんだ顔を横にそらせ、かたく眼を閉じていい、

「お願いです。以前の事はもうおっしゃらないで。今の静子は、もう昔の静子ではございません」

と、すすり上げるようにいうのだった。

「そうはいつでも、こちとらは、妙に妬けるんだよ。奥さんのような美しい女を、あの遠山の親父が自由にしていたと思うと、腹が立って仕様がねえんだ。毎晩かい。それとも、二日に一度かい」

そんな事をムキになって夫人に問いだした川田を千代は笑いながら押し止めて、

「ま、いいじゃない。その事は、捨太郎との実演がすんだあとで問い訊し、すっかり告白させてテープにとっておこうよ。夫となる捨太郎にとっても、この女と昔の亭主の関係は気になる事だろうからね。それより、昔の亭主の誕生日プレゼントを何にさせるか、それをこの女に決めさせなきゃ」

そういった千代は、俯向き加減に眼を伏せている静子夫人の顎に手をかけて、その美しい顔をぐいと正面にこじ上げると、

「ね、以前の御主人に何をプレゼントなさる気なの。ホホホ、と申しまして、今の奥様は、一銭の蓄えもない文字通りの丸裸。これじゃ、どうしようもないわね」

千代は、静子夫人の周囲をぐるぐる廻って
楽しそうに笑いつづける。

「素寒びんの上、素っ裸じゃ全く話にならな
いわ。自分のお小水と糞ぐらいしか、お出し
になって頂くものはないってわけね」

千代は、そんな事を面白そうにいい、羞み
と屈辱の紅が夫人の耳たぶを染め始めたのを
心地良げに見て

「仕方がないわ。明日は、その二つを奥様の
体から出して頂き、それを遠山に対する誕生
日プレゼントという事に致しましょう」

千代は、これでもか、これでもか、という
風に夫人を嘲弄し続け、悦に入っている。

そこへ小用をすませた捨太郎が戻って来た
ので、鬼源は「さ、奥さんの方も、早くすま
せて、第二部の開幕という事にしようじゃあ
りませんか」と、酒気を帯びてフラついてい
る千代をうながし、葉子の隣へ坐らせた。

鬼源は、洗面器を夫人の行儀よく揃えてい
る足元に置いて、

「さ、お客様方におねだりして、この洗面器
を使わせてもらうんだ。もう時間がねえ。早
いとこすますんだぜ」

静子夫人は、鬼源にそう指示されると、翳
の深い眼の中に哀しげな色を湛えて、小さく

消え入るようにならずき、憂愁を帯びた美し
い顔をそっと正面に向けた。

舞台上に立ち、立位で排泄行為を演じる時は
如何に振舞うか、それも長い間の調教で、静
子夫人は鬼源にたたきこまれていた。

「お客様の中で、静子の——にお手を貸して
下さる方はいでにならないでしょうか」

慄える夫人の唇から、そうした言葉を聞き
とると、忽ち何人かの男がわらわらと立ち上
った。

先程、夫人に果物を切らせた時のように、
男達は前後の見境なく、柔軟な夫人の裸身に
一せいにまといつき、関口一家の大原と南原
組の木村が、仲良く夫人の足元にある洗面器
を取り上げて、その下あたりに当てがうのだ
った。

「嫌、嫌、そんなに御覧になっちゃ、羞しく
て出来ないわ」

静子夫人は、慄えおののく心と肉体を自分
で制御しながら、男達の官能を高ぶらすべく
甘く鼻にかかった声で、

「男の子がする時のように静子の肢を少し開
かせて下さいまし」

何本かの毛むじゃらの手が、ねっとり和白
い脂肪を乗せた優美な夫人の太腿にかかる。

男達の手でぐっと左右に……かされていく
と、夫人は、「嫌っもう沢山。駄目よ、そん
な——」と、狼狽して、身をよじらせた。だ
が男達は面白がって、夫人の脚を極端なまで
……、大原と木村が洗面器を当てがった。
「いい機会だから、……をはっきり研究
させてもらうぜ。さ、始めなよ」

「ひ、ひどいわ」

静子夫人は、真っ赤になった顔をねじ曲げ
るように横へそむけて、絹糸のような繊細な
すすり泣きを口から洩らしながら、

「お顔にかかりますわ。も少し、離れて御覧
になって下さいまし」

「遠慮するなっでことよ」

男達は互に顔を見合し哄笑する。

息をつめ、この生地獄の中へ夫人が身を投
げようとした時「一寸、待ちな」と、川田が
8ミリ映写機を夫人の前へ備えつけた。

「発射し、客人方の手できれいに後始末され
る所まで撮影するからな」

鬼源はそういつて、手にしていたピンク色
のチリ紙の束を横にして、夫人の口に咥えさ
せる。

全身に羞らしいの紅を流し、チリ紙を咥えた
端正な横顔を見せ、軽く瞋目した静子夫人を

狙って撮影機は低い音たてて廻転し始めた。

「そら、始めるんだ」

鬼源が、鋭い声を張り上げる。

静子夫人の伸びやかな美しい肉体は一層の紅を走らせ、小刻みに揺れた。絹糸のように細い、白い一本の線が大原と木村の持つ洗面器の底を激しくたたき始める。

男達のどよめき、女達の嬌声、そうした衆人環視の中で、水しぶきを上げつづける静子夫人は、美しい富士額にべったりと脂汗を浮かべ、口に啞えるチリ紙をキリキリ歯で噛みしめながら、息もたえだえにこの屈辱と戦っているのだ。

気品のある美貌と教養に美しい見事な肉体を兼ねそなえた令夫人の立位排泄図を、啞然とした表情で見つめていた葉子、和枝、千代の三人は、ようやく夫人が最後の一滴まで出し尽したと見るや、大声をはり上げて笑い合った。

「お見事だったわよ。でも、まあ、いい気なものね。よくそんな浅ましい真似が出来るもんだわ」

千代は、酒に濁ったトロンとした視線を静子夫人に向け、吐き出すようにいった。

虚脱したような力のない瞳をぼんやり前へ

向けている静子夫人の口から、チリ紙を男達は取り上げる。

それを見た千代は、再び奇妙な笑声を立てて、隣の葉子や和枝の肩をたたくのだった。

「一寸、見てごらんないよ。まあまあ、男達にあんな事までさせて。どう。あの気持の良さそうな顔。まああきれた。自分の方から………ようにして後始末をさせているわ」

嵐が過ぎ、男達が堪能したような顔つきでぞろぞろ席へ戻ると、静子夫人は、再びびったりと両腿を閉ざし、上気した線の綺麗な優雅な顔を正面に向けて立っている。その上背のある美しい肉体と美貌は、今まで演じていた醜悪な珍芸とは何の関連もないといった何か犯し難い高貴な匂いに包まれているように見え、男達は不可解な面持で凝視している。

そんな夫人の足元に置かれてある洗面器の中をチラと見た鬼源は、

「ほう、随分とたまっていたんだな。だが、これでさっぱりしたろう」

と、笑って、紫のしごきを巻きつかせた夫人の豊満な乳房を指ではじき、さて、と一座を見廻した。

「それでは、本人の調子もとのいましたので、これより皆様、お待ち兼ねの本格的な実

演をとり行いたく存じます」

見物人達は、待ってました。と声を張り上げ、拍手し始めた。

次に鬼源は、捨太郎を手招きして呼び寄せ立縛りにされている静子夫人の横へ並べて立たせるのである。

「ごらんの通り、この捨太郎は、馬も顔負けする名器の持主——」

そういつて、鬼源は、指で捨太郎のそれをはじいたので、見物人達はゲラゲラ笑い出した。

「しかも疲れを知らぬ歴戦の勇者。その精力絶倫さはオットセイを相手にするも一歩も退けをとるものではないです」

次に鬼源は、静子夫人の方へ廻り、

「一方、相手これ務めまする静子は、先程より再三、皆様のお眼を楽しませました如く、これも名器の持主。しかも、一流のストリッパを凌駕する見事な肉体、加えて、天性の美貌！」

立板に水を流すよう鬼源は、溜々とまくし立て、調子づいて、次に少し、声を低める。

「これは、ここだけの話ですが、この女は、或る御大家の若奥様であったのですが、亭主は、この二十六才、いわば女盛りの熟れ切っ

た肉体を満足さし得なかったんですな。この奥様は、ここへ来て、始めて、女の悦びを知る事が出来たってわけで。へへへ、こっちも驚きましたね。この若奥様は、俺達仲間の間じゃ蛸といって尊重する、何百人に一人の名器の持主なんですからね」

へへえ、と千代は、感心したような顔つきをして、

「そんな名器を、この奥様がお持ちになっていたとは知らなかったわ」

「名器の持主なればこそ、短期間の調教で、果物切りや玉くぐり、一筆描きと色々な芸当をやったのける事が出来たんですよ。明日ぐらいから銅貨の吸い上げなんかを仕込むつもりですがね。そんなに手間はとらせず、コツをのみこんでくれると思いますよ」

鬼源は、得意そうに鼻を動かしてそういうと、

「有難い事にや今地下牢で眠っている小夜子という娘が、この静子夫人と同じ名器を持っているようなんですよ。遠からずあの娘は、第二の静子夫人として舞台の花形になると思っていますね」

「そう。いい後継者が出来て奥様も安心ってところね。妊娠して舞台へ出られなくなった

って、小夜子嬢があとを引継いでくれるわ」千代は、翳の深い瞳をしつとりと潤ませている静子夫人の顔を見上げて楽しそうにいうと、

「それじゃ、夜も大分更けたようだし、そろそろ拝見させて頂こうかしら。名器と名器の合戦を——」

へい、と鬼源はうなずいて、

「それじゃまず、スタンドプレイから始めましょう。うしろからは捨太郎がからみつながら、見事に的を狙って名器を使い始めますから、その時は何卒御喝采の程を——」

その言葉が終らぬ内、捨太郎は夫人のうしろへ廻り、やにはに背後から両手で夫人の二つの乳房をつかみ上げていた。

あっと狼狽の声を張り上げる間もない程の性急さであったが、捨太郎の武骨な手の動きのどこに魔力が潜んでいるのか、自分でも信じられない位、静子夫人は忽ちにして情感が迫り出して来たのである。

捨太郎は、夫人の柔かい敏感な耳たぶ、頸筋あたりに口吻しながら、紫のしごきで緊めあげられた両……を片手で揉み上げつつ、片手を臍の……へ移向し始める。

上の空のような力なさとうしようもない

痺れを感じ出した静子夫人であったが、ぼんやりと見開いた眼に、すぐ眼の前で、クスクス口元を押さえて笑い続けている三人の悪女達の顔が映じると、たまらない羞恥と屈辱感が魂を揺さぶり、はっと気持を取り直して、びったりと両腿を密着させ、それを狙ってさしのべて来た捨太郎の手をもどかしげに……よじりつづけて避けたのである。

捨太郎は、強引に攻撃を続行しようという事はせず、夫人が……じって拒否すると、その地点まで進軍した兵を一旦引揚げさせ、先程よりも一層、執拗に柔かい乳房を、乳首を、そして、艶やかな咽喉首をむさぼり吸うように……続けるのだった。

捨太郎の分厚い唇が夫人の紅唇を求めて、耳たぶから象牙色の柔かい頬に、移向し始める。ああ、と夫人は一度、二度、もどかしげに黒髪を揺すって、捨太郎の唇を避けたが、遂に抗し切れなくなったよう仰向けるように首を曲げ、びったりと捨太郎の唇に花のような紅唇を当てがったのである。

夫人の温り気を帯びた甘美な舌を吸いながらも、捨太郎は、夫人の胸の隆起を……事休まず、やがて、触角のように夫人の優美な肌をすべって、再び、右手が移向し始め

る。静子夫人は、熱い……混ぜ、心も溶けるような甘い……くり返しつつ、かすかに開いて、それを自由に……させていくのであった。その間は、わずかに五分ばかりであったが、それだけ、捨太郎の責手が巧妙であったといえる。

周囲を埋め尽す男達の哄笑やすぐ眼の前に陣どる三悪女の忍び笑いが、かすかに聞えて来たが、夫人の神経は完全に麻痺し、それを辛く感じ取るような余裕などあるわけはなかった。完全に捨太郎の術中にかかり、全身を火柱のように燃え立たせて、備えも防ぎも忘れ果て、城内に続々と敵兵をなだれこませていく。

捨太郎は、どっかと腰を据え直したように夫人の前へ廻ると、……がめて、最後の仕上げにでもかかるかのような両方の……つての総攻撃を開始しようとする。

鬼源は、息を殺し、生唾を飲みこんでこのすさまじい光景を凝視している見物人達を得意気に見廻わして

「さて、本日の特別サービスとして、この女が如何なる名器の持主か、その証拠をお眼にかけ——いや、お耳に入れとう存じます。演奏する者の熟練した撥さばき一つで、名器は

様々な妙なる音色を発し、聞く者を桃源境にいざなう事でありましょう」

そういうと、鬼源は、懷から手拭を取出し懷悩の極にある静子夫人に近づくのだった。

「いいな。皆様にたっぷりとお聞かせするんだ。へへへ、何も驚く事はねえやな。捨太郎に任せていればいいんだ」

鬼源が静子夫人に猿轡をかませようとするので、また、千代が出しゃばって来た。

「どうして猿轡なんかするの。いい声で囁^{ささや}らせておいた方が面白いじゃない」

「ここのいい音色を、はっきり皆様に聞いて頂くにや、かえって女の悶え泣きが邪魔になるんですよ。それにひょっとして悦び過ぎて舌を噛むという恐れもある」

「成程ね」

千代は合点がいったようにならずいて

「じゃ、これを猿轡につかうといいわ」

と、自分の帯から、絹地に赤い紅葉を散らした帯あげを解き、それを持って、静子夫人の横に立つ。

「さ、アーンとお口を開いてごらん。舌を噛まないようかたく猿轡をしてあげるわ」

千代が絹布を夫人の口元に持っていくと、豊満な形のいい乳房を波打たせ、すでに全身

にねっとり脂汗を浮かべている夫人は、そのバラ色に上気した凄惨なばかりに美しい顔を千代に向けた。激しく息づき、何かを訴えるような陰影を含む、美しく濡れた瞳を千代に注いだ静子夫人は、あえぐように、

「千、千代さん。静子は、死ぬ気で今日の見世物に立ったのです。こ、こんなに、こんなに生き恥をさらしているのに——」

あとは言葉にならず、思わず、顔をそむけて哀泣してしまふ静子夫人だったが、千代はフンと鼻で笑い、

「私達のする事が、ひどすぎるといふの」

「あ、あんまりです。あんまりだわ」

静子夫人は、耐えられなくなったよう声を慄かせて鳴咽するのだった。

「何いってんのよ奥様。もっと羞しい目に合わせて、と啖呵をきいたのは奥様だったじゃないか。さ、ぐずぐずすると夜が明けちゃうよ。アーンと口をお開きしたら」

静子夫人は、もうこの女には何をいっても無駄だと諦めたのか、わなわな慄える頬に大粒の涙をばたばた落しながら、悲しげに眼を閉ざし、小さく口を開くのだった。

「もっと大きく開きなさいよ」

千代は、夫人の顎に手をかけ、唇をこじ開

けるようにして、齒と齒の間に絹布の猿轡を通した。

「ホホホ、帯あげの猿轡をすると、また一段と色っぽくおなりね、奥様。じゃ、ゆっくりと妙なる音楽を拝聴させて頂くわ」

鬼源に、つづけな、と肩をたたかれて、捨太郎は仕事にかかり出した。

葉子達の席へ戻って、煙草をスパスパ吸いながら小気味良さそうに責めさいなまれている静子夫人を見上げる千代。そこへ、のっそりと背後から田代が近づいて、千代の肩をたたき、どっかと隣へ腰を下した。

「千代夫人にとっちゃ今夜はすばらしい夜という所ですな。静子夫人が捨太郎の愛を完全に……中へ受け入れるのも時間の問題という所ですし」

「ホホホ、これで、静子がうまく妊娠してくれると本当に大助りなんですけどね」

二人は、そんな事を楽しげに語り合いながら、酒をくみ合うのだった。

周囲を埋め尽した卑劣な男女の酒にギラついた視線を………に集中された形で、静子夫人は、狂おしげな身悶えを次第に露にし、きびしく口にかまされている猿轡を真珠のように白い齒でキリキリ噛みしめながら、苦し

げに眉を寄せた顔を大きくうしろへのけぞらせたり、さも切なげに首を振ったりをくり返している。敵の集中砲撃に城門は微塵に粉碎され、敵軍は雄叫びを上げて我物顔に侵入し始めているのだ。飲料水の水瓶も破壊され、どっとあふれ出た。

静子夫人は、猿轡の中で声にならないうめきを発し、左右へ首をよじり続けていたが、進退極まったようにがっくり首を落とし、艶々した黒髪を慄かせながら、シクシクとすすり上げ、心の支えもポッキリ折れて、為す術もなく八合目、九合目と追いつけられていく。

「まあ、凄いわ。いやーね」

千代は、ハンカチを口に当てて、葉子達の方を見、肩をすくめるようにして笑った。

今まで急激な調子で静子夫人に………続行していた捨太郎は、夫人を頂………にまで追いつくと、急に調子をゆるめ、体をやや………にそらせ、それ………きりと千代達の眼に映るようにながら、水の中の藻をかきまぜるようなゆるやかな責めに切りかえる。夫人は激しく猿轡を噛みしめながら、ムウツとうめき、脂汗でべっとりとなった首筋を大きく見せて、顔をのけぞらした。

千代の異様に光る眼の前に、もうためらい

も羞かしさも見せず、美しい夫人のバラは、大きく開花し、まるでそこだけは別の生物のように露に………見せながら、乙女のすすり泣きのような、かすかな音色が――。

「へへえ、成程ねえ」

凝然として息を殺し、この成行きを見つめていた男達の間から、吐息と溜息が渦巻き登った。

「ホホホ、ねえ、社長。これが元、遠山財閥の令夫人だなんて、一寸信じられないわね。嫌な感じ。まともに眼を向けちゃられないわ」

千代は、田代の顔を見、夫人の耳に聞えるようにいったが、放心忘我の境地をさすらっている静子夫人の耳に、それが聞えたかどうか。

「成程。捨太郎って奴は、仲々のやり手だ。こいつなら完全に静子夫人を心身共作り変えるかも知れないな。思えば、いい男と夫婦にしたもんだ」

田代は、太鼓腹を揺すって豪放に笑った。

乙女のすすり泣きは、捨太郎の手管一つで激しくなったり、強くなったり、弱くなったりし、その都度、静子夫人は、女の生理の脆さを次々とさらけ出しながら、猿轡の中で魂

も消え入るような甘美なすり泣きを洩らしつつ、崩潰………たうっているのだった。

充分に客達の眼と耳とを楽しませた捨太郎は、もうそれ位でいいだろ、と鬼源の合図を受けると夫人の八の………ったふくよか………深くに片………込み、別の個所ともども………める。それがコツなのだろうか、もの一分もたたぬ間に、静子夫人は、猿轡の中で獣が絶息する時のような生々しい声を張り上げ、ピタリと閉ざした太腿をブルブルと慄かせながら、がっくりと首を前へ深く垂れ下げてしまった。

………余韻で、ヒクヒク五体を波打たせている汗みどろの静子夫人の全身像を見物人達を陶然とした面持で、何時までも飽かずに眺め入っている。豊満な乳房に巻きついている紫のしごきまで夫人の脂汗を吸いこんで、ぐっしり濡れているようだ。

川田は、そんな静子夫人に近づいて、齒に喰いこんでいる猿轡を外してやる。それも、夫人の唾液を吸いこんで、べっとり濡れていた。

深い息を吐き、さも気だるげに横へ顔を伏せようとする夫人の顎に手をかけた川田は、「どうでい。え、降参したかい」

静子夫人は、熱い頬に一層、上気の色を見せて、うっとり眼を閉ざし、羞かしげに小さくうなずく。

川田はそつと腰をかがめて、落花微塵に崩壊した夫人の………ニヤニヤして見つめ、「相当なお楽しみだったな。一寸やそつとじや始末し切れねえぜ、え、どうするんだよ」と、夫人の臍を指ではじき、チラと千代の方を見て、機嫌をとるように口元を歪めるのだった。

千代は、今夜こそ長年の恨みを晴らす事が出来るのだ、というような快い胸のうずきについ調子にのって酒を飲んだ故か、悪酔いして青白い顔つきになっていたが、フン、とばかり鼻白んだ表情になって、田代が止めるのも聞かず、再び、フラフラと静子夫人の傍へ歩き出す。

「フン、何てさまだよ。大勢の客人の手でお小水を取られた上、羞しい音をたてつづけ、その挙句——ホホホ、よくまあ、そんな浅ましい真似が出来たものだわ。あんたみたいな女を主人として長い間仕えていた自分に腹が立ってくるわよ、全く」

千代は、酒で足をとられて、よろけながら吐き出すようにそいうと、いきなり、夫人

の赤みを帯びた綺麗な頬をびしゃり、びしゃりと平手打ちし始め、見物人達を驚かせた。鬼源も、うろたえて、千代を抱き止めるようにした。

「ま、千代夫人。今夜はこんなにお客人が集まっておいでなんですよ。何か腹の立つ事があったら、この実演がすんでからお仕置したって、おそくないじゃありませんか。ま、一つ、ここはわっしの顔を立てて——」

と、鬼源は、せっかく最高潮に盛り上って来た静子夫人のショーが酒乱の千代に破壊されてしまうのではないかという事を恐れて、なだめすかすようにしながら押し戻すのだ。「ごめんね、鬼源さん。ごめんね、お客さん方。一寸、私、酔い過ぎちゃったわ」

千代は、照れ臭そうに笑って、ふらつきながら、

「実演のスターのくせに妙にこの女が生意気なんでつい頭にきてしまったのですよ。さ、いいから次を続けて頂戴。鬼源さん」

千代は、そういうと、畳の上に転っていたカメラを取り上げ、一本のロープに緊縛された熱い裸身を支えられ、立ち続けている静子夫人の正面像、側面像、背面像をレンズに収め始める。

静子夫人は、口惜しい快樂に浸った不明瞭な意識から未だ脱し切れず、ねっとりとした情感を湛えた瞳を物悲しげに前方へ向けている。しかし静子夫人が満座の中で、捨太郎の巧妙な……により……極めてしまった事などは、いわば、これから行なわれる実演の前座のようなものであった。見物客達の希望する幾通りもの体位を捨太郎と組みながら、これより明け方までの数時間、数え切れぬ……を極め、……極限を思い知らされる事になる——とは、この時の静子夫人は感知していたかどうか。

ようやく千代の気分が静まったと見てとった鬼源は、情感を含めて、ジーンと澄んだ瞳を、ぼんやり前に向けている静子夫人に近づいて、

「自分だけ楽しませてもらってすましこんでいちやショーにならねえぜ。先程から眼を皿のように開いて御覧になっていて下さるお客様を意識して、充分に楽しませるんだ。さっき、俺が楽屋で教えてやった要領で、これからの実演は捨太郎とびったり呼吸を合わすんだぜ」

気だるい陶醉の余韻に浸っている静子夫人の耳に鬼源は小うるさく色々指示を与えて、

捨太郎を夫人の横へびったり寄り添わせるようにして立たせた。

「甘くて、睦しい夫婦仲を演じて、お客様方を少し当てつけてやんな」

鬼源は、北叟笑んで、少し、身を引くのであった。

捨太郎がニヤニヤ笑いながら、夫人のねっとりと白い脂を乗せた、うで卵の白味のように艶のある肩に片手をからませると、静子夫人は、甘えかかるように美しい額を捨太郎のごつごつした胸にすりつけて、

「素敵だったわ。貴方って、お上手なのね。うん、憎い人」

夫人は捨太郎に対して、そうした甘いポーズをとりながら、満足と感謝を示し、ねえ、キッスして、と、自分の方から唇を捨太郎に向けたのだ。

「こりや熱くてかなわねえ」

見物の男達は、ゲラゲラ笑ったが、そうした夫人の甘いポーズは、彼等の官能の芯をますます高ぶらせていく。

静子夫人は、身も心も投げ出したように、その緊縛された優美な裸身を捨太郎のたくましい両腕に抱き取られ、濃厚な口吻をかわしている。舌と舌とをからませ合い、むさぼる

ように吸い合い、火のように熱い、糯もちのようにねっとりした口吻——それを憑かれたような眼差しで見つめていた田代は、盛んに写真をとりまくっている千代の肩をたたいて、

「さすがに長い間外国に留学していた若奥様だけあって、仲々接吻がうまいじゃありませんか」

「そうね。さっきの六九番にしたらって、ホホ」

二人がそんな事をいって笑い合った時、ようやく、静子夫人は捨太郎から唇を離し、情感を含む濡れた瞳を捨太郎に向けて、

「今度は、貴方もお楽しみになって。ね、お願い、静子を完全に貴方のものにして頂戴」

静子夫人は、鬼源に指示された通りに捨太郎へささやくと、その象牙色の頬をパツと桜色に美しく染めて、羞しげに顔をそらせた。

捨太郎は、静子夫人の背後へ廻ると、羽交い絞めにでもするよう、うしろから再び、夫人の乳房をつかみ上げるのだ。

鬼源が、頃はよしとばかり立ち上ると、一座を見廻わした。

「お待たせ致しました。只今から、演じますのは、専門的に申上げますと、立位後向型——と申すもので、このように女が美人でありま

すと見物する側から申せば、最も楽しい、効果的な……方法をとる事が出来るわけであります」

つまり、静子夫人は、真正面に陣どる岩崎とその二人の妾、千代、田代達に、屈辱にのたうつ表情、波打つ乳房、躍動する腰、びったりと接触して甘美な啼泣を洩らすであろう……など一切を露にさらしながら、……ねばりつく捨太郎と一緒に……極め合う事になるわけだ。

「いよいよだね、千代夫人、いや、おめでとう」

と、田代は、顔をくずして、千代と握手をかわした。

再び、ライトが明るくなり、捨太郎の愛を……る静子夫人を克明に記録するため、映写機が正面へ移動して来た。

一つになろうとして背……身を押し出して来る捨太郎に静子夫人は、優雅な身悶えをくり返しつつ消極的に協力を示していたが、

「もう、もう静子は、駄目なのね」

と、自分にいい聞かせるよう大粒の涙を流しながら口走ると、見物人達の眼瞼をとかすばかりの妖しく成熟し切った悩ましい太腿を……をぐっと反り返らせ、宙に浮くような形

となつて捨太郎を遂に……れたのだ。

見物人達のどよめき、悪女達の嘲笑。そして、映写機はジーンと回転し始める。

心をわくわくさせながら、この状態を待っていた千代は、止める田代の手を振り払うようにして、再び立ち上ると、天井より垂れたロープの音を軋ませて、捨太郎のリードに合わせて、腰の……を始め出した静子夫人の火のように熱い顔をのぞきこみながら、この世の者とは思われぬような狂気めいた笑い声を立てるのであった。

「ホホホ、いい気味だわ。これで、とうとう奥様は、捨太郎夫人となったわけね。今夜という日は私はどれ程、待ったことか」

川田も、感に耐えたといった面持で、夫人の横にまといつくように立って、

「あとは、捨太郎の子供を腹に作って頂く事だ。へへへ」

かつては、遠山家の使用人であったこの悪魔の申し子のような兄妹に左右を挟まれた形で、夫人はリズムに乗ったような……をくり返し、官能の火花の間を、妖しいばかりに優雅な啼泣を洩らしながら漂い出し、追いつけられなくていくのだ。

そんな静子夫人に対して、千代と川田は、

恨みを返すのはここぞとばかり揶揄し続け、嘲笑し、夫人の屈辱感を一層高めようとするのだったが、悦びとも苦痛ともつかぬ戦慄に身を焼き尽している夫人には、もう何をいつでも通用しない。断末魔の近づいて来た事を知覚すると、静子夫人は、妖しい夢の中をさまよっているような、ねっとり濡れた瞳をぼんやり見開いて、

「か、川田さん——千、千代子さん」

と、齒をカチカチ噛み合わせながら、左右に寄り添っている元の使用人二人に必死な調子で声をかけたのである。

「あ、あなた達は、とうとう静子をこんな女にしてみましたのね。で、でも静子は決してあなた達を恨まない。恨まないわっ」

激しく泣きじゃくりながら、そして、激し……運動を捨太郎に強いられながら、そう口走った静子夫人は、

「ああ、す、捨太郎さんっ」

と、堪え切れなくなったようにうしろからびったり頬を押し当てている捨太郎の名を呼び、ぐっと首をねじ曲げるようにして、びったりと自分の方から捨太郎の口に唇を合わせ激しく舌を吸ったあと、

「——ね、今度は静子一人じゃ嫌。お約束し

て、お願い」

上ずった声で切れ切れにそういうと再び顔を正面に向けて、その脂汗にキラキラ光る美しい全身像をはっきりカメラと見物人達の目に晒しながら、挑みかかるように……くねらせ、自分自身を破滅の道へ追い込み始めたのである。

やがて「あっ」と絹を裂くような声が夫人の口から洩れ、夫人は、うーむと大きく艶やかなうなじを見せて、全……なりにした。

「……」

カスれた声で呻くように、そう叫んだ静子夫人は、後頭……の肩に乗せるようにして全身を牽らせ自失した。

優美な全身を戦慄させ、……ると同時に力一杯密着させた太腿をブルブル慄わせ、名状の出来ない生々しい声をたて続ける静子夫人の足元に身をかがめた川田と千代は、遂に捨太郎の愛情を……ぎこまれた静子夫人……にカメラを向け、シャッターを切りながら勝ち誇ったように笑いこけるのだ。

「おめでとう、若奥様。これで完全に捨太郎夫人となられたわけよ」

ぐったりと首を落とし、全身を波打たせていた静子夫人は、そうした千代の嘲笑を受けな

がら、シクシクすすり上げていたが、背……り体を未だ引こうとしない捨太郎が、再び、しっかりと夫人の……きしめながら、……を開始したので、あっと狼狽し、嫌、嫌、とおどろに乱れた黒髪を揺すりながら、

「お、お願い、少し、少し、休ませてっ」

「駄目だね」

と、鬼源が何喰わぬ顔つきで、煙草に火をつけながらいった。

「おめえの亭主は、精力絶倫男だと何度もいつてあるじゃねえか。二度や三度ぐらいじゃ全く変化しないんだ。この亭主に調子を合わせられるよう、妻として修業をつまなきゃいけねえ」

静子夫人は、泣きながら、しばらくの休息を哀願した。だが、鬼源も川田も、笑ったまま相手にせず、

「今夜は、おめえが何回——すかその記録を作ってやろうと俺達は考えてるんだぜ。勝負はこれからじゃねえか。それだけいい体してるんだ。捨太郎を打負かす気で、しっかりやるんだ」

静子夫人は、鬼源にそう浴びせられると、唇を噛みしめ、眼を閉ざし、不貞くされた覚悟を決めたかのよう……に身を任せた。

天井より垂れ下がったロープは、激しく揺れ、捨太郎の力で前へ押し上げられたり、うしろへ引戻されたりする毎、前に陣どっている見物人達の顔が遠のいたり、近づいたり、夢うつつに見開いた夫人の眼に映じた。

眼がくらみ、耳鳴りがし、カチカチ噛み鳴らす夫人の白い歯の間から白い泡が吹き出した。

別離

地下室の扉が開き、銀子、朱美、森田、それにチンピラの竹田や堀川達が何か大声で談笑しながら、仕事を終えた桂子、そして、文夫と美津子の三人を引き立てて入って来たのである。

「へへへ、三人とも今夜は大奮戦だったな。」

お客も大喜びだったぜ」

森田は、つい今まで、骨が砕け、皮が裂けるばかりの苦しい演技と取組んだ文夫と美津子のぐったりした横顔をのぞき込むようにして満足そうに笑った。

舞台の衣裳そのままに、文夫は、前髪に禪一つの裸身を麻縄できびしく縛り上げられていたし、美津子は、桃割れ髪に腰には白梅を

ちらした可憐な薄桃色の湯文字、そんな姿のまま、文夫と同じよう麻縄できびしく後手に縛り上げられている。

一番先頭を歩く森田は、前髪姿で鵝色^{とき}の禪をはかされている桂子の背を押すようにして地下の階段を降りながら、

「まだ明け方までには時間がある。ゆっくり休むがいいぜ」

そして、桂子の縄尻を竹田に渡した森田は「俺は第二会場の客を静子夫人の実演を見せるため、広間へ案内して行くからな。明日からの段取りをよくお坊ちゃんお嬢さんに説明してやってくれ」

そう銀子に告げ、そのまま、地下室を出て行くのであった。

「ね、私達も静子の実演を見に行こうよ。銀子姐さん」

美津子の縄尻をとっている朱美が、文夫の縄尻を取っている銀子にいった。

「まだ大切な仕事が残ってるわよ。明日からこの三人の調教に、一寸変化を持たせるよう私、森田親分からいつかつかっているのよ」

「変化だって」

地下の土間に降り立つと朱美は不思議そうな顔をして、銀子を見た。

五六坪の土間の中央には、チンピラ達の手で物置から運ばれて来たらしい猿の檻が置かれてある。田代の考案した美津子と文夫のスイートホームなのだ。

身も心もバラバラになる程の屈辱的な演技を満座の中で強制された自分達を再びこの中へ押しこむ気なのかと美津子と文夫は、その陰惨な鉄の檻を眼の前にして、唇を噛みしめるのだったが、銀子は、急にいたずらっぽい眼つきになって、

「今日からこの檻に入るのは、文夫と桂子にするからね」

と、美津子の表情を窺うようにいった。

それを聞くと、美津子も文夫も激しく狼狽して、ぴったりと緊縛された裸身を寄せ合い縄尻をとる銀子と朱美に哀願的な眼差しを向ける。

「フッフ、新婚ホヤホヤのあんた達の間に、水をさすのは可哀そうだけど、あんた達は商品なんだからね。そう何時までも、楽しい思えばかりさせてあげるわけにやいかないんだよ。第一、静子夫人は実演の相手がはっきりきまったんで別としても、あとは京子、桂子、美津子、小夜子と四人の女性がいるのよ。実演スターの男役者である文夫を美津子一人に

独占させておくというのは不合理だと、森田親分がおっしゃるわけさ」

そういつて、銀子と朱美が手から縄尻を離すと、文夫と美津子は、ぴったりと寄り添いながら、地下倉のレンガの壁のあたりにまで後退し、共に必死な眼を二人のズベ公に向けてのだった。

「後、後生です。私達二人を離さないで。離さないで下さい」

美津子は、おろおろしながら、銀子と朱美に向って、必死な声を張り上げるのだった。

文夫も、今にも泣きそうな表情の美津子を緊縛された裸身で庇うようにしながら、

「今になって二人を離すなんて、そんな事誰がさせるものか。こんな地獄の底で僕がこれまで生き続ける事が出来たというのも、美津子が、美津子がいなければこそ——」

ハハハ、とズベ公二人は、男のように大口を開けて笑い出した。

「何を寝言いつてるんだよ。あんた達がどれ程愛し合っているか知らないが、そういう風に愛し合えるように直接してあげたのは、あたし達なんだからね」

文夫と美津子は、かたく寄り添いながら、急に顔を赤らめて、ズベ公から視線をそらせ

るのだった。

「とにかく、あんた達は、あたい達の商品なんだからね。こっちの計画している事に抗らったりすると承知しないよ」

朱美は急に吐き出すようにいって、二人につかつかと近づき、美津子の縄尻をひったくするようにとる。

「あっ、嫌っ、文夫さんっ」

「美、美津子！」

文夫は、朱美に引離されて行く美津子を思わず追おうとしたが、

「じたばたすんねえ、この野郎」

竹田が文夫の両肩をうしろから両手で押さえた。

「おめえは、桂子と一緒にこれから当分、檻の中で暮せるんだ。天下晴れて、浮気が出来るってものじゃねえか。さ、来な」

文夫を強引に鉄檻の前まで引きずって来た竹田に手伝って銀子が檻の扉を開けると、

「さ、入るのよ」

銀子と竹田は、文夫の禪をその場でくると剥ぎ取ると、二人がかりで文夫の縄を解き、素早く檻の中へ押しこんだ。

「お願いだ。美津子を、美津子連れて行かないでくれ」

「うるせえ。今日から新しい花嫁を毎日抱く事が出来るなんて羨ましいぜ全く。ブツブツいうねえ」

鉄の檻は人間一人が身をかがめて入るのがやっとという以前猿を飼っていた檻なのだ。中腰になって、檻の鉄格子を握り、獣のようにわめき立てる文夫を面白そうに眺めていた竹田と銀子は、桂子の縄尻をとっている堀川に眼で合図した。

「さ、今夜からおめえは文夫の花嫁だぜ。スイトホームへ入るんだ」

桂子も狼狽して身を悶えさせたが、朱美に縄尻をとられている美津子の狼狽ぶりはすさまじかった。

「嫌っ、やめて、お願いです」

激しく身をよじって、檻の中へ桂子が入られるのを必死に妨害しようとする。

美津子の力に縄尻をとる朱美は、引きずられて行くような恰好になった。

「フッフ、美津子って、すごい嫉妬やきもちやきなだね。可哀そうだけど、森田組の方針を変えるわけにはいかないのよ」

逆上する美津子を銀子と朱美は背後から両手でかかえるようにする。

竹田と堀川は、桂子を檻の前へ引きずって

行くと、檻の中の文夫を指さして、

「今夜から、こんなハンサムな坊っちゃんと一緒に暮せるんだ。え、嬉しいだろ」

「たっぷり可愛がってもらうがいいぜ。さ、腰のものをとって、中へ入るんだ」

竹田と堀川は桂子の禪を剥ぎにかかった。

「嫌っ、お願い、勘忍してっ」

美少年の入っている狭い檻の中へ全裸にされて投げこまれる、という羞恥に桂子は、思わず、全身を熱くして、身をすくませた。それは、満座の中で、淫虐な責めを加えられる苦痛よりも若い桂子にとっては辛い拷問であったかも知れない。まして、文夫は、美津子の恋人でもあるのだ。

「嫌よ、ここへ入るのは嫌っ」

微妙な女心も揺れ動いて、精神的な屈辱にのたうちながら、桂子は珍らしく反抗したが「おとなしくしねえか、この阿女！」

竹田は桂子の横面を平手打ち、くるくると禪を剥ぎとって横へ投げると後手に縛った縄を解いて、桂子の体を檻の中へ押しこんだ。

一米四方ぐらいしかない狭い檻の中では、嫌でもびったり体を寄せ合っていないければならない。文夫と桂子は、ぴったりと背と背を合わせながら、鉄格子の中をのぞきこむ銀子

や朱美達に憎悪のこもった瞳を向けている。

そんな二人を見た美津子は、たまらない悲しさと嫉妬めいた苦しい思いに顔を歪め、がつくりと首を落すと、肩を慄わせて嗚咽し始めた。

桂子は、鉄格子を握って、美津子に声をかける。

「美津子さん、私達にはまだ人間の血が通っているわ。安心して、ね、美津子さん」

こんな目にあわされても、自分達の意志で文夫と情を結ぶような真似はしない、という意味なのだろう。すると、文夫も、鉄格子の間から美津子に向って必死な声を出すのだった。

「獣のような真似はしないよ。ね、美津子、どのような目にあわされても、希望を捨てちゃいけないよ必ず救出される時がくる」

銀子と朱美に縄尻を取られている美津子は涙にうるんだ瞳をそっと上げ、小さくうなずくのであった。

「フン、生意気な口をききやがって」

竹田は鉄格子の中をのぞきこみながら、吐き出すようにいい、

「獣のような真似はしねえといったって、手前達は明日から、実演スターとして、鬼源さ

んの調教を受けるんだぜ。何をとぼけた事いってやがる」

すると、今度は銀子が、

「あんた達はどういうつもりでいるか知らないが、こっちじゃ、あんた達を一匹の雄、一匹の雌ぐらいにしか考えちゃいないんだからね。今夜のうち、その中で、しっかり夫婦の契りを結んでおくんだ。そうしないと明日からの調教が何かとやり難いからね」

そういった銀子は、くるりと次に美津子の方を向いて、

「美津子の方は、明日から珍芸のお稽古よ。しっかりやって頂戴ね」

朱美が美津子の背を突いて

「さ、お歩き、今まで散々いい思いをしたのじゃない。今日からは当分、一人でお寝ねするのよ」

美津子は、小さくすすり上げながら、朱美に縄尻をとられて、牢舎の方へ歩き始めた。

鉄の重い扉が開くと、そこは、左右に幾つかの牢舎が並んだ石の廊下になっている。

「さっさと、歩きなよ」

朱美と銀子に小突かれるようにして、美津子は素足で石畳を踏みしめた。

美津子の合歓の葉のような柔かい睫毛には

キラキラと白露のような涙が光り、美しい繊細な横顔が凍りついたように冴えて見える。

たまらない屈辱感と絶望感に打ちひしがれた美津子は、とぎすまされた冷淡さを表情に浮かべ、一步、一步、石畳の上を歩いて行くのであった。

一番最初の牢舎の中をのぞいた朱美が、

「なんだ、小夜子、あんた、まだ寝ていないの。駄目じゃない。もう二三時間もしたら夜が明けるわよ。あんたの調教は九時からという事になっているんだからね。少しでも睡眠とっておかないと体が参っちゃうわよ」

小夜子は、牢舎の隅で、毛布をまとい、猿のように身を小さくしているのだ。ウェーブのかかった絹のような感触の染かい髪は、房々と小夜子の耳もとを覆い、憂いと恐怖を織まぜた睫毛の長い瞳を、そっと上にあげた小夜子の美しい容貌を見たズベ公二人は、引き立てて行く美津子の肩をつかんで、ぐいと小夜子の前にさらしながら、

「あんたの弟さんの恋人よ。どう、仲々の美人でしょう」

「あ、美津子さん」

小夜子は、大きく眼を見開き、毛布を抱きしめるようにしながら、鉄格子のところまで

にじり寄って来る。

「ああ、おねえ様」

美津子は、文夫の姉を見た途端、急に胸がつまり、がっくり首を落し、桃割れの髪を慄わせて、号泣し始めるのだった。

「今ね、あんたの弟の文夫とからんで、すばらしい実演を見せてくれたのよ。あんたからもほめてやってよ」

銀子は、号泣する美津子と、ひきつった表情する小夜子の顔とを見くらべるようにしながら、クスクス笑っていたが、

「何時までも文夫さんを独占するのは具合が悪いので、今夜で一応、文夫と美津子のコンビは解消させたのよ。すると、淋しがって、こんなに泣き悲しむんで私達も弱っちゃったわ。ね、小夜子、あんた、この娘を慰めてやってくれない。恋人のお姉さんに慰められるのが美津子にとって、一番嬉しいだろうと思うんだけどねえ」

「ここへ、ここへ、美津子さんを入れて下さい」

小夜子は、銀子と朱美の顔を見ながら、美津子を自分の牢舎へ入れるよう哀願したが、「フフフ、何いってんのよ。私達のいってるのは、お道具を使って美津子を慰めてくれな

いか、といってるのよ。つまり、女同志のコンビー——」

えっと、小夜子は、顔を硬化させる。

「フフフ、ま、その事は、明日、あんたの調教の時、ゆっくり相談する事にしましょう。さ、美津子、歩きな」

銀子は、再び、美津子の背を押して、奥へ歩かせていく。

一番、突き当りの牢舎は、静子夫人が入れられていた四坪ぐらいの広さしかない薄暗いレンガ作りだった。

「静子夫人は、今頃、捨太郎と大熱演の真最中よ。朝にならなきゃ、ここへは戻って来ないわ。それまで、この牢屋を借用して、ゆっくりお寝んねしていな」

銀子と朱美は、扉を開けると美津子の縄を解いて、中へ押しこみ、ぴしゃりと扉を閉め鍵をかけた。

「あんたに良く似合うから、お湯文字を剝ぐのは勘弁したげるわ。そのかわり、その桃割れ髪^{かつら}を取るんじゃないよ。いいね」

銀子と朱美は、そう言って、

「じゃ、静子夫人の熱演を拝見にいかがかと、いそいそと出かけて行く。

そのあとは、恐ろしいばかりの静寂だ。廊

下に一つつけられた裸電球がぼんやりと牢舎の中をうつし出し、鉄格子の影をくっきりうき立たせている。

美津子は、胸の柔かい盛り上りを両手で押さえながら、レンガ作りの壁の所に身を縮こませ、耐えようのない淋しさにシクシクと雪白の柔かい肩を慄わせて、すすり泣くのだ。

明日からは、どのような責苦が自分を待っているのか。満座の中で、文夫と組んで実演させられた畜生にも劣る浅ましい行為——しかし、その行為に自分を没入させ、演じている間は、まだしも救われる。こうして、一人薄暗い牢舎に檻禁されると、今まで夢うつつのうち演じて来た数々の屈辱的行為が狂おしいばかりの自意識となつて、美津子の魂をしめつけるのだ。

何よりも美津子にとって辛いのは、文字通り、生木を裂くよう文夫と離れ離れにされた事だろう。しかも、文夫は桂子と——そう思うと、不可抗力の事とはいえ、自分でも不思議なくらい、美津子の心は嫉妬のため、張り裂けるように痛み出すのだ。

「ああ、文夫さん」

美津子は、錐でえぐられるような胸のうずきに耐え兼ねて、冷たい床にどっと泣き伏し

てしまったのである。

——それから、どれくらい時間がたったのか、身も世もあらず悶え泣きしているうち、美津子は、何時しか激しい疲労のため、眠ってしまったようだ。

ふと、気がつくと、鉄格子の向うに、銀子と朱美が立って、こちらをのぞいている。

「ちよいと、何時まで寝ているのよ。もう朝の九時なのよ」

大きな欠伸をしながら、そういうと、扉の鍵をガチャガチャいわせて、ギイーと開き、「さ、出て来な。これから、とても面白いものを見せてあげるよ」

と、二人のズベ公は顎をしゃくるようにし美津子に外へ出て来るよう命令する。

「ど、どこへ行くんです」

美津子は何か魂胆ありげなズベ公達の陰湿

な微笑に、ぞっとする恐怖を感じた。

「何してるんだよ。朝、九時から調教するとちゃんと念を押してあるじゃないか」

朱美が急に威猛高になって大声を上げた。

美津子がようやく牢舎から出て来ると、

「二階の菊の間へ行くんだ。あんたにお稽古をつけて下さる素ばらしい調教師が二人、お待ち兼ねよ」

互に顔を見合わして、北叟笑んだ二人のズベ公は、美津子の背中をポンと押す。

全身をくの字に曲げるようにしながら、美津子が石畳の上を歩いたが、横に並んだ地下牢の中に小夜子の姿は見えなかった。

「小夜子嬢はもう調教室へ入ったのよ。さ、あんたも急いで、急いで——」

土間に置かれてある猿の檻の中を見た美津子は、はっとした面持になって銀子の顔を見

た。檻の中から、文夫と桂子の姿が消えてい

るのだ。二人は、すでにコンビにされ、調教されているのでは——そう思うと、美津子の胸は早鐘のように動悸し出すのである。

「さ、お歩き」と、再び、ズベ公二人に背を押され、美津子は体を折り曲げるようにして地下の階段を昇り始めた。

美津子が連れこまれたのは、八畳の日本間で、襖が開いて、その部屋へ足を踏み入れた途端、美津子は、あっと小さく声を上げ、全身を硬直させた。

部屋の中央に、夜具が敷かれ、その上に、文夫と桂子が天井より垂れ下がった二本のロープに緊縛された裸身をつながれ、立っているのだ。二本のロープは、ほとんど接触するよう平行に上から垂れ下がり、それにつなぎ止められている文夫と桂子は、嫌でも肌を触れ合わす事になってしまふ。二人は、互に背を向け合い、深く首を落して、屈辱に全身をぶるぶる震わせているのだった。

「これから、この二人に関係を、はっきりつけさせようと思うのさ。あんたに立会ってもらってね」

朱美はそういって、気が遠くなりかけている美津子の白い頬を指で突くのである。

天星社刊 〆限定版グラビア写真集 在庫案内

山原清子「刺青の魅力を探る」

一部 一〇〇〇円 (送共) 略号「美7」

二女緊縛「女斗緊縛競艶写真特集」

一部 一〇〇〇円 (送共) 略号「美8」

「革具に拘束される女」拷問特集西洋篇

一部 一〇〇〇円 (送共) 略号「美9」

M写真集 女王様に飼育される日々

一部 一〇五〇円 (送共) 略号「M特」

◎以上の写真集は一般の書店にては一切販売しておりませんから、直接、大阪市阿倍野郵便局私書函第十四号天星社に代金同封の上、お申込み下さるようお願いいたします。

谷山久美子の巻

カメラールポ

この女
(ひと)と

山本一章

(突然お手紙を差上げてごめんなさい。私この数年来奇ク誌を読んでいる二十七才の女です。辻村様のハントやカメラールポに最も興味を感じていましたが、昨年九月号の左近麻里さんのルポを読んでからは、左近さんが羨しくてたまらなくなりました。そして今まで空想だけで満足していたのが何だかもの足らなくなり、現実に一度あんなに縛られてみたい

と考えるようになりました。そう考え始めると何か苛立たしい毎日となってしまうのです。それで昨秋、当時交際していた男の人にこの希いを打聞けてみたのです。彼は一夜私の体を現実に縛ってはくれました。しかしそれは奇クを知っている私にはほんの真似事で私の夢とは程遠いものでした。もっときつくもっと本格的に——。しかしその人はその時

を最後に私から去ってしまいました。恐らく変態女に愛想をつかしたのだろうと悲しみました。しかし一度点けられた火は大きく燃え上るばかりで、やり切れない毎日をせいぜい縛り場面のありそうな映画を観ることによって慰めています。そんな時、カメラールポがお休みになりました。もしかしたら適当な方がないためではないだろうか。それなら私でどうかしら——そう考え始めるともうペンをとらずにはおれなくなりました。勝手な想像なのはわかっています。そして厚かましい押しつけなのもわかっています。でも山本先生なら私の体の中でくすぶり続けているこの悩みを理解して下さるのではないだろうか、本当に縋るような気持で、この手紙を書いていきます。一度だけでも結構ですからお会い下さいませんか。そして私の体を思い切り責めてやっていただけませんか。どうか。はしたない女と軽蔑されることは覚悟しています。どんな強い縛りにも、どんな残酷な羞しめにも耐えるつもりでおります。女からこんな手紙を書く辛さを憐んでやって下さい。日曜日なら大抵都合がつくと思いますので、お返事を首を長くしてお待ちしています。ぶしつけな手紙をお許し下さい。余計なことか

も知れませんがセックスの経験はございますので……。

岡山市〇〇〇〇〇 谷山久美子

これが編集部気付で私宛に来た手紙の内容である。滅多にこない私宛のアドレス(〇)だっただけに私は大いに感激した。こんな手紙は大歓迎である。恰度長井ハツコさんのルポを書き終ったところだったし、正直云って若過ぎる長井さん相手のプレイは、われものに触るような具合で聊かもの足らなかっただけに、自らMだと名乗り出た谷山さんの手紙には強い誘惑を感じた。(長井ハツコさんはその後編集長の手で相当飼育された模様で、



彼女のMの芽が伸ばされれば大いに期待できる成長株であることを蛇足して置く) 勿論手紙だけでは、どの程度のマゾ性を持っているのか見当はつかないが——往々にして空想だけで酔っている女性が多いので——積極的な呼びかけである以上無視できる私ではない。筆蹟は明らかに女性のものであったが、余り話がうま過ぎるので、或は男性ではないかとの不安もあった。私には男に対する興味はない。それと最後に書かれた一行も気になる。それだけが目当ての未亡人かオールドミスの臭いがしないでもない。文面をあれこれといじっていると益々疑惑が生じそうである。とに角会ってみるしかない。私は早速手紙を書いて、一方的に日時と場所を指定した。すると速達で返事が来て、楽しみにお待ちしておりますというのである。

○

三月三日の日曜日、私は愛車を西に向けて走らせた。国道二号線は嘘のように空いていて、平素は渋滞する神戸市内や明石、姫路も

難なく通過することができた。しかし岡山まではそれでも相当の道のりである。船坂峠を越したところで早めの昼食を済ませて、再び西進する。岡山駅に着いたのは午後一時には五分ばかり前だった。車を駐車場に置いて構内改札口へ急ぐ。相当な人出で、グリーンの上りだけが目じるしの谷山さんに会えるかどうか甚だ心もとない。私は改札の横手に立って煙草に火を点けた。騙されたかな——そう思った時である、小柄な女性が私の視線の中を向ってくる。

「あ、失礼ですが、山本先生じゃございませんか？」

「あ、谷山さん？」

淡いグリーンのオーバーを着たその女性は瞬間ぱっと顔を赤らめて目を伏せた。可憐な顔立ちに上品さがある。手紙の年令が本当なのだろうが、私には二十四、五才に見えた。「立ち話もなんですから、何処かへ坐りましょうか？」

「そうですわね。お食事は？」

「もう済ましましたから、お茶でも飲みましょう」

駅前を少し東に歩いて、小さな喫茶店に入る。

「お疲れでしょう？ 車で？」

「ええ大丈夫ですよ。でもよく手紙を書いてくれましたね。大決心だったでしょう？」

「……………」

谷山さんは目を伏せたままもじもじした。

泣くような笑うような妙な表情である。羞恥の無言である。私は単刀直入に切り込む。

「今日は覚悟していらっしゃった？」

「……………」

小柄な体を益々小さくしながらも、谷山さんは僅かに頷く。すべてOKである。私はこの小柄な谷山さんなら吊りができそうだなと考える。

「あのう、わたし山本先生って、もっとこわそうな方だと思っていました」

「先生って云うのは止して下さいな。谷山さんはどこかへお勤め？」

「ええ、でも余りプライバシーのことはお聞きにならないで。わたしも山本さんのことはお聞きしませんから」

私の望むところでもある。私は谷山さんを入妻か、そうでなければ女店主じゃないかと想像した。

「余り時間がないから直ぐ行きましようか」

「ええ」

彼女は今度は返事をして私の目に微笑を映した。

○

岡山の市内を私はよく知らないの、谷山さんまかせで車を走らす。彼女は助手席に腰を降して時々私をちらっちらっとして見ていた。

「僕のやり方は、少しきついかもしれませんよ」

「構いませんわ」

「泣かしてみようかな」

谷山さんは私の腕をちょっと抓った。初対面の固さがほぐれたようだった。

「谷山さんは、どんなのが希望かな？」

「どんなのって？」

「どんないじめ方がいい？」

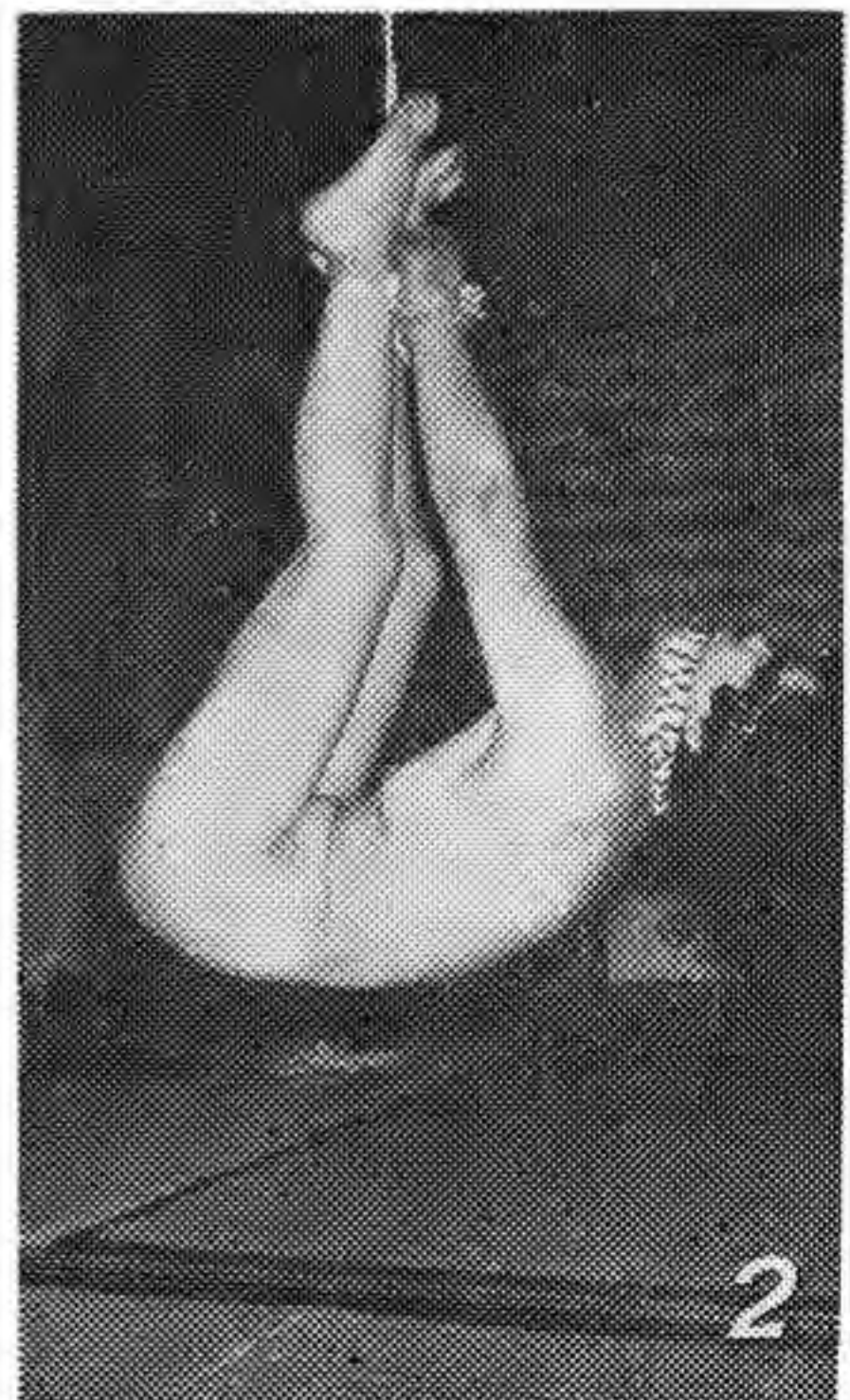
「……………」。猿轡と鞭打ちかしら」

「へえ——、それじゃ本物ですね」

「意地悪！」

車を駐車させ和風の二室に落着く二人は、はた目には夫婦に見えたかもしれない。彼女は私の左腕に軽く手を掛け、残りの手で私の重いバッグを持ってくれたからである。

「さあ、お風呂へ入ってらっしゃい」



「そうするわ。じゃ、お先に」

私はバッグからカメラを取り出して準備にかかる。寝室との間の機がしっかりしていてどうやら吊りもできそうである。強い責めを望むのなら吊りが最高だし、鞭打ちが望みなら吊ったまま叩いてみるのも興味がある。果して彼女そこまでMかどうか。ストロボを装着し縄を取り出した私は、寝室を仕切っている襖を外す。機に手を掛けてぶら下ってみたがビクともしない。私はしばらく遠去かっていた女体の吊りを試みたくてウズウズしていた。

浴衣を着た谷山さんが上気した顔で私に話しかける。



「覚悟してるかって聞かれた時は、どきっとしましたわ。正直云って山本さんが変な人だったら声を掛けずに帰るつもりでしたの」

「じゃ、一見合格したわけですね？」

「まあね。山本さん、写真持っていってらっしゃるかしら？」

「ええ少しだけなら」

私はバッグの中から手札のフォトを出す。強烈で露骨なのばかりを二十枚程持って来ていたのである。勿論彼女の反応を見るためである。それを手にした谷山さんは一枚一枚を丹念に見た。

「どうです、相当なものでしょう？」

「山本さんってひどい方ね。憎らしい」

「怖くなった？」

彼女は顔を左右に振る。

「そんなの辛抱できるかな？」

「おまかせしますわ。ガーゼを持ってきてますので口へ入れて下さる？」

オヤオヤである。私は谷山さんが、相当なM性の持主であることを認めざるを得なかった。されば容赦することはないではないか。求めているなら、それ以上のものを与えてやればいい。

「さあ立って脱いで下さい」

谷山さんはちよっとためらいを見せたが直ぐ立ち上って浴衣を脱いだ。下に着けているものは何もない。その白い裸身は均整がとれて美事である。着衣の時はほっそりしているように見えた谷山さんだったが、裸になってみると適当な肉づきでちよっと意外な感じだった。背を向けている彼女の傍に縄を持って近づく。この一瞬の感

激はいつものことながら新鮮で、こたえられないというところである。白い縄ロープを使うことにする。後手到手首を縛ってから、別の縄を首に巻き下に降ろして背後に廻わして

縦縄にする。背中を上へ上げて来たその縄を首の後の縄に通してぎゅっと引張る。白い縄が彼女の肌に埋もれるのを確かめてから、手首を縛った縄尻で腹部を締め、肘、胸と縛った。ウウンと谷山さんが呻くが別に声は出さない。

「少し縦のが締め過ぎたかな？」

「ええ、でも大丈夫」

彼女がテーブルの上に置いたガーゼを使う番である。

「苦しかったら顔を横に振りなさいよ」

彼女は頷く。私がまるめたガーゼを口の所へ持って行くと彼女は黙って口を開いた。ガーゼを詰め込む。口腔より少し大き過ぎるようだったが、構わずぎゅうぎゅう押し込んだら、彼女はちよっと嘔吐するようにゲゲツと喉を鳴らした。

「大丈夫？」

彼女が頷いたので、その開いたままの口のガーゼの上から縄を巻く。目も一緒に縛る。最初から強烈な束縛である。私はその谷山さんの背を邪険に押してみた。よろよろとよろめくところを背後から閃光一発——それが写真(1)である。その姿を前後左右から写したのだが、他に写真が多いので、この姿勢では

この一枚にとどめる。

「どう？」

「……………」

「少しはこたえた？」

「ええ少し。でも山本さん優し過ぎるわ。もつと私のことなんか無視してやって下さればいいのに」

「しかし今日が最初なんですよ」

「遠慮なんかする柄じゃないんでしょう？」

最初の縛りを解いてからの会話である。彼女ちよつと不満のようである。どうやら本格的な責めを期待しているようで、私の気を使いながらの縛りじゃもの足りないらしい。されば希望通り責めてやればいい。私はちよつと反撥を感じて今度は彼女が音を上げるまで責めてみることにする。

一度吐き出した、濡れたガーゼを再び口の中に押し込み、その上から浴衣の帯で固く括る。口は開いたままでガーゼは吐き出すことが不可能である。それから裸身を畳の上に押し倒し、手足を寄せてしっかりと縛り合わせその縄に綿ロープを通す。バッグの中に短い革バンドがあったのでそれで目隠しをした。今まで吊りを実行する場合、皮膚に傷がつかないように縄の下に布を巻いてやるのだが、



彼女の場合そんな配慮は無用にして縛った。そのまま転がして置いて、椅子を棧の下に運ぶ。心なしかその谷山さんの体は期待に慄えているように思えた。背と腰に腕を廻わして抱き上げたら意外と軽かった。そして女体は暖く柔かった。椅子の上に仰向きに載せ、四肢の縄に通してあるロープを棧に掛けて引上げる。一束になった手足がぐぐつと伸び、腰だけが椅子に残る。そこで椅子を取り外した。完全な猪吊りである。私は直ぐズボンから革バンドを引き抜き、その猪吊りの女体を打った。正真正銘手加減なしの鞭打ちである。ピシッピシッと鳴る肌の音が少し気がひける程

だったが、情無用をその女体が望んでいるのである。腿を掴んで体を廻わして放す。縄の振れで猪吊りの女体が自然に廻転を続けるのを所嫌わずバンドでピシピシと叩く。白い肌にみるみる赤紫色の鞭痕が浮び出て来る。本格的な責めである。その時写したのが写真(2)である。腰と腿にかけて鞭跡が写っているのだが、果して印刷にどの程度出るだろうか。縛った掌が黒く写っているが、それで縛りの強さがわかっていただけると思う。十数回の力まかせの鞭打ちは吾ながら少し残酷な感じがした。谷山さんは喉の奥から低い呻きを洩らして、時々僅かに膝を曲げた。

「参った？」

初めて声を掛けてみる。

しかし彼女は、じっとしたままである。私は掌で尻を一打ちして尋ねる。

「大丈夫？」

彼女は頷く。相当な辛抱強さである。私はしばらくその吊られた裸身を廻わしながら観察する。そして私はその女体がエキサイトしている徴候をはっきりと

発見した。更に私の加虐の欲求が燃え上る。彼女の体が楽しんでるのが癪である。

猪吊りから降ろして休ませずに直ぐ縛り直す。後手にして胴と一緒に縛り、足は揃えさせて足首だけを固く縛る。そして再び椅子を使って完成した逆さ吊りが写真(3)である。その妥協のない美しくさを堪能していただけたらと思う。貴重な一枚である。勿論私はその女体を鞭打った。恐らくその時の私は目を血走らせていたと思う。喉が乾き顔がほ照った。十分程そのまま責めたであろうか。急に谷山さんが顔を横に振り始めた。苦痛の合図である。私は慌てて上半身を抱き上げる。

「苦しい？」

彼女は頷く。抱き上げた女体は、首筋から背中にかけて、びっしょりと汗をかいている。冷汗であろうか。顔面も蒼白である。早く降ろさねばならない。上体を肩で押し上げて足の縄を解く。吊り縄が弛み足が畳に着いても、彼女はぐったりと私に全身の体重を委ねたままであった。私の脳裡にふと不吉なもの走り過ぎる。死にはしないか……。畳の上に寝かせて私は背中をさすりながら少しうろたえていた。こんな所で死なれたら、どうなることか。

「大丈夫？ どう、気分が悪い？」

「……………」

「大丈夫？」

やっと彼女は頷く。私はほっと胸を撫でおろす。しかしそんな状態になりながらも、私は彼女のいましめを解く前に一発閃光を走らせた。それが写真(4)である。この写真では臀部の鞭跡が相当鮮明に写っているのだが。

思わず激してしまった私の所作は恐らく狂気じみていたと思う。この趣味のない人がこの光景を見たら鬼畜の振舞いだと眉をしかめるかもしれない。しかし被虐を求める女はそれを歓喜するのである。

「最高だったわ」

それが失心寸前までの責めを受けた谷山さんが、いましめを解かれて口にした言葉であった。

「気分が悪くなったんでしょう？ 悪かったかな」

「もう大丈夫よ。実は生理を薬で遅らせて来たのが悪かったのかもしれないわ」

谷山さんはもう裸身を隠そうとはせずに私に向き合って坐っていた。

「少々のことなら参らないんですけど、今日はどうかしてるわ。でも、これで懲りないで

欲しいわ」

全く恐れ入ったMである。彼女の小柄な体のどこにそんな激しい情熱が潜んでいるのか不思議な感じである。

「もう今日はこれまでにしましょうか？ 相当きついのをやったから」

「お急ぎですの？」

「急ぐわけじゃないけど、谷山さんの方が続かないでしょう。さっきみたいになったらびっくりですからね」

「少し休んだら大丈夫ですわ」

全くうーんと唸るしかない。手紙に書かれてあったが、男が一度の経験で彼女から去って行った気持もわかるようである。しかし私は彼程単純ではない。また普通の男のように淡白でもない。女が望むならそれ以上のもので報いるのが、この世界のエチケット(?)と心得ている図々しい男である。

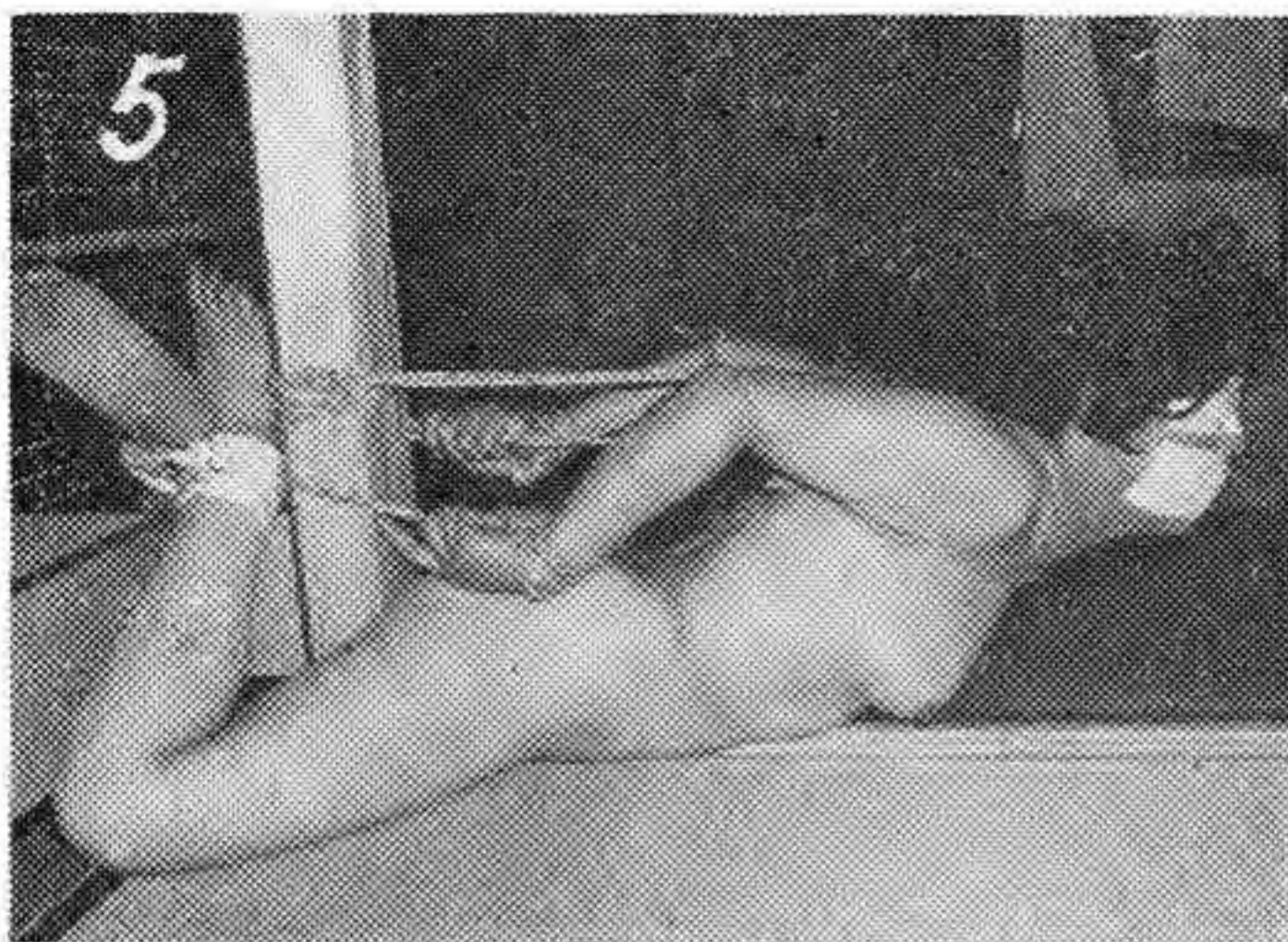
「じゃ少し休んでから再開しますか」

「ええ、余り気を使わずにやって下さった方が……………」

「泣くまでやってみるか」

「泣きませんわ」

三十分程の休憩の間に、谷山さんは手紙に書かれてあった男のことを話した。その男は



鎖で縛ってくれたが、縛り方もゆるく自分のして欲しいことは何一つしてくれなかったというのである。して欲しいことというのは猿轡と鞭打ちだということも、告白した。そして露骨な羞しめも望んでいるような様子だった。彼女の場合、遠慮が悪徳でさえあるかのようである。

再び縄を手にする。今度は少し趣好を変え

た縛り方をした。それが写真(5)である。柱の後で足首を交叉させてから、両手首に別々にかけた縄を柱に廻わして後へ引き、更に胸に掛けた縄で両肘を引き絞って柱に繋いだ姿勢である。目の上と口にベッタリと大きな絆創膏を貼りつけてみた。勿論口の中にはガーゼが収まっている。そうして置いて私は左手で彼女の頭髪を掴み、右手で頬を叩いた。往復ビンタというやつである。少し強過ぎたのか彼女は打たれる度に顔をぎゅっとしかめた。しかし私は容赦しなかった。この姿勢は背骨を伸ばしているので、見た目以上に苦しかったようである。更に鼻と乳房を責めてみたが、彼女は身動きしようにもできなかったのか、じっとそのいたぶりを受けていた。鼻孔に煙草を差し、乳首を抓るやり方である。肘から下が変色し出した所で解いてやる。

休まず次の吊りを試みる。手首を固く後手に縛り合わせてから、縄尻を腹部に巻いたのは先程の逆吊りと同様であるが、今度は開脚の逆吊りである。矢張り椅子を使って吊ったが、開脚だけに吊り終るまでに相当労力を使った。恐らく彼女の体重が軽かったのここまでするやうな目かくしの絆創膏だけは外してやった。経験上逆吊りの場合、目かく

しのない方が永持ちするようである。写真(6)を見ていただこう。前後左右をロング、アップで写しているのだが、アップのものに迫力があるのでこれを提供した。下半身の太い白線は性質上御辛抱願うしかない。この逆吊りは最初の時より長く放置した。恐らく二十分近かったと思う。全身の滅多打ちの後での意地悪いいたぶりは文章にできないので御想像に委ねよう。この吊りでは女体は全くの無防備である。最後には彼女に燭台になって貰った。暗闇にして眺めたこの燭台は、蠟燭の焰を妖しく受けて最高の図であったこともつけ加えて置こう。

畳の上以降ろして口の絆創膏を外してやるとガーゼを吐き出した彼女は感極まったように云った。

「もっといじめて！ もっともっと」

目の前の女体は完全にエキサイトしているのである。しかし、私にSEXはタブーである。と云ってこのまま解放するのは酷(?)な気もした。

「どんなにしてもいいから！」

この際彼女に喋らせることは私にとって有害(?)である。再びガーゼを押し込み、縄で口を縛る。絆創膏を切るのが面倒なので手

拭で目の上を括る。俯伏せにして手首足首を腰の所で一束にして強く縛る。逆海老縛りである。私はその女体を狂ったように平手で叩いた。ごろごろ転がしながら乳房も頬も腹部も臀部もパチパチと叩いた。特に尻は力一ぱい叩いたので、私の掌の方が赤くなって痛かった。谷山さんは声にならない呻きを縄の下で洩らしながら顔を振った。それが写真(7)である。

「この魔女め、もう許さないから」

私はちよつと芝居がかった言葉を浴せた。

体でMの境地に入っている女にとって、そんな言葉も有効であることを知っていたからである。ひとしきり叩いた私も、異状にエキサイトしていた。仰向けにしたところでその女体にむしゃぶりついた。彼女の体がビリビリと慄える。禁断の個所を除いて、私の唇はその柔肌を責める。やがて責めのクライマックス。縛られたままの谷山さんは呻吟する。

私は、再び狂ったように、その全身を平手打ちにしはじめた。そして彼女は突然胸をそらすと最後の悶えに移った。

いましめを解く。彼女は暫らくその自由になった体を横たえたまま恍惚の境地にいたようだった。

「好き！」

突然起き上った彼女は、その裸身を私に投げかけ抱きついて来た。私はそのいじらしさに思わず抱き締めてやる。頭髮の香りが私の嗅覚になまなましい女を発散する。

「こんなの初めて。最高だわ」

「そんなに良かった？」

「意地悪！」

しがみつくように私の首に腕を巻き、胸に頬を寄せた彼女の肌の感触は温く快かった。しかし彼女の激しい発散と同時に私の男も自制心を取戻していた。

「満足できた？」

「とっても凄かったわ」

「それは結構でした」

編集長によく云われることだが、谷山さんの場合は特にサービスしているのが私の方だという実感が強かった。彼女は最終の満足を味わい私はその傍観者に過ぎないのである。御丁寧にも私は彼女を抱きながら、顔に残っている絆創膏の貼り跡を指で落してやった。

「また逢って下さる？」

「あなたがよければね」

「約束して欲しいわ。せめて一カ月に一回でもいいから」

彼女はもう次の予約を求めた。貪欲なMの欲望である。

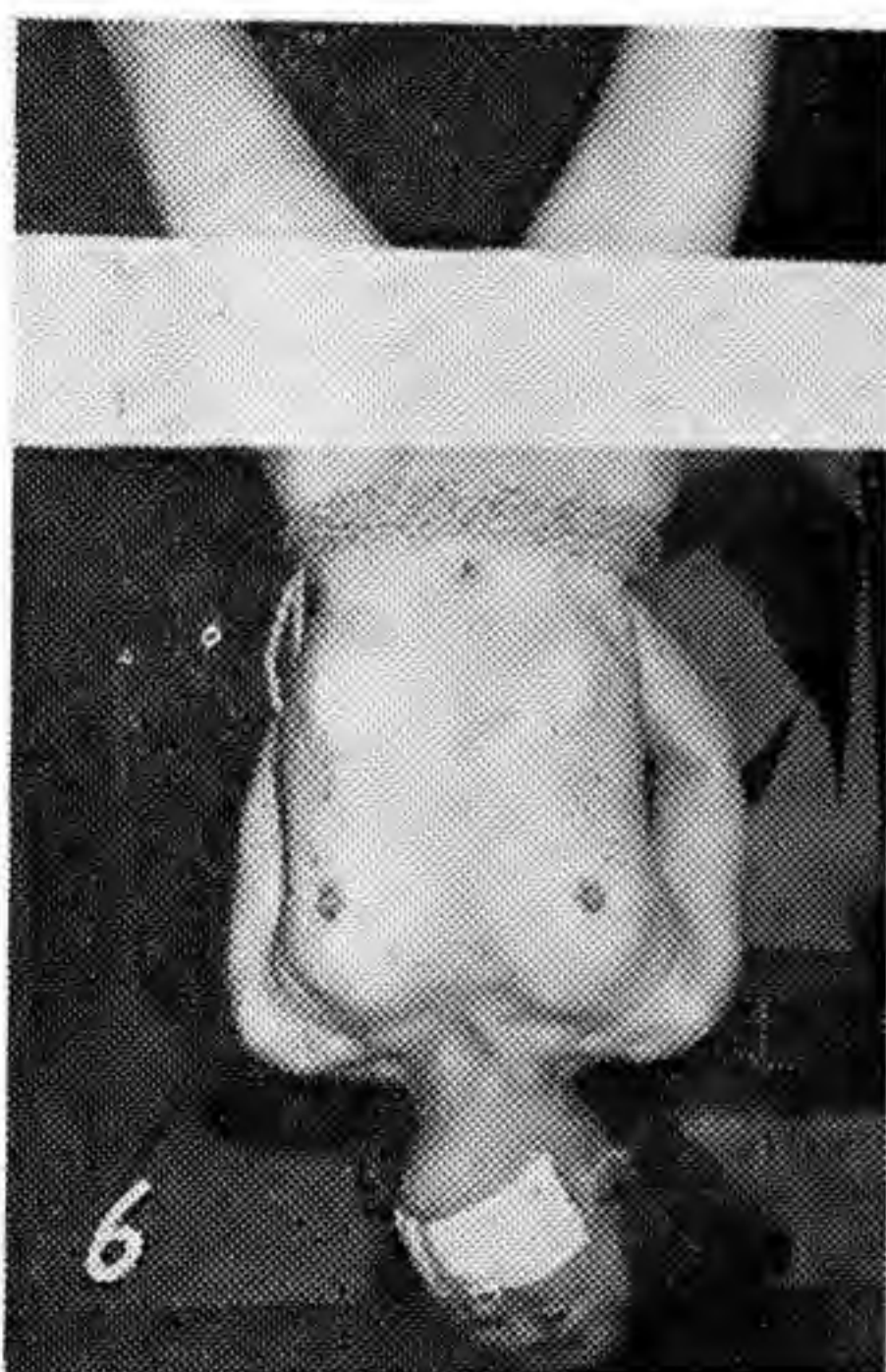
しかし服を着て化粧を直した谷山さんは、別人のようなもとの婦人に戻っていた。

「ルポにお書きになる？」

「そのつもりですが。具合が悪いですか？」

「構わないけど絶対に顔のはっきりしたのは出さないで下さいね。それだけを守って貰えればいいんです」

モデルでないマニアの彼女としては当然の要求であろう。従



ってこのルポに提供したフオトのすべてが、彼女の容貌を隠しているものとなったが止むを得ないのである。彼女の若悶の表情の出たものを、一枚位は思いきって出したい気持はあるのだが。

私達は再び岡山駅で別れた。私が手を振ろうとすると、彼女はニッコリ笑みを漂わせて握手を求めた。

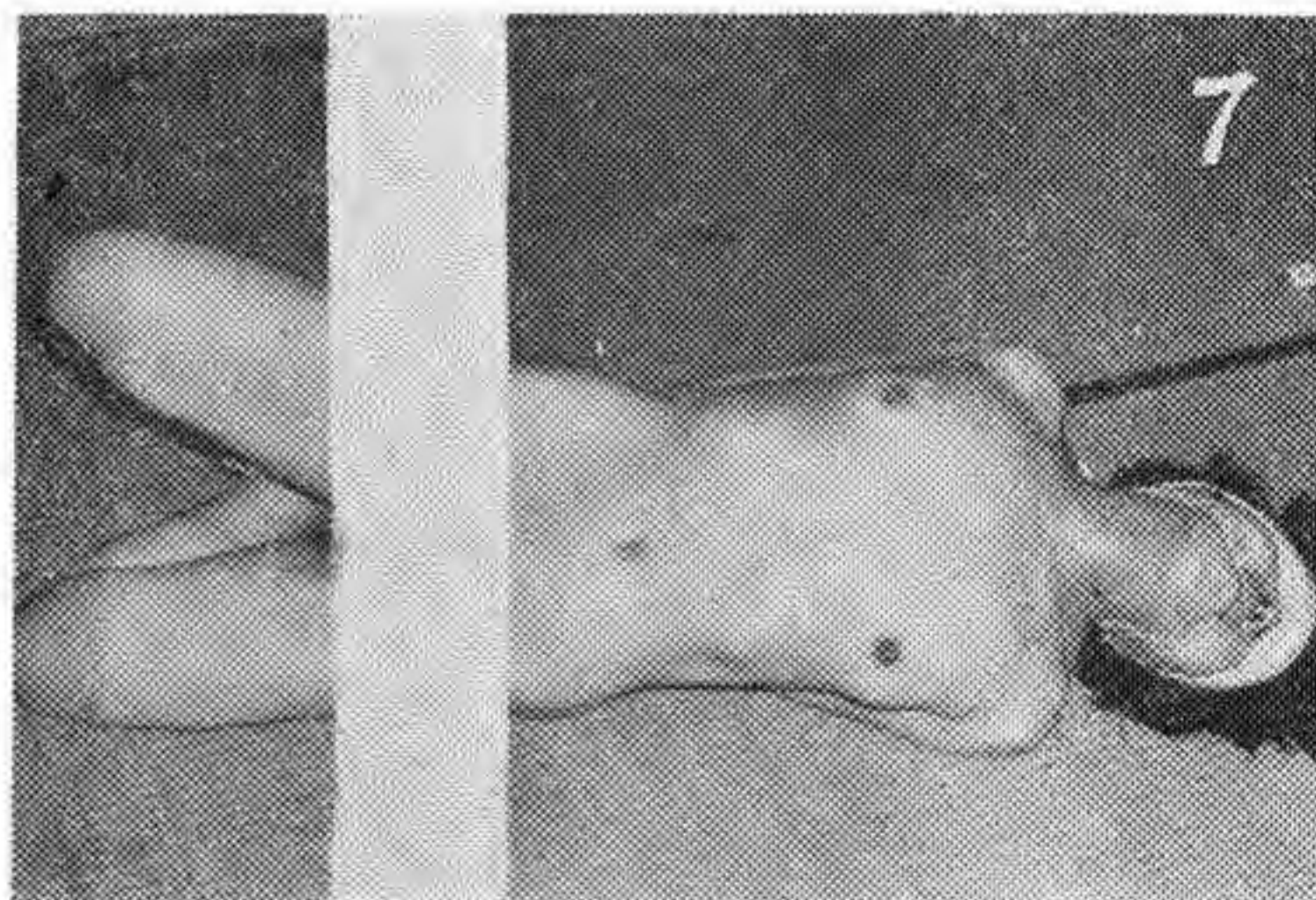
「きっとまた逢って下さいね。近いうちにお願ひしますわ」

谷山さんが完全なM女性であることを疑わない。それはこの最初にしては残酷過ぎるとさえ思われるプレイから数日後に私が受取った手紙からも、窺うことができるので引用する。恐らく機会があれば再び私はこの谷山久美子さんのサービスを買って出るだろうと予感している。

蛇足ながら帰途の道中は往きに較べて短くように思えた。私の頭の中に残された強烈な映像が、容易には消えずに何度か頭の中で再現されたからであろうか。

○

(この間はとても楽しい半日でした。でも山本さんはきっとお疲れになったことでしょうね。ごめんなさい。空想していたことが現実



となった時、それは素晴らしいものでした。今まで心の中で燃っていたものが、一ぺんに一掃されてしまっただけで生甲斐を感じています。尤も翌日一日は体の節々が少し痛みましたがでもその苦痛さえもがなんだか私に喜びを思い出させてくれるのです。そして何も知らずにいる女の人を見ると、この世界を知らない

のが気の毒にさえ思えるのです。セックスだけの喜びは、この世界の喜びと比較する時、余りもみすばらしく貧弱です。そんなに考えるのは傲慢かしら。頬を打たれた時はびっくりしました。でもそのじーんと頭に来る感じは、プレイの中では決して厭なものではありませんでした。吊りも鞭打ちも山本さんが私の体になさったすべてが私の望んでいたものと一致していたようです。でも最初だから少し手加減なさったのではないかしら。もっとひどいことでも辛抱できるのではないかと思っています。辛抱できるって云うのは表現が拙いかしら。望んでいるって書く方が正直なのかもしれませんね。山本さんのなさることならどんなことでも喜びになりそうです。そしてきつければきつい程その喜びが大きいと思います。もし今度お逢いできることがあれば、手加減せずに滅茶苦茶に責めてやって下さい。女隸だと思って。お呼び下されば、次は私の方から大阪へ参ります。きっと御返事下さいね。またお逢いできる日を心からお待ちしています。

谷山久美子

(おわり)



書誌研究家にも各人の持味というものがある。城市郎氏が特に発禁本の分野とすれば、斎藤夜居氏は風俗もの一般を追われ、中でも特殊風俗誌の分野に於てはまさに当代、氏の右に出る人は、そうザラには居ないのではなからうか。しかも、古本屋めぐりの「巷の趣味家」を以て任じていられるので「先生」臭くないところが親しめ読者中心の奇譚クラブにとって、実にピッタリの寄稿家を得たことにもなる。

私はここ数年来、氏には書物に關して種々とお世話になっていて、のだが、久我庄一なるペンネームを白状(?)していないので、氏は、久我という方の私をご存知ない。だから、世の中は面白い。さて斎藤氏は数々の私家版を発行されているが中で特に好事家の注目を浴びる成果を上げた研究がある。「カストリ雑誌考」だ。読み捨て、屑屋直行に近かった戦後乱発の、センカ紙雑誌(俗にいうエロ雑誌)を蒐集、これをすら戦後の性風俗資料として貴重な文献的価値を抽出、バラなら三文の値打ちもない物を総合的に眺め、根気よく分類整理したその労は、大したものと感じ服の他はない。この「カストリ雑誌考」出版のおかげで古書街の紙屑(?)が、急にケッコウよい値を呼ぶようになったという余談まである。

その斎藤氏が、最も力を注がれている「風俗人特殊雑誌のいろいろ」の研究発表の場が本誌であるのだから嬉しい。氏の「性風俗資料入門」は、私に血の通った親しみと懐しさを味わせてくれる最大のものである。そこに紹介されるいくつかの書影が私の青春の一面を共に想い起させてくれる。私の過去など興味ないと叱られるかも知れないが、氏の研究に強く魅かれる人間の辿ってきた道を眺められるのも無意味ではなからうと思ひ一筆する次第である。たしか、昭和十八年頃か、東京は蒲田駅西口近くに小さな古書店があった。戦時中というのにまだ「グロテスク」や「デカメロン」が山積されていた。私は徴用工として羽田附近のゴム工場で働いていたのだが、わざわざこれを狙って買いに行き耽読したものだ。当時の気持を考えると、まことにアンバランスな生活態度のようであった。「死なば靖国神社の花」などと本気に決心していながら、反面、デカタンもよいところ。隙をみては仕事をさぼり、禁書(軟派雑誌類)を隠れてむさぼり読むかと思えば、多くの女工を対象に便所のぞきをして廻る。そのくせ面と向かえば、若い娘の手一つ握る勇氣はない。まことに純情?

風俗的なものを余り置いていない古書店でネバリ、江戸川乱歩全集の分冊を奥から出してもらった想い出も懐しい。灰色の谷間に尽忠報国を真剣に考えていた若者の愛読書が、これら異常の書?であったとは奇妙な生活だが、好き者も多く、同僚仲間で見聞したのも事実だった。仕事が終わった後には、青年学級と称する軍事教練が待っているのだが、これを出席と見せかけてドロンし、蒲田、神田辺りに遠征?神保町の古書店街をふらつくのも楽しい時間だった。そして、教練課目の終る頃を見計らい、巧みに解散点呼に間に合うようにスベリ込むのだが、これがまたスリルがあったものだ。ことがパレルと、軍隊並みの懲罰は免れないところだが、風俗雑誌類の魅力は、私をして敢て冒険に走らせたものだ。考えてみると私の風俗誌耽溺もあれ以来、早くも三十年近くにもなる。つい先日、奇巧に初対面して喜びの第一報を投じたと思えるのに、はや数年を数える。げに、私にとっては、書物なき人生は砂漠の如く、風俗誌なき生活はヌケガラに等しい。風俗誌こそ生活の泉とも思う次第。

風俗誌耽読の回想

久我庄一



(第四十八回)

辻 村 隆

げに、女心は不思議なものである。一回きりかと思っていた浅井優子（『優子の涙』参照）から、思い出したように電話がかかってきて、又会いたいと仰有る。会うということはプレイを意味している。アルバイトが目的なのか、それともプレイ自体に興味をおぼえたのか？ 生憎と家内が電話のそばにいて、女房の手前、余り長話も出来ず、彼女の意向をはっきりきけなかったが、脈は大いにありそうである。夙川の会長さんから、彼女を連れて一度こいと仰有

っておられるし、身辺相も変わらず多忙である。

それに、安井喜久子夫人がすっかり調子づいてきて、彼女今や全貌をさらけ出し、夫君の安井邦臣氏が、いささかタジタジの体である。編集部で紹介して以来、箕田氏始め一同力を入れるものだから改めて開眼されたかのように変貌してきた。濡れぬ先こそ露をもいへとえというが、げに不可思議なるは女心と、近頃つくづく思うのである。機会があれば喜久子夫人と二人っきりで、心行くまでプレイしてみたい気持ちしきりであるが果して安井氏が許容するかどうか。彼女のMが真性のものだけに、底知れぬ妖しさを秘めているのではなからうか。

青木順子さんが、健康上の理由から、ここしばらく、ゆっくり静養することになった。相棒の向一也氏からも、数度お葉書を頂戴している。いろいろ相談を受け、彼もSM劇団を旗挙げする意欲に燃えて、人集めに八方奔走していたが、集うた男女十数人、いずれもSM気のある人許りだったが、結局お芝居の出来る人はおらず、やっとその中から青木順子さんの後釜にな

るような女性を選んで、今回、名古屋の日劇ミュージックホールで公演することになった。

向一也氏は今後、小泉徹という芸名の下に新発足されますから、機会あれば一度、過去のファンの方は覗いて欲しいとお便りでした。名古屋へ出掛けた節、早速激励してあげたいと思っています。

数々のカメラ・ハントの女性はその後どうなったのかと、しきりにおききになる同好の方がいらっしやる。

爾来ずっと音信の続いている人もあり、又、出会ってフोटを撮った人もあるが、ハントの宿命が次々と新しい女性の紹介にあるので、一部編集部で分譲フोटになった女性もいるが、大半は健在である。

私の希望としても、続三好留美の巻とか、続・続小原真澄の巻を書きたいのは山々だが、やはり目新しい人なるべくという気持ちで、そうした人を優先的にするので、一回きりになってしまいう惜しい人もあるわけ。

カメラハントと銘打たなかった以前から梨花悠紀子、東浦ひかる竹野ひろ子なども、単発で書いた

が、すべてはカメラ・ハントであり、奇譚三十九夜物語で発表した水本茂美や緑川洋子。その他フोट入りの女性は謂わばカメラ・ハントの範疇に入るのではなからうか。

機会があれば、カメラ・ハントの続稿として、今もずっと交誼のつづいている、三好留美、木村洋子、増田みゆき、小原真澄、川越美佐子、左近麻里子、佐々木真弓、浅井優子、魔子、河森真理子始め諸嬢の、その後の進展ぶりやら、田宮夫妻、安井夫妻、水野夫妻の既に発表組を始め、遂に筆に仕損なった、青木夫妻、新田夫妻、市川夫妻などの夫婦プレイものも、今後もう一度、新らしくハントして、順次、発表してゆきたいと思っております。

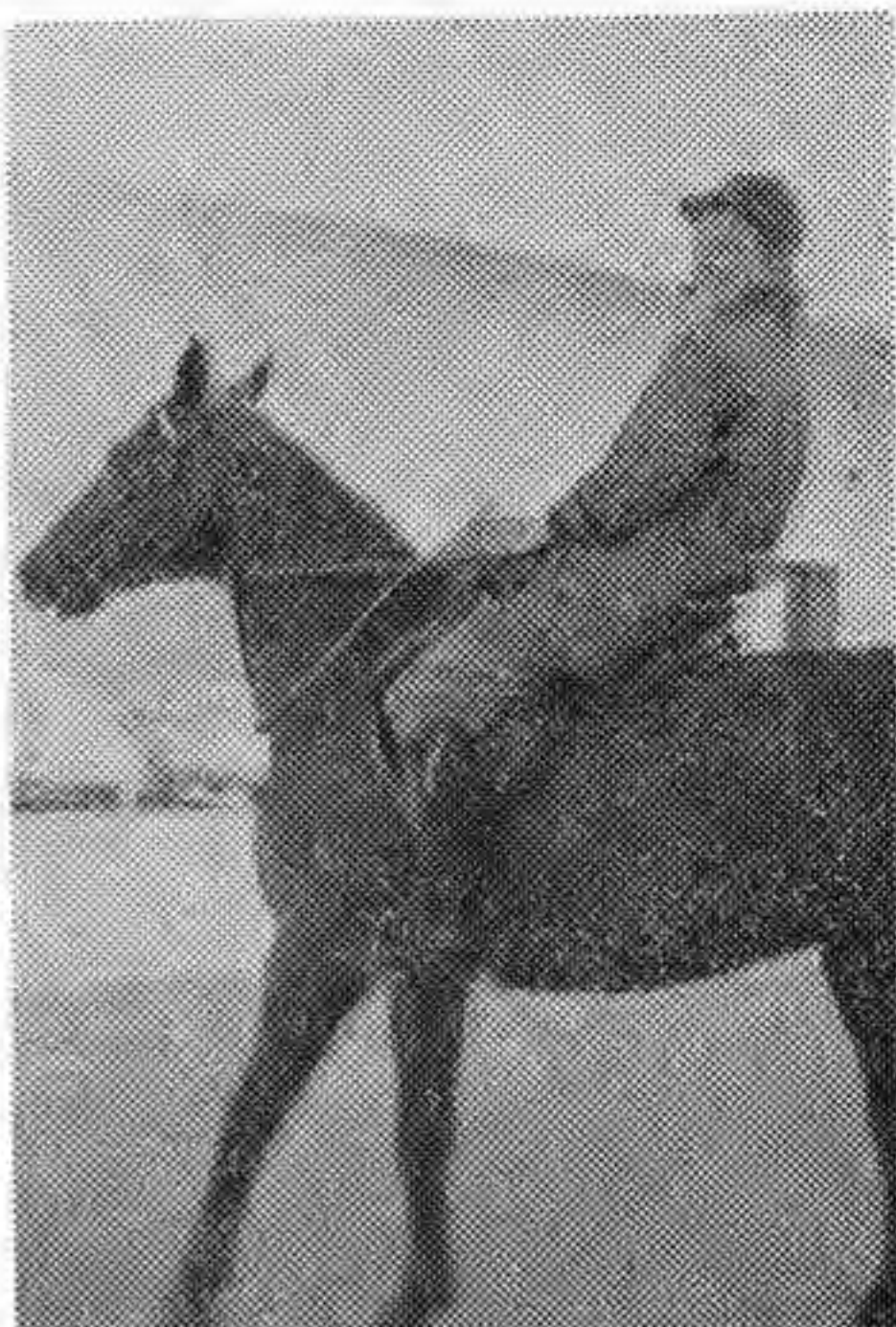
カメラ・ハントの集大成を望まれる声も近頃、よく耳にするようになり、非常に嬉しく思っております。

編集部で若し機会を与えていただけなら、誌上に発表されたフोटに加えて、かなり大幅に削られていた未発表フोटを加えて、誌上華を咲かしてみたい意慾一杯です。

「女性乗馬フォト展」

について

麻 生 保



デンマークのマダム・ライダー

提供 佐 野 寿

五月号サロンにのった佐野寿氏の「ヨーロッパ旅行土産・女性乗馬フォト展」を嬉しく拝見しました。少しピントのあまいのが残念だけど、皆よいものですね。

特にギャロップ中のはダイナミックな迫力にあふれていて秀逸でした。シャッター・チャンスがよかったために、アマゾンの長い脚がいかにエネルギーギッシュな

感じに写されていて、彼女の脚力の強さというものをフォトから感じとることが出来ます。ですから心ある人はこの写真を一見したただけで、あのみごとな脚が馬のわき腹をボイン、ボインと力強くけりつけ、グイグイと拍手を喰いこませ、はげしく責める光景を、ごく自然に想像することが出来るであろうと思うのです。

このところ乗馬女性の記事が少なく、つまらない思いをしていた矢先、佐野氏の御健筆を祈る次第です。またフォトも、いろいろと拝見いたしたく、誌上に公開して下さるようお願いする次第です。

短 信 往 来

村 まり子

東京・中野の北畠剣二様へ

去年の八月号と、今年の四月号の二回にわたって私に呼びかけて下さり、そして、勇気をもって行動せよ！とおしりをひっぱたいて下さって心うれしく思っております。しかも読者通信のどのお手紙よりも熱と愛情のこもったものとして拝読し、とまどっております。

毎号、「私を縛って下さい」と大胆に名のり出た女の方が、その次の号でもう丸裸で縛り上げられた写真を見る度に、今度は誰の番かしらと、私がそうされる様な心のおののきを感じます。ところでこんな事を面と向って申し上げたら叱られるでしょうか。

世の中には色んな人々がおり、男の方でも——いいえ男の方さえも——実に長い間女を緊縛する事を夢みながら結局素顔を登場させて実行出来ない沢山の方々がいるのではないのでしょうか。三好瑠美さんや長井ハツコさんは本当に

氷山の頭で、その海面下には現わし得ない「未知の願望」に心をよじらせている平凡な数多くの女性がかくれていると思います。だからこそ「奇ク」は読まれ、愛されているのではないのでしょうか。

編集長様

もう一年以上も読ませていただき、同じSと云っても色んな種類がある事を知りましたが、誌上往復書簡の様なものは実現出来ないのでしょうか。例えば一人の女性が自分の趣味を露わに或る未知の人に呼びかけます。その要求にピッタリあったと思う男性方が、名のりを上げて、返答する。勿論その逆でも結構です。それにより世の空想的SM族がその空想の翼をより自由に、目標をもって誌上に表現出来るのではないのでしょうか。私はあの人に責められたい、とかこの人をこうしたい、とか特定の人物を名ざして楽しむ事も可能でしょう。生身の人間としては永久に会えないかも知れない、スポーツ、芸能スターにもファンがあるように、SMファンとしてファン同志の対話をしたと思いますし又書きたいと思えます。いかがでしょうか。



夫婦プレイの感想と限界

長田 実

最近夫婦プレイ同好者の投稿が日増に多くなり、私達同好者としては喜ばしい事であると常に考えています。私達夫婦の場合も、数年間の長きに亘り実施して来ており、コレクションした記録写真も整理してアルバムしているものだけに、約千枚におよんでいます。未整理のものも入れると、数倍に

なることでしょう。夫婦プレイにおいて、写真に記録する時は何時ものプレイ方法より変った事をしようと考えて、全裸、洋装、和装や、種々の器具を使ったり、ロープそして皮製の縛り、又は棒を使ったりして、あらゆる方法でプレイして来ましたが、夫婦間の場合は、場所的に、そして構図的な

ど限度があって、それ以上進展したものが出来ません。しかし夫婦間の秘密を公開することには大きな抵抗があり、数々の夫婦プレイ同好者も、その秘密を守るために公開されるのが少くなるのだと考えています。四月号の安井喜久子夫人のように主人と夫人の理解のもとに、主人以外の外の男性に責められたいと、望まれるような、夫婦プレイ同好者は少いものと思います、万が一気持ちがあってもそう簡単に、割り切る事が出来ないのが夫婦のゆえんです。

ただM希望の女性のように、責められることの喜びであれば、男性があれども責めの喜びに変わりがないので、数多くの男性を求められますが、夫婦の場合はプレイによって夫婦間の結び付きを強めて行く要素がある以上、簡単には公開出来るものではないものです。男性側から云えば、女性の責めに対する喜びを、より一層強く味わってもらうために他の男性の責めを受けるように要望しますが、女性としては、主人以外の男性に、妻自身をさらけ出すことは、誠に困難であり、又、恥かしい事でも



＜短歌＞

「絶望」

高村初子

後手の縄尻杭につながれて順番
きめるあらがい聞く

ジャンケンに勝ちし男は淫らな
る声打ち上げてにじり寄りくる

つながれし縄尻とかれ凌辱のべ
ッドの部屋へ引き立てられぬ

垢じみたシーツの上に投げだせ
し素足の白さ目にしみいれり

仰向けにベッドの脚にくくられ
し絶望の目に涙うかびぬ

必死にて乳房おおえど忽ちに手
足に縄のからみゆく見ゆ

けがされる肌と思えばいとしさ
の涙こぼる顔うずめつつ

腰まぐら入れられたからだ弓の
ごと呻きの声の思わずも出ず

肉をさく痛みに耐えずのけぞり
て叫びをあげぬ心ならずも

「私の夢」

園部まり

婚期を過ぎた女。財産有。

何時だろうか。SM雑誌を読み出

したのは。

長い間読んだ。そう長い間。

私は浣腸マニア。

今の期待。私の前に素敵な夫が現

れること。

どんな夫。そうね。美男子。

どんな職業。何でもいいわ。

でも、医者。弁護士。科学者。

医師の卵がいいわ、私は浣腸マニ

アだもの。二十から二十二、三才

がいいわ。

色白で背が高く、そして……。

私、Sなのかしら、それともMな

のかしら。未来の夫をいじめたい

わ。タツプリと浣腸して、ウフフ

裸にして。縛り上げて。

ドナン。それともグリセリン。イ

です。仲々、決心の付きにくいこ
とでしょう。安井夫人の教育のよ
いことに感心しています。

本論にもどりまして、夫婦プレ
イの種類も多く重ねて来ましたが
何時も同じようなものになり勝ち

チジク。

イルリもいいわ。そばには脱がし
たブリーフ。ビキニブリーフ。

どんな浣腸器を使うの。

二十、三十、五十、それとも百c

cの。

フリートエネマもいいわ。

切れ長のマツゲ、美しい口もと、

ひきしまった足、ふくらむお尻。

大きなおめめ。黒いつやつやした

髪の毛。

苦しそうな吐息。

何を使うの、排泄に。

ウフフ、いろいろね。

お尻をたたきたいわ。平手打ち。

赤くなつたお尻、ムチは可哀想。

私の大事な赤ちゃん。苦しい。

苦しみなさい。私の夫よ。

浣腸に耐えよ。私の夫よ。

さあ抱いてあげるわ。可愛い赤

ちゃん。

おしめの時間よ。可愛い赤ちゃ

ん。

製作しましたので、次回には、も
っと変ったものが、お見え出来る
と思います。同好の皆様方と誌面
を通じてどしどし交換したいと思
っていますゆえ、こぞって投稿し
て下さい。

売れ残りの女。いやだわ。

いやいや。

俯伏せになっている。私の夫は。

丸いお尻が。食べたくなりそう。

そばには使用済のイチジクが。

大の字の男責め、うめき声が聞こ

える。

苦しみを我慢しているうめき声。

私の手には百ccの浣腸器。

じわじわ責める浣腸責め。

苦しそう。とても。

もう許してあげようかしら。

浣腸は終わった。私の夫はいない。

私の浣腸も終わった。

みんな私の浣腸の苦しみの幻想な

のかしら。

本当にそうなのかしら。

私の前に現われよ。私の夫よ。

いつでも浣腸してあげる。いつで

も。

私の夫よ。私の夫よ。私の。

美女力士に期待する・・・

奮斗士好太

スクリーンにいいよ女相撲が登場する。女相撲と云っても、これは本当？ の（あるいは本来の）女力士によるそれではなく、江戸城大奥の女たちによる余興的な女相撲。

これは東映が目下製作中の「徳川女系図」の一シーンなのだ。東映、大映あたりの最近のハッスルぶりはまるで独立プロのお株を奪うようなお色気作戦、ピンク攻勢だが、この作品もダイナミック・セクシー路線と称するシリーズのひとつで、撮影に当たっては、独立プロのピンク女優たちの大募集で話題を呼んだが、監督もお色気に徹底した楽しい作品にしたいと云っているという。

女相撲の登場するのは、大奥の美女たちが將軍家の御前に赤いマワシひとつを身につけただけの裸体を惜しげもなくさらして、悩ましくも雄々しい相撲試合を展開するというシーン。主人公の美女はこの試合に見事五人ぬきを果たし

て將軍家のおほめに与り、さらには將軍家とも相撲試合を演ずるという「光榮ある」役柄。

しかし、この役もだいぶ難航したらしく監督は最初この役を、東映きってのお色気女優三島ゆり子を予定していたという。お色気のかばれ落ちそうな三島が、衣裳をぬぎ捨てて赤いマワシひとつのあで姿を披露してくれたら、どんなにか素晴らしいものになったことか。しかし彼女は

「魅力はあるけど、赤いマワシひとつというスタイルではどうも」とOKせず、残念ながら彼女の麗姿はおがめないことになった。

それではと監督は大挙出演のピンク女優たちに当たったが、彼女たちも「ハダカにはなれてるけど、マワシを締めるといふのは羞かし」と、いずれも出演を渋り、困っていたという。

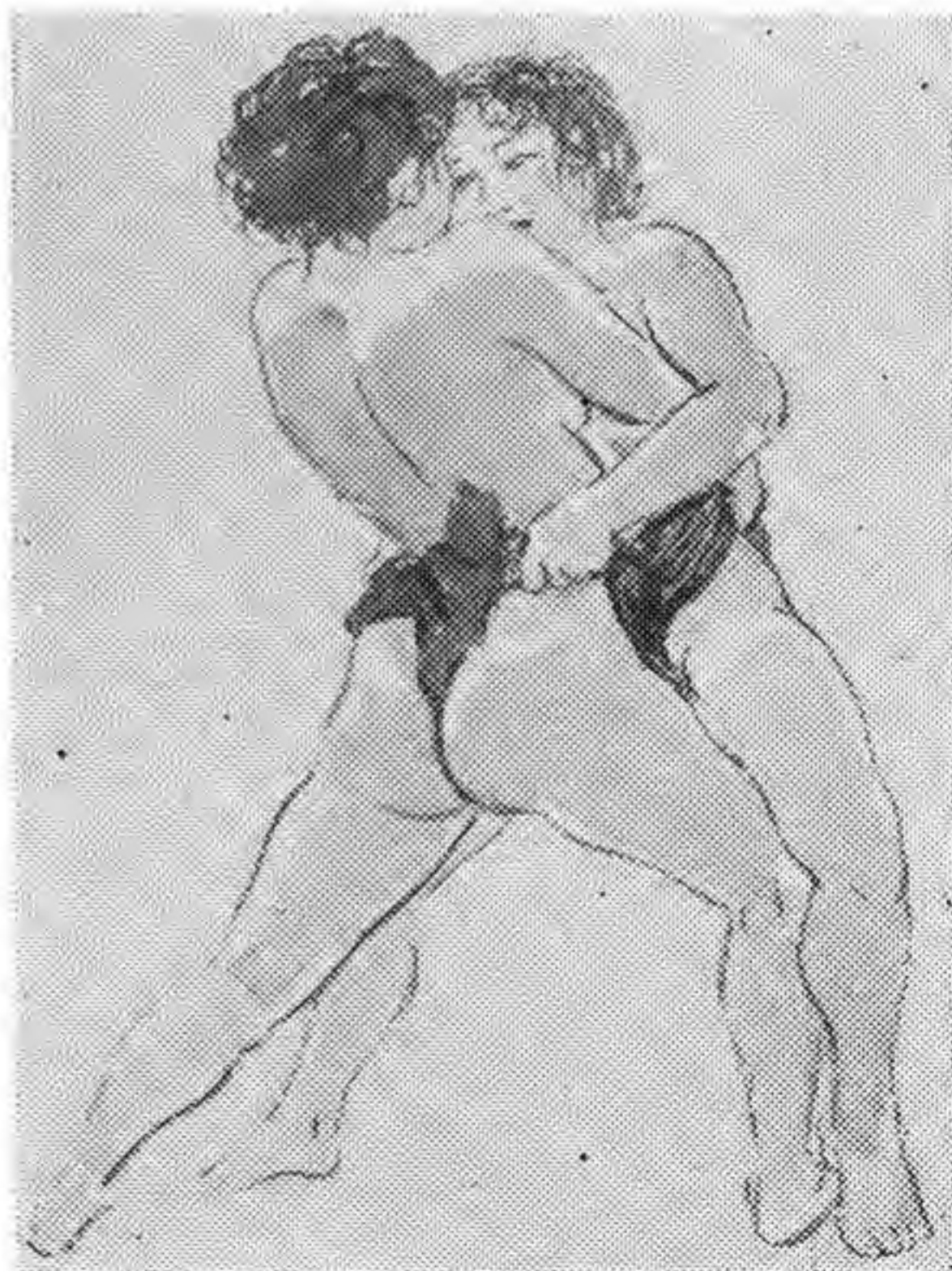
そこへ名のり出てきたのが賀川雪絵という十九才の新人。「ハダカになつてマワシを締める

のは、そりや羞かしくないことはないワ。でも女相撲ってほんとにあつたことなんですよ。だったらそんなにこだわることはないんじゃない」と、しとやかな名前に似合わぬ現代っ子らしい度胸のいいところをみせて、監督を喜ばせたという。

この心掛けのいい新人、大役を買って出たのはいいが、身長一六六センチ体重五一キロと、ちょっとスマートすぎる感じ。身長の方から五をひいて体重の方へ加えれ

ばちょうどいいくらいになるが、まあスマートな美女のマワシ姿というのも悪くはないだろう。

さて、この異色の新人の志願で主人公役がきまつたのはいいとして、この主人公に投げとばされる役の方はどうなるのかと少々気になる。マワシ姿がピンク女優たちにかきわかれたというんだから、他からアルバイトでもさがすのだから、奇クの誇る大塚、東浦両嬢をはじめ、ふんどし姿に定評あるモデルの方々に出演していただ





……イメージ画……

「華々しき散華」 新井伸治

ないものだろうか。

そして、キリリと締め込んだマワシ姿の魅力をぞんぶんに披露していたかどうかともに、ピンク女優たちを教育、指導してもらいたいと思う。

相撲試合のシーンでは、まさか主人公を負かすわけにはいかないが、そこは経験十分な技をふるって手に汗にぎる熱戦を展開、女相撲の華やかさを観賞させて貰えたらどんなに楽しいことだろう。

將軍家―女相撲といえは、まず浮かんでくるのが故村松梢風氏の名作「仇討女相撲」のこと。

この長篇のあら筋は、以前雪崎

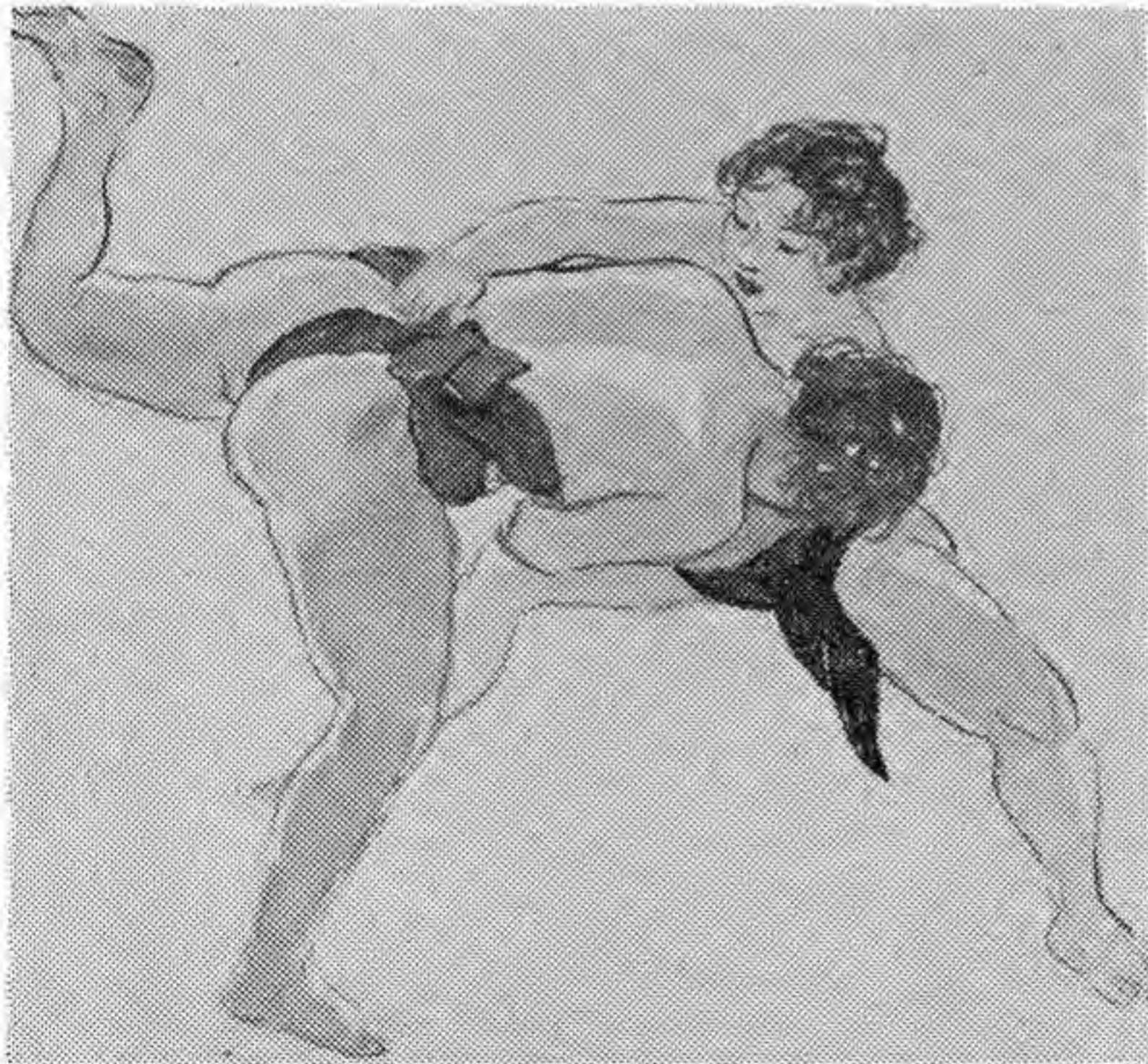
京人氏が紹介されていたけれど、美女お梅の波乱の物語りは、一度ぜひとも通読したいと念願しているが、出版されたものかどうかとも知らず、復刻されたということも聞かない。子どもの頃にほんの一部を読んだ記憶はあるけれども、たまたま読んだ本のなかにあったという程度だし、残念ながら女相撲の取組み場面でもなかった。

この小説、どこかのプロがとり上げてくれないものだろうか。主人公たちが文字の上だけでなく、スクリーンの上で実際に動きまわ

ってくれたらと思うと胸が躍る。

主人公の美女が女相撲に身を投じ、その一座とともに旅を続けながら父の仇をねらうなどというのは奇抜な設定だし、江戸風俗の一面断面としても甚だおもしろいものだと思う。豊満な裸身をいりどる

一筋のマワシに運命をかけた美女お梅。技と力の激しい勝負に明け暮れながら旅を行く女相撲の一座―ファンにとってこれ以上の魅力はないだろうし、映画史上にも記録さるべき作品となることは間違いないだろう。



「女相撲の図」二点

雪崎京人

提 案

私の描く奇ク青写真

山 上 四 郎

「新しい奇ク」とはいうまでもなく、グラビア写真等の見る雑誌から小説を主体とする読む雑誌への変化を意味します。これから私の述べる「新しい奇ク」については私自身の好みが入っており相当主観的なもので、もし反発を感じる方があるなら存分に誌上にて批判を加えていただきたい。

さて私の構想であるが、現在奇クは大体二百四十四頁から成っています。これ以上頁数を増すことは値段の関係から無理なので、例えば「花と蛇」特集号は四百四十頁あるが五百円します。五百円という金額はなかなかきびしいもので、結局与えられた二百四十四頁を有効に使うほかないのであります。

「奇クサロン」「読者通信」分譲品のお知らせ等を差し引き、残った頁は二百二十頁になります。この二百二十頁をどう使うかということなのですが、私としてはまず小説部門に百二十頁はほしいところ、その他は告白物に三十頁、

カメラハントに四十頁、残りに随筆、批評を入れるのです。特に小説などに対する批評文は毎月十頁ぐらいはほしいものです。

ちなみに奇ク五月号を引用してみましよう。四十三年五月号には「花と蛇」から「月形千浪……」まで引くため、小説は九十九頁。辻村、山本両氏のハント物が四十四頁あります。

この辺は私の想像と一致していますがその内容となると二の足をふみます。私の言う百二十頁の内容というのはこうです。まず連載物は一本にしぼるべきです。これには「花と蛇」があり、毎号二十頁は誌面をもらいたいものです。それから長編を四本。となるとどうしても頁数にして五十頁ぐらいは必要ですが、四本となるとそれだけで誌面をせんだりうしてしまうので、三カ月くらいの短期連載の形をとるのが、一番いいようです。「花と蛇」は羞恥責め小説ですが、その他の四本には、レスビアン小説とサディズム小説はぜひ

一本必要です。それに女性のかいたものも一本はほしいものです。ここで、マゾとホモについてふ

れなかったのは、私自身がきらいなこともあります。それらについてはその専門のような雑誌があるため、ことさら奇クで採り上げる必要はないと思うからです。(マゾとかサドというのは、ここでは男性を主体としてのこと)

残りは二十頁ですが、ここには十頁以下の軽いタッチのものを、二、三本のせめます。例えば以前の「白雪姫」のようなものです。ハント物は五月号では二本の

ているが、これは一本にしてほしい。というのは、どうしても同じような内容になってしまいうからです。そして、一頁に一枚ぐらいの割で縛り写真をいれて下さい。最も近藤麻里子嬢のように素晴らしいモデルのみつかった時はその限りではありません。

三十頁はほしいといったのですが告白物では五頁ぐらいが限度です。一本とはいいません。数編おねがいしたい。本誌の告白はほとんど女性からのものが多い、私の望むところではありませんが、大体にして上面をなでたようなものばかりで、もっと具体的なもの

編集部だより

○先月号で「奇クサロン」の原稿募集で投稿者全員にフォト贈呈としたところ俄然原稿が殺到。早速フォトの方は折返し送付した。

○尚アイデアの応募や原稿の応募者に対しても採否に拘らず折返し編集部作成のフォトを贈呈しているのを奮って投稿願いたい。

○金原奈加子嬢、長井葉津子嬢、

佐々木真弓嬢と新鮮な諸嬢が次々と誌上に登場、マニアの眼を楽しませてくれているが、グラビア頁

廃止のため折角撮影した豊富多彩な写真をお目に掛けられないのが

残念である。この点、他の週刊誌

あたりと比較して自肅の線が強きに過ぎはしないかとの読者諸氏か

らの御叱責がしきりである。

○然し本誌愛読者の女性の方々か

らのモデル志望者が相ついでいる

ので本文掲載の写真にて御満足い

ただけるようニューフェイスを煩

して誌上を飾りたいと思う。我と

思わん方々は、どうか御遠慮なく

名乗りを挙げていただきたい。

○五月号より「理恵女献身」「緋

縮緬地獄」の二篇の力作を新しく



.....私のイメージ画.....
 室井亜砂路氏の「恋人募集広告」に対して
 「春川ナミオをいじめる会」設立ポスター
春川ナミオ.....

を要求します。五月号では河上マ
 リさんのが一本きりでしたが、こ
 の本は同好の人が読むものではな
 ら、女性も羞しがいらず思い切っ
 て大胆な表現をして下さい。
 批評は五月号には全然ありませ
 ん。これも一人で十頁などとい
 いません。むしろ多くの人の批判の
 のった方が好ましいのです。
 あとは何でもかまいませんが、

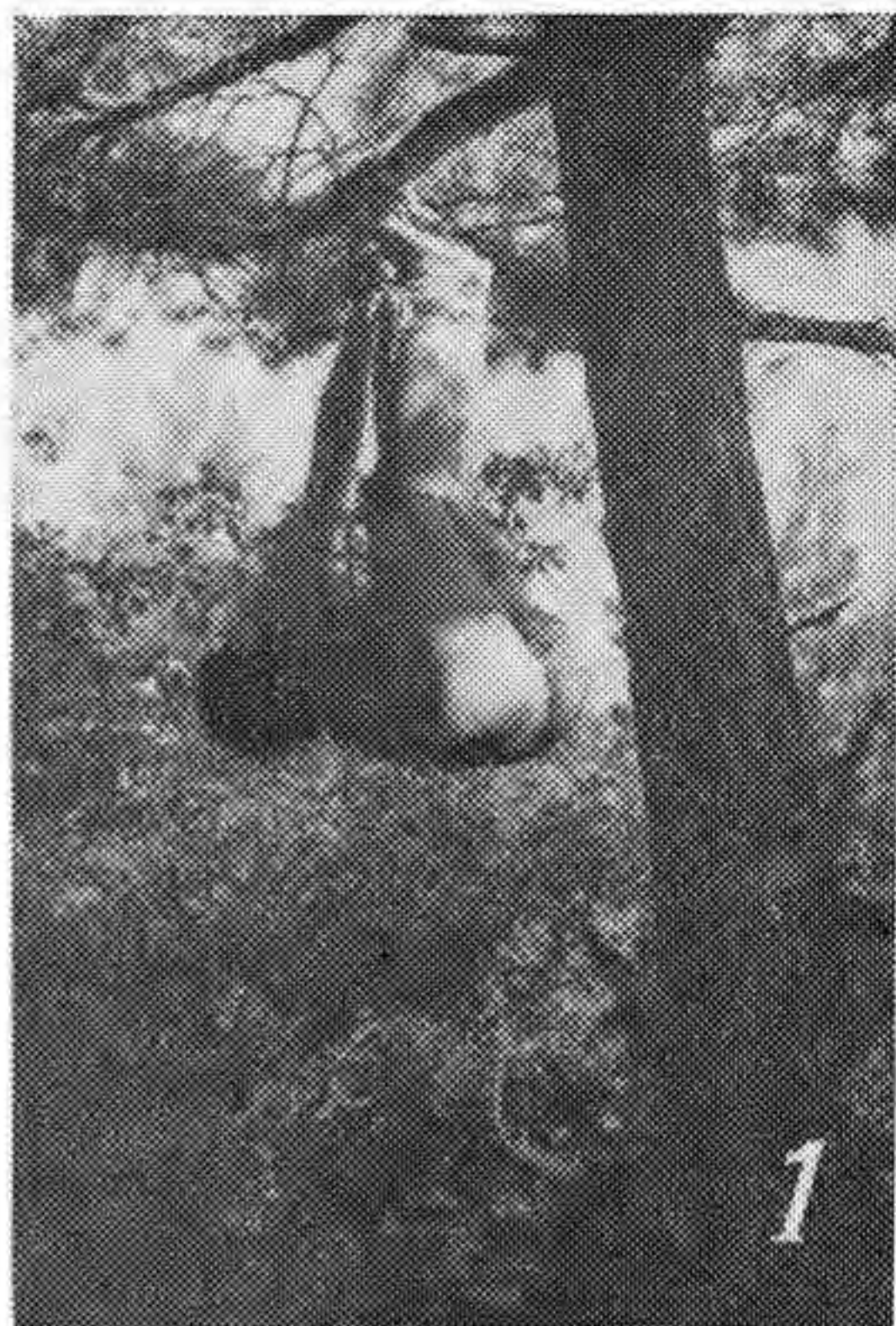
言わせてもらえるならピンク映画
 シナリオはやめていただきたい。
 ピンク映画というのは多少の例外
 はありますが、大体にして女性の
 裸とベッドシーンが、売りもので
 「奇ク」の方針とは異なると思
 います。五月号には二十頁にもわ
 って掲載されていますが、無駄使
 いというものです。奇クはピンク
 映画の宣伝をするものではありません

んから、特に奇ク向きのようなも
 のか、三カ月に一本くらいにして
 ほしいのです。それにあまりそれ
 らをのせることは当局からも眼を
 つけられやすくするばかりです。
 だいが、勝手なことを書いてき
 ましたが、読者の皆さんはどう思
 いますか。一人でも賛成して下さ
 る方があれば幸いですし、編集部
 にも進言したいのです。

連載開始、読む雑誌としての本誌
 に対して強力な布石となったが、
 幸い投稿原稿が極めて豊富なので
 引続いてファンの期待にこたえて読
 みごたえのある内容としたい。
 ○先月号で懸賞募集をした『実話
 と体験』の原稿の応募は案外に少
 なかった。やはり本誌の従来の内
 容に対して懸隔があり過ぎるため
 か、考えさせられる点である。
 ○好評のカメラ・ハントはピンク
 映画の二大スター辰巳典子、谷ナ
 オミの二嬢を紹介して益々ファン
 の絶賛を呼んでいるが、なんと
 いっても登場する女性が豊富でな
 ければ、如何に辻村氏の麗筆をも
 ってしても徒手空拳になってしまう
 う。どうか、本誌愛読の女性の方
 々、便りを御願したい。
 ○懸賞応募原稿或は読者原稿に対
 し賞金或は稿料を送金したところ
 返戻になってくるものが間々ある
 ので仮空のものは必ずその旨附記
 下さるようお願いする。掲載済の
 もので住所を書いておられない方
 はお差支えなければ連絡場所を御
 知らせ下さいれば幸いです。
 ○この欄で言及した地方駐在編集
 員、探訪記者には取材費、旅費、
 日当等を支給の上編集取材を担当
 して貰うので、ご希望の方は書面
 にてお申込みいただきたい。

その後の奴隷妻

山本武男



「奇ク」ファンの皆様、お元気です。私には昨年の七月号誌上に、「奴隷妻」の一文をのせていただいた山本武男です。その後も妻を奴隷にしてのプレイをつづけております。九月には生れて初めての野外プレイをして見ました。松本市より少し東寄りの美力原高原に近い山林に入り、赤松の枝ぶりを

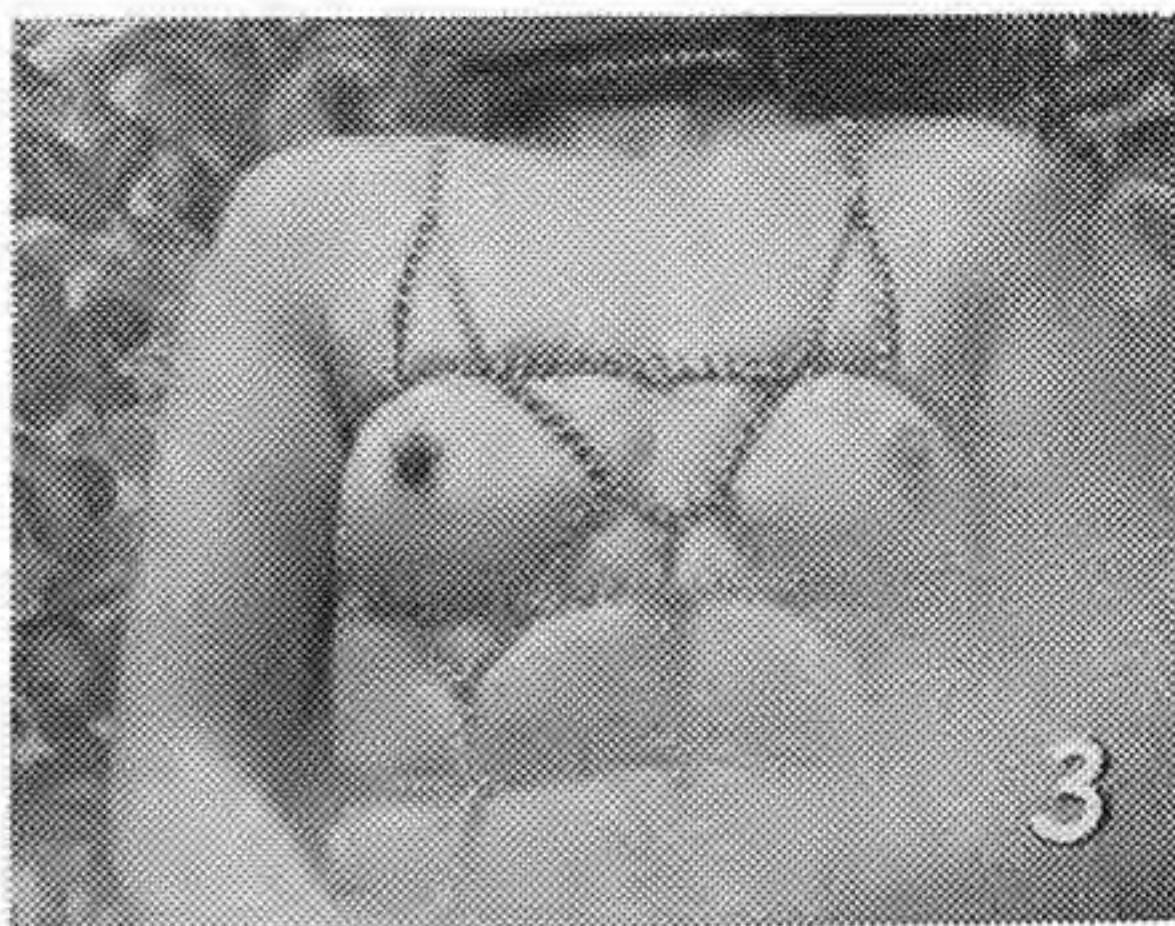
見つけて妻を吊ることに成功した時は、何んともいえない気持ちでした。「写真(1)」九月号所載の、「奴隷妻に魅せられて」の柴利好様、本当に有難うございました。私の考え方も柴様とピッタリ同じであることを告白いたします。奴隷用ユニフォームにつきましても柴様のおっしゃる通りです。ハンダ付けもしたし、いわれる様に施錠もしました。そして昨年第一回

発表の時よりも鎖の数も増し、きつくも致しました。「写真(2)」、「(3)」そして夜はこのユニフォーム姿のまま、首輪をつけ後手錠を施して休みます。もちろん奴隷にはセックスの自由はありません。私達だけの奴隷用のマスコットによって奴隷はなぐさめられるのです。奴隷妻のセックスについては機会がありましたら、くわしく発表したいと思えます。マスコットと強力パイプブレーターによって行なわれますが、何分にもフォトを見ていただかないと分りにくいので、誌上での発表は無理かと思えます。尚、私達夫婦の最終の姿は、妻が奴隷用のユニフォームを着用、犬の首輪を鎖でつなぎ仕事の時だけ前手錠で、その他の時は何時も後手錠です。体毛はすべてそりおとし(頭髮も含む)食べる時以外はサルグツワを着用。サルグツワについても、カンタンに着けられ完全に発声をふせぐこと



の出来るものを製作中です。以上が奴隷妻の本当の姿です。しかし頭髮については実施できず、その他は土曜の夜から日曜日にかけて時折実施しており、奴隷も非常に楽しみにしております。ところが昨年の春頃より妻が勤めるようになり(洋品店の店員)このユニフォームも夏の間中は改良せざるを

えなく、仕方なくパンティー型の股間鎖にいたしました「写真(4)」そして七月の初旬、妻が勤め先にて急性盲腸炎を起してしまったのです。電話を受けた私は、もう生きたこちもありません。取るものも取りあえず病院へかけつけました。妻より一部始終を聞き、用意のプライヤーでパンティー型の鎖をはずし、奴隷のマスコットを取り除きほっとしましたが、本当に汗だくでした。しかし、後のまつりでした。奴隷のパンティーの

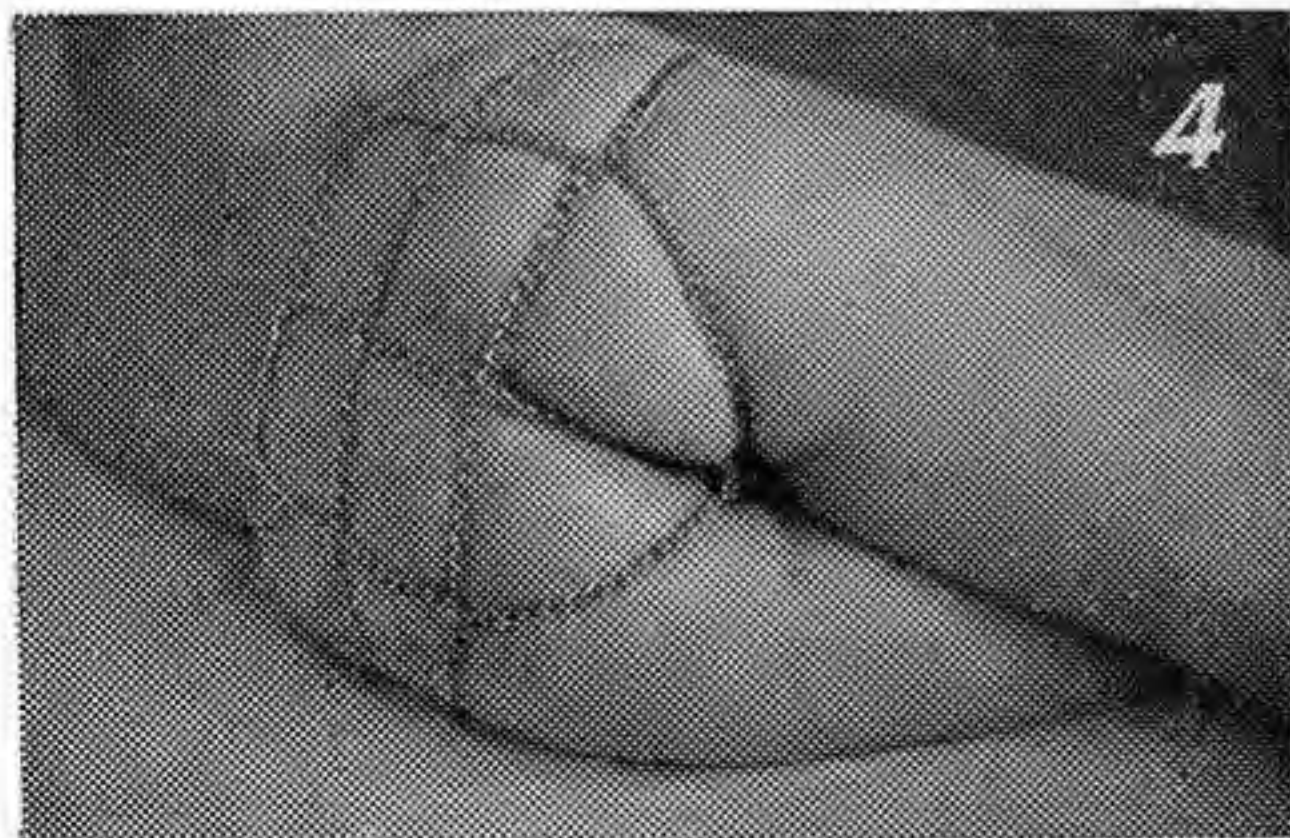


ん、御指摘の鎖による圧迫によって内出血がおこり、ひどい所は一生かかっても取れないかも知れません。でも妻は、かえってよろこんでおります。「肩」「わき腹」「骨盤」等に強く出ます。妻は私の奴隷になってからは二人で行う旅行やレクリエーション、そしてSMプレイ以外には、一切夫以外の男女とも付き合いません。ひたすら奴隷妻になりきっております。私もこんな妻がとても可愛く、ひま

ことは見られた後でした。その時の内科の先生と看護婦さんの顔が思い出されてひや汗を流してしまいました。それからというものの、いつも妻にはケガをしないよう、交通事故などにあわないようにと、くれぐれも注意しております。さいわい手術もカンタンに終わり、一週間で退院になりましたが、手術後四日目頃になり一人で小用が足せる頃になると、もうマスコットをほしがりバイブレーターをせがむのです。妻は、ほんとうの奴隷妻になってしまったのかも知れません。柴さん、御指摘の鎖による圧迫によ

八月号にてお呼びかけをいただきました、宮城県の高松春吉様、ほんとうに有難うございます。私達も文通しお目にかかりたいと思います。フォトに付きましては外にも発表出来ないのがたくさんありますから、分けて上げても差しつかえありません。次のお使いをお待ちしております。次に三月号にてお呼びかけしていただいた高松の堀川秋雄様、年令差を乗り越えてお付き合いしたいと思います。あな

さえあれば近くの浅間温泉などへ行き、家では出来ないプレイなどして楽しんでおります。申しおくれておりましたが、私達は二人の子供の親です。六年生の女の子、三年の男の子です。私達は子供達とは赤ん坊の頃から別々に寝るくせをつけております。もちろん室も別々ですので、私達が何してしようとあまり苦にしないようです。でももう大きくなったので、私達専用の奴隷室を作りたいと思っております。そして、いつまでもいつまでも年老いても、つづけて行くつもりであります。柴利好様、これから御指導下さるようお願い申し上げます。



たの好みなどお教え下さるようお願いしております。長野県の野田和江様、夫婦の複数プレイのこと私達も非常に心がひかれます。ゼツタイにヒミツを守るという前提において、出来ることならお目にかかり、お申し出のようにしたいものです。その他長野県のファンの方、お便り下さい。笠原生、そして大町市の吉沢頼子様、もう一度お便り下さい。

「花と蛇」に望む

立町老梅

再三「花と蛇」を駄文のネタに使って申し訳ないが、今回は少し注文と苦情を呈したい。苦情といっても何ら他意はないので、御一考願えれば幸いである。

(1) ストーリーのテンポを少し早めたい。前編に比較すると、最近の一つの責め場の描写がやや冗長にすぎるように感ぜられる。心理描写などの状況説明も大切であるが、小生としては、ムードよりもサワリを、ピシリと決めてほしいと思う。

(2) 各美女を、公平に登場させた。このところ静子夫人が出演過多のようだ。ヒロインの彼女を優遇するのも、もっともだが、美津子は一年以上休んでいるし、小夜子型や京子型の愛好者も少なくなろう。各月の掲載分はほぼ三つの節に分れているから、内一節を静子専用とし、他を小夜子以下の準ヒロインに割当てたらどうか。これなら静子は毎号登場し、また他の美女を少くとも二カ月に一度は起用しうる。

(3) 積極的、自発的な「演技」を

させたい。各美女は相変らず後手縛りに拘束されているが、縛り自体が主眼でない以上、その効果は疑問である。むしろ物理的拘束なしで自由にのびのびと、「演技」させた方が、斬新なムードを生じて得策ではなからうか。また川田や鬼源などの介添役が「演技」中にドナリつけたりするのは感興を損なう。五月号の「静子ファン」氏の言われるように「淫らな暗いムード」をエロティクに盛上げてほしいと思う。

(4) 最後に編集部へ対して要望したいが、さし絵を是非ともつけてほしい。五月号サロンの北山氏の意見に小生も同感である。何も全裸緊縛図でなくてもいい。同氏の言われるように、この点については本誌は低姿勢にすぎるところではあるまいか。前編では喜多画伯の麗筆が、数回誌面を飾ったと記憶しているが、実に素晴しかった。復活を希望するとともにさし絵だけは、やはり専門画家に描いてほしいものである。

奇クファンの私 城山ほずみ

全国の奇クファンの皆さま、お元気ですか。私は今年二十三才になる中小企業の会社へ勤める事務員です。どうぞよろしく。

奇クを愛読するようになって、

すでに三年、はじめておたよりいたします。私には多分にマゾヒストの血が流れているのかしら、なんとなく奇クにひきつけられ、今では奇クなしの生活はとても考えられませんか。特に

辻村先生のカメラハントはすばらしいですね。

私はカメラハントを見ながら裸になり同じポーズをとり、それを鏡に写しては独りたのしんでいます。でも、一人ではなんだか、物足りません。ハンサムでた



<プレイ随想>

乗 り も の

早木夢二

私は子供の頃から乗り物に弱くて、ちょっとした距離を電車で揺られるだけでも、すぐに酔っては他人に迷惑をかけたことをよく憶えている。年をとってからは、そんなことはだいぶ少なくなったようだが、乗り物という点、まだまだ気おくれする。夜具に附随した方は？……などといやかされると困るのだが、最近、上位者なるもののしきたりが破られ、選手交替という、アジな風潮が流行っているとかで、私もずいぶんと助かるというものだ。

つい先日、例によっての拷問プレイの際、取調べ所まで運ばれる想定のもとに奮（もっこ）に乗せて貰ったのだが、担ぎ上げられたとたんに、グラッと一揺れ。同時にちよっと変になった。しかし、

私もプレイに没入していたおかげで、どうにか無事に仕置を受けることが出来たが、後で考えて苦笑がとまらなかった。

昔の罪人なら、伝馬町の牢から今の数寄屋橋にあったという奉行所まで、奮で運ばれていたそうだから、私などならふらふらになっってしまったことだろう。役人に、歩かせてくれるよう嘆願せねばならない。然し、私のプレイの時には終始、はだかの菱縄姿だから、許可してくれてもその姿で町中を歩けただろうか。いくら人権無視の時代でも、そして私の望む引廻しでも、これはちょっと自信がもてそうもない。今、私はごく簡単に拷問プレイを行なって悦んでいるが、罪人になって縄を受けるものも楽ではない？と思う。

そういえば、罪人が裸馬で引廻しの途中、馬の背で酔ってしまった者があったと聞いたこともあるし、舟橋聖一の作品中に、白子屋お駒が引廻わされて酔ったという描写もあった。

裸馬に乗せられると、ずいぶん高い所に乗ったという感じがすると、いつか泉京子という女優が、「大盗小盗」で引廻しシーンを撮ったあとでいったそう。

くましい男性の方、いられませんか？
もし奇クファンの方で同好の男性がいられたら、私とプレイをして下さいませんか。
そして写真をつとして私に見せて下さるようお願いします。

私は責められる時の気分が、一番いいのです。器具を使って私を責めて下さい。ここに同封しました写真は、いずれも私が一人で苦心してセルフタイマーで写したものです。素人なので上手にとれていませんが、もし写真を見られてプレイを希望

私など、いつも偉そうに、江戸中引廻しなどといって、処刑の真似事にうつつを抜かし、一世一代の晴れ姿とばかり菱縄姿を晒している、勇しいところを想定しては悦に入っているのだが、そう考えると、乗せられた裸馬が歩くか歩かないかのうちに、気分が悪くなってしまうって、青い顔でゲンナリとちぢこまってしまふのがオチだろうと、われながら哀れに感じるのである。

される方がおられましたら、おたよりを下さい。

(横浜市・城山ほずみ)



拷問を受けたためにわざと役人を怒らせ、更に苦痛責めでは白状せずに羞恥責めを行なわざるを得なくさせ、こんな強情な罪人は珍らしいとばかりに役人達を驚かせた私が、馬にのせられたとたんに、グラグラのゲンナリのゲエゲエでは、どうにも情けない。

但し慶子の方は乗物には強いから、想定通り、裸馬の上でもそり返って、菱縄に締められた肌を我慢気に晒したことだろう。

世相と奇ク 原 砂土

我が国に教育というものがなかったために、日本人には笑いも怒りも哀しみもない。あるのは文部省の神経質な表情だけだ。勿論、少数の恵まれた人々には、官製教育の与えることのできない真の教育の成果が看取できる。奇クの読者を称して、少数の恵まれた人々という。

今年の一月二七日付の朝日新聞紙上に、次のような記事が載っていた。

酔った妻を凍死さす？

所沢 庭へ放り出した夫を逮捕という見出しに続いて事件は要旨次のようなものだ。

埼玉県所沢市で、時計修理工の男(四四才)が、殺人の疑いで逮捕された。男は午後三時ごろ家に帰ると、目ごろから泥酔する癖がある妻(四五才)が酒を飲み、コタツに寝ていたのに腹を立て、手足をしばってなぐったりけったりした上、下着一枚にして庭にほうり出した。同夜十時ごろうめき声を聞いて妻を家の中に入れ、フロに入れたりしたが、同十一時ごろ

死んだ。

この記事を読んで、奇クの愛読者は自分の身に振り替えてみて、自分ならそんな馬鹿なこととはしないと確信されよう。そして私も、同感する。額に青筋立てて怒る文部省の性格と夫婦及び男女関係における奇クの性格の違いが記事中の事件の犯人と読者の違いだ。そして、奇クが存在が文部省的センスに押され気味であることが、恵まれた人々を少数にする理由だ。日本人の多数は不幸な人々だと思ふ。奇クの読者は不幸な多数を哀れんでいい。そして、我国で久しく使い古されてきた平和というものの実現も、真実には奇クが多数に読まれるようになるときだと考えていい。その時の到来は近くもないが、遠くもない。神経質な文部省的表情がピンク色に変わってきたころ、真の教育を心得た、人生の味わい方の上手な国民性の、我が国になる筈だ。平和はそこに在る。

悪書と云う言葉を振り回す白痴には、健康な演技者の資格はな



・・・僕のイメージ画集・・・

感度テスト

室井亜砂路

い。何とか女史も、一度新興宗教で鍛えなおして頂ければ人生を文化的に生きるセンスも少しは分るようになるうか。信仰の厚き血汐に浸ることによって、演技の術を感得できるようになると心配してみる。随喜の涙につかることによって、人間の潤沢さが甦るかもしれない。演技を心得る者こそ人生を楽しくすることができ、社会をよくすることができ。奇クにヒューマニズムの濃い香りを読みとれぬ限り、文化も文明も無い。先きの新聞記事に戻ろう。奇ク

的な性格が、犯人である夫にあつたならば、彼は殺人の容疑を受けずに済んだだろう。なぜならば、奇クにはヒューマニズムとプレイの基盤があるからだ。奇クの愛読者が犯人の立場であつたならば、同じく行為しても殺すことはなかった。常連の執筆者並びに愛読者の皆様、そうでしょう。バカは死ななきや——。青筋文部省も死ななきや——。文明に挑戦する者は歴史の必然性に殺される。かのジョンソンも悔い改めたばかりではないか。天国は近づいた。



今日は、左近麻里子です

左 近 麻 里 子

昨年の秋、はからずも団鬼六先生と辻村隆先生の対談の席につらなることが出来て、ほんとうに嬉しく存じました。私の血の中に流れていますマゾは相変らず私の心をかり立てますが、あれ以来、一身上のこととていろいろと支障がございまして、心ならずも御無沙汰してしまいました。十二月初めに一度山本一章先生とお逢いし、久方ぶりに縛っていただきました。

只今、大分落ちついてまいりましたので、再び以前のように責めます。縛りが好きになった私の体験など書いてみると、編集長さまにお約束して書きかけてみたりしたのですが、尻切れトンボになつたままで放つてあります。いずれ書き足してお送りしたいと思っております。その節はよろしく。

看板と内容

表紙よ笑え

能 美 積

最近の奇クの表紙が戯画化されて来た。これは我々のような店頭買いの読者にとっては大変嬉しい事である。私のように厚顔無恥を自称する輩でも売り子がキレイな姐ちゃんだったりすると矢張り照れる。四馬孝画伯のそれは拝見する分には有難いのだが、さて求めるだんになると、みたくも無い雑誌なんかを漁りながら隙をみてさつと買うといった軽業師的な芸当をしたものだが今の表紙だと比較的气楽に買う事が出来るのだ。東映の続大奥②物語、の宣伝ポスターに三人の美女が縛られている写真が出ていて、実際にはそんな場面はなんにも出なかった、と言つたような事を本誌でみた記憶があるが、これなど最近の残酷ブームに便乗した悪質な行為と云えるが奇クの場合は別である。牧高志氏好みの振袖を着せて、綺麗な花を配置しても詐欺行為には決してならない。詐欺で思い出したが、近

頃矢鱈と映画や演劇に残酷を売物にした作品が増えたが、内容となるとう一つの感がある。先日も当地公演、東京で好評の残酷ヌードなるものを見聞に出掛けたが、全く失望させられて終った。舞台の下手で吊りシーンをちよっぴりみせるが、太いロープの先端が輪になつていて、傷がつかないように白い布が巻いてあり、責められる女が、ゲラゲラ笑っているのがある。銭を取って客に観せる以上これでは不可ない。青木順子や、ローズ秋山の残酷ショウともなると誰にだって真似の出来る演技ではないのは解るが、もそつと真面目にやれ、と言いたくなつた。縄目の跡が残つては翌日の芝居に差支えようしホントに吊られちゃ痛からうが、看板と違い過ぎる。千円の出費と時間の浪費であんまり腹が立ったから文句を言つたら、丁重な詫状を呉れたので名前は差し控えるが、その点奇クは、表紙にはつきり新しい風俗文献誌と断わつてあるのだから、表紙をどのようなに美しく、楽しく改変してもいいと思う。けしからんという人間はおそらくないだろう。そんな訳で、私は、笑っている表紙に双手をあげて賛成したい。

妊婦雑話

高野原美

何かで読んだが、ミニスカートの女性は、車中などで常に男性の射すような視線を感じているという。露出の羞恥。好奇の眼に晒される心理的な責め。それが嫌ならミニを穿かないだろうと思うが、穿いているところを見ると、この羞恥責めを希んでいるとみてよい

だろう。精々、覗いてあげるべきである。大体、露出の羞恥とはいえず、それを誇示する以上、とくと拝見しなければ、却って失礼というものだ。

露呈の誇り。マゾ女性、中河恵子さんは、異常に膨れあがったお腹、……生理的には当然の変化を



イメージ画

「恋愛すべからず」

小妻京子

遂げた人間の牝……私の女体が一個のオブジェとして、冷酷なレンズの前に縛られたままで晒されることは、最も私の望む……と云っているが、女体美、とくに妊婦ファンには嬉しい言葉である。

男にはない不思議な神秘。妊娠という肉体の変化。これは単に動物的な牝ということではなく、女性のもつ偉大さでもある。妊婦マニアは、膨れ上った牝としての、痛々しいばかりの腹を愛するともに、その神秘さに頭を下げる。妊婦ヌードこそは、地上で最高、至上の芸術美であると思う。

妊婦記事については、瀬沼氏の独壇場で次々と興味深い題材を提供しておられるが、私も仲間入りをしたと思う。妊婦ではないが美川美子さんの肥満腹（蛙腹）ナルシズムは興味深く読ませて貰っている。妊婦と間違われる程の大きなお腹を愛するうちに、切腹の真似をするようになったとは嬉しい。前にも一度書いたが、女性切腹は腹部ナルシズムの変形と考えていただけに、私の考え方が実証された想いである。

腹を裂く話では、小説現代（四月号）に宇能鴻一郎氏が「腹を裂く話」を発表されていたが、主君

のためとはいえ、自分の妻の妊娠腹を自らの手で切り裂くという陰惨さには、奇クファンの私もヘキエキした。

大奥物語が流行し、テレビでも始まったが、徳川家康の正室築山殿が、侍女お万の妊娠の身体を責めた話は有名である。

家康のきまぐれから妊娠したお万を、築山殿は逆上して侍女に命じて裸にさせ、樹の枝に吊りさげて、その大きく膨れた腹を憎悪をこめて叩き続けた。悲鳴をあげて泣き叫び、吊られた樹の枝をゆさぶり、大きなお腹を波うたせて苦痛に耐える美しい妊婦。これこそ妊婦責めの極致といえよう。

しかし、こういう鬼畜的なことは、現代の文明社会ではあり得ないだろう。もしあるとすれば、狂人か極悪犯罪人の発作的行為といふべきだ。だからこそ、妊婦ファンとして空想の素材とするのかも知れない。私は店頭において、肥って大きなお腹をした女性のヌードの掲載してあるものを探しては買い求める。そして、美川さんのように、それこそパンパンに膨れ上った蛙腹を想定し、戦国時代の武将になった想いの一刻を過す。何と楽しく魅力的なことか。

〔最近作緊縛傑作フオト〕

開股竹棒羞恥責め	大手札三枚一組 略号「ねろ」 四〇〇円
逆エビ責め手足縛り	大手札三枚一組 略号「ねき」 四〇〇円
竹棒開股強烈繋り	大手札三枚一組 略号「ねく」 四〇〇円
鼻責めと鼻孔大写真	大手札三枚一組 略号「ねけ」 四〇〇円
首縄後手強烈縛り	大手札三枚一組 略号「ねこ」 四〇〇円
全裸開股膝頭縛り	大手札三枚一組 略号「ねし」 四〇〇円
菱縄縛り竹棒責め	大手札三枚一組 略号「ねす」 四〇〇円
柔肌に喰込む縄目	大手札三枚一組 略号「ねせ」 四〇〇円
逆エビに痛める魔手	大手札三枚一組 略号「ねそ」 四〇〇円
黒髪をいたぶる手	大手札四枚一組 略号「そや」 五〇〇円
大島 照代	略号「そや」 五〇〇円

菱縄縛りにあえぐ	大手札四枚一組 略号「そゆ」 五〇〇円
強烈後手縛りの狂態	大手札四枚一組 略号「そき」 五〇〇円
牝犬奴隷の醜態	大手札四枚一組 略号「そよ」 五〇〇円
全裸二つ折り縛り	大手札四枚一組 略号「そむ」 五〇〇円
菱縄しばりの表情	大手札四枚一組 略号「そま」 五〇〇円
八の字開股羞恥責め	大手札四枚一組 略号「そか」 五〇〇円
菱縄縛りの全裸を晒す	大手札四枚一組 略号「そえ」 五〇〇円
奴隷捨札開股縛り	大手札三枚一組 略号「きむ」 四〇〇円
菱縄強烈開股縛り	大手札三枚一組 略号「きま」 四〇〇円
竹柱立縛り晒し者	大手札三枚一組 略号「きめ」 四〇〇円
柱宙縛り苦痛表情	大手札三枚一組 略号「きも」 四〇〇円
猿轡股間縛り歩き	大手札三枚一組 略号「きも」 四〇〇円
木村 洋子	略号「きも」 四〇〇円

浣腸にむせび泣く女	大手札四枚一組 略号「つゆ」 五〇〇円
身動き出来ぬ強制浣腸	大手札四枚一組 略号「つえ」 五〇〇円
竹棒開股苦打ち縛り	大手札三枚一組 略号「つひ」 四〇〇円
後手吊りにもかく女体	大手札四枚一組 略号「つて」 五〇〇円
逆エビ縛りの色々	大手札四枚一組 略号「つか」 五〇〇円
逆さ吊りと足吊り	大手札四枚一組 略号「つよ」 五〇〇円
片足吊り上げ縛り	大手札四枚一組 略号「つお」 五〇〇円
美しい臀部を晒す	大手札四枚一組 略号「つや」 五〇〇円
階段に晒す全裸身	大手札四枚一組 略号「つく」 五〇〇円
花瓶を太股で挟む裸身	大手札四枚一組 略号「つね」 五〇〇円
麻里子の裸身をあばく	大手札四枚一組 略号「つな」 五〇〇円
柱に立縛りの全裸身	大手札四枚一組 略号「つな」 五〇〇円
左近麻里子	略号「つな」 五〇〇円

絶妙の鞭打ちポーズ	大手札四枚一組 略号「つに」 五〇〇円
悶える白肌を俯瞰する	大手札四枚一組 略号「つめ」 五〇〇円
両膝頭開股宙吊り	大手札四枚一組 略号「つち」 五〇〇円
片足挙げ吊り責め	大手札四枚一組 略号「つち」 五〇〇円
両手吊りに悶える女	大手札四枚一組 略号「つち」 五〇〇円
開股責めを悦ぶ女	大手札四枚一組 略号「つち」 五〇〇円
両手万歳吊りにもかく	大手札四枚一組 略号「つち」 五〇〇円
静子夫人への羞恥責め	大手札四枚一組 略号「つち」 五〇〇円
雁字搦目縛りにうめく	大手札四枚一組 略号「つち」 五〇〇円
八力月の妊婦に革具責め	大手札四枚一組 略号「つち」 五〇〇円
九力月の妊婦に首枷責め	大手札四枚一組 略号「つち」 五〇〇円
増田みゆき	略号「つち」 五〇〇円
激痛に耐える鞭打ち表情	大手札四枚一組 略号「つち」 五〇〇円
関谷富在子	略号「つち」 五〇〇円

印画紙焼付極鮮明写真
〔美人モデル緊縛フोट〕

鞭打ちによる感傷の表情 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 関谷富佐子 (めち)	股裂縛りで痛打する 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 関谷富佐子 (めの)	海老縛りの鞭打地獄 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 関谷富佐子 (めぬ)	尻立縛りで強打に泣く 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 関谷富佐子 (めし)	ムチは臀部の双丘に炸裂 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 関谷富佐子 (めけ)	鞭に悶える鉄砲責め女体 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 関谷富佐子 (めま)	逆手吊りて晒す臀部 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 関谷富佐子 (めむ)	鞭の縛りに夢心地表情 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 関谷富佐子 (めり)	鞭は美体にかみつく 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 関谷富佐子 (めも)	狂う鞭に狂い泣く女体 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 関谷富佐子 (める)	両手吊りの女体に強打 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 関谷富佐子 (めさ)
鞭打ちに示す感泣の極致 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 関谷富佐子 (めて)	逆海老開股縛りに鞭打ち 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 関谷富佐子 (めひ)	ムチに悶絶した美夫人 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 関谷富佐子 (めへ)	のけぞる悦慮表情の露呈 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 関谷富佐子 (めふ)	責めによる美的法悦表情 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 関谷富佐子 (めら)	妊婦開股縛り哀歎 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 中河 恵子 (わう)	八カ月の妊婦開股責め 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 中河 恵子 (わの)	妊婦太鼓腹開股縛り 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 中河 恵子 (わえ)	妊孕美人媚態の立像 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 中河 恵子 (わお)	妊孕美人媚態坐像 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 中河 恵子 (わき)	両手吊り片足挙げ妊婦 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 中河 恵子 (わく)
突き出た腹部の妊孕美 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 中河 恵子 (わし)	両手吊りの妊婦正面 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 中河 恵子 (わす)	縛られた妊婦の艶姿 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 中河 恵子 (わせ)	両手一本吊りの妊婦 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 中河 恵子 (わち)	恵子の妊孕美緊縛 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 中河 恵子 (おに)	初妊娠の太鼓腹の美 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 中河 恵子 (おぬ)	裸身縛りの妊孕美 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 中河 恵子 (おす)	身籠った裸身責め 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 中河 恵子 (おも)	麗わしの妊婦縛り 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 中河 恵子 (おひ)	膨満の腹部緊縛美 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 中河 恵子 (おみ)	立縛り髪責め引回し 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 安井喜久子 (おけ)
後手縛りて引回す 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 安井喜久子 (おく)	片足吊り上げ責め 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 安井喜久子 (おて)	憂愁夫人の菱縄縛り 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 安井喜久子 (おや)	柱対向立ち縛りの夫人 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 安井喜久子 (おあ)	片足吊り股裂き責め 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 安井喜久子 (およ)	逆エビ責めに泣く女 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 安井喜久子 (おわ)	柱正面立ち縛り媚態 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 安井喜久子 (おの)	股間縛りにもかく女体 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 安井喜久子 (おう)	豊満の女体をくびる 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 愛知 葉子 (おれ)	開股前屈愛撫責め 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 愛知 葉子 (おね)	逆エビ縛りの愛撫 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 愛知 葉子 (おな)

印画紙焼付極鮮明写真

「新しいモデル強烈縛り」

Y字型宙ハリツケ

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
左近麻里子 略号 八ちね V

開股逆さ吊り姿態

大手札三枚一組 略号 五〇〇円
左近麻里子 略号 八ちて V

強烈菱縄柔肌縛り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
左近麻里子 略号 八ちや V

豊満な臀部への責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
左近麻里子 略号 八ちみ V

猪吊りの滑車責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
左近麻里子 略号 八ちつ V

悶々たる尻立て縛り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
左近麻里子 略号 八ちな V

股間立縛りの表情

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
左近麻里子 略号 八ちす V

全裸立縛りの表情

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
左近麻里子 略号 八ちさ V

豊満な体緊縛のあえぎ

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
左近麻里子 略号 八ちに V

緊縛と柔肌の交錯

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
左近麻里子 略号 八ちこ V

投げ出された裸女

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
左近麻里子 略号 八ちく V

輝美表と裏の二態

大手札二枚一組 略号 三〇〇円
左近麻里子 略号 八ちけ V

美女の鼻をもてあそぶ

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
左近麻里子 略号 八ちる V

美女の鼻孔を鑑賞する

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
左近麻里子 略号 八ちれ V

開孔器で美女の鼻腔検査

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
左近麻里子 略号 八ちき V

開股拷問椅子正面縛り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 略号 八なた V

甘美な椅子縛りプレイ

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 略号 八なあ V

のけぞる痛打の果て

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
関谷富佐子 略号 八なち V

臀部に炸裂するムチ

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
関谷富佐子 略号 八なつ V

痛打による絶妙表情

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
関谷富佐子 略号 八なて V

絶妙なるバック姿態

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
左近麻里子 略号 八せき V

強烈猿ぐつわ哀飲

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
左近麻里子 略号 八せか V

息づくポリウムを縛る

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
左近麻里子 略号 八せも V

左右に開股を縛る

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
左近麻里子 略号 八せみ V

ゴムカバーの猿ぐつわ

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
左近麻里子 略号 八せな V

羞恥椅子開股縛り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
左近麻里子 略号 八せけ V

黒布の猿ぐつわと緊縛

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
左近麻里子 略号 八せこ V

甘美なる開股椅子プレイ

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
木村 洋子 略号 八せま V

開股吊り縛りの極致

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
木村 洋子 略号 八せむ V

菱縄雁字搦目縛り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
木村 洋子 略号 八せえ V

私を虐めて下さい

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 略号 八せろ V

豆絞りの猿轡縛り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 略号 八せれ V

悶える全裸の表情

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 略号 八せり V

麗身の裏と表の表情

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 略号 八せと V

竹棒と猿轡と縄と

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 略号 八せて V

豊満な緊縛全裸を晒す

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
左近麻里子 略号 八せゆ V

陽光に映える亀甲裸身

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
左近麻里子 略号 八せい V

縄で弄ぶ豊満緊縛女体

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
大島 照代 略号 八せた V

後手縛りに狂い泣く

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
大島 照代 略号 八せの V

逞ましき臀部責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
大島 照代 略号 八せね V

強烈縛りに喘ぐ裸身

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
大島 照代 略号 八せに V

大の字笞打ちの悶え

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
関谷富佐子 略号 八わり V

絶妙の尻立て鞭打姿態

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
関谷富佐子 略号 八わも V

鞭打ちの女王昇天す

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
関谷富佐子 略号 八わめ V

狂い咲く鞭打の妖花

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
関谷富佐子 略号 八わみ V

大の字ハリツケで鞭打

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
関谷富佐子 略号 八わま V

蒲団に狂いまわる女王

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
関谷富佐子 略号 八わと V



美川美美子様、貴女を慕う余り次のようなことを想像しました。貴女は大きなお腹をさすりながら私にお腹を切ってくれと頼みますが、勿論貴女の言う通りにすれば当然、殺人罪に問われますので、しばらく考えますが、目の前に豊かに膨んだ「さあ切って下さい」と言わんばかりに息づいているお腹の魅力に負けて切ることを承知します。お湯から上った貴女は、姫鏡台の前に坐ってお腹の化粧を充分します。真白い着物の下に真赤なお腰を締めた貴女は、お腹を

膨ましてコールド・クリームを塗り込みます。貴女のお腹は、つきたてのお餅のように真っ白く、ムツチリと盛り上って今から始まる切腹劇に期待するように息づいています。やがてお化粧を終った貴女は部屋の真中にある切腹の座に坐ります。私は貴女の後に加添するためには坐ります。そして腰紐をいいて前を充分、開けます。しかし、お腰がお臍の上まで覆っているの、私はお腰をゆるめ、貴女の膨んだお腹が下腹部まで充分、見えるようにズリ上げます。そして白木の三宝の上にある短刀をスラリと抜くと、後から貴女を横抱きにして貴女のお腹に短刀を近づけます。勿論、貴女は呼吸を合わせるようにしてお腹を膨ませるでしょう。しかし私は再び短刀を三宝に置き、貴女に言います。「いくら息を吸いこんでお腹を膨ませても、イザ切り始めたら苦痛で無意識にお腹を引っこめようとするから、うまく切れませんよ。それよりビールでも沢山のんで自然に膨んだ時に、一思いに切った方が切りやすいと思いますよ」そこで切腹は一時、中断されビールが女中の手で運ばれてきます。ビールは、どんどんと空になって行きます。

一本を飲み干すごとに、貴女のお腹はぐんぐん、せり出していきます。貴女は苦しそうにお腹をなでながら飲み干しますが、六本目でとうとう飲めなくなりました。恐らく胃はビールで一杯になったのでしょう。「残りはどうしましょう」と貴女は言います。「捨てるのは勿体ないから浣腸して入れましょう」と、私が言います。貴女は最初は厭がりますが、とうとう私の熱意に負けて承諾します。貴女はベッドに横たわると、早速大きな浣腸器が用意され、残りのビールが次々と貴女のお腹の中に吸いこまれていきます。一ダースのビールを一本残らず、お腹の中におさめた貴女のお腹は、ハチ切れんばかりで、指で押しても皮下脂肪の柔かさも感じられずパンパンに張りつめています。しばらく横になっていた貴女は、やおら起き上ると、お腹の膨みは下に移動して、正に臨月腹顔負けの膨みようです。でも妊娠とちがってデコボコもなく、まん丸く膨んで大きなボールを飲みこんだようです。再び切腹の座についた貴女はお腹をさすりさすり「前より大分、膨んだみたいね。これだったら簡単に切れるわね。サア一思いに切って

頂戴」と促します。私は再び短刀を取り上げると、片手で貴女の大きな乳房を抱き、右手に持った短刀の先を臍下二寸ばかり、一番膨んだあたりの左側に軽く突き刺します。貴女は「ウッ」と一声うめいただけです。私はそれに構わず切先五分ばかりお腹に埋めたままじりじりと右脇腹まで引き廻します。貴女の真白いお腹はパツクリと割れて、黄色い脂肪がのぞいていきます。「痛いですか」と貴女に聞くと「いいえ、ちっとも、早く深く切って頂戴」と催促します。私は再び薄く開いた傷口通り、今度は深々と五寸ばかり切り裂きはじめます。プツリプツリと切り裂いている中に、パツクリ割れたお腹の中から、先ほどのビールをたっぷり吸いこんだ腸が、ムクムクと躍り出るように溢れて来ます。それを左手でズルズル引き出した貴女は、満足そうに目を閉じるのです。貴女に思いをはせる余り、勝手な想像をして済みません。膨んだお腹を切り裂いてみたいと仰る女性はいくつかあります。これからは、どしどしお腹を膨ませて下さい。

(南九州・加藤武夫)

三月号の金原奈加子様、大上那

美子様、京都の美恵子様、私は十年來のファンで、結婚後しばらくの空白期間がありました。最近本誌を手にする事ができました。女体を縄をつかって芸術的に緊縛したい衝動にかられているのです。が、妻はどうしても協力してくれないので未だ女の柔肌に一度も縄をかけたことはなく、奇クを読んでは氣をまぎらわし、又夫婦プレイで楽しんでる方を非常に羨しくねたましくもあり、M女性に縁がないのかと、あきらめの氣にもなるのですが、しかしここで弱氣になつてはいけません。とばかり、勇氣を出してお便りしました。M女性の方、お慈悲におすがりして一年の中一度でいいから、願望をかなえさせて頂きたい、よいお返事を三拜九拝してお待ちしております。

(新潟・山口正彦)

◎分譲品総目録◎

多数の方々から御予約を頂いておりますが作成が大変おくれれていて申し訳ありません。完成次第必ずお送りいたしますから、今しばらくお待ち願います。尚予約お申込

記、拝見しました。私は女性の大きな尻が大好きです。オシメをした貴女の腰は、きつと素ばらしだと思います。私は浣腸責めを美しい女性にして恥かしめてやりたいたと常に思っています。が、まだ一度もその経験はありません。御園京子さん、ぜひお友達になつて下さい。

(川崎市・沢沢春雄)

皆様、お元気ですか。私はお恥かしいながら三十六才になる小柄なM男です。今まで同性とプレイをしたことはありませんが、どんな恥かしめを受けても、非力な私には当然のことで、羞恥心は全然わいてきません。やはり、女王様の奴隷にされ屈辱的な行為を受け、御奉仕申し上げたいのです。Sの御夫婦でも、グループでも結構です。四十才までの御方であれば、

どなた様でもかまいません。できれば神戸、大阪近辺の女王様にお

みの方は切手五十円同封の上、大阪市阿倍野郵便局私書箱第十四号、天星社箕田京二宛へお便りして下さい。分譲品満載の豪華なカタログを出来次第お送りいたします。尚、分譲写真のお申込みも、箕田京二宛にお願いいたします。

仕え申し上げたいのです。私は女王様のおんためならば、どんな御無理なご命令にも絶対服従をお誓い申し上げます。そして身命を投げ出してご奉仕申し上げます。私を室内馬として乗り回しても結構です。犬、畜生として女王様に顔を蹴られ踏みつけられ、口舌で奉仕申し上げることが出来ますれば何より嬉しいことです。私は女王様の便利な道具であり器具です。奴隷食は、女王様さえお許し頂ければ、女王様の排出物を食べさせて頂き、お茶がわりに御神水を下されば最高の幸せです。なにとぞこの哀れな非力な私を、奴隷として拾い上げて下さいますよう、神戸大阪近辺の女王様に伏しておねがい申し上げます。

(神戸・背尾好一)

川村順子様、貴方の呼びかけのお便りを読みペンで執りました。小生は奇クを愛読してから、五、六年になります。読み始めたのは二十四、五才の若い時なので通信に投稿するほど元氣がありませんでした。今年こそは奇クの同志の方々にお便りをしようと思つていたところへ、貴女よりの呼びかけ

とても嬉しく思いました。小生は市関係へ勤務していますし、家庭をも持っていますので、貴女のいわれる秘密は必ず守ります。お会いしてプレイをするのも月に一回から二回ぐらいでしたら小生もよいと思います。奇クを通じて、貴女と、良き友達になりたく存じます。ぜひおねがいします。名古屋市内でしたら不案内のところはないつもりです。貴女よりのお便りを心よりお待ちしております。貴女と会いましたら、縄を主に縛りに縛って、貴女を喜ばせてあげます。貴女に会える目を何よりも楽しく心待ちしています。

(名古屋・小原淳一)

奇クファンの皆様、始めまして僕は毎日、Mの夢にとりつかれてる学生です。美しい女王様の前で裸にされ、縛られたりムチ打たれたり浣腸をされたり、女王様の肢体を舐め回すことを命ぜられたら、どんなに幸せでしょう。そして僕にMの味を堪能させて下さい。奇クの読者の方、どなたか僕の女王様になつて下さいませんか。東京、又は近辺の方でしたら指定して下さいれば、いつでも出かけていきます。二月号の東京、中野様、

貴方のフォトに僕を出演させてくれませんか。僕は羞し乍ら実際に女性の下着を盗んだ悪歴もあるので貴方の懲罰図のモデルには最適だと思います。一度、御連絡下さい。申しおくれしましたが僕は二十一才、身長一七五センチ体重六九キロ、スポーツできたえているので、体はいたって丈夫です。

(東京・恵 光幸)

遠藤百合子君、私も秋山夫妻の残酷ショーは四回見ました。初めて見た時は、貴女と同じく余りのすごさに驚き、二回、三回と回を重ねました。しかしこの中でも私の希望には、やはり大分相違しておりました。ローズ秋山は、ごく柔軟な身体をしております。しかし縛りはゆるく、後手は下の方で縛っております。勿論、本気で縛ったのでは身体がもたないでしょうが、もう少し手首は肩まであげて欲しいです。実際、手首を肩まであげた強烈な縛りぐらいでは身体はもたないことはないと思います。これは私も今までに実証済みです。又、縛りがゆるいのもショーをしている中に縄がゆるんで来ます。私にはムチ打ちよりも何と

いっても強烈な縛りのショーが見たいのです。青木順子嬢のショーでも同様、途中で縄がゆるんで来ます。もし、縛りだけで良ければ一度会って見ませんか。今までムチ打ち等はしたことはありませんが、強烈な縛りだけは自信があります。縛りの伴った責めは行ったことがあります。ただ、貴女に感心したのは、私のような中年男でもプライドが邪魔をして、なかなかこのような劇場へ入り難いものですが一人で入るとは立派です。その度胸をどうですか、私と会う方へ向けてくれませんか。

(神戸・小月良一)

山本広子様、私が縛った女性の中に長唄の名取がおりました。彼女はMでなかったようですが私の趣味によく協調してくれました。日本趣味の女性に何となくMのような感じがしますが、私も彼女の感化をうけて長唄をよくききに行きました。しかし別に私には特別に三味線の趣味はありませんが彼女の影響で嫌いではありません。若し私で良ければ、貴女を羞かしめたいです。会って戴けるなら勿論、私の好きな着物が良いと思います。緊縛の趣味はやはり股間縛りが好きです。その場合は全裸

最新撮影総天然色
カラー・プリント写真

両手吊りに悶える女	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
後手裸身柱縛り	大手札四枚一組 略号一二〇〇円
縄目にあえぐ裸女	大手札四枚一組 略号一二〇〇円
豊麗な裸身をくびる縄目	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
後玉高小手縛り	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
長襦袢の緊縛色模様	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
緋の腰巻緊縛色模様	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
猿ぐつわに呻く女	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
柱宙吊り強烈縛り	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
ポリウムを縛りあげる	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
縄に苦悶する裸女を狙う	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
東浦ひかる	略号八〇〇円
真紅の腰巻着用姿態	大手札二枚一組 略号八〇〇円
縄に悶える緊縛色模様	大手札二枚一組 略号八〇〇円
東浦・大塚	略号八〇〇円
真紅の腰巻着用縛り	大手札四枚一組 略号一二〇〇円
華麗なる緊縛裸身	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
みだらな開股縛り	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
責めに疲れた諦観	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
真紅の腰巻姿で緊縛	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
羞らしいの真正面縛り	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
若肌に喰い込む縄目	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
高手小手後手縛り	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
股間縛りの開股姿態	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
羞らしいの股間縛り	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
中河 恵子	略号八〇〇円
中河 恵子	略号八〇〇円

です。彼女には浣腸責めの経験はありませんが、貴女にぜひ実施してみたいのです。もし貴女とプレイするならば、夕方会うとして、前の晩からの食事は止めてもらいます。なお、その上、ひまし油で胃の中を洗滌し、次に浣腸で腸の中もきれいにします。勿論、股間縛りで行ないます。私は貴女と一廻り年が相違する四十一才の中年者のサラリーマンです。良ければプレイをしたいと思っています。

(西宮・奥中 進)

私の好きな手錠縛りを二月号の益田四郎様によって写真入りでのせて下さって大変嬉しく思いました。これからも、どしどし手錠を使つての縛りを載せて下さい。私も、あなたと同じ金属の手錠を持っています。私もあなたの彼女のように手錠の好きな女性を求めています。どなたか紹介下さい。最近、夫婦の方の縛りが多いと思いますが、縛る道具としてロープのみでSMプレイを行ってはいませんが、もつと変った責具を使つたらいいかですか。私は今、責具を考えられています。まず第一に手錠、これは外出用や風呂用、トイレ用などと区別する。第二として手枷、足

枷、首枷。第三に腰錠、これは常に腰に嵌めておき、いくつかのリングをつけ、手錠を腰で固定したり、股に革帯を通し貞操帯にすることもできる。最後に重罪人を入れておく組立式牢屋を作りたいと思います。もちろん全て金属で錠つきですから、鍵がなくてはとれません。又、手錠でもダイヤル手錠棒手錠など色々と考えていますから、どしどし注文下さい。どんな要求でも受けます。私は趣味のために行なうので材料費のみで行ないたいと思いますのでお願いします。

(静岡・井川 昇)

森田悦子様、貴女の名前を知つて早くも半年になるでしょうか。ついに我慢ができなくなりペンをとった次第です。南へ出た時は、何となく御堂筋を歩いて、このあたりに悦子さんが勤務されておられるのであらうと、ビルの一つ一つを見て歩いたこともあり。私は二十五才ですが、勿論プレイ等の経験は皆無で、奇クを読み、ただ漠然と頭に描くだけです。このような私ですが、貴女のご了解を得られるならば誠意を持って交際することを誓います。

双胎臨月蛙腹鮮烈写真

大手札六枚一組 二〇〇〇円
増田みゆき 略号八れや

双胎臨月腹強烈縛り

大手札六枚一組 二〇〇〇円
増田みゆき 略号八れゆ

臨月腹裸身の媚態

大手札六枚一組 二〇〇〇円
増田みゆき 略号八れえ

黒縄縦縛りの媚態

大手札三枚一組 一〇〇〇円
中河 恵子 略号八れぬ

立縛りにあうの裸女

大手札三枚一組 一〇〇〇円
木村 洋子 略号八れね

開股された股間縛り

大手札三枚一組 一〇〇〇円
木村 洋子 略号八れの

豆絞りの猿ぐつわ縛り

大手札三枚一組 一〇〇〇円
木村 洋子 略号八れむ

柱宙縛りに喘ぐ刺青女

大手札三枚一組 一〇〇〇円
山原 清子 略号八やか

高手小手に悶える全裸

大手札三枚一組 一〇〇〇円
山原 清子 略号八やき

緊縛に映える入墨の肌

大手札三枚一組 一〇〇〇円
山原 清子 略号八やく

脱がされた緊縛刺青女体

大手札三枚一組 一〇〇〇円
山原 清子 略号八やも

縄にのたうつ入墨裸身

大手札三枚一組 一〇〇〇円
山原 清子 略号八やし

腰巻一つで縛られる刺青女

大手札三枚一組 一〇〇〇円
山原 清子 略号八やみ

女相撲迫力投業連続動作

大手札十二枚一組 五〇〇〇円
大塚・東浦 略号八なる

恵子の妊孕美観賞

大手札四枚一組 一〇〇〇円
中河 恵子 略号八ぬめ

孕み若妻の羞らい

大手札四枚一組 一〇〇〇円
中河 恵子 略号八ぬめ

八の字の開股責め

大手札三枚一組 一〇〇〇円
愛知 葉子 略号八しい

足枷強制開股責め

大手札三枚一組 一〇〇〇円
愛知 葉子 略号八しみ

全裸強烈逆エビ責め

大手札三枚一組 一〇〇〇円
愛知 葉子 略号八しけ

両手吊り足枷責め

大手札三枚一組 一〇〇〇円
愛知 葉子 略号八しこ

両腕逆手吊り責め

大手札三枚一組 一〇〇〇円
愛知 葉子 略号八しら

豊満なる臀部責め

大手札三枚一組 一〇〇〇円
愛知 葉子 略号八しれ

大の字縛りと足挙げ責め

大手札三枚一組 一〇〇〇円
愛知 葉子 略号八しわ

お申込みは大阪阿倍野局私書箱第14号箕田京二宛へ願います。

(大阪市・中村 武)

川村順子様、貴女のためを通
信欄で拝読した夜は、まんじりと
もしませんでした。私は二十七才
の一児の父ですが、妻はプレイに
は全く関心を示さず、奇クすら読
もうとしません。私も妻の気の進
まぬことを強いる気持は毛頭あり
ませんので、今まで本誌を読み空
想するだけで満足していました。
しかし貴女の文面を見た時、矢も
楯もたまずペンをとった次第で
す。私は勤め人ですので平日とな
ると一カ月一度でいどしか時間
の余裕はありません。しかし貴女
さえご承知下されば、今すぐにで
も名古屋にとんで行きたい心境で
す。一度話合える機会をいただけ
ないでしょうか。

(大阪・吉村一志)

僕は女の人の刺青が好きです。
単に女の人の裸を見ても何とも思
いません。又、男性の刺青には興
味がありません。僕は書店に行っ
て女性の刺青姿が載っている本を
探しますが、なかなか見つかりま
せん。ところが先日、奇クの三月
号で山原清子さんの「刺青の魅力
を探ぐる」を見つけました。僕は

嬉しくなりました。こういう本を
求めていたのです。全くすばらし
い本です。箕田京二先生、ありが
とうございます。女体刺青の記事
をどしどし載せて下さい。

(女体刺青ファン)

大阪の金原奈加子様。三月号の
貴女の告白「或る願望に托して」
を拝見しました。私の今の気持は
躍る心を押さえながら、祈りたい
ような切ない気持です。私のこと
を書きます。私は現在、三十三才
一年ほど前から大阪で美容院を経
営しております。七年前に結婚し
た妻が美容師だったのですが、妻
は開店後すぐノイローゼにかかり
それがこうじてガス自殺をしてし
まいました。結局、主任から経営
者になって、それがための神経の
休まる時がなかったのでしょう。
可哀そうな妻ですが、残った私も
又、大変です。一時は途方にくれ
ましたが、何とかやって行くより
仕方がありません。私は会社づと
めをしながら主任さんと相談して
とにかくにもやっているとありますが
やはり全面的に信頼できる味方が
欲しいのです。奇ク歴は、もう大
部古いです。が、お話するほどの
ものはありませんけど、若しそん

大手札印画紙焼付

「緊縛女体美のシリーズ」

両手吊りに悶える女体

大手札印画紙焼付 略号 四〇〇円

強烈なる甘いムチの洗礼

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

ムチに狂い

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

半吊りでムチ打つ

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

逆エビの味に感泣する

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

ムチの一打に反りかえる

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

関谷夫人の女体陳列

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

尻立ての鞭撻ポーズ

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

片足吊り挙げて喘ぐ

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

私をムチ打って頂戴

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

関谷富佐子 略号 八もね

脂ぎった女体を縛る

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

鞭は柔肌に炸烈する

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

滑車吊りに甘い鞭

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

両手万才吊りに鞭打ち

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

狂う鞭に哀切表情の夫人

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

浴後の剣玉子縛り

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

投げだす白い緊縛裸身

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

待望の脚挙げ緊縛姿態

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

二つ折り女体エビ責め

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

柱の前に緊縛された全裸

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

神妙なプレイ寸前の女身

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

中河 恵子 略号 八はひ

な女性と結婚できたら（註、妻はその方のことは全然ありませんでした）毎日毎日が、どんなに楽しいだろうと考えますと、何とか貴女に聞いていただこうと一生懸命な気持ちで、このお便りを書いていきます。私は肌に傷をつけるようなことは好みませんが、縛りそのものは本当にきびしくします。時々テレビなどで見られる時があります、あんなのは縛りじゃありませんね。ただ単に紐を巻きつけているだけです。本当の縛りというものは、精神と肉体を持つ人間と、ただ単に「もの」にすぎない紐とのたたかいである。その葛藤の中にあるもの、動乱の中の緊張精神衛生面の特効薬、現実には手ざわりする憧憬の正体、人間性の神秘、それらはすなわち、すぐれた調和を意味するのではないでしょう。最近夫婦プレイが盛んに誌上を賑わしていますが、私もそんな女性を妻に持ってお仲間入りしたいと思っています。どうか御返事下さい。

（大阪・松田生）

今年二十九才になる男子です。私が貴誌を手にしたのは八、九年ほど前からです。しかし、その後

読んだり読まなかったりが続き、一年ほど前から毎月、読むようになりしました。ところで私はS・M半々というより、多少Sの方が強いような気もしますが、女性でどなたかプレイをして下さる方はございせんか。それもワキガの方がいいのです。おねがいいたします。（名古屋・木原キヨシ）

○ 美國京子様、貴女の告白を四月号で拝見しました。私は貴女のような若い女性がオシメをしているのに非常に興味を持っています。美しい服装の下にオシメカバーをしている貴女の姿を想像すると心がうずくような気持ちになります。私はプレイの経験はありませんが自分ではサディスティックな性格だと思っています。貴女の目覚めたマゾ性を花開かせるために、お互いに働きかけ、より完全なものにしようではありませんか。

（横浜市・気賀健二）

夫婦プレイを心から楽しめる方の声を本欄できき、羨ましく思います。私は、とても実行できそうもありませんが、非常な興味と関心があり、せめて一度なりとも他人様夫婦のプレイをのぞかせて頂

開股縛りに喜悅する女

大手札四枚一組 略号△はわV 五〇〇円

全裸の女体立ち縛り

大手札三枚一組 略号△はふV 四〇〇円

黒縄は白肌を酷に彩る

大手札三枚一組 略号△はほV 四〇〇円

悦虐に身もたえる美女

大手札四枚一組 略号△はあV 五〇〇円

菱縄は白肌をくびる

大手札三枚一組 略号△はうV 四〇〇円

柱に立縛りてさらす

大手札四枚一組 略号△はさV 五〇〇円

卓上の開股羞恥責め

大手札四枚一組 略号△はめV 五〇〇円

無防備の女体を開陳

大手札四枚一組 略号△はしV 五〇〇円

遠山静子夫人の立縛り

大手札四枚一組 略号△はもV 五〇〇円

若妻の魅力を発散する

大手札三枚一組 略号△はむV 四〇〇円

後手縛り全裸身の魅力

大手札三枚一組 略号△はめV 四〇〇円

悶える猿轡の裸身

大手札三枚一組 略号△はもV 四〇〇円

△手打ちの陶酔境

大手札三枚一組 略号△はさV 四〇〇円

両手吊りて痛める女身

大手札四枚一組 略号△はしV 五〇〇円

後手縛りの竹棒責め

大手札四枚一組 略号△はすV 五〇〇円

強烈開股強制縛り

大手札三枚一組 略号△はせV 四〇〇円

両手吊りてあえぐ女体

大手札四枚一組 略号△はゆV 五〇〇円

竹棒強烈開股責め

大手札三枚一組 略号△はたV 四〇〇円

厳しき緊縛の正坐責め

大手札四枚一組 略号△はちV 五〇〇円

責めの魔手に屈伏する

大手札四枚一組 略号△はつV 五〇〇円

竹棒の胴絞め責め

大手札四枚一組 略号△はてV 五〇〇円

竹棒開股胴絞め縛り

大手札四枚一組 略号△はとV 五〇〇円

けたらと念願しております。刺激とコーフンを増大するためにも私をプレーの観客として招いて下さる御夫婦の方はおられませんか。よろしかったら御連絡下さい。

(東京都・金子生)

名古屋の川村順子様、貴女の投稿を読ませていただきました。私も奇クを四年ほど前から愛読しています。私は二十四才で妻は二十五才です。しかし妻はSMプレイに全然、興味がありません。私は妻以外の女性とのプレイの経験が二年ほどあります。そして浣腸責めや鞭には殆んど興味がありません。私はD・P・Eをやりますし器具も揃えています。貴女とのプレイをカメラで撮影しても外部には洩らさないつもりです。私も公務員ですので秘密を守って交際していただきたく思います。

(四日市市・加藤生)

奇クを愛読して二年になる二十五才の男性です。潜在していた私のS性が奇クによって呼び起こされ、毎号を楽しく読ませて頂いております。私の考えでは、女性には少からずM性が隠されており、何かの機会で知らされた人が奇ク

を愛読されるM女性の方といます。この欄に寄せられるM女性の方の御意見、感想が少く残念に思います。SMの世界について語り合えるM女性の方のお便りをお待ちします。純粋にプレイできる方があれば感激です。勿論、私という人間を確めてからで結構です。M女性の現われるのを願ひ、本誌の発展を祈ります。

(大阪・吉田健二)

東映で撮影中の「徳川女系図」に、女相撲が登場するとの話を聞いて楽しみにしておりましたところ、週刊サンケイ四月一日号の巻末グラビアに、はしなくもその一端が紹介されています。白と赤のふんどしで紅白二組として勝負を争うことと思いましたが、みな日本髪に正式のふんどしをキリキリとしめての勢揃いはなかなか美事なものです。最初は、とてもふんどしまでしめさせないだろうと、たかをくくっていたのですが、嬉しい期待はずれでした。この上は公開に当って、映倫のハサミが入らないことを望むばかりです。待ち望んでいた女相撲の姿が劇映画の一部となり、しかも忠実にふんどしをしめてピチピチした美女達が

安井・中河・金原緊縛写真

大手札印画紙極鮮明焼付フオート

開股羞恥責めの姿態

安井喜久子 大手札四枚一組 略号△しう▽ 五〇〇円

髪吊りで強烈ムチ打ち

安井喜久子 大手札四枚一組 略号△した▽ 五〇〇円

片足首引きつけ縛り

安井喜久子 大手札四枚一組 略号△しち▽ 五〇〇円

尻立て鞭打ち艶姿

安井喜久子 大手札四枚一組 略号△しつ▽ 五〇〇円

柔肌に炸裂するムチ

安井喜久子 大手札四枚一組 略号△して▽ 五〇〇円

エビ縛りの鞭打ち

安井喜久子 大手札四枚一組 略号△しと▽ 五〇〇円

貞操帯着用鞭打ち

安井喜久子 大手札四枚一組 略号△しや▽ 五〇〇円

痛打にもかく美女体

安井喜久子 大手札四枚一組 略号△しゆ▽ 五〇〇円

あぐら縛りの羞恥責

安井喜久子 大手札四枚一組 略号△しよ▽ 五〇〇円

片脚挙げで晒す裸身

中河 恵子 大手札三枚一組 略号△とは▽ 四〇〇円

強烈エビ縛りで苦悶

中河 恵子 大手札三枚一組 略号△とに▽ 四〇〇円

膝頭縛り開股竹棒責め

中河 恵子 大手札三枚一組 略号△とほ▽ 四〇〇円

竹棒開股足首縛り

中河 恵子 大手札三枚一組 略号△とへ▽ 四〇〇円

股間縛りの裸身表情

中河 恵子 大手札三枚一組 略号△とち▽ 四〇〇円

菱縄縛り猿ぐつわの表情

中河 恵子 大手札三枚一組 略号△とり▽ 四〇〇円

乱痴戯騒ぎの結末

中河 恵子 大手札三枚一組 略号△とぬ▽ 四〇〇円

菱縄縛りで床に喘ぐ

中河 恵子 大手札三枚一組 略号△とる▽ 四〇〇円

浣腸責めの甘い恐怖

中河 恵子 大手札三枚一組 略号△とか▽ 四〇〇円

浣腸液の注入直後

中河 恵子 大手札三枚一組 略号△とま▽ 四〇〇円

強制浣腸の各姿態

中河 恵子 大手札三枚一組 略号△とみ▽ 四〇〇円

浣腸責めの美態開陳

中河 恵子 大手札三枚一組 略号△とめ▽ 四〇〇円

浣腸を待つポーズ

中河 恵子 大手札三枚一組 略号△とも▽ 四〇〇円

スクリーンに躍動するのを眺める日を楽しみにしております。同好各位の通信をお待ちしています。

(東京・女斗彦)

○ 美川美子に伝える。私は、お前のことをいつも考えている。その大きな乳房、まるまると太った大きな腹部、そしてでっかいお尻など、それを思いきりいたぶっている私を常に想像している。私はおまえを奴隷のように、また犬のようにしたい欲望にかられる。そして、お前が他の男に通信しているのを見ると腹立たしくなる。私は一日も早くお前が、私の尻の下で歓喜の声をあげる日の実現することを望む。では必ず返事をするように。

(横浜市・北 一輝)

○ 小生こと貴誌を愛読するようになつてから十年近くなりますが、当初より比べると小生の趣味よりだんだん遠くなった感があり、残念に思っております。しかし、これも世の移り変りにより、社の方針として実行されておられることであり、小生が云々することではないと、あきらめております。小生は他の人と違い、SとかMでな

く、フェチ傾向が強く、その点で最近の貴誌の方針とは一寸、離れてきたと申すわけでありませう。小生は特にネルの腰巻には魅力があり、自分ながら恥かしい限りに思っております。色は、やはり赤であり、妻を貰った当時はそのことが言われず、子供が生まれてからそれとなく酒の勢いを借りて言った仕末です。最近では妻に「亭主の好きな赤……」などと云われるようになりました。つきましては、大変厚かましいお願いでございますが、貴誌ファンの中にも小生のような方々がおられ、貴誌に投稿等されておられると存じますので、若し投稿文の中でネルの腰巻をテーマにしたもので貴社として廃棄される原稿がありましたら分譲して頂けないものでしょうか大変おしつけなお願いで失礼とは存じますが、よろしくお願いいたします。

(島根県・上井英雄)

○ 山本広子様、私も流腸責めは大好きです。ぜひ貴女を責め抜いて音を上げさせたいものです。私の責めは単に排泄させるのが目的ではなく、いろいろ刺激を与えて女体の反応を楽しみます。先ず器具は20cc入りの太い注射筒を

可憐表情の全裸縛り

大手札四枚一組 五〇〇円
金原奈加子 略号△ゆめ▽

立縛り正面裸晒し

大手札四枚一組 五〇〇円
金原奈加子 略号△ゆえ▽

両手吊り全裸晒し

大手札四枚一組 五〇〇円
金原奈加子 略号△ゆひ▽

雁字搦目後手縛り

大手札四枚一組 五〇〇円
金原奈加子 略号△ゆあ▽

股間縛り柔肌責め

大手札四枚一組 五〇〇円
金原奈加子 略号△ゆも▽

猿ぐつわ開股責め

大手札四枚一組 五〇〇円
金原奈加子 略号△ゆに▽

豊満な臀部強烈責め

大手札四枚一組 五〇〇円
金原奈加子 略号△ゆほ▽

強制全裸開股責め

大手札四枚一組 五〇〇円
金原奈加子 略号△ゆみ▽

股間縛りで悶える

大手札四枚一組 五〇〇円
金原奈加子 略号△ゆる▽

全裸縛りに羞らう

大手札四枚一組 五〇〇円
金原奈加子 略号△ゆへ▽

私の妊娠腹を見てね

大手札四枚一組 五〇〇円
中河恵子 略号△ゆわ▽

縛られた妊婦横臥す

大手札四枚一組 五〇〇円
中河恵子 略号△ゆよ▽

被虐に燃える全裸妊婦

大手札四枚一組 五〇〇円
中河恵子 略号△ゆぬ▽

尚も見せたい妊婦腹

大手札四枚一組 五〇〇円
中河恵子 略号△ゆる▽

用います。グリセリンを塗った筒を深く使うことで、ゆるやかに使ったり、強く使ったりして、責めるのです。姿勢は、「坐禅ころがし」と称するのを愛好します。これは女性を後手に縛り上げておいで坐禅を組んで坐らせませう。背後から突きこころばすと、犠牲者は顔と両膝とで身体を支えて、尻を立てた形になります。膝は一ぱいに開いていきますし、うしろから何を

身を任せるのです。想像するだけに身体の震えるような凄美の世界です。その日の一日も早く実現することを切願します。

○(横浜・喜多瀬勉)

奇クは、いつ見せていただいても、他社の追従を許さない貫録と読者をずるずると夢の世界に引きずり込む力を持つ、不思議な雑誌です。私も色々ピンク雑誌を見ましたが、いつも、もう少しのところを、すうりと逃げてしまったようなものばかりで、私の夢をかえしてくれませんが、しかし奇クだけは、本当に私の心のうるおいを満して下さる雑誌だと、買うたびに感謝しております。私は、はや一年余り愛読させていただいておりますが、益々内容も充実してきました。私が買い求めて一番先に目を通すところは、M的な画か写真又は談話のあるところ。四月号の陳平様と津川様の対話は楽しく読ませていただきました。津川様は本当に幸福な人ですね。羨ましく思います。私も一度、心ゆくまで、じかに生暖かい小水を飲みたく思います。「中立地帯」の淳が女に「どれ、のどがかわいたろ、口をおあけ」と言われるとこ

ろが、とても好きです。読んでいる中に私が淳になったようで、胸が一ぱいになりました。又、「濡れにぞ濡れし」は特に愛読しております。つぎに私の空想のようなものを書きますと、或る日、私が会社を退けて帰る途中、いつの間にか四、五人の女性にかこまれ寄つてたかつて車の中に連れ込まれると、睡眠薬をかがされ気を失っている中に焼あとの地下室に放り込まれ、気がついた時には全裸にされて手足をくくりつけられています。そして、しばらくして数人の女がはいってくると、交替で私を恥かしめます。大きなお尻を私の顔にのせ、太腿で私の首をしめ息も絶え絶えになるほどいじめられます。そして最後には小水をやというほど飲まされます。私はその小水の洪水の中で再び気を失います。実際には、このような女の人はいないものでしょうか。このようなことを、もし実現させてやると言われる女の方がおられましたら、私は喜んでおそばに馳せ参じます。ここで春川ナミオ様におねがいします。今後とも画は沢山のせて下さいね。最後に編集部様、これからも益々がんばって日本

の奇ク、いや世界の奇ク誌を育てて下さい。そしてぐんぐん愛読者を引っばして下さい。

○(大阪・岸田明)

川村順子様へ。私も貴女と同じ名古屋に住んでいます奇クの愛読者です。現在ある事情で妻子と別居いたしております三十三才の男性です。私の妻はSMプレイには興味がありませんので、貴女の呼びかけを見まして本当に嬉しく拝見いたしました。貴女と同様に別居中とはいえ家庭があり、本当に秘密にSMプレイができましたらと思っております。私はS七分、M三分だと自分で思っています。そのせいか貴女の言われた浣腸責め鞭打ちは、私も興味ありません。表現は下手ですが甘美なくすぐり責め、股間縛りなど色々な貴女の希望される縛り責めをいたしたいと思っております。時には貴女に縛られて苦しんでみたいなども想像しております。いつか貴女と念願のSMプレイができますことをたのしみにしています。

○(名古屋・田中年彦)

美川美子様、貴女のお便りは読者通信で毎日読んでおります。読むたびに差し上げようと思いま

したが、なかなかできませんでした。しかし先日、貴女の大きなお腹を高圧浣腸にて更に大きくし、そのお腹を上下から縄をかけて前に突き出し、その上に腰をかけている夢を見て、自分の気持をおさえることができなくなり、お便りを差し上げます。私は東京の大手町に勤める二十五才のサラリーマンですが、六月か七月頃、仙台の方へ行きますので、ぜひお会いしたいと思っております。貴女からのお便りお待ちしております。

○(茨城・堤美佐緒)

皆様、お元気ですか。多くの試練の中にあつて常に正しく健全な本誌を出して下さい編集部の方々に心から感謝したいと思ひます。小生は本誌を愛読するようになり早くも一年半になります二十八才のフェチのM傾向のものです。女王様にかしき奉仕したいという欲望は片時も頭から去ることはありません。小生が夢に見、理想とし描き続けた貴女様のお便りを発見して、胸の高鳴る思いでしたが思いきってペンをとりました。小生はどんな強烈な責めでもかまいません。女王様の奴隷として縛られたり玩具にされたり馬になった

り、額にヒップを載せていただいたり、汚れたパンティを口に含んだり、特に神酒を呑ませていただいたりすることができたら、私はこの世に生れた幸福に涙を流して喜ぶことでしょう。もしお会いすることができたら、先ず私は衣服を脱がねばならないでしょう。奴隷に着物は必要です。女王様のお情けで奴隷の私は着古したパンティブラジャをつけさせられ、次に大の字に縛られます。奴隷の宣誓は女王様の神酒によって始まります。頭から足まで神酒を浴びて奴隷の宣誓ができれば、夢のようです。それから奴隷の検分。私の全身を調べていただきます。勿論つねろうと蹴ろうと、打とうと突こうと踏もうと、お気に召すままです。下着の洗濯やら身の廻りの世話もトイレ兼痰つば等々、まだまだ、夢は果しくなく拡がります。しかし何ごとにも女王様の意のままです。女王様の欲するままになるのが奴隷の願いに過ぎません。女王様のお便りをお待ちします。

○(横浜市・マゾ茂男)

河上ユリ様、五月号の告白、読ませていただきました。私は貴女とのプレイを夢に描いています。

私はSですが、まだ実際にプレイをしたことはありません。貴女を縄でしばっていいじめたいと思います。お互いに素人同志、私と貴女の夢を実現しようではありませんか。私は女性の尻を責めるのが好きです。たとえば尻打ち、浣腸責め、ローソク責めなどです。あるいは貴女を縛って動けなくし、擦るのです。それは両脇腹からお臍の周り、お尻、太腿、膝から足の裏まで全身にわたり擦ります。そして貴女の首に犬の首輪をつけて這い廻らせ、恥かしめるのです。

○(川崎市・大橋郁夫)

山本広子様、初めまして。私は踊といっても阿波おどりしかしりません。阿波おどりなら三度の食事より好きです。私は自分で写真の現像引き伸しをいたします。貴女を心の友として夢の中で恥かしく責めることをお許し下さい。貴女は海老責め、ローソクの責めに会うのです。体を押さえられ後手に縛られて余った縄で二の腕から胸の方へ廻わして乳房の上下を縛る。そのために乳房は大きく前にとび出すのです。そして顔が足首につくまで上半身を押さえ、体が伸びないようにして足首を縛り、

縄を折りかえして背後の手首に通し足首に結ぶと海老責になる。貴女の両足を持ち上げ後にかえすと「止めて、起して。こんな恰好にするなんて、いやよ。早く起こして頂戴」と声を立てるのも無理はない。お尻がぐっと上向きになっ

○(阿波おどり愛好生)

前田容子様、貴女のような素晴らしい女性が同じ徳山市におられる

ことは夢にも思いませんでした。私は「フェチの海水浴」をのせていただいた安田です。永年にわたるフェチとマゾに限りない憧憬を感じ、ことある毎に拙文を奇巧誌上にて発表して参りました。社会人として一人前に活躍しておりながら、人に隠した私だけの苦しみは、安逸に流れ、とかくマンネリに陥りやすい現実、どれだけ刺戟と張りを与えてくれたことでしょうか。余りに社会に気をつかい、自己の性癖をかくしすぎる物足りなさを感じ始めたことが、海水浴やサウナ風呂での思い切った実験となつて現われました。中年の女性の、よい対象者を見つけるに至ったわけでございます。ただ残念ながら彼女の場合、私の倒錯文明に対する理解度が低いため、反応の上では何か物足りないものがございます。月の中の殆んどをメンスバンドを当てて過し、大変派手なデザイン・パンティをこよなく愛し、オムツカバーから浣腸器脱腸帯、新型浣腸カテーテル(挿入後、肛門を圧迫固定できる糸巻状のゴム栓がついている新型)に至るまでありとあらゆるものを持って、三十八才のフェチストであり、マゾヒストである会社員で

次号(七月号)は五月二十五日に発売いたします

す。子供もあり社会的地位も少しばかりあり、その安定した生活に少しでも支障をもたらすことはできませんが、ご希望の滑車も手に入れることは容易です。なにとぞご主人と共に私をハダカに引んむき、使い古しのメンスバンドを穿かせていただき、犬の首環をつけ掃除、洗濯に追い使って下さいませんでしようか。なにとぞ次号にてお言葉を賜りますよう、ひとえにお願い申し上げます。

(徳山市・安田隆夫)

○愛読者の女性の皆様、お元気ですか。私は軽く目をとじ、じっと責めを快受している姿を、女性美の最高と思っている者です。私の好みは、吊り責め、エビ責め、乳房責め、鞭打ちなどです。たとえば十二月号の十五ページの「叫喚地獄への誘い」などは、見ているとゾクゾクしてきます。どなたかM女性の方、私の相手として相互にプレイしていただませんか。それから、もしグループでプレイなさっている方がありましたら、私もお仲間に入れていただけませ

んか。M女性の方、グループの方々ぜひお便り下さい。

(東京都・石田茂)

○最近、団鬼六氏の映画が封切りされ、見に出掛けました。内容なども奇譚クラブの担当の鬼六さんらしく、我々の心をかき立たせてくれます。しばらく責めがあり、楽しみにしているだけに、観がいがあるものです。この前は「ダブルドッキング」を見せていただきました。主人公の和枝が、はしごに縛られ身動きができないようにされ異常な兄妹に頭の毛をつかまれ、そして頬をぶたれ鼻を親指により思いきり押し上げられ、首に縄をかけ片足にも縄をかけて首吊り状態でしごかれるなど全く楽しく拝見させていただきました。やっぱり鬼六さんが一番だと思えます。今後映画に本誌に活躍されるよう心からお願ひします。最後に、最近本誌に鼻責めの記事がなくなり我々ファンは落胆させられております。どうか鼻責めの文、画などをのせていただけよう、切におねがいします。

(岐阜・鼻責めファン)

○始めまして。先日、浅草で奇クを手にとって見た時、僕の心は躍りました。僕の夢に見ていたことが書かれていたからです。特にバラと蜜蜂、は最高でした。馬にされてる隊長が、自分のように思えてなりません。まだ奇クを拝見して一週間しかたっていないのにMの世界に引きずり込まれてしまったのです。これから末長く奇クを愛読しようと思います。

(二十一才の鉄工所員)

○十数年来の愛読者であります。編集部御苦労、特に察しておりますが、本年になってから編集が少し片より過ぎてますね。緊縛、鞭打ち大変結構です。しかし私は浣腸ファンなのです。本年になつて全然立派な記事がなくて残念です。どうか医学的なことでも結構ですから、浣腸関係の記事をどしどし掲載下さい。私は先日、病院で腸のバリウム検査をされましたが、その時、二人の看護婦さんにレーザーベッドの上で洗けん浣腸をされ、とても恥かしく思い、トイレで薬がきいて涙を流しました

(東京・鮎川幸子)

○五月号の六角京之介先生の「女性切腹、月影千浪の自刃」は誠に麗筆そのものです。千浪は美人で魅力のある女志士です。写真の出来ばえも見事です。この種の読物特に先生の作品を今後も続けて掲載ねがいします。

(東京・愛読者会一同)

○京都美恵子様、三月号拝見いたしました。一筆ご連絡します。私たち夫婦も三年ほど前より相互プレイ、特に男男女女の三人プレイをいたしております。ぜひ同好者夫婦として誠実と信用あるご交際をおねがいします。私は三十九才、妻は三十二才です。物論、社会的にも誠実と信用を重要視して注意いたしております。SMについては未だ十分な経験もないのですが、男女プレイの補助的に肛門浣腸プレイ、股間責め軽度の縛り程度です。私もご主人と同様の好みにて妻が目前にて縛り、恥かしめられるプレイは特に好みます。夫婦プレイに参加される方、ご一報下さい。

(福山・K夫婦より)

○私は過去六年間、奇クを愛読している中に、最近自分にはSとM

性があることに気がつきました。私は前に書きましたように、癖愛好家で、女性のふくらんだ尻部にまいてみたいと思うと同時に、自分もひそかに締めて股下からお尻の割れ目に喰い込む白い晒の六尺禪の感触を、ひそかに味わっている今日この頃です。どうか肉づきの良い女王様、私の禪を締めた姿を責めて下さい。もしその時に悲鳴をあげるようでしたら、パンティでも口に入れてから責めて下さい。それから私は身長一米六九、体重五十五キロです。こんな奴でよかったら、中年の肉づきの良い女王様、よろしく願います。私は軽いM性なので鞭打ちは望み

ません。その外の精神的な恥などの責めはかまいません。では未来の女王様の出現を待ちます
(東京・岸尾盛男)

小生は三十五才のSの男性で、永年の奇巧の愛読者です。小生は大塚啓子さんが一番イメージに合っておりまして。先刻まで別の状態で縛られていたと思われる縄の跡が、くっきりと太腿に残っている場面など、大いに小生の心を楽しませてくれたものでした。大体緊縛というものは全裸の場合が多いのですが、小生の好みとしてははなやかな長襦袢、あるいはスリッパを着用したものなどです。ス

リップの裾の美しいレース模様がまくれ上って、そこから白い肉づきのよい太腿があらわれ、その上から縄で荒々しく締められている構図など、想像しただけで感激します。
(塚田秀夫)

山本広子様、お元気ですか。貴女様の投稿、とても嬉しく拝見いたしました。貴女様は日舞と三味線が御趣味とのこと、私も日舞が大好きです。空想のみで、まだ一度もプレイの経験の方は全くありませんが、貴女様こそ私の永年の夢を実現させて頂ける方だと思います。あつかましくお呼びかけした次第です。大変申しおくれましたが、

私は三十五才の平凡なサラリーマンです。決して迷惑はかけません。どうかお友達として長くおつき合いねがえませんか。
(東京・東一夫)

川村順子様、四月号にて貴女のような方が身近におられるのを知り、大変うれしく思うと同時に、貴女の呼びかけに応ずるために初めて投書した次第です。小生は十二才になる身長一七八センチ、体重六三キロのサドで、お互いに人格と意志を尊重して、秘密を守ることを前提のもとにご交際いたしたく思います。
(名古屋・田中一雄)

本誌既刊号在庫一覧表

○本誌既刊雑誌は左記一覧表の通り在庫しておりますが、39年に発行のものについては在庫の僅少な御注文願います。
○従来、雑誌の送料は当社にて負担しておりましたが、今後は三カ月以上予約注文以外（既刊号は含まず）は一部につき送料二〇円（御負担を願います。多数一括してお求めの際は八小包Vにて発送

申し上げます。

昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

☆編集後記☆

○カメラ・ハントとカメラ・ルポ。今月号では、いずれもニューフェイスが登場した。若々しい緊縛肢體をお楽しみ頂きたいと思う。○斎藤夜居氏の「探奇考料」今月号より単発もので珍しい文献の紹介と解説を試みて頂く考である。佐野寿氏の「新女性乗馬考」の女性乗馬写真は氏が訪欧の際直接撮影されたオリジナルなもの。今後とも引続いて発表して頂ける筈。ファンには貴重な贈物と思う。○二〇三頁に予告した通り医学博士弓削達人氏の担当によって「性問題相談室」を開設することにした。弓削博士は本誌に極めて理解のある学究肌の人なので、何なりと御遠慮なく相談を寄せられるようお願いする。

○今月号では、小論、エッセイ、雑感といった短文を豊富に載せてみた。三原寛氏、阿部能丸氏、魔仁阿天狗氏、田中八郎氏、橋雅美氏、山上四郎氏、鈴木三三氏と今後の筆硯に期待したい。○注目された「贗作イリーアス」は今月で完結した。次回は沢瀉しのを主人公にした作品を構想中の由、その筆力に瞠目したい。○東西奔放席の温まる閑の閑鬼六氏が寸暇をさいて「鬼六談義」を物して呉れた。ファン待望の「花と蛇」は愈々佳境に入って、これから益々面白くなってきそうである。○久しぶりに能美積氏が洒脱な筆を見せてくれたし芳野眉美氏も馴染深いタッチで得意の洗練された境地を誇示してくれる。滑り出した「緋縮緬地獄」を味読して頂きたい。

◎懸賞原稿募集

△体験、告白、手記△

皆さまが自分で直接体験されたことや、自らの性癖や性向について訴えたいこと、或はこれだけは、どうしても人に話したい、書いて残しておきたいといった事柄を、どうか腹藏なくお寄せ下さい。皆さまの真実の叫びや思い出などの寄稿を心からお待ちしております。採用篇には賞金三千円以上贈呈いたします。

△創作、小説、物語△

も結構です。皆さまの平常抱かれていた夢を文章に托してお寄せ下さい。形式も敢えて問いません。但しすべて未発表のもの、自作に限ります。若し引用する部分がありましたら、必ず出処の明記をお願いします。採用原稿に対しては賞金十万円迄贈呈します。

△感想、論評、批判△

本誌に掲載された内容についてでも結構ですし、又関連したもので結構です。とにかく本誌を読まれて感じられたことを忌憚なく皆さまのペンのまとめで下さい。採用篇には賞金二千円以上を贈呈いたします。

△(映画、雑誌)通信△

映画、雑誌、演劇、新聞、週刊誌、或はその他見聞などで特に興味をお持ちになった事項の通信をお待ちします。出処は出来るだけ詳しく記載下されば幸いです。採用篇には本誌三ヶ月贈呈致します。◎尚、以上の採用篇に対する本誌贈呈の代りに、写真を御希望の方には、代理部分譲品の中から御指定下されば、贈呈いたします。

☆本誌御購読の榮☆

一月分(1冊)三五〇円(送20円)
三月分(3冊)一〇五〇円(送共)
半年分(6冊)二一〇〇円(送共)

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたしますが、入手困難の方は直接代金御送付の上、御予約下さい。重包装して確実に発送申し上げます。局留の方々は二十五日頃受領して下さい。

奇譚クラブ 定価 三五〇円

六月号 〔第二十二巻第七号〕
昭和四十三年五月二十日 印刷
昭和四十三年六月一日 発行

編集人 箕田 京二
発行人 北村 俊夫
印刷人 北村 俊夫
大阪住吉郵便局私書函第四十一号

発行所 暁出版株式会社

△振替口座大阪四二七八三番
(昭和三十一年四月二〇日第三種郵便物認可)
(昭和四十二年四月二一日)
国鉄大塚特別取扱承認雑誌第二一〇号

☆書店の皆様方へお願い☆

○本誌は口絵、グラビア写真の廃止、挿絵の削減、内容の改訂等にとり、青少年の健全なる育成に努める各条例に指定されたいやうな充分の注意を編集いたしました。りすが、本来成人向として発行を企図しておりませんが、関係上、十八才未満の方には絶対販売下されたいやう、特にくれぐれもお願ひ申し上げます。